常夏、三十五・三十六編。篝火、三十六編。野分、三十六・三十七編。行幸、三十七編。藤袴、三十八編。眞木柱、三十九・四十編。

【梗概】〔初編〕足利義正が側室花桐を寵愛する。側室の一人晝顏が妬ましさのあまり、正室富徽前に讒誣する。富徽前は動かなかつた。晝顏は又おのが部屋の位置を利用し、侍女桔梗・小菊と謀つて、花桐を辱しめる。義正は朝顏に命じて花桐と部屋がへをさせる。その夜忍びの者來つて朝顏を殺した。花桐が次郎君を生む。後の光氏である。義正の次郎君を愛することの甚だしきに、富徽前も或は嫡子義尙を越して家督に据ゑられはせぬかの懸念から、花桐を怨むやうになる。花桐はそれこれを心勞の餘り病歿する。次郎君は服喪により母の里にゐる。さきに御所を出た桔梗は刈萱と名を改めて、この家に奉公し、故主の復讐を期して次郎君を覗ふ。偶々次郎君の部屋に宿つた修行者を思ひ違へて刺す。修行者は刈萱の兄の泥藏、かつて朝顏から賴まれて花桐を殺さうとして、却つて朝顏を殺し、一念發起して諸國を廻行してゐたのであつた。〔二編〕兄を殺した刈萱は、自殺しようとしたが、遂に尼となる。次郎君十三歳、名を光氏と改める。管領音川勝元の妹猪名野谷（實は花滿中將の遺孤）が母花桐に酷似することを知り、斡旋して父義正に進めさせる。猪名野谷はもと山名宗全から懇望されてゐた者であつたところから藤の方と名を改め、密かに事を運んだ。併し

修繕田舍源氏（三編）

藤の方に對して尋常ならぬ寵徽前は、今は白絲と稱して腰元になつてゐる以前の小菊と謀り、事の始終を宗全に告げて、藤の方を宗全に奪はせようとする。光氏は藤の方と相談し、二人が不義を裝ふ苦肉の策で宗全を欺きその初志を翻へさせる。義正は光氏の苦衷を解し、光氏はまた好色の浮名の下に、父が兄ることを聞く。その夜、女賊寶藏に忍び入つて、足利家の重寶小烏丸を奪ひ去る。光氏はその夜の番の仁木喜代之助を本國に隱退したと披露させて、諸國に寶刀の行方を探らせ、己はまた好色を利用してあちこちを浮れ歩いて詮議しようとする。その翌夜、光氏は喜代之助の留守宅を訪ひ、豫てから宗全の息統清が懸想する喜代之助の女村荻に逢はうとする。折から村荻は他出してあらず、その繼母、喜代之助の若き妻空衣が、假りに村荻と稱して御目見えする。光氏これに挑むことがある。その夜また喜代之助が拾つて子として養つてゐる川次郎が、空衣の閨に忍び、誤つて光氏に口説きかゝることがあつた。〔四編〕空衣を村荻と思ひ込んでゐる光氏が、村荻に文を贈つたことから、眞の村荻と逢ふやうになる。その頃、光氏は五條に住む乳母、家臣惟吉の母の病氣を見舞ひ、その隣家の烏瓜花さく宿の娘黃昏と相知る。黃昏の母凌晨は舞の師匠であつた。光氏は凌晨を怪しみ、黃昏をなつかしみて通ふことになる。その頃、また光氏は六條の遊女町に通ふ。遊女阿古木が客山名統清を嬲ひ、亡き母の家來筋の彼奴がと獨言せるを立ち聞く。〔五編〕烏瓜の宿に、凌晨の擧動を怪しみ、光氏は黃昏を拉れて野中の古寺に宿る。凌晨は鬼女の姿を裝ひ、光氏の仇し心を恨み怨ずる二葉の怨靈の眞似して光氏を刺さうとする。黃昏は鬼女が母であることを知ると共に自殺し、凌晨も亦自殺する。死に臨んで嘗て義正に滅された伊勢の國司板留則知の娘、泥藏の妻であること、さる人に賴まれて小烏丸を盜んだ事を語る。又賴み主の山名である事を仄めかした。この事件の間に、村荻は統清の許に嫁することがある。〔六編〕光義尙をおいて自分を家督に据ゑる下心を棄てさせようと期する。〔三編〕光氏十七歳、元服。執權赤松正則の女二葉を妻とす。二葉はなほ赤松館に居る。五月雨の一夜、御所住みの光氏の御伽にとて、正則の子高直や石堂馬之丞等が來り集ふ。光氏は高直が明石に住む宗全の弟宗入の娘朝霧にいひ寄らうとしたこと、馬之丞が青葉琵琶之助の娘桂樹と戀仲な

氏十八歳、瘧を病む。野中の里、遊女屋二見屋の別莊に住む遊女が尊い守を持つと聞いて訪れる。遊女は阿古木であつた。守は足利家の重寶、勅筆の短册であつた。義正の妹渦浪が寂寞阿闍梨と密通して出奔した時、持ち出したもの。すなはち阿古木はその娘、光氏の從姉に當る。阿古木は光氏が戀をかなへてくれたら、その短册を讓るといふ。光氏の野中の里に行つた時、遊女屋葱屋の別莊に、遊佐國助の妾腹の子で、藤の方の姪に當る幼き紫が、祖母の遺手小玉と共にゐることを知る。また偶然、宗全が國助を味方に誘ふことを知る。光氏、國助の山名加擔を廢れ、人質の心持と、藤の方ゆかりの者を遊女にするに忍びない心持とで、紫及び附添の女郎言の葉を身請けする。〔七編〕光氏は赤松館の腰元中空が己に對する戀をかなへてやる。藤の方病氣のため晉川の下館に移る。光氏これを訪ふ。白絲は宗全と富徽前から、光氏の藤の方訪問を機に、光氏を殺害するやうにと强要されてゐたが、光氏の身替りとなつて、山名方の忍びの者に殺される。〔八編〕紅の館稻舟姬のもとに通ふ。實はそこに仕へさせて置いたもとの中空、今の綾萍の許に忍ぶのである。姬は義正の兄義勝の息女、宗全にこれを擁立する意あるを知つて、浮名の下にそれを妨げ、また統清が慕ひ寄る事あるによつて、これを保護するためである。また光氏が綾萍を愛するのは、義正の側室千景の方の異腹の妹だといふ緣による。小玉の死、國助、紫をわが家に迎へとらうとしたが、光氏の紫に對するのが、人質といふのでなく、漸く深い愛を寄せてゐるのを知り、光氏に進めようと決心する。〔九編〕東福寺紅葉の庭に歌舞の遊、義尙・光氏紅

葉狩の連舞、山名の廻し者二人が斬つてかゝる。光氏舞ひながらとつて押へる。これより先、光氏は紫と言の葉をわが嵯峨の館にひきとつてゐる。とも知らぬ宗全は紫を人質にしようとして、家來片攪調太夫に國助の僞使を命ずる。光氏は宗全の腹を知り、早く迎へとつて馬之丞を姬の身代りとしておいた。調太夫はさうと知らずに、嵯峨の館に駕籠を送り込む。調太夫は綾萍の父で、光氏の恩誼に酬いるため、わざと山名家に入つて內應してゐる者、今度の僞使も初めから紫を嵯峨館に送るべく、進んでその任に當つたのであつた。光氏は密かに藤の方を訪ひ、今度の懷姙を光氏との不義の胤と世に傳へさせ、それを機會に播磨に退去する決意を語る。光氏十九歳。〔十編〕雪の日、光氏、糺の館を訪ふ。そこの特によることを知つた。また調太夫の眞意を知らずに、その功を助けたく、宗全・富徽前の策動に與してゐたのである。光氏にいひ寄る眞似をしたのは、それ等の罪を謝するために、無禮打を期待したのだとのことであつた。かくて紛失してゐた足利家の重寶玉兎の鏡は綾萍から光氏の手に收まつた。光氏は馬之丞が殺されたやうに見せかけ、贋の玉兎の鏡が宗全の手に入るやうに手配りする。〔十二編〕花の宴の夜、光氏は桂樹に逢ひ、馬之丞の死靈が憑るさまして貞心を全うせよ、光氏と浮名を立てよ、義尙のもとに參るなと告げる。富徽前はかね〳〵桂樹を義尙の室となさうと心掛け、光氏は馬之丞とわけある桂樹を室とすることによつて、義尙の物笑ひとなるのを氣遣つたのである。琵琶之助が二見屋で催した

修繕田

間もなく二葉病歿す。光氏は政則夫婦の寂しさを思ひ、夕霧丸を赤松館に預けおく。阿古木は短册なき後は、光氏の心の離れゆくものと思ひ、漸く伊勢に下ることを考へる。〔十四編〕光氏、雲林院に藤の方を訪ひ、その剃髮を止める。藤の方は光氏の播磨退去に役立てるため、光氏と不義の由を書置にして、自殺しようとしたが、春若丸の愛にひかれて果さず、せめて法體とならうとしたのである。光氏かくては眞の不義と認められる事の非を說き、桂樹の事に託して退去する意を告げる。光氏空衣の手引で、一夜野の宮に阿古木と別れを惜しまうとする。光氏二十一歳。〔十五編〕川次郎また忍び來りて、光氏を空衣と見違へ、頻富徽前に迎へられて御所にゐる。光氏その局に忍び入る。琵琶之助がそれを認めて富徽前に知らせる。富徽前の激怒、實は光氏の命によつて琵琶之助は動いたのである。光氏は桂樹事件に託して須磨に退かうとする。その地は西國の山名方を抑へる要害の地であつた。豫て父から勸當されてゐた喜代之助の實子良清が新たに須磨に御供する事になる。光氏二

葉狩の連舞、山名の廻し者二人が斬つてかゝる。光氏舞ひながらとつて押へる。これより先、光氏は紫と言の葉をわが嵯峨の館にひきとつてゐる。とも知らぬ宗全は紫を人質にしようとして、家來片攪調太夫に國助の僞使を命ずる。光氏は宗全の腹を知り、早く迎へとつて馬之丞を姫の身代りとしておいた。調太夫はさうと知らずに、嵯峨の館に駕籠を送り込む。調太夫は綾萍の父で、光氏の恩誼に酬いるため、わざと山名家に入つて内應してゐる者、今度の僞使も初めから紫を嵯峨館に送るべく、進んでその任に當つたのであつた。光氏は密かに藤の方を訪ひ、今度の懷姙を光氏との不義の胤と世に傳へさせ、それを機會に播磨に退去する決意を語る。光氏十九歳。〔十編〕雪の日、光氏、糺の館を訪ふ。そこの門番の娘で、鼻の赤い貌の醜い紅と姫とをとり替へさせておいて、僞りの姫を統清に逢はせる。藤の方の安産、その子を春若丸といふ。よく光氏に似てゐる。富徽前は頻りに藤の方と光氏との不義をいひ傳へる。光氏二十歳。〔十一編〕光氏は御所の老女で、艷めかしい水原といふに戯れ、また高直にも命じて戯れさせる。そして言の葉を二葉に扮させて、それが所持する守を探り、太秦錦の鏡嚢をとり上げ、更に宗全方からの密書を奪ふ。水原は遂に身の上を告白する。調太夫の後妻、綾萍の生母で、悋氣のために離別され、何とかして復縁したいと思ひ、もと糺の館に仕へた頃、稻舟姫が父から讓られた玉蒐の鏡を盜んだ。鏡は緣結びの不思議な守と聞いたからであつた。なほ綾萍が中空といつて赤松館にゐた頃、光氏に戀するのを不便に思つてそれを娘に與へた。娘が光氏から寵されたのは、その鏡の奇特によることを知つた。また調太夫の眞意を知らずに、その功を助けたく、宗全・富徽前の策動に與してゐたのである。光氏にいひ寄る眞似をしたのは、それ等の罪を謝するために、無禮打を期待したのだとのことであつた。かくて紛失してゐた足利家の重寶玉蒐の鏡は綾萍から光氏の手に收まつた。光氏は馬之丞が殺されたやうに見せかけ、贋の玉蒐の鏡が宗全の手に入るやうに手配りする。〔十二編〕花の宴の夜、光氏は桂樹に逢ひ、馬之丞の死靈が憑るさまして貞心を全うせよ、光氏と浮名を立てよ、義尚のもとに參るなと告げる。富徽前はかねて〳〵桂樹を義尚の室となさうと心掛け、光氏は馬之丞とわけある桂樹を室とすることによつて、義尚の物笑ひとなるのを氣遣つたのである。琵琶之助が二見屋で催した藤の宴の夜、阿古木が石卷前齋の妾となつて、娘磯菜を生んだことを聞く。光氏は前齋を義正の落胤と僞り、その緣によつても阿古木母子を等閑にはせじ、伊勢渡會の陣屋に行け、それまでは喜代之助の野宮近くの下屋敷に忍べと勸める。光氏は空衣を二人の介添としてその好意によつて勅筆の短册を得ようと考へたのである。葵祭の日、二葉見物する。阿古木・磯菜も見物する。二葉の家來共、場所の事から阿古木たちを辱しめ、その駕籠を散々に破る。阿古木が二葉を怨むこと甚だしい。この間に義尚將軍となり、一色持廉の妹立田その正室となる。義尚は春若丸を嫡子として披露する事がある。〔十三編〕二葉病む。花鳥・風月といふ姉妹の梓巫が祈禱する。生靈死靈多く現はるゝ中に、阿古木の生靈最も執拗であつた。その靈、二葉の身を藉りて勅筆の短册を光氏に渡す。二葉安產、夕霧丸を生む。

修紫田舍源氏（五編）

あることをいふ。光氏は玉菟の鏡は贋物、小烏丸は村荻にすりかへさせた事、さきに壽庵方で花郷と會見したのは、實は太秦參籠の村荻に花郷を一時替らせて、刀を受取る手段であつた事を語る。川次郎は光氏を遠矢にかけようとする。その矢、光氏に毒茶を捧げようとした岩根に當つて殺す。川次郎、川に落ちて姿を沒す。光氏、宗全の連判帳をこゝまで送つて來た國助に與へて警戒させる。その連判帳は光氏が琵琶之助に宗全方から奪はせたのであるが、富徹前も連坐してゐるので、光氏に渡さず密に隱してゐたのであつた。富徹前は琵琶之助の妻の姉に當るからである。光氏が桂樹に逢ふとて、琵琶之助館の塗籠に入つたのは、實はその連判帳を探すためであつた。〔十八編〕光氏、須磨にあつて紫を思ふこと頻りで、呼び迎へようとして僅かに止まる。京より來た高直をして、明石なる宗入の娘朝霧に艷書をおくらせる。朝霧は素より答へない。而も宗入は、兄宗全に合體しないことを明かにするとて、朝霧を光氏に進めんとの意があつた。光氏二十四歳。〔十九編〕三月三日の祓、山伏鬼得院、光氏の命によつて行ふ。海上怪異起る。その夜唐裝束の神女出現して頻りに光氏を海中に誘はうとする。翌日以後暴風雨うち續く。光氏祈願を怠らない。神女また出現する。光氏墓目の術を行へば、幻術破れて神女に扮せる鬼得院は死ぬ。彼は宗全から賴まれて光氏を覗つたのであつた。光氏は夢に母花桐から明石に移つて朝霧と契を結べと告げられる。宗入もまた靈夢を見て光氏を明石に迎へる。これより先、光氏はもと阿古木介添の遊女であつた片貝を、朝霧附の腰元として入り込ませて、かなたの動靜を探つてゐた。光氏二十五歳。〔二十編〕光氏須磨を去つた後、山名勢、舟にておし寄せる。高潮起つて殲滅す。光氏立願の驗の現はれたのである。宗入、光氏を遇すること篤い。光氏と朝霧の間に文通がある。光氏二十六歳。〔二十一編〕光氏朝霧と契る。義尚、眼病に罹る。また京都の戰爭も止み、西國を抑へる要もなくなつたとて光氏に歸京を勸める。義正からも召還の書が光氏の許に至る。光氏懷姙せる朝霧に思ひを殘しながら歸京する。光氏二十七歳。〔二十二編〕光氏歸京の後、なほ富徹前と圓滿を缺く。光氏の須磨にある間、國助は山名勢に遮られて、稻舟姫への貢を絶やした。糺の館の荒廢、畠山重篤の妻佐賀輪の如きは、姫を侮つて娘達の附添にしようとさへ思つたこともあつた。光氏歸京するや、姫のために圖ることがあつた。〔二十三編〕光氏、義尚に願つて姫に化粧料として二ケ國の墨附をおくる。光氏花桐のために法華八講を行ふ。光氏また葦野を乳母として明石におくる。明石では女子誕生、明石姫と名づけてゐる。〔二十四編〕光氏の住吉參詣、朝霧もまた參詣、消息を通ず。阿古木、伊勢から歸つて野の宮のほとりにゐて尼となり、やがて病死する。これも伊勢から歸つた喜代之助・空衣、逢坂山で光氏の石山詣に邂逅する。その折良清と親子の名乘をする。義尚將軍職を春若丸に讓る。春若、名を義植と改める。赤松政則執權となり、高直の女富世前内君となる。〔二十五編〕義正薨ず。義尚微行の折、磯菜を見て戀する。富徹前、水原を使として磯菜に義尚の側室となるやうに傳へる。光氏知らざる眞似して藤の方と謀り、藤の方の名の下に磯菜を義植に進める。義植將を好み、磯菜また絢に長ず。藤の方の御前に繪合の遊びがある。光氏二十八歳。二十九歳。〔二十六編〕義植のおん前で富世前方と磯菜方の繪合せ、光氏と高直がおの〳〵後見となつて繪合せの遊びをする。これも光氏が世の人心を靜めんとする手段であつた。光氏また嵯峨に尼鳳山名雙寺といふ一寺を建立する。これも同じ考からであつた。宗入、山名の殘黨と呼應すると思はれることを憚り、なほ西國の抑へを以て自らを擬して、明石に止まり、妻と朝霧とを京に上さうと志し、まづ大井の里に新館を構へさせる。光氏、もと室町御所に仕へてゐたといふ老女鐵蔓の娘菊咲を腰元とする。〔二十七編〕光氏、喜代之助に死別した空衣を村荻諸共嵯峨の館におく。光氏菊咲を挑む。菊咲從はない。朝霧大井の館に來着、光氏これを訪ふ。富徹前名雙寺の住職として田貫僧都を推擧して來る。光氏承諾する。光氏、桂川の別邸に義植を迎へて鵜飼の遊びをする。その夜田貫、暴人を嗾かして光氏を襲ふ。豫て期してゐる光氏は、南蠻の火術もて追ひ拂ふ。その夜、鵜匠に變してゐたのは高直と良清、迎へられたのは義植でなく磯菜であつた。光氏の例の深慮の計らひである。〔二十八編〕紫、明石姫を引取る。葦野、やはり傅となる。葦野の娘ゆかりは、なほ大井の館にあつて愛育されてゐる。この頃、京に異變屢々起る。田貫、富徹前の旨を承けて宿直の僧となる。田貫、機を見て義植に光氏の不義の風なることを告げ、又義尚の子幸壽丸を嫡子とすることを勸める。義植驚いて光氏に將軍職を讓らうとする。光氏それを拒む。朝霧の母所勞、田貫に祈禱を託す。田貫、ゆかりの素性を聞くことあり。光氏三十歳。〔二十九編〕田貫、大井の館に於て光氏を刺さうとする自分の弟子を殺し、また己れも死ぬ。彼は石卷前齋の末弟、鬼得院の法弟で、葦野の舊夫であつた。富徹前の命をうけて京に異變を起させるなどの策動をなしたが、わが子ゆかりが光氏の高恩を蒙ることを知つて一念發起したのであつた。菊咲、宿に歸る。光氏これを訪ふ。〔三十編〕菊咲、眞の小烏丸を光氏に捧げる。さきに村荻が取り出したのは、宗全が作りおいた贋物であつた。光氏夙く菊咲が宗全の隱風である事を知り、君の好色は、徹を謀るための光氏の好色に書き更へられた。藤壺と源氏との關係は、光氏がわざと藤の方との浮名を立てることによつて、藤の方に對する宗全の戀慕を絶たせる手段であり、源氏君の須磨のわび住みも、光氏が西國の山名勢を抑へるために須磨を要害籠居の地とした。源氏と常陸宮の姫君の關係も、光氏が前將軍の遺孤稻舟姫を山名方に擁立させないための手段である。しかもこれ等好色の手段の多くは、後から實なき浮名であることを證據立てる。作者はしかすることによつて武士道主義、また勸懲主義の作意を示し、またしかする以前に於て、當時の讀者が要求する享樂の興味を滿足させようとした。作者はまた事件の變化を多くするために、足利家重寶の紛失と穿鑿の一事を加へた。その重寶

修紫田舍源氏（十九編）

或は眞の小烏丸を所持せぬかと戀慕に託して探つてゐたのである。菊咲はまた母の命で、父のために復讐するとて、光氏館に入り込んだのであつた。鐵蔓母子は以前に宗全の曝首を盜んで塚を築いておいたのを、光氏それを壞つやうに見せて、實は宗全菩提のために名雙寺を建てたのである。鐵蔓等これを聞き感激して尼となる。光氏二人をその寺の住職とする。それより前、光氏の子夕霧丸は雲井之丞と改名、高直の妾腹の女雁音と共に祖母小毬の手許にある。雲井之丞やゝ長じて氏仲と改名した頃、雁音と戀仲となる。豫て雁音を幸壽丸に進めんとの意ある高直、小毬の監督不行屆を咎む。高直母子の間漸く疎隔する。光氏三十一・三十二歳の間記事なし、この編三十三歳。〔三十一編〕高直、雁音を自分の手許つてゐたが、旨を承けて光氏の諸國の社寺代參の名の下に、玉葛の行方を探してゐた者。山吹、玉葛に高直に逢ふの不利であること、また光氏が厚意を寄せてゐることを語る。〔三十三編〕山吹、玉葛のことを光氏に報告する。光氏六條に新館を構へて四つに分ち、四季に配す。紫をはじめ、朝霧・花郷・空衣・村荻などこゝに移り住む。光氏、玉葛を實子と稱してひきとり花郷に預ける。その以前から氏仲を花郷に預けておいた。〔三十四編〕一色氏廉、妻賤機の恪氣に困じて、それを離別し、玉葛を妻にしたいと望む。一は光氏の聟となることを光榮とするからである。千景方の生める正尚、また高直の子柏之助などおの〳〵玉葛に戀する。氏仲のみは實の姉と信じてゐる。光氏、磯菜のために亡父十七回忌の法要を營夫、彌二郎と共に上京。玉葛を奪はうと計り、氏仲に懲されて逐ひ歸される。氏仲夢に田貫の靈に逢ひ、緣結びの守を贈られたと見る。覺めればその守は枕頭にあつた。氏廉、玉葛を慕ふこと度を加へる。光氏が與へないのは氏廉の妻賤機の父國助に對する遠慮からである。光氏三十五歳。〔三十九編〕氏仲、光氏が玉葛を惜しむの非難をおそれ、國助の長子國茂に配せようと思ひ、まづ緣結びの守の一片を玉葛に飲ます。折から氏廉の苦衷を知り意を飜して他の一片を彼に飲ます。二人の契いつとなく成る。賤機悒氣ゆゑに病重る。國助一旦賤機をひき取つたが、賤機は又も一色館に歸つて狂暴の振舞をする。國茂、これを迎へにゆく。氏廉の女卷衣、母に連れ添うて國助の館にゆく。〔四十編〕光氏、玉葛を御所

或は眞の小島丸を所持せぬかと繼慕に託して探つてゐたのである。菊咲はまた母の命で、父のために復讐するとて、光氏館に入り込んだのであつた。鐵蔓母子は以前に宗全の曝首を盜んで塚を築いておいたのを、光氏それを壞つやうに見せて、實は宗全菩提のために名雙寺を建てたのである。鐵蔓等これを聞き感激して尼となる。光氏二人をその寺の住職とする。それより前、光氏の子夕霧丸は雲井之丞と改名、高直の妾腹の女雁音と共に祖母小毬の手許にある。雲井之丞やゝ長じて氏仲と改名した頃、雁音と戀仲となる。豫て雁音を幸壽丸に進めんとの意ある高直、小毬の監督不行屆を咎む。高直母子の間漸く疎隔する。

光氏三十一・三十二歳の間記事なし。この編三十三歳。〔三十一編〕高直、雁音を自分の手許にひき取る。その頃、黄昏の忘れ形見、高直を父としながら、事情あつて仲絶えてゐる玉葛九州から上京する。玉葛幼少にして母に別れ、祖父板島敎具の舊臣大兒彌五六郎に拉られて肥前平戸に隱れた。そのうち彌五六郎病死し、その妻とその子眷之助兄妹よく仕へてゐたが、長じて後、肥後の鄕侍信樂現太夫に結婚を强要され、殊に眷之助の弟彌二郎が現太夫に買收されるに及んで、危難身に迫り、眷之助等と共に上京したのである。〔三十二編〕義尙、大原野の祭の練物を御所に招いて見物しようとする。光氏その準備のためまづ嵯峨の館で行はせ、御所の催には然るべき家の娘を練子とする。氏仲はその練子の一人、光氏の家臣惟吉の妹に文を贈るなどの事があつた。上京しても高直を尋ねる手段なく途方に暮れてゐた玉葛等、初瀨の觀音に參詣し、舊識の山吹に邂逅する。山吹は光氏の腰元となつてゐたが、旨を承けて光氏の諸國の社寺代參の名の下に、玉葛の行方を探してゐた者。山吹、玉葛に高直に逢ふの不利であること、また光氏が厚意を寄せてゐることを語る。〔三十三編〕山吹、玉葛のことを光氏に報告する。光氏六條に新館を構へて四つに分ち、四季に配す。紫をはじめ、朝霧・花鄕・空衣・村荻などこゝに移り住む。光氏、玉葛を實子と稱してひきとり花鄕に預ける。その以前から氏仲を花鄕に預けておいた。〔三十四編〕一色氾廉、妻賤機の悋氣に困じて、それを離別し、玉葛を妻にしたいと望む。一は光氏の聲となることを光榮とするからである。千景方の生める正尙、また高直の子柏之助などおの〳〵玉葛に戀する。氏仲のみは實の姉と信じてゐる。光氏、磯菜のために亡父十七回忌の法要を營む。光氏三十四歳。〔三十五編〕光氏夢に黄昏に逢ふと見て、傍にゐる玉葛に寄り添ふ。それ以來、玉葛は光氏に對して戒心を有つ。正尙、玉葛を訪ふ。光氏暗い室に螢を放つて、玉葛の姿を正尙にほの見せることがあつた。高直、光氏が他に預けおいた娘を引取つたといふ噂に刺戟されて、近江に預けておいた妾腹の娘堅田をひき取る。〔三十六編〕高直、堅田の粗野なのに困却する。玉葛堅田に對する高直の處置を聞いて、光氏の厚意に感謝する。野分の風激しく吹く。氏仲、父の命によつて所々を見舞ふ。偶々光氏の玉葛に對する態度から、實の親子でないことを推する。〔三十七編〕義植、嵯峨を遊覽する。光氏、玉葛をしてその行列を望み見させる。光氏は玉葛を義植の御髮上にする考があつたからである。光氏、高直に玉葛の身上を明かす。玉葛の初鐵漿の日、高直夫婦來り會す。〔三十八編〕信樂現太夫、彌二郎と共に上京。玉葛を奪はうと計り、氏仲に懲されて逐ひ歸される。氏仲夢に田貫の靈に逢ひ、緣結びの守を贈られたと見る。覺めればその守は枕頭にあつた。氾廉、玉葛を慕ふこと度を加へる。光氏が與へないのは氾廉の妻賤機の父國助に對する遠慮からである。光氏三十五歳。〔三十九編〕氏仲、光氏が玉葛を惜しむの非難をおそれ、國助の長子國茂に配せようと思ひ、まづ緣結びの守の一片を玉葛に飮ます。折から氾廉の苦衷を知り意を飜して他の一片を彼に飮ます。二人の契いつとなく成る。賤機悋氣ゆゑに病重る。國助一旦賤機をひき取つたが、賤機は又も一色館に歸つて狂暴の振舞をする。國茂、これを迎へにゆく。氾廉の女卷衣、母に連れ添うて國助の館にゆく。〔四十編〕光氏、玉葛を御所に上げる。義植、氾廉との關係を知つて玉葛をかへす。光氏直に玉葛を一色館におくる。氾廉の喜び。光氏更に戀を思はせる句を玉葛に贈つて氾廉を嬲る。これより前に富徽前病死す。葬儀の日、天に異變があつた。

【構想】表面の事件としては、極めて變化に乏しい「源氏物語」（別項）を草雙紙の世界にとり入れるために、作者種彦の最も苦心した點は複雜な趣向を撮合することであつた。まづ世界を室町時代に移し、山名宗全・細川勝元の爭闘を背景とし、一切の事件をそれに聯絡させた。蓋し諧曲の源氏物の脈をひいて、「源氏」に取材した淨瑠璃の手法を襲うたのである。また細川を音川といひ更めたなども、その先蹤によるものであらう。故に源氏君に當る光氏を勝元に配し、源氏君に好意を寄せない后に當る富徽前を宗全に配し、二派相對立せしめて互に詐謀の限りを盡させる。かくて源氏夫、彌二郎と共に氏仲に懲されて逐ひ歸される。氏仲夢に田貫の靈に逢ひ、緣結びの守を贈られたと見る。覺めればその守は枕頭にあつた。氾廉、玉葛を慕ふこと度を加へる。光氏が與へないのは氾廉の妻賤機の父國助に對する遠慮からである。光氏三十五歳。〔三十九編〕氏仲、光氏が玉葛を惜しむの非難をおそれ、國助の長子國茂に配せようと思ひ、まづ緣結びの守の一片を玉葛に飮ます。折から氾廉の苦衷を知り意を飜して他の一片を彼に飮ます。二人の契いつとなく成る。賤機悋氣ゆゑに病重る。國助一旦賤機をひき取つたが、賤機は又も一色館に歸つて狂暴の振舞をする。國茂、これを迎へにゆく。氾廉の女卷衣、母に連れ添うて國助の館にゆく。〔四十編〕光氏、玉葛を御所に上げる。義植、氾廉との關係を知つて玉葛をかへす。光氏直に玉葛を一色館におくる。氾廉の喜び。光氏更に戀を思はせる句を玉葛に贈つて氾廉を嬲る。これより前に富徽前病死す。葬儀の日、天に異變があつた。

【構想】表面の事件としては、極めて變化に乏しい「源氏物語」（別項）を草雙紙の世界にとり入れるために、作者種彦の最も苦心した點は複雜な趣向を撮合することであつた。まづ世界を室町時代に移し、山名宗全・細川勝元の爭闘を背景とし、一切の事件をそれに聯絡させた。蓋し諧曲の源氏物の脈をひいて、「源氏」に取材した淨瑠璃の手法を襲うたのである。また細川を音川といひ更めたなども、その先蹤によるものであらう。故に源氏君に當る光氏を勝元に配し、源氏君に好意を寄せない后に當る富徽前を宗全に配し、二派相對立せしめて互に詐謀の限りを盡させる。かくて源氏君の好色は、敵を謀るための光氏の好色に書き更へられた。藤壺と源氏との關係は、光氏がわざと藤の方との浮名を立てることによつて、藤の方に對する宗全の繼慕を絶たせる手段であり、源氏君の須磨のわび住みも、光氏が西國の山名勢を抑へるために須磨を要害籠居の地とした。源氏と常陸宮の姫君の關係も、光氏が前將軍の遺孤稻舟姫を山名方に擁立させないための手段である。しかもこれ等好色の手段の多くは、後から實なき浮名であることを證據立てる。作者はしかすることによつて武士道主義、また勸懲主義の作意を示し、またしかする以前に於て、當時の讀者が要求する享樂の興味を滿足させようとした。作者はまた事件の變化を多くするために、足利家重寶の紛失と穿鑿の一事を加へた。その重寶も一ならずして三、それが直接間接に山名の陰謀と交涉を保ち、その竊取奪還の策謀に合せて、重寶の眞僞が混亂し、更に好色の手段が纏綿してゐる。卽ち源氏君と六條御息所の關係を飜した光氏と遊女阿古木の關係の如き、源氏君と老女源内侍との關係を飜した光氏と水原の關係の如き、また源氏君と夕顏の關係を飜した光氏と黄昏及びその母凌晨の關係の如き、皆それである。これ等の構想はおのづから探偵小說的興味を豐富ならしめ、それがまた作者自身の興味、また豫想せられる讀者の興味の對象たる歌舞伎の雰圍氣と相俟つて草雙紙殊に合卷の典型を成し得たのである。

この點に於ては、「源氏物語」を合卷化しようとした作者の意圖は成功したといふべきであつた。しかし構圖全體から觀れば、明石の卷に當る第二十二編あたりを境界として、飜案の態度に異同のあることが注意せられる。な

順序の變更を以て創作めかしたと見るべきである。三編にも幾分その臭味を脫しない。嘉永三年までに六編を出した。作者名は岳一筆庵であるが、五・六編は門人の代筆と推せられ二十三種貝（別項）、安政二年の十二編から元治元年の十三編までは笠亭仙果で、原據の横笛の卷で中絶した。その間畫工は二世國貞・歌川芳林堂の合板であつたが、六編發行の時から分裂し、錦林堂は別に「鄙廼佛」の第五編に續ぐものとして「足利絹手染染第六編を出した。

作者は笠亭仙果、畫工は二世豐國、安政元年の十五編に至る。十六編より同四年の二十編までの作者は松亭金水（別項）である。板元の爭ひから二種の作を出し、しかも時に作者は同一人であることは、いかに「田舍源氏」の勢力が後にまで及ぼしてゐるかを明かに示すものである。その他類作に「藤紫手治曙」がある。

嘉永三年から安政二年までに八編、うち六編までは種貝、七編以下は仙果の作、これは大體「田舍源氏」の流行は、當時の劇壇にも影響をほどの類作は一々列擧するに遑がない。なほ仙果の作に「宇町源氏胡蝶卷」があるが、それ年から文久二年までに十七編を出した。なほ賞紫（紫色）二名「紫式部一代記」がある。嘉永五年「田舍源氏」の流行は、當時の劇壇にも影響を及ぼし、天保九年江戸中村座の中幕に「内裏模樣源氏紫」を出させた。その後、嘉永四年に中村座で「東山櫻荘子」の中にとり入れられ、同年市村座で「源氏模樣雛形」では、初編から二十編までを脚色した。これ等がまた草雙紙物を歌舞伎にとり入れる機運を助長したのである。

（山口）

仁勢物語

【作者】烏丸光廣と傳へる。【名稱】「仁勢物語」は「伊勢物語」のもじりで擬物語に通ずる。【諸本】初版は寛永刊。但し年號はない。再版は貞享三年刊。原本の通り覆刻したものらしい。この版近年まで存し、先年大阪鹿田靜七が新搨した事がある。新しい流布本はこれである。近世文藝叢書第七所收。【解說】「仁勢物語」（各別項）を、初段から百二十五段まで、本文和歌とも、すべて狂文化したものである。例せば初段、

（編九十三）寫本 久田小物語 仁勢物語 太田氏郎藏

むかし男ありけり。むかしといふ歌のこゝろはへなり。むかし人は、かくいちはやきみやうみなんしける。

目蓮（もくれん）

【初名】蓮長【諱號】立正大師【生歿】貞應元年（一二二二）二月十六日ご誕ぶ安房小湊に生れ、弘安五年（一二八二）十月十三日武藏池上に歿す。享年六十一歳にして清澄山に還り、四月一日に三月二十八日に朝陽に對し南無妙法蓮華經を高唱し、道善房の特佛堂に於て法華經の大意を集めて大衆に示し、終に立正安國論を著はして、時の最明寺入道時賴に呈し、自ら刺戟せらるゝ所があつたであらう。建長五年三十二

【參考】田舍源氏解題 山口剛（日本名著全集）

仁勢物語（にせものがたり） 假名草子 二卷二册

【作者】烏丸光廣と傳へる。【名稱】「仁勢物語」は「伊勢物語」のもぢりで、擬物語（にせものがたり）に通ずる。【諸本】初版は寛永刊。但し年號はない。再版は貞享三年刊。原本の通り覆刻したものらしい。この版近年まで存し、先年大阪鹿田靜七が新撰した事がある。新しい流布本はこれである。近世文藝叢書第七所收。【解說】「伊勢物語」（別項）を、初段から百二十五段まで、本文和歌とも、すべて狂文化したものである。例せば初段、

おかしおとこ。ほうかぶりして奈良の京かすがのさとへ、酒のみにいきたり、そのさとにいとなまぐさき魚、はらかといふありけり、此男かふてみにけり、おもほえずふぐぎんちやくに、いとはしたぜにもあらざりければ、心地まどひにけり、おとこのきたりける、かりきるものをぬぎて、魚のあたひにやる、その男しふぞめのきるものをなんきたりける。

春日野のさかなにぬぎしかりぎものさけのみたれはさむさしられず

となん、またつぎてのみけり、醉ておもしろきこゝもやおもひけん。みちすがらしどろもどろありあしもとはみだれそめにしわれならざけにないとしても、餘りに逐條的に、一字も洩らさず狂文化せんとした所に無理が出來、破綻が歷々目について、作者の苦心ほどに感興を喚ばぬものである。併し當時の歌人國學者といへば、徒らに古書の註釋に沒頭し、それ以外に一歩も進出の出來なかつた時代に、我が古典文學を無雜作に狂文化した點は、特に注目に値する。【影響】この書は餘り行はれなかつたものらしいが、江戸文學に、狂歌狂文から成る戲作の一體を開いた濫觴であつて、種々の擬作が出來てゐる。「眞實伊勢物語」「好色伊勢物語」（各別項）「くせ物語」等、その影響を受けたものも少くない。

（水谷）

日蓮（にちれん） 日蓮宗開祖 【俗姓】貫名氏。【初名】蓮長 【諡號】立正大師 【生歿】貞應元年（二月十六日と傳ふ）安房小湊に生れ、弘安五年（一九四二）十月十三日武藏池上に歿す。享年六十一。【墓所】甲斐身延山 【閱歷】鎌倉幕府執權時代の盛時に東國に生長し、一たび京畿地方を歷遊して佛教の形勢を實視し、法華經の信仰を以て感發し、東國に還つて自ら法華經の行者を以て任じ、蒙古の牒狀のことを聞いて國家の大難を豫想し、興奮して大に諸宗を排擊し、殊に當時京都より諸國に流傳したる淨土教を極力破斥して、法華經の宗門を興隆せんとし、幕府に迫つて激越の言說をなした。依つて一たび伊豆に配流せられ、二たび佐渡に配流せらるゝことになつた。これより後、身邊の一變により、おのづから心境も異れるものの如く、一生の經歷は、佐渡に配流せらるゝ前後を以て二期をなしてゐる。即ち佐渡以前、佐渡以後を以て兩分せられてゐる。佐渡以後は身延山に隱棲して大に敎化に盡したのである。〔京畿歷遊東國活躍の時期〕

仁勢物語（小田久太郎氏藏）

同上表紙

の如きで、すべてが牽強であるから已むを得ないとしても、餘りに逐條的に、一字も洩らさず狂文化せんとした所に無理が出來、破綻が歷々目について、作者の苦心ほどに感興を喚ばぬものである。併し當時の歌人國學者といへば、徒らに古書の註釋に沒頭し、それ以外に一歩も進出の出來なかつた時代に、我が古典文學を無雜作に狂文化した點は、特に注目に値する。【影響】この書は餘り行はれなかつたものらしいが、江戸文學に、狂歌狂文から成る戲作の一體を開いた濫觴であつて、種々の擬作が出來てゐる。「眞實伊勢物語」「好色伊勢物語」（各別項）「くせ物語」等、その影響を受けたものも少くない。

（水谷）

日蓮（にちれん） 日蓮宗開祖 【俗姓】貫名氏。【初名】蓮長 【諡號】立正大師 【生歿】貞應元年（二月十六日と傳ふ）安房小湊に生れ、弘安五年（一九四二）十月十三日武藏池上に歿す。享年六十一。【墓所】甲斐身延山 【閱歷】鎌倉幕府執權時代の盛時に東國に生長し、一たび京畿地方を歷遊して佛教の形勢を實視し、法華經の信仰を以て感發し、東國に還つて自ら法華經の行者を以て任じ、蒙古の牒狀のことを聞いて國家の大難を豫想し、興奮して大に諸宗を排擊し、殊に當時京都より諸國に流傳したる淨土教を極力破斥して、法華經の宗門を興隆せんとし、幕府に迫つて激越の言說をなした。依つて一たび伊豆に配流せられ、二たび佐渡に配流せらるゝことになつた。これより後、身邊の一變により、おのづから心境も異れるものの如く、一生の經歷は、佐渡に配流せらるゝ前後を以て二期をなしてゐる。即ち佐渡以前、佐渡以後を以て兩分せられてゐる。佐渡以後は身延山に隱棲して大に敎化に盡したのである。〔京畿歷遊東國活躍の時期〕は日蓮自ら皆陀羅の子なりと云ひ、姓氏を云はず。後に傳へて貫名氏と云ふ。遠江の人貫名五郎重實と云ふ者、平氏の亂に安房に配流せられ、長狹郡東條鄉小湊に居り漁夫となる。その子次郎重忠に五子あつて、日蓮はその第四子なりと云ふ。貞應元年に生れ、天福元年十二歲にして同國の淸澄山に登りて道善房に師事し、後、得度して是生房蓮長と稱し、專ら學問修行し、漸く後に出遊して比叡山に登り、天台の敎學を修めて大に感發し、且つ奈良の諸大寺を歷尋して諸宗の敎學を問うた。當時京畿地方には、法然上人一門の淨土敎興隆し、大に人心に浸染したるを實視し、自ら刺戟せらるゝ所があつたであらう。建長五年三十二歲にして淸澄山に還り、四月（一說に三月）二十八日に朝陽に對し、南無妙法蓮華經を高唱し、道善房の持佛堂に一山の大衆を集めて法華經の宗門を宣揚し、殊に淨土敎を破斥し、念佛は無間地獄の業なりと喝破し、大衆を驚かした。地頭東條景信は常に淨土敎を信仰し、日蓮の說く所を聞いて、大に怒つて一山の擯出を迫る。仍つて日蓮この地を逃れ去つて鎌倉に入り、松葉ケ谷に小屋を構へて居り、屢々路傍に立ちて通行の人々に向ひ、法華經の功德を說く。四條某・進士某等、就いて敎を受け、意を傾く、日蓮の意氣益々揚がつた。尋いで日昭・日朗等、傳へ聞いて來つて弟子となる。日昭は比叡山の學僧で、成辨と云ひ、鄉里上總に歸る途次、鎌倉に來たもので、日朗は上總の平賀某の男である。日蓮は當時天災頻りに至り、五穀屢々穰らず、細民の窮迫せる狀を察し、「守護國家論」「災難對治鈔」等を撰述して諸人を警戒した。幾くもなく鎌倉を去つて駿河の岩本に遊化し、實相寺を問うて、「一切

經」を繙閲し、諸經の要文を抄出し、後、松葉ケ谷に還つて「立正安國論」を撰述した。この一書は「守護國家論」「災難對治鈔」等の主意を論張し、「金光明經」等の諸經の要文を擧げて立證したものである。要は當時の天變地妖等はこの國の人々が妄りに邪說を信じて正教を辨へないから、善神聖人が國を捨て所を去り、惡鬼外道が災をなし、難を致すのであると云ひ、その邪說とは、惡比丘法然の淨土教であるとて、極力これを破斥した。文應元年七月（三十九歳）、この一書を宿谷光則に依つて幕府に上つた。これより日蓮の身邊は、急に危險を加へ來り、松葉ケ谷に惡徒の襲撃するに會ひ、僅かに身を以て逃れたが、幕府は日蓮が激越の言說を以て、人心を惑亂するものとなし、弘長元年五月伊豆に配流した。

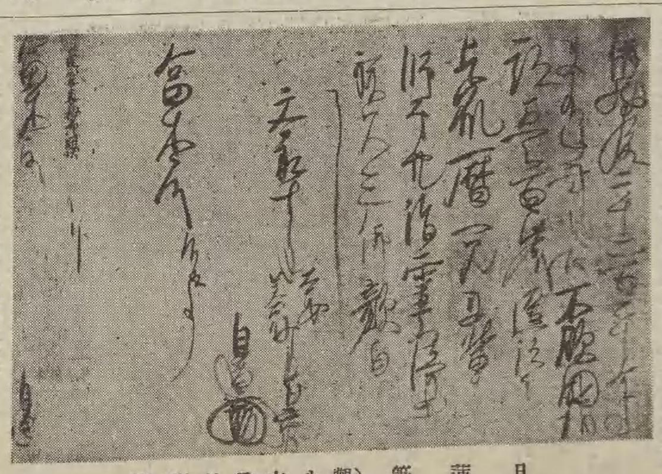
當時日蓮は四十歳で、鎌倉の由井ケ濱より船を發し、弟子等に別れて伊豆の伊東に着し、船守彌三郎夫妻の供養を受けて大に感激し、彼等を敎化した。日蓮は一身に迫害の加はる毎に、益々法華經の行者として末法の大導師たるを自覺し、「敎機時國鈔」等を撰述した。弘長三年二月（四十二歳）、幕府より赦免せられて鎌倉に還り、再び松葉ケ谷の小屋に入つて盛んに法華經の弘通を謀り、「持法華問答鈔」等を撰述した。翌文永元年（四十三歳）、安房に歸省して老母に孝養し、清澄山の道善房を訪ふ後悔あるべし、日蓮は法華經の使なりと云ひ、且つ建長寺道隆、極樂寺良觀等の諸人に書狀を送つて國家の大難を警戒した。これは謂ゆる「十一通御書」として知られてゐるが、その書狀の文言は激越峻烈にして常規を逸したものである。文永八年六月（五十歳）、幕府の命により、極樂寺良觀が雨を祈れることを聞いて大に惡口罵詈し、僧侶行敏の問難するにあたり、益々大に奮激憤懣した。同年九月十二日幕府の命により、平左衞門尉等日蓮を捕へて龍ノ口に拘引した。日蓮は斬罪に處せらるゝもの

日　蓮　（伊豆玉澤法華寺藏）

となし、自ら決心してゐたのである。然るに幕府は佐渡に配流することとした。後世相傳へて日蓮は龍ノ口にて斬罪に處せられんとして、刀三段に折れ、靈驗を以て頸を落されなかつたと云ひ、謂ゆる龍ノ口御難として知られてゐる。これは「法華經」普門品の刀杖段々壞等の文に依つて潤飾せられたものであらう。

即ち十月十日相模の依智を出發し、二十一日に越後の寺泊に到着した。同二十二日檀越富木氏に書を送り、「自レ此亙二大海一、欲レ至二佐渡國一、順風不レ定、不レ知二其期一、道間事心莫レ及、又不レ及レ筆、但暗可二推度一一」と云つてゐる。寺泊に滯留すること三日にして十月二十五日佐渡に渡航し、塚原の三昧堂に入つて籠居した。

〔佐渡謫居身延隱棲の時期〕こゝに至り、一期の覺悟益々堅く、積雪の間に一冬を送り、具に辛苦を嘗めて靜かに練心修行した。この地にも淨土敎徒等の迫害があつた。併し日蓮は彼等を敎化することに努力し、諄々として法華經の功德を說いた。即ち阿佛房等深く歸依して供養したのである。文永九年二月（五十一歳）、「開目鈔」を撰述し、宗敎道德の意義を說明し、翌十年（五十二歳）一ノ谷に移り、四月「觀心本尊鈔」を撰述して、遠く富木氏に送つた。この書は日蓮が法華經の宗門を建設して深大の意義を開顯したもので、尋いで本尊の曼荼羅を圖表して安置した。これ實に日蓮の首唱の大成である。同十一年二月十四日幕府より赦免せられた。日朗鎌倉にあつて赦免の狀を受け、遠くこれを持して佐渡に到つた。即ち日蓮は三月十三日佐渡を出發して越後の柏崎に入り、二十六日に弟子等に迎へられて鎌倉に歸着した。四月八日幕府に法華經の宗門を興隆せんことを說いた。併し依然として採用せられないので、蒙古の入寇を斷言し、五月十二日に鎌倉を去つて駿河の竹の下より甲斐に入り、波木井の南部氏に迎へられて身延山に小庵を構へ、法華經弘通の基を開いた。房・總・相・駿の地方より、弟子・信徒等の交々相傳へて訪ひ來る者に對しては懇切に敎化した。佐渡より阿佛房が訪ねて來た。日々信徒の供養によつて朝夕の給用を支へ、衣食を贈れる緣につれ、書狀を送つて敎化し、時に山を下つて近傍の土地を巡遊した。この間に「撰時鈔」「報恩鈔」等を撰述した。自詠「立ちわたる身のうき雲もはれぬへしたえの御法の鷲の山風」の一首に心境が見える。かくて隱棲九年、法華經弘通の初志を貫いたのである。弘安五年九月、病あり、八日弟子等に扶けられて身延山を下り、黑駒・河口・竹下・關下・平塚等を經て、十八日武藏池上宗仲の宅に入り、宗仲



日　蓮　筆　（觀心本尊抄副狀）

夫妻の看護を受け、十月十三日に寂した。弟子日朗等遺言に依りて火葬し、遺骨を身延山に安んじ、諸弟子輪番に勤仕することとした。

一門の弟子日昭・日朗・日興・日向・日頂・日持の六人皆聞え、六老僧と云はれる。次に日法・日家・日源・日滿・日秀・日忍・日進・日賢・日保・日辨・日門・日高・日實・日傳・日祐・日位・日合・天目の十八人、十八中老僧と云はれる。併し十八人中には行實の詳かでない者がある。

【著作】日蓮が一代撰述するところ頗る多く、示寂の後、旦く諸弟子が聚收に努め、漸く編纂したるもの、「錄內」と云ひ、「錄外（ろくげ）」と云ひ、一門の間に傳へられた。元和に至つて本圀寺版成り、「錄內御書」四十卷行はる。寬永以後數次改版せられた。次に慶安二年、「他受用御書」と云ひ、編纂刊行あり、寬文二年に「錄外」二十五卷が刊行せられた。この年間一門の學

のである。明治十三年に身延山久遠寺版刊行せられ、同十九年十二月活版で刊行された。同三十五年加藤文雅・稻田海素、同書に就いて再び一々原本對校をなし、同三十七年八月「日蓮聖人御遺文」と云ふ表題を以て刊行し、數次重版がある。大正四年六月長瀨智大・山川智應によつて「類纂高祖遺文錄」を刊行した。日蓮の著作全部を、主要篇・宗義篇・事蹟篇・信行篇・勸誡篇・敎解篇・對判篇・附錄篇の八篇に類別したものである。然るに日蓮が一代撰述するところ初めより著書の體を成したるものがあり、手記があり、書狀がある。日奧の「御書新目錄」、日諦の「祖書目次」を初め、「高祖遺文錄」は、一に成立の年月に依つて編纂したもので種類を辨別しない。「類纂高祖遺文錄」は內容に依つて類纂したものである。その一代の撰述で、「立正安國論」「觀心本尊鈔」「開目鈔」

本を繙刻したものが、世間に流傳してゐる。

次に日澄の「日蓮聖人註畫讚」（別項）五卷がある。自序に「予謹註二前書一、兼畫二後素一、略二讚玄德一、號曰二註畫讚一、三十二篇、篇次序二年月一而繫レ言分爲二五卷一」とある。古德の註畫讚の體に倣つたものである。原本は傳はらない。天文五年七月、安立院日政の發願に依り、本文漢文で、畫は京都の繪師窪田藤右尉統泰が若狹遠敷郡後瀨山麓の長源寺で描いたもの五卷があり、次に延寶の頃、本文和文で畫工安友の描いたもの五卷がある。然るに慶長の頃活版の漢文の本、元和の頃整版の漢文の本、寬永九年三月の中野市右衞門版の和文繪入の本、寬永十三年一月の藤田宗繼版の漢文の本、天和三年二月の江戶傳馬町鱗形屋版の和文繪入の本等があり、その後屢々和文繪入の本が刊行せられた。この書は初め漢文であつたものを後に和文に改めたものである。專ら日蓮の玄德

承顯揚された。初め日蓮の池上本門寺に示寂するや、遺命によつて遺骨は身延山に葬り、門弟輪番にこれを守護した。然るに弘安八年日向の當直に際し、檀越波木井氏、輪次交替の制を廢し、日向を長く留まらしめんとした。日興これに從はず、決然身延を去つて富士山麓に大石寺を創立した。これ日蓮の雄圖たる大戒壇建立の事に從はんとしたものである。また日興は諸輩に反して本迹勝劣の義を唱へた。これ實に宗門分派の最初であつて、この興門派は明治九年本門宗と稱し、同三十三年には、その中より日蓮正宗の別立するを見た。日朗・日向・日常等の法弟は、池上・身延・中山・鎌倉等に在つて法幢を飜したが、就中日朗門下では、日像が永仁五年初めて京都に弘敎し、元亨元年勅を蒙りて妙顯寺を開き、日輪は日朗の後を繼いで、本門・妙本二寺を領し、東西相呼應して宗綱を張つた。日印は獨り本迹勝

夫妻の看護を受け、十月十三日に寂した。弟子日朗等遺言に依りて火葬し、遺骨を身延山に安んじ、諸弟子輪番に勤仕することとした。一門の弟子日昭・日朗・日興・日向・日頂・日持の六人皆聞え、六老僧と云はれる。次に日法・日家・日源・日滿・日秀・日忍・日進・日賢・日保・日辨・日門・日高・日實・日傳・日祐・日位・日合・天目の十八人、十八中老僧と云はれる。併し十八人中には行實の詳かでない者がある。

【著作】日蓮が一代撰述するところ頗る多く、示寂の後、早く諸弟子が聚收に努め、漸く編纂したるもの、「錄內」と云ひ、「錄外（ろくげ）」と云ひ、一門の間に傳へられた。元和に至つて本圀寺版成り、「錄內御書」四十卷行はる。寛永以後數次改版せられた。次に慶安二年、「他受用御書」と云ひ、編纂刊行あり、寛文二年に「錄外」二十五卷が刊行せられた。この年間一門の學僧日重・日乾・日遠等交々編纂校訂に心力を致したが、なほ原本の傳寫對校等を要するものがあつた。貞享三年、中山の日奧が「錄內」一卷を開合整理して「御書新目錄」一卷を編成した。次に安永八年二月、水戸の日諦が「祖書目次」一卷を編成し、三百五十五篇を收錄し、「本化高祖年譜」等と共に刊行した。その後、尾張の妙法寺日明、祖書の眞蹟の搜索・謄寫・校訂等に一生を捧げ、文化十一年十月、「新撰祖成」を編纂し、未だ完成するに至らず同十三年三月に寂した。江戸の醫小川孝榮、日蓮の遺書を耽讀し、遂にその編纂校訂の大任に當らんとし、嘉永元年、日明の事業の後を繼續し、辛苦經營歲月を積みて慶應元年十月に至り、「高祖遺文錄」三十卷を完成し、祖書三百八十七篇を收錄した。「錄內」「錄外」「他受用御書」「御書續集」「本滿寺・三寶寺錄外」等を對校集錄したものである。明治十三年に身延山久遠寺版刊行せられ、同十九年十二月活版で刊行された。同三十五年加藤文雅・稻田海素、同書に就いて再び一々原本對校をなし、同三十七年八月「日蓮聖人御遺文」と云ふ表題を以て刊行し、數次重版がある。大正四年六月長瀨智大・山川智應によつて「類纂高祖遺文錄」を刊行した。日蓮の著作全部を、主要篇・宗義篇・事蹟篇・信行篇・勸誡篇・教儀篇・對判篇・附難篇の八篇に類別したものである。然るに日蓮が一代撰述するところ初めより著書の體を成したるものあり、手記があり、書狀がある。日奧の「御書新目錄」、日諦の「祖書目次」を初め、「高祖遺文錄」は、一に成立の年月に依つて編纂し容に依つて類纂したものである。その一代の撰述で、「立正安國論」「觀心本尊鈔」「開目鈔」「撰時鈔」「報恩鈔」は重要なるものとされ、「守護國家論」「災難對治鈔」「教機時國鈔」「如說修行鈔」等がまた知られてゐる。現今眞蹟の傳はるもの、著作・書狀を合せて一百餘篇ある。

【傳記】日蓮は書狀等に、屢々自ら經歷などを叙述してゐる。故に日蓮の經歷行實を研究するには「高祖遺文錄」も重要なる資料である。最初の傳記は、日朝の「元祖化導記」二卷がある。文明十年九月の編修で、主として日蓮の遺文に依つたものである。甲斐の圓實寺に日朝の自筆本があつたが、今は散佚し、僅かに斷簡二三紙を存してゐると云ふ。日叙の「頭書元祖化導記」の日遲の傳寫本もあると云ふ。「元祖化導記」の古本と云へば、明應九年四月の日定の寫本、天文十一年二月の順幸の寫本が身延山久遠寺に藏せらるゝと云ふ。寛文六年五月京都書肆栗山彌兵衞刊行の本があり、この本を繰刻したものが、世間に流傳してゐる。次に日澄の「日蓮聖人註畫讚」（別項）五卷がある。自序に「予謹註二前書一、兼書二後素一、略二讚玄德一、號曰二註畫讚一、三十二篇、篇次序二年月一而繫レ言分爲二五卷一」とある。古德の註畫讚の體に倣つたものである。原本は傳はらない。天文五年七月、安立院日政の發願に依り、本文漢文で、畫は京都の繪師窪田藤右尉統泰が若狹遠敷郡後瀨山麓の長源寺で描いたもの五卷があり、次に延寶の頃、本文和文で畫工安友の描いたもの五卷がある。然るに慶長の頃活版の漢文の本、元和の頃整版の漢文の本、寛永九年三月の中野市右衞門版の和文繪入の本、寛永十三年一月の藤田宗繼版の漢文の本、天和三年二月の江戸傳馬町鱗形屋版の和文繪入の本等があり、その後屢々和文繪入の本が刊行せられた。この書は初め漢文であつたものを後に和文に改めたものである。專ら日蓮の玄德を讃嘆したもので、龍ノ口法難の靈異を緣飾し稱揚してゐる。これより日蓮の行狀を著しく靈異化したやうである。かくして傳記類が續出することとなつた。

【參考】高祖遺文錄 ○類纂高祖遺文錄 ○元祖化導記 日朝 ○日蓮聖人註畫讚 日澄 ○蓮公薩埵傳 ○蓮公大師年譜 ○本化別頭高祖年譜 建立支得 ○同考異 ○本化別頭高祖傳 日省 ○本化別頭佛祖統紀 日潮 ○高祖累歲錄 深見要言 ○日蓮上人眞實傳 小川孝榮 ○日蓮上人自叙傳 國友日斌 ○日蓮聖人研究 山川智應 【鷲尾】

日蓮宗（にちれんしゅう） 佛教 【名義】日蓮（別項）を祖師とし、「法華經」に依りて建立せる一宗で、法華宗とも呼ぶ。【沿革】日蓮によつて創唱された一宗の教義は、その歿後、日昭・日朗・日興・日向・日頂・日持等の高弟によつて繼承顯揚された。初め日蓮の池上本門寺に示寂するや、遺命によつて遺骨は身延山に葬り、門弟輪番にこれを守護した。然るに弘安八年日向の當直に際し、檀越波木井氏、輪次交替の制を廢し、日向を長く留まらしめんとした。日興これに從はず、決然身延を去つて富士山麓に大石寺を創立した。これ日蓮の雄圖たる大戒壇建立の事に從はんとしたものである。また日興は諸輩に反して本迹勝劣の義を唱へた。これ實に宗門分派の最初であつて、この興門派は明治九年本門宗と稱し、同三十三年には、その中より日蓮正宗の別立するを見た。日朗・日向・日常等の法弟は、池上・身延・中山・鎌倉等に在つて法幢を飜したが、就中日朗門下では、日像が永仁五年初めて京都に弘教し、元亨元年勅を蒙りて妙顯寺を開き、日輪は日朗の後を繼いで、本門・妙本二寺を領し、東西相呼應して宗綱を張つた。日印は獨り本迹勝劣の義を唱へて、越後に本成寺を創立し、日陳これを祖述した。これ後の本成寺派で、現今法華宗と稱してゐる。降つて永德の頃、日什起りて日印・日興の後を襲つて、盛んに本迹勝劣を主張し、十三年には京都に妙滿寺を開いて、今日の顯本法華宗の基をなした。これより先、日印の門人日靜は、足利尊氏の歸依を得て京都に入り、嘉曆三年十一月後醍醐天皇より宗號の綸旨を賜はり、貞和元年光嚴上皇の勅により、本阿寺を鎌倉より京都六條に遷してこゝに住した。また日像の弟子妙實も、尊氏等權門の歸依を受け、延文の頃祈雨の勸賞として、朝廷より宗祖已下、日朗・日像に菩薩號を賜はつた。妙實の後に朗源あり、その下に日齊・日實があつたが、日實は山陽の諸國に弘教したる後、歸京して妙覺寺を開創し、日

齊の門下に又日實ありて立本寺を開いた。この妙顯・妙覺・立本の三寺は、共に具足山と稱し、各々京師に化を競つた。同じく日齊の門下に、日存・日純・日隆ありて、この三人は、共に勝劣の義を唱へたが、存・純兩人は、妙顯寺の月明に歸して所說を改めた。ひとり日隆は「法華經」本門十四品中、特に涌出品已後八品を正依として八品派を創した。後の本門法華宗はこれである。日靜の後には日傳・日經・日秀相繼ぎ、日秀が本滿寺を建ててより、日什の妙顯寺、日隆の本能寺と鼎立して、京都に於ける本宗の隆盛をして遙かに關東諸國を凌ぐに至らしめた。日像・日靜西上の後、關東には日進・日輪・日高あり、日進の後には日善・日臺・日院・日叡・日億・日延ありて、相繼いで身延山に住し、日延の弟子日朝の出づるに及んで、大に宗門を振興し、諸國に寺基を開いて、宗風を宣揚したので、時人は宗祖の再誕と稱した。時に中山に日祝・日親兩英傑あり、共に前後して京都に上り、祝は頂妙寺を、親は本法寺を開いた。かくて英俊並び出でて東西に化を競ひ、京都に於ては權門の間に勢力を得て、寺院の營造頻りに行はれ、享祿・天文の際には、日蓮宗二十一ケ寺の稱ありて、公家御讀經寺に擬せらるゝに至り、實に本宗の全盛期をなした。然るに天文元年山科の本願寺と事端を構へ、同五年には宗號の件で、比叡山の僧徒が、近江の國守佐々木義實の兵と協力して、二十一ケ寺を襲撃した。攻戰五日、ために漸く興隆した諸山は概ね沒落し、妙覺寺日兆已下僧俗の戰死者を出した。本圀寺日助等逃れて和泉の堺に隱れ、同十一年十月諸山再興の綸旨を得て、舊來の二十一ケ寺を改めて十六本寺としたが、天正七年には安土の宗論ある等、宗門の災害頻りなる折、偶々文祿四年豐臣秀吉の大佛供養會に際し、日奧は宗内の門侶を誘うてこれに列するを拒み、國主と雖も「法華經」を信奉せざれば謗法の徒なるを以て、この種の供養を受けざるは、宗祖已來の制格なりとて、不受不施の義を唱導し、爾來內憂外患益々加はり、一宗の運命も甚だ危い有樣となつた。されど一方には將士の間に本宗の信者も亦多く現はれ、本圀寺日禎は加藤清正の歸依をうけて大に寺門を張り、その門下日等は關東に下つて、本門・妙本二寺の主に推され、身延山久遠寺には日新ありて、江戸に弘通したので、幾許もなくして東西に繁榮を見るに至つた。日重門下の日乾・日遠は、相尋いで西より關東に下向して、久しく隔歷せる兩地の弘教を融和し、各地に談林を起して教學を盛んならしめ、不受不施の異流を斥けて宗内を統一し、宗門の面目は一新せられた。比叡山に於て日等と交のあつた日統は、下總に歸り、飯塚に講席を張りて飯高談林の基を開き、これより前後して十九談林の建設を見、宗義講究甚だ盛んとなつた。この時に乘じて、日奧は日講と共に專ら宗乘を究め、日重門下の諸學僧に抗して、不受不施の義を唱導して息まず、慶長五年德川家康に召されて大阪城に登り、妙顯寺日紹と對論したが、固く自說を執りて動かず、遂に對馬に配流せられた。爾後力を盡して排斥したが、なほ往々この說に歸する者を生じ、就中本門寺日樹は、關東にあつてこれを主張し、秀忠夫人淺井氏の葬禮に加はらず、當時學德を以て知られた中村談林の化主日賢がこれに黨したので、四方に呼應してこの說を援ける者が現はれ、寬永七年に至り、不受不施の徒を罰し、この說を唱道するを禁じた。然るになほ日講は、寬文五年「守正護國章」を作つて幕府に上つたが、幕府はこれを用ひずして彼を流刑に處した。明治五年一宗一管長の制を定むるや、本宗もこれによつて一管長を立て、同七年に至り、一致・勝劣の兩派に各々管長をおき、同九年二月一致派は單に日蓮宗と改め、勝劣派は五派に別立した。同九年には不受不施派再興し、同十五年三月には、その中より不受不施興門派が獨立した。現今次の九派に分れてゐる。

日蓮宗(三、五〇〇寺)○本門宗(二二〇寺)○顯本法華宗(四五〇寺)○本門法華宗(三三〇寺)○法華宗(一六〇寺)○本妙法華宗(八二寺)○日蓮正宗(六九寺)○不受不施派(三寺)○不受不施講門派(一寺)

【教判】本宗は、教相判釋として教・機・時・國・序の五綱領を立てる。教綱に於ては、釋尊の教法を釋し、滅後の諸家を判じて本化別頭の妙教を定め、法華本門によつて爾前の得道を許さず、釋尊の久遠實成と弟子の久遠とは、爾前迹門にはなき所とし、本門觀心の法體妙法蓮華經を選定して末法應時の教宗を定め、機綱に於ては、末法の機は本未有善にて下種の大善なきを以て、佛乘の大善妙法五字を以て心田に下すべきだとし、時綱に於ては、末法今時を鬪諍堅固白法隱沒の時と判じて、下種の大利のみある時だから、專ら妙法五字を以て毒鼓結緣すべきだとし、國綱に於ては、一向一乘法華有緣の日本國は、餘經の利益なしとして王佛冥合立正安國の大義を定め、序綱に於ては、今時末法は法華本門流布の時で、本門の四依出世の世なりとして餘經の無益なるを定めるのである。【觀心】觀心としては、本尊・題目・戒壇の三大祕法をとる。本尊とは行者修行の所依たるべきもので、十界大曼荼羅全體を以て久遠本佛の尊形とする。題目とは卽ち南無妙法蓮華經であり、戒壇とは本門無作の圓頓戒をうくるところである。よつて以て心に本尊を念じ、口に題目を唱へ、身に妙戒を持ち、娑婆卽寂光卽身成佛と信解せよと教へるのである。【弘教】弘教の方法については、攝受・折伏二門のうち、時は鬪諍堅固の末法時だし、處は誹謗正法の日本國だからとて、特に折伏門をとる。四箇格言の如きは、實に折伏の表現である。【妙行】又受持・讀・誦・解說・書寫の五種の妙行を說く。受持とは信力の故に受け、念力の故に持つを云ひ、讀とは看文、誦とは諳誦、解說とは經の深意を宣說するを云ひ、書寫とは妙經・首題を書寫するを云ふ。この五種中、受持を正行とし、他の四を助行とする。蓋し受持の一行は、佛智を把持する所以の肝要なるものであつて、所行の體は妙法五字の題目である。この題目を對境となす時は本門の本尊であり、發して能行となる時は本門の題目となり、境智冥合の相狀は本門の戒壇となる。これ卽ち萬法を總括し、萬行を節要すべき三大祕法に對する三業受持の行軌を垂れるものであつて、意に念じ、口に唱へ、身に行ふ。これを受持正行と云ふのである。

【常盤】

日蓮聖人註畫讚 にちれんしやうにんちゆうぐわさん

繪卷物 五卷 【解說】京都本圀寺藏。各卷の奥書によれば、天文五年に若狹國遠敷郡後瀨山麓の長源寺に於て作製したもので、勸進は安立院權大僧都日政、畫工は洛陽繪所雪田藤右兵衞尉統泰である。第一卷卷首に鎌倉妙法寺の沙門日澄の序文があり、これによれば日蓮聖人の絕倫なる法力を顯揚せんがため、聖人の傳記を註し畫を加へてその女德を讚したのが卽ちこの繪卷であつて、聖人の誕生出家より入滅御書目錄に至るまで、一期の聖蹟を叙すること三十二段に及んでゐる。註讚は凡て漢文で書いたもので、日蓮の傳記中でも、種々注目すべき資料を含んでゐる。畫圖は精細懇切なものであるが、畫者窪田統泰に關しては、この奥書以外に經歷が未だ詳かでない。京都の繪所とあるのも、これまた明かでないが、蓋し土佐の末流に漢畫を交へた繪師の一派らしく、その繪は南都の繪佛師などとも相近似してをり、足利季世の衰へ盡した繪卷の中に在つては特筆すべき製作である。【田中(一)】

日蓮聖人辻說法 にちれんしやうにんつじせつぽふ

戲曲 一幕 【作者】森鷗外 【發表】明治三十七年三月、雜誌「歌舞伎」臨時號。【刊行】大正十年「我一幕物」に收めて刊行、籾山書店。鷗外

日蓮聖人御法海 にちれんしやうにんごほふかい

淨瑠璃 五段 時代物 【作者】並木正三・並木鯨兒。添削者並木宗輔・淺田一鳥 【角書】番附には增補とある。【初演】寶曆元年十月十日、豐竹座。【題材】日蓮上人生涯の事蹟を脚色してゐる。古淨瑠璃に、承應三年四月刊行の「日蓮記」が見られ、それが享保三年近松の「日蓮上人記」となつて本作に及ぶ。

【梗概】【初段】(婚禮)遠江・安房。上總を領する三國太夫に藥王丸と云ふ男子があつた。かねて清澄寺へ登つて勉學中であつたが、父母は無理に呼び戻して波木井の庄司の娘七里姬を配せようとする。藥王丸は佛に從はんか父母に從はんかと迷つたが、虛空藏菩薩の啓示に依つて決然奮を斷ち、名を日蓮と改めて再び山へ登つてしまふ。既に婚禮の用意を整へてゐた一家は大混亂に陷る。家老は申譯のために、申の年月揃つた誕生の男子を求め歩いてゐたが、計らずも勘作の子經市がその四郎を殺した顚末を詫び、御弟子となつて名を日朗と改める。惡役人共は、何とかして日蓮を害さうとしたが、船頭彌三郎親娘の親切に依つて助けられる。なほも執拗に船を追つた者共は、靈驗の威力で沈められてしまふ。

【三段】(鎌倉御所)度重なる異變に驚いた執權北條長時は、一度日蓮を呼び返したものの、又禪僧の讒を容れて日蓮を龍の口で處刑する事とした。併しその刻限になると不思議にも風雨雷電が凄じいので、急ぎ赦免の使を走らせる。(龍の口)今しも日蓮の首を刎ねんとすると、俄に大雷雨となつて役人共は一樣に氣絕してしまふ。(鵜飼勘作の住居)鵜飼の勘作は貧故に、禁を犯して獵をしたので獄に繫がれた。本間六郎左衞門は長時公の父君の藥とするために、申の年月揃つた誕生の男子を求め歩いてゐたが、計らずも勘作の子經市がその家來共が押寄せて來る。七面龍又はその言葉の如く、難なくこれを追散らしてしまふ。(六郎左衞門館)相模の國主本間六郎左衞門は經市を助けた咎に依つて蟄居してゐる。この日上使が來て日蓮の母を首討つて渡せと云ふ。舊恩を忘れぬ船頭彌三郎は、自分の妻を身代りに立つべく、御臺に仕立てて連れて來る。彌三郎の娘お舟は母を追つて來たが、母樣とも云へず悲しい別れをする。併し東條判官は既に忍び込んで、總ての樣子を知つてしまつた。六郎左衞門は此處に判官を殺して、明かに法華に歸依してゐる事を表示する。【五段】(臨終)かくて日蓮上人は、弘安五年十月十三日武藏なる池上村本門寺に於て、御弟子等に守られつつ入寂する。禁中からは遙々と使者が下つて大菩薩の號を賜はる。(法愚小春櫻)

の傳記を註し畫を加へてその女德を讃したのが即ちこの繪巻であつて、聖人の誕生出家より入滅御書目錄に至るまで、一期の聖蹟を叙すること三十二段に及んでゐる。註讃は凡て漢文で書いたもので、日蓮の傳記中でも、種々注目すべき資料を含んでゐる。畫圖は精細懇切なものであるが、畫者窪田統泰に關しては、この奥書以外に經歷が未だ詳かでない。京都の繪所とあるのも、これまた明かでないが、蓋し土佐の末流に漢畫を交へた繪師の一派らしく、その繪は南都の繪佛師などとも相近似してをり、足利季世の衰へ盡した繪巻の中に在つては特筆すべき製作である。【田中(一)】

日蓮聖人辻說法（にちれんしやうにんつじせつぽふ）　戲曲　一幕【作者】森鷗外【發表】明治三十七年三月、雜誌「歌舞伎」臨時號。【刊行】大正十年「我一幕物」に收めて刊行、籾山書店。鷗外全集第四卷所收。【初演】明治三十七年四月、歌舞伎座で、羽左衞門・梅幸・松助・八百藏(中事)・片岡市藏等によつて上演された。【內容】鎌倉では日蓮の辻說法の噂が高い。進士太郎善春は日蓮を賣僧と罵つた爲め、戀仲の妙(たへ)との間を隔てられてしまつた。妙の父比企能本は大の日蓮信者であるのだ。今日も降り來る雪と瓦石の雨の中に、日蓮は說法する。來合せた善春は日蓮に信服する。さうして戀愛も復活される。【批評】當時この作ほど歌舞伎の精神、歌舞伎の手法を否定したものはなく、その點明かに後に興つて來た活歷(別項)以外の新しい史劇であり、鷗外の作中最も多く上演された脚本である。【長田】

日蓮上人法語消息（にちれんしやうにんほふごせうそく）　「法語」を見よ。

日蓮聖人御法海（にちれんしやうにんごほふかい）　淨瑠璃　五段　時代物【作者】並木正三・並木鯨兒。添削者並木宗輔・淺田一鳥【角書】番附には增補とある。【初演】寶曆元年十月十日、豐竹座。【題材】日蓮上人生涯の事蹟を脚色してゐる。古淨瑠璃に、承應三年四月刊行の「日蓮記」が見られ、それが享保三年近松の「日蓮上人記」となつて本作に及ぶ。

【梗概】【初段】(婚禮)遠江・安房。上總を領する三國太夫に藥王丸と云ふ男子があつた。かねて清澄寺へ登つて勉學中であつたが、父母は無理に呼び戻して波木井の庄司の娘七里姬を配(めあは)せようとする。藥王丸は佛に從はんか父母に從はんかと迷つたが、虛空藏菩薩の啓示に依つて決然髻を斷ち、名を日蓮と改めて再び山へ登つてしまふ。既に婚禮の用意を整へてゐた一家は大混亂に陷る。家老は申譯のため切腹して嫁を迎へた。併し姬を送つて來た使者も奥の間へ通るや腹を切る。途で東條判官の子李四郎のために姬を奪はれてしまつたのである。かくと聞いて勇敢なる三國太夫の家來吉祥丸は、難なく李四郎を殺して姬を取返して來る。【二段】(清澄寺)久しく諸國修行をしてゐた日蓮は、師の道善の許へ歸つて來る。道善は喜び迎へて早速寺を讓らうとする。兄弟子の學林坊は、これを妬んで日蓮を罪に落さうとしたが、却つて寺を追はれてしまふ。學林坊は先に息子を殺された恨みのある東條判官に內通した。判官の軍勢は直ちに押寄せたが、日蓮の法力に惱まされて手の出しやうもなく、兵卒共は却つて御弟子となつた。(出船)日蓮は伊豆へ流されるのである。牢舍にある日昭を初め、數多の人々は濱に出て盡きぬ別れを惜しむ。四郎を殺した亂暴を詫び、御弟子となつて名を日朗と改める。惡役人共は、何とかして日蓮を害さうとしたが、船頭彌三郎親娘の親切に依つて助けられる。なほも執拗に船を追つた者共は、靈驗の威力で沈められてしまふ。【三段】(鎌倉御所)度重なる異變に驚いた執權北條長時は、一度日蓮を呼び返したものの、又禪僧の讒を容れて日蓮を龍の口で處刑する事とした。併しその刻限になると不思議にも風雨雷電が凄じいので、急ぎ赦免の使を走らせる。(龍の口)今しも日蓮の首を刎ねんとすると、俄に大雷雨となつて役人共は一樣に氣絕してしまふ。(鵜飼勘作の住居)鵜飼の勘作は貧故に、禁を犯して獄をしたので獄に繫がれた。本間六郎左衞門は長時公の父君の藥とするために、申の年月揃つた誕生の男子を求め歩いてゐたが、計らずも勘作の子經市がそれに適ふ事を知つて貰ひかける。老母は勘作を救ふ金の欲しさに、それとも知らず經市を渡してしまふ。併しその時既に勘作の死骸が運ばれて來る。老母は申譯に自害した。一度に母親・良人・子供にまで別れた勘作の妻は、悲歎の餘り川に身を投げようとする。折柄通り合せた日蓮は早速經市を取戻してやり、更にその子を弟子として目像と名付ける。又川流れの題目の奇瑞を示して勘作を成佛せしめられる。【四段】(道行身延笠)日蓮は日朗・日像を伴つて身延山へと歩み行く。(身延山)日蓮は庵を結んで衆生を濟度してゐると、今なほ日蓮を戀うて狂ひ歩いてゐる七里姬が通りかゝる。日蓮はこれを見るや七里姬から惡龍を追ひ出して救つてやる。一方龍女も此處に始めて佛果を得、七面大明神となつて長く法華の守護たらん事を誓ふ。時に東條判官の家來共が押寄せて來る。七面龍女はその言葉の如く、難なくこれを追散らしてしまふ。(六郎左衞門館)相模の國主本間六郎左衞門は經市を助けた咎に依つて蟄居してゐる。この日上使が來て日蓮の母を首討つて渡せと云ふ。舊恩を忘れぬ船頭彌三郎は、自分の妻を身代りに立つべく、御臺に仕立てて連れて來る。彌三郎の娘お舟は母を追つて來たが、母樣とも云へず悲しい別れをする。併し東條判官は既に忍び込んで、總ての樣子を知つてしまつた。六郎左衞門は此處に判官を殺して、明かに法華に歸依してゐる事を表示する。【五段】(臨終)かくて日蓮上人は、弘安五年十月十三日武藏なる池上村本門寺に於て、御弟子等に守られつつ入寂する。禁中からは遙々と使者が下つて大菩薩の號を賜はる。(法愚小春櫻)日蓮の生涯を略述する。

【解說】本作の直接の影響は、「いろは日蓮記」(延享四年十月、江戸豐竹肥前座。作者近松、添削並木宗輔)及びその外題替へである「日蓮記兒硯」(寬延二年十月八日初日、江戸肥前座)から享けてゐる。なほ現在は未だ知られてゐないが、宗輔が大阪の作者であつたことや、兒硯正本の跋文等から考へて、以上二つの江戸興行の以前に、大阪に於て既に「日蓮記」の興行があつた事が想像される。思ふにこれも本作に影響を與へてゐる事であらう。有名な歌舞伎作者正三も、この頃は未だ二十二歲の弱冠で、殊に前年の冬宗輔の門に入つたばかりであるので、彼としては全く摸倣習作の時代であつた。本作も師宗輔の「日蓮記」に些か筆を加へたに過ぎない。從つて殆ど同一であるが、大きな相違を擧げれば、二段目口學林坊の惡謀みの所、四段目切本間六郎左衞門館の場が加へられた

日蓮聖人註畫讃（にちれんしやうにんちゆうぐわさん）　繪巻物　五卷【解說】京都本圀寺藏。各卷の奥書によれば、天文五年に若狹國遠敷郡後瀨山麓の長源寺に於て作製したもので、勸進は安立院權大僧都日政、畫工は洛陽繪所窪田藤右兵衞尉統泰である。第一卷卷首に鎌倉妙法寺の沙門日澄の序文があり、これによれば日蓮聖人の絕倫なる法力を顯揚せんがため、聖人

事である。これが番附に「增補」と角書を附した所以であらう。而してこの增補の部分は勿論全曲を通して著しく歌舞伎的手法が取入れられてゐる事が目立つ。これは正三が歌舞伎作者であつた事も一つの原因であらうが、又淨瑠璃が歌舞伎化する事に依つて僅かに血路を見出した當時の傾向を示すものである。本作は決して優れた作ではないが、先づ日蓮一代記の集大成で以後度々上演された。そして必ず御會式に掛けて興行し、觀客の信仰を十分利用したのである。なほかく度々上演される度に、多少づつ改訂が加へられ、現存するものは原作と可なりの隔りを示してゐる。例へば二段目切彌三郎住家の段の如きは全くの加筆である。

【參考】近世邦樂年表(義太夫節之部)〔鶴見〕

日蓮大師眞實傳(にちれんだいしのしんじつでん) 脚本十二幕 時代物 【作者】勝能進。補筆として近松時助・奈河正作・重扇助及び仲勝諺藏等。【別名題】「日蓮大士眞實傳」「日蓮大菩薩眞實傳」等。【初演】明治十四年十一月、大阪中の芝居。

〔役割〕 僧蓮長後に日蓮聖人・大學三郎能本(中村福助後の梅玉)、僧日進(中村政治郎)、東條左衞門景信(中村嘉十)、貫名次郎重忠・宿谷左衞門尉光則(市川龜十郎)、妻梅菊・女房磯菜(中村梅太郎)、漁師彌三郎(實川延三郎)、依智の直重(中村珊瑚郎)、阿佛房(中村瑚珀郎)、富木播磨守・綾部正清・四條金吾(中村芝鶴)、僧日朗・北條時頼(坂東壽三郎)。

【諸本】大阪府立圖書館藏に寫本がある。また明治十年、大阪文昌堂發行の「當大入劇場珍報」(新狂言節書集)にも簡單な梗概が收錄されてゐる。【題材】相模の小川泰堂編述の「日蓮大士眞實傳」(萬延元年發行か)を參考として、一代記を脚色したもの。

【梗概】〔序幕〕(小湊八幡鳥居先)參詣の百姓達は、時ならぬ白蓮や橘の實の奇瑞に罷しい噂話。元遠江國貫名の次郎重忠、平家に心寄せるものとして現在安房國長狹郡へ流罪になつてゐるが、妻梅菊の安產祈念のため來り、富木播磨守に出會ひ、我が家へ案內する。(貫名次郎住居)梅菊は夢に日輪八葉の金蓮華に乘り、海上より飛び來りて自分の懷に入ると見て身ごもつた次第、又白髮の翁がこの兒を出家にせよと告げたと語る。梅菊は打續く奇瑞のうちに產氣づく。淸澄寺の道善密師・播磨守等吉瑞に驚く。生れた兒は善日麿と名付けた。(この間十六年經過)。〔序切〕(淸澄寺虛空藏堂)善日麿の藥王丸は三七日の祈願に白髮の翁から智惠の寶珠を授けられる。尋ねて來た母にも、恩愛のきづなを斷つて出家する決心、涙を隱して別れる。(道善密師の居間)月は變れど釋迦の誕生日、剃髮して是生坊蓮長と改名する。尊海法師の鎌倉行に同道して八宗十宗の敎義を究め衆生の迷妄を晴さうと誓ふ。(この間十數年經過)。〔二幕〕(淸澄寺總門)東條左衞門を初め百姓達は、故郷へ立ち歸つた蓮長の最初の說法を聽聞しようと集まる。(同方丈廣間)釋迦の使徒、法華弘通の行者と自信する蓮長は、衆生濟度の大願を述べて諸宗を嘲罵し、淸澄寺の住職への推擧をも斥ける。怒る東條に悲しみ泣く父母。併し儼然とした信念に、遂に一同法華經に歸依する。(淸澄山半腹)日の出。東海より昇る本化大慈の日輪。盡未來際の闇を除く。卽ち法運開闢の時節到來とて日蓮と改名し、東條の追手を避けて鎌倉に渡り、法華經弘通の決心をする。〔三幕〕(大學三郎邸の塀外)日蓮の弟子安泰、工藤絕命する。日蓮は佛門の忠臣と賞美し、閻魔大王に日本一の法華經の行者日蓮の弟子と壯語せよと言ふ。〔六幕〕(鎌倉問註所外構へ)諸宗門の僧侶は、日蓮取締り方法訴訟のため參入する。(北條家奧御殿)時頼逝去の後、律宗に歸依した尼御臺所と時宗の室綾子とは、腰元より獻上の花を賞翫してゐる。北條家の御祈願所極樂寺の良觀律師が、傍若無人の日蓮に憤慨し、引退する決意を言上する。尼御臺所は頼綱に討伐を命ずる。〔六幕の奧〕(名越の里草庵)頼綱は、日蓮の政治へ容喙する態度を非難して召捕るが、日蓮は自分を無實の罪に陷いれるならば、自國反逆難、他國侵逼難が起るであらうと、飽く迄も從容としてゐる。(街道)馬上の日蓮へ一老婆は餅を獻上する。四條金吾・日朗等、死裝束でお供を哀願するが、ただ法華經のために活動せよと說敎する。(龍の口刑罪所)檢使は頼綱、太刀取りは依智三郎。念佛無間・禪天魔・亡國・律國賊の主張を改めるならば助命すると言ふが、日蓮は取合はない。首斬刀を振り上げる時、俄然大雷雨。武士は斃れて了ふ。(七里ヶ濱行合川)依智三郎は不思議な樣子を報告のため、又七條四郎は時宗自筆の日蓮赦免狀を持參のため、兩人は馬上で行合川橋上に出會ふ。北條の館も震動激しく皆々日蓮の絕大なる信仰に感嘆して、助命する事になつたのである。〔七幕〕(本間重連館)一時本間館に幽閉されてゐた日蓮も、佐渡へ流罪と事定まる。上使として依智三郎。本間の一族は日蓮の正法の流布禁止を憤慨する。依智は珠數を斷ち切つて法華經信者になる事を誓ひ、牢獄に在る日朗・日進への日蓮の傳言を承諾する。(宿谷の土宅)依智三郎は日蓮の傳言を日朗に告げようと忍び入る。宿谷左衞門尉光則は、日朗刺殺と誤解して斬り付けるが、互に改宗信仰の事分明し、日朗との面會を許可する。そして日朗は、密かに出牢して日蓮を追つて佐渡へ行く。〔八幕〕(佐渡國塚原三昧堂)雪降り積る日蓮の庵室。阿佛房は法論爭ひより日蓮を殺害しようとするが、その人格に服し、日得と改名して弟子となる。日朗はるゝと尋ね來る。安國論未だ鎌倉に採用されず、政道頽廢、衆生塗炭の苦しみの裡にある次第を述べ、互に世の味氣なさをかこつ。この時本間重遠、豫言の通り鎌倉に合戰起つたと報告する。日蓮は北條殿も遂には自分の言葉を信ずるやうになるであらうと喜ぶ。日朗は別れを惜しんで歸國の途につく。

【大詰】〔石和鵜飼得達場〕鵜飼の勘作は殺生の傳言を日朗に告げようと忍び入る。宿谷左衞門尉光則は、日朗刺殺と誤解して斬り付けるが、互に改宗信仰の事分明し、日朗との面會を許可する。そして日朗は、密かに出牢して日蓮を追つて佐渡へ行く。〔八幕〕(佐渡國塚原三昧堂)雪降り積る日蓮の庵室。阿佛房は法論爭ひより日蓮を殺害しようとするが、その人格に服し、日得と改名して弟子となる。日朗はるゝと尋ね來る。安國論未だ鎌倉に採用されず、政道頽廢、衆生塗炭の苦しみの裡にある次第を述べ、互に世の味氣なさをかこつ。この時本間重遠、豫言の通り鎌倉に合戰起つたと報告する。日蓮は北條殿も遂には自分の言葉を信ずるやうになるであらうと喜ぶ。日朗は別れを惜しんで歸國の途につく。

【大詰】〔石和鵜飼得達場〕鵜飼の勘作は殺生に巡業興行したと言ふ。併し脚本の文學的價値を檢討する時、これ等の事情は却つてそのまゝ非難の言葉に置き換へられる。卽ち日蓮上人の一代記を全般的に餘りに平易に忠實に描寫しようとして、結局平板なる御事蹟の羅列に終つた。全篇を通じて、日蓮といふ雄渾なる精神力の表現が見られない。例證としては、日蓮の確乎とした信仰のために生起する奇蹟であるにも拘らず、逆說的に奇蹟のためにその偉大さを倍加するやうに誇張して表示されてゐる。併し明治初年の時勢に、書き卸された脚本である事を考慮に入れ、一面には元來宗敎を題材とした脚本が成功し難いことを思へば、平板ではあるが忠實なる一代記を、從來の草雙紙趣味のものより蟬脫させて、脚色した作者の努力は認めてもよい。〔尾澤〕

日韓兩國語同系論(にっかんりょうこくごどうけいろん) 比較研究」(A Comparative Study of the Japanese and Korean Language. Journal of Royal Asiatic Society of Great Britain and Ireland, vol III Pt. XI.)といふ頗る卓見に富む研究があり、その外、白鳥庫吉博士は歷史上より、宮崎道三郎・中田薰の兩博士は法制上より兩國語同原說を唱へた。金澤博士の研究は、これ等の同系論を大成したものと云ふべく、本書のほかにも左のやうな同系論に關する著書が發表されてゐる。

○Über den Einflusz des Sanskrits auf das Japanische und Koreanische Schriftsystem.(明治四十年刊)○國語の研究(明治四十三年刊。論文集であるが、國語と朝鮮語の比較研究に關するものが多い)○日鮮古代地名の研究(明治四十五年刊。獨譯を附載す)○日本文法新論(大正元年刊。朝鮮語・琉球語・アイヌ語と比

〔岩淵〕

日記(にっき)「記錄」を見よ。

日記文學(にっきぶんがく) 【名義】日記は古くニキとよんだ。日記は元來日々の出來事又は體驗・感想等を日次を追うて記錄するもので、これに公的なものと、私的なものとがある。公的なものは、宮廷の日記(內記日記・殿上日記)と官廳の日記(外記日記・近衞府日記)との二種がある。私的なものは、漢文で書かれた廷臣の家記と、假名で書かれた文學的な日記との二種がある。文學史上で日記文學と呼ぶのは、私的な日記中の第二類に屬するものを指し、時代的には平安時代から鎌倉時代までが中心となつてゐる。【性質】日記文學の作品中には、「土佐日記」「更級日記」等の如く紀行の性質を有するものがあり、「篁日記」「平中日記」等の如く歌集の性質を有するものがあり、「和

〔日本文學〕

の傳言を日朗に告げようと忍び入る。宿谷左衞門尉光則は、日朗刺殺と誤解して斬り付けるが、互に改宗信仰の事分明し、日朗との面會を許可する。そして日朗は、密かに出牢して日蓮を追つて佐渡へ行く。〔八幕〕（佐渡國塚原三昧堂）雪降り積る日蓮の庵室。阿佛房は法論爭ひより日蓮を殺害しようとするが、その人格に服し、日得と改名して弟子となる。日朗はる〲と尋ね來る。安國論未だ鎌倉に採用されず、政道頽廢、衆生塗炭の苦しみの裡にある次第を述べ、互に世の味氣なさをかこつ。この時本間重遠、豫言の通り鎌倉に合戰起つたと報告する。日蓮は北條殿も遂には自分の言葉を信ずるやうになるであらうと喜ぶ。日朗は別れを惜しんで歸國の途につく。〔大詰〕（石和鵜飼得達場）鵜飼の勸作は殺生の報いで、成佛しない。日蓮は日朗・日興を同伴し、夜中その旅宿を尋ねて行き、これを救ひ教化する。（石和川畔）三人は小石に經文を書き記して河中へ投げると、勸作實は平時忠は姿を現はし、成佛した禮を述べる。甲州石和の鵜飼石の故事である。（甲州小室法論石場）小室山の慧長法印善智坊は、日蓮と勸進帳の問答に似た法論を行ふが、遂にその强固な信仰に感じて弟子となり日傳と名乘る。この時四條金吾が鎌倉殿の使者として到着。蒙古の軍勢調伏のため立正安國論が採用されたのである。日蓮は高らかに南無妙法蓮華經を稱へる。

【解說】能進は中村福助の人柄・藝格を考慮してこの作をなし、又福助も日蓮崇拜者として心身を傾倒し、鬘を使用せず地頭（ぢあたま）で登場したとさへ言ひ傳へられてゐる。それ故信者は勿論歌舞伎愛好の大衆にも好評を博し、全國的に巡業興行したと言ふ。併し脚本の文學的價値を檢討する時、これ等の事情は却つてそのまゝ非難の言葉に置き換へられる。即ち日蓮上人の一代記を全般的に餘りに平易に忠實に描寫しようとして、結局平板なる御事蹟の羅列に終つた。全篇を通じて、日蓮といふ雄渾なる精神力の表現が見られない。例證としては、日蓮の確乎とした信仰のために生起する奇蹟であるにも拘らず、逆說的に奇蹟のためにその偉大さを倍加するやうに誇張して表示されてゐる。併し明治初年の時勢に、書き卸された脚本である事を考慮に入れ、一面には元來宗教を題材とした脚本が成功し難いことを思へば、平板ではあるが忠實なる一代記を、從來の草雙紙趣味のものより蟬脫させて、脚色した作者の努力は認めてもよい。〔尾澤〕

日韓兩國語同系論（にっかんりやうこくごどうけいろん）

國語學　一册【著者】金澤庄三郎【成立・刊行】初め「東洋協會調査部學術報告」第一册（東洋協會編、明治四十二年七月刊）中に收められたが、後、多少字句に修正を加へ、英譯を添へて明治四十三年一月、三省堂より刊行。【內容】朝鮮語が國語と同一系統に屬し、而も國語の一分派たるに過ぎないこと、恰も琉球語と國語における同樣の關係にあると論じたものである。序說の外、第一章「音韻の比較」では、類形語を擧げて兩言語の音韻上の關係を論じ、第二章「語法の比較」では、體言・用言・助辭の三種に分けて、兩言語の語法上に見られる相似性を指摘してゐる。本書は一般人を對象として書いたものであつて、その態度記述に於て學術的と云ふわけにはいかない。

【解說】日鮮語同系論としては、一八七九年に發表されたW. G. Aston（別項）の「日鮮兩國語比較研究」（A Comparative Study of the Japanese and Korean Language. Journal of Royal Asiatic Society of Great Britain and Ireland, vol III Pt. XI.）といふ頗る卓見に富む研究があり、その外、白鳥庫吉博士は歷史上より、宮崎道三郎・中田薰の兩博士は法制上より兩國語同原說を唱へた。金澤博士の研究は、これ等の同系論を大成したものと云ふべく、本書のほかにも左のやうな同系論に關する著書が發表されてゐる。

○Über den Einflusz des Sanskrits auf das Japanische und Koreanische Schrift-system.（明治四十年刊）○國語の研究（明治四十三年刊。論文集であるが、國語と朝鮮語の比較研究に關するものが多い）○日鮮古代地名の研究（明治四十五年刊。獨譯を附載す）○日本文法新論（大正元年刊。朝鮮語・琉球語・アイヌ語と比較して國文法を說いてゐる）○言語の研究と古代の文化（大正二年刊。言語上より見た日鮮古代文化の研究。獨譯を附載す）○日鮮同祖論（昭和四年刊。主として歷史上より日鮮の關係を論じたもの）

併しながらこれ等の研究を以てしても未だ兩國語が同系語であると斷定的な證明がなされたとは云へないやうである。（國語・朝鮮語參照）

【附記】金澤博士には、日鮮同系論に關するもの以外の著述も多く、殊に「日本文法論」（明治三十六年刊）、「日語類解」（明治四十五年刊）、「國語學通論」（早稻田大學文學講義錄）、「言語に映じたる原人の思想」（大正九年刊、アイヌに關する研究）、「辭林」（明治四十四年刊）、「廣辭林」（大正十四年刊）等、注目すべきものがあり、その他數種の譯書もある。

【參考】明治大正國語學書目解說　土井忠生（岩波講座日本文學）〔岩淵〕

日記（にっき）「記錄」を見よ。

日記文學（にっきぶんがく）

【名義】日記は古くニキとよんだ。日記は元來日々の出來事又は體驗・感想等を日次を追うて記錄するもので、これに公的なものと、私的なものとがある。公的なものは、宮廷の日記（內記日記・殿上日記）と官廳の日記（外記日記・近衞府日記）との二種がある。私的なものは、漢文で書かれた廷臣の家記と、假名で書かれた文學的な日記との二種がある。文學史上で日記文學と呼ぶのは、私的な日記中の第二類に屬するものを指し、時代的には平安時代から鎌倉時代までが中心となつてゐる。【性質】日記文學の作品中には、「土佐日記」「更級日記」等の如く紀行の性質を有するものがあり、「篁日記」「平中日記」等の如く歌集の性質を有するものがあり、「和泉式部日記」「高光日記」等の如く物語の性質を有するものがある。日記・紀行・物語の三者は、その最初の形を私家集に發する場合が多く、著者も主人公とは別人であることが多い。從つて平安時代に於ては、これ等の形態がまだはつきりと分離獨立してゐないのである。その文學作品としての性質は、大體紀行文學・隨筆文學（各別項）と同樣である。【沿革】文學的な日記は平安朝中期の頃から現はれたが、それ等は多く女流によつてなされた。この女流の日記は、鎌倉時代に於てもあらはされたが、その頃から次第に衰頽して、多く紀行文學にその地位をゆづるやうになつた。室町期から近世にかけての主要な日記文學は、悉く紀行文學の名を以てよばるべきものである。【代表作】〔平安朝時代〕土佐日記○蜻蛉日記○和泉式部日記○紫式部日記○更級日記（各

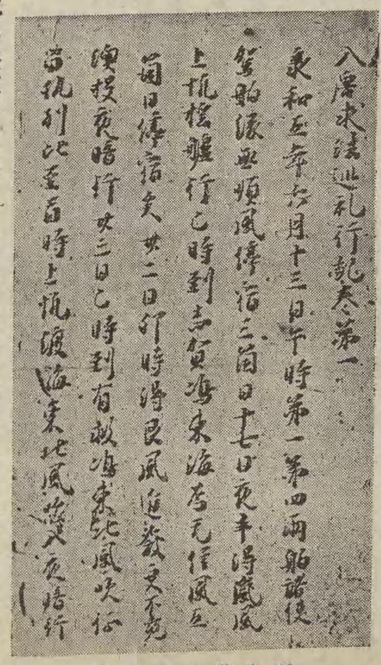
別項）○成尋阿闍梨母日記成尋阿闍梨母○讃岐典侍日記（別項）。〔鎌倉時代〕辨内侍日記○十六夜日記○東關紀行○海道記○中務内侍日記（各別項）。なほ室町時代以後の作品については紀行文學の項を參照。〔池田〕

日光（にっくわう）短歌雜誌　【刊行】大正十三年四月創刊、昭和二年十二月號に至る全三十九册發行、但し數回休刊　【編輯】同人幹部相互編輯の責に任じた。ただおのづからな統制は北原白秋が終始した。【同人】當初の同人は、石原純・今村沙人・萩原蘿月・土岐哀果・鎌田敬止・川田順・吉植庄亮・矢代東村・前田夕暮・古泉千樫・釋迢空・北原白秋・木下利玄・四海民藏・森園豐吉外二十一名。その後、各周圍の新人がこれに加はつた。【解説】歌壇に於ける小黨分立の弊を排し、明朗にして自由なる短歌人の大同團結を期した。世の謂ふ如く決して黨派的反アララギ運動なるものではなかつた。意圖する所は、各自に個々の稟質を重んじ、個々の表現を尚び、而も一大調和の中に個々の差別を美しむ友情の純正をも念つた。而も短歌の傳統としての形式律格は重んずべきであるが、その精神は常に詩としての豐醇なる美と新鮮なる香氣とを保ち、歌人臭を超脱すべしとした。のみならず眞の口語の發想法を研究し、文語としての完成形式に代るべき口語の短歌型、或は新短唱型の創造に向つても前進を開始した。白秋・夕暮・純の如きはそれである。又近代の詩文に就いても常に新風を志した。新俳句或は連俳の如きにも及んだ。同人全體が、よく藝術し、よく思索し、よく交歡した。ただ中期に於て利玄歿し、後期に千樫を失つた事は災厄であつた。廢刊は寧ろ同人增加のため結力の薄弱を來し、綺神の弛緩がこれに續いた故と思はれる。而も眞の更生を念じ、嚴正なる統制を計つたがために、却つて潔く解體したとも云へる。〔北原〕

日石（にっせき）俳人【姓名】井上莊二【別號】茶閑居【閲歷】明治十五年八月十七日、新潟縣北魚沼郡並柳村に生る。東京物理學校に學んだ。二十年近く芝浦製作所に勤めたが、日本工業協會に入つたり、平木白星（別項）の「文藝時報」に携はつたりしたことがある。俳句は明治二十九年頃舊派に學び、後新派に移り、大正三年、「石楠」（別項）創刊前より亞浪（別項）に參じ、操志一貫、石楠派の元老を以て推されてゐる。作は幾分新傾向の影響を受けた跡はあるが、次第に個我の光が現はれて、今は日石そのものが打出されてゐる。【著作】句集に「螢烏賊」がある。〔臼田〕

入唐求法巡禮行記（にったうぐはふじゅんらいかうき）　【著者】慈覺大師（圓仁）【名稱】日記　四卷　略して「入唐巡禮記」或は「巡禮行記」もしくは單に「巡禮記」とも云ふ。【諸本】著者自筆本は何時亡佚したか不明。現存の古鈔本に二種ある。東寺觀智院藏本と信州池田長田氏藏本とである。（一）東寺本は伏見天皇の正應四年に法印兼胤が「二位僧正寬圓本」を鈔寫したもの、今國寶である。兼胤は蓋し洛東長樂寺の住、寬圓は建暦時の叡山の僧らしい。兼胤の第四卷末奥書の前に「明德二年十月日、全部四帖感得了可レ喜々々」といふ法印賢寶の加筆から察するに、兼胤の筆寫後百年にして本書は長樂寺から東寺に轉傳したものらしい（この寫本の影印本が大正十五年十一月東洋文庫から岡田正之博士の手で解説一卷と共に頒行）。（二）池田本は「四明餘霞」（天台宗務廳發行）附錄本によつて按ずるに、信州佐久の天台宗津金寺法印長海が、文化二年二月十三日に比叡山飯室谷松禪院藏本を寫したもの。東寺本に比すれば頗る晩出の寫本ではあるが、誤脱遙かに少く却つて善本である。第二卷の公驗を請ふ狀を、東寺本は開成五年三月五日の條下と二月十七日の條下とに複出してゐるにも拘らず、池田本は然らざる所から推察するに、恐らく池田本の底本である松禪院本は、寬圓本及び東寺本とはその傳來の系統を異にしてゐるものと考へられる。但し東寺本・池田本、共に同一錯簡を繰返してゐる點から推定するに、これ等は極めて早くから存した錯簡であるらしく、察するに著者の手記を當初に寫した者の誤失であらう。こゝに注意すべきは、元來本書には、著者の手記原本そのものが既に有してゐたと考へらるゝ重複した記事のある事である。開成五年四月二十八日より五月十六日に至る五臺山入りの記事が、第二卷末と第三卷の初めとに複出し、而も行文頗る廣略の差違あるは即ちそれで、蓋し大師自ら推敲改作の後、なほ前稿を刪除しなかつた爲めであらう。以上二本の外、國書刊行會本（續々群書類從第十二輯所收）と、大日本佛教全書本（遊方傳叢書第一所收）とがある。前者は東寺本の史料編纂掛寫本を底本とした刊本の嚆矢であり、後者は主として東寺本に據りつつ池田本を以て補正したもので刊本中の最善本である。

【内容】慈覺大師（圓仁）は、仁明天皇承和二年に、入唐請益の詔を賜はり、五年進發、在唐約十年にして歸朝した。本書は在唐時に於ける實地見聞を書いた一大旅行日記。筆を承和五年六月十三日（唐文宗の開成三年）に起し、同十四年十二月十四日（唐宣宗の大中元年）に絶つてゐる。この間實に九年七ヶ月、その踏破した地域は今の江蘇・山東・河北・山西・河南・陝西・安徽の七省に跨つてゐる。一千年前に於けるこの種の日記體紀行文は、本邦は勿論これを東西に求むるも難いであらう。かくの如きの長文を飢餓窘促の間なほ不斷にものし續けた筆者の金剛心には驚嘆せざるを得ない。初め圓仁は承和二年入唐請益僧として留學僧圓載と共に遣唐使參議藤原常嗣に從つて進發、渡海の難によつて二回果さず、漸く同五年六月十三日博多から第三回の船途に就く事を得た。巡禮記はこゝから筆を起してゐる。七月二日九死に一生を得て、揚州海陵縣（今の江蘇省揚州府泰州）に着、長安に上る大使一行と別れて大師と圓載とは、暫時そこに逗つた。天台山（今の浙江省臺州府）國清寺に往くのが素願であるから其處への旅行免狀の下附を待つたのである。然るに圓載は許可狀を得たが、何故か彼には下らなかつた。已むなく翌六年三月歸國の途にある前の大使の船に乘じ、楚州（江蘇省淮安府山陽縣治）を發した。併し求法の初志到



東寺觀智院藏本

底艱ち難く、河南道海州東海縣（江蘇省東海州治）から從僧惟正・惟曉、及び水手の丁雄萬三人を從へて上陸、辭を設けて歷遊を試みようとした。併しこれも間もなく發覺し、雄圖空しく遣唐副使の第二船に護送せらるゝに至つた。彼は「空手覺ノ船但增歎息」と記してゐる。そして四月十八日、河南道登州府牟平縣（山東省登州府寧海州治）の南邊に到つた。そこは新羅國へ兩三日の處である（第一卷）。やがて船は海岸に沿うて北航し、登州文登縣赤山浦（山東省文登縣治）に波浪猛騰のため約一ヶ月餘も碇泊した。其處には赤山法花院と云ふ名刹があり、當時三十有餘の僧徒が居り、その中には日本僧七人も交つてゐた。そこで大師は赤山浦碇泊中屢々この寺を訪れたのであつたが、かくする中に、在唐求法の宿念また愈々である。十月十三日遽に入京すべき太政官符を得、竈門・住吉・香椎等の各神に轉經して渡海の願に報い、「十二月十四日午後南忠閣梨來」で、この長紀行日記の筆を擱いてゐる。

【價値】本邦人の支那への紀行文、もしくは日記には、（一）古くは「齊明紀」所引の伊吉博得・難波吉士男人のそれがあり、（二）天平勝寶元年進發の「大伴宿禰佐手麻呂記」（散佚）、（三）吉備眞備の「在唐日記」（今失、大日本佛教全書遊方傳叢書第四に、吉田兼好法師眞蹟の「吉備大臣入唐記繪詞」がある）があり、巡禮記の後には、（四）智證大師圓珍の「行曆記」（一に「在唐行歷記」、又は「在唐實錄」と云ふ。原本三卷といふも實は五卷と考へられる。今抄本一卷のみあり、佛教全書遊方傳叢書第一所收）、（五）平城天皇の皇子高岳親王の「眞如親王入唐記」一卷、（六）永觀元年入宋の「奝然法橋在唐日記」、もしくは「奝然巡禮記」海陸交通の地名、その狀景の精細なる描寫等眞に驚嘆に値するものがある。支那正史の闕漏すらをも補ふ事多く、かの赤山明神の信仰、六時禮讃、引聲念佛、日本聲明業等の起原形式の諸問題は皆本書に示されてゐ、また唐代譯場出入者の唯一日本人靈仙三藏の事蹟も亦こゝに關鍵が得られる。（記錄參照）

【參考】慈覺大師傳（史籍集覽第十二・續群書類從第八輯下）○慈覺大師入唐往返傳（佛教全書遊方傳叢書第一）○承和五年入唐求法目錄○慈覺大師在唐送進錄○入唐新求聖教目錄（佛教全書書籍目錄第二）○入唐諸家傳考　高楠順次郎（遊方傳第四）○慈覺大師の入唐紀行に就て　岡田正之（東洋學報一ノ四、二ノ二・三、三ノ一）○入唐求法巡禮行記解説　同上（東洋文庫論叢第七）○平安朝に於ける日記の研究　和田英松（日本文學講座）○日支交通史　木宮

ろ同人增加のため結力の薄弱を來し、精神の

き口語の短歌型、或は新短唱型の創造に向つても前進を開始した。白秋・夕暮・純の如きはそれである。又近代の詩文に就いても常に新風を志した。新俳句或は連俳の如きにも及んだ。同人全體が、よく藝術し、よく思索し、よく交歡した。ただ中期に於て利玄歿し、後期に千樫を失つた事は災厄であつた。廢刊は寧ろ同人增加のため結力の薄弱を來し、精神の

第四卷末奥書の前に「明德二年十月日、全部四帖感得了可レ喜々」といふ法印賢寶の加筆から察するに、兼胤の筆寫後百年にして本書は長樂寺から東寺に轉傳したものらしい(この寫本の影印本が大正十五年十一月東洋文庫から岡田正之博士の手で解說一卷と共に頒行)。(二)池田本は「四明餘霞」(天台宗務廳發行)附錄本によつて按ずるに、信州佐久の天台宗津金寺法印長海が、

と、大日本佛敎全書本(遊方傳叢書第一所收)とがある。前者は東寺本の史料編纂掛寫本を底本とした刊本の嚆矢であり、後者は主として東寺本に據りつつ池田本を以て補正したもので刊本中の最善本である。

【內容】慈覺大師(圓仁)は、仁明天皇承和二年に、入唐請益の詔を賜はり、五年進發、在唐約十年にして歸朝した。本書は在唐時に於ける

府泰州)に着、長安に上る大使一行と別れて大師と圓載とは、暫時そこに逗つた。天台山(今の浙江省台州府)國淸寺に往くのが素願であるから其處への旅行免狀の下附を待つたのである。然るに圓載は許可狀を得たが、何故か彼には下らなかつた。已むなく翌六年三月歸國の途にある前の大使の船に乘じ、楚州(江蘇省淮安府山陽縣治)を發した。併し求法の初志到

底斷ち難く、河南道海州東海縣(江蘇省東海州治)から從僧惟正・惟曉、及び水手の丁雄萬三人を從へて上陸、辭を設けて歷遊を試みようとした。併しこれも間もなく發覺し、雄圖空しく遣唐副使の第二船に護送せらるゝに至つた。彼は「空手駕レ船、但增二歎息一」と記してゐる。そして四月十八日、河南道登州府牟平縣(山東省登州府寧海州治)の南邊に到つた。そこは新羅國へ兩三日の處である(第一卷)。やがて船は海岸に沿うて北航し、登州文登縣赤山浦(山東省文登縣治)に波浪猛騰のため約一ケ月餘も碇泊した。其處には赤山法花院と云ふ名刹があり、當時三十有餘の僧徒が居り、その中には日本僧七人も交つてゐた。そこで大師は赤山浦碇泊中屢々この寺を訪れたのであつたが、かくする中に、在唐求法の宿念また愈々熾烈になり、遂に七月二十三日大使一行に訣別して赤山法花院に身を投じた。大師の本願はこれから順調になつた。卽ち偶々その寺にゐた新羅通事にして、平盧軍節度使兼登州軍事押衙の顯職にあつた張詠の好意によりて州の公驗を得、開成六年(皇紀一五六一)二月二十五日、五臺山巡禮の途に上つた。初めの天台山請益の素願を地理の便宜上變更したのであつた。淄州(山東省濟南府淄川縣治)、齊州(同上歷城縣治)を經て德州(同上陵縣治)に到り、貝州(河北省廣平府淸州縣治)、冀州(同省冀州治)、趙州(同省趙州治)を歷て、鎭州高唐縣(同省正定府高唐縣治)に入り、五月一日始めて五臺山の一なる中臺に着した。赤山發足以來四十四日、行程實に二千三百餘支里(第二卷)。大師の五臺參拜は正に五十餘日の長きに亙つた。その間彼は或は文殊の靈跡を洽く巡拜し、或は未傳の法寶を書寫して諸法式を修得した(かの聲明業に深き因由を有する引聲念佛又は六時禮讚の受法は、實にこの時にあると傳へられる)。七月一日、五臺の大衆に惜別しつつ長安に發足、かの靈仙三藏の遺跡を過ぎて、愈々二千餘里の巡歷に上つた。忻州(山西省忻州府治)に道をとり、太原に出で、西南に向つて龍門(絳州府河津縣の西)、臨晉(蒲州府臨晉縣治)から黃河を渡り、馮翊郡の朝邑(陝西省同州府朝邑縣治)、馮翊(同上大荔縣治)、華州の櫟陽(陝西省西安府臨潼縣の北五十里)から長安に着した。時に開成五年八月二十三日。資聖寺に留宿、或は屢々翻經院に出入し、或は元政・義眞・法全・寶月・宗頴等の諸碩德に謁して顯密二敎の法門を受學した。平安朝に盛行した所謂台密はこの際に全く準備せられたと云ひ得よう。翌八年(この年、會昌と改元)八月、歸朝を乞うたが果さなかつた(第三卷)。武宗の毀佛は、會昌五年に至つてその極に達したのを機會に漸く長安を出た。僧形を蓄髮平服に變へて河南府に路をとり、鄭州(開封府鄭州治)より汴州(同府祥符縣)に入り、泗州(安徽省泗州盱眙縣北一里)を經て揚州に出で、再び楚・海・密(山東省青州諸城縣治)、萊(同省萊州府掖縣)の諸州を過ぎ、因緣深い文登縣に着き、勾當新羅所に入つた。例の張詠はまた好意を示してくれた。併し種々の事情は、容易に歸航の便を得させず、荏苒會昌五年は過ぎて、六年も亦暮れ、焦躁無爲の裡に七年(正月中改元して大中元年となる)を迎へた。張詠は態々大師のために船を新造して種々配意して吳れたが、偶々日本行新羅船の登州界に寄泊することあり、そこで八月十五日剃髮再び緇服を着し、九月二日午時赤山浦を發航、對馬沖通過、平穩に博多西南能擧島下に着した。これ實に承和十四年(唐宣宗の大中元年)九月十七日の事である。十月十三日遂に入京すべきの太政官符を得、竈門・住吉・香椎等の各神に轉經して渡海の願に報い、「十二月十四日午後南忠闍梨來」で、この長紀行日記の筆を擱いてゐる。

【價値】本邦人の支那への紀行文、もしくは日記には、(一)古くは「齊明紀」所引の伊吉博得・難波吉士男人のそれがあり、(二)天平勝寶元年進發の「大伴宿禰佐手麻呂記」(散佚)、(三)吉備眞備の「在唐日記」(今失、大日本佛敎全書遊方傳叢書第四に、吉田兼好法師眞蹟の「吉備大臣入唐記繪詞」がある)があり、巡禮記の後には、(四)智證大師圓珍の「行曆記」(一に「在唐行歷記」、又は「在唐實錄」と云ふ。原本三卷といふも實は五卷と考へられる。今抄本一卷のみあり、佛敎全書遊方傳叢書第一所收)、(五)平城天皇の皇子高岳親王の「眞如親王入唐記」一卷、(六)永觀元年入宋の「奝然法橋在唐日記」、もしくは「奝然巡禮記」(今失)、(七)長保四年入宋の寂照(一作寂昭)「在唐日記」(今失)、(八)成尋の「參天台五臺山記」八卷(史籍集覽第二十六、遊方傳叢書第三所收、なほ同第四には成島稼堂の「刪補天台五臺山記」八卷、附錄一卷がある)、(九)室町期に瑞訢の「允澎入唐記」一卷(續史籍集覽第五十三所收)、(一〇)策彥の「初渡集」三卷「再渡集」二卷(遊方傳第四所收、なほ同傳入明諸要例第十四及び續史籍集覽第五十三所收の「策彥入唐記」は眞蹟の入明報告である。併しその內容頗る「初渡集」「再渡集」と異る)、(一一)建保五年入宋の松尾慶政の「證月上人渡唐日記」一卷(珍らしくも假名書である、史籍集覽第二十六、遊方傳第三參照)等がある。併しながらこの「巡禮行記」ほど巡歷區域の廣汎に、年月の長く、內容の實に雜多豐富なるものは一もない。佛敎記事の重要なるは勿論、これと並んで當時の渡唐事情・時事・職官・風俗は明瞭であり、海陸交通の地名、その狀景の精細なる描寫等眞に驚嘆に値するものがある。支那正史の闕漏すらをも補ふ事多く、かの赤山明神の信仰、六時禮讚、引聲念佛、日本聲明業等の起原形式の諸問題は皆本書に示されてゐ、また唐代譯場出入者の唯一日本人靈仙三藏の事蹟も亦こゝに關鍵が得られる。(記錄參照)

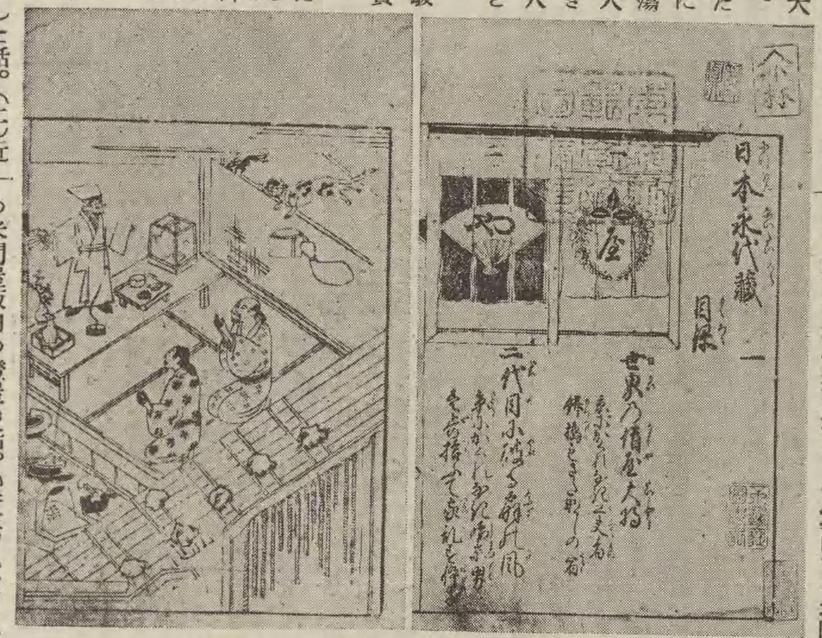
【參考】慈覺大師傳(史籍集覽第十二・續群書類從第八輯下)○慈覺大師入唐往返傳 樂部撰(佛敎全書遊方傳叢書第一)○承和五年入唐求法目錄○慈覺大師在唐送進錄○入唐新求聖敎目錄(佛敎全書書籍目錄第二)○入唐諸家傳考 高楠順次郎(遊方傳第四)○慈覺大師の入唐紀行に就て 岡田正之(東洋學報一一ノ四、一二ノ一・三、一三ノ一)○入唐求法巡禮行記解說 同上(東洋文庫論叢第七)○平安朝に於ける日記の研究 和田英松(日本文學講座)○日支交通史 木宮泰彥○山東省歷史地圖 大宮權平 〔福井(康)〕

日本永代藏 につぽんえいたいぐら 浮世草子 六册

【作者】井原西鶴【名稱】目錄と題簽には「日本永代藏」とあり、題簽の左下に小さく「大福新長者敎」とある。なほ卷一本文の首には「本朝永代藏」とある。【刊行】貞享五年(元祿と改元)。京江戶書林二條數屋町西村梅風軒、大阪書肆北御堂前森田庄太郎刊。【諸本】右の外に、奧附出版書肆の署名中に異同あるものが二種ある。又「大福新長者鑑」と改題し、舊板のまゝで二冊に合綴して、大阪の書肆文榮堂から出したものがある。なほ江戶版と稱せられるものがある。これは版式を異にし、舊版の漢字を假名に改め、各卷の章の順序をも變へてある。明治より今日に至るまでに刊行された西鶴全集・西鶴名作集の類には、大抵これを收めてある。日本古典全集・岩波文庫・改造

文庫中にもある。

【梗概】各巻五章の説話より成り、通じて三十説話。何れも町人の物質慾の生活に材を取つたものである。書名より見ても町人の致富に關して記さうとしたものと思はれるが、併し貧に關する話をも含んでゐる。〔巻一〕(一)泉州水間寺の貸錢を借りて大富を得た江戸商人網屋の話。(二)送葬の歸途に金を封じた手紙を拾ひて、これを遊興に費してから、身も財産も遊蕩に持ち壞した男の話。(三)大阪北濱米市場の筒落米を掃き集めて小錢を蓄へ、これを人に貸して利を得、遂に一子と共に大富を致した寡婦の話。(四)三井九郎右衞門が江戸駿河町の出店で、呉服物の切賣現銀賣を始めて繁昌した話。(五)亡夫に大借財を遺された寡婦が、家屋敷を賴母子の入札にて賣ることとし、入札料を一人四匁に定めた所、十二貫目の收入があつて、借銀を返してなほ七貫目殘した話。〔巻二〕(一)萬事に手堅く、節約を守る藤市といふ商人が、近所の若者共に節儉の教訓をした話。(二)近江大津の醬油屋喜平次といふ者、身代衰へてかつ〳〵に暮し、毎年の暮には七・八匁を遺してゐたが、或る年、落雷して鍋釜を破損し、これを買ひかへてより、毎年不足を生ずるやうになつた話。(三)放蕩のために親の勘當を受けた京の新六といふ男が、江戸に下つて手拭の切賣より始めて約十年の内に五千兩の富を得、笠大黒屋と人に知られるやうになつた話。(四)捕鯨の羽指より出世した源内といふ男、正月に西の宮惠比須に詣でて、生鯛を遠方に送る術を授かつて利を得た話。(五)諸國より集まる手代共の宿をして繁昌する北國一



日本永代藏（目錄・挿畫）

伏見の小質屋菊屋善藏、大和初瀨寺の戸帳の古錦襴の破損してゐるのに眼をつけ、信心と見せかけ、屢々開帳した末、新に寄進してその古錦襴を貰ひ受け、これを切賣して大利を得た話。(四)難波江の小島の伊豆屋破產し、借銀を殘して故郷に歸り、十七年後に大利を得て大阪に歸つたが、債主の知れない者があつたので、高野山に借錢塚を建てて冥福を祈つてやつた話。(五)駿河府中の呉服屋忠助は零落して、美貌の娘を日々町に出して指物竹細工を賣らせしに、この娘江戸の富人の眼に留り、嫁に貰はれたので、親も安樂の身となつた話。〔巻四〕(一)桔梗屋といふ染物屋、貧の僻み心より貧乏神を作りて年の首めに祭り、七日の夜夢枕に立つた神の託宣に任せ、紅染を工夫して富を得た話。(二)筑前博多の金屋某長崎丸山の遊女花鳥の許に遊び、その古筆屏風に眼をつけ、繁く通うて遂に貰ひ受け、これを大名に賣つて大利を得、その後花鳥を身請けして嫁がせた話。(三)伊勢參宮に二百貫の新錢を撒いて人を驚かせた江戸堺町邊の分銅屋某の話。(四)不正の商賣して一度は繁昌したが、後發狂して死んだ敦賀の茶屋利助の話。(五)堺の樋口屋某の家に或る夜更けて一文の酢を買ひに來た客があつたが、下男が面倒がつて賣らなかつたのを、翌日主人の諫めた話。〔巻五〕(一)長崎の貧しい町人が、苦心して金米糖の製法を工夫して富を作り、それより轉じて小間物店を開いて、一代に千貫目の財産を作つた話。(二)淀の鯉鮒を京に行商して次第に繁昌した鯉屋某の話と、その手代で小さき米屋を開き、現銀商して四五年は無事であつたが、西陣の絹織屋へ掛賣を始めてから、資金停滯して終に亡びた男の話。(三)大和の百姓九助といふ者諸々の發明に依りて富を作つたが、極めて質素を守り、死後の書置も財産全部を散らさず一子九之助に讓るとあつたが、九之助は父と違ひ、氣大きく、親類へも父の遺産を分つて褒められたが、後、遊蕩を極めて死んだ。所が死後の遺書は悉く借金の處置に關する事であつた。(四)常陸國の日暮し某といふ富者、多くの食客を置いてゐたが、浪人の取締嚴なるため悉く斷つた所、彼等の成行樣々であつた話。(五)美作國の富者萬屋某その子の嫁に妬心深き娘を貰つてやつた。そのため息子は初めは身持よかつたが、この妻京見物して京女を見習ひ嫉妬を止めたので、子息遊蕩を始めて家が衰へた話。〔巻六〕(一)敦賀に年越屋某といふ味噌醬油屋があつた。粗末な家に住み、質素にして繁昌したが、息子の代となり、家を立派に建て直した所が、田舍の顧客絶えて次第に衰へた話。(二)利口な小僧を養子にし、その養子の工夫から大に富むやうになつた者の話。(三)堺の小刀屋某、息子の重病を直した醫者に多額の禮金禮物を贈つた。その氣象で家が益々繁昌した話。(四)淀の與三右衞門といふ者五月雨の節、淀川に流出した漆の塊を拾ひ取つて大利を得、それから大富となつたが、後、驕奢に耽つて終に滅びた話。(五)京北山の三夫婦とて、祖父母より孫夫婦まで揃うてめでたく繁昌した家の話。

【批評】概して町人の勤勉・節儉・才智に由つて富を致した話を集め綴つたもので、時々教訓の言を繰り返し、別名を「大福新長者教」と題してゐる所に、本書執筆の態度に教訓的なもののあつたと知られる。この別名は寛永の刊本「長者教」に對して附けたものである。單に本書のみから、作者の人生觀を考へるならば、作者は人生はただ金錢のみ、富のみ、富を作るには手段はさして擇ぶ所でないとするにあるかに見えるが、これはただ作者が物慾生活の一面のみを見て、その角度から人生を描いた爲めで、決して彼の人生觀の全部を表はしたものでない事は、彼の好色本が彼の人生觀の全面を表はしてゐないのと同樣である。

【史的地位】本書は所謂町人物の源に立つものである。本書以前に金を主題とした文學なく、本書出でてよりこれに倣ふもの數部出でて、大に世に迎へられた。そこに本書の浮世草子史上に占むる重要な地位がある。

【註釋書】日本永代藏評釋佐藤鶴吉〇日本永代藏詳解岡田稔

日本王代記（にっぽんわうだいき）　淨瑠璃　五段

【藤村】

日本王代記

當る四王子、五瀨命・いなゝみの命・みけいりの命・やまと岩彦の命等は、わけ道の臣によつて輔佐せられ、今日しも、けしきの森に紅葉狩の折柄、かの二眷屬が現はれ、興を添へんとての霞を呼び、山に瀧を流しなどしたが、忽ち素性を看破られた。その一人の立齋は隙を窺つてみけいりの命を虛空に攫つて失せた。〔二段〕

速は空に息を吹いて黒雲を招き、劍を降らせて筑紫勢をひるませた。いなゝみの命は立齋に首を上げられ給うたが、その首は立齋の喉を喰ひ破つて空に飛び去つた。五瀨命は川串の矢に負傷されながら、彼を討つて退かれた。〔三段〕〔河内國芦野〕五瀨命は病重らせ給ひ、終に芦野の里に落命し給うたが、その折、骸は、はくしやと現はれて飛び去つた。〔八藏の翁住居〕岩彦の命は、道の臣一人に護られ、德人八藏の翁が許を訪ね給うた。古は富貴に榮えた翁も、今の貧困に當惑の折柄、數多の鼠が現はれ、導かれて藏を開けると、米や財寶が充ち滿ちてゐた。命には瓊速討伐の神勅が下つたので、天のひらかを以て押寄せたが、夜に入つて密に雷人が山を下つて城戸を破り、賊兵數多を殺戮した。〔寄手陣所〕翌朝これを知つた瓊速は、寄手の神通力と信じ、且つ調伏の祈によつて五體が利かぬため、運命を諦めて皇軍に降る。天皇はその罪を許し、自在天に歸らしめ給うた後、大和國に內裏を構へ、こゝに世を治め給ふ。

【構想】本曲は、修羅物として一見甚だ特異の作柄であるが、金平淨瑠璃（別項）の影響をうけた井上播磨掾の淨瑠璃としては、一の代表作といはるべきである。修羅物の見せ場は、武勇絶倫の金平或は金平式人物の出現にあつたが、本作に於ては、神通力の作用の下に、雲起り、劍降り、雲中に舟が現はれる等、超自然的な現象が反覆されて、人間的な金平淨瑠璃

授けられ給うた。〔荒雲の城〕皇軍は寡勢を以

約を守る藤市といふ商人が、近所の若者共に節儉の教訓をした話。〔二〕近江大津の醤油屋喜平次といふ者、身代衰へてかつ〳〵に暮し、毎年の暮には七・八匁を遣してゐたが、或る年、落雷して鍋釜を破損し、これを買ひかへてより、毎年不足を生ずるやうになつた話。〔三〕放蕩のために親の勘當を受けた京の新六といふ男が、江戸に下つて手

の米問屋坂田の鐙屋の話。〔巻三〕〔一〕江戸日本橋駿河町の辻より神田筋違橋まで毎日仕事歸りの大工等の落し行く木屑を拾うて箸を造り、次第に出世して材木問屋となつた箸屋甚兵衛の話。〔二〕京見物して京人の贅澤を知り、故郷豊後に歸りて驕りを極め、さしもの富豪もその一代に亡びた萬屋三彌の話。〔三〕

の誡めた話。〔巻五〕〔一〕長崎の貧しい町人が、苦心して金米糖の製法を工夫して富を作り、それより轉じて小間物店を開いて、一代に千貫目の財産を作つた話。〔二〕淀の鯉鮒を京に行商して次第に繁昌した鯉屋某の話と、その手代で小さき米屋を開き、現銀商して四五年は無事であつたが、西陣の絹織屋へ掛賣を始めてから、資金停滞して終に亡びた男の

後駿府に移つて終に滅びた話。〔五〕京北山の三夫婦とて、祖父母より孫夫婦まで揃うてめでたく繁昌した家の話。

【批評】概して町人の勤勉・節儉・才智に由つて富を致した話を集め綴つたもので、時々教訓の言を繰り返し、別名を「大福新長者教」と題してゐる所に、本書執筆の態度に教訓的なもののあつたと知られる。この別名は寛永の刊本「長者教」に對して附けたものである。單

に本書のみから、作者の人生觀を考へるならば、作者は人生はただ金錢のみ、富のみ、富を作るには手段はさして擇ぶ所でないとするにあるかに見えるが、これはただ作者が物慾生活の一面のみを見て、その角度から人生を描いた爲めで、決して彼の人生觀の全部を表はしたものでない事は、彼の好色本が彼の人生觀の全面を表はしてゐないのと同樣である。

【史的地位】本書は所謂町人物の源に立つものである。本書以前に金を主題とした文學なく、本書出でてよりこれに倣ふもの數部出でて、大に世に迎へられた。そこに本書の浮世草子史上に占むる重要な地位がある。

【註釋書】日本永代藏評釋佐藤鶴吉〇日本永代藏詳解岡田稔〔藤村〕

日本王代記（にっぽんわうだいき）

淨瑠璃　五段

【作者】未詳　【名稱】「王代記」は古代史の義か。名題の小書に「幷神武天皇のゆらひ」と記す。【成立】刊年と同時か。【刊行】延寶二年正月中旬、京八文字屋八左衞門刊【諸本】井上播磨掾正本八文字屋版、十七行十九丁繪入細字本。新群書類從第五所收【題材】神武天皇御東征の件であるが、脚色上、播磨掾の語り物たる「賴義金剛山合戰」等に負ふ所も少くないと思はれる。

【梗概】〔初段〕（大和川串のじんみやう館）川串は家富み配下多く、筑紫の天孫の威勢强きを聞き、神通力を以てこれを從へんと謀る。天に祈ると大なる星が一つ落ちて、やがて中から惡神の眷屬二人が現はれ、空に響きが起ると、天岩舟に乘つて惡神荒雲瓊速が天降つて來た。豫て筑紫攻めを思ひ立つてゐた折からとて、川串を部下とし、先づ先の眷屬二人を筑紫に遣はす。（筑紫けしきの森）天孫六代に當る四王子、五瀨命・いなゝみの命・みけいりの命・やまと岩彦の命等は、わけ道の臣によつて輔佐せられ、今日しも、けしきの森に紅葉狩の折柄、かの二眷屬が現はれ、興を添へんとて霞を呼び、山に瀧を流しなどしたが、忽ち素性を看破られた。その一人の立齋は隙を窺つてみけいりの命を虛空に攫つて失せた。〔二段〕

日本王代記（東京帝大圖書館藏）

速は空に息を吹いて黑雲を招き、劍を降らせて筑紫勢をひるませた。いなゝみの命は立齋に首を上げられ給うたが、その首は立齋の喉を喰ひ破つて空に飛び去つた。五瀨命は川串の矢に負傷されながら、彼を討つて退かれた。〔三段〕（河内國芦野）五瀨命は病重らせ給ひ、終に芦野の里に落命し給うたが、その折、骸は、はくしやと現はれて飛び去つた。（八藏の翁住居）岩彦の命は、道の臣一人に護られ、德人八藏の翁が許を訪ね給うた。古は富貴に榮えた翁も、今の貧困に當惑の折柄、數多の鼠が現はれ、導かれて藏を開けると、米や財寶が充ち滿ちてゐた。命には瓊速討伐の神勅が下つたので、天のひらかを以て諸神を祭り、祝詞をあげ給うた。〔四段〕（花園）翁の娘十六歳のてるひの前は、我が花園に遊ぶ時、命の彈き給ふ青海波の琴に心惹かされる。初め姫の訴へを斥けた命も、姫こそ實は日本の守護神であるとの神の告げにより、その夜姫の許に忍んで契を交はす。〔五段〕（荒雲館）瓊速は、筑紫勢の戰鬪準備を聞いて、天の藥力を遣はさうとしたが、八ツ目の烏が來て、藥力の頭を碎いた。瓊速は怒り念ずると、金色の鳶が現はれて烏と鬪ふ。今度は又、金色の鷲が飛び來つて鳶を突き殺した。（岩彦の命陣所）五瀨命が現はれて、勸めらるる儘に、岩彦の命は皇位について神武天皇と名乘り給ふ。更に五瀨命より大和征伐の麾を

（荒雲館）荒雲の面前に於て、みけいりの命は立齋のために兩腕をもがれ、首を刎ねられ給うたが、骸は忽ち烏と變じて飛び去つた。（大和千原の里）筑紫勢は攻め上つた。岩彦の命と道の臣とは女坂から、五瀨命といなゝみの命とは男坂から城に寄せる。激戰の最中に瓊

授けられ給うた。（荒雲の城）皇軍は寡勢を以て押寄せたが、夜に入つて密に雷人が山を下つて城戸を破り、賊兵數多を殺戮した。（寄手陣所）翌朝これを知つた瓊速は、寄手の神通力と信じ、且つ調伏の祈によつて五體が利かぬため、運命を諦めて皇軍に降る。天皇はその罪を許し、自在天に歸らしめ給うた後、大和國に內裏を構へ、こゝに世を治め給ふ。

【構想】本曲は、修羅物として一見甚だ特異の作柄であるが、金平淨瑠璃（別項）の影響をうけた井上播磨掾の淨瑠璃としては、一の代表作といはるべきである。修羅物の見せ場は、武勇絕倫の金平或は金平式人物の出現にあつたが、本作に於ては、神通力の作用の下に、雲起り、劍降り、雲中に舟が現はれる等、超自然的な現象が反覆されて、人間的な金平淨瑠璃とは、又甚だしく隔つた感がある。しかし山本角太夫の淨瑠璃としては審しからぬ作である。ただ題材を上代史に取つてゐるため、それ等の不可思議をも多少は尤もらしく思はせる點もある。筋は相當に史實傳說に據らうとした形跡があるが、寬文三年の播磨掾の語り物「賴義金剛山合戰」にも、かなり密接な交涉を持つかのやうである。皇軍の攻め方は甚だしく類似する所がある。てるひの前は、彼の彌生の前である。但し本曲四段目の岩彦の命とてるひの前との部分は、「淨瑠璃物語」から暗示された脚色であつて、美文を以て綴つた節事でもあり、修羅物の中に一の濡れ場を現じ得て、この點「金剛山合戰」より優る事數等である。三段目祝詞の條は節事として著名である。初段に紅葉狩を置いたのは、播磨掾正本の最古の一と言はれる「紅葉狩」の作以來、彼の正本には往々にして用ひられる趣向であ

る。かくて本曲が一通りの脚色から見て、濡れ場などあるにせよ、餘りに超人間的な修羅物であると考へられるが、この點は恐らく當時の觀衆からは、機巧應用の甚だ興味ある部分であつたのであらう。よつて以下に記す如き改作をも生んだのであらうと思ふ。各段に物の謂はれを記して、血祭りの初め也(二段)とか綴るのは、當時の假名草子等の影響であらう。

【影響】「大日本神道祕蜜(ママ)の卷」(小書に「付御月日待ゆらい」とある)。延寶三年正月、八文字屋八左衞門刊。繪入細字本。「日本王代記」の改作で、神武天皇が伊勢に內裏を定められて後、五瀨命の遺兒十八歲のひこてる親王が、北嶺の賊よかへりのしろぬしを退治する筋である。いなゝみの命第二の姬やすら姬が奪はれ、親王が僞はつて捕はれの間に、姬との戀が成就する等、岩彥の命對てるひの前の書き替へであるが、面白く綴られた部分もある。極端な超人間的の脚色が餘程減じてゐる點が認められる。所屬不明であるが、「日本王代記」の好評によつて、後日譚として書かれた事は想像される。○「神武天皇」(小書に「御月日待ゆらい」とある)。清水理太夫正本。延寶五年十二月、八文字屋八左衞門刊。繪入細字本。「大日本神道祕蜜の卷」と殆ど同じ作であるが、竹本義太夫が理太夫時代に、京に上つて四條河原に芝居を興行したと傳へるが、理太夫時代の唯一の現存正本と認められるもので、淨瑠璃史上意義深き作である。題簽に「大坂天王寺清水理太夫正本」とある。【守隨】

【參考】繪入淨瑠璃史水谷不倒○古淨瑠璃研究同上(日本文學講座)○稀覯本攷覽尾崎久彌

日本月蓋長者 にっぽんがいちやうじや 脚本 二幕五場 【作者】富永平兵衞 【名稱】作中の主要人物柏崎義勝が日本の月蓋長者と稱へられたといふによる。繪入狂言本の題簽には、小書に「如來の光貧女の一燈」とある。【刊行】繪入狂言本として、上演當時、正本屋九兵衞から刊行された。【興行】元祿七年夏か。京都萬太夫座上演。

【役割】柏崎義勝(柴崎林左衞門)、同弟主膳(櫻山林之介)、後室妙慶(小かん太郎次)、揚羽の前(霧波千壽)、直江團六(荒川十の右衞門)、熊谷一水(川上三郎左衞門)、中間八介(小佐川重右衞門)、敦賀のお長(松本兵藏)、佐五平(杉山勘左衞門)等。

【諸本】上記刊本の現存する外、元祿歌舞伎傑作集下卷所收【題材】古淨瑠璃として流行した「月界長者」をお家騷動化したものである。

【梗概】(序幕)(越後路)越後の岩本上人は、本堂建立の勸進に巡る途中、敦賀生れのお長が常燈明を上げんと申出た。契を交した舊主大野右衞門之介が、わが兄半太左衞門の双にかゝつたので、その髑髏を燈籠に收めて供養するのであつた。講中の熊谷一水はこれに感じて、お長をわが養女にする事とした。(國主柏崎館)柏崎義勝は如來堂建立のため上洛の支度をする所へ、養母の後室妙慶が、繼娘である奥方揚羽の前の不義成敗を勸める。かくとも知らぬ揚羽の前は料理人佐五平に變らぬ實意を明かし、義勝とは交つてをらぬと訴へたが、これが後室の眼にとまり捕へられる。義勝は後室を制して、元來姬は許婚の右衞門之介があつた身ゆゑ、大殿の甥として入聟とはなつたものの、義勝は義として揚羽の前に家を譲り出家せんとする本心を明かした。義勝は日本の月蓋長者であると人々が讃歎し、妙慶も改心を誓つた。後室を唆かして横領を謀つた直江團六が突然義勝を斬り倒した、と思つたが、實は如來が身代りになつてゐた。佐五平こと實は右衞門之介で、惡と見せた半太左衞門の忠節によつて密に救はれてゐたのである。(二幕)(川邊)揚羽の前が落ち延びて來たが、折からの洪水に難澁の所を中間八介の助けによつて川を越すことが出來た。やがて追つて來たのを團六と見て、八介實は半太左衞門と名乘つて斬り合つたが、多勢のために終に討たれる。(熊谷一水屋敷)養女お長に聟取りの支度のために、八百屋五兵衞が註文をうけて靑物を運び込んだが、五兵衞こそ以前お長と契つた右衞門之介がやつした姿なので、お長と出會つてその薄情を責めた。そこへ一水の歸宅に、隱れるために土用干の具足を着てしまふ。一水の本心は五兵衞を聟と決めたのであつたが、本人が居らぬため、已むを得ず別人に決めたのであつた。五兵衞が動き出す。一水の驚く間に五兵衞とお長は駈落する。(庵室)お長等が街道を辿つて來ると、庵室の中から揚羽の前が現はれて、半太左衞門を呼び出した。二人の影は五輪塔に見えた。惡人等の双にかゝつたことが始めて知れると、邊り一面は野と變り、二人の姿は消えて塔のみ現はれた。こゝへ團六等が駈けつけて、お長等は危く見えたが、五輪塔が動いて、惡人等はその石に打たれてしまふ。この不思議も如來のお蔭とお長等は祈念して歸國の途につく。

【構想】登場人物の種別から見ると、時代物でお家騷動を描いたものになるが、この形式は當代の通有性とも見るべきで、騷動の發頭人たる後室が忽ち改心し終る如き單純な惡の筋書に過ぎぬ。また岩本上人の勸進から筋を起し、時に不思議を示す事によつて、一種の宗教劇と見られぬでもないが、これは脚色の變化に妥當性を求める結果とも思はれ、主題の一たる日本の月蓋長者の意義を解說する手段とも考へられる。かゝる方面から眺める時は、本作の脚色を成功とは言はれまいが、右衞門之介に注目し、揚羽の前やお長をこれに配する時、初めて本作の價値が認められる。料理人佐五平と揚羽の前、八百屋五兵衞とお長、これ等は明るい濡れ場として成功し、爽快な輕口を叩かすために明朗な效果が得られた。この料理人や八百屋は、右衞門之介のやつし姿として說明されるのであるが、それ等を場面としては世話場と見るべきで、武士氣質は何處にも發見することは出來ぬ。即ち時代の主題に蔽はれた世話の脚色と見て、寧ろ成功の作と見るべきである。一場面として舞臺效果を最も高く上げたのは庵室の場であらう。瞬間的に舞臺裝置を變化さすことは、當時としては、かなり大膽な脚色といはねばならぬ。それだけに觀客は驚異の眼を睜つた事と想像される。平兵衞の作としては、彼の才のあらゆる方面が傾倒された點に於て傑作の一と思はれる。

【備考】淨瑠璃「月界長者」は、別名「善光寺本地」、寬文二年の版本もあり、古く流行した外、元祿の頃、山本土佐掾によつても語り弘められた。天竺ひしやり國の月界長者は、佛を信じて德の高い富人であつたが、寵愛の姬が重病で危くなつた時、佛の敎によつて彌陀如來を念じて救はれ、ために今まで邪慳な御臺も心機一轉して篤い佛の信仰者となり、閻浮提金を以て如來の像を鑄てこれを祈つた。姬は宣旨下つて后に上げられた。然るに獨て長者

一家に怨を懷くてつたい外道が帝の夢に菩薩となつて現はれ、帝に對する月界の危險を說いた。このために月界は牢に繫がれ、自害して果てる。併し長者は次の代に百濟國王として生れ、聖主の譽高くなつたが、一日、かの如來が現はれて、やがて日本に生るべきことを告げ、且つ尊像を日本に送れと示された。かくして如來の像は難波に着き、蘇我大臣によつて朝廷に祭られる。その後、守屋大臣がこの像を難波の浦に沈めたが、三十一年の後、信濃の本田善光が下洛の途、難波の浦で如來の像を獲、これを負ひ歸つて川中島に御堂を建て、安置して善光寺如來と崇めた。【守隨】

日本賢女鑑 にっぽんけんぢよかがみ 淨瑠璃 十一册 時代物 【作者】近松柳・近松松助 【名稱】作が二三日前から見えないので、一方ならず心配してゐる。それに加へて今日は、主の澤庵の歸りさへ遲いのである。所へ澤庵は鎧兜で立派に着飾つて歸つて來る。聞けばこの度都坂本方討伐のために、石山に出陣してゐる時政公の影武者に雇はれたが、敗軍となつて漸く逃げて來たのであつた。程なく時政が入來して澤庵に、坂本方の軍師佐々木高綱を捕へよと命ずる。その夕、突然幸作が歸つて來た。意外にも彼は高綱の影武者となつて働いてゐたのであつた。そして昨夕時政の影武者になつた舅を追ひ廻した高綱は、卽ち彼であつたのである。時に時政の家來が高綱の首を取つたと持つて來る。澤庵は早速實檢の役を仰付けられる。見るとそれは七年以前に勘當してゐる。妻の篝火は子供のやうにたわいない母親を看護したり、眞田紐を織つたりして忙しい。鎌倉方の軍師である高綱の兄盛綱は、或る日弟高綱を味方に附けるために修行者に姿を變へて泊り込む。勿論承知すべくもなく兄弟は遂に刀を抜く。時に今迄老耄を裝つてゐた母は、烏帽子を被り大紋を着て現はれ、軍書一卷を首桶に入れて盛綱に與へ、高綱の首に代へん事を賴む。そして自分は兄弟の門出の餞にとて自害する。母は雄々しくも軍法を論じ合ふ兄弟の勇しい姿を見て今更のやうに喜び死んで行く。【七册】略す。【八册】(天野木津守館)堅田に遠い山里に、鎌倉方の英雄天野木津守の館がある。敵坂本方の將三浦之助義村を繼する時政の娘時姬と、捕虜となつて、時政に怨を懷くてつたい外道が帝の夢に菩薩となつて現はれ、帝に對する月界の危險を說いた。このために月界は牢に繫がれ、自害して果てる。併し長者は次の代に百濟國王として生れ、聖主の譽高くなつたが、一日、かの如來が現はれて、やがて日本に生るべきことを告げ、且つ尊像を日本に送れと示された。かくして如來の像は難波に着き、蘇我大臣によつて朝廷に祭られる。その後、守屋大臣がこの像を難波の浦に沈めたが、三十一年の後、信濃の本田善光が下洛の途、難波の浦で如來の像を獲、これを負ひ歸つて川中島に御堂を建て、安置して善光寺如來と崇めた。【守隨】

日本賢女鑑 にっぽんけんぢよかがみ 淨瑠璃 十一册 時代物 【作者】近松柳・近松松助 【名稱】作が二三日前から見えないので、一方ならず心配してゐる。それに加へて今日は、主の澤庵の歸りさへ遲いのである。所へ澤庵は鎧兜で立派に着飾つて歸つて來る。聞けばこの度都坂本方討伐のために、石山に出陣してゐる時政公の影武者に雇はれたが、敗軍となつて漸く逃げて來たのであつた。程なく時政が入來して澤庵に、坂本方の軍師佐々木高綱を捕へよと命ずる。その夕、突然幸作が歸つて來た。意外にも彼は高綱の影武者となつて働いてゐたのであつた。そして昨夕時政の影武者になつた舅を追ひ廻した高綱は、卽ち彼であつたのである。時に時政の家來が高綱の首を取つたと持つて來る。澤庵は早速實檢の役を仰付けられる。見るとそれは七年以前に勘當してゐる。妻の篝火は子供のやうにたわいない母親を看護したり、眞田紐を織つたりして忙しい。鎌倉方の軍師である高綱の兄盛綱は、或る日弟高綱を味方に附けるために修行者に姿を變へて泊り込む。勿論承知すべくもなく兄弟は遂に刀を抜く。時に今迄老耄を裝つてゐた母は、烏帽子を被り大紋を着て現はれ、軍書一卷を首桶に入れて盛綱に與へ、高綱の首に代へん事を賴む。そして自分は兄弟の門出の餞にとて自害する。母は雄々しくも軍法を論じ合ふ兄弟の勇しい姿を見て今更のやうに喜び死んで行く。【七册】略す。【八册】(天野木津守館)堅田に遠い山里に、鎌倉方の英雄天野木津守の館がある。敵坂本方の將三浦之助義村を繼する時政の娘時姬と、捕虜となつて

へ入れさうもない。秀盛は內通の矢文に依つて砲火の向けられてゐる事を知り、やにはに宇治の方を抱いて奥の一間に逃れる。この時早くも大筒は坂本城に命中した。折柄造酒頭は顏を覆うて城中へ忍び込んで來る。妻の染の井と娘の住の江は、それと見て父の不忠を責める。住の江は餘りの口惜しさに自害して父を諫めるが、心までも腐つたか造酒頭は顧みようともしない。併し秀盛は既に造酒頭が腹を切つてゐる事を見破る。圖星を指されて此處に彼は宇治の方の人質の事も、彼が鎌倉へ降つた事も皆一時の方便であつた事を物語る。今又時政から大筒を射よと命ぜられ、早速矢文で知らせては置いたものの氣遣はしさに、自害した腹を卷いて忍び込んだのであつ

太夫が理太夫時代に、京に上つて四條河原に芝居を興行したと傳へるが、理太夫時代の唯一の現存正本と認められるもので、淨瑠璃史上意義深き作である。題簽に、「大坂天王寺清水理太夫正本」とある。

【參考】繪入淨瑠璃史 水谷不倒 ○古淨瑠璃研究 同上(日本文學講座) ○稀覯本攷覽 尾崎久彌

日本月蓋長者 にっぽんぐわつがいちやうじや 脚本 二

一家に怨を懷くてつたい外道が帝の夢に菩薩となつて現はれ、帝に對する月界の危險を說いた。このために月界は牢に繫がれ、自害して果てる。併し長者は次の代に百濟國王として生れ、聖主の譽高くなつたが、一日、かの如來が現はれて、やがて日本に生るべきことを告げ、且つ尊像を日本に送れと示された。かくして如來の像は難波に着き、蘇我大臣によつて朝廷に祭られる。その後、守屋大臣がこの像を難波の浦に沈めたが、三十一年の後、信濃の本田善光が下洛の途、難波の浦で如來の像を獲、これを負ひ歸つて川中島に御堂を建て、安置して善光寺如來と崇めた。〔守隨〕

日本賢女鑑 にっぽんけんぢよかがみ 淨瑠璃 十一册 時代物 【作者】近松柳・近松松助 【名稱】十册目切、宇治の方が本心を明かす條に、その貞節を賞して、「曇らぬ操日の本の賢女の鑑と云つべし」とある。【興行】寛政六年十月十三日初日。座本豐竹此母、名代豐竹此太夫(北堀江座) 【題材】大阪落城の事を鎌倉時代に移して脚色したものである。

【梗概】〔一册〕(東大寺供養) 都坂本方では、亡君賴朝公の御法事を東大寺で施行したが、計らずもこれが我が儘の振舞として鎌倉にある將軍北條時政の咎むる所となつた。〔二册〕(鎌倉御所) 坂本方の老臣片岡造酒頭は、遙々鎌倉まで事の辯明に下つて、時政の詰問に會ふ。亡君賴朝の愛妾宇治の方放埒の件に關しては、現に良人を奪はれた幾多の百姓町人共が訴訟して來るので、さすがに言譯に窮した。かくて造酒頭は已むなく、宇治の方を鎌倉へ下すことを約し、自分は寢返つて時政の臣となる。〔三册〕略す。〔四册〕(澤庵住ひ) 近江堅田村の口利きである澤庵の家では、婿の幸作が二三日前から見えないので、一方ならず心配してゐる。それに加へて今日は、主の澤庵の歸りさへ遲いのである。所へ澤庵は鎧兜で立派に着飾つて歸つて來る。聞けばこの度都坂本方討伐のために、石山に出陣してゐる時政公の影武者に雇はれたが、敗軍となつて漸く逃げて來たのであつた。程なく時政が入來して澤庵に、坂本方の軍師佐々木高綱を捕へよと命ずる。その夕、突然幸作が歸つて來た。意外にも彼は高綱の影武者となつて働いてゐたのであつた。そして昨夕時政の影武者になつた舅を追ひ廻した高綱は、即ち彼であつたのである。時に時政の家來が高綱の首を取つたと持つて來る。澤庵は早速實檢の役を仰付けられる。見るとそれは七年以前に勘當した倅藤三郎の首である。藤三郎も影武者の役に立つたのである。併し澤庵は言下に僞首と云ひ放つ。すると駕籠昇に身をやつしてゐた坂本方の勇者和田兵衞秀盛が、婿幸作の首を高綱の首に代へて持つて來る。倅の手柄は云ひ消した澤庵も、婿の首は役に立つべき義理に責められた。正しく高綱の首と云ふので時政は喜んで歸つて行く。後に澤庵は藤三郎の首を抱いて歎く。先から事の始終を覗つてゐた坂本方の勇者結城隼人之助は、一間の内より現はれて澤庵の功を賞める。折柄和田兵衞秀盛は取つて返し、僞首が現はれてこの家も動ぜず、用意の狼烟を擧げると、忽ち所々の樋の口から水が溢れ、邊りは直ちに湯々たる湖となつた。時政は小舟に乘り、秀盛の强弓をも免れて武運强くも落ちて行く。〔五册〕略す。〔六册〕(次郎作住ひ) 坂本の軍師佐々木高綱は、百姓次郎作となつて比良の邊りに隱れてゐる。妻の篝火は子供のやうにたわいない母親を看護したり、眞田紐を織つたりして忙しい。鎌倉方の軍師である高綱の兄盛綱は、或る日弟高綱を味方に附けるために修行者に姿を變へて泊り込む。勿論承知すべくもなく兄弟は遂に刀を抜く。時に今迄老耄を裝つてゐた母は、烏帽子を被り大紋を着て現はれ、軍書一卷を首桶に入れて盛綱に與へ、高綱の首に代へん事を賴む。そして自分は兄弟の門出の餞にとて自害する。母は雄々しくも軍法を論じ合ふ兄弟の勇しい姿を見て今更のやうに喜び死んで行く。〔七册〕略す。〔八册〕(天野木津守館) 堅田に遠い山里に、鎌倉方の英雄天野木津守の館がある。敵坂本方の將三浦之助義村を戀する時政の娘時姬と、捕虜となつた坂本方の公達公曉丸とは、同じくこの家に預けられてゐる。今日は早や二人の首を討つべく、檢使として富田六郎が入來した。かくあらんと察した結城隼人之助は、木津守の娘である妻の漣に命じて、自分の二人の子供を身代りにするやうに連れて行かせる。剛氣な木津守は事もなく撥ね除けて、娘漣までも勘當してしまふ。母の苦境に同情した弟小市郎は、可憐にも切腹して祖父に哀訴する。併し木津守は檢使富田六郎を氣遣つて、かくつれなくするのであつた。和田兵衞秀盛の亂入に驚いて富田が歸つて後は、姉弟の者を身代りに立てて、人目も憚らずその死を悲しみ歎く。そして忍び込んだ隼人之助・三浦之助兩人に、死骸として公曉丸と時姬とを與へる。〔九册〕略す。〔十册〕(坂本城中) 宇治の方は城外の亂戰をも顧みず、大廣間に廓の樣子を寫し、自ら大盡になつて戲れ遊んでゐる。秀盛の妻楯の戶が眞心籠めて諫言をしても、一向に耳へ入れさうもない。秀盛は內通の矢文に依つて砲火の向けられてゐる事を知り、やにはに宇治の方を抱いて奥の一間に逃れる。この時早くも大筒は坂本城に命中した。折柄造酒頭は顏を覆うて城中へ忍び込んで來る。妻の染の井と娘の住の江は、それと見て父の不忠を責める。住の江は餘りの口惜しさに自害して父を諫めるが、心までも腐つたか造酒頭は顧みようともしない。併し秀盛は既に造酒頭が腹を切つてゐる事を見破る。圖星を指されて此處に彼は宇治の方の人質の事も、彼が鎌倉へ降つた事も皆一時の方便であつた事を物語る。今又時政から大筒を射よと命ぜられ、早速矢文で知らせては置いたものの氣遣はしさに、自害した腹を卷いて忍び込んだのであつた。かくと聞いて染の井は今更に娘の死を悔む。造酒頭の誠忠に動かされた宇治の方は、肌に離さぬ亡君の位牌を示しつつ、今迄の放埒も全く敵を欺くためと、又內通者を探るために外ならなかつたと、初めてその本心を明かす。かくて造酒頭はせめてもの償ひにと、敵陣で奪つた源氏の白旗を殘して我と我が首を斷つて死ぬ。〔十一册〕(石山陣所) 禁廷の御執成しに依つて一時和議が成立したので、三浦之助義村は使者として時政の陣へ向ふ。三浦之助が怖めず臆せず對面してゐる時、俄然砲聲が響いて時政は倒れてしまふ。鐵砲の主は佐々木四郎高綱である。併し殘念にも殺したのは身代りであつた。再び本當の時政が現はれ、事は侯人共の讒言に起るとして、此處に兩軍は目出度く相和する事となつた。

【解說】本作は、近松柳が立作者となつて未だ間もなく、彼としては最も氣力のあつた時期に作られたものであるが、遺憾ながら衰退期

意を明かし、義勝とは交つてをらぬと訴へたが、これが後室の眼にとまり捕へられる。義勝は後室を制して、元來姬は許婚の右衞門之介があつた身ゆゑ、大殿の甥として入聟とはなつたものの、義勝は義として揚羽の前に家を讓り出家せんとする本心を明かした。義勝は日本の月蓋長者であると人々が讃歎し、妙慶も改心を誓つた。後室を唆かして橫領を謀て、惡人等はその石に打たれてしまふ。この不思議も如來のお蔭とお長等は祈念して歸國の途につく。

【構想】登場人物の種別から見ると、時代物でお家騷動を描いたものになるが、この形式は當代の通有性とも見るべきで、騷動の發頭人たる後室が忽ち改心し終る如き單純な惡の筋書に過ぎぬ。また岩本上人の勸進から筋を起

地に寶文二年の版本もあり、古く流行した外、元祿の頃、山本土佐掾によつても語り弘められた。天竺ひしやり國の月界長者は、佛を信じて德の高い富人であつたが、寵愛の姬が重病で危くなつた時、佛の敎によつて彌陀如來を念じて救はれ、ために今まで邪慳な御臺も心機一轉して篤い佛の信仰者となり、閻浮提金を以て如來の像を鑄てこれを祈つた。姬は宣旨下つて后に上げられた。然るに豫て長者

の作品としての諸缺點を多分に持つてゐる。語物の本質を離れて歌舞伎的見せ場の多い脚色をしてゐる事、從つて徒らに煩瑣で筋がすなほに發展してゐない事、詞章に精彩のない事等がそれである。いふ迄もなく同じ題材を扱つた先行諸作の影響に成るもので、獨創的部分は極めて少い。今近い頃の作品を擧げれば、「義經腰越狀」(寶曆四年七月二十九日初日、豐竹座)、「近江源氏先陣館」(別項)、「近江源氏躄講釋」(歌舞伎。安永元年三月二十一日初日、大阪中の芝居。市山助五郎座、「鎌倉三代記」(別項)等である。本曲の山は四・八・十等の段で三・五・七・九等の各段は極く短く殆ど不必要に近いものである。併しながらこの作は以後屢々上演され、殊に常に全曲を通じて語られてゐる。思ふに當時に於ける作品の缺乏がさうさせたのであらう。同じ題材を扱つた後の作に、柳が添削をした「鴻湖高名硯」(寬政十二年十二月、道頓堀東の芝居。座本豐竹諏訪太夫)がある。

【參考】近世邦樂年表(義太夫節之部)　【鶴見】

新渡戸稻造　にとべいねぞう　學者・評論家　【生歿】文久三年八月三日、盛岡市に生れ、昭和八年十月十五日歿。享年七十二　【閱歷】新渡戸博の次男。その祖父傳は維新前藩命を奉じて、廣漠無邊とも云ふべき三本木野の開拓に從事し、獨力數百戸の耕作地を南部領内に作つて、貢獻する所があつた。さうした傑物の血を享けた彼は、夙に志を立てて上京し、最初、築地邊の學校で英語を學んだが、後、藩の設立した共慣義塾に移つた。學問漸く進むに及び、當時の大學豫備門といはれた外國語學校に入つて法律を學び、次いで札幌農學校に入り、明治十四年卒業した。十七年、アメリカに遊學、ジョンス・ホプキンス大學に入り、

新渡戸稻造

更にドイツに轉じ、ハレ、ベルリン各大學で農政農學經濟を專攻し、二十三年歸朝した。直ちに母校札幌農學校教授に任ぜられ、北海道廳技師をも兼ねた。在職八年、再びアメリカに遊び、フランスを經て三十四年歸朝したが、この前後農學博士の學位を受け、また英文「武士道」を著はして、日本主義的精神を表現した。彼が思想家として認められたのはこの書による。三十六年京都法科大學敎授となり、三十九年、法學博士の學位を授けられ、第一高等學校長となつた。その他、曾て後藤新平の幕賓となり、また「實業之日本」に執筆し、廣く世に名を馳せた。大正九年、國際聯盟事務局次長として海外に赴き、その重任を全うして歸朝、大正十五年、貴族院議員に勅選された。「實業之日本」に筆を執り、大毎・東日並に英文東京日日の顧問として、老來、意氣益々旺盛であつたが、昭和八年、バンフの太平洋會議に出席、その歸途、カナダのヴィクトリアに客死した。【著書】前記「武士道」の外に、「世渡りの道」「修養」「歸雁の蔦」「フアウスト物語」「農業本論」「自警」「隨想錄」等がある。　【高須】

瓊々杵尊　ににぎのみこと　神話　【名稱】邇々藝命とも書く。火・天津彦彦火・天津彦根火・天津彦國光彦火・天國饒石彦火・天饒石國饒石天津彦火(以上日本書紀)、番能・日子番能・天津日子番能・天邇岐志國邇岐志天津日高日子番能(以上古事記)など、この神くらゐ多くの美稱若しくは尊稱を冠する例は他にない。そこに古代日本民族のこの神に對する心持が酌取られる。「ひこ」は日子、「あまつひたか」は天日の空の眞秀に高く輝く意、「あめにぎし」「くににぎし」「あめくににぎし」等の「にぎし」は饒の義で、天地の榮え行く意、「ほのににぎ」は穗之丹饒で、稻穗の饒々しく實る意とする舊說(古事記傳・稜威道別)、「ほ」は秀の義、「あまつひたか」、若しくは「あまつひこ」は天孫の意、「ににぎ」は豐滿の德を表はすといふ新說(日本古語大辭典)など、名の義についてさまざまの解釋があるが、一長一短容易に確說となし難い。【系統】天照大御神の孫、天之忍穗耳命の末子、そして外祖父が高皇產靈神であるといふことに、多くの意味が含まれてゐると思ふ。

【神話梗概】大國主命の服從によつて、葦原中國が平治したので、瓊々杵尊が天照大御神の命により、神器を受け五伴緖を從へてこの國土に降臨することになつた。途中天之八衢で猿田彦神が待ち迎へてゐたのを、天鈿女命が懷柔して日向の高千穗峰に降りましたが、吾田長屋笠狹之碕(笠沙之御前)に到ると、大山祇神(大山津見神)が、その二女磐長姬(石長比賣)及び木花開耶姬(木花之佐久耶毘賣)を奉つたが、尊は醜い姉を還して麗しい妹だけを留めたので、大山祇神が大に恥ぢ歎いて、二女を並べ奉つたのは、天神の御子の命の長久なること岩の如く、榮えますこと木の花の如かれと呪誓してのことであつた。今尊が磐長姬を返して木花開耶姬だけをお留めになつたので、天神の御子の命は木の花のやうに脆く凋落するであらうと云つた。かくて今に至るまで天皇命等の實壽が長くないのである。次いで尊に婚ひした木花開耶姬は、一夜で身重になつたのでその由を申すと、尊はこれを信じないで、そはわが子ではあるまい。他し國神の子であらうと云ふ。姬は恨み忿つて、わが姙んだ子が國神の子ならば必ず燒け滅びるであらう。もし實に天孫の御子ならば、火も害ふことが出來ぬであらうと呪誓し、戶のない室を造つて、その中に籠つて火を放つた。そして火の照り輝く時に生れたのが火明命(火照命)、火が盛んに燃え立つ時に生れたのが火進命(火闌降・火須勢理命)、火が衰へ鎭まる時に生れたのが火折尊(火遠理命)である。

【解說】天孫降臨の神話は、これを全構成から云へば、高天原系神話圈と筑紫系神話圈(各別項)とを結合する楔子の役をなしてゐる點、民族移住の文化史實を示唆する點、「記紀」に隱見してゐる多くの氏族の天降り說の總括擴充である點等によつて、先づ吾人の注意を惹く。更に說話の細部について云へば、國土統治の大任を負うたものが末子であることは、末子相續制(Ultimogeniture)が古代日本の家族制の一つであつた事の反映である。瓊々杵尊が授かつた神器の數及び種類に關しては、「古事記」「日本書紀」「古語拾遺」等の記述に著しい異同があり、その中の何れが本來天日嗣のしるし、若しくは神寶であつたかに關しても、解釋が區々であるが、要するに發生的には鏡・劍・玉等に一種の神祕的勢能、若しくは呪力を認めた民間信仰の高貴化であらう。尊の隨從者たちの編成とその職能とは、古代日本に於ける國家統治組織を反映してゐる。そこには君主の統治法としての祭祀と、政治との融合の精神が閃いてゐる。隨從の神々について異說が多いのは、恐らく後代文化に於て宗

敎・政治に與つた中臣・忌部や軍事を掌つた大伴・久米等が、自己の祖先を古くし偉大にしようとする欲求に基いた添加作用の致すところであらう。紀の一書に天照大御神が「以二吾高天原所御齋庭之穗一、亦當二御於吾兒一」と仰せたとあるのも、政治と祖先崇拜と古代日本の生活經濟の重心としての農耕との關係、並に新嘗祭にその片鱗を見せてゐる君主の生命、靈魂と稻の精靈との感應的關係を示唆するものとして注目に價する。降臨地については、日向之高千穗之久士布流多氣(記)・日向襲之高千穗峯(紀本文)・日向高千穗槵觸之峯・日向槵日高千穗之峯・日向襲之高千穗槵日二上峯・日向襲之高千穗添山峯(以上紀一書)とあり、これ

その女を天孫に奉つた史實を機緣として命數若しくは死に關する起原說明說話が、そこに誘導せられ、從つてその民間說話の或る女性が、大山祇神の二女と同一化して天孫と關係を生ずるに至つたのであらう。木花開耶姬が火中で子を產むといふ筋は、神明に誓つて事の虛實を定める盟神探湯式の觀想、若しくは邪氣を恐れて出產の時庭燎を焚き、產後に產屋を燒き棄てた古俗の反映であるとする從來の解釋から一歩を進めて、人の子の出生に對する火の神祕的勢能の觀念を、考の中に入れなくてはならぬ。古代日本民族は火と水とにさうした勢能を觀じたのであつた。「をち水」の信仰等はこれを證示してゐる。

【參考】日本建國神話之研究辻春緖○古事記新

まで知らなかつた情愛を初めて味はつて、われにもあらず松本が慕はしく、一月ほど馴染を重ねてゐるうちには、もう夢にも現にも戀しい人が忘れられない身になつた。しかし或る夜の寢物語に五六日は忙しくて來られぬと云つて別れてから、松本は十日經つても半月經つても姿を見せなかつた。今日は今日はと待ち焦れるお藤は、遂に戀病ひの床に日毎に痩せてゆく有樣に、母親は心を痛めて松本の住居で聞き質せば、會社の用で北海道へ行つたとのことだつた。そして浮氣で女を弄んだ松本が旅から歸つて、お藤の眞實心を知つて駈けつけた時は、この可憐なお藤は、旦那を思つて焦れ死をした後だつた。「むき玉子」六年も巴里で修業して來た畫家大久保蘭谿は、

使になつて留まつてゐた。共進會に出品した裸體畫は凄じい大評判だつたが、蘭谿の舊藩主の老公まで、畫室に駕を枉げてモデルを見に來た上、お妾にとの所望に、それは親許で破談にした。お喜代の情思はいよ〳〵募るばかり、またそれを蘭谿も曉らずにはゐられなかつた。やがて出品畫が金牌を受けたよろこびの裡に、蘭谿とお喜代の結婚式が目出度く擧げられた。

【批評】二作共に、同型の處女の心事をこまごまと寫し出してある。堅氣の親に淨く育てられた內氣な純情の美しい娘が、貧しさ故に親を思つてつらい悲しい世渡りに身を投ずるまでが同じである。妾となつたお藤が男戀ひしく憐れにも焦れ死にをするのと、お喜代が愛

教・政治に與つた中臣・忌部や軍事を掌つた大伴・久米等が、自己の祖先を古くし偉大にしようとする欲求に基いた添加作用の致すところであらう。紀の一書に天照大御神が「以ㇾ吾高天原所御齋庭之穗、亦當ㇾ御於吾兒」と仰せたとあるのも、政治と祖先崇拜と古代日本の生活經濟の重心としての農耕との關係、並に新嘗祭にその片鱗を見せてゐる君主の生命、靈魂と稻の精靈との感應的關係を示唆するものとして注目に價する。降臨地については、日向之高千穗之久士布流多氣（記）・日向襲之高千穗槵觸之峯・日向槵日高千穗之峯・日向襲之高千穗槵日二上峯・日向襲之高千穗添山峯（以上紀一書）とあり、これ等の地の所在及び地名の意義についても、さまざまの解釋があるが、神話の解釋としては、天地間の道程といふ感じ、天降りを字義通りに觀じた古代人の考へ方、異民族との爭鬪を顧慮することの結果としての高地棲住、神靈が高きに降るといふ信仰からの山上の祭祀等の古俗を示唆することを指摘すれば足りるであらう。天孫・磐長姫・木花開耶姫の神話は、命數に關する若しくは死に關する一種の起原說明說話の形相を呈してゐるが、本來は天孫及び大山祇族とは關係のない別個の民間說話であつたらしい。紀の本文に、この事件が全く見えてゐないといふ事實は、この點から云つて頗る注目に價する。また紀一書に、磐長姫の斥けられたことが、普く蒼生の命の短くなつた原因であるとせられてゐるが、これが民間說話としての原形で、天皇命等の齋壽のみを問題にするに至つたのは、這般の民間說話が天孫に結びついた結果であらう。切言すれば、吾田（阿多）の土豪としての大山祇神が、その女を天孫に奉つた史實を機緣として命數若しくは死に關する起原說明說話が、そこに誘導せられ、從つてその民間說話の或る女性が、大山祇神の二女と同一化して天孫と關係を生ずるに至つたのであらう。木花開耶姫が火中で子を產むといふ筋は、神明に誓つて事の虛實を定める盟神探湯式の觀想、若しくは邪氣を恐れて出產の時庭燎を焚き、產後に產屋を燒き棄てた古俗の反映であるとする從來の解釋から一歩を進めて、人の子の出生に對する火の神祕的勢能の觀念を、考の中に入れなくてはならぬ。古代日本民族は火と水とにさうした勢能を觀じたのであつた。「をち水」の信仰等はこれを證示してゐる。

【參考】日本建國神話之研究辻春緖〇古事記新講次田潤〇人類學より見たる我が上代の文化鳥居龍藏〇神話學論考松村武雄〇神代史の研究津田左右吉〇日本古代史安藤正次〇古代研究（第一部民俗學篇）折口信夫〇古傳說上の高千穗峯喜田貞吉（歷史地理三〇ノ四）〔松村〕

二人女　ににんをんな　小說集

【作者】尾崎紅葉

【刊行】「おぼろ舟」明治二十三年三月、讀賣新聞連載。「むき玉子」明治二十四年一月、讀賣新聞連載。二作を合せ、單行本として明治二十五年二月刊行。紅葉全集第二卷所收。

【梗概】「おぼろ舟」舊幕の頃には旗本だつた父に死なれてから、母と二人のお藤の家は、その日の暮しにも困るやうになつた。どこから金のはひる途もないので、糊口の料はわが身を賣つて得るより外なくなつた。せめては一人の旦那を守ればよいといふ妾の口を求めて口入屋で目見得をしたら、相手の松本が即座に世話しようと話がきまつて、母子の住ひへ通つて來ることになつた。お藤は十八の今まで知らなかつた情愛を初めて味はつて、われにもあらず松本が慕はしく、一月ほど馴染を重ねてゐるうちには、もう夢にも現にも戀しい人が忘れられない身になつた。しかし或る夜の寢物語に五六日は忙しくて來られぬと云つて別れてから、松本は十日經つても半月經つても姿を見せなかつた。今日は今日はと待ち焦れるお藤は、遂に戀病ひの床に日毎に痩せてゆく有樣に、母親は心を痛めて松本の住居で聞き質せば、會社の用で北海道へ行つたとのことだつた。そして浮氣で女を弄んだ松本が旅から歸つて、お藤の眞實心を知つて駈けつけた時は、この可憐なお藤は、旦那を思つて焦れ死をした後だつた。「むき玉子」六年も巴里で修業して來た畫家大久保蘭谿は、歸朝後四年になるけれども、會心の作品を得ないからとて何一つ世に示さなかつたが、弟子の蘭山に來年の大共進會までに是非逸品を仕上げてくれと勸められてその氣になつた。或る夕方散步の途上、垣根ごしに若い女の行水する立姿を見て、これこそ好圖案と制作にとりかゝつた。併し思ふやうに描き得ないため苦慮してゐると、蘭山はいゝモデルでもあつたらと豫て目をつけて置いたお喜代の兩親へ交涉した。身を切らるゝ程の貧しさにあるお喜代は、過分の報酬に家のためと承諾はしたが、たとひ身を汚されぬまでも人目に肌をさらすことの淺ましさ恥しさに、畫室が地獄のやうに思はれた。併し溫和閑雅な美男の主人にやさしく說きすかされて、雪一團の裸身でモデル臺に立つことになつた。「後篇むき玉子」三十日餘、モデルとなつてこの家に暮してゐるうちに、お喜代はおのづと敬慕の情を主人に寄せるやうになり、役が濟んでも小間使になつて留まつてゐた。共進會に出品した裸體畫は凄じい大評判だつたが、蘭谿の舊藩主の老公まで、畫室に駕を枉げてモデルを見に來た上、お妾にとの所望に、それは親許で破談にした。お喜代の情思はいよ〳〵募るばかり、またそれを蘭谿も曉らずにはゐられなかつた。やがて出品畫が金牌を受けたよろこびの裡に、蘭谿とお喜代の結婚式が目出度く擧げられた。

【批評】二作共に、同型の處女の心事をこまごまと寫し出してある。堅氣の親に淨く育てられた內氣な純情の美しい娘が、貧しさ故に親を思つてつらい悲しい世渡りに身を投ずるまでが同じである。妾となつたお藤が男戀ひしく憐れにも焦れ死にをするのと、お喜代が愛慕する主人と夫婦になる嬉しさと、喜悲の結末が違ふだけである。筆致も徒らに絢爛に流れず、哀愁と淸麗と、いづれも愛すべき佳品である。なほ「むき玉子」は當時として實に珍奇な主題たるを失はないが、外國文學の研鑽を怠らなかつた紅葉は、ゾラの「渠の傑作」からそのヒントを得たと傳へられる。〔水木〕

二人長兵衞　ににんやうべゑ

「比翼の蝶春曙我菊」を見よ。

二人道成寺　ににんだうじやうじ

「道成寺」を見よ。

二人女房　ににんにようばう　小說

【作者】尾崎紅葉

【刊行】明治二十四年八月より「都の花」に連載（第六十四―九十七號）。紅葉全集第一卷・現代日本文學全集第六卷所收。

【梗概】下級官吏丸橋新八郎の娘お銀とお鐵とは、十九と十七の姉妹だが、容貌も氣質もまるで違つてゐた。色白で器量よしの姉は音聲までも爽かで、口數多く利かなくても、人を逸さぬ愛嬌を具へてゐたが、妹は厚肉の醜

尊は醜い姉を還して麗しい妹だけを留めたので、大山祇神が大に恥ぢ歎いて、二女を並べ奉つたのは、天神の御子の命の長久なること岩の如く、榮えますこと木の花の如かれと呪誓してのことであつた。今尊が磐長姫を返して木花開耶姫だけをお留めになつたので、天神の御子の命は木の花のやうに脆く凋落するであらうと云つた。かくて今に至るまで天皇命等の齋壽が長くないのである。次いで尊に

のしるし、若しくは神寶であつたかに關しても、解釋が區々であるが、要するに發生的には鏡・劍・玉等に一種の神祕的勢能、若しくは呪力を認めた民間信仰の高貴化であらう。尊の隨從者たちの編成とその職能とは、古代日本に於ける國家統治組織を反映してゐる。そこには君主の統治法としての祭祀と、政治との融合の精神が閃いてゐる。隨從の神々について異說が多いのは、恐らく後代文化に於て宗

い娘で口も重く、いつも陰氣な顏をしてゐるので却つて年上のやうに更けて見えた。さて二人は揃つて舊藩主の邸の祝宴に手傳ひに行つたが、新橋藝者の間に交つて酒席を斡旋してゐても、お銀の美貌は際立つてゐるのだつた。それを見染めて求婚して來たのが某省の會計課長をしてゐる澁谷周三で、彼は三十六の働き盛りだが二年前に細君を亡くして、隱居してゐる老母と宏壯な家に淋しく住んでゐた。父母は勿論、お銀自身とても後妻といふことに不滿はあつても、月給百圓の奏任官の奥樣になれるのを良緣として應じない譯はなかつた。澁谷は戀女房の事とて大事がるし、着物が出來る指環が出來る時計が出來る。わが身ながら、これが玉の輿かと幸福に暮してゐた。里の者も屢々出入して、その幸福のお裾わけに醉つてゐたが、突然澁谷の家に主人の妹夫婦がやつて來た。熊本鎭臺勤務の工兵中尉が東京詰になつたのである。さあそれからのお銀はみぢめなものとなつた。小姑夫婦に同居される氣苦勞が殖えたのに、隱居の姑がいよ〳〵地金を出して、ねぢくれては辛く當り始めた。やつと小姑夫婦が別居したと思つたら、今度は姑が意地惡くそつちへ入りびたりになつて、お銀のゐるうちは歸らないと言ひ張るので、親類の者は嫁がむごく突き出したやうに取沙汰してお銀を苦しめた。——そのさ中に、十八になつた妹のお鐵には三つの緣談が起つたが、お鐵は官員の口も商人の口も斥けて月給二十圓の砲兵工廠の職工を選んだ。それは石黑信之といつて七八年前まで近所に住んでゐた幼馴染で、職人風のない實直なところを賴もしく思つて、さゝやかな暮しながら係累のない平和な幸福な新世帶を樂しむことになつた。それに反してお銀は更に非運に見舞はれ、澁谷が突然非職になつたので、小さい借家に逼塞しなければならない身分になつた。扶持も送れないので隱居は返されて來る。もう角を折つて神妙にするので、以前のやうな風波は起らぬが、良人が每日就職を賴みに出かける變つた姿を見ると、情ない味氣ない思ひで胸が一杯になるのだつた。そのうちお鐵が懷姙して岩田帶といふ知らせに里の親が喜んでゐると、又もや丸橋の神棚の燈明に、三晩續けて大きな丁字が燿いたので、無上に目出たがつてゐると、果せる哉、澁谷內よりの文。何を知らせて來たか、皆々樣御推もじ被下度候。

【批評】作品的價值から云つて、これは美しい派手好みの姉と、醜い地味な妹との二人の結婚を對比して書いたものに過ぎず、構想も單純であり、相違した性格の描出とて類型的なのを免れない。注目すべきは實にその文體にある。作者はこの作の後半に於てはじめてその苦心の結果たる言文一致の試練をなして成功した。卽ち美妙の「です」、二葉亭の「だ」と並んで、口語體の語尾に「である」を用ひたのはその創意にかゝるもので、一世に新文體の範を垂れたものである。かくてこの作はわが文章史上の記念碑として忘るべからざるものとなつた。

【水木】

二人袴（ににんばかま）「ふたり袴」を見よ。

二人比丘尼（ににんびくに）假名草子　二卷二冊【作者】鈴木正三【諸本】初刊には年紀はない。その他寬文三年刊、同四年刊の二種があるが、いづれも京版である。また江戶版に寬文五年の松會本があり、天保十一年頃の「二人比丘尼圖會」と題したものもある。近世文藝叢書第三所收。

【梗概】下野の住人須田彌兵衞といふ者、二十五歲で戰死した。その時十七歲であつた妻は夫の死を悲しみ、その跡を弔はんとて家を出で、或る小屋に宿つてゐると、その夜の夢に骸骨があまた現はれ、「そも〳〵我らと申すは、地水火風のかりものを、とくに返辨仕る、六賊煩惱のたねをたち、十惡の里をいで、もとの古鄕に立歸り、人間の八苦をよそにみるぞうれしき」と歌ひ、一同手をたゝいて踊るを見て、現世のはかなき事を悟り、其處を立ち出でて、或る家に到れば、二十歲ばかりの麗しい女房が出迎へて、互に身の上を語り合つた。この女も亦運拙く、夫と姑に死に別れて悲しき身なれば、姑くこゝに留まり、互に慰め合つて亡き人の菩提を弔つてゐるうち、主人の女も亦病死する。須田の妻は里人を賴み、野邊の送りを濟ませたが、心なき里人は遺骸を野に打捨てて歸る。一七日といふに、其處へ往つて見ると、ありし日の花の面影は失せて髮はおどろに亂れ、五體は腫れて目も當てられず、二七日には空吹く風に臭氣を送り、肉破れて犬や烏の餌食となり、三七日には蛆を生じ、その醜骸には百年の戀も醒め、四七日、五七日とだん〳〵日が經つに從ひ、白骨と化して男女の差別もなくなり、叢中に朽ち果つる悲しさ、「かくおもふ我身、又これにかはらんや、扨もあだ成夢の世に、心をとゞめていたづらに、男女の思ひ休む時なく、愛念執心深くして、後世ぼだいをよそにみて、日夜ざいがうひまもなく、明し暮しける事よ」と今更の後悔に、無常迅速の理を悟り、遂に尼となつて佛道に入り、修業を積んで往生を遂げる。

【解說】構想は「九相詩」や、「一休骸骨」などを學んだもので、その趣旨は、須田彌兵衞の妻を假りて、有爲轉變の世相を寫し、煩惱卽菩提の佛理を說いたものである。この書は正三が母のために作つたものだと云ふ。これに由り

二人比丘尼（寬文板）

て三界出離を勸めたのであらう。山岡元隣の「二人比丘尼抄」（明曆三年六月、西村九郎右衞門板）は本書によつたものである。【水谷】

【參考】近古小說解題平出鏗二郎○江戶文學研究藤井乙男○新撰列傳體小說史水谷不倒

二人比丘尼色懺悔（ににんびくにいろざんげ）「色懺悔」を見よ。

二舞（にのまひ）雅樂舞曲　【名義】安摩（あま）（別項）と組合はされた舞で、「安摩」の舞で終ると共にその二番目に舞ふによつて、二ノ舞といふ名が起つたらしい。【解說】林邑樂。古樂の小曲。沙陀調の曲であるが、今は壹越調曲に屬してゐる。舞があり二人で舞ふ。舞人は常裝束、桴（ばち）を持ち、假面をつける。一人は男、一人は女。男は老翁の咲面（わらひ）を用ひ、女は腫面（はれ）

想と表現は必ずしもその事實に據るものとは思へない。

【梗概】圭さんは、社會の惡德に公憤を感じて文明の革命を夢想してゐる剛健黨の青年である。彼は豆腐屋の伜であつた。碌さんは圭さんに、君は第一、平生から惰弱でいけない、ちつとも意志がないと云はれて、これで餘つぽど有るつもりなんだがなと答へる青年である。初秋の或る日、二人は阿蘇へ登らうと云つて、麓の宿屋に泊り、翌日二百十日の山荒れの中を噴煙と霧に惱まされ、半日も道に迷つて外輪山の周りをうろついた揚句、とある馬車宿に辿りついて、もう一度登り直さうといふことになる。雄大な活火山の活動の光景も、雨に交つてよなの降る物凄い光景も、山臺を首途（かどで）して、貞享四年五月迄に大旅行五年、見殘し再巡二年、元祿二年迄前後七年の大旅行記である。著者の記錄によると、凡そ道程三千八百餘里、一足も馬・籠に乘らず、一宿も借り兼ねた事なく、一飯も飢ゑたる事なく、一病の障りもなく、一言の爭ひもせず、一生の大願望の本意を遂げて成つたのが卽ち本書である。初め淸書して紙數六百餘丁になつたが、これでは板料もかゝる事だから省略して書き改め四百丁とした。併しこれでも多いと云つて、更に略して二百三十餘丁に減じ、分けて七卷としたのであるといふ。七卷は七年の行脚を意味する。【內容】卷之一は陸奧・出羽・越後・越中・加賀・越前・若狹・丹後・丹波・山城の廻國で、文・詩等十六篇を收め、卷之二は近

る。【價値】西行・宗祇以來の大旅行ではあるが、如何にも俗氣紛々として讀むに堪へぬやうなところがある。集中筑前の浮客が彼を評して、「今の京に信德、東都に桃靑、これらは只小短册に鳴るのみなり。風先生獨の鳴りはこの限にあるべからず云々」と云つたと記してゐるが、その人物は芭蕉の高潔に似るべくもない。「文章は立ちながら走り書きのすさび」などと云つてゐるが、達文であると共に能文でもあるが、而も險奇な字や、難訓の語を用ひて、殊更に行文を奇怪・晦澁なものにしてゐる。幼童の讀み易からんために表音假名を用ひ、「わざと誤を用ひて遣ふ所もあるべし」と云つてゐるが、幼童に讀ませるためならば、強ひて險奇難訓の文字を遣ふ必要はなく、自

て三界出離を勸めたのであらう。山岡元隣の「二人比丘尼抄」（明暦三年六月、西村九郎右衛門板）は本書によつたものである。〔水谷〕

【參考】近古小説解題 平出鏗二郎 ○江戸文學研究 藤井乙男 ○新撰列傳體小説史 水谷不倒

二人比丘尼色懺悔 ににんびくにいろざんげ 「色懺悔」を見よ。

二舞 にのまひ　雅樂舞曲　【名義】安摩（別項）と組合はされた舞で、「安摩」の舞で終ると共にその二番目に舞ふによつて、二ノ舞といふ名が起つたらしい。【解説】林邑樂。古樂の小曲。沙陀調の曲であるが、今は壹越調曲に屬してゐる。舞があり二人で舞ふ。舞人は常裝束、桴を持ち、假面をつける。一人は男、一人は女。男は老翁の咲面を用ひ、女は腫面をつける。なほ男は帽をかぶり、篠竹を帽に挿み、女は笹葉を腰に挿む。この舞人二人が安摩の舞の中途で、舞臺階下に現はれ、安摩が舞ひ終つて退かうとする時に、その笏を乞ふ眞似をするが、安摩は與へない。そこで二ノ舞の舞人は、舞臺に上つて安摩の舞容を眞似て舞をする。その中で詠をなす。その詞は「日は晩景になりにたり。我が行く先は遙かなり」といふ。二ノ舞の男女は、土地の土民を現はしたものらしい。（安摩參照）〔田邊〕

二百十番謠目錄 にひやくじふばんうたひもくろく 「謠曲」を見よ

二百十日 にひやくとをか　小説　【作者】夏目漱石【刊行】明治三十九年十月、「中央公論」に發表。後「坊つちやん」「草枕」と共に「鶉籠」と題して出版。漱石全集第二卷・同普及版第三卷所收。【題材】作者は五高教授在職中、明治三十二年初秋、一同僚と阿蘇に登つたことがある。その時の印象がこの作品の描寫の素材を成してゐることは云ふまでもないが、思想と表現は必ずしもその事實に據るものとは思へない。

【梗概】圭さんは、社會の惡德に公憤を感じて文明の革命を夢想してゐる剛健黨の青年である。彼は豆腐屋の伜であつた。碌さんは圭さんに、君は第一、平生から惰弱でいけない、ちつとも意志がないと云はれて、これで餘つぽど有るつもりなんだがなと答へる青年である。初秋の或る日、二人は阿蘇へ登らうと云つて、麓の宿屋に泊り、翌日二百十日の山荒れの中を噴煙と霧に惱まされ、半日も道に迷つて外輪山の周りをうろついた揚句、とある馬車宿に辿りついて、もう一度登り直さうといふことになる。雄大な活火山の活動の光景も、雨に交つてよなの降る物凄い光景も、山の湯のわびしい光景も、殆どすべて圭さんと碌さんのいき〳〵した對話に依つて描かれてある。圭さんは華族と金持を攻撃しつづけてゐる。さうして今に華族と金持を皆んな豆腐屋にしてやるんだと力んでゐる。阿蘇は百年の不平を二人の頭の上に吐き出してゐる。

【批評】作風から云へば「坊つちやん」（別項）の系統に屬するもので、作者は圭さんの口を藉りて金力と權力の暴威に對する滿腔の不平を洩らし、それを象徴的に火山の噴煙に依つて表はしてゐるが、全篇を通じて戲曲的表現法を用ひてゐることが特徴である。さうして圭さんの機智縱橫の口吻が、彼の性格を感傷的に示さないで、寧ろ humorous に表はしてゐるのも特徴の一つである。〔野上〕

日本行脚文集 にほんあんぎやぶんしふ　俳諧紀行　七册　【著者】大淀三千風【成立】元祿三年【諸本】俳諧紀行全集（俳諧文庫）・紀行全集（帝國文庫）等所收【由來】天和三年春奧州仙臺を首途して、貞享四年五月迄に大旅行五年、見殘し再巡二年、元祿二年迄前後七年の大旅行記である。著者の記錄によると、凡そ道程三千八百餘里、一足も馬・籠に乘らず、一宿も借り兼ねた事なく、一飯も飢ゑたる事なく、一病の障りもなく、一言の爭ひもせず、一生の大願望の本意を遂げて成つたのが即ち本書である。初め淸書して紙數六百餘丁になつたが、これでは板料もかゝる事だから省略して書き改め四百丁とした。併しこれでも多いと云つて、更に略して二百三十餘丁に減じ、分けて七卷としたのであるといふ。七卷は七年の行脚を意味する。【內容】卷之一は陸奧・出羽・越後・越中・加賀・越前・若狹・丹後・丹波・山城の廻國で、文・詩等十六篇を收め、卷之二は近江・伊勢・志摩・紀伊の廻國で、文・長歌・謠等十八篇を收め、卷之三は紀伊・大和・伊賀・河內・和泉・攝津・播磨・備前・備中・備後・安藝・周防・長門・豐前・豐後・肥後の廻國で、文・狂詩等二十一篇を收め、卷之四は肥後・肥前・筑前・長門・周防・石見・出雲の廻國で、文・詩等二十篇を收め、卷之五は出雲・伯耆・美作・備前・讃岐・阿波・土佐・伊豫・播磨・淡路の廻國で、文十八篇を收め、卷之六は近江・美濃・信濃・上野・武藏・相模・伊豆・駿河・甲斐・下總・常陸・陸奧の廻國で、文二十三篇を收め、卷之七は出羽・陸奧・下野・武藏・相模・伊豆・駿河・遠江・三河・尾張・伊勢・京都の廻國で、文・詩・道歌・獨吟歌仙・辭世三首等を收めてゐる。その他、所々の發句・附句・漢詩・和歌等を交へて實に厖大なる內容である。但し七年の行脚中交る者は大方邊土の無名な人で、來山・西鶴と歌仙一順、大垣の木因と附句した位のものである。元祿二年の自序、元祿三年四月伊東春琳の跋がある。【價値】西行・宗祇以來の大旅行ではあるが、如何にも俗氣紛々として讀むに堪へぬやうなところがある。集中筑前の浮客が彼を評して、「今の京に信德、東都に桃靑、これらは只小短册に鳴るのみなり。風先生獨の鳴りはこの限にあるべからず云々」と云つたと記してゐるが、その人物は芭蕉の高潔に似るべくもない。「文章は立ちながら走り書きのすさび」などと云つてゐるが、達文であると共に能文でもあるが、而も嶮奇な字や、難訓の語を用ひて、殊更に行文を奇怪・晦澁なものにしてゐる。幼童の讀み易からんために表音假名を用ひ、「わざと誤を用ひて遣ふ所もあるべし」と云つてゐるが、幼童に讀ませるためならば、强ひて嶮奇難訓の文字を遣ふ必要はなく、自家撞着である。これ等は彼の衒學を蔽ふ遁辭であつて、俗衆をごまかす用意に過ぎない。要するに本集は、紀行文としてよりも、むしろ記されてゐる事實に於て、三千風の傳記・人物・俳風・主義等を知り得る點に價値があると云へよう。〔荻原〕

【參考】俳諧紀行全集提要 飯田飯人（俳諧文庫俳諧紀行全集）

日本逸史 にほんいつし　歷史書　四十卷　【編者】鴨祐之【成立】元祿五年【諸本】享保九年刊行の二十册本と國史大系本とが世に行はれる。【內容】「日本後紀」（別項）は、古くは全く亡佚してゐたから、その闕を補はんがために編纂した書であつて、形式・內容共に、できるだけ「後紀」に近からしめんと力めてゐる。即ち桓武天皇延暦十一年正月に始まり、淳和天皇天長十年二月に終るまで、年によつて卷を分ち、日にかけ月にかけて事實を記すこと「六國史」（別項）と同樣である。その材料は「類

聚國史」を初めとし、「日本紀略」「類聚三代格」「政事要略」「令集解」「公卿補任」「三代實錄」「新撰姓氏錄」「大神宮諸雜事記」「釋日本紀」等より採られ、各記事の下に一々その出所を註してゐる。【價値】國史の闕を補つたことに於て、多くの古書を集めたことに於て、その昔本書が如何に有益な著述であつたかは想像するに難くない。今日では、本書に取入れられた古書は、それ〴〵別に善本を見ることができ、增補訂正を行ひ得べき新材料も發見され、「後紀」そのものも一部分はすでに存在するのであるから、色々な意味に於て昔程の價値は失はれたのであるが、なほ「後紀」の闕けた部分に於ける史實を知らんがためには、先づ參照すべき書物たるを失はない。〔坂本〕

日本韻文論 にほんゐんぶんろん　新體詩論【著者】山田美妙【發表】明治二十三年十月三日發兌「國民之友」第九十六號より明治二十四年一月二十三日發兌同第百七號に亙りて八回連載、八回以後は掲載されなかつたらしい。【內容】日本韻文に一大進步を來させんためには須らく西洋の詩律に則り、新式の韻格を制定しなければならぬとて、將來の日本韻文の組立を韻脚の分類と組み合せによつて論定しようとするもので、古來の日本韻文を論ずる目的で書かれたものではない。その豫定目次として、

散文と韻文の區別定義○韻文の名義○唯物主義と理學と不可思議論派とが韻文に與へた影響○日本韻文歷史○韻文制定の方針○短句と長句との比較優劣○人の發音と音樂○七句及び五句○風調○各種句法論○音樂に對する各國言語の相違○平仄○アクセント○格式○語法○國語に活氣が乏しいとの說○漢語の便否○漢洋語併用程度○言語の雅俗に對する迷想○擬人法○掛詞緣詞對詞○野々口隆正○歌論批評○各國詩想の相違其原因○押韻の利害○詩人の本領。

等を擧げてゐるが、論旨の進行は必ずしもこれに據らず、發表されたものもその一部分に過ぎないらしい。〔第一回〕序で、日本韻文を進步せしめんためには、新式の韻格を制定しなければならぬ旨を述べ、第一編第一章「散文と韻文の區別」では、節奏の有無によつて區別し、思想の相違による說を排してゐる。同第二章「韻文の名義」は、詩といはずに韻文といふ語を用ひた辯解である。末段、この韻文論の目的に及んでゐる。〔第二回〕第一編第三章「韻文と開化卽ち文明との關係」を述べ、今日の文明は韻文を衰退せしめること、韻文を妨害する三大敵、韻文の衰退は韻文自身の側の無努力によること、開化に伴つて而も完全なる韻文たらんとするには一新工夫を要する。〔第三回〕第一編第四章(上)「在來の日本韻文に對する妨害、餘情の性質」、日本の和歌・俳句・漢詩には大理想、大哲學なし、小局部の卽興物が多くて十分發達せぬのは、所謂餘情論に誤られた結果であるといふ論。〔第四回〕同第四章(下)「韻文制定の方針」、在來の日本韻文の大敵は、一はこの餘情論、今一つはすべてに厭世的纖弱的思想が見えること。新韻文制定の方針も、先づ餘情論を破り、厭世纖弱な思想を去ることが根本である。それには從來の韻文形式では、容易に成功し難いから、形式からして一新するを要する。具體的にいふと、在來日本韻文の病根は、(一)韻格の簡單(二)韻句及び韻語の濫閥主義 (三)押韻 (第三は俗曲等についていふと附記がある) の三つだが、この病根を退治するのが、日本韻文の健全な發達のためである。以上は序論とみてよい。〔第五・六回〕第二編韻格、第一章「和漢洋韻語の相違」(上・下)、韻格をなす原子たる韻語及び韻句、その性質の研究である。日本・支那・西洋の韻語の比較、日本語の音調上の特質、卽ち音調の束縛少きこと、ために韻文組立上極めて便利である。〔第六・七回〕第二編第二章「韻律」、西洋の韻律分類をそのまゝ適用して韻律を(一)短長(二)長短(三)短々長(四)長短々(五)長々(六)短々(七)長々(八)短々々(九)短長短(十)長短長(十一)短長々(十二)長々短の十二に分け、その一種が各々八種(一脚より八脚まで)の韻脚をもつてゐることを述べ、(一)より(四)迄の韻律の基礎音十四類を定め、各韻律に屬する韻語を擧示してゐる。〔第八回〕第二編第三章「十四韻律の各性質」は、卽ちこの實例の擧示である。以上本論に入つたばかりでこの論は終つてゐる。【影響】この韻文論が出づるや、明治文壇最初の詩的論爭が惹起された。而もこの時は贊成者はなく、駁擊者ばかりであつた。石橋忍月・內田不知庵・路功處士を以てその尤なるものとする。最後に森鷗外が美妙の說を深切に啓發的に批評し、兼ねて駁擊者達の說の當不當にも論及して論爭の終りを告げた。この三人の駁擊者のうち、不知庵の論が最も痛烈であるが、方法論に對するに本質の論に了り、些か見當違ひであつた。鷗外は公平に美妙の立論の誤謬を示し、日本語にはアクセントなきため、西洋の韻律をそのまゝ應用されぬこと、餘情論は是なるところもあるが、一概にさうはいへぬこと、眞の餘情のこと、日本韻文に哲理の有無については誤謬であると論じてゐる。以上の如く美妙の立論の根本にいろ〳〵獨斷や無理などがあるが、韻脚を整理して日本韻文將來の新韻格を作らうとするのは、明治新體詩發達史上の有力な一貢獻たるを疑はぬ。一方美妙は自分の創作でその理論を實行してみせた。岩野泡鳴・河井醉茗等は、美妙のこの研究に負ふところが多い。

【參考】新體詩歌作法 山田美妙○新體詩の作法 岩野泡鳴　〔柳田(泉)〕

日本演劇史 にほんえんげきし　演劇書　二卷二册【著者】伊原敏郞(靑々園)【刊行】明治三十七年。續編「近世日本演劇史」は大正二年早稻田大學出版部。【內容】嘗て早稻田大學講義錄のために執筆されたのをまとめて公刊したもの。「日本演劇史」では發端として上古より歌舞伎の創始迄を略述し、以下創始期・元祿期・寶曆期の三篇に大別し、創始期に於ては女歌舞伎より野郞歌舞伎への展開を述べ、諸俳優の傳記に筆を止め、元祿期に於ては俳優の分業と劇評の發達より當期兩半期東西俳優の詳細な傳記、臺本作者、俗曲の影響、外形の變遷と法令に就いて述べ、寶曆期に於てもほぼこれと同樣である。「近世日本演劇史」は五編に分ち、寛政時代・文化文政時代・天保嘉永時代の各東西の俳優の詳傳と、近世期の脚本と劇場音樂、劇場建築財政法令等を述べてゐる。兩書共に坪內逍遙の序がある。【價値】我が國最初の詳細な歌舞伎史であるが、定說あるが如く、俳優中心に傾いてゐる事は爭へぬ。併し諸文獻を涉獵してその動靜を明かにし、更に評判記等を引用してその藝風を考察した點は、その努力と共に意義の甚だ大なるものがあり、歌舞伎そのものに俳優中心の思想が濃い事とも思ひ合せて、必ずしも非難すべきではない。その他の諸方面は爾後詳細な研究

が公にされてゐるが、列傳體歌舞伎俳優史としては本書の右に出づるものはない。〔增田〕

日本お伽噺 にほんおとぎばなし　童話集　二十四册(縮刷版一册)【編者】巖谷小波【刊行】明治二十九年―三十一年、博文館。【內容】八咫烏・田村將軍・玉取・源三位・八幡太郎・武藏坊・一休和尙・東照宮・姨捨山・川中島・玄武門・白虎隊・鎭西八郞・最明寺・朝比奈・櫻井驛・草薙劍・日吉丸・文覺上人・和唐內・高千穗・鬼童丸・熊本城・宇治川の二十四篇を收む。日本昔噺(別項)二十四篇を完成した著者が、引續き筆を執つたもので、その大部分は歷史的の物語と勇士に關する傳說とである。エルツェールング(歷史物語)及びザアゲ(口碑・傳說)は、由來童話として重要な位置を占めるものであるが、日本昔噺に於てフォルクスザアゲ(民間の口碑)

ふ意味で、かく改題した。從つて號は追號である。改題後も依然國粹主義的旗幟を揭げて政治・外交・社會・文藝その他の方面に侃諤の筆を揮つてゐたが、その勢力は昔日程ではなく、世間からは保守的東洋趣味的な雜誌と見られ、識者に愛讀された割合に一般讀者からは敬遠された形であつた。ただ誌上の呼び物は雪嶺の批評とその獨自の哲學的思索に成る大著の連載であつた。從つて初めは雪嶺中心であつたのが、明治四十五年公然雪嶺主筆と表明するに至り、遂には雪嶺の個人雜誌たるかの如き觀を呈するに至つた。本誌の特色としては、春秋二季に極めて尨大な增刊を出すことと、時々社會的關心を要する大問題の起つた場合には、忽ち全誌面を擧げてこれを論ずることである。而してその增刊には時代史

(古島一雄)の雲間寸觀や、大庭柯公のものが喜ばれた。史的考證にも好いものがある。(日本人參照)　〔柳田(泉)〕

日本音樂 にほんおんがく　【名義】日本國民が獨自に所有する音樂。卽ち日本國民の間より發生し、又はその歷史上相當に長い年月の間に亙り、日本國民の大部分に行はれて來て、從つて日本國民性と離るべからざる關係を持つに至つた音樂。【異稱】和樂【性質】建國以來今日まで非常に多種の音樂が起つたが、これは屢々外國の音樂が輸入されて、著しい影響を受けたからである。殊に諸外國に比較して最も珍らしいことは、建國以來これ等多種の音樂が大部分傳へられて、今日に於てもなほ行はれてをることである。その種類の主要なるものは、神祭樂・雅樂・佛敎音樂・能樂・絃樂等があり、又聲樂も多く、紙器樂もあり、室內にて奏されるもの、野外にて奏されるもの、舞踊を伴ふもの、劇に伴ふもの等、その凡ての種類に亙つて材料の豐富なること、恐らく世界に冠たるものと考へられる。併し雅樂を除いては和聲に富むものが少いので、これを近代の西洋音樂に比較すると、音の組合せが單純であるといふ感があるが、その旋律は頗る纖細に發達し、幽遠に富むものが多い。【沿革】日本音樂の變遷は、次の四つの時期に分けて觀察することが最も便利である。〔第一期〕(原始音樂時代)日本民族が大陸からこの群島に移住して來た頃から、既に多くの歌謠を持つてゐた。彼等は喜怒哀樂を凡て歌を以て表はし、凡ての人が歌ふといふことをその生活の中の必要な仕事と考へてゐた。これ

が公にされてゐるが、列傳體歌舞伎俳優史としては本書の右に出づるものはない。【增田】

日本お伽噺（にほんおとぎばなし） 童話集 二十四冊（縮刷版一冊）【編者】巖谷小波 【刊行】明治二十九年―三十一年、博文館。【内容】八咫烏・田村將軍・玉取・源三位・八幡太郎・武藏坊・一休和尚・東照宮・姨捨山・川中島・玄武門・白虎隊・鎭西八郎・最明寺・朝比奈・櫻井驛・草薙劍・日吉丸・文覺上人・和唐内・高子穗・鬼童丸・熊本城・宇治川の二十四篇を收む。日本昔噺（別項）二十四篇を完成した著者が、引續き筆を執つたもので、その大部分は歷史的の物語と勇士に關する傳說とである。エルツェールング（歷史物語）及びザアゲ（口碑・傳說）は、由來童話として重要な位置を占めるものであるが、日本昔噺に於てフォルクスザアゲ（民間の口碑）の編述に成功した著者は、本書に於てエルツェールング及びヘルデンザアゲ（英雄傳說）の代表的著述を試みたわけである。兒童讀物としてのこの種の著書は、やはり本書が日本に於ける最初のものとして、童話文學界に重大な意義を齎らしてゐる。なほ同著者が、後年「日本お伽文庫」の題名の下に「夢殿」「はちかつぎ姫」「かぐや姫」「天神樣」等十六篇を編述してゐるが、これは「日本お伽噺」及び「日本昔噺」の追加として見るべきものである。【山内】

日本及日本人（にほんおよびにほんじん） 雜誌 【解說】「日本人」（別項）の改題せるもの。「日本人」は元來同人雜誌として出發したものであるに拘はらず、漸次、三宅雪嶺中心の評論雜誌となつて來つつあつたが、明治三十九年十二月、當時雪嶺が主宰してゐた日本新聞社に紛議が生じ、雪嶺以下十八名の人々が連袂退社した上、「日本人」に精神的に日本新聞を併合するといふ意味で、かく改題した。從つて號は追號である。改題後も依然國粹主義的旗幟を掲げて政治・外交・社會・文藝その他の方面に侃諤の筆を揮つてゐたが、その勢力は昔日程ではなく、世間からは保守的東洋趣味的な雜誌と見られ、識者に愛讀された割合に一般讀者からは敬遠された形であつた。ただ誌上の呼び物は雪嶺の批評とその獨自の哲學的思索に成る大著の連載であつた。從つて初めは雪嶺主筆であつたのが、明治四十五年公然雪嶺主筆と表明するに至り、遂には雪嶺の個人雜誌たるの如き觀を呈するに至つた。本誌の特色としては、春秋二季に極めて尨大な增刊を出すことと、時々社會的關心を要する大問題の起つた場合には、忽ち全誌面を舉げてこれを論ずることである。而してその增刊には時代史研究の資料たるべきものが多い。支那革命が勃發して淸國の亡んだ時、乃至我が國の南北朝正閏問題が意外な大問題と化した時のごときはその一例である。殊に南北朝問題は、問題が問題だけに大に力を入れた。大正十二年九月大震災の直後、雜誌復興の際、雪嶺と他の編輯者（井上藾村・三井甲之その他）の間に意見の扞格を生じたので、雪嶺は分離して、雜誌「我觀」を發行し、これを自家の發表機關とした。「日本及日本人」はその後存續して今日に至つてゐるが、雪嶺と分離後は全く不振の有樣である。文藝的方面では、漢詩（國分靑厓の時事詩は異彩を放つた）や、俳句に力を入れてゐたことが注目すべく、殊に俳句は日本派（別項）が合流したもので、河東碧梧桐を中心として、子規門の多くの人々がこれに屬して居り、新傾向（別項）運動の牙城たるの感があつた。又本誌は人物評論に於ても一頭地を抜き、古一念（古島一雄）の雲間寸觀や、大庭柯公のものが喜ばれた。史的考證にも好いものがある。（日本人參照）【柳田（泉）】

日本音樂（にほんおんがく） 【名義】日本國民が獨自に所有する音樂。卽ち日本國民の間より發生し、又はその歷史上相當に長い年月の間に亙り、日本國民の大部分に行はれて來て、從つて日本國民性と離るべからざる關係を持つに至つた音樂。【異稱】和樂 【性質】建國以來今日まで非常に多種の音樂が起つたが、これは屢々外國の音樂が輸入されて、著しい影響を受けたからである。殊に諸外國に比較して最も珍らしいことは、建國以來これ等多種の音樂が大部分傳へられて、今日に於てもなほ行はれてゐることである。その種類の主要なるものは、神祭樂・雅樂・佛敎音樂・能樂・尺八樂・箏曲及び三曲・琵琶樂（平家琵琶・薩摩琵琶・筑前琵琶等）・三味線樂（淨瑠璃諸流卽ち義太夫・河東・一中・常磐津・富本・淸元・新內・薗八・繁太夫・大薩摩・說經・源氏・浪花等の諸節、地唄・小唄・長唄・端唄・歌澤及び哥澤節など）・唱歌及び軍歌・和洋調和樂・新日本管絃樂などがある。又その樂器の主要なものは、神祭樂には神樂笛及び倭琴・笏拍子（各別項）があり、雅樂には笙・篳篥・橫笛・箏・琵琶・太鼓・鉦鼓・鞨鼓・三ノ鼓・狛笛（各別項）などがあり、佛敎音樂には鐘・磬・鐃・鉦（各別項）・木魚等があり、能樂には龍笛（別項）・大鼓・小鼓（鼓參照）・太鼓があり、近代樂には尺八（別項）・箏・三味線（別項）・篠笛・〆太鼓・大鼓・小鼓・胡弓（別項）などがあり、明治以後はピアノ・オルガン・バイオリン・ハーモニカ・マンドリンその他の歐洲樂器が採用され、又新日本樂器として、十七絃箏・玲琴等が用ひられるに至つた。これ等の諸樂器の獨奏曲・合奏曲・管絃樂等があり、又聲樂も多く、紙器樂もあり、室內にて奏されるもの、野外にて奏されるもの、舞踊を伴ふもの、劇に伴ふもの等、その凡ての種類に亙つて材料の豐富なること、恐らく世界に冠たるものと考へられる。併し雅樂を除いては和聲に富むものが少いので、これを近代の西洋音樂に比較すると、音の組合せが單純であるといふ感があるが、その旋律は頗る纖細に發達し、幽遠に富むものが多い。【沿革】日本音樂の變遷は、次の四つの時期に分けて觀察することが最も便利である。【第一期】（原始音樂時代）日本民族が大陸からこの群島に移住して來た頃から、既に多くの歌謠を持つてゐた。彼等は喜怒哀樂を凡て歌を以て表はし、凡ての人が歌ふといふことをその生活の中の必要な仕事と考へてゐた。これ等の歌詞の多くが、「古事記」や「日本書紀」に載せられてゐるが、その旋律は大部分失はれてしまつた。ただ二三のものだけが後世に幾らか改作されて殘つてゐる。これ等の歌には六指孔を持つた笛と、六絃の琴とで伴奏をしてゐた。これ等の樂器は後に幾分改造されて今日に傳はり、笛を神樂笛、琴を和琴と呼んで、神樂及び古樂を奏するのに用ひられる。今日に殘つてゐる古樂の中で、最も有名な曲は、神武天皇が大和を征せられた時に軍中で作られた「久米歌」（別項）であつて、これは現時でも宮中の儀式に行はれ、御卽位禮の大饗には必ず行はれる。これには勇壯な舞が伴つてゐる。この外に「大和歌」や「東遊歌」（別項）などの樂舞は古代樂の流れとして今も神祭に用ひられる。【第二期】（支那及び印度音樂の輸入とその影響）神功皇后三韓征伐以後、朝鮮との交通が頻繁となり、允恭天皇御大喪の

際新羅が樂人を貢したのに始まり、順次新羅・百濟・高麗の樂が輸入された。孰れも樂と舞とがあり、新羅は新羅琴(別項)を、百濟及び高麗は横笛・篳篥・莫目(各別項)を、度羅國は鼓(別項)を輸入した。その後佛教の渡來と共に、朝鮮を通して支那音樂が入つて來た。併し支那の音樂が直接に入つて來るやうになつたのは、推古朝の大使派遣以後である。又天平八年に印度の婆羅門僧正及び林邑の僧佛哲が渡來して、印度の音樂を傳へた。奈良朝の頃にはこれ等の大陸音樂が非常に流行してゐて、天平勝寶四年に奈良に造られた東大寺大佛像の開眼式には、數百人に依つて盛大なる音樂が演奏され、その時使用された各種の樂器が今も正倉院に保管されてゐる。これ等の音樂は主として管絃合奏であつて歌謡はない。平安朝に入り、仁明天皇の頃にこれ等の輸入音樂を整理して、朝鮮樂を右方とし、支那及び印度樂を左方とし(雅樂參照)、我が國で作曲された多くの樂曲も亦、この孰れかに屬せしめた。且つこれに用ひる樂器は、右方には狛笛・篳篥・太鼓・鉦鼓・三ノ鼓を用ひ、左方には横笛・篳篥・笙・琵琶・箏・太鼓・鉦鼓・鞨鼓を用ひた。又右方は凡て舞を伴ひ、左方は舞樂と管絃とに分つた。これを總稱して雅樂(別項)といひ、中世以後宮中に於て行はれ、今日に至つてゐる。宮中の儀式の外に、神社の祭儀にも用ひられる。又その頃からこれ等の管絃樂の伴奏に用ひた歌謡曲が起つて來た。これを郢曲(別項)といふ。その中に最も進歩した聲樂形式を持つたものは催馬樂(別項)である。又この時期の終りには朗詠・今樣(各別項)などといふ新らしい形の歌も起つて來た。又この時期の初めに佛教の傳來と共に印度の經文の歌ひ方が傳へられ、これを梵唄又は聲明(別項)と稱したが、これは平安朝の初期に弘法・慈覺の兩大師が唐に留學してこの技を學び、歸朝してから非常に擴まり、天台宗並に眞言宗の聲明を成した。これ等の聲明は普通には樂器を使用しないで、聲ばかりでやるのである。

〔第三期〕(近世國民樂の勃興とその隆盛)源頼朝が鎌倉に幕府を開いてから、京都に於ける皇室を中心とした雅樂は漸次衰へて來た。これに代つて、武家を中心とした新樣式の國民的音樂が起つて來た。それは主として日本文學の發達に伴ふものであつて、長い物語(例へば戰爭哀話など)の朗誦から發達し、その音樂的形式は佛教徒の聲明から發展したものである。その中の最も有名なものは鎌倉時代の初めに起つた「平家琵琶」であつて、これは平安朝末の源平の合戰物語を琵琶の伴奏を以て語るものである(平曲參照)。足利將軍が京都に幕府を開いて後、間もなく能樂(別項)と稱する一種の歌劇風のものが起つて來た。これは昔からあつた滑稽劇なる猿樂(別項)が、この時期に出た天才世阿彌元清・金春禪竹(各別項)等によつて、眞面目な歌劇に組立てられたものであつて、その音樂的形式は佛教聲樂に基いてゐる。その歌謡を謡(謡曲參照)といひ、横笛・小鼓・大鼓・太鼓の四樂器を以て伴奏する。初めは觀世・寶生・金春・金剛(各別項)の四つの流派があつたが、家康時代、更に喜多流がこれに加はつて五流派となつた。この樂は德川將軍が江戸に幕府を開いてから後に、凡て武士の嗜むべき藝と定められたので、今日迄上流社會の紳士の娯樂として尊重されてゐる。鎌倉幕府時代の中頃に、僧覺心が支那から佛教の尺八音樂を傳へ、これが後に虚無僧と稱する特殊階級の僧侶の間に行はれて來た。德川幕府は虚無僧を保護して、尺八(別項)をその專業となし、享保の頃その中に黑澤琴古といふ尺八の名手が出で、多くの作曲を公にし、それより琴古流といふ流派が全國に盛んになるに至つた。江戸時代の初めに盲人樂家八橋檢校(箏參照)が、箏の獨奏曲及び箏を伴奏とした歌謡曲を作り、それより箏の音樂が主として盲人の間に行はれた。元祿の頃、京都に生田檢校が出て一流を創始し、その流派は廣く關西地方を風靡するに至つた。當時は三味線音樂が漸次隆盛を極むるに至つたので、箏(別項)も亦三味線の手法を移し、三味線曲を箏にて奏し、所謂手事物が盛んになつた。この生田流(別項)に於ては、文化文政以後は箏と三味線との合奏曲に力を盡し、後世の三曲勃興の起因をなした。又文化文政の頃江戸に山田檢校が出て淨瑠璃を箏に移し、歌を主にした流派を開き、山田流(別項)として關東に盛行し、かくて箏曲に、生田・山田の二大流派が相對峙するに至つた。これ等の箏曲は主として盲人の專業であつたが、家庭に於ては娘達が好んでこれを學んだ。近世に於ける我が國民樂器として最も普及したものは三味線(別項)である。三味線は元の頃から支那に行はれ、明の洪武二十五年頃支那から琉球に入つたが、我が永祿年間に琉球から我が國に傳へられた。支那及び琉球では胴に蛇皮を張つたが、我が國ではこれを猫皮に代へ、又これを大なる撥で彈じた。初めは琵琶法師に依つて扱はれ、この樂器を伴奏した歌は慶長の頃から國民の間に普及し初めた。その中で長い劇的物語を語る種類を淨瑠璃(別項)と總稱し、旋律の樣式の相違に依つて多くの種類がある。殊に大阪に起つた義太夫節(別項)は、人形劇(操參照)に合せて最も大なる勢力を持つ。又京都に一中節が起り、江戸に河東・常磐津・新内・富本・清元(各別項)などの多くの節が起つた。又江戸の歌舞伎劇に伴つて長唄(江戸長唄參照)といふ一種の歌が起つた。これは三味線が最も技巧的に使用される。また小唄・端唄などといふ短い歌も澤山あるが、これは後に花柳界に於て、好んで唄はれる種類のものとなつた。〔第四期〕(歐洲音樂の輸入と新日本音樂の勃興)明治維新後、西洋音樂が我が國に急速度に輸入された。明治二年に薩摩の軍隊は英國より軍樂を學び、同四年には、我が陸軍及び海軍は英佛兩國から軍樂を學んで軍樂隊を設けた。又同十三年には、文部省は米國のメーソン氏を聘して、學校教育に洋式の唱歌(別項)を採用することを調査し、同二十年の頃には、既に全國の小學校に悉くピアノ、オルガンを備へて洋風の唱歌を教授するに至つた。又東京には官立音樂學校を設けて歐洲樂を教授した。かくして明治年間の中頃には既に歐洲の第一流の藝術的音樂が、日本人の手に依つて立派に演奏されるやうになつた。今日多くの日本青年は甚だ西洋音樂を好み、殊に獨逸音樂を尊崇してゐる傾向がある。古い日本音樂も西洋音樂の影響を受けて新しい形をとるやうになつて來て、最近に日本樂器に依る管絃樂などが、多く作られるやうになつた。この運動は大正年間の中頃から、宮城道雄等に依つて盛んになつて來たが、昭和に入つて中尾都山・宮城道雄・町田嘉章・中島利之・田邊尚雄の五人は成和音樂會を組織し、新日本音樂建設の第一線に立つに至り、今や動かすべからざる確乎たる位置を得るに至つた。

【時代との關係】上說の第一期に於ける音樂は上下無差別に行はれ、專門職業家なるものがなく、音樂は國民の生活上必要な仕事であつた。第二期に入り、外國輸入音樂は主として上流の貴族階級に行はれ、特殊なる職業的專門家が存在するに至つた。第三期に入り鎌倉足利の時代は、武家階級の音樂が最も主要な位置を持つてゐたが、江戸時代に入つて公卿の間には雅樂の復活があり、武家には式樂として能樂が行はれ、町人階級には三味線樂が發達し、農民社會には俚謡が到る處に行はれ、士農工商を通じて凡ての階級に應じたる音樂が分化して發達するに至つた。第四期に入り、音樂は職業的階級に依つて差別されることがなくなり、その代り教育の程度に依つ

の交涉の密接な關係上、日本畫の特色も支那畫とその特質乃至樣式を同じうする點が尠くない。描寫の上では線條本位で運筆に意を注ぎ、從つて色彩以上に墨色を尊重する傾向を增し來り、又形似以上に意想の表現を達成せんとするが如き、何れも東洋畫として西洋畫に比較した場合、凡そ支那・日本を通じて、その繪畫に見る根本的な特色といふべきであるが、かくの如き共通特色の中にも、日本畫は支那畫に比して運筆寧ろ輕爽の度多く、形象も寫實的たるよりは一層裝飾的の趣を增し、表現境地も、やゝ明快にして平坦、情趣に富むを特色とする。

【時代・流派】日本畫の發達を概觀するに、現代に至るまで凡そこれを十一の時代に區分することが出來る。この區分は必ずしも常に政

半島の繪畫の感化を傳へて動的な趣致に富んでゐる。【白鳳時代】孝德天皇の大化改新から奈良遷都迄の時代で、當時は韓半島を經ぬ支那との直接交通も盛んになり、隋乃至初唐の影響が顯著である。法隆寺金堂壁畫は當時のもので、初唐に於ける西域藝術の色濃き感化をも窺ふ事が出來る。蓋し飛鳥時代に比して形象表現共著しく進歩し、やがて次代の盛世を豫想する過渡の時代と見るべきである。【天平時代】奈良遷都以來、七代七十餘年間を中心とする時代であるが、平安京に移つて後も、天台・眞言兩宗の興起以前の延曆年間は寧ろ天平藝術の延長と見るのが妥當である。當代繪畫は主として盛唐藝術の感化による所產で、まづ佛畫の方面では、諸種の廣大な淨土變相が繪畫編織に亙つて盛んに造られたらし

の赤不動、三井寺の黃不動等を擧げ得る。肖像畫としては弘法大師が將來した眞言祖師像の形式が最も榮え、以後一の典型をなして長く存續したが、この外觀賞的な山水花鳥畫も、宮廷や貴族邸内の障屏畫として盛んに行はれたらしく、これ等は支那的題材を取扱つた唐繪(別項)が主であつたが、その間から漸次日本に取材した大和繪(別項)も行はるゝやうになるのである。貞觀時代の下限は菅原道眞の意見によつて遣唐使を廢止した宇多天皇の寬平年中を以てこれに當てるのが普通である。遣唐使の廢止以後、漸次固有の國民藝術が渾成されるのであるが、藝術上の特色が如上の意味で實際に變つて來るのは、それ以後村上天皇の天曆・天德頃を境としてゐるので、繪畫史上ではまづその頃を次代との交替期とすべき

いひ、中世以後宮中に於て行はれ、今日に至つてゐる。宮中の儀式の外に、神社の祭儀にも用ひられる。又その頃からこれ等の管絃樂の伴奏に用ひた歌謠曲が起つて來た。これを郢曲（別項）といふ。その中に最も進歩した聲樂形式を持つたものは催馬樂（別項）である。又この時期の終りには朗詠・今樣（各別項）などといふ新らしい形の歌も起つて來た。又この時期の初めに佛教の傳來と共に印度の經文の

小鼓・大鼓・太鼓の四樂器を以て伴奏する。初めは觀世・寶生・金春・金剛（各別項）の四つの流派があつたが、家康時代、更に喜多流がこれに加はつて五流派となつた。この樂は德川將軍が江戸に幕府を開いてから後に、凡て武士の嗜むべき藝と定められたので、今日迄上流社會の紳士の娛樂として尊重されてゐる。鎌倉幕府時代の中頃に、僧覺心が支那から佛教の尺八音樂を傳へ、これが後に虛無僧と稱す

洪武二十五年頃支那から琉球に入つたが、我が永祿年間に琉球から我が國に傳へられた。支那及び琉球では胴に蛇皮を張つたが、我が國ではこれを猫皮に代へ、又これを大なる撥で彈じた。初めは琵琶法師に依つて扱はれ、この樂器を伴奏した歌は慶長の頃から國民の間に普及し初めた。その中で長い劇的物語を語る種類を淨瑠璃（別項）と總稱し、旋律の樣式の相違に依つて多くの種類がある。殊に大

洋音樂の影響を受けて新しい形をとるやうになつて來て、最近に日本樂器に依る管絃樂などが、多く作られるやうになつた。この運動は大正年間の中頃から、宮城道雄等に依つて盛んになつて來たが、昭和に入つて中尾都山・宮城道雄・町田嘉章・中島利之・田邊尙雄の五人は成和音樂會を組織し、新日本音樂建設の第一線に立つに至り、今や動かすべからざる確乎たる位置を得るに至つた。

【時代との關係】上說の第一期に於ける音樂は上下無差別に行はれ、專門職業家なるものがなく、音樂は國民の生活上必要な仕事であつた。第二期に入り、外國輸入音樂は主として上流の貴族階級に行はれ、特殊なる職業的專門家が存在するに至つた。第三期に入り鎌倉足利の時代は、武家階級の音樂が最も主要な位置を持つてゐたが、江戸時代に入つて公卿の間には雅樂の復活があり、武家には式樂として能樂が行はれ、町人階級には三味線樂が發達し、農民社會には俚謠が到る處に行はれ、士農工商を通じて凡ての階級に應じたる音樂が分化して發達するに至つた。第四期に入り、音樂は職業的階級に依つて差別されることがなくなり、その代り教育の程度に依つて趣味の分化が行はれるやうになり、音樂の選擇は各人の自由になつた。

【參考】歌舞音樂略史 小中村清矩 ○日本音樂講話 出邊尙雄 ○日本音樂の研究 同上 ○日本音樂通同上 ○日本歌謠史 高野辰之 ○歌舞音曲考證同上 ○日本音樂概論 伊庭孝 〔田邊〕

日本畫（にほんぐわ）

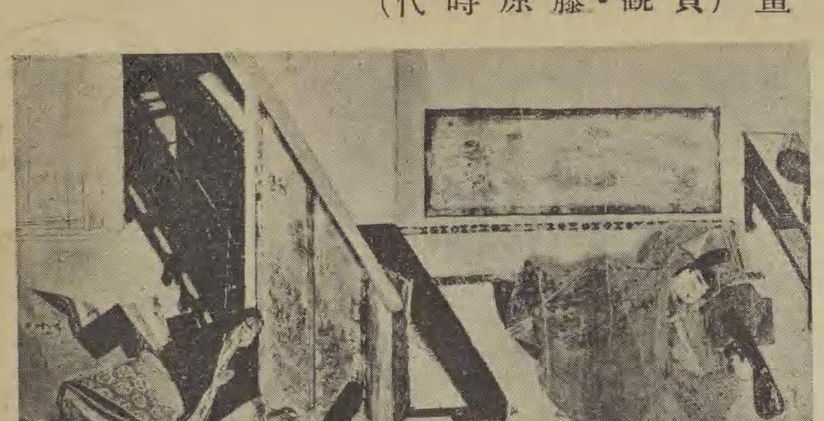
繪畫 【名義】日本に於て發達した畫の總稱。【系統・特色】日本の繪畫は固有の源がないわけではないが、主として支那畫の感化によつて、初めて發達の緒を見出したのであつて、その特色や系統の上から東洋畫の一支派、殊に支那畫の一分派とも見るべき點が尠くない。卽ち奈良朝以前は、支那六朝の影響の下に發達した韓三國の繪畫によつて、始めて純粹な繪畫の領域を確立したが、奈良朝より平安朝にかけては唐朝繪畫、鎌倉時代より室町時代に亙つては宋元繪畫、江戸時代に至つては明淸繪畫の感化を蒙つたのであつて、かくの如く各時代とも支那畫との交涉の密接な關係上、日本畫の特色も支那畫とその特質乃至樣式を同じうする點が尠くない。描寫の上では線條本位で運筆に意を注ぎ、從つて色彩以上に墨色を尊重する傾向を增し來り、又形似以上に意想の表現を達成せんとするが如き、何れも東洋畫として西洋畫に比較した場合、凡そ支那・日本を通じて、その繪畫に見る根本的な特色といふべきであるが、かくの如き共通特色の中にも、日本畫は支那畫に比して運筆寧ろ輕爽の度多く、形象も寫實的たるよりは一層裝飾的の趣を增し、表現境地も、やゝ明快にして平坦、情趣に富むを特色とする。

【時代・流派】日本畫の發達を概觀するに、現代に至るまで凡そこれを十一の時代に區分することが出來る。この區分は必ずしも常に政治史と一致するとは限らぬもので、主として繪畫樣式の變遷や特質を中心としてのものである。【原始時代】佛教渡來以前を總稱するもので、考古學の範圍としては凡そ古墳時代に相當するであらう。この時代は純粹な繪畫の領域を見ず、僅に銅鐸や鑑鏡の文樣、古墳の壁畫等を遺してゐるのみで、描寫表現共に極めて幼稚素樸であるが、その中にもやゝ日本民族固有の明るい樂天的な表現も窺知されるに近い。【飛鳥時代】欽明天皇御宇韓半島から佛教が傳來して以來、孝德天皇の大化改新に至る迄の時代である。當代は支那六朝の藝術を承けた韓三國から佛教に附隨して始めて藝術が輸入され、これによつて繪畫としての發展の第一步を踏み出した時代である。法隆寺の玉蟲廚子の漆繪や中宮寺の天壽國繡帳等によれば、描寫にはなほ觀念的な趣もあるが、形象表現共漸く複雜となり、殊に六朝乃至韓半島の繪畫の感化を傳へて動的な趣致に富んでゐる。【白鳳時代】孝德天皇の大化改新から奈良遷都迄の時代で、當時は韓半島を經ぬ支那との直接交通も盛んになり、隋乃至初唐の影響が顯著である。法隆寺金堂壁畫は當時の傑作である。【天平時代】奈良遷都以來、七代七十餘年間を中心とする時代であるが、平安京に移つて後も、天台・眞言兩宗の興起以前の延曆年間は寧ろ天平藝術の延長と見るのが妥當である。當代繪畫は主として盛唐藝術の感化による所產で、まづ佛畫の方面では、諸種の廣大な淨土變相（當麻寺の織成淨土變相、遺品としては當麻寺の吉祥天畫像（曼荼羅）が最も注目される。その他では藥師寺の赤不動、三井寺の黃不動等を擧げ得る。肖像畫としては弘法大師が將來した眞言祖師像の形式が最も榮え、以後一の典型をなして長く存續したが、この外觀賞的な山水花鳥畫も、宮廷や貴族邸內の障屛畫として盛んに行はれたらしく、これ等は支那的題材を取扱つた唐繪（別項）が主であつたが、その間から漸次日本に取材した大和繪（別項）も行はるゝやうになるのである。貞觀時代の下限は菅原道眞の意見によつて遣唐使を廢止した宇多天皇の寬平年中を以てこれに當てるのが普通である。遣唐使の廢止以後、漸次固有の國民藝術が渾成されるのであるが、藝術上の特色が如上の意味で實際に變つて來るのは、それ以後村上天皇の天曆・天德頃を境としてゐるので、繪畫史上ではまづその頃を次代との交替期とすべきであらう。【藤原時代】前代の唐畫樣式を全く日本化して固有の國民藝術を達成した時代であつて、その下限は鎌倉幕府の樹立までとするが穩當であるが、ただ源平の爭亂當時は、次代の藝術をも孕んだ苦悶の時で兩期の樣式が交流してゐる。藤原時代はまづ佛畫の方面に於て前代以來の密教畫以外、天台法華の中から淨土教の繪畫が擡頭し來り、殊に來迎圖の製作の盛んなるは注目すべき點である。これに伴つて、描寫は總じて前代の力强い表現から脫して佛菩薩の相好も圓滿柔和の趣を加へ、その衣裳も切金彩色の優美な裝飾的施設を完成した。かくて佛畫の美に於て、前後その比を見ざる極盛時代を現出したのである。高野山藏の「聖衆來迎圖」「佛涅槃圖」、博物館藏の「普賢菩薩像」等はその代表作中の一である。而してこれ等佛畫の製作を專業とする繪佛師の輩出したのも、當代中葉以來のことで

赤不動尊像（貞觀）高野明王院藏

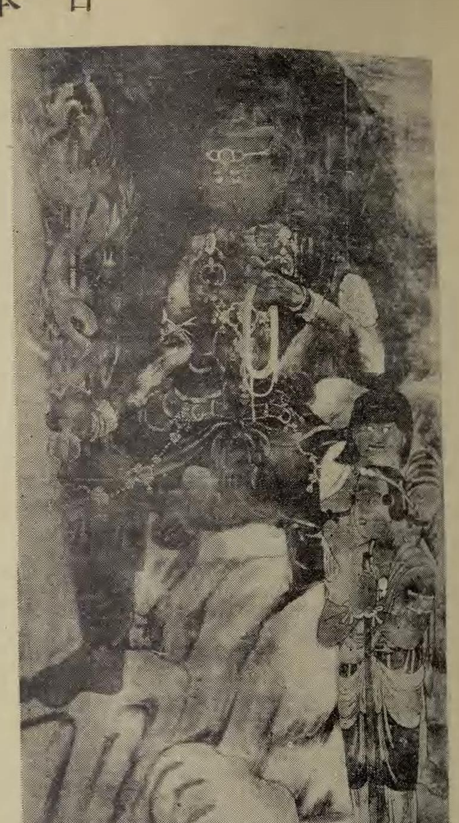
普賢菩薩像（藤原）帝室博物館藏

ある。佛畫以外の鑑賞畫に於ては、前代以來の障屏畫が愈々盛んで金岡を祖とする巨勢派（別項）を中心としてこれに筆を揮つた。又紙繪類の小品畫も榮え、この方面では繪所（別項）の專門繪師と共に貴族男女の素人中にも堪能の人が尠くなかつた。殊に日本に取材した大和繪風俗畫の發達は當代に見る顯著な現象で、この方面は貴族作家の力に待つところが多かつた。更に當代國文學の發達に伴ひ、これが草假名等を媒介として大和繪と結合するに至つたことは、當代鑑賞畫の發展上最も注目すべき點で、繪卷物・葦手繪（各別項）・歌繪の如きは、かくして當代が創始した獨自の產物と云はれる。「源氏物語繪卷」「信貴山緣起」（各別項）等は、當代に於けるこれ等鑑賞畫の方面の好作例である。【鎌倉時代】鎌倉幕府の創立に始まり、幕府滅亡後南北朝の對立時代を含めて、その合一に終ると見るが妥當である。蓋し南北朝は繪畫の上で一時代たる程の發展を見ず、寧ろ鎌倉繪畫の延長と見られるからである。鎌倉時代は武家の剛健な氣象を反映して、繪畫も藤原時代程の優美な裝飾趣味多からず、寧ろ表現の動的にして活潑な點で特色がある。佛畫では藤原末葉から託磨派（別項）が興起し、主として宋畫の遒勁單白な畫風を取つて前代以來の繪佛師の筆に見る藤原典型以外に新生面を開拓し、やがては道釋山水等の墨畫方面にも筆を染めて足利漢畫の先驅をなした。肖像畫に於ては、藤原隆信・信實父子が大和繪描寫の裡から似繪（別項）を創めたが、別に又當代中葉以降禪宗の傳播に伴うてその傳法印信の具たる頂相、卽ち禪僧の肖像畫が流行したのであつて、これ等の二流派は以後も長く肖像畫の傳統をなして存續した。繪卷物は前代を承けて最も隆昌の域に達し、藤原式の風俗畫以外、更に社寺緣起・高僧繪傳等の諸方面に殊に顯著な發展を見たが、これ等の作家は繪所中心の專門繪師を主としてをり、これが當代末葉に至つて繪卷の描寫樣式を大成したのであつて、所謂土佐派（別項）は後にこれ等の畫家を一の畫系乃至家系化したものに外ならない。【室町時代】南北朝の合一から足利幕府の滅亡する元龜年間迄の間である。この時代は佛畫も萎靡して高貴の美を見ず、繪卷も卑近化してやがて御伽草子に移行するが、これ等に代つて當代繪畫の中心となつたのは、禪宗を背景とする宋元風の北宗畫（別項）である。當時支那との交易盛んなるに伴ひ、宋元の畫院一派の畫や禪宗墨畫家の作品等が多數舶載され、これが足利將軍家を中心として諸侯や五山の詩僧等の賞玩する所となつたが、この間からこれ等宋元畫に則つて水墨畫を主とする新樣式を發展せしめたのが當代の北宗畫で、一般にこれを漢畫とも呼んでゐる。而もこの漢畫樣式は主として禪宗に相伴うて起つた關係上、畫家も殆ど禪僧であり、その畫も山水道釋等凡そ禪機に契合するものが多かつた。かくの如き漢畫は平安朝以來の大和繪の優美な描寫と全く趣を異にし、遒勁な運筆に氣格を託し、破墨・潑墨（各別項）の浸潤に氣韻を表現するところに特質が發揮されるのであつて、如描より周文を經、雪舟に至つて頂點に達した觀がある。併し支那の北宗畫を日本化して眞に日本畫としての漢畫樣式を達成したのは、これが移植の狀態より全く土着化した室町中葉以降の事で、禪僧以外の專門畫家としての狩野正信・元信父子一派（狩野派參照）はその代表的なものであつた。この派は大和繪の樣式をも攝取して日本化の傾向著しく、室町時代以後に至つては、畫壇の勢力を獨占して諸派に君臨する地位を得たのである。その外足利將軍家の同朋衆たる能阿彌・藝阿彌・相阿彌の父子三代（阿彌派）の畫は、狩野派と趣を異にしつつも亦漢畫の日本化として注目される。【桃山時代】織田信長の覇をとなへた天正より豐臣氏大阪落城の元和に至る約四十年間の短い時代であるが、當時廣大な城郭建築等に伴ひ、豪華極まりなき金碧障屏畫の出現を見たのである。この機運に乘じて手腕を揮つたのが、當代狩野派の巨匠永德・山樂父子であり、永德の門より出た海北友松（海北派參照）も亦これに雁行して盛名を馳せた。併し桃山前後は、これ等以外にも漢畫の諸派があり、或は金碧畫に或は水墨畫に、各々その特色を發揮してゐた。雪舟の流を汲んでその雲谷庵の後を繼いだ雲谷等顏（雲谷派）、彼と雪舟の正系を爭うた長谷川等伯（長谷川派參照）、武人畫家として聞えた曾我直庵（曾我派參照）、土岐洞文・山田道安・宮本二天等は、その最も著名な人々である。【江戸時代】德川幕府の創業より明治維新迄の時代である。當代は長き戰亂が治つて偃武太平を謳歌した時代で、繪畫壇も落ち着いてそれ〴〵の特質を流露する機運を得たのである。まづ狩野派に於ては探幽出でて幕府の畫事を掌握して以來、その一門は幕府の奥繪師たる中橋・鍛冶橋・木挽町・濱町の四家を初めとしてその他表繪師と稱するもの十六軒に及び、全國諸藩の畫事も殆ど皆狩野一派の勢力に歸したが、畫技はこれに反比例して時と共に衰へ、ただ傳統的に家業を傳へて武人の需要を充たすのみとなつた。この間に關西富豪の嗜好を中心として榮えたのが元祿の尾形光琳である。光琳派（別項）は、桃山より當代初葉にかけ、光悅・宗達の二家出でて大和繪の裝飾趣味を復活せしめたるに始まり、光琳の後は酒井抱一に傳はり、化政時代に再興したのである。大和繪の正統に棹さす貴族趣味の土佐派や、その支脈たる住吉派（別項）は、當代初葉に至り、土佐光起・住吉如慶等によつて復活したが、更に純乎たる古大和繪の復興は幕末維新の機運に乘じた誹言・一蕙・爲恭等の活動まで待たねばならなかつた。ただ大和繪の風俗趣味は漢畫の諸派によつて桃山より當代初葉にかけて時世粧の風俗畫を興し、岩佐又兵衞の出現を見た後、やがて浮世繪（別項）の發展を培ふに至つた。浮世繪は當世風俗殊に花街や演劇を描いて江戸の民衆藝術の中心となり、版畫の創始と共に普く流布された。これ等の諸派以外、當代新たに支那の感化によつて起つた流派として、南宗文人畫（別項）と長崎派（別項）とがある。前者は祇園南海等の學者の鼓吹や長崎來舶の清人伊孚九等の影響によつて蔚興し、やがて池大雅・與謝蕪村の二家を初めとしてその他の諸家輩出し、その詩情と氣韻に富んだ印象描寫は、弘く學者文人の好尙を博したが、更に谷文晁（文晁派參照）出づるに及んで、これに北宗畫の樣式をも加味して南北の合一を企つるに至つた。長崎派は長崎の地を中心として興つた北宗畫の一派たる前期のものと、沈南蘋の花鳥畫を宗とする後期のものとの二期に分ち得るが、後者は又南宗畫にも攝取されたのである。南蘋一派と前後して關西の地に起つたのは、廬擧・吳春の圓山四條派である。この派は、象形・筆觸とも純然たる日本流の寫生主義に立脚するもので、殊に關西の中產階級の間に喜ばれた。そ



源氏物語繪卷（藤原）德川侯爵家藏

信貴山緣起（藤原）朝護孫子寺藏



赤不動尊像（貞觀）高野明王院藏

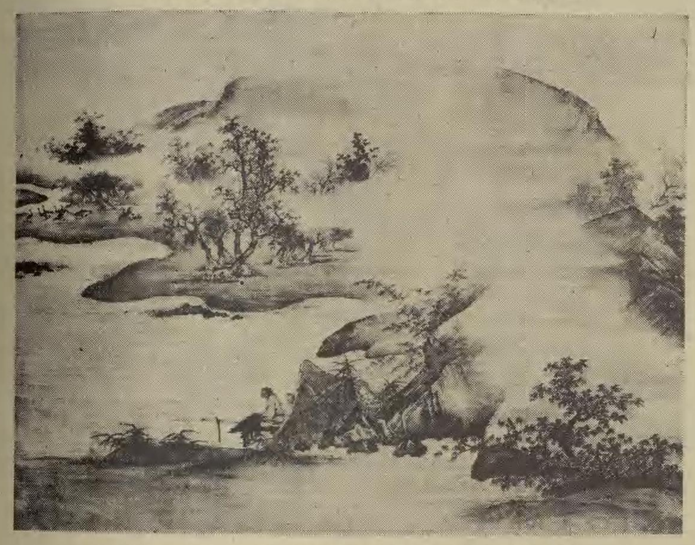
普賢菩薩像（原藤）帝室博物館藏

山水屛風（藤原）敎王護國寺藏

狩野探幽筆 四睡圖 前田侯爵家藏

蕪村筆 歸樵圖 大辻家藏

雪舟筆 山水長卷（足利）毛利公爵家藏



狩野元信筆 江畔垂釣圖（足利）靈雲院藏

狩野永德筆 唐獅子圖（桃山）御物

狩野山樂筆 花鳥圖襖繪（桃山）天球院藏

源賴朝像（鎌倉）神護寺藏

聖衆來迎圖（鎌倉）知恩院藏

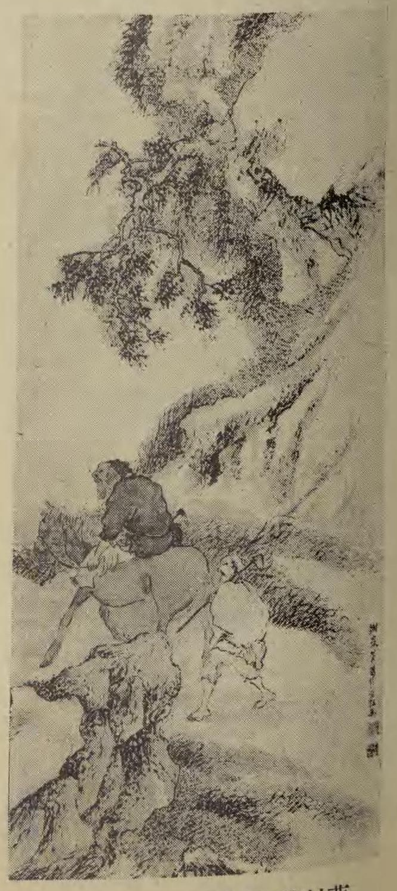
彦根屏風（桃山）井伊伯爵家藏

傳俵屋宗達筆 風神圖 建仁寺藏

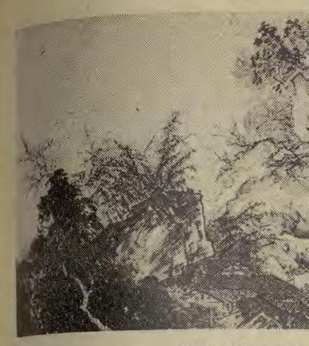
狩野探幽筆 四睡圖 前田侯爵家藏

尾形光琳筆 燕子花圖 根津家藏

池大雅筆 十便圖 大島家藏



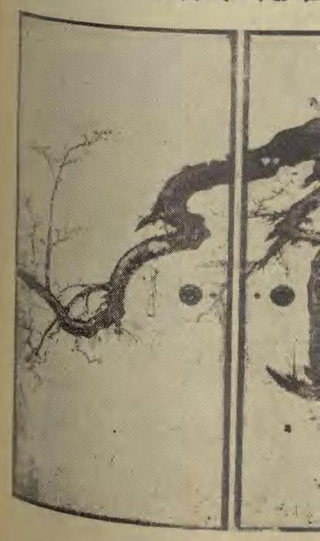
燕村筆 歸樵圖 大辻家藏



藏家爵公利

藏院雲靈（利足

圖（桃山）御物

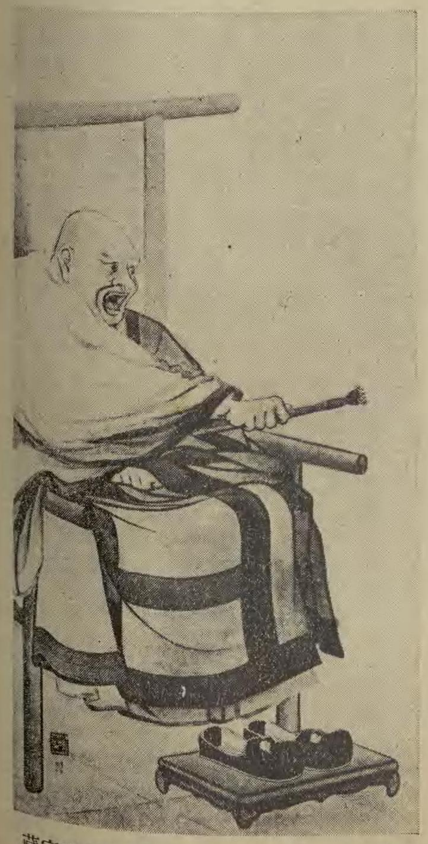


藏院球天（山桃）

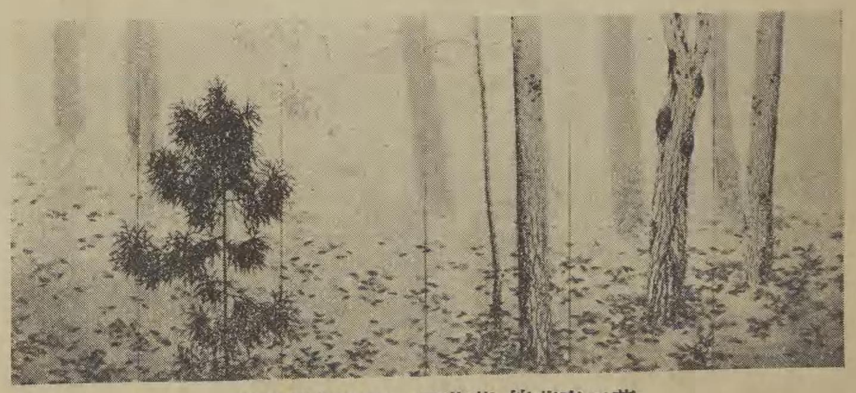
藏舊家本松（戸江）帖樂一復亦筆田竹村能田

藏校學術美京東像音觀母慈筆崖芳野狩

藏宮羅比刀金（戸江）圖布瀑筆擧應山圓



藏家田細　圖喝一濟臨筆邦雅本橋



藏家爵侯川細　圖葉落筆草春田菱

の他英一蝶（英派參照）・岸駒（岸派參照）・曾我蕭白・伊藤若冲・原在中等、それ〳〵一派の風格を成して當代に名を馳せた。〔現代〕明治維新以後は、前代の諸流派が相交流の機運多きに加へ、畫家は各自個性に立脚して傳統の影を見ること必ずしも前代ほどに多からず、以て明治・大正以後、現代の盛況を呈するに至つた。この間西洋畫は既に早く江戸時代に長崎の畫壇に著しく影響し、又浮世繪にも多少の感化を見たが、明治以後は頓に榮えて、その分野、日本の畫壇を半截するの狀態で、そのために現代日本畫は一面に於て著しく西洋畫に接近し、間々これと區別し難き作品をも生ずるに至つた。

【參考】日本繪畫史横井時冬〇日本繪畫沿革說　黒川眞頼〇日本畫沿革史植松兼吉郎〇日本美術史高山樗牛〇高本日本美術各史（博物館編纂）

にし、我が「古事記」の神話を「貨財」の幼稚な狀態に於ける想像の性質に基づけ、佛教の渡來によつて想像の性質に進化を來したことを說き、第二章に於ては、漢學の渡來により、制度文物の備はると共に、朝廷が建設期の軍國的性質を失ひ、貴族文化の發達による頽廢期に入つて王朝の衰微を來した所以を說き、第三章は著者一流の「經驗論」による解釋に基き、封建的軍國國家の起因を說いて封建道德の性質に及び、「與力」「同心」等の言語によつて封建道德の相互的性質を明かにし、第四章乃至六章に於て、鎌倉時代より戰國時代に亙り、先づ封建的統一が、王朝時代に於ける地方政治の缺陷に對し、大小名の地方領主としての權限を確定せしめたことによつて安定を得た所以を叙し、而もその事がおのづから封建的中央政府に對する地方領主の勢力の擴張に過ぎなかつたことで、著者は西洋の文

くしてこれを壓迫すると同時に、王室及び公家に對して政事に關與することを嚴禁し、金權を以て公家を制する政策をとつたこと等であつたと說く。封建制度の壞滅については、著者はその理由を封建國家間の均衡の失はれたこと、中央權力の無能化、軍國階級の頽廢、政治家の個人的墮落等に求める政治史的見地をとり、經濟史觀はやゝ徹底を缺いた憾みがある。なほ第十一章は「開化の現像」を略叙して、各時代の文化形式を古書からの拔萃によつて附記した。

【批評】維新後の國家的統一と、その近代化とに伴つて、歷史も封建的軍國史から近代的國民史に轉化せねばならぬ事情に在り、明治政府も修史局を起して、國史一般及び特殊現象の歷史の編纂に努めたが、ただ事實の編年史

【由來】山陽は夙に史乘の類を愛讀し、嘗て柴野栗山の勸めに應じて朱子の「通鑑綱目」（別項）を讀みその行間に躍動する名節に感じ、後更に叔父春風の藏する「大日本史」を借覽して、その後を嗣いで世俗の曉り易い日本歷史を著はさうと志したが、それには「史記」「資治通鑑」或は「神皇正統記」「新井白石の「史論」等に啓發された所が少くない。その最初の腹案では非常に廣汎な範圍に亙り、三紀・五書・九議・十三世家・二十三策の五を包含して、これを隱史五種と名付け、凡ゆる方面を網羅しようと企てたが、後十三世家だけで、本朝覇史或は日本世史を作らうとし、これが今の「日本外史」となり、その三紀・九議・二十三策になる筈だつたものが變じて「日本政記」（別項）、「通議」「新策」等の諸書となつた。これに依つて明か

の他英一蝶（英派參照）・岸駒（岸派參照）・曾我蕭白・伊藤若冲・原在中等、それ〴〵一派の風格を成して當代に名を馳せた。〔現代〕明治維新以後は、前代の諸流派が相交流の機運多きに加へ、畫家は各自個性に立脚して傳統の影を見ること必ずしも前代ほどに多からず、以て明治・大正以後、現代の盛況を呈するに至つた。この間西洋畫は既に早く江戸時代に長崎の畫壇に著しく影響し、又浮世繪にも多少の感化を見たが、明治以後は頓に榮えて、その分野、日本の畫壇を半截するの狀態で、そのために現代日本畫は一面に於て著しく西洋畫に接近し、間々これと區別し難き作品をも生ずるに至つた。

【參考】日本繪畫史 横井時冬〇日本繪畫沿革說 黒川眞頼〇日本畫沿革史 植松鞆吉郎〇日本美術史 高山樗牛〇稿本日本美術略史 博物館編纂〇日本畫の知識及鑑定法 今泉雄作〇東洋美術大觀（日本畫部）大村西崖〇近世繪畫史 藤岡作太郎〇日本繪畫史上卷 笹川臨風〇大日本美術史 黒田鵬心〇日本美術史圖錄 源豐宗〇日本繪畫史の研究 澤村專太郎〇日本繪畫史 關衛〇Outline of history on Japanese fine art（瀧精一）

日本開化小史（にほんかいくわせうし）

〔田中（一）〕

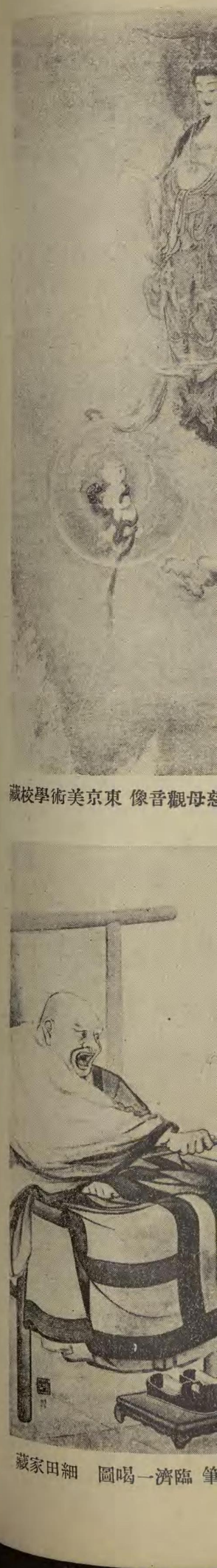
【著者】田口卯吉（鼎軒）【刊行】明治十二年二月第一卷を發行。十五年十月完成。大正五年洋綴一册本として再版。改造文庫所收。【解說】著者が二十三歳の折の處女出版で且つその主著である。自序で「史家之苦辛。不レ在二於蒐二集歷代許多之狀態一。而在二於究一レ盡其狀態之所一レ本也已一」といつた通り、因果關係から歷史を觀る科學的方法をとり、章を十一に分ち、第一章冒頭に著者の經濟史觀を明かにし、我が「古事記」の神話を「貨財」の幼稚な狀態に於ける想像の性質に基づけ、佛敎の渡來によつて想像の性質に進化を來したことを說き、第二章に於ては、漢學の渡來により、制度文物の備はると共に、朝廷が建設期の軍國的性質を失ひ、貴族文化の發達による頽廢期に入つて王朝の衰微を來した所以を說き、第三章は著者一流の「經驗論」による解釋に基き、封建的軍國國家の起因を說いて封建道德の性質に及び、「與力」「同心」等の言語によつて封建道德の相互的性質を明かにし、第四章乃至六章に於て、鎌倉時代より戰國時代に亙り、先づ封建的統一が、王朝時代に於ける地方政治の缺陷に對し、大小名の地方領主としての權限を確定せしめたことによつて安定を得た所以を叙し、而もその事がおのづから封建的中央政府に對する地方領主の勢力の擡頭を促した結果、統一勢力は弱められ、それに乘じて朝廷と地方貴族との結託による「中興」の事業が起されたが、一度封建的軍國國家の對立を生じたる以上、王朝再興の軍事的企圖は、却つて大領主、地方豪族を併呑する過程を促進せしめ、再び大規模の封建的混亂を生じ、終に群小封建國家滅亡の過程たる戰國時代を現出せしめたことを叙述し、轉じて日本文學の起原より戰國時代に至る文藝學問の沿革を叙し（七・八章）、經濟史觀に立つて、「貨物の進歩と文學の發達とは車の兩輪の如し」と斷じ、更に第九章以下に於て、織田時代・德川時代を叙說し、德川政府をして安固たらしめた事情は、第一、人質政策。第二、親藩の配置によつて地方貴族を壓迫する政策。第三、諸侯に課役してこれを貧弱ならしめる政策。第四、諸侯に對し、賞を輕くし罰を重くしてこれを壓迫すると同時に、王室及び公家に對して政事に關與することを嚴禁し、金權を以て公家を制する政策をとつたこと等であつたと說く。封建制度の壞滅については、著者はその理由を封建國家間の均衡の失はれたこと、中央權力の無能化、軍國階級の頽廢、政治家の個人的墮落等に求める政治史的見地をとり、經濟史觀はやゝ徹底を缺いた憾みがある。なほ第十一章は「開化の現像」を略叙して、各時代の文化形式を古書からの拔萃によつて附記した。

【批評】維新後の國家的統一と、その近代化とに伴つて、歷史も封建的軍國史から近代的國民史に轉化せねばならぬ事情に在り、明治政府も修史局を起して、國史一般及び特殊現象の歷史の編纂に努めたが、ただ事實の編年史的蒐集に過ぎなかつたので、著者は西洋の文明史家・經濟學者・社會學者（バックル、ギゾー、ラボック、ミル、スペンサー等）の影響の下に、近代意識に基づく史觀によつて日本歷史を再生產する開拓者的企圖を試みたのであつた。本書もバックル、ギゾーの方法に示唆されたものであつたが、後年に至つて著者はバックルに反對し、文明史は文化內容の叙述を目的とする百科全書的のものにあらずして、史理を明晰ならしめるもの、卽ち一定の史觀に立つて歷史過程を解釋するものとした。本書は、維新後の日本の近代資本主義國家への發程に於ける史的意識の表現として最初の試みであつただけ、社會的影響も大きく、一小册子にして本書ほど當時の人心に訴へ得たものは尠いといはれた。

〔長谷川〕

日本外史（にほんぐわいし）

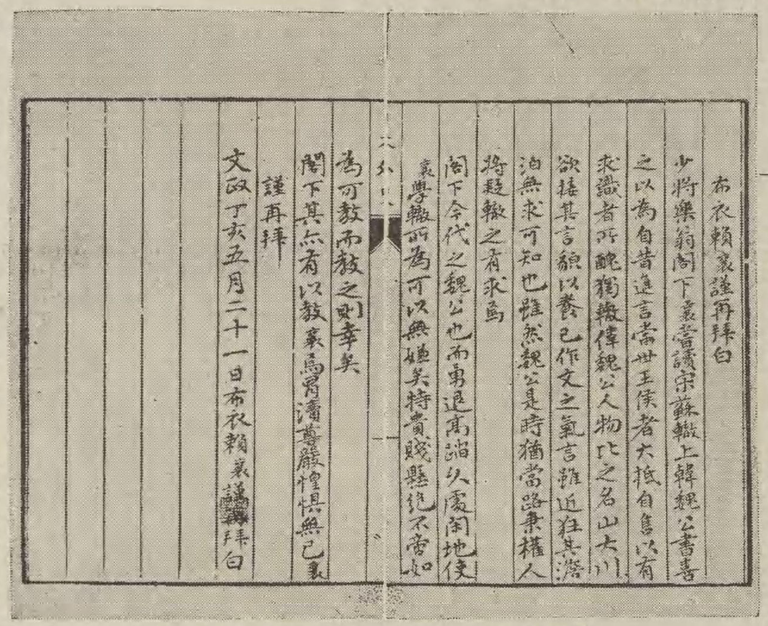
歷史書 二十二卷十二册【著者】賴山陽【刊行】文政十二年【成立・由來】山陽は夙に史乘の類を愛讀し、嘗て柴野栗山の勸めに應じて朱子の「通鑑綱目」（別項）を讀みその行間に躍動する名節に感じ、後更に叔父春風の藏する「大日本史」を借覽して、その後を嗣いで世俗の曉り易い日本歷史を著はさうと志したが、それには「史記」「資治通鑑」或は「神皇正統記」、新井白石の「史論」等に啓發された所が少くない。その最初の腹案では非常に廣汎な範圍に亙り、三紀・五書・九議・十三世家・二十三策の五を包含して、これを隱史五種と名付け、凡ゆる方面を網羅しようと企てたが、後十三世家だけで、本朝覇史或は日本世史を作らうとし、これが今の「日本外史」となり、その三紀・九議・二十三策になる筈だつたものが變じて「日本政記」（別項）、「通議」「新策」等の諸書となつた。これに依つて明かなる如く、彼は全く「史記」の體裁に倣つたのであるが、それは唯その編峽の體裁のみならず、その叙述の方法及びその精神に於てもこれを範としたので、彼自ら史記鈔本の後に跋して、「予和史を修め、叙して大事に到る毎に、輒ち法を此に取る」と云つてゐる。彼の後半世の大部分が本書の完成のために傾けられたと稱しても過言でなく、明記せられた引用書目のみでも二百數十種に及び、二十年の歲月を歷て漸く稿を脫した。初め家に祕して示さなかつたが、樂翁公がこれを聞き、辭を卑くし幣を厚うして閱覽を請うたので、始めて世に公にしたと傳へられ、卷頭に文政十年五月二十一日少將樂翁公に奉る書が揭げてある。【內容】「史記」の世家に倣ひ、源平二氏以後德川氏に到る迄、十三氏の興亡盛衰の迹を叙べたもので、源氏四卷・新田氏二卷・足利氏六卷・德川氏十卷、凡て二十二卷、その終始は源氏を



藏校學術美京東 像音觀母

藏家田細 圖喝一濟臨 筆

以て一貫し、更にその各々を前記・正記・後記に細別して、平氏・北條氏・楠氏・後北條氏・武田氏・上杉氏・織田氏・豐臣氏等の諸氏を巧みに織り交ぜて、前後の形勢を包括せしめてゐる。その體裁は勿論編年體ではなく、又紀傳體或は紀事本末體（各別項）でもなく、一種獨特の法を創めたものである。本書を一貫して流れてゐるのは尊王賤覇の精神である。彼の生時は德川幕府の勢威が漸く衰頽に向ひ、他方勤王の思想が將に勃興せんとする際であり、彼自らは又朱子學を奉じた父春水の薰陶を受け、栗山・二洲等の感化を蒙つてゐる。時代の風潮と宋代春秋學の感化と、內外兩つの影響が相俟つて彼の精神を涵養した。而も彼は異朝の學說を墨守するものではなく、能くその大旨を把握して自らを失はなかつた。かくて彼は夙に王政の古に復るべきことを信じて、本書を著はしてその意を寓し、忠孝節義の人倫を鼓舞せんことに力めたのである。【影響】彼の外史著述の精神と目的とは、史實の精確な考證に在つたのではないので、その點に於ける疎漏と淺薄とに對しては、古來幾多の非難があるが、それにも拘らず、讀者をして恍惚として卷を措く能はざらしめるものがあるのは、全く彼の君國に對する熱情と文章の靈妙人を魅了する力に依るので、彼の筆に上せられた事件は、句々の間に活動し飛躍してゐる。彼が本書の中に鼓吹した精神は、本書の流行すると共に、遍く一般人士の上に至大の感化を與へ、明治維新の大業に參畫した人々をして尊王斥覇の思想を激發して奮起せしめた功績は、永く特筆せらるべきものである。



樂翁公に奉るの書（松平子爵家藏）

【參考】日本外史正誤　栗原信充　○日本外史補　岡田僑○日本外史と讀史餘論　田口卯吉○日本外史系譜　名取善十郎○日本外史纂論　石川鴻齋○日本外史前編　保岡正太郎　○近世日本外史關機　○日本外史評論　大岡讓　○日本外史辨妄　法貴發　○川田博士の外史辨誤の說を聞いて　重野安繹（史學雜誌一ノ六）

【本多】

日本歌學史（にほんかがくし）　一卷　【著者】佐佐木信綱　【刊行】明治四十三年十月、博文館。

【內容】歌論を中心として、和歌一般に對する研究の變遷發達を論じ、古來の歌人の和歌に對する思想を叙したものであるが、研究資料である著書、もしくは著書の斷片等の精査考證といふ書史的方面にも觸れてゐる意味に於て、歌論書史的な方面をも兼ね具へてゐる。全體を中世歌學・近世歌學に大別し、前者を三期に分ち、第一期は貫之に始まり、公任を經て、俊成・定家にいたつて大成した時期、卽ち中世歌學の勃興並に隆盛時代とし、第二期は爲家以後二條昆沙門堂の流派の爭ひより遂に二條家の勝利に歸し、弊風起つて古今傳授等が起り、歌學の衰へた時代、第三期は德川期のはじめ、細川幽齋が二條家歌學を再興し、堂上地下に普及した時代とし、後期は元祿、自由研究の精神勃興して師承萬能主義をやぶつて以後の歌論で、第一章は「古學勃興時代」と題し、茂睡・長流・契沖等を論じ、第二章には「國歌八論」並にそれに對する辨難批評の論を述べ、第三章には眞淵、第四章に宣長、第五章には江戶派の枝直・千蔭・春海、第六章に小澤蘆庵、第七章に景樹、第八章に鈴屋・桂園兩門下、第九章に富士谷父子、第十章に「德川末期の諸歌人」として、以上に洩れた諸學者の說の注意すべきものを叙し、以下三章に於て小國重年・內山眞龍・橘守部・五十嵐篤好・伴信友・近藤芳樹・穗井田忠友・鹿持雅澄・西田直養・岡部東平・野々口隆正・六人部是香等の「歌格研究」を紹介してゐる。附錄として、人名索引、書名及び件名索引、參考書書目、參考書書目著者索引があり、別刷の中世歌學道統譜、近世歌學學統譜二枚があつて、これ等は極めて便利有益なものである。【價値】本書は從來の歌論書を廣く涉獵し、纏めあげたもので、從來歌學者の說を總收し、これを系統づけ、歌學の歷史的研究に新しい鍬を入れたものであつて、歌學史もしくは歌論史の重要なる基礎的研究をなしてゐる。

〔藤川〕

日本歌學全書（にほんかがくぜんしょ）　和歌叢書　十二册　【編者】佐佐木弘綱・佐佐木信綱　【刊行】第一編は明治二十三年十月二十九日附出版、以下順次刊行、同二十五年一月四日附で第十二編出版、博文館。【內容】「萬葉集」「八代集」を初めとして平安・鎌倉期の歌人の家集十七、歌合三、百首二、雜書一及び中世より近世にかけての歌論書七を收錄してゐる。第一編は古今集及び貫之集・躬恒集・友則集・忠岑集で、この四つの私歌集に洩れた撰集中の四家の歌を補遺として收め、第二編は後撰集及び元輔集・能宣集・順集並にこの三家集の補遺と天德歌合（內裏歌合）を收めてある。第三編は拾遺集及び公任集・紫式部集・清少納言集。第四編は後拾遺集・相模集・經信集・高陽院歌合。第五編は金葉集・詞花集・堀河百首。第六編は千載集・永久百首・忠度集・後京極自歌合。第七編は新古今和歌集・長明集・自讚歌（後鳥羽院の時、時の歌人十六人に歌十首をたてまつらしめ、御自作の十首を加へたもの）。第八編は林下集・賴政集・山家集である。第九・十・十一編には「萬葉集」を收め、第十二編には悦目抄・無名抄・にひまなび・新學異見・歌がたり・歌ぶくろ（八卷の中、六運・六則・五體の三條を抄出）・詞の直路を收めてゐる。「にひまなび」以下五つの歌論書の近世に屬する以外、他は凡て鎌倉初期までのものである。卷頭には各々解題を附し、本文には頭註を附してある。【價値】古歌書の活字本となつて廣く流布した最初のもので、これと同時に刊行された「日本文學全書」（別項）

と共に、明治の國文學の研究に多大の便宜と刺戟とを與へた。編者の一人弘綱は本叢書の完成を見ないで不幸病歿したが、この歌書普及の功績は、明治文學史上特記さるべきで、正岡子規は、弘綱の十周忌に「世のなかに歌學全書をひろめたる功に報いむ五位のかかぶり」と歌つてゐる。

〔藤川〕

日本樂道叢書（にほんがくだうそうしょ）　歌謠　十二册　【編者】羽塚啓明　【成立・刊行】雅樂の稀覯書を集め、その世に流布せざる事を愁ひて、昭和三年十一月より昭和七年五月にわたり、名古屋の樂舞研究會より刊行。【內容】收載するところ十三部。第一編、音律通致章卷第二（東大寺僧凝然著、大須眞福寺本による）、第二編、尋聞鈔（貞和四年奧書あり。應司家舊藏本による）、第三編、樂道纂解（二册。宗覺著、元祿十六年

所謂和歌の撰集や私家集は極めて多く、それ等を通じて、和歌の發達を把握するのは容易でないのを惜しんで、古から現代に亙る歌の選集の書を作つて、「古來の和歌を歷史的に縮撮して、研究者の爲に簡明確實なる原本を提供せむ」として、「日本歌撰」なる書が計畫せられ、その第一編として、先づ上古の部たる本書が編まれたもの。第二編以下は未着手の儘現在に至る。【內容】日本の詩歌を代表すべき選集を作る目的で編まれたのであるが、そのうち、上古は歌の數が少く、且つ普く諸書にわたつて輯錄した書がまだないから、特に例外として選集とせず、一切の歌謠の有る限りを收載してゐる。その集められた歌は、國初から天武天皇までの歌である。これは著者が、「古今集」以前を「上世」の歌謠と見、その範圍を「古事記」「書紀」に限らず當時のあ

め出してある。以上本文たる歌謠、參考物たる「斷片」「祝詞壽詞及び語詞」は、皆假名まじりに書き改め、著者の考へによつて句々を切つて載せてある。次にそれ等の歌謠の性質を理解せしめるために、解說と附錄とが附けてある。解說に於て「上代歌謠の概觀」があり、附錄は引用書目及び參考書の解題及び所收歌謠の圖表的解剖から成つてゐる。【價値】上代歌謠の研究の困難なことは、材料の今日に傳はるものの極めて少いことである。古代は純粹の歌書と云ふは、「萬葉」の小部分を除いては全く存在しないため、諸種の本をあさつて、二首・三首づつを苦勞して蒐集せねばならぬ。勿論、林諸鳥の「記紀歌集」（別項）を初め、七八種の書が德川期以來出版されてゐるが、その範圍を「古事記」「書紀」に限らず當時のあ

選び、日本六十六ケ國の數に合せて作つた六十六首の樂府體の漢詩を集めたもので、門人牧峴の註がある。題は「日出處」「三韓來」「炊煙起」等に始まり、「夜叉來」「裂封册」等に終つてゐる。

〔佐久〕

日本歌謠史（にほんかえうし）　歌謠書　一册　【著者】高野辰之　【刊行】大正十五年　【內容】序說、第一篇上古時代、第二篇外來樂謠歌時代、第三篇內外樂融和時代、第四篇邦樂發展期、第五篇邦樂大成期前半時代、第六篇邦樂大成期後半時代、第七篇邦樂革新期より成り、更に章・節・項に細目を分つて、歌舞音樂の歷史を詳說してゐる。【價値】從來取り扱はれたあらゆる歌舞音曲の材料を綜合集大成したのみならず、著者新發見の材料も多く、從來啓蒙的な斷片的著述しかなかつた日本歌謠を、

と共に、明治の國文學の研究に多大の便宜と刺戟とを與へた。編者の一人弘綱は本叢書の完成を見ないで不幸病歿したが、この歌書普及の功績は、明治文學史上特記さるべきで、正岡子規は、弘綱の十周忌に「世のなかに歌學全書をひろめたる功に報いむ五位のかかぶり」と歌つてゐる。【藤川】

日本樂道叢書（にほんがくだうそうしよ） 歌謡 十二册 【編者】羽塚啓明 【成立・刊行】雅樂の稀覯書を集め、その世に流布せざる事を愁ひて、昭和三年十一月より昭和七年五月にわたり、名古屋の樂舞研究會より刊行。【内容】收載するところ十三部。第一編、音律通致章卷第二（東大寺僧凝然著、大須眞福寺本による）、第二編、尋聞鈔（眞和四年奥書あり、籐司家舊藏本による）、第三編、樂道纂解（二册。宗覺著、元祿十六年成）、同久米舞考證（河村益根著、文化十年成）、第四編、近家抄（樂名記・伯州記・近家祕書・狛氏樂名考・舞樂大全とも稱す。辻近家著、正德元年成）、第五編、樂曲考（二册。田安宗武撰、明和五年成）、第六編、溫故抄（林廣濶著、安永八年成）、同樂曲目錄（田中大秀著）、第七編、樂書目錄類纂（小川守中著）、第八編、樂淸錄（二册。豐原文秋著、天保五年成）、第九編、歌儛雜識（小川守中著、文政二年成、歌舞品目の附錄たる歌舞雜識拔萃の原著）、同指月話（四辻公說著、文化十二年成）、同舞樂記（本居大平著、文政六年成）。各書に編者の解題を附してゐる。【藤田】

日本歌撰上古之卷（にほんかせんじやうこのまき） 和歌集 一册 【著者】佐佐木信綱 【刊行】明治四十二年三月 【成立】和歌は、日本のすべての韻文の淵源、基礎となつたもので、一には我等の祖先の趣味好尚の中心ともなつたもので、これが研究は最も必要事である。然るに所謂和歌の撰集や私家集は極めて多く、それ等を通じて、和歌の發達を把握するのは容易でないのを惜しんで、古から現代に亙る歌の選集の書を作つて、「古來の和歌を歷史的に縮撮して、研究者の爲に簡明確實なる原本を提供せむ」として、「日本歌撰」なる書が計畫せられ、その第一編として、先づ上古の部たる本書が編まれたもの。第二編以下は未着手の儘現在に至る。【内容】日本の詩歌を代表すべき選集を作る目的で編まれたのであるが、そのうち、上古は歌の數が少く、且つ普く諸書にわたつて輯錄した書がまだないから、特に例外として選集とせず、一切の歌謡の有る限りを收載してゐる。その集められた歌は、國初から天武天皇までの歌である。これは著者が、「古今集」以前を「上世」の歌謡と見、そのうち、更に天武以前を「上古」と見たがために、天武以前が先づ「上古之卷」なる名で出版されたのである。歌謡採集の材料となつた書籍は、出版の當時既に知られてゐた殆ど凡ての書籍で、古事記（百十六首）・日本書紀（百三十九首）・萬葉集（天武帝以前の歌）（八十四首）・上宮聖德法王帝說（四首）・續日本紀（一首）・皇太神宮儀式帳（一首）・古語拾遺（二首）・日本靈異記（一首）・熱田大神緣起（四首）・本朝月令（一首）・聖德太子傳曆（二首）・常陸風土記（十首）・播磨風土記（四首）・丹後風土記（六首）・肥前風土記（二首）、總計三百七十七首、外に「斷片」と題して歌謡に準ずべき諺や韻を持つた短い語句やを集めてある。次に「祝詞壽詞及び語詞」と題して、「大祓詞」「出雲國造神賀詞」「室壽詞」「鎭火詞」「國引詞」（出雲風土記）、「爾保都比賣命の誄」（續日本紀卷十一に引く）、「新羅王の誓」（書紀）、「語臣猪麿の訴」（出雲風土記）の八つを參考のため出してある。以上本文たる歌謡、參考物たる「斷片」「祝詞壽詞及び語詞」は、皆假名まじりに書き改め、著者の考へによつて句々を切つて載せてある。次にそれ等の歌謡の性質を理解せしめるために、解說と附錄とが附けてある。解說に於て「上代歌謡の概觀」があり、附錄は引用書目及び參考書の解題及び所收歌謡の圖表的解剖から成つてゐる。【價値】上代歌謡の研究の困難なことは、材料の今日に傳はるものの極めて少いことである。古代は純粹の歌書と云ふは、「萬葉」の小部分を除いては全く存在しないため、諸種の本をあさつて、二首・三首づつを苦勞して蒐集せねばならぬ。勿論、林諸鳥の「記紀歌集」（別項）を初め、七八種の書が德川期以來出版されてゐるが、その範圍を「古事記」「書紀」に限らず當時のあらゆる書から集めること、材料の疑はしきを斥けて、眞に信頼し得べき集成の書を作ること、單に歌謡を集むるのみならず當時の大勢を知るために、概說・表の類を添ふべきこと、この三點の要求を滿たし得ないもののみである。これ等の諸點を一書にして兼ね備へてゐる點に本書の價値がある。歌謡の集成書としても、古代歌謡の特性を知る上にも、研究史手引としても、何れの要求をも一書にして兼ねしめんとする著者の望みが、複雜で周到な本書の組織となつて現はれ、この用意の行き届いた點で、本書の價値を認める事が出來る。ただこの種の書物の性質として成立以後に發見せられた材料の如きものを補入し、補正せらるべきである。【森本】

日本樂府（にほんがふ） 漢詩集 一卷 【著者】賴山陽 【解說】明の李東陽（字は賓之、西涯と號す）の「擬古樂府」に倣つて、國史中の好題目を選び、日本六十六ヶ國の數に合せて作つた六十六首の樂府體の漢詩を集めたもので、門人牧輗の註がある。題は「日出處」「三韓來」「炊煙起」等に始まり、「夜叉來」「裂封册」等に終つてゐる。【佐久】

日本歌謡史（にほんかえうし） 歌謡書 一册 【著者】高野辰之 【刊行】大正十五年 【内容】序說、第一篇上古時代、第二篇外來樂謡歌時代、第三篇内外樂融和時代、第四篇邦樂發展期、第五篇邦樂大成期前半時代、第六篇邦樂大成期後半時代、第七篇邦樂革新期より成り、更に章・節・項に細目を分つて、歌舞音樂の歷史を詳說してゐる。【價値】從來取り扱はれたあらゆる歌舞音曲の材料を綜合集大成したのみならず、著者新發見の材料も多く、從來啓蒙的な斷片的著述しかなかつた日本歌謡を、學的に基礎づけた研究として、前人未踏の領野を國文學史上に開いた著述である。我が國の歌謡學は本書によつて學問的體系が確立せられた。【備考】著者の前著「歌舞音曲考說」は本書の材料となつたもの。又著者の編纂に成る「日本歌謡集成」（別項）十二卷の解題は、本書の遺漏を補ひ、誤謬を訂正したものとして併せ見らるべきである。【藤田】

日本歌謡集成（にほんかえうしふせい） 叢書 十二卷 【編者】高野辰之 【刊行】昭和三・四年、春秋社。【内容】【卷一】（上古篇）古事記歌通釋（新編）・古事記謡歌註（内山眞龍）・日本紀歌解（荒木田久老）・琴歌譜・佛足石和歌集解（山川正宣）・古風土記歌（新編）。【卷二】（中古篇）南京遺響（鹿持雅澄）・神樂和琴祕譜・催馬樂抄・樂章類語鈔（小山田與清）・梁塵愚案抄（一條兼良）・梁塵後抄（熊谷直好）・本朝樂府三種合解東遊（關深）・風俗譜・やまとまひ歌譜・藤のしなひ・梁

塵祕抄巻第二・梁塵祕抄口傳集巻第十・唯心房集（寂然）・今様譜。【巻三】（中古篇）倭漢朗詠集行成本・和漢朗詠集註（北村季吟）・新撰朗詠集・朗詠九十首抄・朗詠要抄・朗詠要集。【巻四】（中古近古篇）（佛會歌謡篇）古讃集・敎化・訓伽陀・講式・囃歌・和讃雜集・順禮歌（御詠歌）・補遺（全部新編）。【巻五】（近古篇）延年舞曲歌謡（二書）・宴曲（十書）・日吉七社船謡考證略解（業藩）・田植草紙・田樂歌謡（二書）・亂曲久世舞要集・狂言小歌集（新編）・幸若舞曲歌謡（二書）・閑吟集・禁中千秋萬歲歌・青陽唱詁（入江昌喜）・十二段草子・上るり十二段・中古雜唱集（伴信友）。【巻六】（近世篇）隆達節小歌集（新編）・隆達小歌三百首・編笠節唱歌・阿國歌舞伎歌（新編）・采女歌舞伎繪詞・業平躍歌・寛永十二年跳記・萬歲躍・精靈踊歌・踊唱歌・吉原流行小歌總まくり・ぬれぼとけ・淋敷座之慰・長歌古今集・糸竹初心集・當世小歌揃・當世なげ節・紙鳶・大幣・はやり歌今古集・松の葉・三味線組歌補遺・落葉集。【巻七】（近世篇）日本女護島・踊口說集（新編）・若綠（增補繪入）・松の落葉・新投節・大阪流行音頭（新編）・濱荻・琴線和歌の糸・山家鳥蟲歌・巷謡篇（鹿持雅澄）・伊勢音頭・二見眞砂（新編）。【巻八】（近世篇）新編歌祭文集・遊里歌（四書）・新大成糸の調・歌系圖（流石庵羽積）・箏曲考立木信憲）・吾嬬箏譜考證（村田了阿）・松響閣箏話。【巻九】（近世篇）女里彌壽豐年藏・哥撰集・蘆荻刈節正本（新編）江戸長唄集・江戸端唄集（三書）。【巻十】（近世篇）都羽二重拍子扇（一中節）・宮古路月下の梅・宮薗鸚鵡石・宮薗新曲集・春富士都錦（正傳節）・常磐津（常磐津節）・櫻草集・富本節）。【巻十一】（近世篇）薗曲後撰集（土佐節）・半太夫節正本集・十寸見蘭曲集（河東節）・柏葉集（清元節）・新内節正本集・巷歌集（六書）。【巻十二】（近世篇）俚謡。

【價値】日本歌謡を初めて網羅大成し、且つ體系づけた點に價値がある。口繪挿畫に珍しきものを選び、解說は編者の前著「日本歌謡史」を補つた新しい歌謡史と云ふべく、珍書稀覯書極めて多く、或は曲目を年代順に並べて簡單な解說を添へ、一種の音曲年表を形作つたものがあり、又必要に應じては索引を附したりして甚だ行き屆いてゐる。【藤田】

日本から日本へ（にほんからにほんへ）　紀行文

【著者】德富健次郎【刊行】大正十年三月、金尾文淵堂。【内容】「東の巻」第一編は自宅より長崎まで。第二編は支那・新嘉坡・印度洋・紅海・蘇西。第三編は埃及。第四編はユダヤ。「西の巻」第五編は伊太利。第六編は佛蘭西。第七編は瑞西。第八編は獨逸。第九編は白耳義。第十編は英吉利。第十一編は北米合衆國。第十二編は日本へ。第十三編は日本。【解說】著者はこの書を以て、自著の總ての冠であると言つてゐる。「黑い眼と茶色の目」を書いて三十年來心に祕めし過去の悲戀を天下に公表し、次いで第二のアダムとして新生の新天新地に踊り出た著者は、漸次その信仰を高めて來た。卽ち最初神に造られたアダムは、その妻イヴと共に、罪を犯してエデンを追はれ、人生の混亂と鬪爭が產れた。この混亂を潔め救はんがために、第二のアダムとして基督は產れた。けれども基督は三十三歲にして殺されてしまつた。彼の一生は餘りに短く、人間として味ふべき夫婦生活を知らず、この世に經驗すべき多くを殘してゐる。次にこの世に現はるべきアダムは、地に住む人の子であり、しつかりと足を地につけた生活をする人間であり、鐵鞭を果したイヴを伴つた夫であり、男性愛の化身たる自然男で、全人を擧げて戰ふ勇氣と赤裸で、決死の抱擁をする愛の所有者で、自己の所信を貫くためには、他人から歩ませられる道を寸歩も歩まず、自己の道を自ら堂々と進む男でなければならない。そしてこのアダムは、第二のイヴと共に靈肉一致の瑞々しい自然男・自然女として、舊世界の眞只中に、新しい世界を創造しなければならない。卽ち第二のアダムとして、嘗てこの世に現はれた基督が、更に現出して普通人の如く結婚し、嘗て經驗を殘して昇天せるその三十三年以後の生活を、この世に於て人類と共に艱み苦しみ、且つ慈み惠みつつ新天新地を創造するのである。その再臨のキリストこそ、第二のアダムこそ、自分であるといふ自信の下に、著者は愛子夫人を携へて世界一周の旅に上つたのである。されば、基督の故郷を「昔昔のふるさと」と呼び、エルサレム滯在中の行爲は、悉く自己を再臨の基督としての行爲である。歐洲大戰の講和會議に出席中のクレマンソー、マクドナルド、ウヰルソン、西園寺公望等に送りし書簡の如きは、確かに豫言者の態度に出でたものである。自己を以て基督の再臨なりと自信して書ける著者は、日本に於てはこの書を以て嚆矢とする。【沖野】

日本漢文學史（にほんかんぶんがくし）　漢文學書

【著者】芳賀矢一【刊行】昭和三年七月、國語と國民性と合册刊行、富山房。【解說】著者が東京帝國大學敎授として、明治四十一年度から四十二年度に亙つて文學部學生のために講義したものを、著者の歿後、受業弟子であつた佐野保太郎氏等が各自のノートや著者の手控を參照して纏めたものである。從來我が國に於ける漢文學の歷史は、國學者からも漢學者からも閑却されてゐたが、著者は邦人の手に成つた漢詩・漢文は、廣い意味の國文學であるといふ見地から、率先してこの講義を始めたので、隨つて日本漢文學史の成書は本書を以て嚆矢とする。特に上古から江戸時代の終りまでを通じて、平易簡明に說いてあるのが本書の特色である。【佐久】

日本漢文學史（にほんかんぶんがくし）　漢文學書

【著者】岡田正之【刊行】昭和四年九月、共立社。【解說】著者が東京帝國大學講師として或は敎授として、芳賀博士の後を承けて文學部學生のために講義したものを、著者の歿後、受業弟子であつた長澤規矩也氏等が、各自のノートや著者の手控を參照して纏めたものである。芳賀矢一著の「日本漢文學史」は、上古から江戸時代の終りまであるが、本書は室町時代の終り迄で止めてあるのは遺憾である。但し前者の平易簡明なるに比すれば、本書はより詳密精核である。【佐久】

日本紀（にほんぎ）

「日本書紀」を見よ。

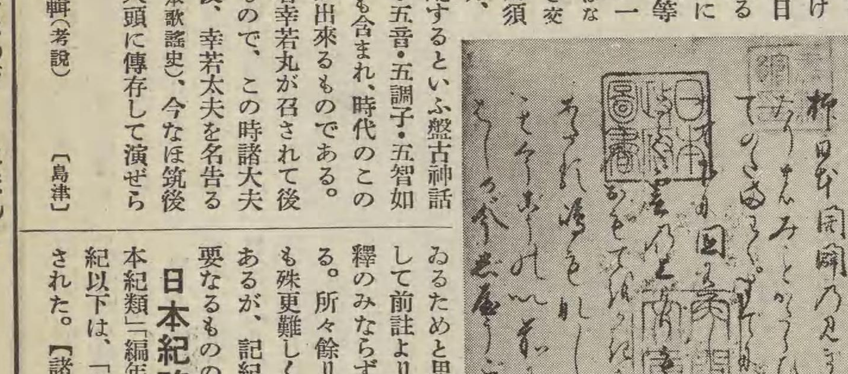
日本記（にほんぎ）　幸若舞曲　一卷　【名稱】

木活字本の表題には、「日本紀」とあり、內閣本の題名は「大日本記」となつてゐる。【成立】不明。但し後花園院の御前で諸はれたのが事實とすれば、正長以後、少くともほぼ文明以前には作られてゐた筈であり、或は作はそれよりなほ少し溯らせても差支はないであらう。【諸本】古板本は木活字十行本（フシ附なし）を岩崎文庫に藏してゐる。明治以後の刊行としては、近古小說新纂（初輯）に收められてある。又寫本に藤井乙男氏所藏江戸時代初期頃の筆と思はれる八行本及び內閣本がある。高野辰之氏藏本は後者の書寫で、傳士の附記に「原本の字體は、貫水の奧書ある靜物語と同筆なり」とある。これ等には簡單なフシ附が記されてある。又全曲ではないが、フシ附のある越前幸若家元藏のものが、日本歌謡集成巻五近古篇に收められてある。【內容】祝儀物で、日本開闢神話に佛說及び陰陽五行說的解釋の附加されたものである。開闢の砌、伊弉諾・伊弉冉の二神御鉾をさし下して一大海の面を掻き探り給ひ、その滴りが海上に留つて一つの島となり、淡路と名付けられた。それは大海の面に、大日の梵字が浮き漂つてゐた上に固つた土であつた。大日の梵字の上に出來始めた國であるから大日本國と云ふのである。月を象る月氏國の天竺、星を象る震旦の唐土も、その後開けたが、芥子の粒なる小國日本は日域と號ける日を象られる久遠宮家舊御藏本が、孝讓天皇紀を逸したのみで完璧である。又醍醐天皇紀以下は嘉永三年山崎知雄の校訂本が刊行せられて居り、國史大系本は神代より後一條天皇に至る全部を收めてゐる。【解說】神代より後一條天皇に至る編年體の歷史書である。神代は、「日本書紀」神代卷をそのまゝ取り、神武天皇より光孝天皇に至るまでは、「六國史」を適宜に抄略して文を成してゐる。宇多天皇紀以下は別に編するところであり、材料は外記日記及びそれに類した他の記錄類より取られてゐるであらう。その大體の體裁は、六國史時代と殆ど變りがない。「六國史」が完全には傳はらぬ今日、本書の存在によつてその缺を補ひ得ることは少くなく、また宇多天皇以下は、缺卷多き「本朝世紀」や、記事の怪しげな「扶桑

日本紀歌解槻乃落葉（にほんぎうたのかいつきのおちば）　註釋書　三卷　【著者】荒木田久老【成立】寛政十一年【諸本】文政二年刊本あり。卷尾に、「寛政十一年七月於山城國愛宕郡眞葛原之旅寓考畢荒木田久老（花押）」とあり、寛政十一年九月城戸千楯の序文と文政元年十一月著者の子久守の跋とを添ふ。【內容】「日本書紀」の歌謡を註釋したものである。その體裁は契沖の「厚顏抄」（別項）と同じく、本文を一句づつ分割して出して訓を附し、その下に割註を施してゐる。歌謡のみならず、「顯宗紀」の「室壽詞」をも註釋せるは、これが和文で記されてゐるからである。【國盡型往來物】日本國盡を初めとして、その流を汲んでゐる一群の地理物に附した名稱である。卽ち大は世界萬國の國名盡から、小は一町・一村の字名・鄕名盡に至るまで、苟も一定の地域・團體に屬する地名・町名を、遺漏なく擧げ盡す底の行き方である。【國盡型往來物の發達】國盡型往來物中、最も古いのは、「日本國盡」と「京町盡」とである。この兩者が初步的學習の一敎材として用ひられるやうになつたことは、可なり古い事であらう。平安末期に出來た三善爲康の「掌中曆」には、國堺曆・京兆曆の二部があつて、この二者を含んでゐる。「掌中曆」が源爲憲の「口遊」の補遺であり、「口遊」が少年學習のために作つて授けた書である事は、二書の序文によつて自ら明かである。已に口ずさみであるから

とある。これ等には簡單なフシ附が記されてある。又全曲ではないが、フシ附のある越前幸若家元藏のものが、日本歌謠集成卷五近古篇に收められてある。【内容】祝儀物で、日本開闢神話に佛説及び陰陽五行説的解釋の附加されたものである。開闢の砌、伊弉諾・伊弉冉の二神御鉾をさし下して一大海の面を掻き探り給ひ、その滴りが海上に留つて一つの島となり、淡路と名付けられた。それは大海の面に、大日の梵字が浮き漂つてゐた上に固つた土であつた。大日の梵字の上に出來始めた國であるから大日本國と云ふのである。月を象る月氏國の天竺、星を象る震旦の唐土も、その後開けたが、芥子の粒なる小國日本は日域と號ける日を象る國、三國一の尊い國、こゝに生れあつて壽を樂しむ我等は幸福であるといふのが一篇の筋であつて（直接ではなくとも謠曲「淡路」「逆矛」等と交渉があると思はれる）、頭は須彌、髪鬚は木草、眼は日月、息は風、四肢は四洲に配するといふ盤古神話的思想、五方・五色・五味・五音・五調子・五智如來・五時教に配した説明も含まれ、時代のこの種の思潮傾向を窺ふ事が出來るものである。【附記】この曲は、創始者幸若丸が召されて後花園院の御前で諸つたもので、この時諸大夫に任ぜられたので、以後、幸若太夫を名告るに至つたと傳へられ（日本歌謠史）、今なほ筑後の大江（福岡縣山門郡）の大頭に傳存して演ぜられてゐる。

【參考】近古小説新纂初輯（考説）　【島津】



日本紀（内閣文庫藏）

日本紀歌解槻乃落葉（にほんぎうたのかいつきのおちば）

註釋書　三卷　【著者】荒木田久老【成立】寛政十一年【諸本】文政二年刊本あり。卷尾に、「寛政十一年七月於山城國愛宕郡眞葛原之旅寓考畢荒木田久老（花押）」とあり、寛政十一年九月城戸千楯の序文と文政元年十一月著者の子久守の跋とを添ふ。【内容】「日本書紀」の歌謠を註釋したものである。その體裁は契沖の「厚顔抄」（別項）と同じく、本文を一句づつ分割して出して訓を附し、その下に割註を施してゐる。歌謠のみならず、「顯宗紀」の「室壽詞」をも註釋せるは、これが和文で記されてゐるためと思はれる。眞淵・宣長等の説を參照して前註よりも一段と詳密になつてゐる。語釋のみならず語法に對しても説明を加へてゐる。所々餘りに穿鑿に過ぎて、平易なる語をも殊更難しく解釋した個所のあるのは缺點であるが、記紀歌謠の註釋書としては、最も重要なるものの一である。　【中島】

日本紀略（にほんきりゃく）

歷史書　【別名】「日本紀類」「編年略記」などともいはれ、醍醐天皇紀以下は、「九代略記」「九代實錄」などとも稱された。【諸本】寫本としては圖書寮に藏せられる久邇宮家舊御藏本が、孝讓天皇紀を逸したのみで完璧である。又醍醐天皇紀以下は嘉永三年山崎知雄の校訂本が刊行せられて居り、國史大系本は神代より後一條天皇に至る全部を收めてゐる。【解説】神代より後一條天皇に至る編年體の歷史書である。神代は、「日本書紀」神代卷をそのまゝ取り、神武天皇より光孝天皇に至るまでは、「六國史」を適宜に抄略して文を成してゐる。宇多天皇紀以下は別に編するところであり、材料は外記日記及びそれに類した他の記錄類より取られてゐるであらう。その大體の體裁は、六國史時代と殆ど變りがない。「六國史」が完全には傳はらぬ今日、本書の存在によつてその缺を補ひ得ることは少くなく、また宇多天皇以下は、缺卷多き「本朝世紀」や、記事の怪しげな「扶桑略記」しかないこととて、最も有用な史書と言はねばならぬ。

【參考】佚書考（日本紀略）藤田安藏（史學雜誌五ノ一二）　【坂本】

日本紀類聚解謠歌註（にほんぎるゐじゆかいえうかちう）

註釋書　二册　寫　【著者】内山眞龍【成立】下の終りに「文化八年未年二月六日考終」とある。【解説】「日本紀類聚解」十五卷の一部で、まづ歌謠を擧げ、次に歌格上よりこれを圖示し、次に詞句の解釋を施してある。竹柏園に自筆稿本を存す。歌格研究の創始者小國重年は、初め眞龍に就いて學んだことがあるが、歌格の研究では重年の方が先んじてゐるのであらうと思はれる。重年の「長歌言葉珠衣」（別項）は享和元年二月に成稿してをる。【佐佐木】

日本國盡（にほんくにづくし）

往來物の一種　【解説】古く日本の諸國名を敎へるために作られた一種の兒童用敎科書で、國盡型往來物の一である。【國盡型往來物】日本國盡を初めとして、その流を汲んでゐる一群の地理物に附した名稱である。卽ち大は世界萬國の國名盡から、小は一町・一村の字名・鄉名盡に至るまで、苟も一定の地域・團體に屬する地名・町名を、遺漏なく擧げ盡す底の行き方である。【國盡型往來物の發達】國盡型往來物中、最も古いのは、「日本國盡」と「京町盡」とである。この兩者が初步的學習の一敎材として用ひられるやうになつたことは、可なり古い事であらう。平安末期に出來た三善爲康の「掌中曆」には、國堺曆・京兆曆の二部があつて、この二者を含んでゐる。「掌中曆」が源爲憲の「口遊」の補遺であり、「口遊」が少年學習のために作つて授けた書である事は、二書の序文によつて自ら明かである。已に口ずさみであるから手習本でなかつたことは言ふまでもない。その手習本の中に取込まれたのは、管見の及ぶ限りでは「拾霞抄」が最も古いやうである。「拾霞抄」は、康永二年四月に尊圓親王の筆になつたものであつて、この書の中には諸國及び京條里の二項を据ゑて、國盡と京町盡とを收めてゐる。「下學集」にも「京師九陌名」を錄してゐるし、「易林本節用集」にもこの二者を網羅してゐる。「新撰類聚往來」にこの二つが加へられてゐることは、人も知る通りである。かくの如く中世に於て、早く既に初步敎材として「日本國盡」が用ひられてゐた。【江戸時代の國盡】江戸時代になると、日本國盡の單行本が出るやうになつた。正德三年板の國盡の如きはその早き一例である。國盡は、その初め國名を逐次に列擧したのみであつたが、明和二年に「女文國盡」が出て韻文體となり、寛政五年に「女文章名所往來」が出づるに及んで

美文體となつた。「女文國盡」では、

秋津洲の、世も豐かなる御代の春、花の都は平らかに、また安らかに富榮ふ。先づ五畿內こ打圍む、山城大和和泉路や、河內攝津の國こかや。

といつた七五調となり、「女文章名所往來」では、日本全國の名所舊蹟を一覽する旅になぞらへて、國名を織り込んでゐる。この書は文化十年に至つて、「かな文章」と題し、また「日本往來」と題して重板されてゐる。同じく美文體を以て一文に綴り成された國盡に、曲亭馬琴の「國盡女文章」がある。寛政十一年の著作である。これを摸作したものに、天保に「婚禮女國盡」、嘉永に「女婚禮國盡」があつた。

〔明治初期の國盡〕　明治二年に福澤諭吉の「世界國盡」(別項)が出るに及んで、名は國盡であつても、その性質は全く一變するに至つた。單に國名だけを列擧するに止まらないで、地勢・氣候・名所舊蹟・神社佛閣・產業及び人口・政治などを叙した人文地理學の書物となつた。所謂地誌型往來物が、國盡の題名によつて現はれることとなつた。その我が國に關するものでは、「大日本校折國づくし」「改正日本國盡」「日本國盡」「頭語日本國盡」などがある。その世界萬國に關するものでは、前に述べた「世界國盡」を初めとして、「世界都府盡」「世界國づくし」などがあらはれた。〔石川(謙)〕

【參考】封建制下に於ける民主的傾向の胎生　石川謙　○地理科往來物についての研究　同上

日本藝林叢書　にほんげいりんそうしょ　叢書　十二冊【編者】池田四郎次郎・三村清三郎・濱野知三郎【刊行】昭和二年より同四年まで、六

諸國名產繪入國盡（天保年間）

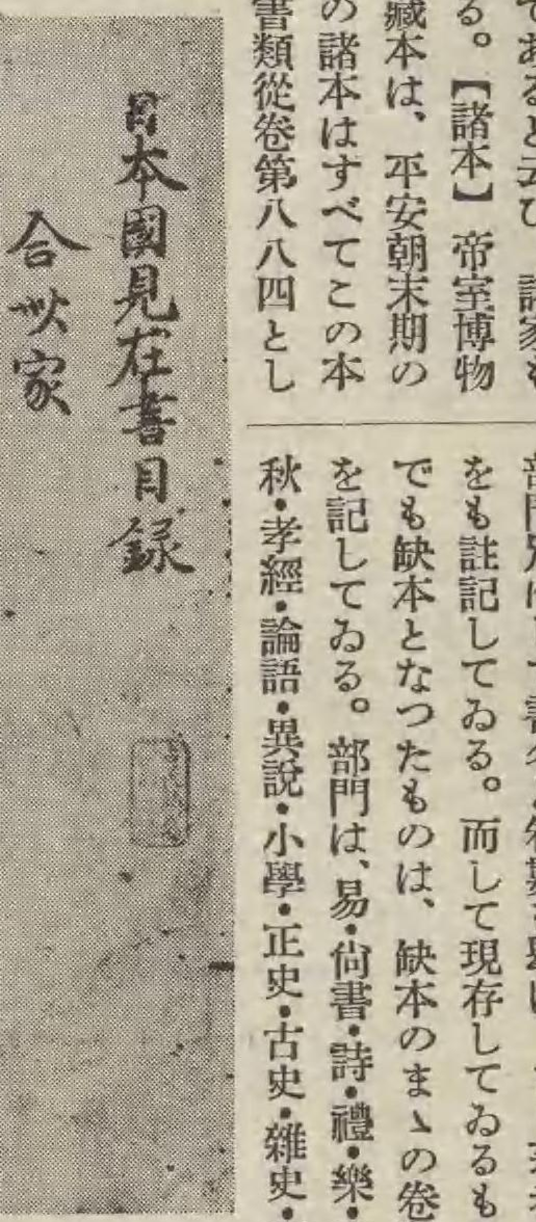
合館。【解說】近世に於ける漢學者の著作を中心に、これに所謂國學者のものを加へた隨筆類を主とした叢書である。隨筆文學復活の世潮に伴つて生れたものと云へよう。豬飼敬所の「驅睡錄」、津阪東陽の「奮讚錄」、山本北山の「作詩志彀」、佐久間熊水の「討作詩志彀」、喜多村信節の「嬉遊笑覽」、大枝四川の「雅遊漫錄」、山梨稻川の「聖藩舐觸」、足代弘訓の「伊勢の家苞」、岡本保孝の「相識人物志」、大田南畝の「細推物理」「杏柳傳語」、松崎慊堂の「慊堂日歷」等約百餘種の作品を收めてゐるが、總索引のない事は甚だ效果を殺ぐものである。三人の編輯者が交代で各册を編纂したらしく、人に依つて內容の色彩を異にしてゐる。〔土井〕

日本後紀　にほんこうき　歷史書　四十卷【編者】藤原緒嗣・源常・藤原吉野・藤原良房・朝野鹿取・布瑠高庭・山田古嗣等。【成立・由來】弘仁十年嵯峨天皇の詔によつて撰修に着手し、淳和天皇これを紹述し、仁明天皇更に緒嗣以下七人に詔して完成に努められた。よつて布瑠高庭・山田古嗣等專ら事に從ひ、承和七年十二月に至つて成つた。【諸本】本書は古くは全く亡佚してゐたのであつたが、天明・寛政の頃、塙保己一の門人稻山行教が殘缺本を得、寛政十二年に五・八・十三・十四・十七・二十・二十二・二十四の八卷を、享和元年に十二・二十一の二卷を刊行して今日に至つた。伴信友校訂本・國史大系本・朝日新聞社本等皆これに基いてゐる。【解說】桓武天皇の延曆十一年正月より、天長十年二月淳和天皇の讓位に至る四朝四十二年間の國史である。「續日本紀」(別項)に次ぎ、體裁すべてそれと同じく、天皇の御動靜を初めとし、社會萬般の事件を叙してゐる。「六國史」の一であり、平安朝初期の史料として最も重要である。〔坂本〕

【參考】佚書考(日本後紀)藤田安藏(史學雜誌五ノ七)○日本後紀に就きて　山崎藤吉(同上九ノ二)

日本好色名所鑑　にほんこうしょくめいしょかがみ　浮世草子　五册【作者】未詳【刊行】元祿五年【諸本】「好色由來揃」(刊年未詳)、「所にかはる色の染分傾城國土產」(刊年未詳)等の改題本がある。前者は近世文藝叢書第十所收。【解說】純文學には屬すべきものではない。遊里に關する諸知識を集めたもので、今その各卷の目次を擧ぐれば、第一卷は傾國之部、京島原由來・江戶吉原由來附三茶三野の出所・同所時花詞・大坂新町由來・同所時花詞。第二卷は異名之部、大臣・太鼓・末社・卸・勘當箱・白魚大臣・月・野暮・粹・團・太夫・天神・白人・誂者・米の由來。第三卷は當世詞源之部、ならずの森のほととぎす・騙間小女郞の出所・浮世詞の出所・大臣女郞太鼓の詞。第四卷は野郞・誂者方・道外・立役者・小歌・三味線・淨瑠璃・說經・人形遣・蜘歌舞・物眞似等の出所を記し、第五卷は諸國遊里之部で、地方の遊里に就いて記してある。〔藤村〕

日本國見在書目錄　にほんこくげんざいしよもくろく　書目　一卷【名稱】「日本見在書目錄」とも、或は單に「見在書目錄」ともいふ。又室生寺本(後出)の表紙に「外典書籍目錄」、尾題に「本朝見在書目錄」とある。【著者・成立】本書卷首に、「正五位下陸奧守兼上野權介藤原佐世奉勅撰」とある。佐世が陸奧守であつたのは、寛平三年(一五五一)から同九年までであつて、普通本書の成立もこの間の事に屬すると云はれてゐる。然るに和田英松博士は、佐世の著「古今集注孝經」の奧に、「寛平六年二月一勘了、于時謫居陸奧多賀府」と記してある事が「台記」に見えて居り、且つ佐世は寛平九年秋、左尙書に任ぜられて歸洛の途中歿した(三善淸行撰「圓珍傳」)のであるから、佐世は少くとも寛平六年の頃は陸奧にあつて(恐らく寛平三年陸奧守となつて、幾ばくもなく下向したのであらう)、同九年の頃まで滯留してゐたことは明かである。而して本書が現在書の目錄であると云ふ性質上、僻遠の陸奧に於て作られたとは思はれず、或は在洛中既に成立してゐたのを、陸奧下向の前にこれを奏覽したのではないかと云つてゐる。而して本書勅撰の動機に關しては、安井息軒は、貞觀十七年(一五三五)正月、冷泉院が燒失して收藏の多くの書籍文書が灰燼に歸した爲め、我が國に當時現存する漢籍の目錄作製が必要とされたのであると云ひ、諸家も多くこの說に贊してゐる。【諸本】帝室博物館所藏の大和室生寺舊藏本は、平安朝末期の書寫と認められ、現存の諸本はすべてこの本の系統に屬する。續群書類從卷第八八四として嘉永四年に刊行したものは、類從本として一定の形式に從つて書き改められて居り、



日本國見在

は樂家二十三部二百七卷と題して十二部許りを擧げてゐるが、室生寺本には部數はすべて記してゐず、書目の順序も異つてゐる。これ等によつて見ると、室生寺本より一層原本の面影を存したものが、室町時代の頃まで傳はつてゐたやうである。【內容】當時我が國に現存した漢籍を著錄した書籍目錄であつて、部門別にして書名と卷數を擧げ、まゝ著者名をも註記してゐる。而して現存してゐるものでも缺本となつたものは、缺本のまゝの卷數を記してゐる。部門は、易・尙書・詩・禮・樂・春秋・孝經・論語・異說・小學・正史・古史・雜史・霸

の我が國に於ける漢學の狀態を窺ひ知る事が出來るのみならず、又漢籍の目錄としては、その成立、支那の「舊唐書」より四十餘年先だつものであつて、支那の正史に於ける經籍志・藝文志の缺を補ふに足り、且つ逸書にして本書によつて僅かにその名を知る事が出來るものも少くない。【備考】狩谷棭齋は本書の考證「日本現在書目證注稿」を草したが、不幸完成するに至らなかつた(この書は、日本古典全集に收む)。棭齋にはこの外、續類從本に註記を加へたものがあり(帝國圖書館藏)、森立之も續類從本に註を加へ、誤脫を訂してゐる(濱野知三郎氏藏)。

【參考】比古婆衣　伴信友　○難波江　岡本保孝　○日本見在書目錄に就いて　狩野直喜(藝文一ノ二)　○日本國見在書目錄　山田孝雄(日本古典全集

擧したもの。卷一に神國・碍馭盧島・大日本等三十六條、卷二に日本魂・言靈・大古文字有無等二十八條、卷三に此國始有書籍・始通外國・朝貢等三十八條、卷四に皇都・宮殿・城等八十五條、卷五に年號・曆・兄方等六十條、卷六に文臺・硯蓋・硯等九十一條を收めてある。本朝上下の行事、器品調度の起原等を知るには便利な書である。延享五年著者の序がある。【著者小傳】度會常彰、本姓久志本、通稱縫殿、號は鶯谷。伊勢外宮の神職河崎延貞の子、出でて久志本繼彥の家を襲ぎ、權禰宜となり、正四位下に敍せられた。實父の遺志を承けて「外宮年中今式」の編纂を完うした。その名京都に聞え、祭主に召されて「日本紀」を講じ、旨に協つたと云ふ。寶曆二年七月八日歿。享年七十七。著述に「神道明辨」「神籍總目志」「齊

名所舊蹟・神社佛閣・產業及び人口・政治などを叙した人文地理學の書物となつた。所謂地誌型往來物が、國盡の題名によつて現はれることとなつた。その我が國に關するものでは、「大日本枝折國づくし」「改正日本國盡」「日本國盡」「韻語日本國盡」などがある。その世界萬國に關するものでは、前に述べた「世界國盡」を初めとして、「世界都府盡」「世界

合館。【解説】近世に於ける漢學者の著作を中心に、これに所謂國學者のものを加へた隨筆類を主とした叢書である。隨筆文學復活の世潮に伴つて生れたものと云へよう。猪飼敬所の「驅睡錄」、津阪東陽の「夢讀錄」、山本北山の「作詩志彀」、佐久間熊水の「詩作詩志彀」、

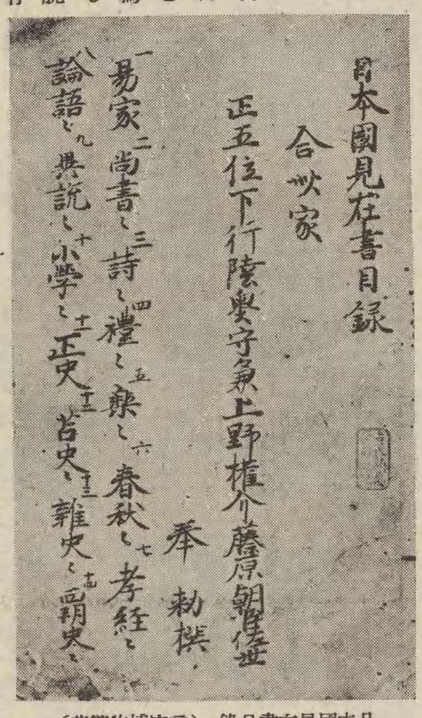
に次き體裁すべてそれと同じく動靜を初めとし、社會萬般の事件を叙してゐる。「六國史」の一であり、平安朝初期の史料として最も重要である。【坂本】

【參考】佚書考(日本後紀)藤田安藏(史學雜誌五ノ七)○日本後紀に就きて山崎藤吉(同上九ノ二)

日本好色名所鑑 にほんかうしよくめいしよかがみ 浮世草子 五册 【作者】未詳 【刊行】元祿五年 【諸本】「好色由來物」(刊年未詳)、「所にかはる傾

時謫居陸奥多賀府」と記してある事が「台記」に見えて居り、且つ佐世は寛平九年秋、左尚書に任ぜられて歸洛の途中歿した(三善清行撰「圓珍傳」)のであるから、佐世は少くとも寛平六年の頃は陸奥にあつて(恐らく寛平三年陸奥守となつて、幾ばくもなく下向したのであらう)、同九年の頃まで滯留してゐたことは明かである。而して本書が現在書の目錄であると云ふ性質

上、僻遠の陸奥に於て作られたとは思はれず、或は在洛中既に成立してゐたのを、陸奥下向の前にこれを奏覽したのではないかと云つてゐる。而して本書勅撰の動機に關しては、安井息軒は、貞觀十七年(一五三五)正月、冷泉院が燒失して收藏の多くの書籍文書が灰燼に歸した爲め、我が國に當時現存する漢籍の目錄作製が必要とされたのであると云ひ、諸家も多くこの説に賛してゐる。【諸本】帝室博物館所藏の大和室生寺舊藏本は、平安朝末期の書寫と認められ、現存の諸本はすべてこの本の系統に屬する。續群書類從卷第八四として嘉永四年に刊行したものは、類從本としての一定の形式に從つて書き改められて居り、又往々誤脫がある。古逸叢書本は、「丁丑五月九日寫竟中島勝延」と云ふ奥書の存する影寫本によつて摸刻したもので、やはり誤寫誤脫が少くない。古典保存會本は、博物館所藏の室生寺本をコロタイプで複製したものであり(山田孝雄博士の解説がある)、活版本續群書類從(第三十輯下)所收のものは、續類從本版本を底本とし、古典保存會本で校合したものである。しかしこれ等の室生寺本系統の諸本は、各部門の下に「如本」又は「私略之」と註したものがある事によつて、抄略本であることが知られるが、「明文抄」(藏原孝範撰)及び「國名風土記奥入」(比古婆衣所引)に記されてゐる本書記載の總卷數は、現存の室生寺本に比すると二千卷程多い。又「河海抄」に



日本國見在書目錄 (帝室博物館藏)

は樂家二十三部二百七卷と題して十二部許りを擧げてゐるが、室生寺本には部數はすべて記してゐず、書目の順序も異つてゐる。これ等によつて見ると、室生寺本より一層原本の面影を存したものが、室町時代の頃まで傳つてゐたやうである。【内容】當時我が國に現存した漢籍を著錄した書籍目錄であつて、部門別にして書名と卷數を擧げ、まゝ著者名をも註記してゐる。而して現存してゐるものでも缺本となつたものは、缺本のまゝの卷數を記してゐる。部門は、易・尚書・詩・禮・樂・春秋・孝經・論語・異説・小學・正史・古史・雜史・覇史・起居注・舊事・職官・儀注・刑法・雜傳・土地・譜系・簿錄・儒・道・法・名・墨・縱橫・雜・農・小説・兵・天文・曆數・五行・醫方・楚辭・別集・惣集の四十家であつて、著錄された典籍の實數は、千五百七十九部、一萬六千七百九十卷に達してゐる。その編述の體裁は、「隋書」經籍志に酷似してゐるので、恐らくは同書を學んだのであらう。【價値】本書は、我が國に於ける漢籍目錄で世に傳はつてゐるものの中最も古いものに屬し、且つ本書が勅撰である事は注目すべきである。而して本書によつて當時の我が國に於ける漢學の狀態を窺ひ知る事が出來るのみならず、又漢籍の目錄としては、その成立、支那の「舊唐書」より四十餘年先だつものであつて、支那の正史に於ける經籍志・藝文志の缺を補ふに足り、且つ逸書にして本書によつて僅かにその名を知る事が出來るものも少くない。

【備考】狩谷棭齋は本書の考證「日本現在書目證注稿」を草したが、不幸完成するに至らなかつた(この書は、日本古典全集に收む)。棭齋にはこの外、續類從本に註記を加へたものがあり(帝國圖書館藏)、森立之も續類從本に註を加へ、誤脫を訂してゐる(濱野知三郎氏藏)。

【參考】比古婆衣仲信友○難波江岡本保孝○日本見在書目錄に就いて 狩野直喜(藝文一ノ一)○日本國見在書目錄 山田孝雄(日本古典全集「日本現在書目證注稿」)○日本見在書目錄に就いて和田英松(史學雜誌四一ノ九) 【岩淵】

日本國現報善惡靈異記 にほんこくげんぽうぜんあくりやういきき 「日本靈異記」を見よ。

日本國風 にほんこくふう 隨筆 六卷 寫 【著者】度會常彰 【解説】自序に、「此國に生れとうまるゝ人、なとかやまと玉しひのなからむ。されと幼童より、或はもろこし、あるは天竺の教へをならひ、其道を尊ふによりて、おのつからそれに化せられ先入主となりて、いまさら其本たるわか國のみちをおろそかにおもふなるへし」と慷慨し、更に進んで「神國につきたる古きならはしを古書のうちよりかうかへ出し、つと〳〵かきめてこれを日本國風と號く。近世のことは人の傳ふへき故におほくはもらすといへとも、類にふれて近きこともましれるなるへし」とあるので、本書の性質が分る。即ち神道家の見地から我が國古來の習俗を列擧したもの。卷一に神國・磯嶋・大日本等三十六條、卷二に日本魂・言靈・大古文字有無等二十八條、卷三に此國始有書籍・始通外國・朝貢等三十八條、卷四に皇都・宮殿・城等八十五條、卷五に年號・曆・兄方等六十條、卷六に文臺・硯蓋・硯等九十一條を收めてある。本朝上下の行事、器品調度の起原等を知るには便利な書である。延享五年著者の序がある。

【著者小傳】度會常彰、本姓久志本、通稱縫殿、號は鶯谷、伊勢外宮の神職河崎延貞の子、出でて久志本繼彥の家を襲ぎ、權禰宜となり、正四位下に敍せられた。寶父の遺志を承けて「外宮年中今式」の編纂を完うした。その名京都に聞え、祭主に召されて「日本紀」を講じ、旨に協つたと云ふ。寶曆二年七月八日歿。享年七十七。著述に「神道明辨」「神籍總目志」「齊居通」等がある。 【和田】

日本語源の研究 にほんごげんのけんきう 語學書 一册 【著者】林甕臣 【刊行】明治三十八年十月、渡邊國武・上田萬年の序文及び自序がある。【内容】本文は(一)語源學の本領、(二)効用、(三)價値、(四)原則、(五)定義、(六)五十音圖式、(七)五十音活用法、(八)反切法の類別、(九)語根・語脈の九章に分れてゐる。著者が最も力を注いだのは、第四章以下である。その所謂原則とは、日本人の自然の聲音を寫象したものが五十音圖であるから、五十音圖は語源學の摸型たる天造物である。即ち五十音圖の縱行横列の音位系統に準則して考究する事が、所謂語源學の原則である。而して若し五十音圖の活用に依つて説明し得ないものは、斷じて國語に非ざるものであると。次に語源學の定義とは、前記原則に從つて語源を究明する事であると。かくて著者は、語

源の一切を五十音圖に依つて説かうとするのである。而して五十音を「祖音」(父音と母音を胚胎する聲素で、喉内聲門に發するウ)、「父音」(子音を母音に孕ませる原聲で、クスツヌフムユルウ)、「母音」(アイウェオ)、「子音」(カキクケコ以下四十五音)の四種に分ち、各音に就いて説明し、次に五十音の離合に依つて國語は成立するのであるが、その離合の活用に(一)音濁、(二)音通、(三)音約、(四)音略、(五)音便の五の格が存する事を説き、次に反切について、(一)角切(すがし)、(二)縦切(たてがし)、(三)横切(よこがし)、(四)坐切(ゐがし)の四種ある事を述べてゐる。最後に語根・語脈とは、二言以上相結ばれて言葉を作るその役目の稱であつて、「語根」は語の根本で、一語の意義を爲し、常に語首に位して居り、「語脈」は語の系脈で一語の種別を示すもので、語尾に位してゐる。「語根」と「語脈」の中間に存するものは「副語根」である。例せば「示す」は「知らしめ爲(す)」の義で、「しらしめ」が語根、「す」が語脈である。「裂く」は「空切れ來」の義で、「そら」は角切で「さ」、「きれ」は語首上略と、ら行下略とで「さく」となる。刀で切るに、切れあぢ餘りて空切れする意等と解し、ア・カ・サの行に從つて、例證を擧げて解説してある。【價値】國語の語源的研究に於て、五十音圖が重要な助をなすものであり、音通・延約・音便等も注意すべきものであり、又語根を切り離して研究すべきものであることなど云ふ迄もない事である。而してこれ等は著者に依つて發見せられたものではなく、江戸時代に於て既に屢々用ひられてゐたものである。而して著者の語源研究に最も多く用ひられてゐるのは延約・反切の法であるが、これ甚だ危險な方法であつて、著者の説が無稽の獨斷に陷つてゐるのは、反切・延約の法に負ふ所が多い。要するに著者は、江戸時代の多くの國語學者と同じく、五十音圖を過大に尊重し、これに依つてのみ國語の語源を究明し得ると信じたところに一切の禍根が存するのである。かくて著者が語源研究上、千古未發の新説で、國語の語源を凡て明かにし得る卓説と誇稱したその學説は、大半は新説ではなく、而して説の新舊に拘はらず、牽強附會に陷つたものであつた事は、著者多年の苦心と對比して頗る遺憾な事である。【龜田】

日本古刻書史(にほんここくしょし) 書誌學 一册 【著者】朝倉龜三(無聲) 【刊行】「國書刊行會出版目錄」(國書刊行會編)の附錄として明治四十二年刊。【解説】刊本の歴史について述べたもの。我が國に於ける刻書の始まりから、慶長末年に開版された所謂角倉本までに及ぶ、所謂古版本に屬するものの沿革に關する著述である。奈良朝・平安朝・鎌倉・室町・桃山及び江戸の五時代に分けて叙述し、各章の終りに開版書跋を附し、且つ數葉の摸刻を挿入してゐる。この書は所謂古版の歴史に止まり、元和以降の刊本に就いては述べてゐないが、纏まつた刊本史としては殆ど最初のものと云ふべく、又個々の事項に對する考察にも創見が少くない。【岩淵】

日本古代文化(にほんこだいぶんくわ) 論著 【著者】和辻哲郎 【刊行】大正九年、岩波書店。【解説】本書は「なき兒の靈に捧ぐ」とある。「一人の人間の死が、偶然に自分の心に呼び起した佛教への驚異及び續いて起つた飛鳥奈良朝佛教美術への驚異が、この種の偉大な價値を創造した日本人は抑も何であるかと云ふ疑問」(序)を著者に植ゑつけたのが、著者がこの書を書くに至つた内部的動機である。この書は、「佛教文化の影響を受けない時代の日本文化の眞相」を明確に説いた研究である。頁數に於て全體の三分の一を占める「上代史概觀」は、「記紀の神代上代の記事が物語であつて歴史ではない」と云ふ立場に立ち、記紀と支那の古文獻を對照して、上代に於ける「日本民族の幼年時代」の文化を説いたものである。「歸化人と上代文化との關係」は、歸化人の日本文化に與へた影響を解剖して、「幼年日本」の知識的活動の起原を明かにしたものである。かくて「古事記の藝術的價値」で、神代史的要素を除いた神話としての「古事記」(別項)を藝術的價値高きものとして、その中に、希臘神話に於ける希臘民族と反對なる菜食民族的な上代日本民族の感情生活を見、それを再び「歌謡」「音樂と舞踏」「信仰と神話」「道德思想」「造形美術」の五項に於て、主に上代支那との關係を明かにしつつより具體的に考察してゐる。この書は著者の「偶像再興」に續く著書で、「自分が此の書を捧げたく思ふのは人類を愛するが故に日本を愛する人々である」と云ふ意圖が隨所に見えてゐる。【平林】

日本古代文字考(にほんこだいもんじかう) 語學書 二卷二册 【著者】落合直澄 【刊行】明治二十一年七月。田中頼庸の序、内藤存守の跋がある。【内容】神代文字(別項)を研究したものである。緒言に、「神代文字の研究としては、神字日文傳(別項)の上に出づるものがない。依つてこの書を根據とし、金石文(別項)等を證として、神代文字の字源・字父母・字子等を研究する」と。なほ鶴峰戊申の「鎖木文字考」は、アナイチ字一體を擧げて解説したものであるが、字源研究の端緒を開いたものである。又田中頼庸の「神字考」は神代文字の傳來について諸説を網羅してゐるからこれ等を參照すべきであると云つてゐる。本文は神代文字を字體に依つて「卜兆字」と「象形字」との二類十二種とし、その字體・字源・組織を考證し、併せてそれ等の文字の存する金石器物の形、發掘の場所等を解説し、又諺文(おんもん)・沖繩字・龜書のことなどをも記してゐる。神代文字と諺文の關係については、その一體阿比留字は諺文と同一體のものであるといひ、「諺文を日本より傳へたりと云も理なきにあらず」と述べてゐる。なほ附錄として清人沈文燮の「日本神字考」の批評、松山百穴の古字の事がある。本書は篤胤の研究を基礎とし、これにその後の研究丼に自分の研究を加へたもので、著者が認めた神代文字の資料は、こゝに集大成せられてゐる。併し牽強附會の説多く、その結果に於ては、篤胤以上に神代文字存在説を有力にしたとは認められない。【龜田】

【備考】落合直澄にはなほ「日本神字文考」「假名起元考」等、神代文字に關する研究が數篇ある。

日本古典全集(にほんこてんぜんしふ) 叢書 百五十册 【編纂・校訂】與謝野寛・與謝野晶子(第一・二期)・正宗敦夫(第一・二・三期) 【刊行】第一期五十册、大正十四年—昭和二年。第二期五十册、昭和元年—三年。第三期五十册、昭和三・四年。【解説】この叢書の特徴とする第一は、内容に於て我が國民文化の根柢を大衆化しようとした點にある。「植民新土の淺薄なる米國式物質文化に近似せんとし、然らざるも西歐舶載の文化に偏倚する傾向」を排撃して、祖國日本の姿を博く認識させるために、倫理・道德・宗教・美術・政治・經濟・風俗・建築・醫學・

園藝等の廣範圍の中から、日本國民の生活背景となるべき一切の名著約五百種一千册を選んで逐次刊行したもので、全二十期の豫定のところ、現在漸くその三期を完了したものである。「日本風土記」「本草和名」「吾妻鏡」「易林本節用集」「狩谷棭齋全集」(以上第一期の内)。「教訓抄」「諸曲百番」「古代數學集」「破提宇子」「ぎや・ど・ぺかどる」「司馬江漢西遊日記」(以上第二期の内)。「伊呂波字類抄」「人倫訓蒙圖彙」「重訂本草綱目啓蒙」「歌舞妓年代記」(以上第三期の内)等は、從來の叢書の中には見出されなかつた書目である。第二の誇るべき點としては、編輯及び校訂擔當者が何れも學的良心を以て刊行に從事した事で、飽く迄慎利を第二義的に見た事、第三期に至つて井に一部分に止まり、而も容易に索められず、寫本で傳はつてゐたが、明治四十四年、國書刊行會から一册にして出版された。【解説】編者が一生の精力を竭して、平治以前に於ける我が國人の漢詩を年代順に蒐集したものである。故に王朝時代の漢詩は殆ど本書に網羅し盡されてゐる。當時の漢詩を研究するには唯一の好資料である。【佐久】

日本詩史(にほんし) 五卷 【著者】江村北海 【刊行】明和八年 【解説】我が國の漢詩の變遷を漢文で列傳體に記述したもの。凡例に「是の編、詩を論じて以て人に及ぼす。人を傳して以て詩に及ぼすにあらず。卽ち亘儒宿學も苟も篇章の存在する者なければ、亦論載せず」とある。【佐久】

正夫・川路柳虹等であつた。なほ採錄された詩人九十名に達し、主なる人々には、前記編纂者以外三木露風・堀口大學・柳澤健・萩原朔太郎・岩野泡鳴・野口米次郎・秋田雨雀・加藤一夫・佐藤春夫・加藤介春・山村暮鳥・河井酔茗等があり、詩壇人・文壇人以外の人では、齋藤勇・豐田實等。これは外國にある年刊詩集の例に倣つた點多く、最初の計畫者は川路柳虹・山宮允等で、英國の「ジョージ王朝詩集」や、フランスの「現代詩人集」の如く、詩作を載せると共に、傳錄として、その年に發表された詩論・詩評の抜萃をも卷末に掲載した。(詩話會參照) 【川路】

日本詩人(にほんしじん) 雜誌 【刊行】大正十年十月創刊、大正十五年十一月終刊。詩話會編輯、新潮社發行。【解説】元來詩話會の創立會といふものの行動とは、切り離すことの出來ない關係にある。「日本詩人」の功績は則ち詩話會の功績と云つてもよからう。かくて自由詩の運動は全國的に效果を收め、會の中心となつた人々もそれ〴〵位置を決定されるやうになると同時に、個人的にも機關の詩誌を有つに至つたので、「日本詩人」は自ら解散の機が熟したのであつた。大正期の詩雜誌としては、發行期間の永かつたことでも唯一であり、影響する範圍の廣かつたことでも他に類がなく、永くその功績を記憶されていゝ雜誌であらう。(詩話會參照) 【河井】

日本詩選(にほんしせん) 漢詩集 十卷 【著者】江村北海 【刊行】安永三年。安永八年に續編も出版せられた。その凡例に、「前編の凡例に

園藝等の廣範圍の中から、日本國民の生活背景となるべき一切の名著約五百種一千册を選んで逐次刊行したもので、全二十期の豫定のところ、現在漸くその三期を完了したものである。「日本風土記」「本草和名」「吾妻鏡」「易林本節用集」「狩谷棭齋全集」（以上第一期の内）。「敎訓抄」「諸曲百番」「古代數學集」「破提宇子」「ぎや・ど・ぺかどる」「司馬江漢西遊日記」（以上第二期の内）。「伊呂波字類抄」「人倫訓蒙圖彙」「重訂本草綱目啓蒙」「歌儛品目」「歌舞妓年代記」（以上第三期の内）等は、從來の叢書の中には見出されなかつた書目である。第二の誇るべき點としては、編輯及び校訂擔當者が何れも學的良心を以て刊行に從事した事で、飽く迄啓利を第二義的に見た事、第三期に至つて井上通泰・山田孝雄・新村出の三氏を編輯顧問に仰いだ事は更に重きを加へた。第三に各册の單價を五十錢として、昭和初頭のいはゆる「圓本時代」の先行をなしたことは注目に値する。併しそのために屢々經營難を來したことは否めない。これ等の特徵の一方に、缺點としては古典を讀み易くするために、假名書を漢字に直した弊害を認めなくてはならない。殊に「西鶴全集」の諸作にその著しい例を見る。例へば「天の岩戸の神代このかたしれたる事」とあるのを「天の岩戸の神代以來知れたる事」の如く、「牢人はねだり者」を「牢人は强請り者」（世間胸算用）の如くに當字をしたのは、些か的外れの親切と云へよう。なほこの刊行狀態に就いては、當時の雜誌「明星」（別項）に編輯後記とも云ふべき記事が連載された。【土井】

日本詩紀（にほんしき） 漢詩集 五十三卷（本集五十卷・外集一卷・別集一卷・首集一卷）【編者】市河寬齋【諸本】從來二種の刊本あれども、俱に一部分に止まり、而も容易に索められず、寫本で傳はつてゐたが、明治四十四年、國書刊行會から一册にして出版された。【解說】編者が一生の精力を竭して、平治以前に於ける我が國人の漢詩を年代順に蒐集したものである。故に王朝時代の漢詩は殆ど本書に網羅し盡されてゐる。當時の漢詩を研究するには唯一の好資料である。（佐久）

日本詩史（にほんしし） 五卷 【著者】江村北海【刊行】明和八年【解說】我が國の漢詩の變遷を漢文で列傳體に記述したもの。凡例に「是の編、詩を論じて以て人に及ぼす。人を傳して以て詩に及ぼすにあらず。卽ち巨儒宿學も苟も篇章の存在する者なければ、亦論載せず」とある。

日本詩集（にほんしふ） 年刊詩集 【編者】詩話會【刊行】大正七年より同十四年まで毎年一册、新潮社。【解說】初めの三年間は全詩壇的な詞華集であつたが、後會員の脫退者があり、別に結社をなし、年刊詩集の刊行等あつたので、實際は詩壇一部の人の詞華集となつたが、外にかくの如き全詩壇的詞華集の年次的刊行はなかつた。この年刊詩集の最初の起りは、詩集類の刊行が出版界の商業主義の結果漸次減少し、且つ又自然主義以後の文壇が詩と乖離する傾向があつた爲め、詩人がその制作を發表する機關を失つたので、詩話會が蹶起して青年詩人の紹介に努めた。編纂員は年次交代したが、主なる人々には、北原白秋・山宮允・日夏耿之介・川路柳虹・室生犀星・生田春月・白鳥省吾・佐藤惣之助・福田正夫・西條八十・福士幸次郎・正富汪洋・百田宗治・富田碎花等があつた。が、後年の首腦者的編纂者は、室生犀星・白鳥省吾・百田宗治・佐藤惣之助・福田正夫・川路柳虹等であつた。なほ採錄された詩人九十名に達し、主なる人々には、前記編纂者以外三木露風・堀口大學・柳澤健・萩原朔太郎・岩野泡鳴・野口米次郎・秋田雨雀・加藤一夫・佐藤春夫・加藤介春・山村暮鳥・河井酔茗等があり、詩壇人・文壇人以外の人では、齋藤勇・豐田實等。これは外國にある年刊詩集の例に倣つた點多く、最初の計畫者は川路柳虹・山宮允等で、英國の「ジョージ王朝詩集」や、フランスの「現代詩人集」の如く、詩作を載せると共に、餘錄として、その年に發表された詩論・詩評の拔萃をも卷末に揭載した。（詩話會參照）【川路】

日本詩人（にほんしじん） 雜誌 【刊行】大正十年十月創刊、大正十五年十一月終刊。詩話會編輯、新潮社發行。【解說】元來詩話會の創立は大正六年十一月だつたが、八年より年刊の「日本詩集」を編纂し、十年になつて始めて「日本詩人」を創刊した。最初の編輯は百田宗治・白鳥省吾、約一年の後白鳥一人の編輯となり、翌年よりは福士幸次郎・福田正夫・川路柳虹・萩原朔太郎・佐藤惣之助等が交々編輯の任に當つた。最初からの主なる執筆者は、川路・福田・白鳥・富田（碎花）・佐藤・福士の諸氏であつた。特輯號としてはポール・クローデル號（大正十二年四月）、回想のイエーツ號（十三年一月）、新詩人號（同六月及び十四年二月）、トラウベル追憶號（十三年九月）、河井酔茗氏五十年誕辰記念號（十四年十一月）、野口米次郎記念號（十五年五月）等がある。每號詩・評論・研究等が揭げられた外、新人の推薦にも努めた。詩話會同人が中心となつて全詩壇に呼びかけたのであつて、同人以外諸家の寄稿も載せた。この雜誌の功績は自由詩勃興の機運に乘じ、詩を普及せしめた點に在る。勿論「日本詩人」と詩話會といふものの行動とは、切り離すことの出來ない關係にある。「日本詩人」の功績は則ち詩話會の功績と云つてもよからう。かくて自由詩の運動は全國的に效果を收め、會の中心となつた人々もそれ〴〵位置を決定されるやうになると同時に、個人的にも機關の詩誌を有つに至つたので、「日本詩人」は自ら解散の機が熟したのであつた。大正期の詩雜誌としては、發行期間の永かつたことでも唯一であり、影響する範圍の廣かつたことでも他に類がなく、永くその功績を記憶されていゝ雜誌であらう。（詩話會參照）【河井】

日本詩選（にほんしせん） 漢詩集 十卷【著者】江村北海【刊行】安永三年。安永八年に續編も出版せられた。その凡例に、「前編の凡例に云く、續編五卷と。今や斯の編卷數之に過ぐ。亦已むを得ざるのみ」と。【解說】本邦古來の漢詩を選集したもの。その凡例に、「日本詩選二十卷、分ちて三編となす。今刻する所十卷を正編となす。元和より今日に至る。前編五卷は寧樂の時より天正の末に至る。業已に脫稿す。理當に併せ刊すべし。但し囊橐空竭、剞劂易きにあらず。他日を待つなり。續編五卷は正編の遺闕なり云々」とある。【佐久】

日本釋名（にほんしゃくみやう） 語學書 三卷三册（或は六册）【著者】貝原篤信【刊行】松下見林の序及び自序、元祿十二年成る。同十三年刊。【諸本】益軒全集卷一所收。【內容】本書は國語の語源を說明した辭書である。先づ內容を、（一）天象、（二）時節、（三）地理、（四）宮室、（五）地名、（六）水火土石金玉、（七）人品、（八）形體、（九）人事、（十）鳥、（十一）獸、（十二）蟲、（十三）魚、（十四）介、（十五）米穀、（十六）草、（十七）木、（十八）飮食、（十九）衣

音通・延約・音便等も注意すべきものであり、又語根を切り離して研究すべきものであることなど云ふ迄もない事である。而してこれ等は著者に依つて發見せられたものではなく、江戸時代に於て既に屢々用ひられてゐたものである。而して著者の語源研究に最も多く用ひられてゐるのは延約・反切の法であるが、これ甚だ危險な方法であつて、著者の說が無稽

日本古代文化（にほんこだいぶんくわ） 論著 【著者】和辻哲郎【刊行】大正九年、岩波書店。【解說】本書は「なき兒の靈に捧ぐ」とある。「一人の人間の死が、偶然に自分の心に呼び起した佛敎への驚異及び續いて起つた飛鳥奈良朝佛敎美術への驚異が、この種の偉大な價値を創造した日本人は抑も何であるかと云ふ疑問」（序）を著者に植ゑつけたのが、著者がこの

る。【內容】神代文字（別項）を研究したものである。緒言に、「神代文字の研究としては、神字日文傳（別項）の上に出づるものがない。依つてこの書を根據とし、金石文（別項）等を證として、神代文字の字源・字父母・字子等を研究する」と。なほ鶴峰戊申の「鍥木文字考」は、アナイチ字一體を擧げて解說したものであるが、字源研究の端緒を開いたものである。又

十册、昭和元年―三年。第三期五十册、昭和三・四年。【解說】この叢書の特徵とする第一は、內容に於て我が國民文化の根柢を大衆化しようとした點にある。「植民新土の淺薄なる米國式物質文化に近似せんとし、然らざるも西歐舶載の文化に偏倚する傾向」を排擊して、祖國日本の姿を博く認識させるために、倫理・道德・宗敎・美術・政治・經濟・風俗・建築・醫學・

服、(廿)文具、(廿一)武具、(廿二)雜器、(廿三)虛字の二十三類に分ち、各類に從つて國語の單語を出し、その語源を說明してゐる。著者は凡例に於て語源研究の方法を記してゐる。曰く「和語をとく事は謎をとく如し(中略)、是をとくに凡そ八の要訣あり。(一)に自語は天地男女父母などの類、上古の時自然に云出せる語也。其故はかりがたし、みだりに義理をつけてとくべからず。(二)に轉語は五音相通によりて名づけし語也。上を轉じて君とし、高を轉じて竹と(中略)するの類也。又轉語にして略語をかねたるも多し。且つ音を轉じて和訓とせし類あり(中略)。(三)に略語はことばを略するを云。ひゆるを氷とし(中略)、前垣を籬とし、きこえを聲とするの類也。上略中略下略有。又略語にして轉語をかねたるも多し。(四)に借語は他の名とことばをかり、其まゝ用ひて名づけたる也。日をかりて火とし(中略)、炭をかりて墨とするの類也。(五)に義語は義理を以て名づけたる也。諸越を唐とし(中略)、明時を曉と(中略)するの類。又是を合語とも云。二語を合せたる故也(下略)。(六)に反語はかな返し也。(中略)きゑをけとし、見へをめとし、やすくきゆるを雪とするの類多し。(七)に子語は母字より生ずる詞を云。(中略)月を母字として晦、朔を生(中略)ずる類を子語と云。(八)に音語也。音語に三種あり。一に字の音をそのまゝ用ひて和語とせしは、菊・桔梗・繪馬・柘榴など也。二に唐音を其まゝ和語に用ひたるあり、杏子・石灰・菠薐などの類也。三には梵語を用たる有。ほとゝぎす・尼・猿・斑などの類也。和語千萬おほしといへども此八の外に出ず云云」と。なほ語源研究の實際に當つての注意として、上代の國語を解くのに漢字に當て、また近代の國語に當てて解いてはならぬ事、母語から子語を解くのは當然であるが、子語から母語を解いてはならぬ事。解き難い語は强ひて解かぬ事。素直に解くべき事。訓が同じで意の異る語に注意すべき事等を記してゐる。【價値】本書は劉熙の「釋名」に倣つて著はしたものである。國語の語源研究に就いては本書より前に松永貞德の「和句解」(別項)があり、又契沖の「圓珠庵雜記」(別項)の中に見えてゐる。が、語源研究に原則を立てたのは本書が最初である。而して本書に擧げた原則は、今日から見ても大體正鵠を得てゐるものであつて、江戶初期にこれだけのものを自ら編み出したことは、頗る敬服に値する。併しその本文に於ける語源の解釋は、貞德や契沖と殆ど同じく、凡て常識を以て解釋して居り、屢々牽强附會の說を立ててゐるのであつて、學術的に多くの價値を有するものではない。 〔龜田〕

日本主義 にほんしゅぎ 【由來】維新以後の日本を建て直すために、國家的政策として明治初期から盛んに採用された世界文化輸入主義は、明治二十年頃になつて、反動としての日本主義を呼び起した。過度な歐化主義に對する反感やそれを整理する必要の自覺や、また打棄てられた過去の國民生活に還らうとする回顧の感情や、多樣な動機から成るもので、陸羯南(別項)が明治二十二年二月に、新聞「日本」を起し、その發刊の宣言に、「近世の日本は其本領を失ひ、自ら固有の事實を棄つるの極、殆んど全國民を擧げて泰西に歸化せんとし、日本と名づくる此島地は、漸く將に輿地圖の上に、たゞ空名を懸くるのみならんとす。『日本』は日本の一旦亡失せる國民精神を回復し、且つ之を發揚せんことを以て自ら任ず」とある。「日本」は國粹主義を社是とした唯一の新聞で、日本主義の先驅と見るべきもの。次に明治二十五年、井上哲次郞(別項)と基督敎徒の間に、宗敎と敎育の關係に對する國粹論の論爭があり、同二十七・八年の日淸戰爭の勃發によつて、民族自覺の提唱はますく高潮され、同三十年に、日本主義團體の集團が結成され、大日本協會の名で、機關雜誌「日本主義」第一號が、五月二十日に發行された。中心となつた人々は、高山樗牛(別項)・井上哲次郞・竹內楠三等であり、樗牛が同年五月號の「太陽」に揭げた「日本主義」の一篇は、その主張を內容的に說明してゐる。【解說】雜誌「日本主義」發刊の宣言によれば、「今や外來の潮流愈々其勢を加へ」、「世人動もすれば昏亂眩惑、其立脚地を失ひ、自主獨立の精神によつて、之を已れに同化するの要を知らず」、「殊に宗敎の如きは、精神的團結を成して內地に入り來り、國民の團體に屬するものを誘化して、引離しつゝあり」、「是等國家に有害なる傾向を防遏せんことは到底孤臂を振つて爲し得べきにあらず、必ずや精神的團體を成して、我自主獨立の精神を發揮し、以て國民を結合するの基礎を建設し、併せて世界をして、我儼として樹立する所あるを知らしめざるべからず」とあり、井上哲次郞は、「宗敎の將來に關する意見」で、「抑も日本主義は、日本民族の自由的精神を發揮し、我邦人をして、列國競爭の間において、其據るべき方針を知らしむる所以なり。人は誰しも國民の一分子にして、又同時に世界の一分子なり、日本主義は、日本國民の一分子として、取るべき方針を示すに過ぎず」「日本主義は、日本民族自衞の主義なり」といふ。また樗牛の「日本主義」も、その半ばを基督敎排擊に擧げてゐる。雜誌「日本主義」が發刊されぬ前に、「新神道」主義が出ると云はれるのを見ても、初めは基督敎を對象とした狹い意味の國家主義の提唱であつたかの觀があるが、それ以上に、一般日本主義の廣義な解釋も看取されぬではない。樗牛の「日本主義」の要點を擧げれば、大體次の如くである。

一、「日本主義とは何ぞや、國民的特性に本ける自主獨立の精神に據りて、建國當初の抱負を發揮せむことを目的とする所の道德的原理即ち是なり」。

一、「國家の眞正なる發達は、國民の自覺心に基かざるべからず」「而も是の如き國民的特性は、精嚴なる歷史的、はた比較的考察に依るに非れは認識する能はず」、この考察によつて、日本國民的特質の優秀を認識せよといふ。

一、「現實に於ける一切の活動は、其國家的たることに於いて最も有効なりとす。國家は人生寄託の必然形式にして、又其の主上權力なり」として、國家至上主義を主張する。

一、「君民一家は我が國體の精華なり」「日本主義は、是故に國祖を崇拜して、常に建國の抱負を奉體せむ」として、皇室中心主義を高調する。

一、「我が國民は公明快濶の人民なり、有爲進取の人民なり」「是に於てか、日本主義は、光明を旨とし、生々を尙ぶ」として、かゝる國民性の特徵の發達を待望する。

一、「日本主義は、平時にあつて武備を懈らず愈々國民的團結を鞏固にせむ」として、軍國主義の必要を認める。

一、「日本主義は、宗敎にあらず、哲學にあらず、國民的實行道德の原理なり」と、國民の指導要素を日本道德に置く。

日本主義運動は、かくて世界主義に對立し、日本國家主義觀念を體系づけたが、主要著た

る樗牛自身が、次第にそれと對立する個人主義思想に轉向すると共に、社會の狀態も、社會主義思想の擡頭を見るやうになり、その後、岩野泡鳴・三井甲之(各別項)などによつて後繼されたが、しかし一般には明治三十三年頃を轉機として、日本主義は一まづ思想界から影をひそめた。日本主義の聲が再び立ち上つたのは、昭和六年後半期の、日支事件の前後からであり、それは明治期の日本主義を一層擴大した意義のものであると共に、一層內容が複雜であり、殊に前者が基督敎を目の敵とするのに對して、これはマルクス・レーニン主義と對立する點でも違つてゐる。 〔千葉〕

日本儒林叢書 にほんじゅりんそうしょ 叢書 六册【編者】關儀一郞【刊行】昭和二年より同

假名草紙(過渡時代小說)・浮世草紙(西鶴本・好色本・八文字屋本等)・讀本(附、寫本軍記實錄目錄)・滑稽本・洒落本・人情本・草雙紙・行成表紙本・赤小本・赤本・黑本・靑本・黃表紙・合卷の十四項目に分けてゐる。外に、書名・作者及び著述索引がある。收載書目約六千に達する。我が國に始めてやゝ完備した小說書目を齎した努力は極めて大であるが、殊に近世小說に於ては編者が原本を寓目するに從つて編した點のみでも見るべきものがある。後年編者は原版の大增訂を施し、更に約三千四百部の小說を加へて、本書の價値を更に大にした。

【附記】編者歿後、山崎麓編「日本小說書目年表」が近代日本文學大系(別項)の附錄として刊行されたが、これは本書を基礎として多少の增訂を加へたものである。 〔土井〕

の七種に分ち、これをその單語の組織效用に依つて更に數種に分けて說明してゐる。中篇は「働く辭」即ち形容詞と動詞で、形容詞の活用を次の如く說いてゐる。

幹言	普通變格	前變格	末變格	こそ變格
早	早く	早き	早し	早けれ
宜	宜しく	宜しき	宜し	宜しけれ
長々	長々しく	長々しき	長々し	長々しけれ

而して助動詞「べし」はべくて、べからずの如き分詞を具へないが、一箇の形容詞であるから「不足形容詞」と云ひ、實名詞に不規則動詞の「なる」を加へたものを類似形容詞と云ふ。又形容詞を諾然と拒否に分け、更に「直說法」(これを現在・過去・未來に分け、その各々を末變格・

變格の大綱である。而して變化を規則變格と不規則變格とに分ち、前者は第一(往)、第二(譽)、第三(過)、第四(見)の四種とし、後者は第一(爲)、第二(來)の二種として說明してゐる。下篇は文章法と音韻とを說いてゐる。文章法には、次の四種の規則を立ててゐる。(一)「實名詞・關係詞にかうむらする働詞・形容詞は前變格を用ひる」。(二)「文章の末にある働詞・形容詞は末變格を用ひる」。(三)「一文章の二つ以上の連合する句から成り立つ時は、末の句にのみ末變格を用ひ、その外の句每に普通變格を用ひる」。(四)「完全な文章は總て働詞又は形容詞にて終る」と。而してそれぞれ例外あるものを記し、次に國語の音韻について記してゐる。先づ文字について、母音は a i u e o の五つである。母音は皆

る稍牛自身が、次第にそれと對立する個人主義思想に轉向すると共に、社會の狀態も、社會主義思想の擡頭を見るやうになり、その後、岩野泡鳴・三井甲之（各別項）などによつて後繼されたが、しかし一般には明治三十三年頃を轉機として、日本主義は一まづ思想界から影をひそめた。日本主義の聲が再び立ち上つたのは、昭和六年後半期の、日支事件の前後からであり、それは明治期の日本主義を一層擴大した意義のものであると共に、一層内容が複雜であり、殊に前者が基督敎を目の敵とするのに對して、これはマルクス・レーニン主義と對立する點でも違つてゐる。〔千葉〕

日本儒林叢書（にほんじゅりんそうしょ）　叢書　六冊　【編者】關儀一郎　【刊行】昭和二年より同四年まで、東洋圖書刊行會。　【解說】近世漢學者の著作を編したもので、第一・二卷隨筆部、第三卷史傳書簡部、第四卷論辯部、第五・六卷解說部に分れてゐる。伊藤東涯・五井蘭洲・尾藤二洲・廣瀨旭莊・久米訂齋・安積艮齋・長久保赤水・鹽谷宕陰・皆川淇園等百餘家の著作百七十三種二百六十卷を收めてゐる。國學者の隨筆が珍重されると同じ意味に於て、これ等の著作が集大成されてゐることは甚だ便利である。各卷頭に解說があり、底本の出所、作者の小傳がある。又第六卷には總索引を附して統一ある編輯を見せてゐる。〔土井〕

日本小說年表（にほんしょうせつねんぴょう）　書目　一冊　【編者】朝倉無聲　【刊行】第一版明治三十九年、金尾文淵堂。增訂版（新修の二字を冠す）大正十五年、春陽堂。　【解說】内容を古代小說・近世小說に二大別し、前者を更に平安朝時代・鎌倉時代・室町時代の三に分け、附錄として舞の本・散逸物語目錄がある。後者を細分して、假名草紙（過渡時代小說）・浮世草紙（西鶴本・好色本・八文字屋本等）・讀本（附、寫本軍記實錄目錄）・滑稽本・洒落本・人情本・草雙紙・行成表紙本・赤小本・赤本・黑本・青本・黃表紙・合卷の十四項目に分けてゐる。外に、書名・作者及び著述索引がある。收載書目約六千に達する。我が國に始めてやゝ完備した小說書目を齎した努力は極めて大であるが、殊に近世小說に於ては編者が原本を寓目するに從つて編した點のみでも見るべきものがある。後年編者は原版の大增訂を施し、更に約三千四百部の小說を加へて、本書の價値を更に大にした。　【附記】編者歿後、山崎麓編「日本小說年表」が近代日本文學大系（別項）の附錄として刊行されたが、これは本書を基礎として多少の增訂を加へたものである。

日本小文典（にほんしょうぶんてん）　語學書　一卷一冊　【著者】チャムブレン（B. H. Chamberlain）　【刊行】明治二十年四月　【内容】自序に本書は「皇國語ののりの大むねを示し、かつは童たちのためにもとてつゞまやかなる言葉と談話に用ひる言葉とがあつて、前者は後者よりも難解であるから、今は前者に就いて記す」と。次に文法を大別して單語法と文章法の二つになると云つてゐる。さて本文は上中下三篇に分ち、上中二篇は單語法を說いてゐる。單語は、「働かざる辭」と「働く辭」とに分ち、「働かざる辭」を實名詞・代名詞・副詞・接續詞・數詞・間投詞・關係詞・假名草紙（過渡時代小說）・浮世草紙（西鶴本・好色本・八文字屋本等）・讀本（附、寫本軍記實錄目錄）・滑稽本・洒落本・人情本・草雙紙・行成表紙本・赤小本・赤本・黑本・青本・黃表紙・合卷の十四項目に分けてゐる。外に、書名・作者及び著述索引がある。收載書目約六千に達する。我が國に始めてやゝ完備した小說書目を齎した努力は極めて大であるが、殊に近世小說に於ては編者が原本を寓目するに從つて編した點のみでも見るべきものがある。後年編者は原版の大增訂を施し、更に約三千四百部の小說を加へて、本書の價値を更に大にした。　【附記】編者歿後、山崎麓編「日本小說年表」が近代日本文學大系（別項）の附錄として刊行されたが、これは本書を基礎として多少の增訂を加へたものである。

日本小文典（にほんしょうぶんてん）　語學書　一卷一冊　【著者】チャムブレン（B. H. Chamberlain）　【刊行】明治二十年四月　【内容】自序に本書は「皇國語ののりの大むねを示し、かつは童たちのためにもとてつゞまやかなる言葉と談話に用ひる言葉とがあつて、前者は後者よりも難解であるから、今は前者に就いて記す」と。次に文法を大別して單語法と文章法の二つになると云つてゐる。さて本文は上中下三篇に分ち、上中二篇は單語法を說いてゐる。單語は、「働かざる辭」と「働く辭」とに分ち、「働かざる辭」を實名詞・代名詞・副詞・接續詞・數詞・間投詞・關係詞の七種に分ち、これをその單語の組織效用に依つて更に數種に分けて說明してゐる。中篇は「働く辭」即ち形容詞と動詞で、形容詞の活用を次の如く說いてゐる。

幹言	普通變格	前變格	末變格	こそ變格
早	早く	早き	早し	早けれ
宜	宜しく	宜しき	宜し	宜しけれ
長々	長々しく	長々しき	長々し	長々しけれ

而して助動詞「べし」はべくて、べからずの如き分詞を具へないが、一箇の形容詞であるから「不足形容詞」と云ひ、實名詞に不規則動詞の「なる」を加へたものを類似形容詞と云ふ。又形容詞を諸然と拒否に分け、更に「直說法」（これを現在・過去・未來に分け、その各々を末變格・前變格・こそ變格に分けてゐる。又別に普通變格の一項を置いてゐる）・「曲說法」（これを關係・推量・實許可・推量許可の四種に分つ）・「命令形ことば」及び「分詞」に分けて說明してゐる。動詞は諸然と拒否とに分ち、これを直說法と曲說法とに分ち、諸然の直說法は、現在・已然・第一過去・第二過去・第三過去・第四過去・未來・過去未來の八つに、拒否の直說法は現在・過去・未來の三つに分ち、この各々を末變格・前變格・こそ變格の三種に分けてゐる。諸然の曲說法は現在關係・過去關係・現在推量・過去推量・現在實許可・現在推量許可・過去許可・希望の八つに分ち、拒否の曲說法は現在推量から過去許可まで七種に分つてゐる。これに次いで「同時のことば」（「つゝ」の接續したもの）（拒否にはなし）。「命令法」「分詞」（「て」「で」「ず」の續いたもの）。「べし變格」「たし變格」「けり變格」（べし、たし、けりが接續したもの）を說いてゐる。これ動詞變格の大綱である。而して變化を規則變格と不規則變格とに分ち、前者は第一（往）、第二（響）、第三（過）、第四（見）の四種とし、後者は第一（爲）、第二（來）の二種として說明してゐる。下篇は文章法と音韻とを說いてゐる。文章法には、次の四種の規則を立ててゐる。（一）「實名詞・關係詞にかうむらする働詞・形容詞は前變格を用ひる」。（二）「文章の末にある働詞・形容詞は末變格を用ひる」。（三）「一文章の二つ以上の連合する句から成り立つ時は、末の句にのみ末變格を用ひ、その外の句毎に普通變格を用ひる」。（四）「完全な文章は總て働詞又は形容詞にて終る」と。而してそれぞれ例外あるものを記し、次に國語の音韻について記してゐる。先づ文字について、母音は a i u e o の五つである。母音は昔は皆短く發音したのであるが、後に二綴が一綴になり、又漢字音が入つて、長母音が出來た。子音は b c d f g h j k m n p r s t w y z の十七である。但し c は ch の組立にのみ用ひてゐる。この内 b s t の三音は各母音に等しく冠らせた。即ち ba. bi. bu. be. bo. sa. si. su. se. so. ta. ti. tu. te. to. と唱へたのであるが、近世に至りて * 印の音は音が變化した。又 w はもとワキエヲの四つに用ひたが、今はワ wa にのみ殘り、y はもとヤユエヨの四つにあつたが、今は ya. yu. yo. の三つにのみ殘つてゐる。次に音便を羅馬字に寫してその變化を述べ、また更に聲音組織を分解して、語源を求めることを記してゐる。

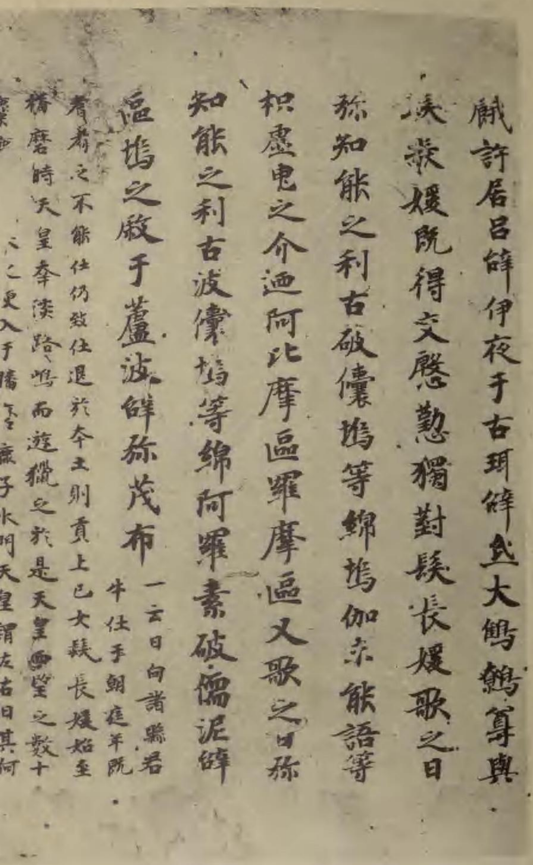
【影響】西洋文典風に組織した國文典は「語學新書」（別項）以後數種あるが、その後年、斯學界に影響を及ぼした點は本書が第一である。

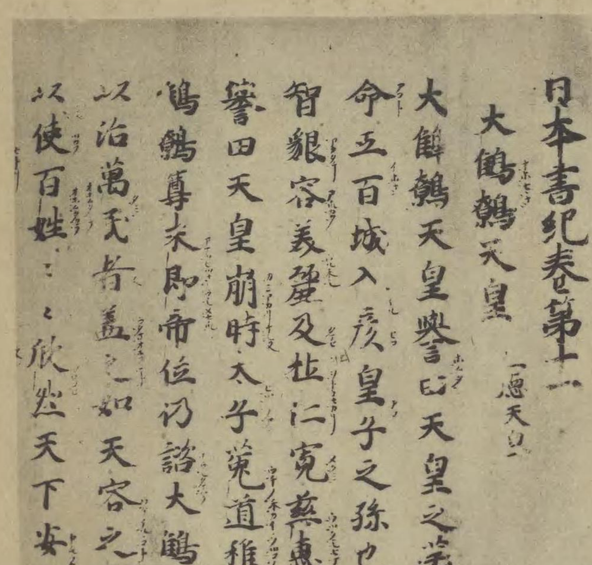
それはその所説が勝れてゐる事と、文部省の命に依つて著はし出版したと云ふ權威とに依るものである。併し著者が外國人であつた爲めに、國粹主義的思想から反感を有つた學者も少くない。谷千生（別項）の如きは、その代表者で、「ビー・エッ・チャムブレン氏日本小文典批評」（明治二十年十一月刊）と題する書を著はして反駁的批評を試み、更に外國人に國文典を編ましめた事の非を文部省へ行つて陳述しようとした程であつた。なほ外に、生川正香の「日本小文典辨惑」（一卷）がある。【龜田】

日本諸家人物誌（にほんしょかじんぶつし）　傳記　二卷一册【著者】浪華の南山道人。皆川淇園閲【刊行】寛政四年【解說】卷頭には皆川淇園の題辭がある。儒家部・醫家部・歌學國學家部・書畫家部の四部に分類し、慶長以後の名人の略傳を假名交り文で記述したもの。同續編一册がある。前編に漏れた人々を補記したものである。【佐久】

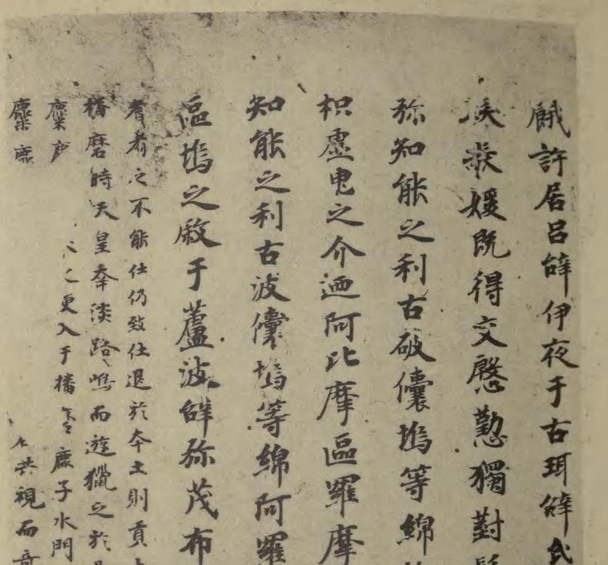
日本書紀（にほんしょき）　歴史書　三十卷【編者】舍人親王・太朝臣安麻呂等。【名稱】本來は「日本紀」といつたものらしい。それはこの書に次ぐ國史を「續日本紀」といつた事や、その「續日本紀」に本書を「日本紀」といつてゐる事やなど、色々の證據から推測せられる。併し現今慣用の「日本書紀」の名も、既に「弘仁私記」の序や平安朝の古寫本などに見えるから、由來久しいことであり、一概には斥けられない。【成立・由來】本書撰修の遠き原因として少くとも次の二つの思想を見逃すことはできない。一つは現實の社會狀態の漸く紛亂錯雜するに從つて必然的に人々の心に釀された建國以來の國史に對する反省或は憧憬であり、今一つは大陸文化の影響として、又は對等國交の必要として起り來つた大陸諸國に劣らない國史を撰修することへの要求であると考へられる。そしてこれ等の機運に促されて、聖德太子は「天皇紀」「國記」等を撰修せられ、天武天皇は「帝紀」及び上古の諸事を記錄せしめられたのであるが、本書はそれ等の事業の後を紹ぎ、より十分なる用意の下に編纂を始められ、養老四年完成するに至つたものである。持統天皇五年に大三輪氏等十八氏に祖先の纂記を上らしめてゐることは、恐らく本書撰修の材料とするの意味であり、和銅七年二月紀清人・三宅藤麻呂に、國史を撰ばしめたと傳へられるのも、二人が本書撰修の事業に加はつたことを示すのであらう。【諸本】古來尊重された爲めに、寫本・刊本共に頗る多い。古寫本として今日有名なるもののみでも凡そ四十種に及ぶといはれるが、その中、大體鎌倉時代以前の寫本と認められるもので、大阪每日新聞社發行の祕籍大觀に收められたものだけでも次の四種に上つてゐる。（一）神代卷上殘闕（佐佐木信綱氏藏）・應神紀一卷（田中敎忠氏藏）。（二）皇極紀・推古紀、合二卷（岩崎文庫藏）。（三）仁德紀・雄略紀・繼體紀・敏達紀、合四卷（前田侯爵家藏）。（四）神代卷下・應神紀・履仲紀・反正紀・允恭紀・安康紀・雄略紀・淸寧紀・顯宗紀・仁賢紀・武烈紀・繼體紀・用明紀・崇峻紀・推古紀・舒明紀・皇極紀、合七帖（圖書寮藏）。以上の中、佐佐木本及び田中本は遲くも貞觀時代を下らず、岩崎本は寬平・延喜の頃、前田本は藤原時代、圖書寮本は各帖相違があるが、大部分藤原時代より院政時代前後に亙るものと考へられてゐる。その外北野神社の藏本二十八帖は、一部後世の補寫を含むが、なほ院政時代の寫本を存し、吉田子爵家（神代卷。鎌倉時代寫）・彰考館（神代卷。嘉曆三年書寫）・熱田神宮（第一卷より第十五卷まで、うち第十一卷缺。永和年間書寫）・三島神社（神代卷・神武紀。正長元年書寫）等それ〴〵注意すべき古寫本を藏してゐる。刊本では、慶長四年後陽成天皇の聖旨により、活字を以て神代卷を刊行した所謂慶長勅版本最も古く、次には慶長十五年、木活字を以て全三十卷の刊行せられたいはゆる慶長活字本がある。爾來神代卷二卷、或は全三十卷のそれぞれ刊行せられること頗る多く、前者に寬文七年・延寶七年（中野宗左衞門板行）・元祿八年（松下見林校訂）・寶永六年（井上秋閑藏板）・享保三年（梅村市郎兵衞刊）・享保十四年（烏谷長庸校訂）・寬政三年（丹鶴叢書本）、後者に寬文九年・寬政五年（小寺清先校訂）・文政三年（大關增業校訂、黑川領主藏版）・文政十三年（寬文九年版再刻）等の諸版本がある。明治以後の活版本又多く、田中頼庸・伴信友・飯田武郷等の校訂本、國史大系本・朝日新聞社本・皇學叢書本を初め、假名交り文に、岩波文庫本・日本文學類從本等枚擧に遑もない程である。外國語に飜譯刊行されたものにも、アストンの英譯、フロレンツの獨譯等がある。

【內容】神代の初めより持統天皇に至るまでの編年體の歴史書である。記述の對象は天皇の御系統及びその御動靜を中心としてゐるのであるが、それに關聯して外國との關係、臣氏の系統・行動等も記されてゐる。そして一見すれば、前半は純然たる說話、若しくは說話的色彩の甚だ濃厚なる記事を以て滿たされてゐるが、後半は以後の國史に於けると大差なき歴史事實の記載せられてゐることが分る。即ち卷第一・二は、神代卷といはれ、古くより傳へられた國土創造に關する說話を集成整理したものである。卷第三以下は、神武天皇に始まる御歴代の記事であるが、その內容は說話の繼ぎ合せといふも不可なく、この傾向は次第に薄くなりつつも、大體卷第十五・十六、顯宗・仁賢・武烈天皇の頃まで引續いてゐる。卷第十七、繼體天皇の頃よりは、朝鮮との國際關係が頻繁に記されて、次第に歴史的記事の性質を增し、卷第二十五、孝德天皇あたりからは、もはや說話的分子は殆ど影をひそめてゐると言つてもよい。さてかくの如きは、本書がそれ〴〵の材料を極めて忠實に取入れて編纂し、敢て後の心を以て改刪を施さなかつた事に基くのであらう。即ち本書の材料は、古い時代の部分に於ては、全く皇室及び諸家に語られた古傳說のみに基いて居り、時の進むに從つて朝鮮の記錄を參取し、近い所は官府所藏の記錄・文書を採用したものであるらしい。神代卷に一書曰として同一事項に關する諸說を列擧してゐることは、編者の公平なる態度を示すものとして世に喧傳されることであるが、それもこの場合に併せ考へることができるであらう。次に本書の文章は「古事記」（別項）と異つて、概して純粹な漢文である。隨つて一々の語句が支那の古典に典據を有する事は固より、まゝ一連の文章がその儘移植されてゐる事、例へば開卷第一の條が「淮南子」より出で、雄略天皇の詔が「隋書」文帝の詔に出でてゐる如きもある。而してこれを以て本書の史籍としての價値が甚だ劣るものと古くは考へられたけれど、必ずしもしかく考ふべきものではない。且つ文章は漢文ではあるけれども、これを讀むには國語を以てしたのであつて、編者も所々に註をして訓を施してゐるが、古寫本には全部に亙つて精密なる傍訓

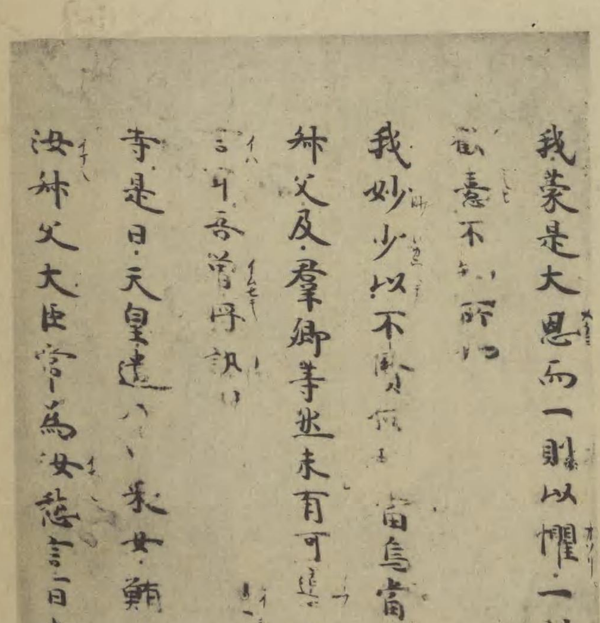




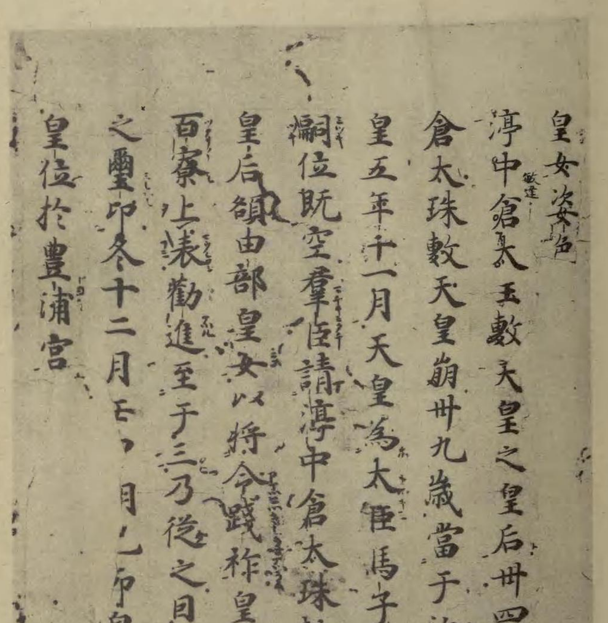
前田侯爵家藏本　仁徳紀



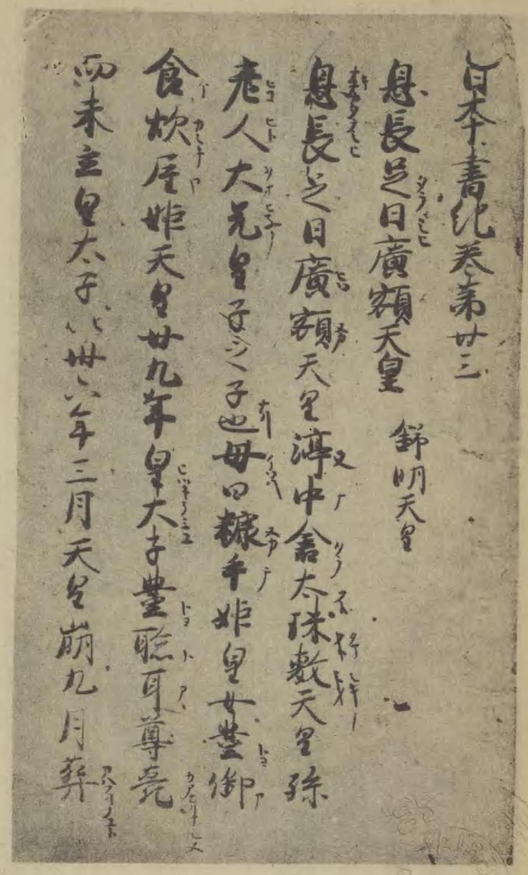
田中教忠氏藏本　應神紀



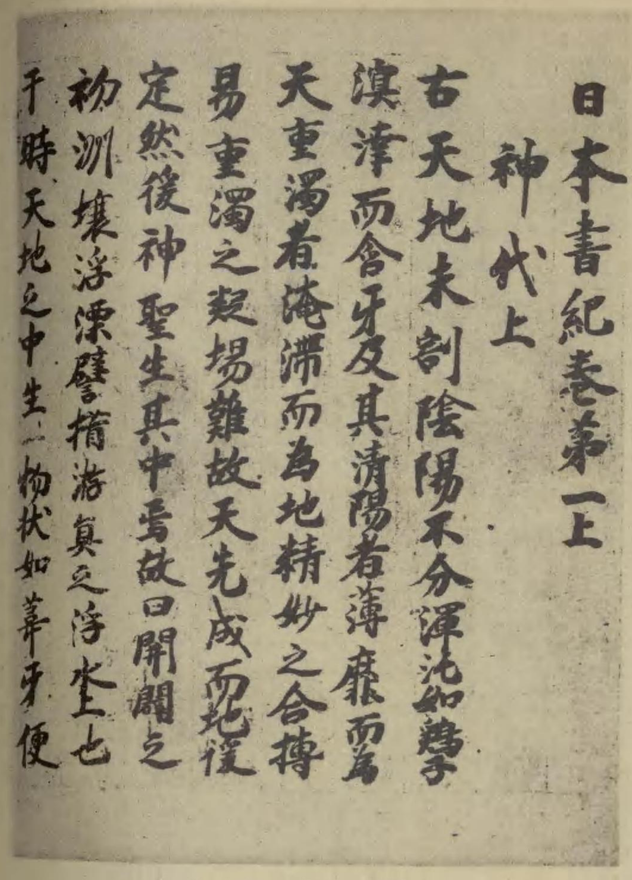
宮内省圖書寮藏本　應神紀



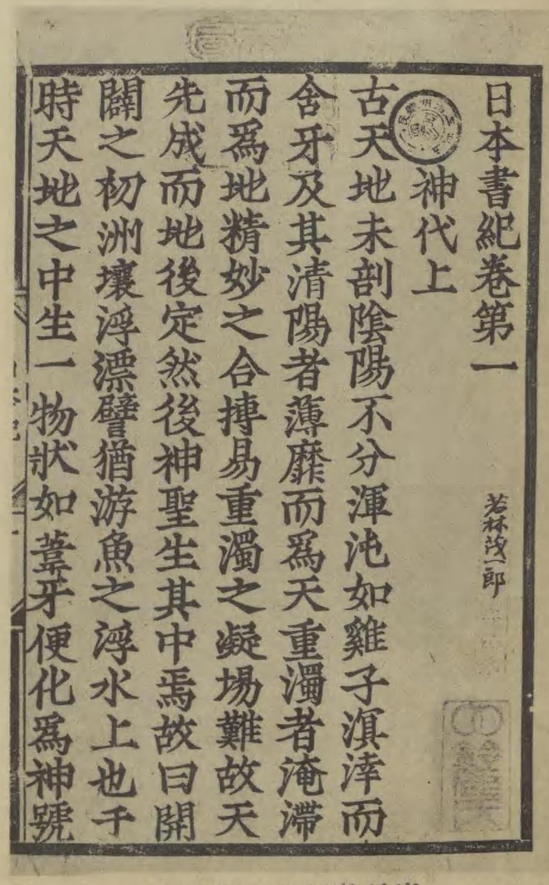
東洋文庫藏本　推古紀


日本書紀卷第廿三
息長足日廣額天皇 舒明天皇
息長足日廣額天皇渟中倉太珠敷天皇孫
押人大兄皇子之子也母曰糠手姫皇女豊御
食炊屋姫天皇廿九年皇太子豊聰耳尊薨
而未立皇太子卅一年三月天皇崩九月葬

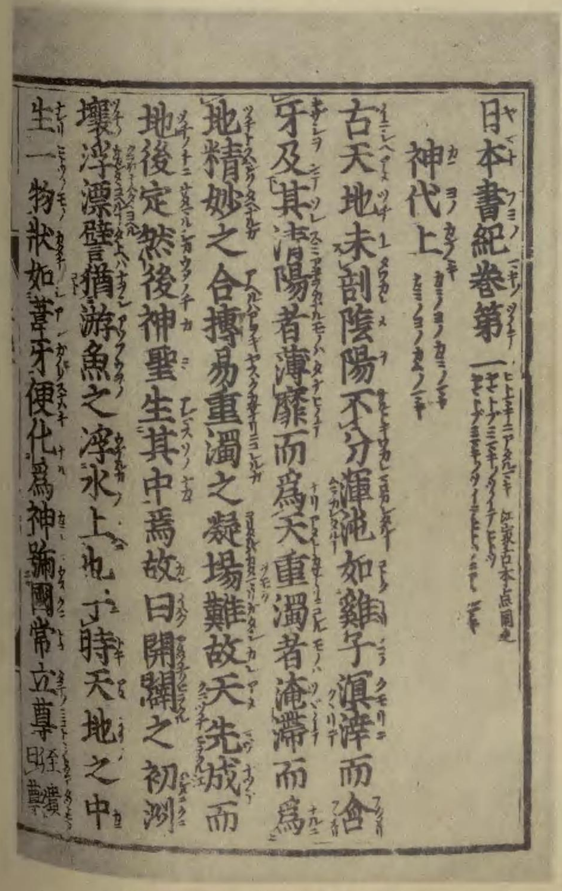
北野神社藏本 舒明紀


日本書紀卷第一上
神代上
古天地未剖陰陽不分渾沌如雞子溟涬而含
牙及其清陽者薄靡而爲天重濁者淹滯而爲
地精妙之合搏易重濁之凝場難故天先成而
地後定然後神聖生其中焉故曰開闢之初洲
壤浮漂譬猶游魚之浮水上也于時天地之中
生一物狀如葦牙便化爲神號國常立尊

熱田神宮藏本 神代上


日本書紀卷第一
神代上
古天地未剖陰陽不分渾沌如雞子溟涬而含
牙及其清陽者薄靡而爲天重濁者淹滯而爲
地精妙之合搏易重濁之凝場難故天先成而
地後定然後神聖生其中焉故曰開闢之初洲
壤浮漂譬猶游魚之浮水上也于時天地之中生一物狀如葦牙便化爲神號

慶長勅版本 神代上


日本書紀卷第一
神代上
古天地未剖陰陽不分渾沌如雞子溟涬而含
牙及其清陽者薄靡而爲天重濁者淹滯而爲
地精妙之合搏易重濁之凝場難故天先成而
地後定然後神聖生其中焉故曰開闢之初洲
壤浮漂譬猶游魚之浮水上也于時天地之中
生一物狀如葦牙便化爲神號國常立尊

寛文九年版本 神代上

が示されて居り、その昔の訓讀の狀を知ることができる。なほ「續日本紀」（別項）によれば、本書は元來右の三十卷の外に系圖一卷を有してゐた筈であるが、現存諸本はこれを傳へず、僅に「釋日本紀」（別項）に、それに類するものを見るのみである。【價値】我が建國の歷史、國體の尊嚴は他の如何なる古書よりも、本書に於て最も詳細に又明確に物語られるのであつて、當に國家の無窮なると共に不朽に生命を有すべき書物である。歷史書として見るも、我が國に於ける勅撰正史の最初であつて、爾來平安朝の初めまで次々に撰せられた所謂六國史の第一に位するものである。その編纂の方法・體例等の直接間接に、それ等の五國史及び一般歷史類に影響を及ぼしてゐることは些しいものである。次に鎌倉時代に入つてそれ等「私記」の說を集成し、加ふるに卜部家の家說を以てして「釋日本紀」が著はされた。これは「書紀」全體に亙る系統だつた註釋書であつて、これによつて當時に於ける「書紀」解釋の樣子は固より、それ以前の諸博士の說をも窺ふことができる。さてこの書に於ても、既にその傾向が見られるのであるが、この頃から以後の「書紀」の解釋は、當時に勃興した神道論の影響を蒙り、進んでは神代卷を基として自己の神道說を樹立する風潮すらも起つて來た。忌部正通の「神代口訣」、一條兼良の「日本書紀纂疏」（別項）は、その最も有名なるものである。この傾向は江戶時代に入るも決して衰へず、神代卷は屢々神道論家の講述の對象となつてゐる。延享五年、谷川士清が「日本書紀神代卷ひもの」の註釋書である。初めに序と歌略注 賀茂眞淵（賀茂眞淵全集）○日本紀歌解槪乃落葉（別項）荒木田久老 ○稜威言別（別項）橘守部（橘守部全集）

【參考】古史徵開題記平田篤胤（平田篤胤全集）○古事記及び日本書紀の新研究津田左右吉 ○日本古典研究植木直一郎 ○日本書紀異本の話木村正辭（史學雜誌六ノ六・七）○撰進千二百年記念日本書紀古本集影 ○祕籍大觀古寫本日本書紀解題黑板勝美・內藤虎次郎（大阪每日新聞社刊）

【坂本】

日本書紀纂疏 にほんしよきさんそ 註釋書 八卷 【著者】一條兼良 【諸本】室町時代末の寫本は兩足院・神宮文庫、その他所々に藏せられる。板本では「二條鶴屋町書林仁左衞門」の刊記を持つた本が多く流布する。【內容】「日本書紀」の註釋書の中では、最も完備したものと言はねばならない。それ自身の犀利な

日本書紀通釋 にほんしよきつうしやく 註釋書 七十卷 【著者】飯田武鄕 【成立】嘉永五年に起稿し、明治三十二年に脫稿。【刊行】明治二十二年に始めてその一部が出版せられたが、現今行はれるのは、明治三十五年に出版され、爾來版を重ねつつある五册本である。【內容】「日本書紀」（別項）の註釋書で、卷之一を總論とし、これを撰史・題號・異本・一書・讀法・潤飾文華之論の六條に分けて論述し、「書紀」に對する一般的見解を明かにし、卷之二よりは順次に著者の校訂に成る「書紀」の本文を掲げ、適當の段落毎に本文中の字句に對する註釋を記し、卷之七十に至つて「書紀」三十卷の註釋を終へてゐる。【價値】現在世に行はれてゐる「日本書紀」の註釋書の中では、最も完備したものと言はねばならない。それ自身の犀利な

が示されて居り、その昔の訓讀の狀を知ることができる。なほ「續日本紀」（別項）によれば、本書は元來右の三十卷の外に系圖一卷を有してゐた筈であるが、現存諸本はこれを傳へず、僅に「釋日本紀」（別項）に、それに類するものを見るのみである。【價値】我が建國の歴史、國體の尊嚴は他の如何なる古書よりも、本書に於て最も詳細に又明確に物語られるのであつて、當に國家の無窮なると共に不朽に生命を有すべき書物である。歴史書として見るも、我が國に於ける勅撰正史の最初であつて、爾來平安朝の初めまで次々に撰せられた所謂六國史の第一に位するものである。その編纂の方法・體例等の直接間接に、それ等の五國史及び一般歴史類に影響を及ぼしてゐることは些少ではない。又上古に於ける日鮮關係、聖德太子の新政、大化の改新、壬申の亂等の大事件は、殆ど本書のみによつて解明し得べきものと言ふも過言ではなく、殊に朝鮮の記錄をその中に引用してゐることは、それ等が彼に於て全く消滅した今日は朝鮮古代史の上に與へる光明も大きい。更に歌謠や訓に示された言語が、古代言語の貴重な研究資料であることも附け加へねばならぬ。

【註釋書】最も古いものは所謂「日本紀私記」である。これは奈良朝より平安朝にかけて朝廷で行はれた「書紀」の講義に際して、講師たる博士が讀方解釋等を書き記したものであつて、「釋日本紀」及び「本朝書籍目錄」によれば、養老・弘仁・承和・元慶・延喜・承平・康保等のそれ〴〵の私記があつた筈である。併し今日「私記」として傳へられる寫本は、頗る錯雜を極めたものであつて、或る一小部分を除いては、果してその昔の「私記」であるか否か疑はしいものである。次に鎌倉時代に入つてそれ等「私記」の說を集成し、加ふるに卜部家の家說を以てして「釋日本紀」が著はされた。これは「書紀」全體に亙る系統だつた註釋書であつて、これによつて當時に於ける「書紀」解釋の樣子は固より、それ以前の諸博士の說をも窺ふことができる。さてこの書に於ても、既にその傾向が見られるのであるが、この頃から以後の「書紀」の解釋は、當時に勃興した神道論の影響を蒙り、進んでは神代卷を基として自己の神道說を樹立する風潮すらも起つて來た。忌部正通の「神代口訣」、一條兼良の「日本書紀纂疏」（別項）は、その最も有名なものである。この傾向は江戸時代に入るも決して衰へず、神代卷は屢々神道論家の講述の對象となつてゐる。延享五年、谷川士清が「日本書紀通證」（別項）三十五卷を著はして「書紀」全體の註釋を試みたことは、この意味に於て劃時代的のものであるけれども、遺憾ながら解釋の態度に於ては、未だ在來の神道論的傾向から十分に脫却してゐるとは言はれない。天明の「書紀集解」（別項）に至つて、初めて完全に學術的な註釋が試みられたと言はれよう。次いで明治に至つて完成した「日本書紀通釋」（別項）が、今日に於ては最も纏まつた註釋書であるけれども、吾々から見れば慊らぬ所が必ずしも少くない。なほ以上の外に知られてゐる註釋書は甚だ多いが、左にその中、やゝ注意すべきものを擧げるに止める。

神代紀髻華山陰本居宣長（本居宣長全集）○稜威道別（橘守部全集）○古史傳（平田篤胤全集）○稜威篤別（平田篤胤全集）○日本書紀傳（鈴木重胤全集）（以上各別項）○日本書紀標註（敷田年治（明治二十四年刊）○日本紀標註（敷田年治（明治四十三年刊）○日本紀和歌略注（賀茂眞淵（賀茂眞淵全集）○日本紀歌解槪（乃落葉（別項）荒木田久老　○稜威言別（別項）（橘守部全集）

【參考】古史徵開題記（平田篤胤（平田篤胤全集）○古事記及び日本書紀の新研究（津田左右吉　○日本古典研究（植木直一郎　○日本書紀異本の話（木村正辭（史學雜誌六ノ六・七）○撰進千二百年記念日本書紀古本集影○祕籍大觀古寫本日本書紀解題（黒板勝美・内藤虎次郎（大阪每日新聞社刊）

【坂本】

日本書紀纂疏（にほんしょきさんそ）　註釋書　八卷

【著者】一條兼良【諸本】室町時代末の寫本は兩足院・神宮文庫、その他所々に藏せられてゐる。【内容】「日本書紀」神代卷のみの註釋書である。初めに序と綱領があり、「書紀」「古事記」「舊事本紀」（各別項）の關係、上古の文字・文獻の事、撰者の事等に關する意見を述べ、以下「書紀」の本文を揭げ、段落毎に詳しき註釋を施してゐる。その態度に於ては、未だ在來の神道論的傾向から十分に脫却してゐるとは言はれない。天明の「書紀集解」（別項）に至つて、初めて完全に學術的な註釋が試みられたと言はれよう。次いで明治に至つて完成した「日本書紀通釋」（別項）が、今日に於ては最も纏まつた註釋書であるけれども、吾々から見れば慊らぬ所が必ずしも少くない。なほ以上の外に知られてゐる註釋書は甚だ多いが、左にその中、やゝ注意すべきものを擧げるに止める。

神代紀髻華山陰本居宣長（本居宣長全集）○稜威道別（橘守部全集）○古史傳（平田篤胤全集）○稜威篤別（平田篤胤全集）○日本書紀傳（鈴木重胤全集）（以上各別項）○日本書紀標註（敷田年治（明治二十四年刊）○日本紀標註（敷田年治（明治四十三年刊）○厚顏抄（別項）（契沖（契沖全集）○日本紀和歌略注（賀茂眞淵（賀茂眞淵全集）○日本紀歌解槪（乃落葉（別項）荒木田久老　○稜威言別（別項）（橘守部全集）

【參考】古史徵開題記（平田篤胤（平田篤胤全集）○古事記及び日本書紀の新研究（津田左右吉　○日本古典研究（植木直一郎　○日本書紀異本の話（木村正辭（史學雜誌六ノ六・七）○撰進千二百年記念日本書紀古本集影○祕籍大觀古寫本日本書紀解題（黒板勝美・内藤虎次郎（大阪每日新聞社刊）

【坂本】

日本書紀通釋（にほんしょきつうしゃく）　註釋書　七十卷

【著者】飯田武郷【成立】嘉永五年に起稿し、明治三十二年に脫稿。【刊行】明治二十二年に始めてその一部が出版せられたが、現今行はれるのは、明治三十五年に出版され、爾來版を重ねつつある五册本である。【内容】「日本書紀」（別項）の註釋書で、卷之一を總論とし、これを撰史・題號・異本・一書・讀法・潤飾文華之論の六條に分けて論述し、「書紀」に對する一般的見解を明かにし、卷之二よりは順次に著者の校訂に成る「書紀」の本文を揭げ、適當の段落毎に本文中の字句に對する註釋を記し、卷之七十に至つて「書紀」三十卷の註釋を終へてゐる。【價値】現在世に行はれてゐる「日本書紀」の註釋書の中では、最も完備したものと言はねばならない。それ自身の犀利な解釋や卓拔な創見は、必ずしも多くは認められないけれども、よく舊說を集成し、穩健中正なる說明を施してゐることに於て、學者を裨益することは決して少くない。蓋し江戸時代この方、國學者によつて試みられた「書紀」の訓詁的解釋の到達した最後の段階と見ることができるであらう。ただ今日では、本書に參考せられなかつた「書紀」の古寫本にして有力なるものが數種發見せられたから、その本文の校訂には、おのづから改訂を要すべきところを生じ、又史學・神話學・考古學等の發達が、その訓詁的な註釋に多くの物足らなさを見出さしめることは、已むを得ぬことと言はねばならぬ。

【坂本】

日本書紀通證（にほんしょきつうしょう）　註釋書　三十五卷

【著者】谷川士清【成立】延享五年（寛延元年）【諸本】流布の板本は寶曆十二年刊行の二十三册本である。【解說】「日本書紀」

(別項)の註釋書である。第一巻に彙言十九條、附錄三篇、舍人親王傳、講國史等を述べ、第二巻より註釋に移つてゐる。その法「書紀集解」「日本書紀通釋」(各別項)等と異なつて、「書紀」本文を掲げず、僅に必要なる部分を指示し、若しくは語句を掲記するに止めてゐる。而して註釋の特色は、著者一流の言語説より言語の解釋せられるものの多いこと、例へば剖は我彼なり、嘉美(神)は赫見なりなどといはれる如くである。また「神代紀」に於ては、屡々北畠親房・忌部正通・一條兼良・山崎垂加・玉木正英・谷重遠等の説を引き、垂加神道(別項)の立場より不可思議な解釋を下してゐる。「釋日本紀」(別項)以來、初めて出でた「書紀」全體の註釋書として、その出現に歴史的の意義はあらうが、「集解」「通釋」の存する今日、吾々が本書の註釋に俟たねばならぬ所は必ずしも多くはなからう。 (坂本)

日本書籍總目錄 にほんしよじやくそうもくろく 「本朝書籍目錄」を見よ。

日本詩話叢書 にほんしわそうしよ 叢書 十冊 【編者】池田四郎次郎。國分靑厓校閲 【刊行】大正九年より同十一年まで、文會堂。【解説】「慶元以來學者輩出し、詞華の富遙に前世に超ゆ、詩話の撰、指僂するに勝へず、而してその書大抵絶版となれり」編者はこれを憂へて保存のために本叢書を編纂したものである。近世以降德川末期に至る間の邦人漢學者の作詩態度、藝術觀の變遷等を知る最大の資料である。古賀侗庵の「非詩話」、津阪東陽の「葛原詩話糾繆」、友野霞舟の「錦天山房詩話」等、寫本で傳はつたものを初め、三浦梅園の「詩轍」、空海の「文鏡祕府論」、安積澹泊の「老圃詩膎」、阮漁の「詩學逢原」、山本北山の「孝經樓詩話」、市川寛齋の「談唐詩選」、廣瀬淡窓の「淡窓詩話」、太宰春臺の「詩論」、菊池五山の「五山堂詩話」、小畑詩山の「詩山堂詩話」等、六十六部百三十九巻の著作を收めてゐる。漢文で記された原文は、すべてその下に假名交り文で參照してある點は甚だ深切であるが、著作及び作者の解説があまりに簡易に過ぎて、門外漢に取つては望蜀の念を禁じ得ない。 (土井)

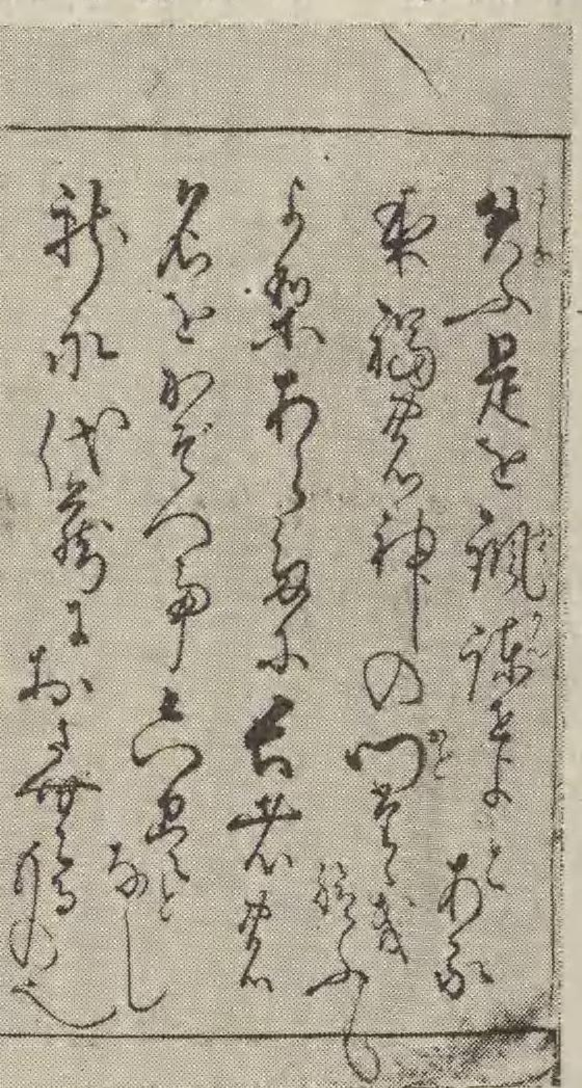
日本人 にほんじん 雜誌 【刊行】明治二十一年四月創刊、二十四年六月七十三號にて一旦廢刊(第一期)。明治二十六年十月再興、二十七年七月第十八號に至りて絶刊(第二期)。更に明治二十八年七月改刊し、三十九年末「日本及日本人」(別項)と改題するまで永續(第三期)。政教社より發行。【發行主旨】主旨は第一號の宣言に明白である。曰く、

當代ノ日本ハ創業ノ日本ナリ然レバ其經營スル處轉タ錯綜湊合セリト雖モ今ヤ眼前ニ切迫スル最重最大ノ問題ハ蓋シ日本國民ノ意匠ト日本國土ニ存在スル萬般ノ圖外物トニ恰好スル宗教、教育、美術、政治、生産ノ制度ヲ撰擇シ以テ日本人民ガ現在未來ノ嚮背ヲ裁斷スルニ在ル哉云々。

即ち日本の將來に於ける一切を國粹主義の軌道上に進ませたいといふにある。【編輯者】第一號に次の署名がある。加賀秀一・今外三郎・島地默雷・松下丈吉・辰巳小次郎・三宅雄二郎・菊池熊太郎・杉江輔人・井上圓了・棚橋一郎・志賀重昂等。【沿革】〔第一期〕創刊當時編輯を總轄して同志の主張を宣明する任に當つたのは志賀重昂で、後半は三宅雪嶺が主としてこれに當つた。國粹主義なるに拘らず、忌憚なき言論から次第に當局の壓迫を買ひ、遂に「亞細亞」と交代して廢刊するに至つた。〔第二期〕約一年にも足らぬ間で、志賀・三宅が共に力を盡した。〔第三期〕日清戰後の國民的勃興を背景として三たび興つたもので、號數も改めて第一號とした。編輯の中心は三宅で、志賀その他これを應援したが、それよりも長澤別天・畑山呂泣・高橋紫燕・内藤湖南の如き若手の同人が雪嶺中心に活躍した。明治三十九年の末、日本新聞社内の暗鬪が表面化し、雪嶺以下有力記者が連袂退社するや、彼等は「日本人」を「日本及日本人」(別項)と改題し、その言論主義の本據とした。內容的にみれば、第一期は專ら國粹主義宣傳の機關として役立ち、政論中心の觀があり、文學の如きは全然餘技視してゐた。第二期は國粹主義は勿論、東方問題と日清の運命を論じた。なほ幾分か、文學的分子が多くなつて來たのが認められる。第三期は同じ國粹的立場からながら內容を大分擴充して、一般的な社會評論雜誌の體を備へて來た。從つて文學や批評にも力を入れ、特に文の一欄を設け、小説をさへ掲げたりしたが、しかし純文學を輕視する氣持ちが絶えなかつた。殊に注目すべきは、三十四・五年の交から片山潛・久津見蕨村・幸德秋水等の寄稿から多少の社會主義的色彩を帶びたことである。これは「日本人」の國粹保存主義が單なる頑迷な反動的動機からのみ出てゐるものでないことを裏書きしてゐる。【影響】「日本人」の貢獻は、主として思想的方面にあることは勿論だが、第三期以後文學方面に多少力を入れるやうになつてから、外國文藝の紹介、國粹的文藝の鼓吹等文學界に貢獻した。元來同人は何れも支那文學の愛好者であつたが、同人以外に鈴木虎雄の如き寄稿家があり、三田村鳶魚の江戸文學及び巷説の研究、近世史資料蒐集を目的とした「新史壇」の設置は何れも有益の文字である。最も力を入れたのは俳句と漢詩で、殊に俳句欄は子規一派日本派俳人が轡を並べ、虚子・碧梧桐・井泉水等が、皆寄稿してゐる。又、長澤別天・田岡嶺雲・笹川臨風・高瀬文淵・三井甲之等は、不羈奔放な文界時評と思想評論を試みてゐる。なほ第三期の末頃、雪嶺がその學術的長篇を連載し始めてからは、いつとはなくこれが中心となり、その他は萬事それの引立役に使はれる如き觀を與へ、俳句以外、文藝方面にも大した勢力を振ひ得ずに終つた。(日本及日本人參照) (柳田(泉))

日本人(第一號)

日本新永代藏 にほんしんえいたいぐら 浮世草子 六册 【作者】鳳城團水(北條團水) 【名稱】內題に「日本新永代藏」とあるが、題簽には新永代藏の上に區劃の中に横に「日本」と入れてあり、序文中には單に「新永代藏」とある。又題簽の新永代藏の左下に「近世長者鑑」ともある。永代藏に「新」と冠したのは、西鶴の「日本永代藏」を摸してそれに對せしめた意である。【刊行】正德三年 【諸本】浮世草子集(日本名著全集)・浮世草子集(近代日本文學大系)所收。【解説】西鶴に倣つてゐるのは、書名ばかりでなく、目次の文句及び各章暖簾の意匠も、別名も、又題材の性質も、各章讀切の形式も、文章も悉く西鶴を摸したものである。各巻五章の説話を含む。西鶴の「日本永代藏」(別項)と同じく、町人の經濟的成功に關する話を集めたもので、所謂町人物の一である。所々に西鶴の「永代藏」などの文を些か更めた所もあり、「日本永代藏」や「西鶴置土産」(別項)から材を得たものも見えてゐる。西鶴は町人

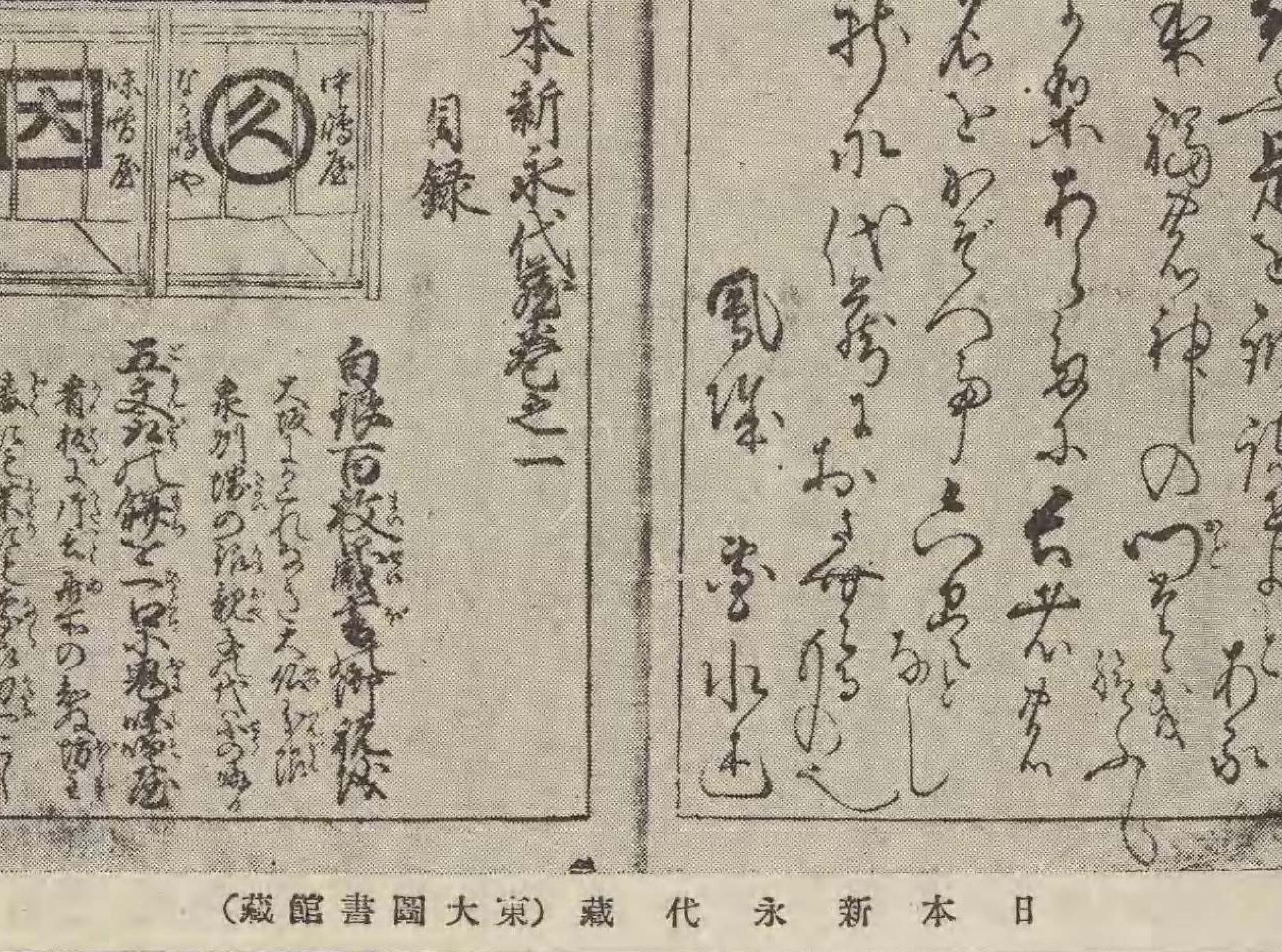

日本新

ゐる。この一般成功に關する考の上にも、西鶴の鋭さと深みのない淺い常識に止まつてゐることが知られるやうに、本文の具體的な説話にも同樣、作者の作家としての平凡さを暴露してゐる。而して教訓的な態度のみは西鶴に勝つて著しい。要するに「日本永代藏」に倣つて、終に及び難い作である。さりながら、

大正十五年、增訂版岩波書店刊。【解説】本邦の主な隨筆を選び、その書中の事項を辭書體に排列したもので、何事か考證する際に隨筆に現はれた片々たる文獻が重大な役割をする事は周知の如くであるが、本書はその任務を遂げるために選ばれた。東陽堂版に於て百六十四種七百三十九巻及び附錄四十八種、これを增訂した岩波書店版に於て二百十四種千百六十巻の原本から項目を採り、その數約二萬に達する。更に「續日本隨筆索引」(昭和七年)の刊行あり、これには百七十八種八百六十一巻附錄四種の原本から項目を採つてゐる。故に兩巻を通ずる時は、約四萬に近い項目を收めた事になる。本邦の主な隨筆とは云ふもの、むしろすべてを含んだと云つて差支へないものであり、その上最も手近に得られる刊本にしてある。每巻の首に所收書のやゝ詳細なる解題があり、最終に本文十九巻までの索引が附してある。內容は次の如くである。

〔巻一〕寸錦雜綴・東牖子・思齋漫錄・南留別志・蓍庵隨筆・秇苑日涉。〔巻二〕睡餘小錄・河やしろ・文會雜記・圓珠庵雜記・著作堂一夕話・松屋叢話。〔巻三〕三養雜記・烹雜の記・瓊著閒集・駿臺雜話・孝經樓漫筆。〔巻四〕花街漫錄・北窻瑣談・南屛燕語・湖亭涉筆・擁書漫筆・嚶々筆語。〔巻五〕燕石雜志・漫畫隨筆・常山樓筆餘・たはれぐさ・蒹葭堂雜錄。〔巻六〕好古小錄・秉燭譚・提醒紀談・年山紀聞・閑田耕筆。〔巻七〕好古日錄・閑田次筆・南嶺子・柳葊隨筆・茅窻漫錄・坤齋日抄。〔巻八〕南嶺遺稿・玄同放言・柳葊雜筆・雅遊漫錄・聖學隨筆・松亭漫筆。〔巻九〕還魂紙料・北邊隨筆・雲錦隨筆・橘窻茶話・閑窻瑣談。〔巻十〕用捨箱・梅園日記・宮川舍漫筆・閑際筆記・赤穗義士隨筆。〔巻十一〕近世奇跡考・ひと

藏」を換してそれに對せしめた意である。【刊行】正德三年　【諸本】浮世草子集(日本名著全集)・浮世草子集(近代日本文學大系)所收。【解説】西鶴に倣つてゐるのは、書名ばかりでなく、目次の文句及び各章暖簾の意匠も、別名も、又題材の性質も、各章讀切の形式も、文章も悉く西鶴を換したものである。各巻五章の説話を含む。西鶴の「日本永代藏」(別項)と同じく、町人の經濟的成功に關する話を集めたもので、所謂町人物の一である。所々に西鶴の「永代藏」などの文を些か更めた所もあり、「日本永代藏」や「西鶴置土産」(別項)から材を得たものも見えてゐる。西鶴は町人成功の要素を長者丸の譬喩を以て、朝起・夜詰(共に勤勉)・始末(儉約)・達者(身體壯健)・家職(資本・信用、各種商業に關する經驗・知識等)を敎へてゐる上に、具體的な説話の上には、智慧分別といふ頭の働きを强調してゐる。然るに團水は本書の首に於て、「僅か十年のうちそとにて、家業の仕似せ慥かに、元手つきて、人にへつらはず、過言を聞かず、かへつて禮儀をうくる事なり。是れ何ゆゑなれば、年月實體に身をもち、いつはりをいはず、他借の返辨　律儀なるを以て、人のした手につかず、されどもして出るまでは、なるほど大商人の羽がひ下につき、分別のある人にしたがひ、他の仕合をかる事なり」といつてゐる。この一般成功に關する考の上にも、西鶴の鋭さと深みのない淺い常識に止まつてゐることが知られるやうに、本文の具體的な説話にも同樣、作者の作家としての平凡さを暴露してゐる。而して敎訓的な態度のみは西鶴に勝つて著しい。要するに「日本永代藏」に倣つて、終に及び難い作である。さりながら、



日本新永代藏（東大圖書館藏）

團水が浮世草子の代表作の一として推すべきものであるには相違ない。〔藤村〕

日本隨筆索引 にほんずゐひつさくいん　字彙　一册　【編者】太田爲三郎　【別名】大日本隨筆索引(東陽堂版)【刊行】明治三十四年、東陽堂刊。大正十五年、增訂版岩波書店刊。【解説】本邦の主な隨筆を選び、その書中の事項を辭書體に排列したもので、何事か考證する際に隨筆に現はれた片々たる文獻が重大な役割をする事は周知の如くであるが、本書はその任務を遂げるために選ばれた。東陽堂版に於て百六十四種七百三十九巻及び附錄四十八種、これを增訂した岩波書店版に於て二百十四種千百六十巻の原本から項目を採り、その數約二萬に達する。更に「續日本隨筆索引」(昭和七年)の刊行あり、これには百七十八種八百六十一巻附錄四種の原本から項目を採つてゐる。故に兩巻を通ずる時は、約四萬に近い項目を收めた事になる。本邦の主な隨筆とは云ふものの、むしろすべてを含んだと云つて差支へないものであり、その上最も手近に得られる刊行物から選んである點も亦利用者にとりて便利である。これは一方に、昭和三・四年の交の古い隨筆文學再生の賜である。〔土井〕

日本隨筆全集 にほんずゐひつぜんしふ　叢書　十九册　【刊行】昭和二年より四年、國民圖書株式會社。【解説】江戸期の文學界に名ある國學者・漢學者・考證家・稗史家、その他一般操觚者の筆に成つた所謂隨筆漫錄類の優秀なもの八十餘種を集め、自餘の隨筆集の如く、漫然と刊寫の雜書を交へないのが特色である。即ち眞正の隨筆集と謂ふべきである。隨筆類の第一流の者は概ね刊本になつてゐるので、本集には刊本の覆版に係るものが多い。校訂は頗る嚴密で、凡て原本の面影を保存することに努めたのみならず、興味を主とする書などは、原本その儘を印寫したものもある。隨つて複製本として最も信頼するに足るものと思はれる。挿圖は殊に注意して原様を違はせぬやうにしてある。毎巻の首に所收書のやゝ詳細なる解題があり、最終に本文十九巻までの索引が附してある。内容は次の如くである。

〔巻一〕寸錦雜綴・東牖子・思齋漫錄・南留別志・善庵隨筆・秋苑日渉。〔巻二〕睡餘小錄・河やしろ・文會雜記・圓珠庵雜記・著作堂一夕話・松屋叢話。〔巻三〕三養雜記・烹雜の記・猿著聞集・駿臺雜話・孝經樓漫筆。〔巻四〕花街漫錄・北窓瑣談・南屏燕語・湖亭涉筆・擁書漫筆・嚶々筆語。〔巻五〕燕石雜志・漫畫隨筆・常山樓筆餘・たはれぐさ・蒹葭堂雜錄。〔巻六〕好古小錄・秉燭譚・提醒紀談・年山紀聞・閑田耕筆。〔巻七〕好古日錄・閑田次筆・南嶺子・柳葊隨筆・茅窓漫錄・坤齋日抄。〔巻八〕南嶺遺稿・玄同放言・柳葊雜筆・雅遊漫錄・聖學隨筆・松亭漫筆。〔巻九〕還魂紙料・北邊隨筆　雲錦隨筆・橘窓茶話・閑窓瑣談。〔巻十〕用捨箱・梅園日記・宮川舍漫筆・閑際筆記・赤穗義士隨筆。〔巻十一〕近世奇跡考・ひとはえ・愚雜俎。〔巻十二〕年々隨筆・理齋隨筆・難波江。〔巻十三〕骨董集・假名世説・花月草紙・雲萍雜志・夏山閑話。〔巻十四〕秋齋閑語・退閑雜記・瓦礫雜考・四方の硯・蜘蛛の糸巻・積翠閑話。〔巻十五〕南畝莠言・艮齋閑話・翁草・松の落葉・鄰女晤言。〔巻十六〕玉かつま・輶軒小錄。〔巻十七〕梧窓漫筆・梅窓筆記・一宵話・筆のすさび・塵塚物語。〔巻十八〕桂林漫錄・玲瓏隨筆・にぎはひ草・比古婆衣(續編)。〔巻十九〕雨窓閑話・關秘錄・遠碧軒隨筆・蒼梧隨筆。〔和田〕

日本隨筆大成 にほんずゐひつたいせい　隨筆　十二册・別巻二册　【刊行】昭和二年より三年、吉川弘文館。【内容】本邦人の筆に成る隨筆類を集大成したもので、往々嚴正の意味にては隨筆と目し難き小册類をも交へてある。毎巻の首に所收各書の解題及び目次がある。全部の内容は左の如くで、原本の挿圖は縮影して收めてある。

〔巻一〕梅村載筆・覊旅漫錄・秦波樓筆記・筆のすさ

び・仙臺閑話・瓦礫雜考・紙魚室雜記・柳亭記・桂林漫錄・尚古造紙揷。【卷二】雲錦隨筆・蘿月庵國書漫抄・磯山千鳥・松屋棟梁集・書訓雜肋・橘窓自語・槐園隨筆・煙霞綺談・近世女風俗考・柳亭筆記。【卷三】玄同放言・織錦舍隨筆・八水隨筆・都の手ぶり・睡餘小錄・歷世女裝考・書儈贅筆・金會木・楢の落葉物語・鋸屑譚。【卷四】上代衣服考・寸錦雜綴・辨正衣服考・雨窓閑話・半日閑話・心の鰺紙・屋氣野隨筆・泊泊筆話。【卷五】過庭綺談・遠碧軒記・海人のくづつ・嚶々筆語・風のしがらみ・遊藝園隨筆・花街漫錄・著作堂一夕話・善庵隨筆。【卷六】古老茶話・野乃舍隨筆・擁書漫筆・乘燭譚・おもひくさ・西洋畫談・四方の硯・閑窓瑣談・梅園叢書・還魂紙料。【卷七】思ひの臆の記・松陰隨筆・閑窓瑣談(後編)・用捨箱・槻の落葉信濃漫錄・長庵隨筆・向岡閑話・葉廼堂雜錄・塔海一得・文會雜記。【卷八】北邊隨筆・かしのしづ枝・宮川舍漫筆・燕居雜話・幽遠隨筆・駒谷芻言・骨董集・松屋雜考。【卷九】古今沿革考・又樂庵示蒙話・閑田耕筆・異說まち〳〵・南嶺子・閑田次筆・閑際筆記・南嶺子評・天神祭十二時・獨語・世事百談。【卷十】筆の御霊・一寄話・乘穗錄・東牖子・昆陽漫錄・花街漫錄正誤・嗚呼矣草・續昆陽漫錄並補・齊諧俗談・南嶺遺稿並評。【卷十一】年々隨筆・好古日錄・庖丁書錄・嘉良喜隨筆・好古小錄・こがねぐさ・烹雜の記・奇遊談・三のしるべ・茅窓漫錄。【卷十二】耽奇漫錄。【別卷上】一話一言(上卷)。【別卷下】一話一言(下卷)。【和田】

日本政記（にほんせいき）　歷史書　十六卷　【著者】賴山陽【解說】神武天皇から後陽成天皇に至る百八世二千年間の編年史で、綱紀の弛張、教化の隆替を記述し、自家の論斷を高調する整つた論理が、それ自身として當時の國民を感動せしめたのであらう。眞理もあるけれども、概して歐化主義を排擊するに熱心な餘り、今日から見れば、過度に頑固な保守主義に偏し、西歐に關する觀察も、偏見の多かつたことを認めねばならぬ。【子葉】

日本童話寶玉集（にほんどうわほうぎよくしふ）　童話集　二卷　【編者】楠山正雄【刊行】大正十年より十一年、富山房。【內容】上卷には、「神話篇」として世界の誕生・夜見の國等の十篇、「英雄傳說篇」として八咫烏以下十五篇、「諸國物語篇」として浦島太郎以下二十五篇を收め、下

儒教と哲學の上から討究して、日本人と西歐人との優劣を事實的に認め、更に東洋西洋の差別を比較して、結局日本獨特の道德を高調する整つた論理が、それ自身として當時の國民を感動せしめたのであらう。眞理もあるけれども、概して歐化主義を排擊するに熱心な餘り、今日から見れば、過度に頑固な保守主義に偏し、西歐に關する觀察も、偏見の多かつたことを認めねばならぬ。【子葉】

日本童話寶玉集（にほんどうわほうぎよくしふ）　童話集　二卷　【編者】楠山正雄【刊行】大正十年より十一年、富山房。【內容】上卷には、「神話篇」として世界の誕生・夜見の國等の十篇、「英雄傳說篇」として八咫烏以下十五篇、「諸國物語篇」として浦島太郎以下二十五篇を收め、下

立】江戶時代。奈良朝時代に編纂された諸國の「風土記」(別項)に摸して僞作したもの。初め延長三年十二月十四日の太政官符によつて撰進せられたものと信ぜられてゐたが、平祖衡の「辨日本總國風土記」、中山信名の「前後風土記概論の辨」(共に「古風土記逸文」の附錄とす)によつて、僞書なることが明かになつた。【內容】「日本總國風土記」卷第二より卷第百六に至る缺本の體とし、每卷嘉慶二年の藤原元隆、又は元和年間の中原師行等の書寫の奧書を附して、原本に蠹蝕誤脫等の多かつた由を記してゐる。國別として、山背・大和・和泉・攝津・伊賀・伊勢・尾張・參河・遠江・駿河・甲斐・相模・武藏・安房・上總・下總・常陸・近江・信濃・陸奧・加賀・但馬・備中等の諸國に亙つてゐる。【參考】前後風土記概論　伴信友(古風土記逸文附錄)○前後風土記概論の辨　中山信名(同上)○辨日本總國風土記平祖衡(同上)　【武田】

日本大家論集（にほんたいかろんしふ）　雜誌　【刊行】明治二十年六月十五日第一號博文館發行(月刊)、同二十七年十二月第六卷十二號廢刊。【解說】博文館主大橋佐平が、その子新太郎の意見、「當今專門雜誌は百を以て數ふるも、餘りに專門に偏して讀者少く、發行部數少ないために、價格比較的に高く、廣く一般に讀ましむるに適せぬ。若し各雜誌の主要な記事を一雜誌に集め、廉價を以て發賣したら、世を益すること多からう」といふのを採用して發行し、その日に發行所を博文館と命名して本鄕區弓町二丁目に看板を掲げた。編輯は「他の各種專門雜誌十種以上の內容を充實する」ことを期し、月刊で定價十錢といふ當時の雜誌としては、意想外の廉價であつた爲め、初版三千部を即日に賣り盡し、四版五版と重版す

る盛況で、遂には一萬部以上を發行し、當時雜誌界空前の成功を見た。內容は適當と思ふ論文を各雜誌から切り抜き、別に原稿料を拂ふわけでもないので、利益も多かつたが、卷頭に當時の名家の寫眞石版を掲げたのが、呼び物であつた。第二號以下は、移轉した日本橋本石町から發行され、この成功は、逐次「日本之教學」「日本之時事」以下七八種の各雜誌を創刊せしめる機運を作つた。「日本大家論集」がかく成功を占むるや、自社の雜誌に掲載した記事論說を、筆者の承諾なく轉載するは、剽竊であるとの攻擊が諸方から起り、これまでは、雜誌記事無斷轉載禁止の法令がなく、任意轉載は普通として怪しまなかつたが、この年十二月、出版條例及び版權條例が改正され、雜誌記事の無斷轉載が出來ないことになつたので、新たに寄稿した原稿を編輯することになつた。その後八年を經て明治二十七年八月に至り、「日淸戰爭實記」の發刊を機とし、當時出版されてゐた雜誌十二種を整理する際に、「日本大家論集」も新雜誌「太陽」に解消されて了つた。その汎布の廣かつた爲め、「日本大家論集」が、當時文運の民衆化に貢獻した功績の多かつたことは爭へない。(雜誌參照)【千葉】

日本短歌史（にほんたんかし）　歌學書　一卷　【著者】山內素行　【刊行】芳賀博士の校閱を經て大正二年一月、敬文館から發行。【解說】短歌の興亡變遷の跡を叙したもので、總說に於て短歌創作の盛んであつた理由として、皇室が常に御奬勵あらせられ、上流交際場裡になくてはならぬものとなつてゐた事、及びその短詩形にして詠作の容易であるといふ點をあげて、この短詩形にして詠作の容易といふ

ことに短歌獨特の價值のあることを述べ、短歌の時代區分及び範圍の概說をなし、その區分に從ひ以下七章に分つて述べてゐる。第一章和歌の發生(神代より舒明朝の頃まで)、第二章和歌の勃興(舒明朝頃から桓武朝のはじめ頃まで)、第三章平安朝の和歌(桓武の遷都より平氏の滅亡頃まで)で、第一節和歌の衰微と復興、第二節歌學の興隆である。第四章鎌倉時代の和歌(頼朝の幕府を開いてから北條氏の滅亡まで)で、第一節師範家の興起、第二節兩皇統と師範家である。第五章室町時代の和歌(延武中興から家康の天下一統まで)で、第一節師範家の衰微、第二節應仁亂後の形勢及び和歌に關する祕說である。第六章德川時代の和歌(江戶幕府のはじめから大政奉還まで)で、細川幽齋と堂上の歌人、民間に於ける新運動、賀茂眞淵と其時代、眞淵歿後の形勢、桂園派の隆盛、國學者の餘流の六節に分つ。第七章は明治の和歌と題し、落合門の與謝野・尾上・金子あたりに及んでゐる。日本短歌史年表及び索引を附してある。【藤川】

日本道德論（にほんだうとくろん）　論文　【著者】西村茂樹　【刊行】明治二十年。その前年著者が帝國大學講堂で三日間に亙つて講演したものを後に纏めたものである。後、泊翁叢書(日本弘道會編)第二所收。【內容】國民の歐化熱が盛んなのを憂ひて、明治十七年日本弘道會を起し、國粹主義から傳統的日本道德の保持を高唱しつつあつた著者の信念を說いたもので、東西道德殊に東洋の美所長所を採取して日本獨自の道德を建設せねばならぬ所以を高調し、西洋文明にのみ心醉する誤りを指摘して、日本人が祖先以來の舊風遺敎を輕々に捨て去るの非なるを痛論してゐる。【價值】單なる空疎な感情論でない。日本道德の本體を

歌筵・俳林・小說等十數欄に分ち、當時の雜誌としては整然たる編輯振りである。殊に論說欄に於ける每號の文學論は、簡單ではあるが見るべきものが多かつた。【齋藤(昌)】

日本派（にほんは）　俳句流派　【名義】新聞「日本」を發表機關とした俳團と云ふ意に出づ。【別稱】根岸派・子規派・ホトトギス派　【成立】天保以來の俳諧の衰運を承け繼いだ明治の俳諧は、依然として低級な市井の徒に依つて弄ばれ、宗匠の如きも文學的理解に於て何等觀るべきものがなかつた。この狀勢に反抗して子規(別項)が俳諧の革新を志し、その第一聲として明治二十五年六月、新聞「日本」紙上に「獺祭書屋俳話」(別項)を掲載し、古人の句を新しく見直すと共に、月並宗匠を非難し、更

虛子の手によつて續刊することになり、漸く日本派の俳風は世間の耳目を集めて、知識階級に屬する一般人及び學生等に多くの參加者を持つに至つた。かくしてその新興俳句を集めた「新俳句」(明治三十一年刊)、「春夏秋冬」(明治三十四年刊)(各別項)等の代表的句集も刊行された。子規の周圍には前記鳴雪・碧梧桐・虛子の外、寒川鼠骨・石井露月・佐藤紅綠・坂本四方太・村上霽月・松瀨靑々・福田把栗・梅澤墨水等があり、日本派の俳人としてそれ〴〵名を成し、子規歿後は、碧梧桐が新聞「日本」の俳壇を承け繼ぎ、代表的句集の一つ「續春夏秋冬」が刊行された。當時日本派以外の俳團に、角田竹冷・伊藤松宇等の秋聲會(別項)、尾崎紅葉等の十千萬堂派(別項)、大野洒竹・佐々醒雪等

び伊丹派俳系を說く。(三)では、芭蕉を中心として蕉門の諸俳士の風格を說き、芭蕉歿後の俳壇に及ぶ。蕉門以外の俳人、葛飾派俳系をも擧げてある。(四)では、蕪村を主としてその門下の諸士及び五俳客として、樗良・曉臺・白雄・藾太・闌更を叙し、なほ享和以後として、一茶・成美・士朗その他に委しい。(五)では、子規に依つて提唱せられた新派運動を主として、筑波會・秋聲會・舊派を觀察してある。卷頭に事項索引が附してある。【價值】俳諧史として著はされたものでは、元祿あたりで終つてゐるものが多いが、この書は明治にまで及んで說き及ぼしてある。又その叙述に當つて成るべく著者の見解を表はさず、時代的の作品を作品として羅列してある。又各時代にその

日本政記 にほんせいき　歴史書　十六卷　【著者】賴山陽【解說】神武天皇から後陽成天皇に至る百八世二千年間の編年史で、綱紀の弛張、教化の隆替を記述し、自家の論斷を附してある。著者晩年の作で、「日本外史」(別項)と共に、尊王斥覇の思想を鼓舞した名著である。〔佐久〕

【參考】日本政記考證 林正躬

日本總國風土記 にほんそうこくふどき　地誌　卷數不明【著者】駿河國淺間神社神職某【成

しむるに適せぬ。若し各雜誌の主要な記事を一雜誌に集め、廉價を以て發賣したら、世を益すること多からう」といふのを採用して發行し、その日に發行所を博文館と命名して本鄕區弓町二丁目に看板を揭げた。編輯は、「他の各種專門雜誌十種以上の內容を充實する」ことを期し、月刊で定價十錢といふ當時の雜誌としては、意想外の廉價であつた爲め、初版三千部を即日に賣り盡し、四版五版と重版す

日本短歌史 にほんたんかし　歌學書　一卷【著者】山內素行【刊行】芳賀博士の校閱を經て大正二年一月、敬文館から發行。【解說】短歌の興亡變遷の跡を叙したもので、總說に於て短歌創作の盛んであつた理由として、皇室が常に御奬勵あらせられ、上流交際場裡になくてはならぬものとなつてゐた事、及びその短詩形にして詠作の容易であるといふ點をあげて、この短詩形にして詠作の容易といふ

が盛んなのを憂ひて、明治十七年日本弘道會を起し、國粹主義から傳統的日本道德の保持を高唱しつつあつた著者の信念を說いたもので、東西道德殊に東洋の美所長所を採取して日本獨自の道德を建設せねばならぬ所以を高調し、西洋文明にのみ心醉する誤りを指摘して、日本人が祖先以來の舊風遺教を輕々に捨て去るの非なるを痛論してゐる。【價値】單なる空疎な感情論でない。日本道德の本體を

儒教と哲學の上から討究して、日本人と西歐人との優劣を事實的に認め、更に東洋西洋の差別を比較して、結局日本獨特の道德を高調する整つた論理が、それ自身として當時の國民を感動せしめたのであらう。眞理もあるけれども、概して歐化主義を排擊するに熱心な餘り、今日から見れば、過度に頑固な保守主義に偏し、西歐に關する觀察も、偏見の多かつたことを認めねばならぬ。〔千葉〕

日本童話寶玉集 にほんどうわほうぎよくしふ　童話集　二卷【編者】楠山正雄【刊行】大正十年より十一年、富山房。【內容】上卷には、「神話篇」として世界の誕生・夜見の國等の十篇、「英雄傳說篇」として八咫烏以下十五篇、「諸國物語篇」として浦島太郎以下二十五篇を收め、下卷には、「十大昔噺篇」として桃太郎以下十篇、「文藝童話篇」としてかぐや姬以下二十篇、「諸國物語篇」として瓜子姬子以下二十篇を收めてゐる。清新なる文章は、兒童文學中の白眉と稱せられ、殊にその分類と取材の上に拂はれた編者の用意と苦心は多とすべく、同年代に刊行された同種類の群書を壓してゐる。大正時代の童話文學界は、一面創作勃興時代であると同時に、古來の童話の整理期であつたが、本書はその整理の點に於て、模範的の好著だと云はれてゐる。〔山內〕

日本之文華 にほんのぶんくわ　雜誌【解說】博文館より發行の「大和錦」(別項)の後身である。明治二十三年一月創刊、同年十二月十八日第二十四號を以て廢刊。二十四年一月創刊の「婦人雜誌」はその後身ともいふべきものである。執筆者は創作方面では露伴・思案・漣山人・眉山・柳浪・鷗外等の最も初期に屬するものが紹介されてゐる。內容は大別して、論說・詩壇・歌筵・俳林・小說等十數欄に分ち、當時の雜誌としては整然たる編輯振りである。殊に論說欄に於ける每號の文學論は、簡單ではあるが見るべきものが多かつた。〔齋藤(昌)〕

日本派 にほんは　俳句流派【名義】新聞「日本」を發表機關とした俳團と云ふ意に出づ。【別稱】根岸派・子規派・ホトトギス派【成立】天保以來の俳諧の衰運を承け繼いだ明治の俳諧は、依然として低級な市井の徒に依つて弄ばれ、宗匠の如きも文學的理解に於て何等觀るべきものがなかつた。この狀勢に反抗して子規(別項)が俳諧の革新を志し、その第一聲として明治二十五年六月、新聞「日本」紙上に「獺祭書屋俳話」(別項)を揭載し、古人の句を新しく見直すと共に、月並宗匠を非難し、更に翌年三月、同紙上に自己の俳句を載せて、その主張を如實に示した。これが日本派俳句の濫觴である。【沿革】子規を盟主としてその周圍に、內藤鳴雪・河東碧梧桐・高濱虛子等があり、理論的には俳句に於ける文學的價値を闡揚し、作句に於ては客觀主義の旗幟を揭げて旺んに寫生句を唱道し、それ等の俳論・俳話・俳句を續々新聞「日本」紙上に發表した。「男女句合十二月」「燈火十二月」「俳句二十四體」等は、當時の子規の俳境を示すものである。かくて所謂新派即ち日本派の人々は、主張達成の目的の下に種々の俳書を刊行した。子規の「俳諧大要」「俳人蕪村」(各別項)、虛子の「俳句入門」(別項)、碧梧桐の「俳句評釋」及び子規・鳴雪・碧梧桐・虛子等の輪講に成る「蕪村句集講義」などが、明治三十年前後に相繼いで出でたが、更に明治三十一年十月、柳原極堂に依つて松山で創刊され、間もなく廢刊になつてゐた俳誌「ホトトギス」を東京に移して、虛子の手によつて續刊することになり、漸く日本派の俳風は世間の耳目を集めて、知識階級に屬する一般人及び學生等に多くの參加者を持つに至つた。かくしてその新興俳句を集めた「新俳句」(明治三十一年刊)、「春夏秋冬」(明治三十四年刊)(各別項)等の代表的句集も刊行された。子規の周圍には前記鳴雪・碧梧桐・虛子の外、寒川鼠骨・石井露月・佐藤紅綠・坂本四方太・村上霽月・松瀨青々・福田把栗・梅澤墨水等があり、日本派の俳人としてそれぞれ名を成し、子規歿後は、碧梧桐が新聞「日本」の俳壇を承け繼ぎ、代表的句集の一つ「續春夏秋冬」が刊行された。當時日本派以外の俳團に、角田竹冷・伊藤松宇等の秋聲會(別項)、尾崎紅葉等の十千萬堂派(別項)、大野洒竹・佐々醒雪等の筑波會(別項)などがあつたが、その勢力は甚だ微弱で、日本派は完全に俳壇の中心勢力となるに至つた。その後虛子は、寫生文・小說に沒頭し、明治四十年頃、新傾向(別項)に赴いた碧梧桐と對峙するに至つて、日本派は自然二つに分れ、虛子は大正二・三年の頃から再び俳句に專心し、「ホトトギス」は全く虛子の主宰する所となり、「ホトトギス」を離れた人々の方は、その後愈々分裂を生じて行つた。

【參考】子規全集(一・二・三・四・一三卷)○現代日本文學全集(第三十八篇)〔岩田〕

日本俳諧史 にほんはいかいし　俳書　一册【著者】池田秋旻【刊行】明治四十五年四月、求光閣書店【內容】(一)芭蕉以前の俳壇(前期)、(二)芭蕉以前の俳壇(後期)、(三)元祿の俳壇、(四)天明の俳壇、(五)明治の俳壇の五篇に分つてある。(一)では、連歌の興起より守武・宗鑑・貞德に及び、(二)では、談林の旗上げと貞門との論爭、宗因の作風を叙し、こゝに鬼貫及び伊丹派俳系を說く。(三)では、芭蕉を中心として蕉門の諸俳士の風格を說き、芭蕉歿後の俳壇に及ぶ。蕉門以外の俳人、葛飾派俳系をも擧げてある。(四)では、蕪村を主としてその門下の諸士及び五俳客として、樗良・曉臺・白雄・蓼太・闌更を叙し、なほ享和以後として、一茶・成美・士朗その他に委しい。(五)では、子規に依つて提唱せられた新派運動を主として、筑波會・秋聲會・舊派を觀察してある。卷頭に事項索引が附してある。【價値】俳諧史として著はされたものでは、元祿あたりで終つてゐるものが多いが、この書は明治にまで及んで說き及ぼしてある。又その叙述に當つて成るべく著者の見解を表はさず、時代的の作品を作品として羅列してある。又各時代にその時代の重要俳書解題を出してあるのも、研究者にとつて便宜である。ただ本書以前に出た俳諧史を集成したに止まる如く見える點が物足りない。大正十一年十一月に、卷尾に大正の俳壇二頁を補ひ、索引を卷末に移して「增補日本俳諧史」と題して再版された。〔荻原〕

日本俳句鈔 にほんはいくせう　俳句集　三册【撰者】河東碧梧桐【刊行】第一集上下、明治四十二年五月。第二集全、大正二年三月。政敎社。【內容】明治時代に於ける新派俳句の選集は、「春夏秋冬」に始まりて「續春夏秋冬」(各別項)に至り、更に「日本俳句鈔」に達して熟成したものと見て宜い。所謂日本俳句とは子規が日本新聞に設けたる俳句欄の名で、當時最高の發表機關であつた。日本新聞より雜誌「日本及日本人」(別項)に移り、子規選より碧梧桐選に移ると共に、新傾向(別項)運動が興起したので、日本俳句は新傾向俳句の檜舞臺といふ風に見られ、選拔の標準も高峻をきはめた

觀があつた。その中より更に嚴辣なる考査を以て選粹したものが、この「日本俳句鈔」である。第一集は明治四十年二月より四十二年三月に至る約二年間の作より選出したもので、新傾向運動の初期の作風が盛られてゐる。

がん〳〵の首の競ひや森の花　天郎
滑水掬びて道は並木となりにけり　春又春

第二集は四十二年四月以降、四十四年十二月まで、所謂新傾向時代を現出したる一種の制作機運がこの卷には横溢してゐる。

雨の花野來しを母屋に長居せり　響也
死期明かなり山茶花の唉き誇る　一碧樓
誰に背くとなきを衆座に居る寒き　櫻魂子

この當時に於ては五七五の形式は未だ廢棄せられてゐない。破調と見ゆるものも、一二字の字餘り、若しくは格調の顚倒たるにとどまる。尤もその内容は舊俳句趣味より著しく躍進せんとする動向にあり、從つて根本よりの音型破壞の要求が次に迫つてをる事は豫想せらるゝのである。　〔荻原〕

日本俳書大系（にほんはいしょたいけい）「俳書大系」を見よ。

日本橋（にほんばし）小説　【作者】泉鏡花　【刊行】大正三年九月、千章館。鏡花全集第九卷所收。

【梗概】醫學士葛木晉三は、行方知れずの姉に似た清葉といふ日本橋の藝妓に、長い間の戀を打明けたが、清葉は義理のしがらみを楯に頷かない。その夜、別れの盃を取交しての歸途、ふとしたことから藝妓お孝に急場を救はれたのが緣でいゝ仲となる。お孝には傳吉といふ男があつた。それはもと〳〵意地づくで馴染んだのであるが、男の方では執念深く附き纏ひ、葛木は遂に悲觀して世を遁れんとする。お孝は發狂し、商賣も振はず、たま〳〵大火事の一夜、惡鬼の如くなつた傳吉は、お孝と見誤つて抱妓を刺したが、自分は又お孝の手で喜んで殺される。一足遲れて駈け附けた葛木は、捕はれたお孝のために、身仕度を整へる暇を貰つて一旦家に連れ歸る。お孝は葛木を見て安堵し、來合せた清葉に後事を託して、抱かれたまゝ毒を呷いで死ぬ。

【解說】この作品は、作者の唯美主義と一種の地方色（ローカルカラー）を描出したものである。此處に描かれた日本橋は實在の姿ではなく、何處までも作者の心眼によつて理想化された唯美境である。人物も事件も、總て好みの鑄型で打出され、絢爛の筆に載つて活躍する。この作は又、作者自身の手で戲曲化され、大正四年三月東京本鄕座で伊井・喜多村・小織等によつて上演されたが、これには新たに葛木の生理學教室の一場面が加へられてゐる。　〔水上・平松〕

日本評論（にほんひょうろん）雜誌　【刊行】明治二十三年三月創刊、初め隔週刊（月二回）、後月刊、廢刊年月未詳。明治二十六年十月第五十六號刊行、日本評論社。【解說】編輯主宰者は植村正久。第一號本誌發行の趣意に曰く、「余輩は政治・文學・社交・經濟及び教育上の事物に關して世人に論告すべき意見を懷抱する者なり、殊に我が現在及び將來の宗教に付ては其の眞僞利害に關し切に信じ深く悟り、熱心に冀望する所の者あり、（中略）日本評論は健全なる文學を進むるの一小機關を以て自ら任じ、國文の粹を保ち、歐文の美を導き、以て正大純潔雄偉高尚なる文學の築造に從事せんと欲す云々」の趣旨によつて、内容の一斑は推知されるが、その論評紹介するところは時事・政治・社會・思想・宗教・文學より理科に及んでゐる。殆ど每號理科新報があるのは面白い。宗教味は强いが宗教雜誌といふ程ではない。基督教的理想主義に立脚した文明批評が主體である。殊に植村正久の評論が中心をなしてゐる。これにかなり豐富な文學的分子が加味されてゐる。殊に新體詩の創作と外國文學の紹介の點で注目すべきものがある。且つ全體として清新なロマンチックな風趣を帶び、何處となく後の「文學界」（別項）を想はせるものがある。植村正久の文章その他が、やゝ人道主義的な立場から社會主義的色彩を多少とり入れてゐるのは、別の點から注目すべきところである。新體詩の創作では、磯貝雲峰・戸川殘花等の獨擅場といつてよい。別に副產物的に我が國中古の詩歌人の研究を伴つてゐる。例へば第四十八號の西行法師、第五十五號の菅原道眞等、その他僧侶の文學、鎌倉時代の文學の如き一般的な題目の研究もある。外國文學の紹介では、その範圍は英國文學が大部分を占めてゐる。就中詩人が多くブローニング、バアンズ、バイロン、ウォーヅウォース、テニスン等が紹介され、殊に明治二十五年テニスン死去の際には第四十六號を彼の追悼號にあててゐる。なほこの號にはトマス・ハーディの事（「小說家の性癖」田中達）が見えるが、これは恐らく文豪ハーディを紹介した日本最初の文獻ではあるまいか。詩人以外にはトマス・カーライルがある。大陸方面では先づゲエテが詳しく論評され、シルレルもある。佛蘭西自然主義文學の紹介しとては、「寫眞文學」（土岐亥、第一號）があるが、ただ紹介者の同情がない點が惜しい。第四十三號の植村氏筆と思はるゝ「文學上の理想主義につきて」は、逍遙・鷗外の殘理想論に一石を投じたかの觀があり、且つ本誌の文學的立場を宣明したものとして重視さるべきものである。　〔柳田（泉）〕

日本風景論（にほんふうけいろん）論文　【著者】志賀矧川（重昂）　【刊行】明治二十七年、東京堂。現代日本文學全集（紀行文集）所收。【内容】著者は緒論に於て愛鄕心の抑へ難きことを述べ、「江山洵美是吾鄕（大槻磐溪）と。身世誰か吾鄕の間美を謂はざる者ある」と云つて、種々の事例を擧げ、日本人の愛鄕心の强いのは、江山洵美に負ふところが多いことを述べた。それから日本風景美の主眼は瀟洒にあるとなして「脩竹三竿詩人の家、梅花百株高士の宅、是れ歐米諸國にありて絶えて看る能はざるの景物」と言ひ、瀟洒の風光について種々事例を擧げた。そして瀟洒の美は秋において最も發揮せられるとなし、紅葉・黃葉の秋を歸に化する光景は、歐米に類なき日本獨自の大觀である旨を高調した。なほ進んで各方面から日本の風景美が世界に特絶せることに及び、詩歌を挿みながら、清新な筆を以て、趣深く說いてゐる。【批評】本書は修辭上、漢詩趣味が多いが、漢文・漢詩を初めて假名交りに書き下した清新な思ひ付きが、「風景論」に親しました一つの理由になつた。日本主義を風景の上に託して、詩趣多きうちに高調した論文は、本書を以て嚆矢とするが、それと共に、日本の地理・地質・風景等を、最も美しく科學的に觀賞する知識を、初めて國民に普遍した最初の著述としての重大な功績をも認むべきである。本書が旺んに行はれるや、その文體を摸做する者も一時少くなかつた。　〔高須〕

日本振袖始（にほんふりそではじめ）淨瑠璃　五段　時代物　【作者】近松門左衞門　【興行】享保三年二月二十二日より竹本座（資慶板「外題年鑑」）　【諸本】七行八十三丁本、山本九兵衞板。十二行二十六丁本、同上。繪入十二行三册本（外題替「盛衰開分兄弟」）。諸種の近松全集。近松世話淨瑠璃集（帝國文庫）・近松淨瑠璃集（有朋堂文庫）・近松名作集（日本名著全集）等に所收。

【題材】木花開耶姫と磐長姫の說話（瓊々杵尊參照）、素戔嗚尊の大蛇退治の說話、蘇民將來（別項）と巨旦將來の說話等を結びつけたもの。前二者は「日本書紀」神代卷に見えて居り、後者は「釋日本紀」所引の「備後風土記」に載つてゐる。

【梗概】〔初段〕（大序）瓊々杵尊は大山祇の娘木花開耶姫の入内を望まれるが、鰐香背の臣が姫は素戔嗚尊の

狂言本「日本振袖始」

〔二段〕（序）素戔嗚尊は寶劍を奪つたかの惡鬼は三熊野大人に違ひなしと、天稚彦・鰐香背等を率ゐて殲山を攻める。三熊野大に防いだが、遂に重ねて仇をなさじとの誓の手形を差出して降伏し、更にかの寶劍を奪つた惡鬼は身を變して寶劍の行方を探しに去る。〔三段〕（序）吉備國の百姓食保の長の總領巨旦將來は邪慳で、弟蘇民將來の田畑を奪ひ、且つ妻五百機が懷姙した爲め養子宇賀石を虐待する。宇賀石は蘇民の獨子である。蘇民の妻賤機は、宇賀石を可愛がつて貰ひ度く且つ田畑も返して貰ひ度さに、己が家に宿を求めてゐる素戔嗚尊から借りうけた疫神の手形を持つて來て巨旦に貸し與へると、巨旦はその儘奪つてしまふので、賤機は怒つて宇賀石を連れ歸る。（切）食保の長は、田圃で五百機から巨旦が蘇民の田畑を奪つた事を聞いて大に憤り、折から其處へ姿を現はした巨旦と口論する中、巨旦は過つて父の首を鍬にかけて打落してしまふ。巨旦は罪を蘇民に塗り付けようと屍を蘇民の田に埋め、五百機を縛して稻叢に

ると、何處よりともなく一枚の山宇津木が飛び來つて長者の棟木に立つので、村人達は姫が八岐の大蛇に狙はれたと言つて大騒ぎとなるが、尊は人々を制して大蛇退治を約束する。〔五段〕（大切）景事「八雲猩々」。籤の川上に八つの甕を置いて毒酒を湛へ、傍の高棚に姫を据ゑて待つ所に、大蛇來つて毒酒に醉うて舞ふ。姫は隙を見て逃げ出すが、大蛇はこれを追ひ詰め一呑みにする。そこへ尊が駈け來つて大蛇を捻ぢ付ける時に、大蛇の背を腹の内から斬りやぶつて姫が立ち現はれ、十握の寶劍を尊に奉る。

【構想】敍述に說明的な箇所が多く、全體としても纏まりのない散漫な作で、近松としては愚作の方である。【影響】歌舞伎では同年に京櫛山座で上演せられ、淨瑠璃を都太夫一中・

行二十六丁本、同上。繪入十二行三冊本（外題替「盛衰開分兄弟」）。諸種の近松全集。近松世話淨瑠璃集（帝國文庫）・近松淨瑠璃集（有朋堂文庫）・近松名作集（日本名著全集）等に所收。

【題材】木花開耶姫と磐長姫の說話（瓊々杵尊參照）、素戔嗚尊の大蛇退治の說話、蘇民將來（別項）と巨旦將來の說話等を結びつけたもの。前二者は「日本書紀」神代卷に見えて居り、後者は「釋日本紀」所引の「備後風土記」に載つてゐる。

【梗概】〔初段〕（大序）瓊々杵尊は大山祇の娘木花開耶姫の入內を望まれるが、鰐香背の臣が姫は素戔嗚尊の御所望と橫槍を入れる。所へ美濃國殯山の疫神三熊野大人が人民を惱ますとの早馬の奏上があるので、速日の臣を敕使として疫神退治の宣旨が素戔嗚尊に下る。（中）素戔嗚尊の門出の途中、鰐香背が駈け來つて開耶姫入內のことを告げ、出陣を中止すべしと唆かすので、尊は姫を奪ひ取らうと駒を返す。（切）開耶姫の姉磐長姫は、妹の入內を嫉妬の餘り、內裏に忍び入るが、八咫の鏡によつて惡鬼の化身なる事を見顯された爲め、怒つて開耶姫の侍女早苗局を二つに引裂く。折から內裏に引返した素戔嗚尊は惡鬼の術中に陷り、その預つてゐる十握の寶劍を奪はれる。

〔二段〕（序）素戔嗚尊は寶劍を奪つたかの惡鬼は三熊野大人に違ひなしと、天稚彥・鰐香背等を率ゐて殯山を攻める。三熊野大に防いだが、遂に重ねて仇をなさじとの誓の手形を差出して降伏し、更にかの寶劍を奪つた惡鬼は實は出雲國簸の川上に棲む八岐の大蛇なる事を告げる。（切）素戔嗚尊の凱陣の途中、天津兒屋根の臣が道に注連繩を渡して尊の入洛を拒み、寶劍を奪はれた罪を責める。天稚彥も亦死を以て諫めるので、尊は悄然として蓑笠に身を窶して寶劍の行方を探しに去る。〔三段〕（序）吉備國の百姓食保の長の總領巨旦將來は邪慳で、弟蘇民將來の田畑を奪ひ、且つ妻五百機が懷姙した爲め養子宇賀石を虐待する。宇賀石は蘇民の獨子である。蘇民の妻賤機は、宇賀石を可愛がつて貰ひ度く且つ田畑も返して貰ひ度さに、己が家に宿を求めてゐる素戔嗚尊から借りうけた疫神の手形を持つて來て巨旦に貸し與へると、巨旦はその儘奪つてしまふので、賤機は怒つて宇賀石を連れ歸る。（切）食保の長は、田圃で五百機から巨旦が蘇民の田畑を奪つた事を聞いて大に憤り、折から其處へ姿を現はした巨旦と口論する中、巨旦は過つて父の首を鍬にかけて打落してしまふ。巨旦は罪を蘇民に塗り付けようと屍を蘇民の田に埋め、五百機を縛して稻叢の中へ匿し、己も木蔭に隱れる。そこへ蘇民夫婦が、素戔嗚尊を牛に載せて送つて來る。尊はすげなく宿を拒んだ巨旦の邪慳にひきかへ、蘇民の深切なるに感謝し、疫病除の祕事を授けて去る。そのあとで、蘇民夫婦が田を耕しにかゝると、父の屍が掘り返されるので吃驚する。そこへ巨旦が立ち現はれ、蘇民を父殺しと罵る。その爭ひのうちに稻叢から五百機が姿を出す。賤機が走りよつて縛を釋いてやると五百機は夫を諫めて自害する。かくて兄弟の亂鬪となるが、巨旦は遂に蘇民に討たれる。〔四段〕（序）「素戔嗚尊道行」で簸の川上に着く。（中）出雲國手摩乳長者の獨子稻田姫が、母足摩乳に伴はれて簸の川岸で櫻狩をしてゐると突然發熱して苦しむ。折から來あはせた尊が姫の兩袖の下を闕腋にして熱を漏らしてやる。これが日本振袖の始め。（切）尊が手摩乳の館に請ぜられて饗應を受けてゐると、何處よりともなく一枝の山宇津木が飛び來つて長者の棟木に立つので、村人達は姫が八岐の大蛇に狙はれたと言つて大騷ぎとなるが、尊は人々を制して大蛇退治を約束する。〔五段〕（大切）景事「八雲猩々」、簸の川上に八つの甕を置いて毒酒を湛へ、傍の高棚に姫を据ゑて待つ所に、大蛇來つて毒酒に醉うて舞ふ。姫は隙を見て逃げ出すが、大蛇はこれを追ひ詰め一呑みにする。そこへ尊が駈け來つて大蛇を捻ぢ付ける時に、大蛇の背を腹の內から斬りやぶつて姫が立ち現はれ、十握の寶劍を尊に奉る。

【構想】敍述に說明的な箇所が多く、全體としても纏まりのない散漫な作で、近松としては愚作の方である。【影響】歌舞伎では同年に京榊山座で上演せられ、淨瑠璃を都太夫一中・都若太夫・都三中、三絃を千原新六が勤めた。又元文四年京蛭子屋座上場の時には、「系事千里通」と改題せられた。江戸でも文化六年六月市村座で、近くは大正四年十一月帝國劇場で上場された。操では文化三年七月大阪御靈境內の芝居にかゝつたが、この時には近松梅枝軒・佐川藤太によつて增補改作せられた。

狂言本「日本振袖始」（東京帝大圖書館）

【參考】近松名作集下解題黑木勘藏○近松全集第十一卷解題藤井乙男○續歌舞伎年代記○京阪歌舞伎年代記伊原敏郎○演藝畫報（二ノ一二）〔高野（正）〕

日本文學（にほんぶんがく）講義錄 二十冊

【本稱】岩波講座日本文學【編輯者】藤村作・吉澤義則・橋本進吉・山田孝雄【刊行】昭和六年より昭和八年まで、岩波書店【解說】岩波講座のうち、第五次計畫として刊行されたもので、國語及び國文學兩方面の領域の中から最も日本文學的なるものを抽出して體系づけ、

これに關聯する各分野の研究を綜合したところに、本講座が從來の類書と異る點を見るので、立體的に且ついはゆる學術的に國文學を闡明したものと云へよう。內容を分類して一般項目・特殊項目・作品及び作家・關係項目の四に大別する。主體とも見るべき作品及び作家は、更に大和時代・平安時代・鎌倉室町時代・上方江戸時代・明治時代・現代に分れ、これを約九十餘の項目に細別するのであるが、この項目の立て方の如きは從來見られなかつたところで、執筆者の專門研究を尊重した點見るべきものがあり、このために學界に新たに寄與した論文が少くないのも亦特色であらう。又特殊項目・關係項目に於ける諸項目に於て、日本民族の持つもの卽ち日本文學を産んだものを明かにしてゐるのも深切である。〔土井〕

日本文學講座 にほんぶんがくかうざ 講義錄 初版十九册・再版十五册【刊行】初版は大正十五年—昭和三年、再版は昭和六・七年、新潮社。
【解說】本講座が刊行される頃、祖國の姿を再認識しようとする機運が日本文學硏究の上にも反映して、國文學に對する興味が勃然として起つて來た。この時潮に乘じて、「先づ爾自身を自覺する」ために、「祖國の傳統」を詳かにするために、本講座は開かれた。特に明治文學研究のために力を注いだ點は、この講座の特徵であつて、當時漸く明治文學再檢討の機運が盛んに行はれ始めたのであつたが、組織的に綜合されたのは實に本講座が最初であつて、以後この機運に一層の拍車を加へたことは否めない。また「鑑賞講座」を設けて、藤村・白鳥・秋江・紘二郎などの創作家に大鏡・芭蕉・西鶴・馬琴等の鑑賞を執筆せしめてゐるのも、本講座の異色ある點である。內容は、總論、日本文學と外國文學思潮、日本文學と社會生活、古代及奈良朝時代、平安朝時代、鎌倉時代、室町時代、江戸時代、明治時代、特殊研究、鑑賞の十一講座の外、科外講座がある。講師は百數十名、大體學界の人々を網羅したといつてよい。再版は改裝して各講座を時代別に別册にして出版したもので、內容に於て多少の增補改訂がある。この講座は國文學講座の最初の企てであつて、國文學研究の機運を高めたところに意義がある。〔土井〕

日本文學史 にほんぶんがくし 文學史 二册【著者】三上參次・高津鍬三郎共著、落合直文補助【刊行】明治二十三年、金港堂。【成立】「著者二人曾て大學に在りし時、共に常に西洋の文學書を繙きて、その編纂法の宜しきを得たるを嘆賞し、又文學史といふ者ありて、文學の發達を詳かにせるを觀」たが、本邦にはかくの如き文學書も文學史もないのを慨してその出現を企て、落合直文の材料蒐集を得て成立したものである。【內容】總論、第一編日本文學の起原及び發達、第二編奈良朝の文學、第三編平安朝の文學、第四編鎌倉時代の文學、第五編南北朝及び室町時代の文學、第六編江戸時代の文學。【批評】著者は文學を「或る文體を以て、巧みに人の思想、感情、想像を表はしたる者にして、實用と快樂とを兼ぬるを目的とし、大多數の人に、大體の智識を傳ふる者」と定義し、更に「文學は人心の反照なり。故に文學史を以て古來人の智德の進步せし蹤跡を探り、時代によりて人間の思想・感情・想像に高下あるを知り、さて之に應じてその時代の人情・風俗・嗜好の類の如何なりしかを察す」れば、我々はこれに依つて反省して生活の大目的たる幸福を求めることが出來ようと云つてゐるのは、功利的文學論の行はれた當時の所產として已むを得ぬ點であり、「國文學讀本」(別項)の啓蒙的なる立場から更に一步を出たもので、「實に本邦文學史の嚆矢なり」と自負してゐるのは當然である。編述の體裁は大體に於て、各編を歷史の部分と評釋・文學者略傳及び作品例の部分に分けてゐるが、必ずしも統一的でない。例へば第二編を、第一章總論。第二章萬葉假名。第三章奈良朝の散文。第一節宣命の文、第二節古事記の文、第三節風土記。第四章奈良朝の和歌(萬葉集)の如くであつて、第六編に於て江戸時代を論じた部分が詳密であるのは、本書の態度の一つの表はれと見られ、明治時代に於ける國文學發達の一資料として重要なる地位を占めるものである。
【附說】本書は最初の國文學史として歡迎され、數版を重ねたが、明治二十六年「教科適用日本文學小史」(二册)として內容を縮小、出版された。翌二十七年文部省の檢定を受け、師範學校生徒用となつた。〔土井〕

日本文學者年表 にほんぶんがくしやねんぺう 索引・目錄 一册【編者】赤堀又次郎【刊行】明治三十八年、大日本圖書會社。大正十五年增訂改版、昭和二年再版、武藏野書院。【解說】成立の動機は、編者が東京帝大圖書館の書名目錄から閱覽の便宜上、自ら著者名目錄を採錄したことにある。これを明治二十七年「帝國文學」(別項)紙上に連載し、更に出版するために手を入れて刊行したもので、一種の著者名索引である。初め編者は慶應三年までに歿した人々を含める豫定であつたらしいが、鎌倉期の文治元年までで終つてゐる。人物約八百四十餘名、これを歿年順に排列し、それに傍註的な簡單な傳記、傳記の所載された書名、又は參考書、作品名等を列擧したものである。作品名は單行されたものは勿論、叢書或は歌集の如きものに見えるものをも收めてゐる。作者不詳の作品、例へば「催馬樂」「榮華物語」等の類を集めて各期の終に附錄としてゐる。更に悉曇・聲明等の目錄、假名引の人名・書名索引がある。本書の言ふ文學者とは單に文學的に扱はるべき作品を殘した人々をも含めてゐる。本書の價値として、個人の努力は認められるが、結局その個人的なる事に不滿を感ずる。併し著者名目錄完成の一つの先驅者たる功勞を認めない譯にはいかない。〔土井〕

日本文學者年表續編 にほんぶんがくしやねんぺうぞくへん 索引・目錄 一册【編者】森治藏。今園國貞增補【刊行】大正八年、限定版。大日本圖書會社【解說】文治二年から明治四十五年の間に物故した人々を歿年順に排列し、傳記・參考書・著作名等を擧げた點は、正編と全く同樣である。併し傳記・參考論文等に於ては、正編より豐富である。ただ德川期以後の部分は明かに資料蒐集の乏しきを感ずると同時に、敍述の精粗の差甚だしいのを覺える。いはゆる文學者の數約九百八十餘名、明治四十五年現在に於て生存中のもの約百十餘名を附錄として收めてあるが、この部分は單に作品名のみを列擧した外に、假名引の人名索引、書引の書名索引がある。森治藏記念事業の一としてその遺稿に補修を加へたもの。〔土井〕

日本文學新史 にほんぶんがくしんし 一册 國文學史【著者】尾上八郎【刊行】大正三年、東亞堂。【解說】新史と稱する所以は、本書が從來の國文學史の多くが作品と傳記の羅列に止まるのを斥けて、時代思潮の變遷及びそれに伴ふ各時代の文學の消長を敍した點にある。何故ならば、所詮文學は、思想は時勢の影響を受け、その裡から産れたものであるからである。而も時代思潮の盛衰は政治的事象とは一致しない故に、國文學史が歷史的區分を踏襲するのは正しくないのであり、他面に時代の影響下に、いかに變貌した文學作品も大觀すれば一系の思想を看取する事が出來るが故に、我が國民性の根柢をなす思想の發達、變遷の大要を見、その然る所以を盡さんとしたもので、一篇の思想史とも見られる。更に上古から平安時代までを「情中心の時代」、鎌倉・室町時代を「法中心の時代」、江戸時代を「道中心の時代」、明治時代を「主義中心の時代」と四大分し、率直・單純・快活の三つの特徵を持つ我が國民性に印度思想たる佛法、支那思想たる霸道が加はつて渾然たる融和を來したのが、

(六)濱松中納言物語・大和物語・唐物語。(七)宇治拾遺物語・多武峯少將物語。(八—一二)源氏物語。(一三—一五)榮華物語。(一六—一八)太平記。(一九)保元物語・平治物語・秋夜長物語・鴉鷺合戰物語。(二〇)平家物語。(二一)古今著聞集。(二二)公事根源・十訓抄。(二三)水鏡・大鏡。(二四)增鏡。

泰西の制度文物を入れるに急であつて、國文學研究の途は、殆ど閉された狀態であつた明治十八・九年の頃、國文學興隆の目的で、我が古典文學のうち三十八部を選んで每月一册づつを刊行したのが本叢書である。初め十二篇を以て終了の豫定であつたが、更に十二篇を追加續刊した。本書の刊行は果然反動的に世の喝采を受け、「文學全書一たび出てこれを購ふもの常に萬をくだらず。それと同時に國文

昭和年間に於て甚だ完成されたものとして現はれたものである。校訂・註解・校正・印刷に於ても優れてゐる。なほ本叢書の姉妹篇として「近代日本文學大系」(別項)がある。
(一)古事記・祝詞・壽詞・宣命・日本風土記・日本書紀神代卷・古語拾遺。(二)竹取物語・伊勢物語・大和物語・濱松中納言物語・無名草子・とりかへばや物語・堤中納言物語。(三)土佐日記・蜻蛉日記・紫式部日記・和泉式部日記・更科日記・東關紀行・十六夜日記・枕草紙・方丈記・徒然草。(四・五)宇津保物語・落窪物語・住吉物語・狹衣物語。(六・七)源氏物語。(八—一〇)今昔物語・宇治拾遺物語・十訓抄・古今著聞集。(一一—一三)榮華物語・水鏡・大鏡・今鏡・增鏡・池の藻屑・月のゆくへ。(一四)保元物語・平治物語・平家物語。(一五—一六)源平盛衰記。(一七—一八)太平記・吉野拾遺・神皇正統記。(一九)お伽草子・松帆浦物語・鳴門中將物

至らざりしものの、いまだ能く善本を得ずして校勘を經ざりしもの、いまだ猶釋文を見ずまた校註に遑あらざりしもの」と云ふ序文を實際に移して、「屋上屋を架するものとなさんや」と自負し得る本叢書は、學ぶ者に取つて甚だ有益なものと云はねばならぬ。殊に精密な校註に至つては利便この上もない。併しながらその刊行が遲々として進まず、未だ頭初の三卷を出したのみであるのは、洵に惜しむべきである。〔土井〕

日本文庫 にほんぶんこ 叢書 十二册【編者】岸上操【本稱】少年必讀日本文庫【刊行】明治二十四年より同二十五年まで、博文館。
【解說】明治の文化が漸く緒に就かうとした二十年代に於て、「世には新しき飜譯の書又小說本など出でて讀人も多く西の國々の事はい

伴ふ各時代の文學の消長を叙した點にある。何故ならば、所謂文學は、思想は時勢の影響を受け、その裡から産れたものであるからである。而も時代思潮の盛衰は政治的事象とは一致しない故に、國文學史が歴史的區分を踏襲するのは正しくないのであり、他面に時代の影響下に、いかに變貌した文學作品も大觀すれば一系の想想を看取する事が出來るが故に、我が國民性の根柢をなす思想の發達、變遷の大要を見、その然る所以を盡さんとしたもので、一篇の思想史とも見られる。更に上古から平安時代までを「情中心の時代」、鎌倉・室町時代を「法中心の時代」、江戸時代を「道中心の時代」、明治時代を「主義中心の時代」と四大分し、率直・單純・快活の三つの特徴を持つ我が國民性に印度思想たる佛法、支那思想たる儒道が加はつて渾然たる融和を示したのが、日露戰爭までの文學の特質であつたが、以後泰西の諸々の主義の影響を傳へて、新しい貌を備へるに至つたと説き、この間に於て最も長く、純粋な國語で且つ最もよく國民性の發露されてゐるのは實に和歌であつて、和歌こそは我が文學の脊梁をなすものであるとしてゐるのも亦、本書の一つの力點といつてよからう。

【土井】

日本文學全書（にほんぶんがくぜんしょ）　叢書　二十四册【編輯・校訂】萩野由之・落合直文・小中村義象【刊行】明治二十三年より同二十五年まで、博文館。【解説】所收書目を擧げる。(一)竹取物語・伊勢物語・紫式部日記・住吉物語・徒然草。(二)土佐日記・枕草紙・更科日記・方丈記。(三)十六夜日記・辨内侍日記・落窪物語。(四)とりかへばや物語・堤中納言物語・四季物語。(五)中務内侍日記・讃岐典侍日記・和泉式部日記・蜻蛉日記。(六)濱松中納言物語・大和物語・多武峯少將物語。(七)宇治拾遺物語・多武峯少將物語。(八―一二)源氏物語。(一三―一五)榮華物語。(一六―一八)太平記。(一九)保元物語・平治物語・秋夜長物語・鴉鷺合戰物語。(二〇)平家物語。(二一)古今著聞集。(二二)公事根源・十訓抄。(二三)水鏡・大鏡。(二四)增鏡。

泰西の制度文物を入れるに急であつて、國文學研究の途は、殆ど閉された狀態であつた明治十八・九年の頃、國文學興隆の目的で、我が古典文學のうち三十八部を選んで毎月一册づつを刊行したのが本叢書である。初め十二篇を以て終了の豫定であつたが、更に十二篇を追加續刊した。本書の刊行は果然反動的に世の喝采を受け、「文學全書一たび出てこれを購ふもの常に萬をくだらず。それと同時に國文學のありさま日に月に興隆するにいたれり。國文學の今日あるをいたしはずといへどもまたその間にありて大に力ありしはわれわれの自信するところなり」と編者の一人落合直文が本書完成の辭に於て述べてゐる。爾來本書類似の國文叢書類の刊行夥しく、從つて國文學研究の勃興を將來したのであるが、この文化史的使命を果した點のみに於ても、本書は十分記憶される價値がある。

【土井】

日本文學叢書（にほんぶんがくそうしょ）　「新釋日本文學叢書」を見よ。

日本文學大系（にほんぶんがくたいけい）　叢書　二十四册【校註・編輯】石川佐久太郎・長連恒・植松安・山崎麓等。【本稱】校註日本文學大系【刊行】初版、大正十四年より昭和二年まで。再版、昭和七年以降。國民圖書株式會社【解説】從來刊行された國文叢書の類書が、大正・昭和年間に於て甚だ完成されたものとして現はれたものである。校訂・註解・校正・印刷に於ても優れてゐる。なほ本叢書の姉妹篇として「近代日本文學大系」（別項）がある。(一)古事記・祝詞・壽詞・宣命・日本風土記・日本書紀神代卷・古語拾遺。(二)竹取物語・伊勢物語・大和物語・濱松中納言物語・無名草子・とりかへばや物語・堤中納言物語。(三)土佐日記・蜻蛉日記・紫式部日記・和泉式部日記・更科日記・東關紀行・十六夜日記・枕草紙・方丈記・徒然草。(四・五)宇津保物語・落窪物語・住吉物語・狹衣物語。(六・七)源氏物語。(八―一〇)今昔物語・宇治拾遺物語・十訓抄・古今著聞集。(一一―一三)榮華物語・水鏡・大鏡・今鏡・增鏡・池の藻屑・月のゆくへ。(一四)保元物語・平治物語・平家物語。(一五―一六)源平盛衰記。(一七―一八)太平記・吉野拾遺・神皇正統記。(一九)ゐ伽草子・松帆浦物語・鴉鷺合戰物語。(二〇―二二)謡曲。(二三・二四)狂言。(二三・二四)本朝文粹・文華秀麗集・覆風藻・經國集（各卷末に索引が附いてゐる）。

【土井】

日本文學類從（にほんぶんがくるいじゅう）　叢書　十二册【編纂者】佐佐木信綱・新村出・武田祐吉・久松潜一・藤田德太郎【本稱】校註日本文學類從【刊行】昭和三年以降、博文館。【解説】内容は上代文學集・近代歌謡集・隨筆文學集・南蛮文學集・自傳文學集・紀行文學集・物語文學集・評論文學集・勅撰名歌集・海洋文學集・歌曲註釋集・佛教文學集等である。從來刊行された國文叢書類は多くは縦に編輯されるのが一般であつたが、本叢書は初めて横の關係に分類されたところに新味を加へたものであり、編者の最も得意とする部門を擔當する事に依つて、この編纂法は一層その效果を強めたと云へる。更に「從來いまだかつて刊行に至らざりしものの、いまだ能く善本を得すして校勘を經ざりしもの、いまだ猶釋文を見ずまた校註に遑あらざりしもの」と云ふ序文を實際に移して、「屋上屋を架するものとなさんや」と自負し得る本叢書は、學ぶ者に取つて甚だ有益なものと云はねばならぬ。殊に精密な校註に至つては利便この上もない。併しながらその刊行が遲々として進まず、未だ頭初の三卷を出したのみであるのは、洵に惜しむべきである。

【土井】

日本文庫（にほんぶんこ）　叢書　十二册【編者】岸上操【本稱】少年必讀日本文庫【刊行】明治二十四年より同二十五年まで、博文館。【解説】明治の文化が漸く緒に就かうとした二十年代に於て、「世には新しき飜譯の書又小説本など出でて讀人も多く西の國々の事はいよ〳〵つばらに輕薄浮華の習ひはます〳〵甚しく」なり行くを慨し、「今の青年輩をしてひろく近き世の賢哲の書をよむでこれを今の世にほどこし、眼前（まのあたり）に功德事業をなさしめん」と實用に益あり、而もいかなる寒鄉僻地の子弟にも得易く讀み易く、志氣德業に資するために本叢書を撰ぶと、校訂者内藤耻叟の序に述べてある。時代的産物の一として當時勃興し來つた國文學研究熱と相伴ふものである。所載の著作九十三部、日誌・隨筆・史傳・考證・論説・講義の類で、總て江戸時代のもの、尾藤二洲・湯淺常山・中井履軒・物徂徠・安井息軒・佐藤一齋・朝川善庵・岡白駒・龍澤蓉山・中江藤樹・淺見絅齋・貝原益軒・伊勢貞丈・高野長英・渡邊崋山・ケンペル等の著述を含む。

【土井】

日本文章論（にほんぶんしょうろん）　國字論　一册【著者】末松謙澄【刊行】明治十九年十一月、東京文學社。【内容】國字として日本語に適

する文字は何であるかを論じたもの。九章に分けて説いてゐる。(一)「言語の性質」では、日本語は支那語のやうな單音節語ではないから、日本語を表記するには漢字は甚だ不適當であると論じ、(二)「假名發明の來歷」では、日本語を表はすには、理想的とは云ひ難いが、假名が適してゐる。假名は日本の一大發明といふべきであるとし、(三)「假名文衰退の原因」では、その外因として支那學の流行、中世文學の一般的凋落、内因として假名文ののべつ書、縱書、意味の斷續輕重等の區別を表はす符號の缺除、外國語を採り入れる良法のない事、冗漫等について假名文自身に内在する缺點を擧げ、漢字假名交り文の盛行は、それが日本語を寫すに適してゐるといふより、假名文書方の不完全によるためのものとし、(四)「綴字法非難の答」では、古來の假名文の誦讀し難い事、假名遣の困難、分別書の煩はしさ、辭書作製の困難、漢字を用ひなくなつた曉は和漢の古典が讀めなくなる事等の非難に對して、その謂はれなき所以を論じ、(五)「文章の體裁」では、言文一致を目的として進むべき事を云ひ、(六)(七)「假名綴り書き方」では、假名を用ひる際には、これに幾多の改良を加へなければならないが、第一に分別書及び横書を採用すべきであるとし、その他、從來の字形に多少の變形を加へて片假名を用ひ、西洋語に見える頭字法・句讀法を採用し、又假名遣を改めるべき事等を詳細に述べてゐる。(八)「羅馬字書き方」では、羅馬字は文字としては假名より優れてゐるが、これで日本語を寫す時は語形が伸び勝ちであるから、その缺點を矯正すべきであるとしてゐる。附錄「歐文綴字考」は三章より成り、英・獨・伊・佛・露の各國語の文章の沿革を記述し、綴字改良にも言及してゐる。なほこの外「井上伯演説」(羅馬字會席上の演説)及び「日報記者の説」「文章改良の目的」(日報社説)が附載されてゐる。【批評】本書は國語そのものの研究の上に立つて、國字を論ずべきことを教へたものであつて、本書と同年に刊行された矢野文雄の「日本文體文字新論」(別項)と共に、國字論の進むべき方向を規定した。殊に從來の假名文の缺點を指摘し、假名のみで綴る場合にとるべき方法を具體的に示したことは、假名國字論者に多大の影響を與へた。その唱道した新假名遣も、相當注目すべきものである。

【備考】本書の所説は自治館編の「國語改良意見」(明治三十三年刊)中に抄錄されてゐる。

【參考】國字問題の研究 菊澤季生〇現代國語思潮 日下部重太郎 〔岩淵〕

日本文體文字新論 にほんぶんたいもんじしんろん 國字論 一册 【著者】矢野文雄 【成立・刊行】明治十八年著者が英國在留中、本國に於て國字問題が盛んに論議されるのに鑑みて成稿、翌十九年三月、報知社より刊行。【内容】日本語では、如何なる文體及び文字を用ふべきかを論じたもの。六章に分けて説いてゐるが、(一)「語體語勢ノ事」では、現在の日本語では漢語を談話(話言葉)に於ても、又文章(書言葉)に於ても用ひないわけにはゆかない所以を述べ、(二)「文語及ヒ文體ノ事」では、談話と文章とではその條件を異にするから、談話をそのまゝ文章にするわけにはゆかない。文章としては簡潔な所謂文語體の方が適當であるとし、(三)「日本ニ用フ可キ文字及ビ文體ノ事」では、日本語の文體としては、漢文體・漢文變體・雜文體(漢字假名交り文)・兩文體(雜文體に振假名を附したもの)・假名體の五つがあるが、現在最も便利なのは新聞紙で採用してゐる兩文體である。而して文書を普通書と文學書に分ければ、普通書は一般に分り易い事を目的とするから、それに用ひる漢字はこれを適當に節減すべく、ほぼ三千字位で事足りるであらうとし、その常用漢字の選定方法及びその普及方法を具體的に説いてゐる。(四)「假名ト漢字トノ優劣」では、目の世界では表音文字より表意文字の方が便利で、それは生理學上から證明出來る。而して活版印刷の發達した現在では、文字は書くに便なるものより、讀むに便なるものをとるべきであるとし、(五)「日本ノ假名ト羅馬字トノ優劣」では、日本語ではその性質上、音節文字を適當とし、羅馬字は不適當である。もし又羅馬字を採用する位なら寧ろ速記文字の方がよいと論じ、日本語には假名が適當であるが、しかしこれも改良を加へて用ふべきであるとして、その改善すべき點を具體的に示してゐる。(六)「全篇ノ要領及ヒ補遺」では、文字・文體は何でもあれ、便利なものを用ふべきであるが、一般に依據する所を示さないと惑亂に陷れてしまふから、文字・文體は一定しておくべきであり、而して諸説を提出せしめて輿論によつてこれを定むべきであるとし、又一體文章は漢譯體・洋譯體・土語體と區別する事が出來るが、普通書ではなるべく談話體に近き土語體を用ひ、文學書ではどれでも自由に用ふべきであると論じてゐる。【批評】所謂兩文體(總振假名文)を推奬し、漢字の效用をも認めた點、本書の所説は折衷論とも稱すべきものであるが、本書と同年に刊行された末松謙澄の「日本文章論」(別項)と共に、從來の國字論の根本的缺陷を衝いたもので、爾後の國字論は、國語を表はす文字として何が適當であるかと云ふ點に注意するやうになつた。從つて假名の字形改良、或は新字作製を誘發するに至つたが、本書の後世に最も多大の影響を與へたものは漢字節減論である。漢字節減の思想は、既に古くから存在し、福澤諭吉の如きもこれを自ら實行したが(文字の敎)、著者は本書刊行後、明治十九年夏、郵便報知新聞(後の報知新聞)の主筆に就任すると共に、紙上で漢字節減を唱道し、翌年十月からは、これを紙上に於て實行し、十一月には「三千字字引」を發表した。併し一般には未だ文語文、殊に漢文直譯體が勢力を占めてゐた爲めに、この擧は失敗に終つた。(「漢字節減説」參照)

【備考】本書の所説の大要は、長連恒氏の「日本語學史」下卷(明治四十一年刊)に紹介されてゐる。

【參考】現代國語思潮 日下部重太郎〇國字問題の研究 菊澤季生 〇國語國字問題の經過 保科孝一(日本文學講座) 〔岩淵〕

日本文法 にほんぶんぽふ 語學書 一卷 【著者】草野清民 【刊行】明治三十四年八月。上田萬年博士の序と、藤井乙男博士の「草野文學士小傳」と、藤岡作太郎博士の「草野氏日本文法の後に書す」とを附す。【内容】三篇にわかれ、前篇は、音聲及ビ文字ノ論(第一、音ヲ記ス方法、第二、音便、第三、假名遣)。詞篇(第一、總論、第二、名詞、第三、指詞、第四、數詞、第五、形容詞、第六、動詞、第七、助動詞、第八、弖爾乎波)。文法篇(第一章、詞句相互ノ關係。(1)名詞ト形容詞動詞トノ關係、(2)修飾語ト被修飾語トノ關係、(3)詞句ノ接續、(4)獨立詞句。第二章、文又ハ文章。(1)文主、

説語、(2)終止法、(3)單文、(4)複文、(5)詞句ノ省略並ニ轉例、(6)崇敬法、(7)解剖及ビ批判)となつてゐる。なほ附錄として「國語ノ特有セル語法——總主」「言語ノ發達」の二篇を添へてゐる。本書は著者の歿後遺稿を整理して刊行したものであるが、著者の生前に脱稿に至らなかつたもので、聲音論・動詞・助動詞の部は、著者が改訂しようとして未だその緒に就かず、特に動詞の自他の如きは一部を起稿したのみであり、副詞・接詞・感詞に關する部は全く缺けてゐる。【價値】本書は未定稿であるが、文章法に關するものに注意すべき説が多い。即ち名詞・代名詞が動詞・形容詞に對して主語になり、客語になり、總主語になり、補語になる場合を説いた如き、副詞の用法の研究の如き、文を單文と複文に分けて説いた如き、殊に「總主」についての説は、日本語に特有

二段活の中間に位するものである。而して四段活は活用の根源で、二段活は四段活から變化したものであらうと云ふのである。四段活が動詞の諸活用の根源であらうとする説は、既に早く鹿持雅澄が「用言變格例」(別項)に述べてゐるが、未だ學界の承認を得るには至らなかつた。著者が研究の結果、雅澄の説を裏付けた事は、注意すべきである。 〔龜田〕

日本文法史 にほんぶんぽふし 語學書 一册 【著者】福井久藏 【名稱】内題は「教育並に學術上より見たる日本文法史」とある。【刊行】明治四十年十月 【内容】本書は國文法の研究の變遷・發達の大綱を記したもので、總論・本論及び附錄から成つてゐる。總論には、文法史研究の必要、文典の種類、中等教育に於ける文法の教授法等について記してゐる。本論は二篇に分ち、第一篇は明治維新前について、(1)假名遣、(2)弖

引、本書中の人名・書名索引及び日本文法史の參考として、獨逸文法敎授史概要を擧げてゐる。【價値】國語研究史の中で專ら文法研究の變遷發達を跡づけ、これを批評したものとしては、本書は最初の書であり、而して今日に於ては唯一のものである。その組織は整然として居り、その所説は穩健で多くは信憑するに足るものである。なほ一般國語學史の類に於ては、維新後は頗る簡略であるのに反し、本書は維新後の研究に頁數の大半を費して居り、その詳細なる事、現在に於ては本書の右に出づるものがない。又肖像・筆蹟等の寫眞を出してゐる事も多とすべき點である。 〔龜田〕

日本文法新論 にほんぶんぽふしんろん 語學書 一册 【著者】金澤庄三郎 【刊行】大正元年十二月、早大出版部。【内容】國文法全般に亘つて、その重要な諸點を朝鮮語・沖繩語・アイヌ

け、古語と中古言との相違を説き、朝鮮語・アイヌ語・沖繩語等と比較してゐる。次に文章論は、(一)總説、(二)枕詞、(三)言掛、(四)掛結、(五)呼應、(六)略語に分つて説いてゐる。【價値】國文法と外國文法との比較研究は、Rosny, Aston, Edkins, Lowell, Chamberlain 等の外人が明治初年に着手し、色々新しい結果を齎してゐるが、日本人としては、早く新井白石がかやうな研究方面に着目した外は、この種の研究をした者は殆どなかつた。然るに本書は、國文法の全般に亘つて、著者が國語と同系語と目する朝鮮語その他と比較して研究したものであつて、その點に於て國語學史上注意すべきものである。尤もその所説には首肯し難い點もないではないが、傾聽すべき新説も少くない。なほ「聲音論」「單語論」は著者が最も力を注いだと目される。 〔龜田〕

を採用すべきであるとし、その他、從來の字形に多少の變形を加へて片假名を用ひ、西洋語に見える頭字法・句讀法を採用し、又假名遣を改めるべき事等を詳細に述べてゐる。(八)(九)「羅馬字書き方」では、羅馬字は文字としては假名より優れてゐるが、これで日本語を寫す時は語形が伸び勝ちであるから、その缺點を矯正すべきであるとしてゐる。附錄「歐文沿革考」は三章より成り、英・獨・伊・佛・露の各

漢語を談話(話言葉)に於ても、又文章(書言葉)に於ても用ひないわけにはゆかない所以を述べ、(一一)「文語及ヒ文體ノ事」では、談話と文章とではその條件を異にするから、談話をそのまゝ文章にするわけにはゆかない。文章としては簡潔な所謂文語體の方が適當であるとし、(一二)「日本ニ用フ可キ文字及ビ文體ノ事」では、日本語の文體としては、漢文體・漢文變體・雜文體(漢字假名交り文)・兩文體(總文體に振

定むべきであるとし、又一體文章は漢譯體・洋譯體・土語體と區別する事が出來るが、普通書ではなるべく談話體に近き土語體を用ひ、文學書ではどれでも自由に用ふべきであると論じてゐる。【批評】所謂兩文體(總振假名文)を推奬し、漢字の效用をも認めた點、本書の所說は折衷論とも稱すべきものであるが、本書と同年に刊行された末松謙澄の「日本文章論」(別項)と共に、從來の國字論の根本的缺陷を衝

法の後に書す」とを附す。【內容】三篇にわかれ、前篇は、音聲及ビ文字ノ論(第一、音ヲ記ス方法、第二、音便、第三、假名遣)。詞篇(第一、總論、第二、名詞、第三、指詞、第四、數詞、第五、形容詞、第六、動詞、第七、助動詞、第八、弖爾乎波)。文法篇(第一章、詞句相互ノ關係。⑴名詞ト形容詞動詞トノ關係、⑵修飾語ト被修飾語トノ關係、⑶詞句ノ接續、⑷獨立詞句。第二章、文ノ文章。⑴文主、

說語、⑵終止法、⑶單文、⑷複文、⑸詞句ノ省略並ニ轉例、⑹崇敬法、⑺解剖及ビ批判)となつてゐる。なほ附錄として「國語ノ特有セル語法——總主」「言語ノ發達」の二篇を添へてゐる。本書は著者の歿後遺稿を整理して刊行したものであるが、著者の生前に脫稿に至らなかつたもので、聲音論・動詞・助動詞の部は、著者が改訂しようとして未だその緒に就かず、特に動詞の自他の如きは一部を起稿したのみであり、副詞・接詞・感詞に關する部は全く缺けてゐる。【價値】本書は未定稿であるが、文章法に關するものに注意すべき說が多い。即ち名詞・代名詞が動詞・形容詞に對して主語になり、客語になり、總主語になり、補語になる場合を說いた如き、副詞の用法の研究の如き、文を單文と複文に分けて說いた如き、殊に「總主」についての說は、日本語に特有な語法として初めて著者の唱へたもので、後の學者の研究題目となつた。詞篇に於ては、形容詞の活用の「けれ」「しけれ」は活用ではなく、形容詞が良行變格に轉ずるに方り、「ども」との接續上から起つた變體であつて、古くは「かれ」「しかれ」と云つたのが、後、音便に依つて「けれ」「しけれ」となつたのであると云ひ、又動詞の複合形を說くに當り、不完全動詞と云ふ一類を立て、「なり」「たり」「かり」を屬せしめた如きは、著者が初めて說いたものである。更に附錄の「言語の發達」の中の第一章は動詞の諸活用の原型を求めたものであつて頗る卓見と云ふべきである。即ち著者は、動詞の活用は四段活と二段活に大別し得る奈行及び良行の變格は四段活の例外であり、加行・佐行の變格は二段活の例外である。而して上一段活は四段良行活の一種の例外で、四段活と二段活の中間に位するものである。而して四段活は活用の根源で、二段活は四段活から變化したものであらうと云ふのである。四段活が動詞の諸活用の根源であらうとする說は、既に早く鹿持雅澄が「用言變格例」(別項)に述べてゐるが、未だ學界の承認を得るには至らなかつた。著者が研究の結果、雅澄の說を裏付けた事は、注意すべきである。〔龜田〕

日本文法史 にほんぶんぽふし　語學書　一册

【著者】福井久藏【名稱】內題は「敎育並に學術上より見たる日本文法史」とある。【刊行】明治四十年十月【內容】本書は國文法の研究の變遷・發達の大綱を記したもので、總論・本論及び附錄から成つてゐる。總論には、文法史研究の必要、文典の種類、中等敎育に於ける文法の敎授法等について記してゐる。本論は二篇に分ち、第一篇は明治維新前について、⑴假名遣、⑵弖爾乎波、⑶動詞形容詞、⑷西洋文典を摸倣するもの、⑸文章の組立につきてと章を分ち、各々その起原・發達、並びに敎授法の變遷を叙して、その長短を批評し、就中富士谷・本居兩派の關係に力を注いでゐる。第二篇は維新以後明治三十八九年までの文法研究史を述べてゐる。すなはち「維新當時に於ける國學者の狀況」「私塾に於ける文法敎授」「小學に文法科を置かる」「西洋式日本文典」「西洋式反動の日本文典」「折衷派の文典」「言語取調所を設く」「中古文典の完成」「思想に基く國文法」「語源上より見たる文法論」「國語調査會と文法上許容案」「口語法の研究」等四十九章に分けて國語學界の狀態と、文法研究の歷史とを述べ、附錄には文法書を分類して年代順に排列した年表(維新前の書百數十種、維新後のもの四百餘種及び外國人の國語研究書を擧ぐ)、文法上の術語字引、本書中の人名・書名索引及び日本文法史の參考として、獨逸文法敎授史概要を擧げてゐる。【價値】國語研究史の中で專ら文法研究の變遷發達を跡づけ、これを批評したものとしては、本書は最初の書であり、而して今日に於ては唯一のものである。その組織は整然として居り、その所說は穩健で多くは信憑するに足るものである。なほ一般國語學史の類に於ては、維新後は頗る簡略であるのに反し、本書は維新後の研究に頁數の大半を費して居り、その詳細なる事、現在に於ては本書の右に出づるものがない。又肖像・筆蹟等の寫眞を出してゐる事も多とすべき點である。〔龜田〕

日本文法新論 にほんぶんぽふしんろん　語學書　一册【著者】金澤庄三郞【刊行】大正元年十二月、早大出版部。【內容】國文法全般に亙つて、その重要な諸點を朝鮮語・沖繩語・アイヌ語などと比較對照して說いたものである。緒言に各國の文法研究の動機は外國語の輸入、或は自國の古語研究に存するのであつて、我が國文法研究も亦この例に洩れないが、併し我が國語研究の參考としては、系統を異にする西洋語よりも、同系語たる朝鮮語・アイヌ語等の方が有利であると說き、次に「文字論」では、埃及文字の系統と漢字系統の變遷發達を記し、諺文・吏讀(各別項)を說き、吏讀及び片假名と漢字との關係、五十音圖と悉曇の關係等を述べてゐる。次に「聲音論」では我が國の音韻研究の概要を叙し、國語と朝鮮語・沖繩語の音韻組織の比較をしてゐる。「單語論」は(一)體言論(⑴名詞、⑵代名詞、⑶數詞、⑷副詞、⑸接續詞)。(二)用言論(⑴動詞、⑵形容詞)。(三)助辭論(⑴助動詞、⑵弖爾袁波、⑶感動詞、⑷接頭語、接尾語)。(四)複合詞。(五)疊語と分け、古語と中古言との相違を說き、朝鮮語・アイヌ語・沖繩語等と比較してゐる。次に文章論は、(一)總說、(二)枕詞、(三)言掛、(四)掛結、(五)呼應、(六)略語に分つて說いてゐる。【價値】國文法と外國文法との比較研究は、Rosny, Aston, Edkins, Lowell, Chamberlain 等の外人が明治初年に着手し、色々新しい結果を齎してゐるが、日本人としては、早く新井白石がかやうな研究方面に着目した外は、この種の研究をした者は殆どなかつた。然るに本書は、國文法の全般に亙つて、著者が國語と同系語と目する朝鮮語その他と比較して研究したものであつて、その點に於て國語學史上注意すべきものである。尤もその所說には首肯し難い點もないではないが、傾聽すべき新說も少くない。なほ「聲音論」「單語論」は著者が最も力を注いだと目される。〔龜田〕

日本文法論 にほんぶんぽふろん　語學書　一册

【著者】山田孝雄【刊行】明治三十五年十月一部分刊行。同四十一年九月全部刊行。寶文館。【內容】本書は國語の標準的記載語を對象として、從來の文法學者の諸說を集めてこれに根本的批判を加へ、その取るべきは取り、改むべきは改めて、新たに日本文法を組織したものである。先づ序論に國語學の分科、文法學の內容、國語の性質等を論じ、日本文法論の研究方法及び記述の順序を述べてゐる。本論は語論・句論の二部に大別し、語論には、先づ品詞の分類法について、富士谷成章・鈴木朖・東條義門・富樫廣蔭・權田直助・鶴峯戊申・田中義廉・中根淑・大槻文彥(各別項)・岡澤鉦次郎等十人の品詞の分類法について、一々その長短を仔細に論じ、次に名詞・動詞・形容詞・てには等各品詞の本質を極めて、次の如き著

者の新しい分類法を立ててゐる。

單語 { 關係語……………………弖爾乎波の類
　觀念語 { 副用語…………………副詞の類
　　自用語 { 槪念語…………體言の類
　　　陳述語…………用言の類

次に右の分類を基礎として、體言(名詞・代名詞・數詞)、用言(形容詞・動詞・形式用言・動詞の複語尾)、副詞・助詞・接辭等について、性質・效用を研究し、次に語の運用、語の轉用、語の位格、語の用法を考究してゐる。句論に於ては句論と他の學科との區域、句論と語論との限界及び句論の研究の基礎を論じ、從來句を分つて敍述體・命令體・感動體等の三種或は四種としてゐるのを不適當であるとし、句は喚體句(感動の文から、敍述體的のものを除いたもの)と述體句(敍述文・疑問文・命令文及び敍述文的形式の感動の文)と分けるべきであるとし、次に句の性質、句の組織、句の運用について細論してゐる。【價値】江戸時代以來、文法に關する著書や研究は、甚だ多くあらはれたが、文法研究の基礎たる理論的研究は未だ現はれなかつた。明治以後、西洋文典に倣つた日本文法が出たが、日本語の文法を說明するには不十分であり、不適當な點が多かつた。本書は日本語の文法を說くに適切な文法の體系を見出すことを目的としたもので、嚴正な批評的態度を以て、內外の學說を批判し、あくまで事實に基いて、新たなる體系の樹立を試みたものであつて、若干の不備や誤謬もあるが、これまで全く注意せられなかつた部面や事項の、初めて論ぜられたものも少くなく、學界への貢獻は甚大なるものがある。【附記】「日本文法講義」(一册、山田孝雄著、大正十一年刊、同十三年訂正刊行)。本書は、「日本文法論」の體系に依つて、現代の文語及び口語の文法を敍述した實用的文典である。第一章の總論に於て言語と文章、口語と文語、文法と文法學、語論と句論等の大體を記し、第二章から第三十八章までは單語についての說明で、品詞の分け方、名詞・代名詞・數詞等の體言、形容詞・動詞・存在詞等の用言、副詞、助詞(格助詞・副助詞・接續助詞・係助詞・終助詞・間投助詞等)を說き、次に語の轉成、接辭、合成語、語の轉用、主格、述格と賓格、補格、連體格、修飾格等を說き、第三十九章には音便を說いてゐる。四十章以下五十一章までは句論で、喚體の句、述體の句、句中に於ける語の排列、句中に於ける語法の相關、單文、複文、重文、合文、有屬文、語句の省略に就いて詳細に記してゐる。本書は著者の日本文法論に於ける研究の結果に依つたものであつて、その成果を簡明に知り得べきと共に、その後の研究によつて、多少の訂補を加へたところがあり、且つ敬語法及び音便に關する記述は、從來のものに比して遙に進步したものである。〔鑓田〕

日本昔噺 にほんむかしばなし

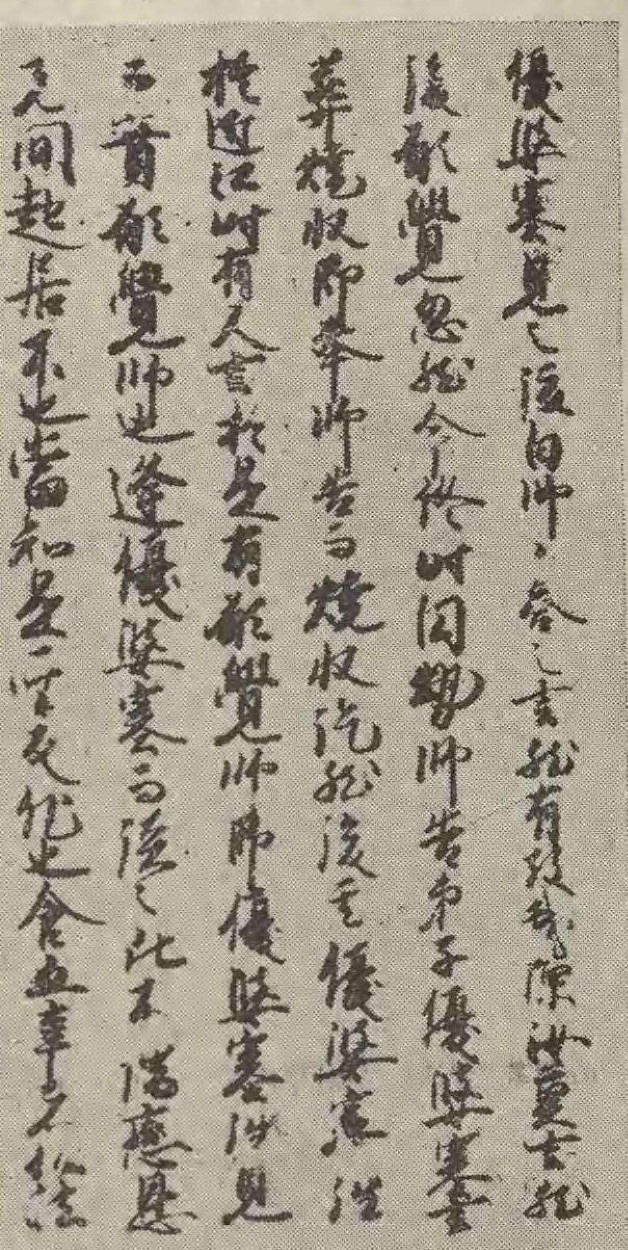
童話集　二十四册（縮刷本全一册）【編者】巖谷小波【刊行】明治二十七年より二十九年、博文館。【解說】桃太郎・玉の井・猿蟹合戰・松山鏡・花咲爺・大江山・舌切雀・俵藤太・かち〳〵山・瘤取・物臭太郎・文福茶釜・八頭の大蛇・兎と鰐・羅生門・猿と海月・安達ケ原・浦島太郎・一寸法師・金太郎・雲雀山・猫の草紙・牛若丸・鼠の嫁入の二十四篇を收む。何れも民間の口碑として又史上の傳說として有名な物語である。この中のあるものは明治以前に於て既に記錄として刊行され、畫本等によつて流布されてゐたのもあるが、一貫した統制による兒童讀物としての完成は、本書を以て嚆矢とする。卽ち童話文學界に現はれた日本最初の昔噺の定本であつて、諸外國にも飜譯紹介された。〔山內〕

日本名著全集 にほんめいちよぜんしふ

叢書　三十册【刊行】大正十五年より昭和四年迄、興文舍。【內容】第一・二卷西鶴名作集、第三卷芭蕉全集、第四・五卷近松名作集、第六・七卷淨瑠璃名作集、第八卷歌舞伎脚本集、第九卷浮世草子集、第十卷怪談名作集、第十一卷黃表紙廿五種、第十二卷洒落本集、第十三卷讀本集、第十四卷滑稽本集、第十五卷人情本集、第十六―十八卷南總里見八犬傳、第十九卷狂文狂歌集、第二十・二十一卷修紫田舍源氏、第二十二・二十三卷膝栗毛其他、第二十四・二十五卷和文和歌集、第二十六卷川柳雜俳集、第二十七卷俳文俳句集、第二十八卷歌謠音曲集、第二十九卷謠曲三百五十番集、第三十卷風俗圖繪集。【批評】編輯者は表題の如く日本文學全般より名著を刊行する豫定の下に、先づ第一期として玆に擧げた江戸文藝之部が出版された。從來近世文學の名の下に刊行された叢書に比して本叢書は、最も江戸文學の匂ひ强きものを選び、而もその原形を能ふ限り傳へるため重要な挿繪・序跋、又は本文等を豐富にオフセット版に附して刊行したのは、最も特異とすべき點である。各卷に亙つてその例を見られるが、就中「南總里見八犬傳」の如き、その全部をオフセット版にして原型を傳へたなどは、從來見られなかつた大膽な形式であり、又「西鶴名作集」に於ける原文尊重の徹底してゐるなどは、編輯者の用意を雄辯に物語るものである。その外各卷の裝幀、見返しに一流の書畫家を動員し、解說は各專門の權威者に依つて懇切を極めるなど、圓本流行時に於て內容形式共に良心的出版として誇稱し得るものである。〔土井〕

日本靈異記 にほんれいいき

佛敎說話集　三册【著者】僧景戒【名稱】詳しくは「日本國現報善惡靈異記」、略して「靈異記」ともいふ。【成立・由來】自序に、支那の「冥報記」「般若驗記」の例に倣つて撰述した由が述べられてゐる。成立の年代に就いては、卷下の第十四・十六に越前國加賀郡云々とあり、加賀郡は弘仁十四年二月に加賀國と改められたのであるから、それ以前の成立なる事が知られる(橋川正氏「靈異記の硏究」)。且つ下卷第三十九に、「今平安宮疏十四介了(年?)治天下賀美能天皇是也」とあるによれば、本書の成立は嵯峨天皇の十四年、卽ち弘仁十三年となる(板橋倫行氏「日本靈異記の撰述年時に就いて」)。【諸本】古寫本に高野本と大須本とがある。高野本は紀州高野山金剛三昧院に傳はり、上中下三卷、「建保貳年甲戌六月　日酉刻許書寫了」の奧書のある本であるが、今日その所在を詳かにしない。大須本は、尾張大須の眞福寺に傳はる古鈔で、中下二卷、上卷を缺くが現存し、國寶に指定されてゐる。江戸時代に流布してゐた本は、水戸彰考館の寫本で、「延寶八年歲次庚申閏八月、奉我相公之命、登金剛峰、借出金剛三昧院所藏之本寫之者、彰考館識」の奧書のある所謂延寶本であつたらしい。狩谷棭齋がこの延寶本の逸脫多きを遺憾として、高野本及び大須本によつて校訂したものが、棭齋の「校本日本靈異記」で、この本は群書類從卷四四七に收められた(日本古典全集所收)。下つて明治十六年夏、木村正辭によつて前田侯爵家の藏書中から所謂前田家本が發見された。この顚末は、「欟齋雜攷」卷二に詳しい。卷末に「嘉禎二年丙申三月三日書寫畢　右筆禪惠」とあり、卷首に仁和寺心蓮院の朱印がある。禪惠は大納言忠房の曾孫である。この本によつて、序文の首の十行二百一字の逸脫を補ひ得た。經濟雜誌社版群書類從本は本書によつて序文を補つてゐる。但しこの前田家本で補ひ得る部分は、景戒の原作ではなく、後人の補筆であらうといふ說が出てゐる(武田祐吉氏「上代國文學の研究」)。なほ「群書一覽」によれば、「假名日本靈異記」(寫三卷)があるが、原本を假名に和げたものである。



前田家本

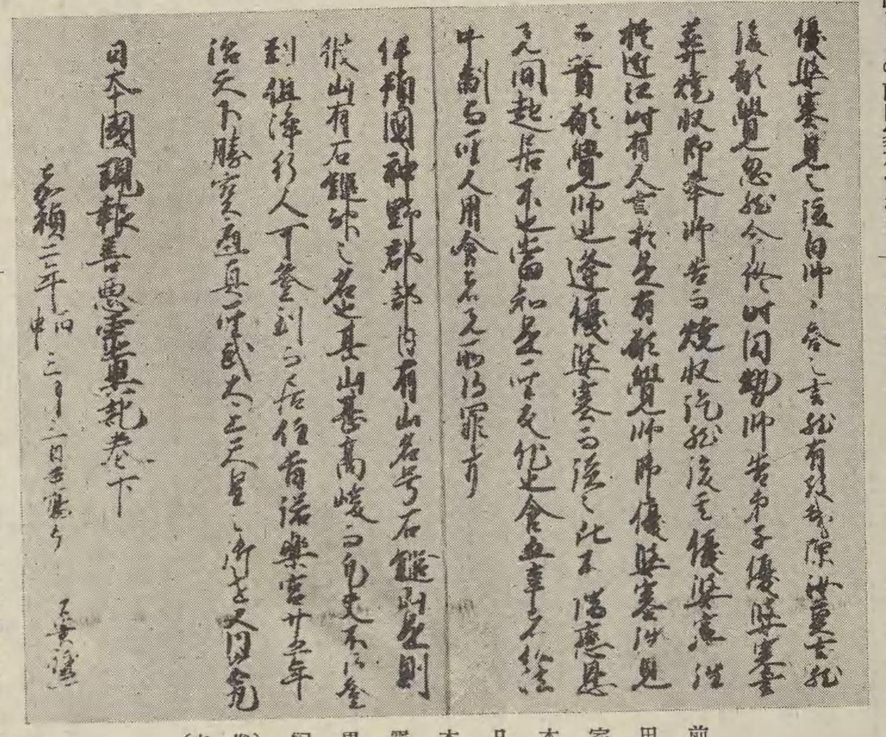
頃板橋倫行氏も說を立ててゐる。卷上は「合示善惡表緣卅四五條」とつあて、說話の實數は三十一、卷中は「合示善惡表緣卅二條」とあつて、實數もまさしくその通り、卷下は「合示善惡表緣卅九條」とあつて、これ亦實數との一致を見る。して見ると、卷上の終りに二

書き方が曖昧であるが、最も氣の附く點は、第四話の聖德太子の說話に、人蕩法師の弟子圓勢師の話が、別個のものであるのに拘らず一緒になつてゐる事で、かういふ所からして說話の總數に狂ひが生じてゐるやうである。この事に就いて板橋氏は、前田本ではこの圓勢の話は下卷の末の方に獨立して居り、假名本でも別個となつてゐることを注意してゐる。さて、以下說話の種類・性質等を吟味しよう。收むる所の說話はかなり多いが、殊更に類別の如きは設けてない。雷を捉へた話とか、狐を妻として子を生ませた話とか、强力の子(道場法師)の話とか、聖德太子と乞丐人との話とか云ふやうな、著者の所謂日本の奇事から始めて、佛像奇瑞談の如き、次第に佛敎的傳彩の顯著な說話に及んでゐるが、因果說話が最

て世を厭ひ出家したと云ふ發心談もある。かういふのは因果說話とは別種のものである。役優婆塞の仙となつて天に飛んだ話の如きも因果談以外であるが、これは說話文學上注目すべき部類のものである。中には說話のモティーフを同じうした類似なタイプのものが幾通もあるばかりでなく、單に場所と人とが違つてゐるだけで、敍事の進行の全然同一である所の蟹の放生談の如きもある。一體本書著作の動機は勸化に在る。それで說話の終結毎に槪して敎訓的の語を下してゐるのを見受ける。「畜生猶不忘恩返報、何況人而忘恩乎」とか、「因果之理是不信哉」とか、「現報甚近、應信因果、雖見之畜生、而我過去父母、六道四生我所生處、故不可無慈悲也」とか云ふ類である。而もそこに、「精進女

「嘉禎二年丙申三月三日書寫畢　右筆禪惠」とあり、卷首に仁和寺心蓮院の朱印がある。禪惠は大納言忠房の曾孫である。この本によつて、序文の首の十行二百一字の逸脫を補ひ得た。經濟雜誌社版群書類從本は本書によつて序文を補つてゐる。但しこの前田家本で補ひ得る部分は、景戒の原作ではなく、後人の補筆であらうといふ說が出てゐる（武田祐吉氏「上代國文學の研究」）。なほ「群書一覽」によれば、「假名日本靈異記」（寫三卷）があるが、原本を假名に和げたものである。

【解說】本書は、和臭のある漢文を以て書かれてある。各卷に序があり、各段末には訓釋の部が附いてゐる。この訓釋は恰も佛典の卷末毎にある音釋に相當するから、それを摸倣したものに違ひない。これは古語考究の資となるもので、國語史料として尊重しなければならぬ。但しこの部も景戒の自記であるかどうかは保し難い。予は寧ろ後世の人の筆らしいと年來疑ひを持つてゐる。それは假名遣に誤りがあり、訓の附け方に後世らしいところがあるからである。この事に關しては近


前田家本日本靈異記（卷末）

頃板橋倫行氏も說を立ててゐる。卷上は「合示二善惡表一緣卅四五條」とつあて、說話の實數は三十一、卷中は「合示二善惡表一緣卅二條」とあつて、實數もまさしくその通り、卷下は「合示二善惡表一緣卅九條」とあつて、これ亦實數との一致を見る。して見ると、卷上の終りに二

書き方が曖昧であるが、最も氣の附く點は、第四話の聖德太子の說話に、人蕩法師の弟子圓勢師の話が、別個のものであるのに拘らず一緒になつてゐる事で、かういふ所からして說話の總數に狂ひが生じてゐるやうである。この事に就いて板橋氏は、前田本ではこの圓勢の話は下卷の末の方に獨立して居り、假名本でも別個となつてゐることを注意してゐる。

さて、以下說話の種類・性質等を吟味しよう。收むる所の說話はかなり多いが、殊更に類別の如きは設けてない。雷を捉へた話とか、狐を妻として子を生ませた話とか、强力の子（道場法師）の話とか、聖德太子と乞丐人との話とか云ふやうな、著者の所謂日本の奇事から始めて、佛像奇瑞談の如き、次第に佛敎的傳彩の顯著な說話に及んでゐるが、因果說話が最も多きを占める。その因果談は畢竟するに、善業の報いとして善果を得た話と、惡業の報いとして惡果を得た話との二つの大きな流に歸する。善果を得た方の說話は靈驗や功德に關する事で、三寶を敬つて驗を得、佛菩薩を信仰して利益を得たといふ類や、經典を尊重したり修持したり書寫したりして功德を得た事や、持戒淨行又は稱名の功德や、放生（動物では龜や蟹の如き）の功德を語つたものである。次に惡報を得た方の說話は、殺生・偸盜・愛欲・無慈悲の因果談で、又不孝の惡報もある。誹謗の如き口業に關するものも見えてゐる。この惡報と云ふのには、人が牛に生れ變つたといふやうな輪廻轉生の思想のものがあり、又生きながら地獄の苦患を受けたといふやうな筋のもある。それから墮獄の苦惱を見て來たといふ地獄巡りの話もあつて、特に焦熱地獄の思想は頗る顯著である。なほ烏の邪淫を見

三個條の脫落があるが、第卅一話の終りに逸文があらうとの疑問は、既に柊齋も氣附いてゐるが、字句が尻切れの形であることは、一目見ても分るし、又そこに訓釋の附いてゐるのも一寸怪しい。一體總數の卅四五條と云ふ

て世を厭ひ出家したと云ふ發心談もある。かういふのは因果說話とは別種のものである。役優婆塞の仙となつて天に飛んだ話の如きも因果談以外であるが、これは說話文學上注目すべき部類のものである。中には說話のモーティーフを同じうした類似なタイプのものが幾通もあるばかりでなく、單に場所と人とが違つてゐるだけで、敍事の進行の全然同一である所の蟹の放生談の如きもある。一體本書著作の動機は勸化に在る。それで說話の終結毎に概して敎訓的の語を下してゐるのを見受ける。「畜生猶不レ忘レ恩返報、何況人而忘レ恩乎」とか、「因果之理是不レ信哉」とか、「現報甚近、應信二因果一、雖二見之畜生一而我過去父母、六道四生我所レ生處、故不レ可レ無二慈悲一也」とか云ふ類である。而もそこに、「精進女問經」「涅槃經」「大集經」などの佛典を初め、「顏氏家訓」のやうな漢籍までも明かに引證してゐるのである。さういふ次第で、無批判に說話を列擧したのでなく、かういふ傾向を以てしてゐるので、これは後世の說話文學にも影響してゐると思ふ。それで多くの說話の記述は、善果も惡報も、その廻つて來るのが頗る速く、而もそのデグリーが深刻であるといふ風になつてゐる。所謂因果覿面といふ物語振である點に殆ど遺憾はない。次に說話の源泉の問題がある。固より景戒が實際に見聞した結果を書留めた物の存する事は見易いわけであるが、一面には又一方法として資料を利用しつつ、取捨を加へて集錄した事も勿論であると思ふ。「案二本記一曰云々」と記してゐる所が有るのでもそれが分る。小子部の栖輕が雷神を捉へた話の如きは、「日本書紀」卷十四に記載せられた事實であるが、本書に敍述せ

法の體系を見出すことを目的としたもので、嚴正な批評的態度を以て、內外の學說を批判し、あくまで事實に基いて、新たなる體系の樹立を試みたものであつて、若干の不備や誤謬もあるが、これまで全く注意せられなかつた部面や事項の、初めて論ぜられたものも少くなく、學界への貢獻は甚大なるものがある。

【附記】「日本文法講義」（一冊、山田孝雄著、大正十一年刊、同十三年訂正刊行）。本書は、「日本文

山・舌切雀・俵藤太・かちかち山・瘤取・物臭太郎・文福茶釜・八頭の大蛇・兎と鰐・羅生門・猿と海月・安達ヶ原・浦島太郎・一寸法師・金太郎・雲雀山・猫の草紙・牛若丸・鼠の嫁入の二十四篇を收む。何れも民間の口碑として又史上の傳說として有名な物語である。この中のあるものは明治以前に於て既に記錄として刊行され、畫本等によつて流布されてゐたのもあるが、一貫した統制による兒童讀物としての

特異とすべき點である。各卷に亙つてその例を見られるが、就中「南總里見八犬傳」の如き、その全部をオフセット版にして原型を傳へたなどは、從來見られなかつた大膽な形式であり、又「西鶴名作集」に於ける原文尊重の徹底してゐるなどは、編輯者の用意を雄辯に物語るものである。その外各卷の裝幀、見返しに一流の書畫家を動員し、解說は各專門の權威者に依つて懇切を極めるなど、圖本流行時に

三昧院所藏之本二寫之者、彰考館諸」の奧書のある所謂延寶本であつたらしい。狩谷棭齋がこの延寶本の逸脫多きを遺憾として、高野本及び大須本によつて校訂したものが、棭齋の「校本日本靈異記」で、この本は群書類從卷四四七に收められた（日本古典全集所收）。下つて明治十六年夏、木村正辭によつて前田侯爵家の藏書中から所謂前田家本が發見された。この顚末は、「鷄窗雜攷」卷二に詳しい。卷末に

られた所は頗る俗談化してゐる。聖德太子と乞丐との說話は「上宮聖德太子傳補闕記」の如きに見えるが、本書も何等かの記載に資料を仰いだのであらう。その他にもさう云ふ類はあることと想はれる。【價値】本書は我が最古の說話集たる點で、文獻學的價値に富む。既に佛教思想が民間に瀰漫してゐた當時の世態を知るには、絕好の資料である。又後の說話文學を喚起した源流となつた點からも、決して忽諸に附せられないものである。【影響】佛教傳說を集めたり、若しくは歷史を叙したりした後の書には、本書の幾分を借用し踏襲したものが尠くない。「三寶繪詞」「今昔物語」「扶桑略記」(各別項)の類が、その尤なるものである。

【研究史】本書は早く松下見林や僧契沖が注意を拂つた所であり、又水戸家では鈔本を作つた。谷川士清も一本を藏して居つて、本居宣長は士清からそれを借覽したといふこともある。併し屋代弘賢が高野本や大須本の影鈔を作つたのを先づ最も注目すべき學的功勞とする。さうして狩谷棭齋が弘賢の勞を繼いで全部の校合を遂げ、ためにその本は群書類從の雜部卷第四百四十七に編入せられるに至つた。それからなほ棭齋は「日本靈異記攷證」三卷(日本古典全集所收)をも編んで、本文を校合した始末を明細に註した。彼の本文吟味は忠實な態度を以てしたが、所々意改をも加へてゐる。とにかく棭齋の校訂によつて、始めて信憑すべきものとなつたのである。彼の自跋は、能くその始末を盡してゐる。なほ「日本靈異記類標」(帝國圖書館藏、榊原芳野書藏)とか、「日本靈異記類字」(宮內省圖書寮藏)とか、「日本靈異記攷證」三卷(日本古典全集所收)をも編んで、本文を校合した始末を明細に註した。彼の本文吟味は忠實な態度を以てしたが、所々意改をも加へてゐる。とにかく棭齋の校訂によつて、始めて信憑すべきものとなつたのである。彼の自跋は、能くその始末を盡してゐる。なほ「日本靈異記類標」(帝國圖書館藏、榊原芳野書藏)とか、「日本靈異記類字」(宮內省圖書寮藏)とか題する書が一册ある。後者に就いて見るに、初めに「日本靈異記本訓類字」と標した部分がある。これは本書各段の訓註をイロハ分けに排列したものである。次に「日本靈異記類字」と標した部分がある。これは本書中の人名・地名・物名等を、やはりイロハ順に並べたもので、共に「靈異記」索引として役立つものである。編者は不明。最近の研究としては、板橋倫行氏校譯の「日本靈異記」(昭和四年五月刊、春陽堂)を擧ぐべきであらう。これは原文(漢文)を和解して讀み易からしめたもので、精細な附註や、靈異記・三寶繪詞・法華驗記・扶桑略記・今昔物語說話對照表や、索引が卷末に添へてあつて、本書閱讀に甚だ利便である。【野村】

【參考】日本靈異記攷證狩谷棭齋(日本古典全集)
○棭齋雜攷 木村正辭 ○靈異記の研究 橋川正(藝文 一三ノ三〇〇日本靈異記の撰述年時に就いて 板橋倫行(國語と國文學昭和五ノ二)
日本靈異記攷證(にほんれいいきかうしよう)「日本靈異記」を見よ。

二枚目(にまいめ) 演劇 【名義】元來は、顏見世興行に表に立てられた看板の位置で、更に移されて番附面の位置となり、それが轉じて役所(やくどころ)或はその役者に用ひられる。【異稱】和事、やつし等も同類の語である。更に派生してピントコナ等もある。【解說】座頭格の次で、美男で年若の、婦女子に愛される役所、即ち色男役、又はその役者をいふので、元祿以後に定まつたものである。例へば「梅忠」の忠兵衞の如きもの。市村羽左衞門や中村鴈治郎は、今日では座頭格になつてゐるものの、本來は當然二枚目の役者である。【三宅】

烹雜の記(にまぜのき) 隨筆 三卷 【著者】瀧澤解(馬琴) 【刊行】文化八年 【諸本】前後兩版あつて、前本は上下二卷、後本は上中下三卷で補刻の部分がある。後刊本を正しとすべきであらう。【解說】上卷は新掘山(につほりやま)以下四章、中卷は麻娘々以下七章、下卷は以ン惡見ン名以下九章を收め、柳々居辰齋・勝川春亭、著者の男琴嶺等筆の圖畫を挿んでゐる。上卷の多湊ぶりの章に佐渡の地理・天產物・風習等を說くこと頗る詳細であり、中卷の夷三郎及び天狗の考說、下卷の後妻打(うはなりうち)の說及び孝女花扇の傳の諸章は甚だ興趣がある。卷首に著者の題言、文化六年二月龜田鵬齋撰文瘞筆塚銘、文化八年岩瀨京山の題識がある。【和田】

入道大納言爲兼集(にふだうだいなごんためかねしふ)「爲兼卿家集」を見よ。

如意寶說話(によいはうぜつわ)「人文神話」を見よ。

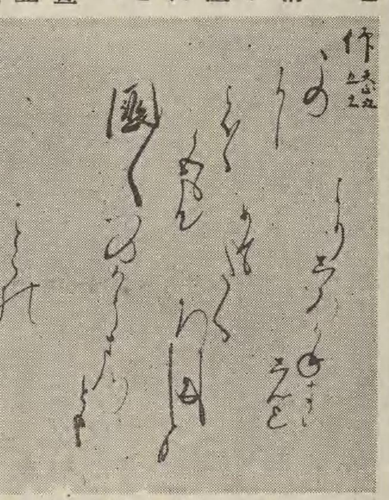
女房殺し(にようばうごろし) 小說 【作者】江見水蔭 【發表】明治二十八年十月、「文藝倶樂部」。 【刊行】現代日本文學全集第七編所收。 【梗概】近藤堅吉は若い數學家であるが、ひと夏逗子へ避暑して勉强した際、そこの茶屋のお柳の可憐な姿に心を惹かれた。その翌年の夏も同じ茶屋へ行つて、お柳を未來の妻としたいと思つたが、ふと金のために操を汚されたことを聞いて、ひどく失望した。が、無邪氣なお柳は、少しもそれを氣にしてゐない。堅吉はどうしても彼女を思ひ切れず、その汚點を知りながら東京に迎へて妻とした。そして女の貞操について懇々彼女に說得したのである。結婚後、間もなく堅吉は愛妻を後に殘し、遼東半島の測量隊に加はつて出かけなければならなかつた。種々辛苦を積んで歸つてくると、お柳は留守中、薄井といふ男のため再び節操を汚されてゐたことを知り、堅吉は悲憤の餘り男泣きに泣いた。と云つて彼女を離緣することは、なほ更、堪へ忍び得ぬところであつた。煩悶の後、彼はお柳を殺して自分もその後を追はうと決心し、さり氣なく遊山旅行に誘ひ出し、樂しい數日を送つた後、遂に彼女を殺害した。その時堅吉は、「お前をこんなに殺すまで、愛の度が高まつてゐたといふ事を一言いふのを忘れた、今俺も後を追うてゆく」とお柳の死骸を見つめつつ獨語した。【批評】無知無識で、貞操の觀念のない美貌の少女と、冷たい數理に沒頭する堅吉とを對照して、悲劇の發生を描いたところに着想があ

女房殺し (文藝倶樂部口繪)

る。堅吉の至純な愛情は何人の心をも動かしながら描いて達しない憾みがある。お柳は割合によく書けて、可憐な姿が隨所に動いてゐる。が、全體として粗硬の感があるのは、水蔭の作に通有する短所である。併しこれは彼の代表的傑作と言つてよい。【高須】

女房裝束着用次第(にようばうしやうぞくちやくようしだい) 有職 一卷 【著者】未詳 【諸本】故實叢書第三輯所收。 【解說】江戸時代に於ける宮中の女房の裝束着用の體を示したもので、內侍典侍物具、上古之小褂重樣之體、采女衣重樣之體、女孃掛衣之體、緋袴着體、上古腰卷之體、當時搔取之體、童之體、打掛ビンブク之體等、着色した繪十四圖を掲げ、一々各具を指示し略說を加へてゐる。【石村】

女房奉書(にようばうぶしよ) 古文書 【解說】長橋局(勾當內侍)などが勅旨を受けて、女消息體で書いて出す天皇文書。時には宸筆のこともある。即ち內侍宣(別項)の亞行】明治三十八年七月、「獨步集」收錄。國木田獨步全集第二卷・現代日本文學全集(國木田獨步集)所收。 【梗概】三十二三歲の盲人の尺八吹きの身の尺八が彼の生活を助けてくれた。二十八歲の時は鐵道局の雇となり、十八圓の月收で生活を立ててゐたが、愛宕下町の狹い路地に住んでゐる大工の女房に誘惑され、心ならずも關係してゐる間に眼病にはなる、役所はやめられる。遂にその女房は亭主を捨て、眼病の彼をも置き去りにして、その大工の親方の許へ去つてしまつた。そして今はただ一管の尺八に生命を吹き込んで漂泊してゐるのである。 【批評】これは漂泊の運命を持つた人間、それに女難といふも一つの運命が、人間を酷く引き廻す姿を示したものであり、この中には中年以後の獨步の女性觀も多少は覗はれる。回想の中に漂ひ浮ぶ人生の相が、一種の哀調に演ぜられるもの。また內容より分ければ、(イ)頓作俄、(ロ)口合俄、(ハ)あぶら俄、(ニ)なえこ俄、(ホ)出たらめ俄、(ヘ)物眞似俄、(ト)拍子違ひ俄、(チ)配り物俄など。なほ地方別に分ければ、(1)大阪俄、(2)吉原俄、(3)博多俄などの名目があり、更に演者によつて、(一)素人俄、(二)玄人俄に分類する。 【沿革】俄狂言は、あらゆる時代と社會とを通じて種々樣々な演劇現象として表現されてゐる人類の演劇本能の時代的場所的の一表現であつて、京阪の諸祭禮の練物の合間に、「笑ひ」と稱し、老若男女思ひ思ひに假裝して卽興的な劇的所作を演じながら練つて行く所などにその源流を求めることが出來る。大阪の俄狂


正親町天皇女房奉

卷(日本古典全集所收)をも編んで、本文を校合した始末を明細に註した。彼の本文吟味は忠實な態度を以てしたが、所々意改をも加へてゐる。とにかく棭齋の校訂によつて、始めて信憑すべきものとなつたのである。彼の自跋は、能くその始末を盡してゐる。なほ「日本靈異記類字」(宮内省圖書寮藏)とか、「日本靈異記類標」(帝國圖書館藏、榊原芳野舊藏)とか題する書が一冊ある。後者に就いて見るに、初めに

で、美男で年若の、婦女子に愛される役所、即ち色男役、又はその役者をいふので、元祿以後に定まつたものである。例へば「梅忠」の忠兵衞の如きもの。市村羽左衞門や中村鴈治郎は、今日では座頭格になつてゐるものの、本來は當然二枚目の役者である。〔三宅〕

烹雜の記(にまぜのき)　隨筆　三卷　【著者】瀧澤解(馬琴)【刊行】文化八年【諸本】前後兩版あつて、前本は上下二卷、後本は上中下

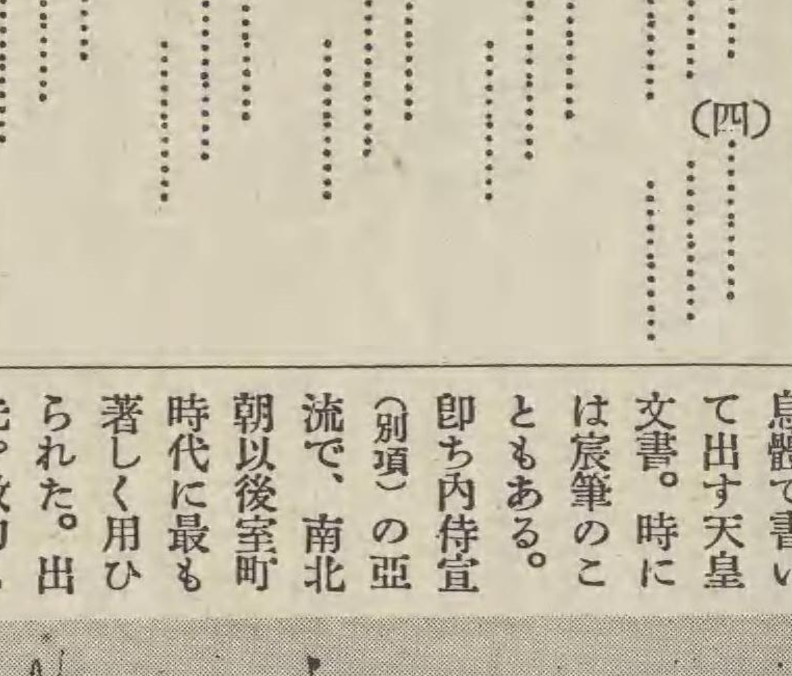
を知りながら東京に迎へて妻とした。そして女の貞操について懇々彼女に說得したのである。結婚後、間もなく堅吉は愛妻を後に殘し、遼東半島の測量隊に加はつて出かけなければならなかつた。種々辛苦を積んで歸つてくると、お柳は留守中、薄井といふ男のため再び節操を汚されてゐたことを知り、堅吉は悲憤の餘り男泣きに泣いた。と云つて彼女を離緣することは、なほ更、堪へ忍び得ぬところであ

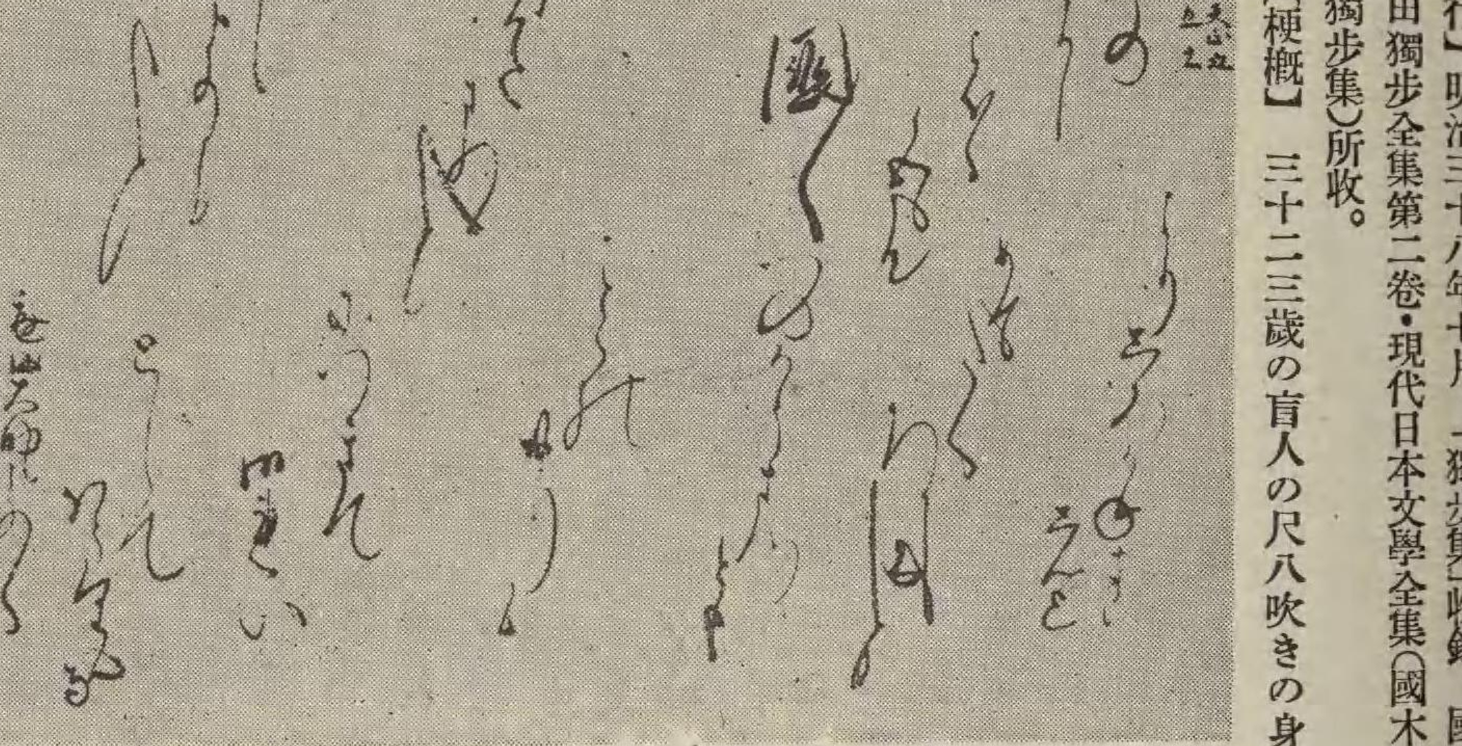
ながら描いて達しない憾みがある。お柳は割合によく書けて、可憐な姿が隨所に動いてゐる。が、全體として粗硬の感があるのは、水蔭の作に通有する短所である。併しこれは彼の代表的傑作と言つてよい。〔高須〕

女房裝束着用次第(にようぼうしやうぞくちやくようしだい)　有職　一卷　【著者】未詳　【諸本】故實叢書第三輯所收。【解說】江戸時代に於ける宮中の女房の裝束着用の體を示したもので、内侍典

侍物具、上古之小褂重樣之體、采女衣重樣之體、女孺掛衣之體、緋袴着體、上古腰卷之體、當時搔取之體、童之體、打掛ビンブク之體等、着色した繪十四圖を揭げ、一々各具を指示し略說を加へてゐる。〔石村〕

女房奉書(にようぼうほうしよ)　古文書【解說】長橋局(勾當内侍)などが勅旨を受けて、女消息體で書いて出す天皇文書。時には宸筆のこともある。即ち内侍宣(別項)の亞流で、南北朝以後室町時代に最も著しく用ひられた。出先や效力もほぼ綸旨(別項)同樣である。その樣式は所謂散らし書きのこと多く、讀順は大體右圖番號の通りで、日附は必要ある場合の外は書かぬ例である。〔伊木〕




正親町天皇女房奉書(西本願寺藏)

女官飾抄(にょくわんかざりせう)　有職　一卷　【著者】一條兼良【諸本】群書類從卷一二〇裝束部第九所收。【解說】女房の衣の色目に就いて書いたもので、春・冬の衣の色々、夏の初めの衣の色、五月五日より秋までの衣の色、九月九日よりの衣の色、十月より五節までの衣の色の五部に分類し、各部各色目に就いて精細に記述してある。〔石村〕

女難(によなん)　小說【作者】國木田獨歩【發表】明治三十六年十二月、「文藝倶樂部」【刊行】明治三十八年七月、「獨歩集」收錄。國木田獨歩全集第二卷・現代日本文學全集(國木田獨歩集)所收。【梗概】三十二三歲の盲人の尺八吹きの身の上話である。彼は五六歲の頃、或る人相觀によつて女難の相があるといはれてゐた。十二歲の頃は、年上の十五歲になるおさよといふ娘から、ひどく可愛がられてそれが恐ろしくてならなかつた。十九歲になつた時、小學教師をしてゐる間に、彼は尺八を習ひ覺えて夢中になつてゐたが、その時、武といふ若者に脅かされ、誘はれて遂にその妹と關係を持つやうになり、やがて女が懷姙したと告げられると、その恐しさに家を飛び出してしまつた。尺八が彼の生活を助けてくれた。二十八歲の時は鐵道局の雇となり、十八圓の月收で生活を立ててゐたが、愛宕下町の狹い路地に住んでゐる大工の女房に誘惑され、心ならずも關係してゐる間に眼病にはなる、役所はやめられる。遂にその女房は亭主を捨て、眼病の彼をも置き去りにして、その大工の親方の許へ去つてしまつた。そして今はただ一管の尺八に生命を吹き込んで漂泊してゐるのである。【批評】これは漂泊の運命を持つた人間、それに女難といふも一つの運命が、人間を酷く引き廻す姿を示したものであり、この中には中年以後の獨歩の女性觀も多少は覗はれる。回想の中に漂ひ浮ぶ人生の相が、一種の哀調を湛へ、丁度夜聞く尺八の遠音の如くに人々に迫つて來るのを感ぜしめられる。時の流れに浮ぶ人間の姿といふ事は、この作でもまた獨歩の示さうとしたものである。〔吉江〕

二樂流(にらくりう)　「飛鳥井流」を見よ。

俄狂言(にはかきやうげん)　演劇【名稱】俗に「俄」と稱し、「仁輪加」とも書く。【名義】俄は即興の義である。【解說】江戸の茶番狂言に對して京阪に發生した喜劇で、即興的の一種の素人芝居。その場に因む思ひつきの題目、或は與へられたる題目を當意即妙に仕組んで、專ら滑稽洒脫の科白で演じ、最後に落と稱する諧謔を以て結ぶ。茶番と俄とは化政度以後は混淆したが、本來はその發生地を異にする鄉土色と、落の有無とによつて區別することが出來る。【種類】形式より分ければ、(一)座敷俄。屋内の宴席の座興を助けるもの。(二)流し俄。祭禮その他の行事の餘興として一定地域を移動して歩くもの。(三)舞臺俄。主として職業化せる俄師の手で固定舞臺で大がかりに演ぜられるもの。また内容より分ければ、(イ)頓作俄、(ロ)口合俄、(ハ)あぶら俄、(ニ)なえこ俄、(ホ)出たらめ俄、(ヘ)物眞似俄、(ト)拍子違ひ俄、(チ)配り物俄など。なほ地方別に分ければ、(1)大阪俄、(2)吉原俄、(3)博多俄などの名目があり、更に演者によつて、(一)素人俄、(二)玄人俄に分類する。【沿革】俄狂言は、あらゆる時代と社會とを通じて種々樣々な演劇現象として表現されてゐる人類の演劇本能の時代的場所的の一表現であつて、京阪の諸祭禮の練物の合間に、「笑ひ」と稱し、老若男女思ひ思ひに假裝して即興的な劇的所作を演じながら練つて行く所などにその源流を求めることが出來る。大阪の俄狂言は、一說に享保の頃住吉祭參詣の人々の間に起つたといはれ、京都では、元文の頃祇園會の餘興から發達したといふ。その後漸次に俄は祭禮の即興から通人連中の道樂藝と化し、義太夫・三味線・謠などの素養を應用して巧者に芝居がかつた座敷狂言となつて行つた。既に文化の頃には、神岡・辨連・湯稀・草履吉等の通人俄の名人の名が傳へられてゐる。ついで天保以降は、通人等の月次會が嵩じて藝人化し、座敷藝が舞臺藝と化してそれを職業とする俄師なるものが生じ、趣向は益々大がかりに芝居仕立となり、天保頃の三喜・新蝶・南玉等の俄師は、殆ど歌舞伎役者同樣になり、給金を定めて芝居小屋で道具鳴物入りで見物を集めるやうになつた。明治以降は全く素人俄は亡びて俄師は小芝居役者或は寄席藝人として生存した。幕末から明治へかけて京阪俄師の名人としては新玉・扇玉・茶樂・信濃屋お半・東玉・鶴屋團十郎・尾上菊和郎・寶樂等の名跡が傳へられてゐる。その演出法も全く芝居化し、

例へば延若が「小栗判官」で當りをとれば、その千秋樂の翌日から俄師が同じ狂言を俄に仕組んで興行するといふ風であつた。この大阪俄から明治中頃の書生俄を經て新派劇（別項）を生み、一方更に曾我廼家一派の喜劇（別項）を胚胎したことは、演劇進化の上から注目すべき現象である。江戸へ俄狂言が移入されたのは、既に享保の頃に吉原俄の濫觴を傳へられ、なほ劇場内部では、安永の頃から既に正月の仕初や曾我祭などの餘興に俄狂言が行はれてゐる記錄が見えるのは、恐らく東西の役者の往來からであらうが、かくて江戸本來の茶番と俄とは漸次混淆して祭禮などにも催されてきた。天保以降は玄人俄師の東下があり、特に嘉永四年春、大阪俄師の市丸・新玉一座が兩國の長左衞門席で興行した「道中膝栗毛」の俄狂言は、江戸の人氣に叶ひ、毎日客止めの盛況で數ケ月間打通したといふ。なほ俄狂言の種本は、寶曆の「淸神祕錄」、文化の「古今俄選」、天保の「風流俄天狗」などを主として無數に出版されてゐる。（博多俄參照）

【參考】淸神祕錄（續燕石十種第二）○皇都午睡　西澤一鳳（新群書類從第一）○南水漫遊（新群書類從第二）○古今俄選（文化年間）○風流俄天狗（天保年間）○大阪俄に就て久保田米僊（歌舞伎五三）○明月餘情（稀書複製會本）○吉原春秋二度の景物（未刊隨筆百種第二）○新撰博多仁和加　竹田秋樓・内野環星共著　〔飯塚〕

丹羽純一郎（にはじゆんいちらう）「織田純一郎」を見よ。

庭立振（にはたちぶり）歌謠【名稱】歌の冒頭の句を以て名付けられる。【出典】「琴歌譜」（別項）に一首出づ。【歌詞】譜を附した歌詞を分り易く記すと次の如くである。

庭に立つ、麻の雄鳥、しついつついつら、いさ子夫、我が夫、曉さ、知らに我が寢ば、しついつついつら、打起せ雄鳥。

「しついついつら」は囃子詞で、一首は旋頭歌形式より成つてゐる。多分二段に分つて歌はれたものであらう。〔藤田〕

人形操（にんぎやうあやつり）【性質】床の淨瑠璃と相俟つて、一つの物語を舞臺に演出する人形、詳しくは操人形。【起原】人形は民俗學的にいふと、埴輪系統即ち俑系統の偶人と、祓具即ちオシラ神系統の執物（とりもの）としての偶人との二系統に分類されるが、前者の系統から發生した人形が、いつしか子供の弄ぶ人形となり、後者が操芝居の人形となつたと見られる。故に後世諸國に發達した操人形は、東西の中心都市たる江戸・大阪の影響、或は移動と見るよりも、各地に各自に播かれたる上記の執物系統の偶人から、獨自に發達の徑路を取つたものと見るのが妥當な見方である。その各地に各自の發達を遂げた人形芝居は、ずつと後世に至つて、大阪に發達した人形淨瑠璃芝居が最も早く完成したので、この影響を各地共に受けたのである。各地の人形芝居の人形が、その構造に於て多少の特異な點があるに拘はらず、演技の手法と語り物とに、多くの共通せる類似點や相似點を持つことによつて證される。

【種類】〔操法からの分類〕（一）手遣ひ。最も發達したもので、延寶・元祿を中心とした時代には、一人遣ひで差込みと片手人形との二系統があるが、享保末年には片手人形を源流として三人遣ひの現在の遣ひ方の端を發した。この手遣ひは人形を抱へ込んで遣ふから、又抱込みともいふ。（二）糸操（いとあやつり）。遣ひ手が上にゐて、下なる人形を操るのが、形式上の一大特質である。別名南京操。（三）機巧（からくり）。道頓堀竹田の芝居（別項）が最も有名で、今日なほ人口に膾炙してゐるが、寛文・延寶以來貞享以前の

土佐掾樂屋の圖（人倫訓蒙圖彙）

機巧或は璣（からくり）の芝居には、山本飛驒掾・伊藤出羽掾・竹田近江大掾の三芝居が、この機巧の座本であつた。機巧のうちでも、「南京からくり」「水からくり」の種別がある。「水機巧」の舞臺の模様は繪畫などで、ほぼ察することが出來るが、機巧の仕掛に至つては、今日これを知る文獻・記錄を缺いてゐるので、内容を知る事は出來ないが、竹田・山本・伊藤の三芝居のあつた大阪道頓堀川の護岸に、今日用途不明の大土樋の水の疏け口が廢つたまゝ存在してゐる事によつても、相當大仕掛に道頓堀の水を使つてゐたことが察せられる。「南京操」「南京からくり」等の南京の語は、南京渡來の意味でなく、不思議な仕掛、摩訶不思議とか、小さい可愛いとかいふ意味を附與された江戸時代の言葉である。〔樣式からの分類〕大阪の今日の文樂座の操人形の祖であると一般に説かるゝ攝津西宮の操人形を初めとして、淡路人形・阿波人形・車人形（別項）・のろま人形（別項）・手妻人形（別項）・川上人形（演藝畫報、昭和四ノ一二、井手蕉雨氏紹介）・學文路人形・播磨人形・三河古戸人形（民俗藝術、昭和三ノ二、早川孝太郎氏紹介）・秩父人形（同上、昭和三ノ五、藤田國忠氏紹介）・尾張人形（同上、昭和四ノ一一、佐藤照吉氏紹介）・佐渡ノロマ人形（同上、昭和四ノ四、藤井新二・小田内通久氏紹介）・沖繩人形（爐邊叢書、宮良當壯氏紹介）・水戸人形などと數へると數限りもない。併し殆ど凡てが、上方の竹・豐兩座乃至ずつと近世では文樂座系統の分派か、若しくは江戸系統の一人遣ひの影響を受けないものはない。即ち各地に各自に發達し、或は殘留したとはいひ條、操人形の起原が既に傀儡子（くぐつ）（別項）に端を發したのだから、日本全國の操人形に悉く類似點多く、僅かに人形機構上の部分に特異點があるといふ程度で、その悉くが上方か江戸かの二大系統に還元される。故に以下には、操人形として大阪に發達した人形芝居の人形を本格的の人形として記す。

【構造】操人形は、左の部分から成つてゐる。かしら（首のこと）・あたま（髮或は鬘のこと）・胴・手・足・衣裳。衣裳とあたまとは、その狂言の人物如何によつて違ひ、その扮する人物に古來の傳統と、人形遣の工夫によつて異なつて來るのであるから茲には省く。但しあたまは鬘を用ひる場合と髮の場合がある。後者は人形のかしらへ髷の如き毛髮を鋲で打ち付け、その毛髮で髷を結ぶ。

〔頭（かしら）〕（一）種類。いくつかの類型的の面貌に收約されてゐる。例へば「南水漫遊拾遺」卷三によれば、人形品目として、

檢非違使・素盞嗚・文七・由良之助・樋口・天神・實盛・鬼一・陀羅助・與勘平・團七・一寸・六部・釣船・白太夫・正宗・源太・役行者・日蓮上人。〔女方〕むす

ダラ助・鬼若・金時・若人・舅・源太・鬼一・劍菱（檢非違使）・團七・文七・白太夫・又平・孔明・與勘平・鼻動き・虎王・正宗・ツメ。〔女形〕老女形・笹屋・娘・婆々。

を數へるばかりである。但し孔明・文七・源太・娘に各々數種あつて、總數三十五個に上つてゐる。又一頭一役の頭（かしら）、即ちお岩、縮緬張の景淸、角の出る鬼女などは、こゝに擧げた品目以外で、これが四十頭、合せて七十五個の頭（かしら）で、今日行はるゝ淨瑠璃の人物は殆ど盡きてゐる。なほツメと稱する人形は、三人遣ひの今日の舞臺でも雜役であるがために、節約して一人で遣ふ。ツメとは即ち左手と足とが缺けた人形の意で、胴と頭と右手しかない。これが即ち三人遣人形の源流なる片手人形の遺存の一樣式である。この七十五個の頭の外

ところを嵌める（圖解參照）。

〔手〕正德の差込、明和の屏風手とて、掌に革を張つて動くやうにしたといふが、手の品目には抓手（つかみで）・差込手・招手（まねきで）・弓手（ゆんで）・指手（さしで）・扇子手（あふぎで）・鼓手（つゞみで）・琴手（ことで）などと、「戲場樂屋圖會拾遺」に揭載されてゐるが、これは分類に統一がなくて繁雜であるから、今、女の手・男の手の二大別とする。（一）女の手は一種類で、手首は動くが、指は五本とも一つになつて離れず、指先だけが屈折が出來る。例外として中指と食指との遊離して琴を彈ずる手（阿古屋の琴責の時など）、即ち琴手（ことで）がある。（二）男の手は、かきつばた・つかみ手・蛸つかみ・カセ手・ちやり手の五種類とする。（イ）かきつばた。母指が一つ離れ、他の四本の指が離れない。その形が杜若の花に似るからの名稱である。（ロ）つかみ手。五

かし、膝の代りに「ボンボラ」といふのを動かして足を偲ばしめる。但し海士の女或は裳をからげる女、即ち長局のお初などで、足を必要とする時は、子供の足を女に用ひる。男でも子供でも足は一種類で、後に附く曲尺形の足金といふものを以て足遣ひが遣ふのである。

【人形師】享保十九年以降新作の度に、人形の頭も新しく打たしたらしいが、必ずしも新作毎に新しい頭を要求しなくなつた爲めに、自然腕のある人形師は人形座へは寄り付かなかつた。後世人形座に頭の逸品が出來なくなつた第一の理由である。そして昔にあつても、名人上手の人形師に就いて傳へられた記錄がない。僅に笹尾八兵衞・龜屋利助（諸事聞書往來）、或は笹尾佐助・富田屋福藏（樂屋圖繪拾遺）の名前しか今日傳はつてゐない。古番附について

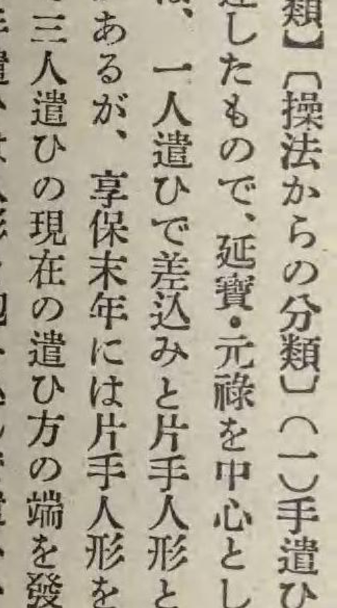
秋二度の景物(未刊隨筆百種第二)○新撰博多仁和加 竹田秋樓・内野環星共著 (飯塚)

丹羽純一郎 「織田純一郎」を見よ。

庭立振 にはたちぶり 歌謠【名稱】歌の冒頭の句を以て名付けられる。【出典】「琴歌譜」(別項)に一首出づ。【歌詞】譜を附した歌詞を分り易く記すと次の如くである。

庭に立つ、麻の雄鳥、しついつら、いミ子夫

【種類】(操法からの分類)(一)手遣ひ。最も發達したもので、延寶・元祿を中心とした時代には、一人遣ひで差込みと片手人形との二系統があるが、享保末年には片手人形を源流として三人遣ひの現在の遣ひ方の端を發した。この手遣ひは人形を抱へ込んで遣ふから、又抱込みともいふ。(二)糸操。遣ひ手が上にゐて、下なる人形を操るのが、形式上の一大特



機巧或は璣の芝居には、山本飛騨掾・伊藤出羽掾・竹田近江大掾の三芝居が、この機巧の座本であつた。機巧のうちでも、「南京からく

くは江戸系統の一人遣ひの影響を受けないものはない。即ち各地に各自に發達し、或は殘留したとはいひ條、操人形の起原が既に傀儡子(別項)に端を發したのだから、日本全國の操人形に盡く類似點多く、僅かに人形機構上の部分に特異點があるといふ程度で、その盡くが上方か江戸かの二大系統に還元される。故に以下には、操人形として大阪に發達した人

形芝居の人形を本格的の人形として記す。

【構造】操人形は、左の部分から成つてゐる。かしら(首のこと)・あたま(鬘或は髷のこと)・胴・手・足・衣裳。衣裳とあたまとは、その狂言の人物如何によつて違ひ、その扮する人物に古來の傳統と、人形遣の工夫によつて異なつて來るのであるから玆には省く。但しあたまは鬘を用ひる場合と髮の場合がある。後者は人形のかしらへ髷の如き毛髮を鋲で打ち付け、その毛髮で髷を結ぶ。

〔頭〕(一)種類。いくつかの類型的の面貌に收約されてゐる。例へば「南水漫遊拾遺」卷三によれば、人形品目として、

檢非違使・索盞嗚・文七・由良之助・樋口・天神・實盛・鬼一・陀羅助・與勘平・團七・一寸・六部・釣船・白太夫・正宗・源太・役行者・日蓮上人。〔女方〕むすめ・女房・傾城・かさね・御臺・老女・おふく。

と分類されてゐる。歌舞伎の舞臺と人形の舞臺とに相互に影響があつた時代には、人氣役者が江戸から大阪へ上ると、その似顏が直ちに人形の頭として打たれたこと等は、「南水漫遊」の瀨川菊之丞の記事が證明してゐる。かうして一新作の上演毎に、新たなる頭が細工人によつて打たれたことは、前記の名稱によつても察せられるが、淨瑠璃人物の類型化に應じて、前記の陀羅助を河庄の太兵衞に使ひ、實盛の頭も盛綱の頭も、一つで間に合はせると、後世益々收約されて、今日では普通約四五十の頭で、現存の淨瑠璃狂言の各人物を扮出することが出來る。例へば文七は雁文七以外に、光秀・五右衞門・貞任・熊谷などに、團七は夏祭の團七の外、宗任・權太などに通用されてゐる。現在唯一の本格的人形芝居なる文樂座で用ひる頭の品目をあげると、

ダラ助・鬼若・金時・若人・舅・源太・鬼一・劍菱(檢非違使)・團七・文七・白太夫・又平・孔明・與勘平・鼻動き・虎王・正宗・ツメ。〔女形〕老女形・笹屋・娘・婆々。

を數へるばかりである。但し孔明・文七・源太・娘に各々數種あつて、總數三十五個に上つてゐる。又一頭一役の頭、即ちお岩、縮緬張の景淸、角の出る鬼女などは、こゝに擧げた品目以外で、これが四十頭、合せて七十五個の頭で、今日行はるゝ淨瑠璃の人物は殆ど盡きてゐる。なほツメと稱する人形は、三人遣ひの今日の舞臺でも雜役であるがために、節約して一人で遣ふ。ツメとは即ち左手と足とが缺けた人形の意で、胴と頭と右手しかない。これが即ち三人遣人形の源流なる片手人形の遺存の一樣式である。この七十五個の頭の外で、今日品目だけが殘つて實物のない頭が多い。「非人仇討」の非人といふ頭の如きそれである。なほこの頭の内部には眼を働かし、眉を立て、口を開く仕掛がある(圖解參照)。

〔胴〕丸胴・切胴と二大別する。張抜きで胴を造つてゐるのを丸胴。中を四方形にくつた一枚の肩板に、前には木綿の裂を垂らし、下は胴輪といふ竹の輪を繋ぐものを切胴といふ。丸胴は力士とか朝顏日記の河人足とか、肌を見せる人形に用ひ、その他衣裳を着けてゐる人形の胴は悉く切胴である。この外に丸胴の一部に、片羽櫂とて、腹があつて背のなき胴、懸羽櫂などがあるが、要は裸形の程度によつて分つた名稱にすぎぬ。肩板の周圍にある糸瓜は、衣裳を着せた時に、肩にふくらみの出來るやうにしてある。肩板の切拔いた部分に吊してあるのが、吊肩で、この吊肩の中央の穴へ、頭の咽木と胴串との繼目の細くなつたところを嵌める(圖解參照)。

〔手〕正德の差込、明和の屏風手とて、掌に革を張つて動くやうにしたといふが、手の品目には抓手・差込手・招手・弓手・指手・扇子手・鼓手・琴手などと、「戲場樂屋圖會拾遺」に掲載されてゐるが、これは分類に統一がなくて繁雜であるから、今、女の手・男の手の二大別とする。(一)女の手は一種類で、手首は動くが、指は五本とも一つになつて離れず、指先だけが屈折が出來る。例外として中指と食指との遊離して琴を彈ずる手(阿古屋の琴責の時など)、即ち琴手がある。(二)男の手は、かきつばた・つかみ手・蛸つかみ・カセ手・ちやり手の五種類とする。(イ)かきつばた。母指が一つ離れ、他の四本の指が離れない。その形が杜若の花に似るからの名稱である。(ロ)つかみ手。五指とも自由自在に動く手で、遣ふ時に腕に差金があつて、差金を操つて遣ふ手。鎧武者で人形の袖がないとか、肌を拔く沼津の平作のやうな役だと、腕に付いてゐる差金で指先を働かす必要があるから、差金付きで、これをつかみ手といふ。(ハ)蛸つかみ。五指とも動くが、差金がなく腕の根で遣ふ手。人形が衣裳を着てゐるまゝだと、小脇から人形遣の手を差込んでつかふから差金を要しない。この種の手を蛸つかみといふ。(ニ)カセ手。手首は動くが、指先が動かない手。(ホ)ちやり手。ちやり役に用ひる滑稽味のある手。

〔足〕人形の足は、延寶六年に付いた。足は男の足と子供の足との二種しかない。女の足はないのが原則で、女人形は袘の廣い裳を引いてゐる。腰から下の形を付けるために、樂屋では「きんだま」といつてゐる漏斗形のものを胴輪の下に付けてゐるが、足の代りに裳を動かし、膝の代りに「ボンボラ」といふのを動かして足を偲ばしめる。但し海士の女或は裳をからげる女、即ち長局のお初などで、足を必要とする時は、子供の足を女に用ひる。男でも子供でも足は一種類で、後に附く曲尺形の足金といふものを以て足遣ひが遣ふのである。

【人形師】享保十九年以降新作の度に、人形の頭も新しく打たしたらしいが、必ずしも新作毎に新しい頭を要求しなくなつた爲めに、自然腕のある人形師は人形座へは寄り付かなかつた。後世人形座に頭の逸品が出來なくなつた第一の理由である。そして昔にあつても、名人上手の人形師に就いて傳へられた記錄がない。僅に笹尾八兵衞・龜屋利助(諸事問書往來)、或は笹尾佐助・富田屋福藏(樂屋圖繪拾遺)の名前しか今日傳はつてゐない。古番附について見るに、伊藤出羽掾が「細工方」、石井飛騨掾が座本となつてゐる首振番附があるが、この細工方は座本の意であり、竹田近江大掾の細工人とあるのも、これは機巧で、操の人形師とはやゝ性質を異にしてゐる。番附面に現はれた人形師の初めは、明和三年正月、竹本座の頭取なる欄にある市野谷九十郎であらうと見られる。番附にはその外に、一の谷富三郎・和泉屋五郎兵衞・一の谷八十郎・竹田龜之助・大江萬藏・大江萬次郎・大江幸三郎などの名が見え、明治期に入つては、大江定丸・大江文丸・天狗辨などの人形師が、各々座に附屬してゐたやうである。現在の文樂座に於ける人形師欄の天狗辨は幽靈名であつて、本人は淡路の故鄕に歸つてゐる。人形遣の仲間に傳へ殘された記錄によつて見ると、左の如き人形師の名前だけが、無秩序に書き並べてある。現在人形師として殘つてゐるのは、淡路の天狗辨

竹田近江系統の機巧人形
（大からくり繪盡）

現存文樂座の三人遣人形の舞臺樣式（御靈時代の文

（本名近藤鐸吉）、その伯父なる阿波德島市外國府町和田なる天狗屋久吉（天狗久）の兩人のみである。天狗久の人形は主として淡路の人形座に供給されてゐる。初めは淡路も大阪から求めてゐたのが、阿波の馬の背で、大阪戻りの旅役者が人形の製作を始め、こゝ百五六十年來使ふやうになつた。特長は毛植が大阪のよりも丹念であること、口を開くに頤から動くやうに製作されてゐること等である。この外に、德島に塀裏町の畫家鳴洲も相當上作を打つてゐる。笹屋忠七の父笹屋佐兵衞は、大阪へ出て製作に從事し、息子の忠七は故郷に殘つてゐたのである。この外伊豫松山に面屋幸吉といふ製作人もあつた。後世の人形師の仕事は多く古い人形の修繕であつた。

【參考】我衣○竹豐故事○璣訓蒙鑑草（からくり）○稀書複製會本八重垣雲絕間○聲曲類纂 齋藤月岑 ○戲場樂屋圖會拾遺 松好齋半兵衞 ○羊藝古雅志○南水漫遊拾遺○外題年鑑○今昔操年代記 ○淨瑠璃譜 ○邦樂年表（義太夫之部）○人形遣系譜（初代玉造所傳）○俳諧高名集 井原西鶴 【石割】

人形芝居（にんぎやうしばゐ）**人形遣**（にんぎやうつかひ） 演劇 【名稱】操淨瑠璃芝居に於ける人形の遣ひ手をいふ。【沿革】傀儡子時代に既に小三・日百・三千載・萬歲・小君・孫君などの名手があつた（傀儡子記）と名を傳へてゐるが、降つては、「江戸第一之傀師號小平太」（羅山林先生文集）といひ、京阪にあつては、「左内がうちに道善・千菊・與三郎、其外與五郎・西六・藤八・ふんとく・むぎま・重内等名人あり、おやま人形は平三郎といふものつかひ始て今に傳へて甚左衞門、庄左衞門等此頃（元祿か）の名人也、手づまは善左衞門、庄助など上手のよし、からくり人形系遣の名人は大阪又八、其後武田四郎兵衞、江戸傳内、水からくりは水學等元祖とかや」（好色由來揃）と多くの名人の名が傳へられてゐるが、殆どその業績も傳記も傳はらない。所謂機巧人形派と稱せらるゝものが、その代表で、それは目先の變化を以て看客を魅するに過ぎず、藝といふ域には達してゐなかつたものであらう。

いが、おやま次郎三郎が出でて藝の範圍に踏み込んだ。承應三年から京の作人が捧へ出した（正事記）と傳へる。元來「遊女」を傀儡（くゞつ）といひ、おやま人形を根本として人形は發達したらしい。「竹豐故事」に、「おやま次郎三郎此道の達人也。近世には辰松八郎兵衞名譽を顯はされたり、京都には貞享元祿の比おやま五郎兵衞・同五郎右衞門・大藏善右衞門、正德享保の比三升平四郎・宇治久五郎・三十郎・與八郎等何れも名を得し上手の遣ひ手也、大阪には辰松氏・藤井小三郎・桐竹三右衞門等、おやまの名人有し也。當時立役人形吉田文三郎は古今無双の名人也。相次で若竹東工郎（一に東九郎と記す）譽れ高し。おやまは今藤井氏、男人形には桐竹・吉田・豐松・若竹氏に上手分多し。手妻人形は山本彌三五郎飛驒掾に始る云々」とあつて、おやま人形では、辰松八郎兵衞（別項）・藤井小三郎、手妻人形の山本飛驒掾（別項）が片手人形を遣ひはじめてから、立役人形では若竹東九郎・竹本（吉田）三郎兵衞・吉田文三郎（別項）が擢出して、初めて人形遣の藝が完成されたと見られる。それも竹本・豐竹（各別項）兩座の對立とともに、人形では吉田文三郎・藤井小三郎、中にも吉田文三郎が人形芝居を殆ど完成したといつていゝ。その證據に、寶曆九年に文三郎引退後の操に、長い間何等の新意匠も新工夫も加はらず、明治に入つて淡路より初代吉田玉造の出現で、操界にやゝ活氣が加はり、今日の吉田榮三・吉田文五郎に至つたといふ狀態である。江戸は小平太以來名人輩出せず、辰松八郎兵衞・吉田文三郎の東下によつて門流を殘したが、惜しむらくは、淨瑠璃の發達これに伴はず、僅におやまの名人西川伊三郎の代に、「實に魂の入りて働らくかとあやしまるゝばかりなり」（わすれのこり）と至藝を見せた。一方江戸和泉太夫座で野呂松勘兵衞及び野呂松を祖とする龜呂松・龜呂七などの間（あひ）の狂言を主とした道化人形遣の人々があるが、早く興行界から分派して、素人の仲間に旦那藝として近年まで存續してゐた。上方では、正德五年頃既に絕滅した（雲錦隨筆）。

【遣ひ方】創始時代の遣ひ方は知る由もないが、山本飛驒掾から吉田三郎兵衞・同文三郎へと傳はつた系統は片手人形で、人形の背後から手を差入れて遣つた。この片手人形が、左手で人形を支へるに至つて、右手が人形の右を遣ふ事となり、三人遣の形式を案出した。一方辰松派の形式は、人形の裳から兩手を差込んで、手を伸し切つて遣つた。この形式が古くからの遣ひ手である。元祿享保に亙つてこの兩手と片手との二つの遣ひ方が並行してゐた事を見遁してはならぬ（山本飛驒掾・吉田文三郎・辰松八郎兵衞參照）。なほ初期操時代を省いて、以後の人形工夫等を「淨瑠璃譜」「番付」「繪入綱字本」その他によつて、便宜上左に表示する。

○延寶六年（?）「源氏烏帽子折」にて、立役の人形に足を付けた（京、松本治太夫座）。これより先、でくのぼうにて、頭ばかりの人形に遣ひ手の手を入れたといつていゝ。その證據に、寶曆九年に文三郎引退後の操に、長い間何等の新意匠も新工夫も加はらず、明治に入つて淡路より初代吉田玉造の出現で、操界にやゝ活氣が加はり、今日の吉田榮三・吉田文五郎に至つたといふ狀態である。江戸は小平太以來名人輩出せず、辰松八郎兵衞・吉田文三郎の東下によつて門流を殘したが、惜しむらくは、淨瑠璃の發達これに伴はず、僅におやまの名人西川伊三郎の代に、「實に魂の入りて働らくかとあやしまるゝばかりなり」（わすれのこり）と至藝を見せた。一方江戸和泉太夫座で野呂松勘兵衞及び野呂松を祖とする龜呂松・龜呂七などの間（あひ）の狂言を主とした道化人形遣の人々があるが、早く興行界から分派して、素人の仲間に旦那藝として近年まで存續してゐた。上方では、正德五年頃既に絕滅した（雲錦隨筆）。

【遣ひ方】創始時代の遣ひ方は知る由もないが、山本飛驒掾から吉田三郎兵衞・同文三郎へと傳はつた系統は片手人形で、人形の背後から手を差入れて遣つた。この片手人形が、左手で人形を支へるに至つて、右手が人形の右を遣ふ事となり、三人遣の形式を案出した。一方辰松派の形式は、人形の裳から兩手を差込んで、手を伸し切つて遣つた。この形式が古くからの遣ひ手である。元祿享保に亙つてこの兩手と片手との二つの遣ひ方が並行してゐた事を見遁してはならぬ（山本飛驒掾・吉田文三郎・辰松八郎兵衞參照）。なほ初期操時代を省いて、以後の人形工夫等を「淨瑠璃譜」「番付」「繪入綱字本」その他によつて、便宜上左に表示する。

○延寶六年（?）「源氏烏帽子折」にて、立役の人形に足を付けた（京、松本治太夫座）。これより先、でくのぼうにて、頭ばかりの人形に遣ひ手の手を入れたといつていゝ。その證據に、寶曆九年に文三郎引退後の操に、長い間何等の新意匠も新工夫も加はらず、明治に入つて淡路より初代吉田玉造の出現で、操界にやゝ活氣が加はり、今日の吉田榮三・吉田文五郎に至つたといふ狀態である。江戸は小平太以來名人輩出せず、辰松八郎兵衞・吉田文三郎の東下によつて門流を殘したが、惜しむらくは、淨瑠璃の發達これに伴はず、僅におやまの名人西川伊三郎の代に、「實に魂の入りて働らくかとあやしまるゝばかりなり」（わすれのこり）と至藝を見せた。一方江戸和泉太夫座で野呂松勘兵衞及び野呂松を祖とする龜呂松・龜呂七などの間（あひ）の狂言を主とした道化人形遣の人々があるが、早く興行界から分派して、素人の仲間に旦那藝として近年まで存續してゐた。上方では、正德五年頃既に絕滅した（雲錦隨筆）。

【遣ひ方】創始時代の遣ひ方は知る由もないが、山本飛驒掾から吉田三郎兵衞・同文三郎へと傳はつた系統は片手人形で、人形の背後から手を差入れて遣つた。この片手人形が、左手で人形を支へるに至つて、右手が人形の右を遣ふ事となり、三人遣の形式を案出した。一方辰松派の形式は、人形の裳から兩手を差込んで、手を伸し切つて遣つた。この形式が古くからの遣ひ手である。元祿享保に亙つてこの兩手と片手との二つの遣ひ方が並行してゐた事を見遁してはならぬ（山本飛驒掾・吉田文三郎・辰松八郎兵衞參照）。なほ初期操時代を省いて、以後の人形工夫等を「淨瑠璃譜」「番付」「繪入綱字本」その他によつて、便宜上左に表示する。

○延寶六年（?）「源氏烏帽子折」にて、立役の人形に足を付けた（京、松本治太夫座）。これより先、でくのぼうにて、頭ばかりの人形に遣ひ手の手を入れたといつていゝ。その證據に、寶曆九年に文三郎引退後の操に、長い間何等の新意匠も新工夫も加はらず、明治に入つて淡路より初代吉田玉造の出現で、操界にやゝ活氣が加はり、今日の吉田榮三・吉田文五郎に至つたといふ狀態である。江戸は小平太以來名人輩出せず、辰松八郎兵衞・吉田文三郎の東下によつて門流を殘したが、惜しむらくは、淨瑠璃の發達これに伴はず、僅におやまの名人西川伊三郎の代に、「實に魂の入りて働らくかとあやしまるゝばかりなり」（わすれのこり）と至藝を見せた。一方江戸和泉太夫座で野呂松勘兵衞及び野呂松を祖とする龜呂松・龜呂七などの間（あひ）の狂言を主とした道化人形遣の人々があるが、早く興行界から分派して、素人の仲間に旦那藝として近年まで存續してゐた。上方では、正德五年頃既に絕滅した（雲錦隨筆）。

【遣ひ方】創始時代の遣ひ方は知る由もないが、山本飛驒掾から吉田三郎兵衞・同文三郎へと傳はつた系統は片手人形で、人形の背後から手を差入れて遣つた。この片手人形が、左手で人形を支へるに至つて、右手が人形の右を遣ふ事となり、三人遣の形式を案出した。一方辰松派の形式は、人形の裳から兩手を差込んで、手を伸し切つて遣つた。この形式が古くからの遣ひ手である。元祿享保に亙つてこの兩手と片手との二つの遣ひ方が並行してゐた事を見遁してはならぬ（山本飛驒掾・吉田文三郎・辰松八郎兵衞參照）。なほ初期操時代を省いて、以後の人形工夫等を「淨瑠璃譜」「番付」「繪入綱字本」その他によつて、便宜上左に表示する。

○延寶六年（?）「源氏烏帽子折」にて、立役の人形に足を付けた（京、松本治太夫座）。これより先、でくのぼうにて、頭ばかりの人形に遣ひ手の手を入

たのが山本彌三五郎、後の飛驒掾（伊藤出羽芝居）で、この飛驒掾全盛の元祿末に、飛驒の風を倣つて起つた手妻人形は、宇治太郎左衞門で、元祿末か寶永初めに「愛染明王影向松」の道行で、人形正方（まさかた）は、京、宇治嘉太夫芝居で足の付いた差込手を遣つた（繪入淨瑠璃史）。この宇治派で足を付けた始めは「世繼曾我」の朝比奈だと傳へる（宇治嘉太夫芝居）。

○元祿十二年五月、「本海道虎石」で綴子手摺（もつのこりてすり）を仕出し、人形の遣ひ方を見せる（竹本座）。

○元祿十六年五月、「曾根崎心中」で辰松八郎兵衞おはつ道行を遣ふ（竹本座）。

○寶永二年六月、「金屋金五郎後日雛形」で藤井小三郎出遣ひ、これを出遣の先驅とす（豐竹座?）。

○寶永二年十一月、「用明天皇職人鑑」で辰松八郎兵衞、鐘入段出遣、出遣の嚆矢（竹本座）。

○正德五年十一月、「國姓爺合戰」でおやま人形辰松八郎兵衞、立役人形津山助十郎・津山金七、差込み手にて一人遣ひ（竹本座）。

○享保二年二月、「國性爺後日合戰」で吉田文三郎初出座、經錦舍の人形片手の出遣（竹本座）。

○享保六年八月、「信州川中島合戰」で山籠を抜きの本山に造り改む（竹本座）。

○享保十二年八月、「攝津國長柄人柱」で人形の口が開く事、つかみ手にて手の五指が動く事、眼閉ぢ事。藤井小三郎の工夫（豐竹座）。

○享保十三年五月、竹本座の「加賀國篠原合戰」の時、太夫座の床を上手横、斜に直す。太夫座は昔は樂屋に小高き床を構へた。後宮家より御簾を賜はり、舞臺正面に床を設けた（摂陽奇觀）。

○享保十五年八月、「楠正成軍法實錄」で人形の眼の動く事、中村勘四郎の工夫也（淨瑠璃大系圖）。或は近本九八郎の工夫也（淨瑠璃譜）といふ（豐竹座）。

○享保十八年四月、「車遲合戰櫻」で人形の指先動く事（竹本座）。

○享保十九年正月、「北條時頼記」の時、正面の床

人形芝居の各様式

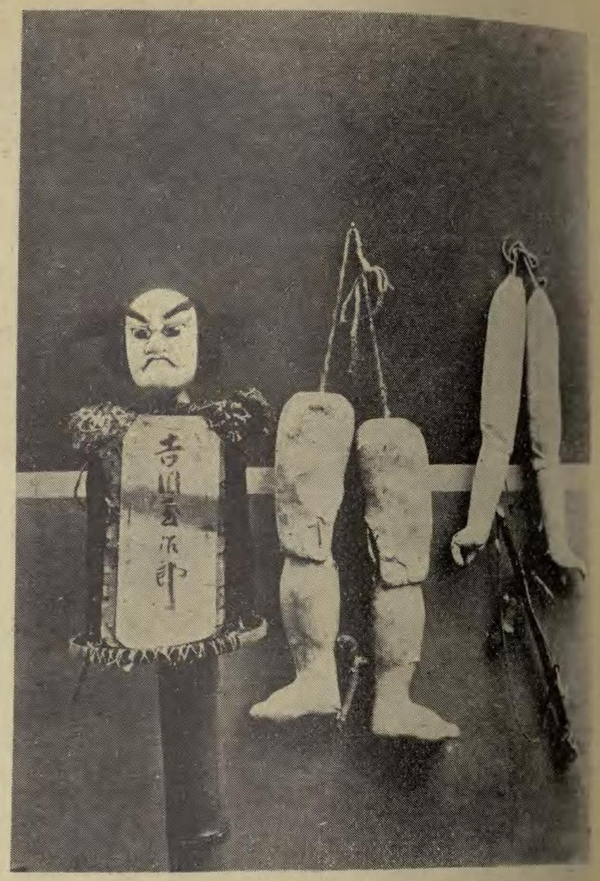
水からくり様式の人形（大伽藍寶物鏡）

竹田近江系統の機巧人形
（大からくり繪盡）

三人遣人形の一人立の典型的様式

現存文樂座の三人遣人形の舞臺様式（御靈時代の文樂座）

人形の構造

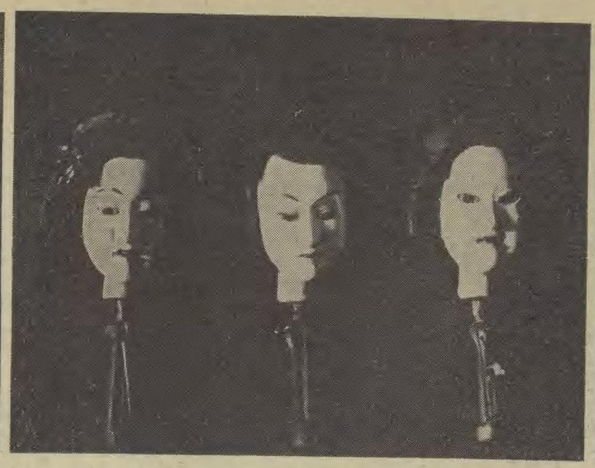


吊肩に頭を挿し胴及び手足

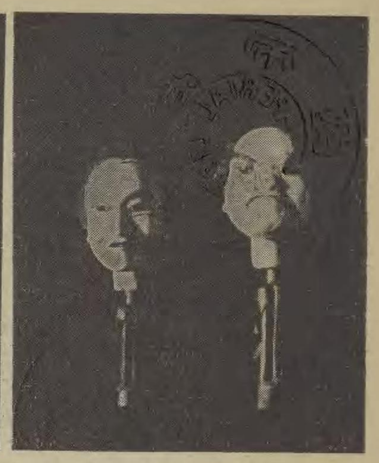
人形遣の指の遣ひ方
（左手の母指でツキアゲの遣ひ方注意）

頭の人形

金時 若鬼 助ラダ



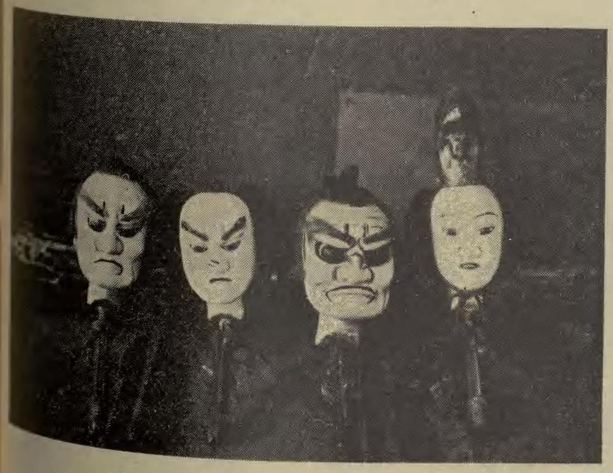
（谷笹）やゝさ 男若 形女けふ



正宗 婆々

平又 夫太白 七文

明孔く動 平勘與 明孔 菱剣く動 まやを若



一鬼 太源 舅 人若

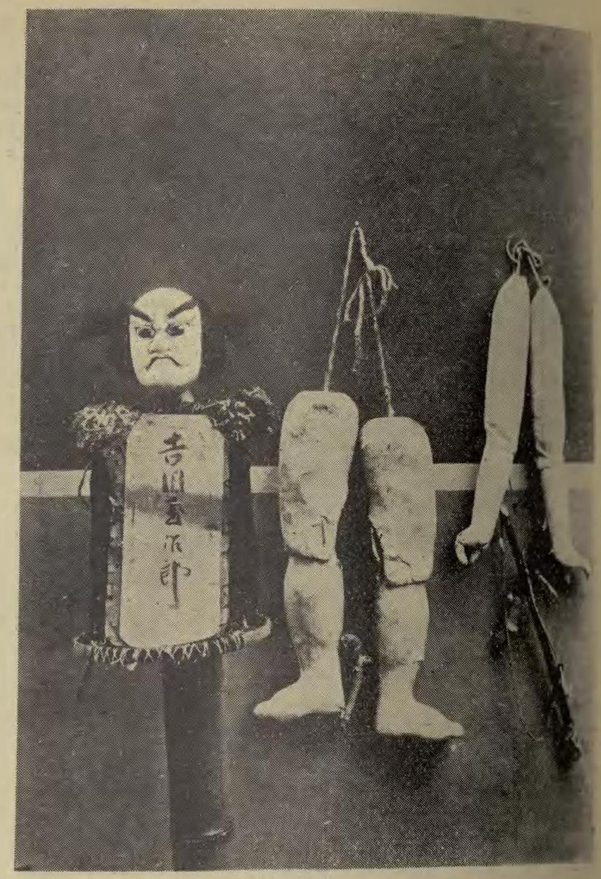
むすめ 剣菱 鼻動き 虎王

頭の形人のメツ

剣菱 源太 團七

人形の構造及び遣ひ方

形人裸たつ終を立組



吊肩に頭を挿し胴及び手足

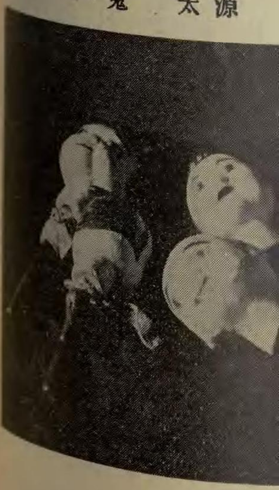
法用使のゲアキツ
（右手の腕で支へたツキアゲ）

人形遣の指の遣ひ方
（左手の母指でツキアゲの遣ひ方注意）

時金　若鬼　助ラダ

平又　夫太

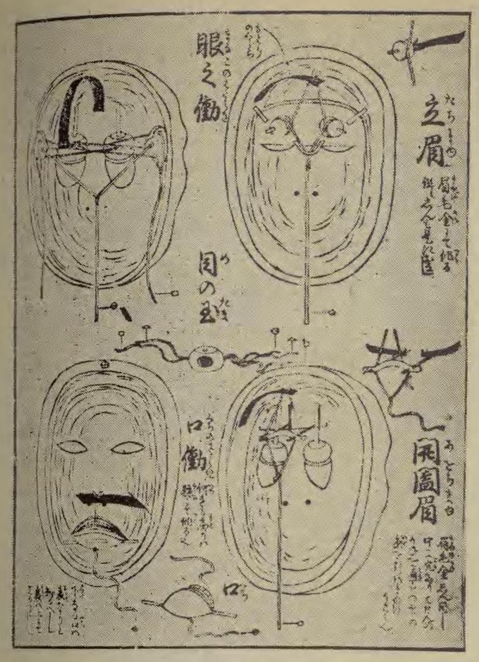
一鬼　太源



人形の頭

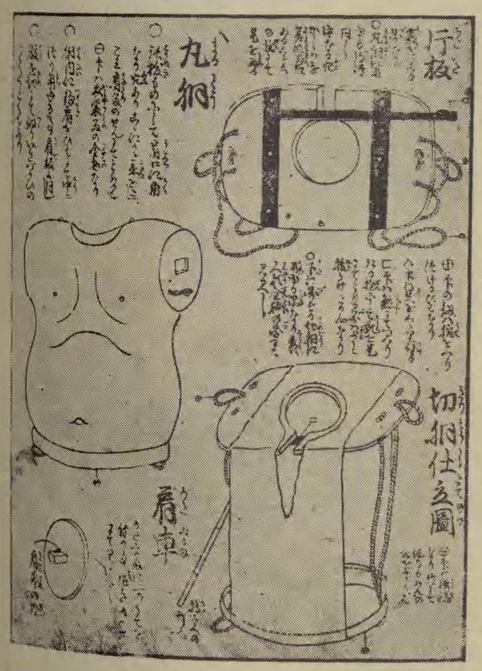
三人遣人形の機構

頭全體之圖・足之圖・足のサシ金

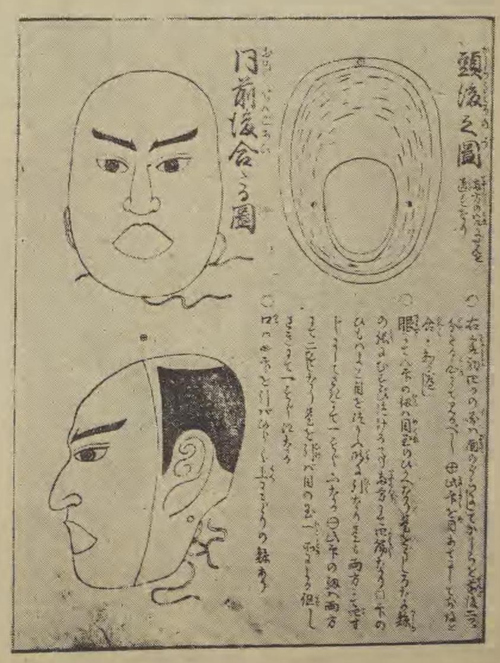


立眉・開闔眉・眼之働・目の玉・口の働・口

頭前後合見圖・引栓・咽首・吊肩・胴串



肩板・丸胴・切胴仕立圖・肩車



頭後之圖・同前後合たる圖

人形全體之圖

（樂屋圖會拾遺に據る）

を横に直す（豐竹座）。

○享保十九年十月、「蘆屋道滿大内鑑」で左足を別の人に遣はせ、また人形の腹をふくるゝやうにす。これ丸胴の初めにて、またこれが三人がかりの初め。これは、人形遣近本九八郎の工夫になると傳ふ（竹本座）。

○元文元年二月、「赤松圓心綠陣幕」で人形の眉が動く事（竹本座）。

○元文元年三月、「和田合戰女舞鶴」で藤井小八郎の遣ひし板額人形の大さ、普通の二倍あり（豐竹座）。

○元文二年七月、「釜淵雙級巴」で石川五右衞門人形頭に面三枚ぬぐ工夫を近本九八郎が始む（豐竹座）。

○元文四年四月、「ひらかな盛衰記」で吉田文三郎梅ヶ枝の人形に長さし金を仕始む。無間鐘を撞く型は元祖瀨川菊之丞の舞臺を移す（竹本座）。

○延享二年七月、「夏祭浪花鑑」で吉田文三郎、人形に始めて雛子衣裳を用ひ、本泥本水を使ふ（竹本

人事行政の亂脈この時より始まる。この時文三郎己が定紋二ツ巴を由良之助に付け、今日に殘る（竹本座）。

○寛延三年七月、「國姓爺合戰」で實物の虎の皮を張り、眼の動く事（竹本座）。

○寶暦元年二月、「戀女房染分手綱」で、吉田文三郎、淨瑠璃の改作に指を染め、吉田冠子と始めて署名す（竹本座）。

○寶暦三年五月、「愛護若名歌勝鬨」で舞臺一面水船の大道具、吉田文三郎の工夫（竹本座）。

○寶暦六年三月、「義仲勳功記」で藤井小八郎江戸土産で出遣（豐竹座）。

○寶暦七年十二月、「祇園祭禮信長記」で三重のセリ上げセリ下りの始め、若竹東九郎、木下藤吉の頭を京都高臺寺の太閤の木像に摸し、目に玉眼を入る。人形細工龜屋利助也（豐竹座）。

○寶暦八年三月、「敵討崇禪寺馬場」で吉田文三郎作者の班に入り、吉田冠子と號し、院本の卷末に署名の事（竹本座）。

人形の二代文三郎、遂に流行せず（江戸・長三座）。

○天保二年五月、「義經千本櫻」「嬢景清八島日記」で人形と歌舞伎首振とのてれこ合併興行、人形は新吾・三吾・豐松東十郎・千四など、歌舞伎は三代中村歌右衞門。歌右衞門の口上に、「組太夫殿を以て首振操にて私相勤申候」とある（道頓堀角の芝居）。

○弘化元年正月、「義經千本櫻」で吉田兵吉、見臺拔けのケレンで、吉野山御殿の源九郎狐を勤む。この兵吉は、文政九年七月御靈芝居（文樂座に非ず）にて水中早替、水拔などのケレンを賣物の人形遣也（京宮川町芝居）。

【石割】

人形ぶり（にんぎやうぶり）　演劇　【名義】人形の振りを眞似た演出の意。【解說】院本物を歌舞伎芝居として演ずる時、比較的重要な或る一節に限つて、根元の人形の動作や精神を眞似て人間が演ずる方法がある。その時、この役者が人形になるのみならず、まづ人形遣ひが出る。下手に黑ん坊の足拍子をふむ人が

いて來て面目がないので、父南村を初め母及び愛妻妙惠にも音信を絶つて勉強し、次の鄕科を待つてゐる。それとは知らず、家では夢仙が病死したといふ噂を聞いてこれを信じ、妙惠はその日を命日として亡夫の靈を祀り、舅姑に孝養を盡してをるうち、南村の村に飢饉があつた。土地の名望家だけに徵發に逢つて甚しく疲弊し、暮し向が不如意になつたので、南村夫婦は嫁の妙惠を再嫁せしめ、その聘禮を受けて一時を凌がうと密に相談した結果、江西の鹽商で富豪の聞えある謝啓の妾に遣る事に決し、この事を妙惠に語る。妙惠は事の意外に驚いてこれを拒み、父母に向つて我が夫は病死とは聞けど、實否は未だ判明せず、先に人を遣はし、その者もまだ歸らぬから姑く待つてくれとて容易に承諾せぬ。これを強ふれば自殺もしかねまじきに、さすがの

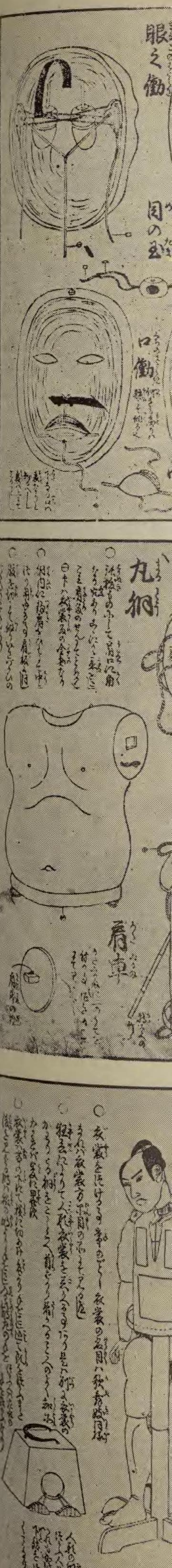
を横に直す(豐竹座)。
○享保十九年十月、「蘆屋道滿大内鑑」で左足を別の人に遣はせ、また人形の腹をふくるゝやうにす。これ丸胴の初めにて、またこれが三人がかりの初め。これは、人形遣近本九八郎の工夫になると傳ふ(竹本座)。
○元文元年二月、「赤松圓心綠陣幕」で人形の眉が動く事(竹本座)。
○元文元年三月、「和田合戰女舞鶴」で藤井小八郎の遣ひし板額人形の大さ、普通の二倍あり(豐竹座)。
○元文二年七月、「釜淵雙級巴」で石川五右衞門人形頭に面三枚ぬぐ工夫を近本九八郎が始む(豐竹座)。
○元文四年四月、「ひらかな盛衰記」で吉田文三郎梅ヶ枝の人形に長さし金を仕始む。無間鐘を撞く型は元祖瀨川菊之丞の舞臺を移す(竹本座)。
○延享二年七月、「夏祭浪花鑑」で吉田文三郎、人形に始めて帷子衣裳を用ひ、本泥本水を使ふ(竹本座)。
○延享二年閏十二月、道頓堀に陸竹小和泉座の櫓を揚げ、人形遣としては、豐竹座から中村勘四郎・近本九八郎など參加、寬延元年同座退座、これら人形遣の行方も傳はらず(陸竹小和泉座)。
○延享四年七月、「惡源太平治合戰」の四段目が操踊の趣向で、おやま踊・雀踊を演ず(豐竹座)。
○延享四年七月、「惡源太平治合戰」で若竹東九郎立役人形に「屛風手」とて五本の指を皮にてつなぎ働かす事(豐竹座)。
○延享四年八月、「傾城枕軍談」で吉田文三郎出遣にて門を越す工夫の事(竹本座)。
○延享四年十一月、「義經千本櫻」で吉田文三郎、源九郎狐の衣裳に源氏車の模樣を付け、今日まで傳はる(竹本座)。
○寬延元年八月、「假名手本忠臣藏」で竹本此太夫と吉田文三郎演出上の意見合はず、興行中途で此太夫等退座、豐竹座の内匠太夫等出勤、人形座の人事行政の亂脈この時より始まる。この時文三郎己が定紋二ッ巴を由良之助に付け、今日に殘る(竹本座)。
○寬延三年七月、「國姓爺合戰」で實物の虎の皮を張り、眼の動く事(竹本座)。
○寶曆元年二月、「戀女房染分手綱」で、吉田文三郎、淨瑠璃の改作に指を染め、吉田冠子と始めて署名す(竹本座)。
○寶曆三年五月、「愛護若名歌勝鬨」で舞臺一面水船の大道具、吉田文三郎の工夫(竹本座)。
○寶曆六年三月、「義仲勳功記」で藤井小八郎江戸土產で出遣(豐竹座)。
○寶曆七年十二月、「祇園祭禮信長記」で三重のセリ上げセリ下りの始め、若竹東九郎、木下藤吉の頭を京都高臺寺の太閤の木像に擬し、目に玉眼を入る。人形細工鑑屋利助也(豐竹座)。
○寶曆八年三月、「敵討崇禪寺馬場」で吉田文三郎作者の班に入り、吉田冠子と號し、院本の卷末に署名の事(竹本座)。
○寶曆十年十二月、「祇園女御九重錦」で三段目切場で、柳の大木を車に載せ、綠丸の小人形花道を引くからくり、操における花道使用の一文獻(淨瑠璃譜)(豐竹座)。
○寶曆十一年九月、「人丸萬歲臺」で、操に始めて三番叟移入、若竹東九郎の工夫也(豐竹座)。
○寶曆十三年正月九日、竹田芝居類燒、竹本座へ加はり、淨瑠璃・操・竹田からくり打込にて演ず(竹本座)。
○明和元年十月、「孀景淸八島日記」で若竹東九郎、景淸の人形を大きくする。元文元年藤井小三郎が板額の人形を倍大にしたのを機會に、人形が段々大きくなつた(豐竹座)。
○明和元年、江戸における操芝居、葺屋町土佐掾座・堺町薩摩外記座・同町肥前座何れも竹本豐竹の太夫を迎へてゐるが、「見取淨るり」(「みどり」と後に轉訛したゴミ淨るり排列法)十日替りなどの流行、江戸の地に風をなし、通し狂言を本來とする人形の二代文三郎、遂に流行せず(江戸・操三座)。
○天保二年五月、「義經千本櫻」「孀景淸八島日記」で人形と歌舞伎首振とのてれこ合併興行、人形は新吾・三吾・豐松東十郎・千四など、歌舞伎は三代中村歌右衞門。歌右衞門の口上に、「組太夫殿を以て首振操にて私相勤申候」とある(道頓堀角の芝居)。
○弘化元年正月、「義經千本櫻」で吉田兵吉、見臺拔けのケレンで、吉野山御殿の源九郎狐を勤む。この兵吉は、文政九年七月御靈芝居(文樂座に非ず)にて水中早替、水拔などのケレンを賣物の人形遣也(京宮川町芝居)。　〔石割〕

人形ぶり　にんぎやうぶり　演劇

【名義】人形の振りを眞似た演出の意。【解説】院本物を歌舞伎芝居として演ずる時、比較的重要な或る一節に限つて、根元の人形の動作や精神を眞似て人間が演ずる方法がある。その時、この役者が人形になるのみならず、まづ人形遣ひが出る。下手に黑ん坊の足拍子をふむ人が出る。又これが豫めこのところは人形ぶりで見せるといつた挨拶の口上をいつたりする。例へば「染模樣妹脊門松」の油屋の所謂「藏前」は、大抵その場全部を、又「金閣寺」の雪姫の「爪先鼠」の件などは、そこだけを人形ぶりでやる等の差がある。かくて「見得」の連續とも考へられるので、象徵化・彫刻化の方法であるから、却つて人間以上の暗示的效果を生む事にもなる。人形的な舞踊として見ても、有益な表現手法ともいへる。　〔三宅〕

人間一生三世相　にんげんいつしやうさんぜさう　讀本

五卷五冊　【作者】來義庵南峯(本名未詳)　【刊行】明和三年　【諸本】安永三年、大阪吉文字屋市兵衞刊行本がある。
【梗概】揚州の盧夢仙といふ青年が、鄕科に當り、都に上つて會試に應じたが、運拙く落第した。家に歸らうと思つたが、出る時高言を吐いて來て面目がないので、父南村を初め母及び愛妻妙惠にも音信を絕つて勉強し、次の鄕科を待つてゐる。それとは知らず、家では夢仙が病死したといふ噂を聞いてこれを信じ、妙惠はその日を命日として亡夫の靈を祀り、舅姑に孝養を盡してをるうち、南村の村に飢饉があつた。土地の名望家だけに徵發に逢つて甚しく疲弊し、暮し向が不如意になつたので、南村夫婦は嫁の妙惠を再嫁せしめ、その聘禮を受けて一時を凌がうと密に相談した結果、江西の鹽商で富豪の聞えある謝啓の妾に遣る事に決し、この事を妙惠に語る。妙惠は事の意外に驚いてこれを拒み、父母に向つて我が夫は病死とは聞けど、實否は未だ判明せず、先に人を遣はし、その者もまだ歸らぬから姑く待つてくれとて容易に承諾せぬ。これを強ふれば自殺もしかねまじきに、さすがの兩親も持て餘し、妙惠の叔母を賴んで諭して貰ひ、漸く妙惠を納得させて謝啓の許へ送る。謝啓は別莊で婚禮の式を擧げたが、妙惠は既に覺悟を決め、若しいよ〳〵身を汚される事があれば、その場で死ぬつもりでゐたところ、祝言の夜、謝啓は泥醉して妙惠に近づかず、そのため妙惠は虎口を遁れたが、翌日謝啓が義理の母芥氏に、妙惠を初對面の引合せをした時、妙惠は芥氏の袖に縋り、衷情を訴へて貞操を守ることを願つた。芥氏は一時當惑したが、事を急にすれば大事に至るを恐れ、且つその心情を愍み、謝啓を慰撫して枕席を共にせしめず、姑く妙惠を我が腰元に使ふ事にし、本宅へ歸る時も、芥氏が連れて謝啓とは別船に乘せた。芥氏は歸途金山の勝景を見る。その時妙惠は方丈にあつた硯を取り、思ひのたけを一詩に賦し、揚州擧人盧夢仙妻妙惠と


(「樂屋圖會拾遺」に據る)

壁間に記して立ち去つた。然るに夢仙は三年の後及第して進士に擧げられ、意氣揚々歸省して見ると、以前に變る父母の困窮、且つ妻が他に嫁した事等を聞いて失望し、畢竟音信を絶つた我が過ちと悔めども、快々として樂しまず、妙惠を尋ねんとて江西に赴き、ふと金山に登つて妙惠の詩を發見し、その所在を知り、家人を酒賣にやつして謝啓の本邸に近づくなど、その間種々曲折があつて、夫婦は遂に再會した。なほ盧夢仙は學才の優れたるより、閻王に召される事等がある。

【解說】本作が支那小說の飜譯であることはいふまでもない。支那小說はこれ迄も種々飜譯されてゐるが、多くは怪異小說の短篇ものか「通俗三國志」(別項)の類であつた。岡島冠山の「通俗忠義水滸傳」が出版され、支那小說の感興に浸るものの多くなつた寶曆頃になつて、種々新奇の小說が紹介された。近路行者の「英草紙」(別項)もその一である。その外にも「通俗醉菩提」六册(碧玉江散人、寶曆九年)、「通俗隋煬帝外史」十册(烟水散人、同十年)、「赤繩奇緣」一册(風流快史、同十一年)、「通俗金翹傳」七册(同十三年)の如き譯が出で、なほ「醫王者婆傳」も同年間に飜譯された。「隋煬帝外史」や「者婆傳」の如きエロチックなものや、「赤繩奇緣」や「金翹傳」の如き人情本に類するものが刊行されて、飜譯小說の性質が一變して、今までの武俠傳や奇談異聞の外に、更に一生面を開いたことは注目に値すべく、而してこの「人間一生三世相」も亦、その新小說の一である。大體は「金翹傳」に似た人情小說であるが、規模は狹く、且つ惡漢などを使はず、又遊里を背景とせず、家庭的に終始した一小篇ではあるが、進士科擧を夢みて疲憊した不遇秀才の空想談は、當時に於ては、いかにも新しい題材であつた。

【水谷】

人間一生善惡道中記（にんげんいっしょうぜんあくだうちゅうき）「善惡道中記」を見よ。

人間萬事虛誕計（にんげんばんじうそばつかり）滑稽本　前編一册・後編上下二册　【作者】前編は式亭三馬。後編は瀧亭鯉丈　【名稱】人間の言動の善惡・表裏・虛實あることを暴露したものであるからの命名である。【成立】初編は文化十一年、挿畫は歌川國直。後編は天保四年、三馬の歿後、初編刊行より二十年後、挿畫は香蝶樓國貞。【諸本】式亭三馬傑作集(帝國文庫)・滑稽本集(日本名著全集)・滑稽文學全集第四所收。【題材】日常茶飯事によつて、民衆生活の輕薄虛僞を暴露したものである。

【梗概】〔初編〕(愛想のよき虛)客の應對に愛想よく、子供の成長や、年の若く見えることや、さては夕食を食べて行けとか、提灯を持つて行けとかなどと、客の氣を外らさせない主婦のもてなしぶりを書き、次にその眞實の心の中を暴露して、客が夕食を遠慮したことの喜びなどを書き、一方には夕食の馳走を遠慮し、提灯を借りて來なかつた客の後悔を書いてある。(空辭宜の虛)茶も酒も遠慮して客は歸る。次に客が心の中でつまらぬ遠慮をしたことを後悔する。(雅人の虛)雅人を氣取る利いた風の二人連が、向島に雪見に出掛け、美言麗辭でその絶景を賞し、かうした日に家に閉籠つてゐる輩を俗人だと言ひながら徘徊する。家に歸つて二人共に風流の眞似をしたことを後悔し、熱燗湯豆腐に鰹汁の方が餘程よいといふ。(昔自慢の虛)昔自慢の男が、山王祭に麴町から出た象なども、今時のものは比べものにならぬ。鼻の長さが五丁半で胴中が一里半もあつたとか、昔の角力は大きくて頭は雲の中に隱れてゐたなどと實しやかにいふ。併しその實は今時の者には、今ほど開けた世はないと今をほめる。(姑婆の虛)離緣をした嫁の惡口を散々言ひ散らし、殘された孫を厄介視したりして、もう自分も六十七だから涉婆に用はないなどと悟つたことを話す。併し後で自分の眼も霞んで來たが、八十八の賀ぐらゐまでは生きたい、三馬製の龍樹散で目を洗はうといふ。(女嫌ひの虛)女ぐらゐ世の中に恐いものはない。古今の賢人名將も女故に失敗する。だから自分は辨慶流に女を近づけないと說く。併しその眞實は、女なくては生活は出來ない。世の中に辨慶程の大たはけ者はないと言ふ。〔後編〕(稽古所の虛言)師匠が弟子をほめて聲は張らないが、その喉は立派なものだと盛んにおだてる。弟子が戻つた後では、散々にその惡口をいふ。(奉公人請人の虛)自分の周旋した奉公人の失敗のため、主人にぺこ〳〵詫びる。そしてその後で、この主人は、沒義道な人情知らずだと惡口をいふ。(喧嘩のうそ)喧嘩の仲人をした男が、双方の宅へ行き、何れも先方を惡くいつて圓滿に納める。(水茶屋のうそ)茶屋女が客に世辭を言つて客を引止める。後で、あんな客嬉な客は、早く歸つてくれて嬉しいと惡口をいふ。(浮氣妾の虛)旦那をば色男扱ひにして、役者などを散々にけなす。その實は役者買ひがしたいと心に思ふ。(利風流のうそ)雪見に行つて來た利いた風の男が、その美景を誇り、なほ友を誘はうと訪ねる。實は雪見の寒さについて後悔する。(町藝者のうそ)藝自慢の客の對手になつた藝者が、客に世辭をいひ、三味線を貸して歌はせる。併し藝自慢の客は難儀なものだといふ。

【解說】本書は、文化七年板の「早替胸の機關」(別項)、文化十二三年頃の「人心覗機關」(別項)との中間、文化十一年に出版されたのである。他の二書と二面觀察の點に特徵を持つ作である。卽ち善と惡、表と裏、或は虛と實との對照によつて、人間の生活・性格・言動の兩面を書いたのであるが、本書は虛と實との二方面を見ようとしたのである。そして虛誕が職業的方面から來るものと性格的方面から來るものとを一緒に取扱つてゐる。鯉丈の書いた後編を見ると、その手腕が到底三馬に匹敵し難いものであることを示してゐる。

【小柴】

人間美（にんげんび）藝術論　【獨】Schönheit des Menschen　【解說】人間獨自の身體並に生活の美。シャスラー(Schasler)は、人間美を以て自然美と精神的なるものが統一された美であるとする。この人間美の要素は、シャスラーによれば、自然的方面と文化史的方面とに分たれる。前者は性別・種屬・氣候によつて異なり、動物よりも輕快な運動の自由をもつ。後者は個人的に見れば、性別・幼老によつて異なり、民族史的に見れば、東方主義・ギリシャ主義・クリスト敎主義の文化により、その美を異にするといふ。

【渡邊】

人稱（にんしょう）文法　【英】Person　【獨】die

Person　【佛】la personne　【解說】文法範疇（別項）の一つ。通例(一)談話の話し手自己を指すこと(第一人稱又は自稱)、(二)話し手が聽手として目指す對手を指すこと(第二人稱又は對稱)、(三)それ以外の事物を指すこと(第三人稱又は他稱)の三類を包括し、この三樣の指し方が固有意義(Usuelle Bedeutung)として含まれる語を集め、一つの文法範疇とする。通例人代名詞と稱するものはこれである。日本文法にいふ指示代名詞の「近稱」(それ)「遠稱」(あれ)は、第三人稱中の細分である。名詞には人稱の區別が固有意義として含まれてゐない。若し人稱を概念範疇(「文法範疇」參照)の名稱とし、實地特殊の場合に用ひられた言語活動の「臨時意義」(Okkasionelle Bedeutung)を代に最も普遍的なものである。人情本の名稱は、爲永春水が天保八年に人情本一流の元祖と唱道したのが最初である。中形繪入讀本の名稱は、松亭金水作「松の花」第五編序に「凡是等の小說は中形繪入讀本といふ。然るに近來何れの人か人情本と唱へ出し云々」と見えてゐる外、散見しない。その外粹書と稱する名稱も廣告中に散見するが、それは洒落本にも用ひられ、戀愛に關する作品の總稱と見るべきであらう。【本質】人情本の本質は、江戶町人男女の戀愛生活の描寫に存する。主人公に武士を以てしてゐる者も尠くないが、これは異例であり、而も多くは江戶町人化せる武士に過ぎない。女主人公も武家出身は尠くないが、皆一度遊女・藝者等となつて町人化せる女

一筆庵主人(滯齋英泉)等にもこの種の作品があるが、二三種に過ぎない。これを人情本の初期とする。天保元年に至り、曲山人(別項)が突如として現はれ、「假名文章娘節用」(天保元年)、「娘消息」(天保五年)(各別項)等の代表作を遺して逝き、二世楚滿人は、文政末年爲永春水と改名し、天保元年には別に狂訓亭主人と號し、その代表作「春色辰巳園」(天保四年)、「春色惠之花」(天保七年)(各別項)等を出すに及んで、彼の文壇的地位が確立すると共に、彼の作品は大衆に歡迎さるゝこと非常なものであつた。天保八年には江戶人情本一流の祖と號し、「春告鳥」(天保八年)、「春色雛之梅」(天保九年)、「梅の春」(同上)、「春色梅美婦禰」(天保十二年)(各別項)等を發表し、人情本の大家を以て目せらるゝに至つ

天保十三年六月、老中水野越前守に依つて風紀肅正の令が出で、人情本は版木を沒收の上燒却させられて、一時その發表を見ないやうになつた。併しその勢力のあつたのは暫くの間で、翌十四年には越前守は職を免ぜられ、文藝に關する取締も弛み、嘉永頃から人情本の發表を見るに至つた。松亭金水なほ健在で、「黃鳥塚千代初聲」(安政三年)、「琵琶三人娘」(安政年間)等を發表し、その門下に梅亭金鵞あり、代表作には「夜三廼月柳の横櫛」「春宵風見草」(共に刊年未詳)(各別項)等あり、二世梅暮里谷峨に「春色連理の梅」(嘉永五年)(別項)、平亭銀雞に「蔦蔓戀之花菱」(萬延元年)(別項)、松園梅彥に「艷色俱良倍」(安政四年)、朧月亭有人(條野採菊)に「春色戀廼染分解」(萬延元年)、「春色江戶紫」(元治元年)、「花曆封文」(慶應二年)(各別項)等

Person 〔佛〕 la personne 【解說】 文法範疇（別項）の一つ。通例(一)談話の話し手自己を指すこと（第一人稱又は自稱）、(二)話し手が聽手として目指す對手を指すこと（第二人稱又は對稱）、(三)それ以外の事物を指すこと（第三人稱又は他稱）の三類を包括し、この三樣の指し方が固有意義(Usuelle Bedeutung)として含まれる語を集め、一つの文法範疇とする。通例人代名詞と稱するものはこれである。日本文法にいふ指示代名詞の「近稱」(それ)「遠稱」(あれ)は、第三人稱中の細分である。名詞には人稱の區別が固有意義として含まれてゐない。若し人稱を概念範疇（「文法範疇」參照）の名稱とし、實地特殊の場合に用ひられた言語活動の「臨時意義」(Okkasionelle Bedeutung)を考へる時は、名詞と雖も種々の人稱に用ひられる。例へば太郎が自己を指して、「太郎は存じません」と言つた時、太郎は第一人稱、父が太郎に向ひ、「太郎は知つてゐるか」と言つた時、太郎は第二人稱として用ひられたのである。これと同じく、英語の手紙等に於て"Mr. and Mrs. A present their compliments..."などといふ時 they, their, them は第一人稱として用ひられたものである。〔神保〕

人情本（にんじやうぼん） 【名稱】 江戸時代後期、文政・天保年間に盛大となり、慶應年間迄續いた一種の小說の名稱。人情本の語意は人情世態を描寫した本と云ふ意。或は中本・中形繪入讀本（よみほん）とも稱する。中本は美濃判四分一の大きさの本を云ふ。人情本の外形が必ずこの大きさであつたからかく稱する。中形繪入讀本は、中形本繪入の讀本（別項）の義。中本は洒落本を小本（こほん）と稱するに對せる名稱であること明かで、人情本の名稱として最も古く、又その時代に最も普遍的なものである。人情本の名稱は、爲永春水が天保八年に人情本一流の元祖と唱道したのが最初である。中形繪入讀本の名稱は、松亭金水作「松の花」第五編序に「凡是等の小說は中形繪入讀本といふ。然るに近來何れの人か人情本と唱へ出し云々」と見えてゐる外、散見しない。その外粹書と稱する名稱も廣告中に散見するが、それは洒落本にも用ひられ、戀愛に關する作品の總稱と見るべきであらう。【本質】 人情本の本質は、江戸町人男女の戀愛生活の描寫に存する。主人公に武士を以てしてゐる者も尠くないが、これは異例であり、而も多くは江戸町人化せる武士に過ぎない。女主人公も武家出身は尠くないが、皆一度遊女・藝者等となつて町人化せる女性が多い。篇中の男女は要するに當時町人の理想的男女とせるものを描いたのであり、その兩性間の戀の葛藤を寫したものである。典型的の作品は一男に對する數女の戀の鬪爭を描き、結局はその妻妾となつて睦じく同棲すると云ふ一夫多妻の精神の表現に外ならぬ。【沿革】 人情本は洒落本（別項）の展開したものである。洒落本から人情本への推移に劃然たる時期の區別はなし難い。洒落本の「妓者呼子鳥」「契情買虎之卷」「角雞卵」「娼妓絹麗」「傾城買二筋道」（各別項）等には、人情本の萌芽たるべき要素を多量に含んでゐる。かくて合卷（別項）等と同じやうな本の體裁で、それより二季種（ふたきぐさ）（刊年未詳）（各別項）等があり、又春水門人の爲永春雅には、「春色雪の梅」（天保十年）（別項）、爲永春友には「春宵月の梅」（天保十一年）、爲永春鶯には「春宵月の梅」（天保十一年）等の作品がある。これを人情本の全盛期とする。然るに天保十三年六月、老中水野越前守に依つて風紀肅正の令が出で、人情本は版木を沒收の上燒却させられて、一時その發表を見ないやうになつた。併しその勢力のあつたのは暫くの間で、翌十四年には越前守は職を免ぜられ、文藝に關する取締も弛み、嘉永頃から人情本の發表を見るに至つた。松亭金水なほ健在で、「黃鳥塚千代初聲」（安政三年）、「琴唄三人娘」（安政年間）等を發表し、その門下に梅亭金鵞あり、代表作には「夜三廼月柳の横櫛」「春宵風見草」（共に刊年未詳）（各別項）等あり、二世梅暮里谷峨に「春色連理の梅」（嘉永五年）（別項）、平亭銀雞に「蔦葛戀之花菱」（萬延元年）（別項）、松園梅彥に「艷色俱良倍」（安政四年）、朧月亭有人（篠野採菊）に「春色戀廼染分解」（萬延元年）、「春色江戸紫」（元治元年）、「花曆封文」（慶應二年）（各別項）等がある。これを人情本の末期とする。かくて明治時代の戀愛小說（別項）とその系統が續いてゐる。

【內容の展開】 洒落本は遊里を背景とし、主として遊女と客との間の戀愛合戰、遊里の情調を描かうとし、作者の通人的趣味が穿ちによつて發表されてゐるものである。隨つて描寫の時間の短い、或る光景・氣分だけの描寫を要とした短篇である。故に遊女及び客の前半生や將來の戀の展開等は描いてない。事件の進展・脚色に乏しい。この缺陷と、背景となる遊里の題材が行詰り、而も洒落本發行の禁止が、寬政二年十月當局から發表されたので、勢ひ洒落本は、他の方面へ展開せざるを得ない時機に到達した。それが人情本となつて現はれた。人情本初期の傾向は最もよくこの要求を明示してゐる。卽ち初期の人情本は、洒落本の花柳情調を多量に含み、一面に人情本的事

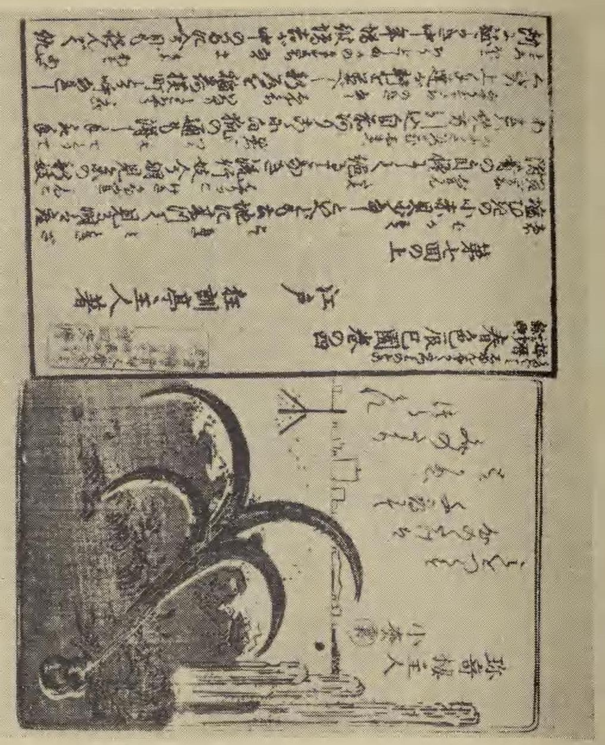
れて、飜譯小說の性質が一變して、今までの武俠傳や奇談異聞の外に、更に一生面を開いたことは注目に値すべく、而してこの「人間一生三世相」も亦、その新小說の一である。大體は「金翹傳」に似た人情小說であるが、規模は狹く、且つ惡漢などを使はず、又遊里を背景とせず、家庭的に終始した一小篇ではあるが、進士科擧を夢みて疲憊した不遇秀才の空

利いた風の二人連が、向島に雪見に出掛け、美言麗辭でその絶景を賞し、かうした日に家に閉籠つてゐる輩を俗人だと言ひながら徘徊する。家に歸つて二人共に風流の眞似をしたことを後悔し、熱燗湯豆腐に鰹汁の方が餘程よいといふ。（昔自慢の虛）昔自慢の男が、山王祭に麹町から出た象なども、今時のものは比べものにならぬ。鼻の長さが五丁半で關中

隣の閨者をほめる媚女が、實は男が戀ひしく、隣の閨者よりは自分の容貌がよい筈だ。男を持つなら隣の隱居よりも若いのがほしいとつぶやく。（取扱人のうそ）喧嘩の仲人をした男が、双方の宅へ行き、何れも先方を惡くいつて圓滿に納める。（水茶屋のうそ）茶屋女が客に世辭を言つて客を引止める。後で、あんな客嗇な客は、早く歸つてくれて嬉しいと惡口

スラーによれば、自然的方面と文化史的方面とに分たれる。前者は性別・種屬・氣候によつて異なり、動物よりも輕快な運動の自由をもつ。後者は個人的に見れば、性別・幼老によつて異なり、民族史的に見れば、東方主義・ギリシヤ主義・クリスト敎主義の文化により、その美を異にするといふ。〔渡邊〕

人稱（にんしよう） 文法 〔英〕 person 〔獨〕 die



件の描寫に最も力が注がれてゐる。而して客や遊女の素性を説明するのを忘れない。その典型的實例には、鼻山人の「風俗粋好傳」(別項)(文政八年)を擧げる事が出來る。卽ち本篇は近江屋花咲と云ふ遊女が、如何にして遊里に身を沈めるに至つたか、その前半生を長々と説明し、更に情人綱五郎と如何にして同棲し得るに至つたかを説いてゐる。言はば洒落本に出てゐる一場面の前後を綴り合せた體裁となつてゐる。「明烏後の正夢」(別項)も洒落本ではないが、新内淨瑠璃で一場面しか題材にしてないのを、更にその後日譚を綴つてある。これを概括的に言へば、初期の人情本は合卷風の物語に、洒落本的性質を加味したものと稱し得る。洒落本は氣分を描き、人情本は事件を寫すとも言へる。前述の「明烏後の正夢」にした所で、千葉家のお家騒動に浦里時次郎が結び付いてゐるし、「所縁の藤波」(別項)は鎌倉の藤浪屋丹六のお家騒動に情話が添加されてゐるのだ。「梛の二葉」(文政六年)は、井筒屋糸三郎と情人お此が兄妹と誤解し、情死せんとする筋で、南北の演劇・合卷などに珍しからぬ脚色である。「廓雜談」(別項)(文政九年)は、數多屋逸麿の本妻お梨花と妾花里の嫉妬爭ひで、お梨花の亡靈が花里とその子を殺すと云ふ合卷風の怪談である。「三日月阿專」(文政八年)の主人公重藏、實は清見判官義景の落胤、お專實は末廣要之亮春風の落胤と云つた如き趣向である。然るに爲永春水の「春色梅兒譽美」(別項)が發表さるゝに至り、卽ち全盛期の人情本が續出するに及び、人情本の典型が形づくられた。勿論多少の合卷風な臭味が殘存したとはいへ、町人の若旦那・若息子が主人公で、同じく娘が女主人公、それは唄女となり、遊女となり、女太夫となつたとしても、町人の女性たるを失はぬものである。その兩性間の葛藤を描き、何等傳奇的な説話、悲慘深酷な場面も見出せぬ町人生活の描寫となつてしまつた。普通、人情本の概念としては、この全盛期の人情本の内容がそれだと認められてゐるが、その見方は正しい。人情本が作品として特徴を有つてゐるのはこの時代のものである。末期の人情本に至つては、「春色連理の梅」「夜三廼月柳の横櫛」等の全盛期の人情本の系統をひいた二三の例外はあるが、その他は再び初期の人情本と同じ傾向を帶び、更に合卷臭味の甚だしいものである。例へば、「黄鳥塚千代初聲」(安政三年)は、讀本「長柄長者黄鳥塚」(文化八年)(別項)から脫化した佐々木源之助の敵討物語であるし、「毬唄三人娘」(安政年間)は、三人娘が敵山住伴吉を討つ復讐談、殺人が三件も現はれる。この時代の人情本に至つては事件の説明のみあつて、生活は殆ど描かれない有樣で、合卷と異なる所は、對話が寫實である點位である。全く人情本としての特徴が失はれてしまつてゐる。

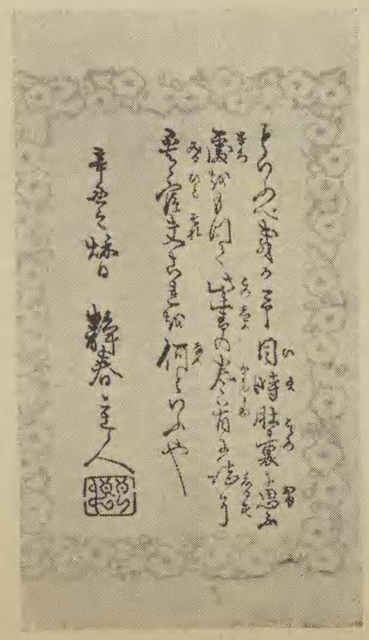
【特徴】人情本の特徴として、他の種類の文藝に見られない特殊の所は、次の六點に存する。(一)江戸町人男女の戀愛を比較的精細に描寫してある事。それがたとひ概念的な形式化されたものであるにせよ、洒落本の如き鋭利な觀察はないにせよ、當時の作家としては全力を注いで描いてあるのである。(二)實在の人物を點出して架空の人物に實在感を起させる手法を用ひてある事。これは既に、黄表紙・洒落本・滑稽本にも共通であるが、特に作者の愛着の心深く力を籠めて描かれてゐるのが人情本である。その土地は、主として下町情調の豐かな、日本橋・下谷・淺草を中心とし、吉原・深川の遊里所在地、その他では向島・小梅・柳島等、當時の郊外、閑靜な寮の所在地、生活敗殘者の隱れ住む所などである。所謂情景竝び備はると云ふ感じを讀者に與へてゐる。(四)作中に俗曲が巧みに點綴されてゐる事。これは洒落本にも見えてゐるが、特に人情本に多い手法であつて、主人公或は女主人公、或は兩者の情痴纏綿たる時、義理と人情に責められて思ひ惱む時、隣室・隣家から聞ゆる凄婉な歌曲に、感傷的な心持が更に極點に達するといふ手法で、言ふまでもなく歌舞伎劇からの影響である。人情本に盛んに採用してあるのは、本質的の目的の外、當時江戸町人の常識たる遊藝を點綴して、その哀音をも聯想せしめ、效果的ならしめたのと、新たに流行し始めた俗曲を紹介する意味をも含ませたのである。(五)町人の日常生活が比較的多量に描寫されてゐる事。人情本中戀愛描寫と錯綜したり、或は全くこれと離れたりして寫生に近い實在感に富んだ江戸町人男女の日常生活の描寫がある。平淡な喜劇でも悲劇でもない生活を描くのも、文藝の一題材たり得ると同時に、江戸文藝中、かゝる點に力の最も注がれてゐるのは人情本である。洒落本や滑稽本にも見出し得ぬ一特徴であると共に、人情本をして價値あらしめる最も重大な要素と考へられる。(六)人情本描寫の手法が最も小説として進歩せる事。これは内容でなく、行文の綴り方を意味するのである。國文學從來の作品は、對話と地の文との劃然たる區別に乏しく、浮世草子の或る種の作品より洒落本に至つて、對話と地の文とを明確に區別するに至つたが、なほ地の文を細字で二行に書き、對話を主とし、地の文を從とする傾向があつた。滑稽本も亦同樣である。然るに人情本に至つて地の文を細字に書く風が漸く廢され、對話、地の文、兩者同等に對立するに至つた。現今の創作と全く同樣の形式を用ひてゐる。この點に於て人情本は最も進歩せる描寫の形式を用ひた小説と見做し得るのである。【影響】明治の初年にはなほ幕末の人情本作家、梅亭金鵞・條野採菊(山々亭有人)・四方梅彦(松園梅彦)・染崎房信(二世春水)(各別項)等が生存してその作品を發表し、一面に於て坪内逍遙が小説神髄(別項)(明治十八年)を發表して摸寫小説・人情小説を擧げ、自作「當世書生氣質」(別項)を發表したが、その手法は未だ全く人情本の域を脫してゐない。尾崎紅葉を主盟とする硯友社(別項)一派の所謂寫實小説も、筆致を西鶴に借りた作品以外は、人情本を明治化せるだけで、その手法・態度、人情本と餘り距離のあるものではなかつた。實に人情本はそれ自身に價値があるよりも、明治の新文學の母胎としての方に、より價値を認められるのである。

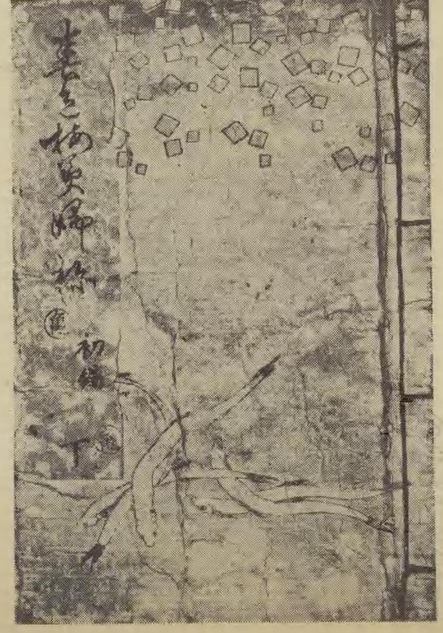
【參考】近代小説史藤岡作太郎 ○人情本の本質山崎麓、國語と國文學昭和二ノ四)○人情本の世界同上(日本文學聯講、第三期近世下)(山崎)

仁和樂(にんならく) 雅樂舞曲【名義】仁和年間の作曲なるによる。【性質】右方樂。新樂、中曲。高麗壹越調曲に屬する。舞があり六人

春色辰巳園（見返・初頁）

春色梅児誉美（口繪）





春色梅美婦禰（表紙・序文）

春色辰巳園（口繪）

又は四人で舞ふ。舞人は常裝束を用ひる。番舞は「承和樂」。【沿革】光孝天皇の仁和年中に、貞雄（一說に眞雄とある）といふものが、勅を奉じてこれを作り、年號を以て曲名としたといふ。白石の「樂考」には、貞雄は百濟貞雄であると言つてゐる。【田邊】

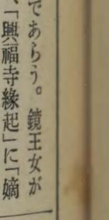
人肉質入裁判（にんにくしちいれさいばん）　「人肉質入裁判」を見よ。

任筆錄（にんぴつろく）　隨筆　一卷　寫　【著者】室直清（鳩巢）【解說】國史類を讀んで數節を抄錄したもので、「醍醐隨筆」からの抄出五節、「九州記」からの二節、「吾妻鏡」からの三節、「古今集」からの和歌數十首を收めてゐる。正德三年の自序がある。【和田】

仁明天皇物語（にんめいてんわうのものがたり）　「青葉の笛物語」を見よ。

この王女を賜はつたものであらう。鏡王女が鎌足の妻であつたことは、「興福寺緣起」に「嫡室鏡王女」と明記してあるので明かである。

【閱歷】「萬葉集」の作品及び「日本書紀」天武紀に、「天皇初娶二鏡王一女額田王一、生二十市皇女一」とある短い記事が、額田王を知る唯一の資料である。卽ち初め天武帝（大海人皇子）に召されたが、「萬葉集」によれば、天智帝にも召されたのである。「萬葉集」卷一に、大海人皇子が額田王を指して「人妻故に我戀ひめやも」と詠まれ、額田王の作「君待つと我が戀ひ居れば吾がやどの簾動かし秋の風吹く」（卷四）の題詞に卷四の編纂者が、「額田王、思二近江天皇一（註、天智帝）作歌一首」と



吉野行幸に從つた弓削皇子から歌を贈られ、それに答へた額田王の歌が卷二にあるので分る。【人物】二帝の爭から推察して容貌の麗しかつた事は想像される。その歌に强い熱情の現はれてゐる事は、感情の强い女性だつた事を想はせるものがある。【作品】凡て「萬葉集」に出づ。卷一雜部に長歌二首・短歌五首。卷二相聞部に長歌一首・短歌三首、卷四相聞部に短歌一首、卷八秋相聞に短歌一首。このうち、卷四と卷八の歌は同一歌だから一方を削るべきである。卽ち計長歌三首、短歌九首。【作風】三首の長歌のある事を先づ注意すべきである。當時の女流歌人で長歌を殘してゐるものの中、坂上郎女（別項）の六首、額田王はこれに次ぐ。何れも歌道練達の人である。次に技巧の巧みさが目に附く。著名な春秋の優劣を判ずる長歌（卷一）は、全篇對句の連續から

れない特色である。三輪山の詠、熟田津の作、籠動かしの歌、皆どこか悠々迫らぬ風があつて、且つ前二者の如き規模が雄大複雜で到底女流の作と思へない。これは性格と高貴な生活が生んだ自然の結果であらうが、何れにしても代表的な女流歌人である。【森本】

額田六福（ぬかだろくふく）　劇作家　【本名】筆名に同じ。【閱歷】明治二十三年十月二十三日、美作國の小村に生れた。年少の頃病弱のため苦しむことが久しかつた。二十二歳の時に處女作「踉繪」を執筆し、その翌年の十二月、岡本綺堂に入門師事した。大正五年以來は健康に復し、同九月早稻田大學英文學科に入學した。同年末、出世作「出陣」を執筆、翌年正月歌舞伎座に上演。爾來劇作家として立つた。大正九年九月、早稻田大學を卒業した。主なる劇作には、「眞如」「冬木心中」「天一坊」「山本

又は四人で舞ふ。舞人は常裝束を用ひる。番舞は「承和樂」。【沿革】光孝天皇の仁和年中に、貞雄（一說に眞雄とある）といふものが、勅を奉じてこれを作り、年號を以て曲名としたといふ。白石の「樂考」には、貞雄は百濟貞雄であると言つてゐる。〔田邊〕

人肉質入裁判（にんにくしちいれさいはん）「人肉質入裁判」を見よ。

任筆錄（にんぴつろく）隨筆　一卷　寫　【著者】室直淸（鳩巢）【解說】國史類を讀んで數節を抄錄したもので、「醍醐隨筆」からの抄出五節、「九州記」からの二節、「吾妻鏡」からの三節、「古今集」からの和歌數十首を收めてゐる。正德三年の自序がある。〔和田〕

仁明天皇物語（にんめいてんわうまのがたり）「青葉の笛物語」を見よ。

ぬ

鶴（ぬ）「源氏物の謠曲」を見よ。

額田王（ぬかたのおほきみ）歌人【稱呼】大和國平群郡額田にゐたからであらう（日本書紀・和名抄）。女性であるのに「額田女王」と記さない理由に就いては不明である。【家系】鏡王（傳未詳）の女。「萬葉集」卷二・四・八に作品（五首）の見える鏡王女もやはり鏡王の女で、共に近江國野洲郡鏡の里に住んだので「鏡」の名を蒙つたもので、額田王は鏡王女の妹であるとする宣長の說がほぼ通說になつてゐる。なほ鏡王女の「萬葉集」の作品中、卷二の二首は天智帝と藤原鎌足とに對する贈答の戀歌で、これは眞淵說の如く、初め天智帝に召され、後鎌足にこの王女を賜はつたものであらう。鏡王女が鎌足の妻であつたことは、「興福寺緣起」に「嫡室鏡王女」と明記してあるので明かである。

鏡王
- 鏡王女
- 額田王
- 三十八代 天智帝（中大兄皇子）
- 四十代 天武帝（大海人皇子）
- 十市皇女

【閱歷】「萬葉集」の作品及び「日本書紀」天武紀に、「天皇初娶二鏡王一女額田王一、生二十市皇女一」とある短い記事が、額田王を知る唯一の資料である。即ち初め天武帝（大海人皇子）に召されたが、「萬葉集」によれば、天智帝にも召されたのである。「萬葉集」卷一に、大海人皇子が額田王を指して「人妻故に我戀ひめやも」と詠まれ、額田王の作「君待つと我が戀ひ居れば吾がやどの簾動かし秋の風吹く」（卷四）の題詞に卷四の編纂者が、「額田王、思二近江天皇一（註、天智帝）作歌一首」と明記してゐる事等によつて知れる。この御兄弟の何れに早く召されたかに就いては、宣長の天智帝を先とする說より、中山嚴水（「萬葉集古義」所載）の天武帝が先で、「日本書紀」に「初娶」とあるのは、天武帝のまだ若かつた時の事を指すので、その時十市皇女が生れたとする說の方が當つてゐる。如何なる事情でこの兩帝に召される事になつたかは詳かでないが、既に言はれてゐる如く、恐らくは天智帝が天皇の位置と兄たる權威とを以て無理に召されたものであらう。これが壬申の亂の原因になつたとする說と否とする說とあつて確かでない。ただ兩帝の御仲の一層不和になつた事は疑がない。天智帝崩御後、天武帝に再び召されたと一般に解せられてゐる。が、これには確證はない。長命であつたらしく、天武の次なる持統帝の御代まで生存した。それは帝の吉野行幸に從つた弓削皇子から歌を贈られ、それに答へた額田王の歌が卷二にあるので分る。【人物】二帝の爭から推察して容貌の麗しかつた事は想像される。その歌に强い熱情の現はれてゐる事は、感情の强い女性だつた事を想はせるものがある。【作品】凡て「萬葉集」に出づ。卷一雜部に長歌二首・短歌五首。卷二相聞部に長歌一首・短歌三首、卷四相聞部に短歌一首、卷八秋相聞に短歌一首。このうち、卷四と卷八の歌は同一歌だから一方を削るべきである。即ち計長歌三首、短歌九首。【作風】三首の長歌のある事を先づ注意すべきである。當時の女流歌人で長歌を殘してゐるものの中、坂上郎女（別項）の六首、額田王はこれに次ぐ。何れも歌道練達の人である。次に技巧の巧みさが目に附く。著名な春秋の優劣を判ずる長歌（卷一）は、全篇對句の連續から成り、作者の技巧を遺憾なく現はしてゐる。前に說いた吉野從駕中の弓削皇子に贈つた二首の短歌の如きも相似た傾向のもので、共に技巧が目に立つて一首の內容を寧ろ殺してゐる位である。それが「熟田津（にぎたづ）に船乘せむと」や「あかねさす紫野行き」になると、技巧と情感とよく釣合ひ、よく援け合つて見事な效果を收めてゐる。更に、三輪山の長歌・反歌になると、熱情が技巧を壓倒してゐて心の叫びをぢかに聞く心地がする。だから額田王の作は、從來一律に鑑賞されて來たけれど、技巧と云ふ事を中心に三種に別けられる。技巧の勝つた歌、技巧の表面から隱れてゐる歌、技巧のなくなつた歌。この三種の何れが勝れてゐるかは、見る人によつて判斷が違ふであらう。又歌風が女性に似ず雄渾とも云ふべき趣を含んでゐる事は、我が國古今の女流歌人に見られない特色である。三輪山の詠、熟田津の作、簾動かしの歌、皆どこか悠々迫らぬ風があつて、且つ前二者の如き規模が雄大複雜で到底女流の作と思へない。これは性格と高貴な生活が生んだ自然の結果であらうが、何れにしても代表的な女流歌人である。〔森本〕

額田六福（ぬかだろつぷく）劇作家【本名】筆名に同じ。【閱歷】明治二十三年十月二十三日、美作國の小村に生れた。年少の頃病弱のため苦しむことが久しかつた。二十二歲の時に處女作「踏繪」を執筆し、その翌年の十二月、岡本綺堂に入門師事した。大正五年以來は健康に復し、同九月早稻田大學英文學科に入學した。同年末、出世作「出陣」を執筆、翌年正月歌舞伎座に上演。爾來劇作家として立つた。大正九年九月、早稻田大學を卒業した。主なる劇作には、「眞如」「冬木心中」「天一坊」「山本勘助」等がある。【作風】彼の作劇術の手法は、飽くまで舞臺技巧の一點一畫をおろそかにしない老練さを持つてゐる。新歌舞伎劇乃至は歷史劇の作をもつて世に現はれてゐるが、社會劇風の現代劇にも二三の作がある。〔武藤〕

野雁集（ぬかりしふ）歌集　一卷　【作者】安藤野雁【成立】元治元年【諸本】明治名家家集上卷（續日本歌學全書）・近代諸家集第五卷（國歌大系）所收。【解說】初めに雜歌・相聞・挽歌の三部に分ち、萬葉假字にて記せる長歌及び反歌が十六首あり、次に四季・戀・離別・羇旅・賀・哀傷・雜に分つて百八十四首を載せ、「古へぶり今ぶりすべて二百首なり」と記して、元治元年五月二十三日の日附がある。初めの古風の歌は全く萬葉調であるが、而も獨特の味があり、今ぶりの歌に至つては飄逸輕妙、時と

して抜穴の觀想は穴に關する他の諸觀想と容易に結合して、この説話型を多様にする。第一に抜穴傳説は、屢々穴の主の傳説と結びついてゐる。出雲國鰐淵寺の瀧壺が川下浦に抜けて居り、而してそこには鰐が主として潜んでゐたが、後に智春上人に濟度せられたといふ如きは、這般の結合型である。また渦巻傳説と握手し、更に渦巻が人を捕るのは、水底の穴に潜む主の仕業であるとの信仰が楔子となつて、抜穴傳説・渦巻傳説・穴の主傳説の三者が混融して來る。下總國香取郡神崎附近の利根川の渦巻が犠牲をとるのは、河の底の穴そのもの、若しくは穴の主のなすところであると信ぜられた如きはこれである。【松村】

蛇蛻青大通　洒落本　一册

【作者】天竺老人（平賀源内）【名稱】ぬけがらあをだいつう【刊行】安永九年刊「風來六々部集」中に收めてある。單行本は天明二年版。【諸本】風來六々部集・風來山人傑作集（帝國文庫）・風來山人集（有朋堂文庫）・狂文俳文集（近世日本文學大系）所收。【題材】劈頭の語句は、紀貫之の「古今和歌集」序のもぢり、「殘口翁が小言に曰く」の引用文は增穗殘口の「艷道通鑑」（享保四年）中の一節、「文魚先生」とあるは、當時十八大通の隨一、江戸藏前の札差、大口屋文魚の事。

【梗概】近頃大通と云ふ詞が流行つてゐるが、その大通の末派木葉通に至つては、錢金遣ふを鈍漢と譏り、我慢自惚の鼻高く、遣ふだけの金も遣はず、まだ氣も知れぬ傾城に無心を言ひ、身揚りをさせる魂膽をする。女郎の方でもぬかりなく、巧みにはづせば、今度は〳〵と思ひ、罠にかゝる白癡が世に多い。これより金のとれぬ腹いせに、無理に責めて變を切らせ、墨彫ほらせて嬉しがり、誰にでも書く起請文を有難がつても、所詮錢にはならず。左程身錢が出したくなくば、女郎でもあいそを盡かすは知れた事である。又世間のせまい奴原が、傾城に誠なしと言ふが、女郎は惚れた惚れぬの臺詞にげつぷをしてゐるのだから、めつたに惚れぬも當然である。傾城を手に入れようと思へば、誠の一字を以てするがよい。誠が顯はれたら、どんな女郎でも手に入るべし。惡穴を言はず惡洒落をせず、見えをいはず啖をつかず、男氣を專らとして座敷の數を重ねる時は、求めずして通となるであらう。早く劫を經て青大通の殼をぬけ、浮世丸飲みの蝮蛇となり給へ。

【解説】先づ一流の皮肉を以て半可通人を罵倒し、轉じて大通となるべき心得を説いたのである。洒落本中異色あるものの一と見るべき作品である。安永六年頃大通が輩出し、それと共に半可通も續出したので、彼等を罵倒する作品が現はれた。鹽川春町の「無賴通説法」（安永八年）、田螺金魚の「十八大通百手枕」（安永七年）（別項）等これである。本篇もこの頃作られたものであらう。【山崎】

幣袋　俳諧紀行　一册

【著者】井上士朗・鷗巢都貢【刊行】安永三年【諸本】曉臺七部集所收【内容】安永三年四月名古屋の士朗・都貢の二人が京に上り、折しも京に在つた曉臺、曉臺に從遊せる陸奥の丈芝、有馬の湯治から京へ來た名古屋の宰馬等と會し、京の美角・定雅の兄弟、燕村・几董の師弟、大阪から來た大魯などと交誼を重ねて、その月の末に伊勢の大神宮へ詣でた紀行である。【賀川】

ぬなはの草紙　隨筆　三卷

【著者】多田義俊【成立・由來】寛保三年頃名古屋に旅行の節瘧疾を客舍に養つてゐる間に徒然を銷すために書いた由が自序に見える。【諸本】大田南畝の「三十輻」に收められたものを大正六年國書刊行會で刊行した。【解説】主として著者一流の見を以て神道諸流の評論を試みたものであるが、往々有職學等に關する考説を交へた一種の隨筆である。自家の經歴を述べたやうな所もある。上卷に深祕の事以下十二條、中卷に土金傳授はつくり物の事以下十四條、下卷に神軍流といふ事幷橘家の神軍の評論以下十五條を收めてゐる。度會延佳・喜早因幡・青木主計・山崎垂加・玉木正英・增穗殘口・淺利大賢・横山東榮・橘三喜・白井宗因・吉川惟足・松岡下總・壺井義知等の略評小傳を掲げてあるから、江戸期神道の沿革を知る便がある。所々に斯道の祕傳口訣類を排斥してゐるのは痛快を感ずるが、同時に著者が異端者を以て目せられた所以が判る。寛保三年の自序あり、多田兵部義寛と署してゐる。大田南畝が「三十輻」中に收めた寫本に天明・文化兩度の南畝跋語が附いてゐる。【和田】

布晒　所作事　【名稱】白布を河水に洗つて晒す。謂はゆる布晒の形態を舞踊化したもの。【沿革】所作としては古くから行はれ、既に志賀山家（志賀山流參照）の裏八番の中に「女夫ざらし」があり、その拍子として「布晒おそつき拍子」「布晒早つき拍子」等を擧げてゐる。また「舞曲扇林」の小舞十六番中にも「さらし」の名目が見え、元祿の「松の葉」（別項）の長歌四十六にも「晒」が載せられてをり、江戸の山村座所演の「傾城三鱗形」（元祿十四年正月）や「鬼城女山入」（同十五年七月）等の中にも「布晒」の所作が取入れられてゐる。併し後世の原據となつたものは享保十六年十一月、

江戸中村座の「和合一字太平記」第一番目に、江戸初下りの佐渡島長五郎が「邯鄲」といふ四季の所作事の夏の部に演じた「布晒」である。これは賤の女が一本齒の足駄を穿いて、兩手に白布を持つて晒す振であつた（役者春子滿）。この形式は、後年種々の所作事の一部に加へられて傳存されたが、勿論修正を經たものである。今日では一本齒の足駄、晒の振、地の三味線、鳴物等は大體の型が定まつてゐる。

【種目】今日傳存されてゐるものに、「今樣四季三番三」（後出）「遲櫻手爾葉七字」（通稱越後獅子。「越後獅子」參照）「閏妓娑八景」（通稱晒女。「晒女」參照）「月雪花歌再夕市」（後出）「後面萩玉川」（通稱傘仙人、又は後面。「後面」參照）等があり、他に應用されてゐるものもある。今日傳存され

村歌右衞門）とが、輕いクドキの後で晒になる。【參考】近世邦樂年表（長唄之部）○江戸近世舞踊史　九重左近　【秋葉】

ぬめり　流行歌　【名義】「滑り」「絖り」と云ふ字を宛てる。「ぬめる」とは、のらりくらりと遊蕩する意で、一般に遊里歌、嫖客の流行歌の類を稱したものらしく、特定の流行唄の名ではあるまい。「ぬめり節」「ぬめり歌」「ぬめり小歌」「ぬめり踊」とも云ふ。【解説】明曆・萬治頃に最も盛んに行はれ、元祿頃になつて衰へた。「吉原流行小歌惣まくり」に、「かはりぬめり歌」十四首を揭げてゐる。

君が來ぬにて枕な投げそ投げそ枕に科もなや
衣紋つくろひ通へども相見る事は程を經て逢ふは
優曇華嬉しやな

に用ひられる下座唄を、ぬめりと稱し、長唄の「天人羽衣」の「花の色香もよい姥櫻」の所などを使つてゐるといふ。【藤田】

濡衣草紙　讀本　五卷五册【作者】芍藥亭長根【畫工】蹄齋北馬【名稱】角書に「坂東奇聞」とある。名香濡衣に纏はる奇話が、關東を舞臺として展開する意である。【刊行】文化三年正月。

【梗概】文明の頃、青木が谷家杉氏の家老千代田左衞門の臣鳴門賴母には二兒があり、兄を寬一弟を退二といつた。賴母の歿後寬一は豪族豐島外衞の女雪兒を妻として家を繼ぎ、退二は家中鳩谷左右平の養子となり、義次郎と改名したが、養父の妾に子が生れたので、これに家を繼がせようと折しもこの家に仇をなす

考へ合せても、この言葉には賛し難いが、この作者としては力作の部であらう。【笹野】

ね

寧齋　漢詩人【姓名】野口弋、字は貫卿、通稱一太郎【別號】謫天情仙【生歿】明治三十八年五月十二日歿。享年三十八【閲歴】肥前の人。父松陽は詩を以て名がある。寧齋は壯時沈痾に罹り久しく病床にあつた。森春濤及び槐南に從つて學び、友として國分青厓等がある。漢詩界に「星詩」の組織せらるるや、同人として鬼才を謳はれ、又自ら雜誌

江戸中村座の「和合一字太平記」第一番目に、江戸初下りの佐渡島長五郎が「邯鄲」といふ四季の所作事の夏の部に演じた「布晒」である。これは賤の女が一本歯の足駄を穿いて、両手に白布を持つて晒す振であつた（役者春子満）。この形式は、後年種々の所作事の一部に加へられて傳存されたが、勿論修正を經たものである。今日では一本歯の足駄、晒の振、地の三味線、鳴物等は大體の型が定まつてゐる。

【種目】今日傳存されてゐるものに、「今様四季三番三」（後出）「遅櫻手爾葉七字」（通稱越後獅子。「越後獅子」參照）「聞玆妓八景」（通稱晒女。「晒女」參照）「月雪花歌再夕市」（後出）「後面萩玉川」（通稱傘仙人。又は後面。「後面」參照）等があり、他に應用されてゐるものもある。今日傳存されてゐるのは左の通りである。

【今様四季三番三】三番叟物　〔通稱〕晒三番　〔初演〕寶暦五年十一月一日初日、江戸市村座「樸梅峠吉例相撲」第一番目　〔作詞〕藤本斗文　〔曲節〕長唄　〔立唄〕松尾五郎治　〔作曲〕杵屋忠次郎　〔振附〕二代中村傳次郎　〔諸本〕長唄正本。日本歌謡集成卷九・歌謡音曲集（日本名著全集）所收。〔内容〕曾我の二の宮、瀬川吉次、後の二代菊之丞）といふ娘が、伊豆權現の神前で三番叟を舞ひ、白旗を布の代りとして晒になる（三番叟參照）。晒の手が出來たのはこの時と傳へる。

【月雪花歌再夕市】變化物　〔通稱〕女夫晒　〔初演〕天保十三年九月二十四日初日、江戸市村座「壽龜筥木新舞臺」第二番目大切　〔作詞〕三代櫻田治助　〔曲節〕長唄　〔立唄〕二代富士田音藏　〔作曲〕二代杵屋勝五郎　〔振附〕西川七郎次　〔諸本〕長唄正本　〔内容〕玉川の畔に女夫の晒女（十二代市村羽左衛門）と晒男（四代中村歌右衛門）とが、輕いクドキの後で晒になる。

【參考】近世邦樂年表（長唄之部）○江戸近世舞踊史　九重左近　〔秋葉〕

ぬめり　流行歌　【名義】「滑り」「絖り」と云ふ字を宛てる。「ぬめる」とは、のらりと遊蕩する意で、一般に遊里歌、嫖客の流行歌の類を稱したものらしく、特定の流行唄の名ではあるまい。「ぬめり節」「ぬめり小歌」「ぬめり踊」とも云ふ。【解説】明暦・萬治頃に最も盛んに行はれ、元祿頃になつて衰へた。「吉原流行小歌惣まくり」に、「はりぬめり歌」十四首を揭げてゐる。

君が來ぬにて枕な投げそ投げそ枕に科もなや
衣紋つくろひ通へども相見る事は程を經て逢ふは
優曇華嬉しやな

などの如く雜體の歌で、一定の形式はなく、從つて、特定の流行歌の名稱とはなし難い。「好色一代男」卷四に、「花の都のぬめり節、長い刀に長脇指をぼつこんで、押せさよいさと歌へど」と見える。「御船歌留」にも、「浮世ぬめり」（一名「ぬめり節」）が出てゐる。この歌は常に都會にのみ行はれた洗練された流行歌であつたらしく、田舍では行はれなかつた。元祿以後には、劇場音樂として、ぬめりと云ふ歌が用ひられた。「絃曲粹辨當」初編に、「ぬめり下り」として、

通ふあらしの難波津に、しんぞ此身も揚屋入り

と云ふ歌を揭げてゐるのがそれで、「奈良柴」にも、「先年上方より坂田兵四郎と云ふ者下り菊之丞所作にあはせて無間といふ少し許りの小歌を謠ひし也。これをぬめりといふよし、兵四郎予に出會咄たり。本歌は松島庄五郎勤あい〳〵のぬめりを兵四郎うたひし也」と見える。爾後、現今も傾城・御殿女中の出端などに用ひられる下座唄を、ぬめりと稱し、長唄の「天人羽衣」の「花の色香もよい姥櫻」の所などを使つてゐるといふ。　〔藤田〕

濡衣草紙　讀本　五卷五册　【作者】芍藥亭長根　【畫工】蹄齋北馬　【名稱】角書に「坂東奇聞」とある。名香濡衣に纏はる奇話が、關東を舞臺として展開する意である。

【刊行】文化三年正月。

【梗概】文明の頃、青木が谷家杉氏の家老千代田左衞門の臣鳴門賴母には二兒があり、兄を寛一弟を退二といつた。賴母の歿後寛一は豪族豐島外衞の女雪兒を妻として家を繼ぎ、退二は家中鳩谷左右平の養子となり、義次郎と改名したが、養父の妾に子が生れたので、これに家を繼がせようと折しもこの家に仇をなす石橋亘を討ち果して逐電し、武藏三芳野の里に到つて、隣家内海和平の娘翹子と戀に落ちた。これより先、寛一の妻雪兒は妾春風に欺まれ、夫から與へられた名香濡衣を失つてゐたことから、これを手に入れた家中雀部燕二との仲を疑はれて寛一に殺され、寛一はまた燕二のために討たれた。これを知つた義次郎は、兄の仇討に發足し、翹子はそのあとで繼母船路に欺かれて三國の花街に賣られ、義士・金津恕助に馴染んで名香を與へられたが、やがてこの花街に入つて來た義次郎は、濡衣の香によつて翹子今は名妓吾嬬に再會し、恕助に救へられて遊女柳葉の客が燕二であることを確め、めでたく本懷を遂げた。

【解説】名香の因果を骨子として悲劇を展開させた當時流行の復讐奇談であるが、作中人物の運命が、その姓名によつて決せられる趣向と、事件に多少の議論を立てた點が新味であると作者は言つてゐる。馬琴の著作などを考へ合せても、この言葉には賛し難いが、この作者としては力作の部であらう。　〔笹野〕

ね

寧齋　漢詩人　【姓名】野口弋、字は貫卿、通稱一太郎　【別號】謫天情仙　【生歿】明治三十八年五月十二日歿す。享年三十八　【閲歴】肥前の人。父松陽は詩を以て名がある。寧齋は壯時沈痾に罹り久しく病床にあつた。森春濤及び槐南に從つて學び、友として國分青厓等がある。漢詩界に「星詩」の組織せらるるや、同人として鬼才を謳はれ、又自ら雜誌「百花欄」（別項）を發行して編輯の局に當つた。星詩社解散後は、北條鷗所と「竪茗雅集」を發案し、開放主義を以て各方面の詩人の大合同を謀るなど、詩壇のために大に努力するところがあつた。殊に雜誌「太陽」及び二六新聞に謫天情仙の名を以て、「韻語陽秋」なる題下に、當時の小説を漢詩を以て一々批評し、奇警な着想と自由な詞藻は、廣く文壇の注意をあつめた。【著作】少年詩話一册　○三體詩註釋四卷○寧齋詩話一卷、その他「大護餘光」等數種の著述がある。　〔佐久〕

寧靜閣詩文集　漢詩文集　十五卷　【著者】大槻磐溪　【解説】第一集は文鈔二卷、詩鈔四卷を收め、弘化五年刊。二集は文鈔一卷、詩鈔二卷を收め、安政五年刊。三集は文鈔、昨夢詩曆、國詩史略各々二卷を收め、明治三十年に刊行された。　〔佐久〕

寢白粉　小説　【作者】小栗風葉　【發表】明治二十九年九月、「文藝倶樂部」。發

が、他の出口に現はれることを說く型を特に渦卷傳說とする。【解說】深い穴は神祕感・驚異感を民衆の心にそゝつて、さま〴〵の觀想を生ぜしめる。穴の深さが容易に測知し難いとき、這般の觀想の一として、それが何處にか拔けてゐると想定することによつて、穴の深さに一應民間信仰的な始末をつけたがるのは、自然の心理的歸趨でなくてはならぬ。而【梗概】近頃大通と云ふ詞が流行つてゐるが、その大通の末派木葉通に至つては、錢金遣ふを鈍漢と譏り、我慢自惚の鼻高く、遣ふだけの金も遣はず、まだ氣も知れぬ傾城に無心を言ひ、身揚りをさせる魂膽をする。女郎の方でもぬかりなく、巧みにはづせば、今度は〳〵と思ひ、罠にかゝる白癡が世に多い。これより金のとれぬ腹いせに、無理に責めて髮を切士朗・都貢の二人が京に上り、折しも京に在つた曉臺、曉臺に從遊せる陸奥の丈芝、有馬の湯治から京へ來た名古屋の宰馬等と會し、京の美角・定雅の兄弟、蕪村・几董の師弟、大阪から來た大魯などと交驩日を重ねて、その月の末に伊勢の大神宮へ詣でた紀行である。　〔賀川〕

ぬなはの草紙　隨筆　三卷　【著者】多田義俊　【成立・由來】寶保三年頃名

中に「女夫さらし」があり、その拵子として「晒おそつき拍子」「布晒早つき拍子」等を擧げてゐる。また「舞曲扇林」の小舞十六番中にも「さらし」の名目が見え、元祿の「松の葉」（別項）の長歌四十六にも「晒」が載せられてをり、江戸の山村座所演の「傾城三鱗形」（元祿十四年正月）や「鬼城女山入」（同十五年七月）等の中にも「布晒」の所作が取入れられてゐる。併し後世の踏襲となつたものは享保十六年十一月、

賣禁止となる。

【梗概】お桂は或る部落の家に生れた爲めに縁遠く、一度三之助と云ふ男と愛し合つたが、その素性がわかると忽ち棄てられた。かうして性の惱みに悶えて、毎日寢白粉に身をやつし、もう二十六といふのに、いつも初々しい島田に結び、厚化粧をしてゐる。近所の女達の蔭口を聞かぬではないが、お桂にして見ると年相當の身じまひでは、出戻りのやうに思はれるからであつて、兄の宗太郎は、それに深く同情し、何かとやさしくしてくれる。お桂はその眞心にほだされて、遂にあるまじき契りを結んだ。

【解説】作者初期の作品であるが、後年の自然派的傾向が早くこの作品に現はれたと云ふ點に於て注目すべきものである。發表と共に反道德的であるとして發賣禁止に逢ひ、毀譽紛紛として、一時評判が高かつた。この作は不可抗な本能的な慾望として性慾を認め、それが現はれた人生の種々相を、各角度から描いたこの作者には有り得べき作品で、種族の偏見から抑壓された性の惱みが、倫常をさへ破つて爆發するといふテイマを捉へたところにこの作者の發見がある。取り立てて傑作といふ程のものではないが、かういつた筋なり人物なりは、作者の作風に打つてつけの題材である。お桂が道ならぬ契りをするに至つた徑路も、大體無理がなく首肯かれる。〔高須〕

寢音曲（ねおんぎょく） 能狂言【別名】寢聲（ねごゑ）【格式】内神文濟相傳の部（大藏流）。

【梗概】或る主が、夜前そちの部屋の前を通つて謠を聞いたが、面白さうだつたから、ちと謠つてくれと太郎冠者に言ふ。冠者は、酒でも飲まねば、謠へるやうなものでないと言ふので、主は酒を飲ますが、又子持の膝を枕にして謳ふ癖で、起きてゐては謠へぬなどと言ひ出す。已むなく主が膝枕をさせると、散々に戯れかゝつてから謠ひ出す。主は起きてゐても謠はれさうなものだと言つて、起して謠はせるが、冠者は故意に聲を出さぬやうに謠ふ。また寢かせると聲を出す。そこで主はいろいろ起したり寢かせたりすると、冠者は醉ひしれて、起きると謠ひ寢ると聲をつぶし、果ては立つて舞ひ初めるので、主は、やい、その聲は何處から出たと追ひ込む。

【解説】和泉流では小習になつてゐるが、「舞入」の小書が附くと、一番習になる事になつてゐる。昭和四年七月、明治座で中村吉右衞門一座の演じた木村富子作「寢聲」は、この曲に據つたものである。〔龍田〕

根岸短歌會（ねぎしたんかくわい） 和歌【解説】明治三十一年、正岡子規の「歌よみに與ふる書」（別項）を起點として和歌革新に着手し、歌論と作歌とを共に公にしたのであつたが、同三十二年の初め、香取秀眞・岡麓等が子規を訪問したのが機緣となり、今までは俳人仲間のみであつたのが、歌人をも加へて短歌會が成り立つた。これを根岸短歌會といふ。歌會の會合は、同三十二年三月から始まつたが、根岸短歌會の成立は、香取秀眞・岡麓等の子規訪問の時と考察すべきである。以後同三十三年十月まで十回行はれ、その間日本新聞の短歌募集となり、歌會ではなしに門人等の隨時訪問となつた。子規の歿後、雜誌「馬醉木」を出した時、根岸短歌會の名で發行し、名義は伊藤左千夫方にあつたが、雜誌「アカネ」を發行するに及んで、「アカネ」發行所に移つた。「アカネ」が明治四十二年七月で休刊したので、「アララギ」（別項）をば、東京根岸短歌會の名で發行したこともあつたが、一部に異見もあつたので、「アララギ發行所」となし、今日に及んでゐる。後に關西根岸短歌會の名で、關西諸同人が雜誌を出したことがある。即ち根岸短歌會の名目は今はないが、子規系統の雜誌は上述の「馬醉木」「アララギ」「アカネ」の外、三井甲之の「人生と表現」、香取秀眞・依田秋圃・淺野梨鄕等の「歌集日本」、花田比露思・安江不空等の「しほざゐ」「あけび」、寒川陽光・蕨橿堂等の「阿迦雲」等を數へることが出來る。なほ「馬醉木」のあつた當時に、「鵜川」「甲矢」等の俳句・短歌の混合雜誌が發行されたことがある。〔齋藤（茂）〕

根岸派（ねぎしは） 文壇の一派【名稱】明治二十年代に饗庭篁村・森田思軒（各別項）を中心として東京下谷根岸に在住した文人の一團を指す。當時は根岸黨などと稱せられてゐた。なほ後年の子規一派をも根岸派と呼ぶことがある。【解説】この派に數へられる主なる人々には篁村・思軒の外に、須藤南翠・宮崎三昧・高橋太華・幸堂得知・幸田露伴（各別項）・岡倉覺三・川崎千虎等があつた。このうち、篁村がやはり座長格で、思軒がこれに次ぎ、露伴は最も若輩であつた。文學的傾向は必ずしも同じとは言へなかつたが、最も趣味に於て一致してゐたと言へる。要するにこの一團は洒落を愛する數寄人の集りで、これを最もよく代表した者は篁村と岡倉覺三であつた。風流を極めた旅行や會合などを催し、酒の上では隨分思ひ切つた戯けたこともしたので、いろ〳〵な逸話が殘つてゐる。この間の消息は、篁村の紀行「旅硯」、露伴の小說「珍饌會」、隨筆「爛言」等に詳しい。文學史的には、この一派は何等特筆すべきこともないが、江戸文學の殘滓たる戯作者流と明治の新文學との間に介在した過渡的存在で、中には思軒の如き飜譯界の先覺もあり、政治小說に健筆を揮つた南翠の如きもあつたが、要するに皆先覺者であつたに過ぎず、新文學の擡頭と共に、篁村・得知等は劇評にかくれ、南翠は新聞に去り、三十年代に自然消滅の形となり、文壇になほ雄飛した者は露伴ただ一人であつた。〔高須〕

寢聲（ねごゑ） 「寢音曲」を見よ。

猫の草紙（ねこのさうし） 御伽草子（二十三篇の一）二巻【成立】「慶長七年八月云々」の文句に因り、その以前の作でないことが分る。【諸本】古板本は御伽草子本。御伽草子後編（今泉畠山校）・御伽草紙（有朋堂文庫）・日本文學大系第十九卷・御伽草子（名著文庫）等所收。【解説】寓話。天下太平有難い御政道は、鳥類畜類にも及ぶとあつて、慶長七年八月中旬に洛中の猫の綱を解いて放飼にせよと云ふ命令が出たので、猫共は喜んで飛び廻り、その代りに恐慌を來したのは鼠仲間である。上京邊に住む發心者の夢に、鼠の和尙と次の夜は虎毛の猫とが代る〳〵現はれて、互に訴へて系圖を誇り合ひ、その翌夜は又鼠が現はれ、遂に同族は都にゐたゝまらず、評定の結果、近江に立ち退く事になつた由を告げて、その後洛中に鼠の害が無くなつたと云ふ話。〔島津〕

寐轉草（ねころびぐさ） 俳文 一冊【著者】内藤丈草【編者】方舟・魯九【名義】四角張らず、くつろいで讀む文といふ義であらう。【成立】元祿七年甲戌仲冬下浣【刊行】享保元年【諸本】嘉永三年三月南々・寄三編の一本がある。これは西馬が古寫本によつて校訂し、文の右傍に漢語の註を施し、去來の「伊勢紀行」と合綴して出版したものである。俳諧文庫の「蕉門十哲集」や俳文學大系俳文篇所收のものは、この嘉永本の覆刻である。【解説】丈草が老若男女に向つて人生の果敢なき事、女人の身のあさましき事などを說き、煩惱苦の世界より解脫すべき事を敎へたもので、當時に於ける丈草の人生觀を窺ふべきものである。この種の文としては名文であるが、丈草にしては激越な調子のものになつてゐるのは、芭蕉病歿直後に書かれてゐる點から考へて、芭蕉の病歿に刺戟される所あつてのものかと考へられる。〔荻原・志田〕

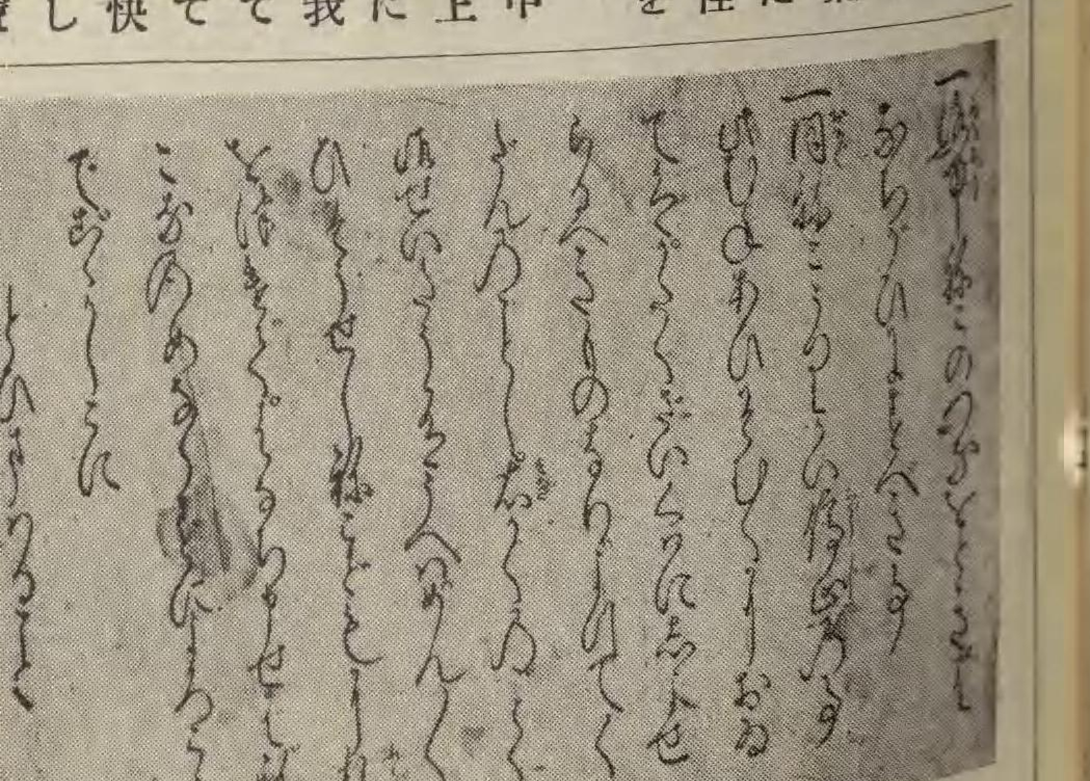
寢覺（ねざめ） 「夜半寢覺物語」を見よ。

寢覺（ねざめ） 「神事物の謠曲」を見よ。

寐覺之繰言（ねざめのくりごと） 人情本 五編十五册【作者】初・二編は南仙笑楚滿人（爲永春

【梗概】千葉家の忠臣二見重左衞門は歿し、その子重三郎は浦右衞門と改名し、浦里の親族であるお松を妻とし、忠勤を勵んでゐたが、讒言によりて永の暇となり、武藏入間川の畔に佗び住ひをしてゐた。千葉家には當主正胤に二人の子があつた。姉を常姬、弟を胤若と云ふ。奧方藤浪は素性賤しき女性であつたが、容貌の美で後妻となつたのであり、胤若は實子であるが、繼子常姬を憎む事甚しく、近習の星影運平太を欺いて常姬に不義をしかけさせ、二人を捉へて正胤に告げた。正胤大に怒つて兩人を藤浪に預けた。常姬の腰元若草は密かに常姬を助けて逃げ出でたが、途中で惡漢に襲はれて散り〳〵に別れ、姬は圖らず二見浦右衞門に助けられた。女姿では危いとて男裝させ、自分の幼名重三郎を名のらせて、娘

だのは、春日屋の長男時之助である。本妻お光を嫌つて浦里の許へ通ふうち、浦里も奇病にかゝつて全治しない。會々飄遊して來た甲斐の德本に治療を乞うたけれども、これは藥用では全治せぬ、時期が來れば快癒するとだけで見てくれない。時之助は浦里の身邊に怪異があるのをお光の嫉妬ゆゑと解して彼女を疎んじ、又浦里の事などで面白からず思ひ、二三の取卷を連れて東海道の旅に出で、途中で利倉屋市右衞門の娘お福を助けなどして上方へ出かけた。その留守にお光も上州草津に赴き、圖らずも流浪して來たお福を救ひ、我が家へ連れて來た。時之助も旅から歸宅してお福を見、奇遇に驚くと共にこれを寵愛して妾とした。一方常姬の重三郎は漸く病氣全快したけれども、樣々の艱苦に逢ひ、死なうとし



御伽草子本「猫の

綴して出版したものである。俳諧文庫の「蕉門十哲集」や俳文學大系俳文篇所收のものは、この嘉永本の覆刻である。【解説】丈草が老若男女に向つて人生の果敢なき事、女人の身のあさましき事などを説き、煩惱苦の世界より解脱すべき事を敎へたもので、當時に於ける丈草の人生觀を窺ふべきものである。この種の文としては名文であるが、丈草にしては激越な調子のものになつてゐるのは、芭蕉病歿直後に書かれてゐる點から考へて、芭蕉の病歿に刺戟される所あつてのものかと考へられる。〔萩原・志田〕

寢覺（ねざめ）「夜半寢覺物語」を見よ。

寢覺（ねざめ）「神事物の謠曲」を見よ。

寐覺之繰言（ねざめのくりごと）　人情本　五編十五册【作者】初・二編は南仙笑楚滿人（爲永春水）と署名。第三・四・五編は爲永春水。【畫工】初・二編は溪齋英泉。第三・四・五編は柳川重信。再版本は、第二編口繪歌川芳景。第三・四編口繪歌川貞重。第五編口繪梅の本鶯齋。但し芳景・鶯齋の如きは、年代の遲い畫家であるから再版以後、數版を重ねた折の挿入と想像される。【名稱】題箋には明烏後譚、內題には明烏後傳と角書。「明烏後正夢」（別項）の續編の意。【刊行】初・二編は文政十二年、第三・四・五編は天保元年、再版本は天保十一年。【題材】「明烏後正夢」に於て、浦里・時次郎の後日譚を作り、世に歡迎されたので、更にその續編として本書を綴つたのである。春日屋時次郎の子時之助と、山名屋三代目浦里との情話、千葉家の忠臣二見重左衞門の子浦右衞門の苦節等を描いてある。中に甲斐の德本（とくばん）と呼ばれ、寛永七年百十八歳で歿した有名な醫者長田德本を用ひてある。

【梗概】千葉家の忠臣二見重左衞門は歿し、その子重三郎は浦右衞門と改名し、浦里の親族であるお松を妻とし、忠勤を勵んでゐたが、讒言によりて永の暇となり、武藏入間川の畔に侘び住ひをしてゐた。千葉家には當主正胤に二人の子があつた。姉を常姬、弟を胤若と云ふ。奥方藤浪は素性賤しき女性であつたが、容貌の美で後妻となつたのであり、胤若は實子であるが、繼子常姬を憎む事甚しく、近習の星影運平太を欺いて常姬に不義をしかけさせ、二人を捉へて正胤に告げた。正胤大に怒つて兩人を藤浪に預けた。常姬の腰元若草は密かに常姬を助けて逃げ出でたが、途中で惡漢に襲はれて散り〴〵に別れ、姬は圖らず二見浦右衞門に助けられた。女姿では危いとて男裝させ、自分の幼名重三郎を名のらせて、娘お園の兄であると披露してゐた。この附近に鐘が淵のお丑と稱する女俠がゐた。多くの無賴漢を養ひ、美男と見れば連れ込んで情人としてゐたが、重三郎の姿を見て押しかけ嫁に來た。浦右衞門に拒絶されても、なほ懲りず、大勢の子分と共に重三郎を奪ひに來た。お丑は重三郎・お園の睦まじい樣を見、許嫁と誤解して嫉妬に耐へず、鬼女の如くお園を虐めるのだつた。折柄不在であつた浦右衞門が馳せ來つてこれを禦ぎ遂に斬り殺した。最後の息の止まる時まで、お丑はこの戀慕の執念を晴らしてくれんと絶叫したのであつた。惡人とは云へ、浦右衞門は人を殺したのであるから、一家をひき纏め、相模足柄山麓の村里に身を潜めた。重三郎は腰の立たぬ病に罹り、年月を空しく送るうち、生活に苦しみ、お園を山名屋に身を沈めさせた。お園は山名屋で三代浦里と名のつてお職となつた。彼にふと馴染んだのは、春日屋の長男時之助である。本妻お光を嫌つて浦里の許へ通ふうち、浦里も奇病にかゝつて全治しない。會々飄遊して來た甲斐の德本に治療を乞うたけれども、これは藥用では全治せぬ、時期が來れば快癒するとだけで見てくれない。時之助は浦里の身邊に怪異があるのをお光の嫉妬ゆゑと解して彼女を疎んじ、又浦里の事などで面白からず思ひ、二三の取卷を連れて東海道の旅に出で、途中で利倉屋市右衞門の娘お福を助けなどして上方へ出かけた。その留守にお光も上州草津に赴き、圖らずも流浪して來たお福を救ひ、我が家へ連れて來た。時之助も旅から歸宅してお福を見、奇遇に驚くと共にこれを寵愛して妾とした。一方常姬の重三郎は漸く病氣全快したけれども、樣々の艱苦に逢ひ、死なうとした事は何度と限りもない。家重代の七曜の寶劍を探すべく二見浦右衞門も種々苦心する。結局お福の伯父に當る惡漢がお福に預けたことが分り、お福は自害して伯父に申譯したので、寶劍を時之助に渡し、時之助はこれを二見に渡した。二見はめでたく千葉家に歸參が叶ひ、重三郎は舊の常姬となり、結城家の奥方となつた。春日屋も一家睦ましく繁昌した。【構想】草雙紙（別項）の趣向に洒落本（別項）の情調を取入れた人情本（別項）初期の傾向を代表した作品である。鐘が淵お丑の怨靈が死んで祟ることが骨子となつてゐるに拘はらず、肝腎の常姬には一度奇病となつて禍するだけで、浦里・時之助だけに何時までも祟るのも徹底してゐない。ただ大門口の髮結床の描寫、時之助一行の旅路の描寫などに餘裕ある筆致が見えて、後の人情本の發生を想はせるものがある。〔山崎〕

御伽草子本「猫の草子」（水木京太氏藏）

ねざめのすさび　隨筆　三卷【著者】石川雅望【諸本】元來寫本で傳はつてゐたが、明治三十八年「百家說林」續編に收む。「百家說林」所據の本は井上頴圀博士藏本と云ふ。【解說】「伊勢物語」「源氏物語」「徒然草」「宇治拾遺」等にある難語の解釋を初めとして古歌・古語・假字・地名、その他言語・文學に係る考說を集めてある。「源氏物語」の卷々の歌文に關する記事が最も多い。案ずるに著者が「源註餘滴」を作つた餘材などであらう。卷一に壬生と云事以下三十九條、卷二に曆氣樓の事以下五十三條、卷三に二十四孝以下三十二條を收む。【和田】

寢覺物語繪卷（原富太郎氏藏）

寢覺物語繪卷（ねざめものがたりえまき）　繪卷物【解說】原富太郎氏藏殘缺一卷。詞と繪と各四段、但し詞の紙繼ぎは一部分亂れてをり、繪も第二段の端に別に催かばかりの斷片が添付されてゐる。詞はほぼ順を追うて列序されてをり、繪は最初の一段を除き、他の三段共ほぼ詞に一致するものと思はれる。而してこの繪卷の詞は、現存二種の五卷本には見當らないが、詞第二段中に寢覺左大將の「うきよにはわれすみわびぬ云々」の歌があり、その他話の筋等から見てそれと確認されるのであつて、或は五卷本以後の部分かとも想像されてゐる。繪は濃彩の作り繪であつて、吹拔屋臺・引目鉤鼻等、やまと繪特有の描寫樣式を見るべきもので、その製作年代は恐らく藤原時代の最末葉と推察される。蓋しこの種の優美な情趣本位の繪卷としては、年代上前なる「源氏物語繪卷」、後なる「紫式部日記繪卷」（各別項）と共に屈指の遺品であつて、又「夜半寢覺物語」最古の傳本としても蓋し貴重な資料である。（夜半寢覺物語參照）【田中（一）】

鼠歸（ねずみかへし）　洒落本　一册【作者】鹽屋艷二（繁色主）【畫工】北渓【名稱】「南門鼠（なんもんねずみ）」の後編で染め返した鼠色の義、扉及び內題には「南門鼠歸」とあり、卷末廣告及び「匂袋」の廣告には「南門鼠歸（なんもんねずみがへし）」とある。【刊行】戊孟陽出版目錄廣告にあるので享和二年と推定。【諸本】洒落本集成・洒落本大系第十一卷所收【題材】脚本「本町育浮名花壇」（安永六年）及び「絲櫻本町育」（同年）で有名なお糸佐七の情話を採り、主人公の名とした。そして筋もやゝ似通はせてある。本書の前編「南門鼠」（別項）に遊女と遊客との戀を描いた箇所が少いので、本書でこれを補つたのである。【梗概】絲屋小糸の許に通つて來た紫屋佐七といふ若者、深い戀仲らしく見え、朋輩にも冷かされた。蚊帳の中の私語で、いつそ手に手を取つて駈落しようと相談が定まつた。小糸は商賣が嫌になつたが年期もあけず、佐七にも請け出す力がないからだ。萬事打合せがすんだ。六月の末、二人連の客、綱五郎・九郎兵衞が糸屋にあがつた。綱五郎の相方は小糸と定まつてゐた。二人は男女の藝者を呼んで賑かに騷ぐ。殊に男藝者の滑稽な踊には一座腹を抱へた。やがて床に納つた時、綱五郎はお糸に、佐七から賴まれて來た由を告げる。今夜逃げ出す手筈で、佐七は既に船で裏岸に來る事になつてゐると云ふ。お糸は承知した振りで座を立つたまゝ再び姿を見せぬ。實は小糸が義理一ぺんに約束したのを佐七は眞實と信じ、綱五郎をよこしたのだ。佐七は約束通り岸へ舟を廻して待つてゐると、若者が大勢現はれて佐七の船をとり圍む。驚く拍子に夢醒むれば、やはり小糸の座敷、佐七は腕を組んで思案する所へ茶屋から迎へに來た。【解說】小糸佐七の濃厚な戀の場面を描いて、兩者が眞劍な戀愛をしてゐるやうに見せ、實は小糸の手管であると覆へして讀者を呆然たらしめ、更にそれは夢であると種を明かしたところに作者の山がある。併し前編「南門鼠」（別項）より遙かに遜色がある。【山崎】

鼠小紋東君新形（ねずみこもんはるのしんがた）　脚本　五幕　世話物【作者】二世河竹新七（後の歌阿彌）【通稱】「稻葉幸藏」「鼠小僧」【初演】安政四年正月、江戸市村座。

【役割】盜賊稻葉幸藏（鼠小僧）實は與惣兵衞倅與吉（市川小團次）、早瀨彌十郎・幸藏養母お熊（坂東鷄蔵）、後家お高・松葉屋の松山實は幸藏女房お松（尾上菊五郎）、刀屋新助（坂東彦三郎）、與惣兵衞倅與之助・松葉屋息子文三・船頭のつきり長吉（河原崎權十郎）、おもと弟いけどう三吉（市村羽左衞門）、辻番人與惣兵衞（淺尾與六）等。【諸本】默阿彌全集第二卷所收。【題材】泥坊伯圓とまで稱せられて、盜賊物を得意とした二代目松林伯圓が得意の講談に據つてはゐるが、創作同樣に脚色したもの。【梗概】〔序幕〕鎌倉雪の下の刀屋新兵衞の倅新助は、鶴ヶ岡八幡の社內で三浦兵部の介の家來平岡權內を待ち合せ、菊一文字の短刀を見せ、預けた保證として金子百兩を受取り、もし買取らぬ時は引替に金を返す約束をした。その返答を待つ間に惡婆お熊に金は衒り取られ、その上に短刀は氣に要らぬからと突戻される。結局刀は金の出來るまで返さぬといふので、途方に暮れてゐる所へ馴染の藝者お元に逢ひ、身の難儀をかこつ。〔二幕〕新助に同情したお元は一緒に死なうと決心し、滑川に跳び入らうとした時、鼠小僧次郎吉、當時稻葉幸藏と呼んでゐる義賊にとめられ、金ですむなら死ぬには及ばぬと、屋敷へ忍び入つて盜み取つた百兩の金子を與へられる。この狀を見てゐた辻番人の與惣兵衞は、役目の表、みすみす盜人を見逃すわけにゆかぬから殺してくれと押問答するうち、與惣兵衞は幸藏の實父であることが分り、心の中に詫びながら突倒して逃げてゆく。〔三幕〕駿河二丁町大黑屋の場は、幸藏が稻瀨川御藏下の舟の中で夢を見る趣向になつてゐる。幸藏の女房お松は、御成道の若菜屋の惣領娘であつたが、六年前戀におちて大磯まで逃げたが、幸藏が病氣になつたので、已むなく身重のまゝ身を苦界へ沈め、大黑屋から松山と名のつて出たのであつた。この松山が枕探しの罪に問はれて廻を拔け出すの條である。〔四幕〕幸藏は實下者

平澤左膳と稱して世を忍んでゐる。或る日、親實の三吉、續いて松田主膳の若徒曾平次が易を見てもらひに來り、自分一人のために辻番親子・新助・お元・若菜屋の後家・松田主膳等が無實の罪を着て、難儀をしてゐることを知り、養母お熊のかどはかした主膳の娘を送り返し、雪道をたづねあてた松山にも名乘らず、自訴して出て人々の難を救はうとする。お熊は娘を逃したのを楯に取つて幸藏を詰り、己が手で肩先を斬つて死ぬ。が、書置によつて善心に立ち返つた事が知れ、幸藏は直に問註所へ出頭する。〔五幕〕幸藏の自首によつて一切の事件は解決したが、非道な扱ひを受けるので、彼は繩を切つて逃亡する。【解說】正月から三月越し、百餘日も打續けた興行的にも大あたりを取つた狂言で、盜賊を

て、煙草入の抽斗へ入れる。奴の蟹平が姫を救ひ出す。東山の臣仁木左衞門は、謀反を企て、春永の臣久秀に食物に毒を混ぜて食はせ、邪心を起させて、東山・春永の兩家を奪はうとする。仁木は久秀に賴まれて春永の寶藏からいろは四十八枚の札の內、うの字の札を盜む。札紛失の疑ひが雪姫にかゝる。賴豪は雪姫を引立てて行かうとしたが化の皮を顯はす。久秀は謀反して攻め寄せて來る。地獄落しで春永が潰されるところを仁木が助ける。雪姫は蟹平と共に都へ赴き、色仕掛で札を取返す。久秀・仁木・賴豪等の惡人は降參し、雪姫は鼠の千枚書を足でする。春永の計らひで、大晦日に雪姫と中將との結婚式を擧げる。食事をして橫になり、一睡すると、雪姫・中將・仁木・久秀・賴豪・蟹平等は牛になる。春永と雁丸は

須賀侯爵藏の由。中山三柳の「醍醐隨筆」に鼠の草紙の名が見え、「燕石襍志」や「嬉遊笑覽」にも引いてあるが、佐野紹益の「賑草」に、「鼠の草子の聟舅の歌聞くやうになりぬべし」などあるのでも、鼠の嫁入の童話を指すやうで、本書とは別であらう。又「近古小說解題」に異本の鼠の草紙繪卷の事が見える（古畫目錄に鼠の草紙異本とあるもこれか）が、これは「隱れ里」（別項）を指すものと推定し得る。【題材】「獸婚傳說」「鼠の失戀遁世譚」「鶴の草子」（別項）「狐の草子」（別項）「木魅狐」（別項）「葛の葉傳說」等と類種の怪婚說話に、佛敎色の附せられたもの。【內容】都四條堀河院の邊りに棲む鼠權頭といふ老鼠、人間に契つて斎生道から子孫を救はうと志し、家臣の穴掘の左近永の勸めで、淸水に七日參籠した驗が見えて、五條

嚙されて、安永・天明にまで及び、前記以外に多數の類似の作品が刊行されてゐたものと思はれる。近藤淸春などの一枚繪にも「鼠の嫁入」があり、古拙な繪に詞を添へてゐる。【題材】「藥師通夜物語」（寬永二十年、刊假名草子）には、「鼠の嫁入」の說話が世に行はれた事を記してある。かゝる口碑說話や行成表紙本などに題材を得てゐるのであらう。【梗概】（1）門外には三四の鼠が掃除をしてゐ、座敷には一四の鼠が雜巾がけをなし、他の鼠は簪を手にして、それ〴〵に話をしてゐる。（2）結納の品を持込んだ所。（3）座敷には灯がともり、結納の使に酒食を饗應してゐ、膳手では吸物や酢の物を作つてゐる。供部屋では供の者が酒を飮んでゐ、上下を附けた鼠が緤に通した錢を臺にのせて持ち來り、祝儀

平澤左膳と稱して世を忍んでゐる。或る日、蜆賣の三吉、續いて松田主膳の若徒曾平次が易を見てもらひに來り、自分一人のために辻番親子・新助・お元・若菜屋の後家・松田主膳等が無實の罪を着て、難儀をしてゐることを知り、養母お熊のかどはかした主膳の娘を送り返し、雪道をたづねあてた松山にも名乘らず、自訴して出て人々の難を救はうとする。お熊は娘を逃したのを桶に取つて幸藏を詰り、已が手で肩先を斬つて死ぬ。が、書置によつて善心に立ち返つた事が知れ、幸藏は直に問註所へ出頭する。〔五幕〕幸藏の自首によつて一切の事件は解決したが、非道な扱ひを受けるので、彼は繩を切つて逃亡する。

【解說】正月から三月越し、百餘日も打續けた興行的にも大あたりを取つた狂言で、盜賊を主眼にした所謂白浪狂言の最も代表的なものであり、作者初期の世話狂言中出色のものと言つてよい。小團次の鼠小僧、鶴藏のお熊、何れも好評であつたが、蜆賣三吉の役を演じた當時十四歲の市村羽左衞門は、後の五代尾上菊五郎であるが、これが非常な當り役であつたことに於て著名である。

【參考】河竹默阿彌〇尾上菊五郎自傳〇世話狂言の研究　〔河竹〕

鼠子婚禮塵劫記　ねずみこんれいいぢんこふき

黃表紙三册　十五丁二十圖　【作者】曲亭馬琴　【畫工】歌川豐國　【刊行】寬政五年　【題材】「伊達競阿國戲場」「賴豪傳說」等。

【梗概】子の年の大晦日に、月の鼠日の鼠が一年中の總勘定をする。春永・久秀・賴豪・鶉の中將・雪姬・仁木左衞門・蟹平・雁丸の八匹の鼠には言ひ分がある。元日の絲結びに鶉の中將と雪姬とが結ばれた。賴豪は雪姬を口說いて、煙草入の抽斗へ入れる。奴の蟹平が姬を救ひ出す。東山の臣仁木左衞門は、謀反を企て、春永の臣久秀に食物に褒を混ぜて食はせ、邪心を起させて、東山・春永の兩家を奪はうとする。仁木は久秀に賴まれて春永の寶藏から札紛失の疑ひが雪姬にかゝる。賴豪は雪姬を引立てて行かうとしたが化の皮を顯はす。久秀は謀反して攻め寄せて來る。地獄落しで春永が潰されるところを仁木が助ける。雪姬は蟹平と共に都へ赴き、色仕掛で札を取返す。久秀・仁木・賴豪等の惡人は降參し、雪姬は鼠の千枚書を足でする。春永の計らひで、大晦日に雪姬と中將との結婚式を擧げる。食事して横になり、一睡すると、雪姬・中將・仁木・久秀・賴豪・蟹平等は牛になる。春永と雁丸はもとのまゝで鼬鼠事をしてゐる。

【構想】「金閣寺」の雪姬に、「伊達競阿國戲場」（別項）を混じて、雪姬が足で鼠を書く事から、十二支に結合し、賴豪傳說を混じ、鼠算・月令・大戴禮の如きものを附會し、丑の初春の讀物として前年の子年の回顧を利かせてゐる。

【價値】漢學臭い分子が多く、考證的衒學的態度が見えてゐる。珠算の九々の强い附會なども巧みであるとは言へない。本書の題簽には「一つは京傳と讀まれる文字があり、序文には「一皿の油を嘗て友としよし」や「母屋を貸してをとられ」などいふ言葉があり、極めて親しい態度をもつて、京傳は作者を世に紹介してゐる。作者はこの年から黃表紙に馬琴と署名したらしい。　〔小池〕

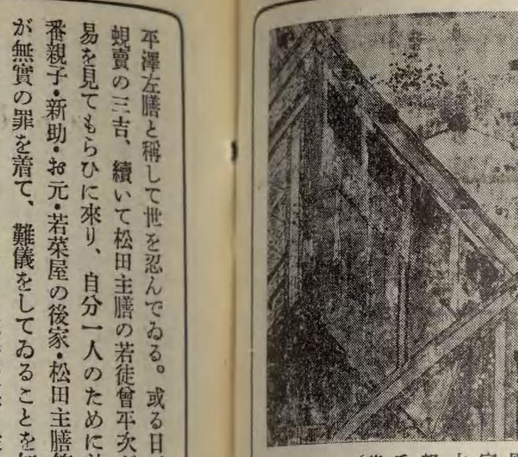
鼠の草子　ねずみのさうし　御伽草子　一卷　【作者】不詳　【成立】室町期　【諸本】刊本なし。繪卷で土佐光信筆と傳ふるはこの草子か。蜂須賀侯爵藏の由。中山三柳の「醒睡隨筆」に鼠の草紙の名が見え、「燕石襍志」や「嬉遊笑覽」にも引いてあるが、佐野紹益の「賤草」に、「鼠の草子の聟舅の歌聞くやうになりぬべし」などあるのでも、鼠の嫁入の童話を指すやうで、本書とは別であらう。又「近古小說解題」に異本の鼠の草紙繪卷の事が見える（古畫目錄に鼠の草紙異本とあるもこれか）が、これは「隱れ里」（別項）を指すものと推定し得る。【題材】「獸婚傳說」「鼠の失戀遁世譚」「鶴の草子」（別項）「狐の草子」（別項）「木幡狐」（別項）「葛の葉傳說」等と類種の怪婚說話に、佛敎色の附せられたもの。【內容】都四條堀河院の邊りに棲む鼠權頭といふ老鼠、人間に契つて畜生道から子孫を救はうと志し、家臣の穴掘の左近丞の勸めで、淸水に七日參籠した驗が見えて、五條油小路の長者柳屋三郎左衞門の娘と緣を結んだが、不幸にも鼠なる事を知られ、罠で捕へられた。辛うじて左近丞に助けられたが、女は嵯峨の奥に遁れ、他の人と婚した由を聞き、權頭は悲しみの末、發心して高野に登つた。

【參考】考古書譚卷九〇近古小說解題〇近古小說新纂「隱れ里」考說　〔島津〕

鼠の嫁入　ねずみのよめいり　赤本　二册　十丁十三圖　【作者・畫工】不明　【刊行】不明。但し出版書肆は鶴屋か。【諸本】行成表紙本には、「鼠の嫁入」、作者・刊年不明）、赤本には本書以外に「鼠のゑんぐみ」（西村孫三郎重長書、刊年不明）がある。黑本の「鼠の嫁入」（鳥居淸滿畫、刊年不明）や、「鼠嫁入雛形」（黑本・青本富川房信畫、刊年不明）等をはじめ、黃表紙の「鼠嫁入」（作者不明、享和三年刊）などが注意され、「鼠の嫁入」は元祿以前から世に持て囃されて、安永・天明にまで及び、前記以外に多數の類似の作品が刊行されてゐたものと思はれる。近藤淸春などの一枚繪にも「鼠の嫁入」があり、古拙な繪に詞を添へてゐる。【題材】「藥師通夜物語」（寬永二十年、刊假名草子）には、「鼠の嫁入」の說話が世に行はれた事を記してある。かゝる口碑說話や行成表紙本などに題材を得てゐるのであらう。

【梗概】（1）門外には三匹の鼠が掃除をしてゐ、座敷には一匹の鼠が雜巾がけをなし、他の鼠は簀を手にして、それ〴〵に話をしてゐる。（2）結納の品を持込んだ所。（3）座敷には灯がともり、結納の使に酒食を饗應してゐ、勝手では吸物や酢の物を作つてゐる。供部屋では供の者が酒を飮んでゐ、上下を附けた鼠が緡に通した錢を臺にのせて持ち來り、祝儀が出たと言つてゐる。（4）おはぐろを附ける鼠、髮を結ふ鼠、額を剃り附けて貰ふ鼠、着物をたゝむ鼠、裁縫をする鼠など、すべて嫁方の支度の樣である。（5）勝手元では鯛を燒き、章魚の足や鴨の羽根を搖り、飯や汁、或は刺身らしい物まで作つてゐる。（6）嫁の荷物が運び込まれる。（7）嫁の駕籠が來る。嫁入先は大富限だと供人が噂をする。（8）嫁の駕籠が近づく。（9）迎の者が出る。（10）嫁の駕籠が門先にかゝる。（11）結婚式の圖。（12）出產と產湯。（13）お宮參りをして、猫の災難を遁れるやうに大黑天に祈願する。

【解說】福神大黑天のつかはしめである鼠は、緣起を祝ふ意味から昔の人々には親しまれ、それが女性の出世であり、人生の重大事である結婚と結合し、子孫の繁榮を象徵して世に行はれたのは寬永以前の事であるらしい。本書は行成表紙本や一枚繪の「鼠の嫁入」から變



（藏氏郎太富原）

脚本「本町育浮名花壇」（安永六年）及び「絲櫻本町育」（同年）で有名なお糸佐七の情話を採り、主人公の名とした。そして筋もやゝ似通はせてある。本書の前編「南門鼠」（別項）に遊女と遊客との戀を描いた箇所が少いので、本書でこれを補つたのである。

【梗概】絲屋小糸の許に通つて來た紫屋佐七といふ若者、深い戀仲らしく見え、朋輩にも冷

五幕　世話物　【作者】二世河竹新七（後の默阿彌）【通稱】「稻葉幸藏」「鼠小僧」【初演】安政四年正月、江戸市村座。

【役割】盜賊稻葉幸藏（鼠小僧）實は與惣兵衞倅與吉（市川小團次）、早瀨彌十郎・幸藏養母お熊（坂東鶴藏）、後家お高・松葉屋の松山實は幸藏女房お松（尾上菊五郎）、刀屋新助（坂東彦三郎）、與惣兵衞倅與之助・松葉屋息子次三・船頭のつきり長吉（實

の場は、幸藏が稻瀨川御藏下の舟の中で夢を見る趣向になつてゐる。幸藏の女房お松は、御成道の若菜屋の物領娘であつたが、六年前戀におちて大磯まで逃げたが、幸藏が病氣になつたので、已むなく身重のまゝ身を苦界へ沈め、大黑屋から松山と名のつて出たのであつた。この松山が枕探しの罪に問はれて廓を拔け出すの條である。〔四幕〕幸藏は贋ト者

化して來たらしく、創意を交へない「鼠の嫁入物」中では、かなりに複雜であると共に、典型的の作品であつて、嫁入の準備と素晴らしい行列とに特に力點を置く。全部擬人化して畫かれ、各畫面中の殆ど總ての鼠が詞をもつてゐる、或は對話し、又は獨語し、地の文と稱すべきものはない。各種の場面が繪文字風に一畫面中に置かれるが、特に嫁や婿を意識して他と峻別する態度はなく、御目出度そのもの、嫁入そのもの、或は異類といふ點に興味を置くのみである。これが黒本「鼠の嫁入」(鳥居淸滿畫)などになると、大黒天の使用人白鼠福五郎と、腰元はつかの結婚を描いてゐるが、中心は明確に兩人の上に置いてあり、遙かに進歩してゐる。反對に一枚繪「鼠の嫁入」は一段と概念的になり古拙素朴である。本書の如き作品は、庶民教育に於ける準教材としての教育的意義を有し、子女のまゝごと遊びの伴侶となりつつ、雜巾のかけ方、庭に水のうち方、挨拶のしかた、衣服の仕立方、膳の据ゑ方、胞衣の所置方法その他を極めて簡單に敎へ、又は暗示する。鼠の顏は細くしてしをらしく全く同樣に畫かれ、衣服の模樣も簡單である。鼠を取扱つた作品として、外に「鼠年中行事」(行成表紙本、刊年不明)、「鼠花見」(赤本、刊年不明)、「鼠の道中」(赤本、刊年不明、外題)等があり、更に「猫嫁入」(市場通笑作、天明二年刊、黄表紙)、「鶴の嫁入」(赤本、刊年不明、外題)があるが、大體に於て「鼠の嫁入」を本體とし、それより派生したものである。〔小池〕

鼠嫁入（帝國圖書館藏）

音取 ねとり　日本音樂　【名稱】龢取とも書き、又取音とも呼ぶ。【解說】雅樂管絃合奏に用ふる名稱。凡て管絃合奏をなす時に、先づ各樂器の調子を驗するためになす所の簡單なる曲をいふ。六調子の各調によつて皆異なつてゐる。併しその構成は先づ大體に於て同樣で、初めに笙が獨り吹き初め、その途中より篳篥がその音を取つてこれに和して吹き、笙と篳篥との合奏が大體終る頃になつて横笛その音を取つて獨り吹き出し、後にその音をとつて琵琶と箏とが合奏を始める。その時の琵琶の手は七つ撥と稱するもの、箏の手は爪調と稱するものである(「調子」參照)。羯鼓は笛の次に入つて行く。以上は唐樂に於ける音取であるが、高麗樂に於ては、狛笛と篳篥とだけの合奏による音取を用ひる。それ故これを又一に竹音取ともいふ。音取は前に述べたやうに各調によつてそれ〴〵特殊なものを用ひてゐるが、又大曲或は特殊なる曲には、その曲に應じた所の特別なる音取を備へてゐる。管絃又は舞樂曲の外にも、神樂などには又特殊なる音取がある。又高麗双調の音取を一に鸎鳴音取とも呼ぶ。【種類】「樂家錄」には、笙の音取に普通の音取・小音取・面音取・御遊音取の四種があると記してある。小音取とは普通の音取の小さく略したものであつて、略時にこれを用ひる(神樂に用ひる小音取のことを、細音取といふと「歌舞品目」に記してある)。面音取とは平調・双調・黄鐘調・盤渉調に用ひるものであるが、その詳しいことは今は分らない。又御遊音取とは平安朝の盛時に於て御遊の時に用ひられた所の音取であるが、近代にはこれを奏しないで、その代りに調子を奏することになつてゐる。【參考】樂家錄卷十三阿部季尙○歌舞品目卷五上○日本音樂講話　田邊尙雄(後編第一章第四部)〔田邊〕

根南志具佐 ねなしぐさ　滑稽本　前編五卷・後編五卷　【作者】風來山人　【成立】前編は寶曆十三年、後編は明和五年。【諸本】校訂風來山人傑作集(帝國文庫)・滑稽文學全集第六・珍書文庫　隨筆大觀第二所收。【題材】寶曆十三年六月、俳優荻野八重桐が隅田川中洲に於て溺死した事件を種にしたものが前編であり、明和四年四月、俳優市川雷藏栢車が病歿し、次いで翌五年五月、坂東薪水が永眠した事件を結びつけて書いたのが後編である。【梗概】〔前編〕地獄へ獄卒につれられて來た若僧があつた。この若僧は瀨川菊之丞を戀して焦れ死んだもので、腰に菊之丞の繪姿を携へてゐた。この繪姿を閻魔王が見て、急に瀨川菊之丞を戀し、龍神配下の水虎に命じて地獄へつれて來いと命じた。偶々菊之丞・荻野八重桐・鎌倉平九郎・中村與三八等が中洲で蜆取をした時、菊之丞ひとり舟に殘つてゐると、水虎が若者の姿に化けて來て菊之丞と割なき仲となつてしまつた。そこで水虎は身の上を明かし、閻魔王が懇望されてゐる事を話したので、八重桐は師匠の身代りになつて水中に飛び込んだ。〔後編〕閻魔王は水虎の失敗以來、菊之丞を忘れかねて終に娑婆へ亡命した。そこで赤鬼・青鬼等は、娑婆へ閻魔王を探しに出たが知れなかつた。こゝに市川雷藏といふ俳優があり、坂東彦三郎と兄弟の盟約をなしてゐた。雷藏は病氣となり、淺草藏前の閻魔堂に念誦してゐると、そこに閻魔大王が敎法大師(弘法)を廣野(高野)から呼びよせて、女色男色優劣論を戰はしてゐる。雷藏は海老藏讓りの荒事で、暫く〳〵と飛び込み、閻魔王を初め十王をも踏みちらした。これは雷藏が病床の夢で、やがて閻魔廳へ呼ばれる佛の告げであつた。かくて雷藏は四十四歳を一期として永眠した。薪水も雷藏の死後病の床につき、明和五年に病歿した。【構想】社會事實を種にし、虛實を取り交ぜて構成したものである。志道軒傳も空想的であると共に、遊里好色界の現實を離れないところに、時代の精神に乘つてゐるが、本篇も亦空想的であるが、劇界の事實に密接してゐる。のみならず、空想的な地獄の中にも、當代藝能の世相、奢侈遊惰の風習、破戒の僧界などの現實がよく見え、それ等に對する作者の態度の皮肉もあつて、讀者の興味をそゝるのである。〔小柴〕

無根草夢譚 ねなしぐさゆめものがたり　草雙紙　合卷　半紙本　一册　十五丁二十圖　【作者】式亭三馬　【畫工】勝川春亭　【名稱】當時行はれてゐる普通の讀本や合卷の內容を滑稽的手法によつて逆にし、それを風來山人の作品「根無草」(前編寶曆十三年刊、後編明和六年刊、滑稽本)の外題を借りて標榜してゐる。【刊行】文化六年、近江屋權九郎刊。【題材】京傳の黄表紙「復讐後祭祀」及び京傳作の讀本・合卷などに據つてゐる。【梗概】人皇何代何天皇の御時、何とか申してやんごとなき御方の臣下何野何左衞門は、流行の敵討物の讀本や合卷を愛讀し、服裝をも

一人で亂鬪を演じる。物之介夫婦は敵討たずに木曾街道を逃げ、物兵衞の家來誰助方に隱まはれ、食物を減じて病氣になつて喜ぶ。誰助は娘を賣つて金五十兩を路用にと差出し、且つ助太刀を申出る。これに驚いて誰助を勘當し、大飯を食つて元氣になり、誰助方を立ち退く。何左衞門は物之介を追つて木曾街道に進み、敵討に入用の道具を兩掛に入れて、敵討たれ何野何左衞門と記して旅行する。物之介夫婦はこれを聞き、見附けられて本望を達しては一大事と、顏に痣をつけて非人になる。が、遂に見出され、敵討たれは正宗の刀に奪つた金の利息まで添へて出し、大袈裟にやつてくれと賴む。そこへ出て來た物兵衞は無事で、實は二人ののらくらを直すためであつたと告げ、二人を訓戒する。何左衞門・物之介は忠孝を勵んで榮える。

門が案山子を突刺すは京傳の合卷「白藤源太」(文化五年刊)の蛇九郎が、於勘を殺す場面から來てゐる。又唐傘のたて、藤棚のたての如き、或は手紙なども京傳の合卷の眞似である。更に讀本を眞似た言葉は、京傳の讀本「忠臣水滸傳」(別項)の文章や、馬琴の讀本の文章を暗示するが、揶揄の意味は認められない。口繪には本文とは關係のない人物を畫き、それに添へた文章も全く滑稽の目的である。合卷中のかゝる滑稽物は、一九・京傳その他の作者にも屢々認められる一異體であつて、黄表紙的の手法が殘存し、すぐれた作品はない。〔小池〕

寢ぬ夜のすさび ねぬよのすさび　隨筆　四卷　【著者】片山賢　【諸本】新燕石十種第五册に所收。【解說】文政年間から弘化年間まで著者が見聞した江戸市內の雜事、交友等の逸話、當時の流行物等を錄したもので、著者は繪

卷・現代日本文學全集(幸田露伴集)所收。【梗概】「衣食足つて滿樂起るが世間一般の人の身の上」、虎吉は品川の妓樓相模屋の娼妓お萬に思ひ付き、お萬は他の嫖客をふりきつて彼に請け出される。一方彼は、朱座の佐藤に茶席に招かれ、佐藤の娘お柳に戀慕される。彼は佐藤にその娘との結婚を申し込むと、佐藤は辻淨瑠璃語りには遣れないと斷るが、死んでも行くといふお柳の意志に負けて遂に婚姻を承諾する。富貴に滿ち足り、お柳等同勢十人ばかりと「故郷に錦着て」京へ入つた虎吉は、元の同業である釜の座一同を丸山に招待すると、斯界唯一の名人淨珠だけが來ない。釜師としての立身でない彼に、職人としての自分が、悅びに行く筋はないといふ名人氣質、虎吉は一生それだけを恨みとした。【批評】「辻淨瑠璃」(別項)の續編と見るべきも

する。鼠の顔は細くしてしをらしく全く同様に書かれ、衣服の模様も簡單である。鼠を取扱つた作品として、外に「鼠年中行事」（行成表紙本、刊年不明）、「鼠花見」（赤本、刊年　明）、「鼠の道中」（赤本、刊年不明、井題）等があり、更に「猫嫁入」（市場通笑作、天明二年刊、黄表紙）、「鶴の嫁入」（赤本、刊年不明、井題）があるが、大體に於て「鼠の嫁入」を本體

能の世相、奢侈遊情の風習、破戒の僧界などの現實がよく見え、それ等に對する作者の態度の皮肉もあつて、讀者の興味をそゝるのである。

無根草夢譚（ねなしぐさゆめものがたり）　草雙紙　合卷半紙本　一册　十五丁二十圖　【作者】式亭三馬　【畫工】勝川春亭　【名稱】當時行はれてゐる普通の讀本や合卷の内容を滑稽的手法によつて逆にし、それを風來山人の作品「根無草」（前編寶曆十三年刊、後編明和六年刊、滑稽本）の外題を借りて標榜してゐる。　【刊行】文化六年、近江屋權九郎刊。　【題材】京傳の黄表紙「復讐後祭祀」（かたきうちのちのまつり）及び京傳作の讀本・合卷などに據つてゐる。

【梗概】人皇何代何天皇の御時、何とか申してやんごとなき御方の臣下何野何左衞門は、流行の敵討物の讀本や合卷を愛讀し、服裝をも昔の丹前風にする。言葉は讀本風になり、下男もそれを眞似て「これ〳〵お爨どの話說す」と言へば、お爨も「古人說得好（ときえてよし）、詩あり證とす」などと言ふ。敵討をして見たいが心當りがなく、自身で敵持になるのが近道と、劍術の勝負上の遺恨を作るために、同家中の物賀物之介に立合を申込んだが許されず、物之介の若黨物兵衞を討ち、重代の刀正宗と金子を奪ひ、證據の手紙には、立ち退き先や白裝束・籠手・脚當・鉢帷子の類を三人分用意して置き、何時でも討たれる旨を記し、その場へ捨てて置く。たかが家來のことであるから、物之介は「敵討たず」といふことを工夫する。何左衞門は、東海道で待てど暮せど敵討は來ず、敵討には幽靈が附きものと考へて淋しい處を歩き、又多人數を殺さうとするが、人を殺すは殺生だとて、畠の案山子・藁人形・稻叢などを突き刺し、一人で亂闘を演じる。物之介夫婦は敵討たずに木曾街道を逃げ、物兵衞の家來誰助方に隱まはれ、食物を減じて病氣になつて喜ぶ。誰助は娘を賣つて金五十兩を路用にと差出し、且つ助太刀を申出る。これに驚いて誰助方を立ち退く。何左衞門は物之介を追つて木曾街道に進み、敵討に入用の道具を兩掛に入れて、敵討たれ何野何左衞門と記して旅行する。物之介夫婦はこれを聞き、見附けられて本望を達しては一大事と、顔に痣をつけて非人になる。が、遂に見出され、敵討たれは正宗の刀に奪つた金の利息まで添へて出し、大袈裟にやつてくれと賴む。そこへ出て來た物兵衞は無事で、實は二人ののらくらを直すためであつたと告げ、二人を訓戒する。何左衞門・物之介は忠孝を勵んで榮える。

【解說】讀本と合卷とに大衆の興味が集り、京傳・馬琴の活躍の大きい文化六年に、それ等の作品とは打つて變つた茶化した行き方を見せるのは、「復讐後祭祀」に據つた敵討行き過ぎからの案じである。三馬は末尾に、「古人芝全交舊案の增補」と記し、その據るところを標榜してゐるが、虚僞であつて實は京傳の趣向の燒直しである。三馬には變な癖があり、全交の僅かのヒントをも誇張するが、京傳の大きな影響は明瞭な事まで屢々隱蔽してゐる。「根無草」の暗示によつて黄表紙「根無草筆禍」（わざはひ）（京傳作寛政六年刊）が地獄の樣を描き、それを受けて黄表紙「根無草曾我和物」（寛政七年刊、長喜畫）が曾我を取合せ、三馬の本書はその後を僅かに名稱の上から繼いだまでである。何左衞門の雲に稻妻の衣裳は、京傳の讀本「稻妻表紙」（別項）の不破伴左衞門により、何左衞門が案山子を突刺すは京傳の合卷「白藤源太」（文化五年刊）の蛇九郎が、於勘を殺す場面から來てゐる。又唐傘のたて、藤棚のたての如き、或は手紙なども京傳の合卷の眞似である。更に讀本を眞似た言葉は、京傳の讀本「忠臣水滸傳」（別項）の文章や、馬琴の讀本の文章を暗示するが、揶揄の意味は認められない。口繪には本文とは關係のない人物を畫き、それに添へた文章も全く滑稽の目的である。合卷中のかゝる滑稽物は、一九・京傳その他の作者にも屢々認められる一異體であつて、黄表紙的の手法が殘存し、すぐれた作品はない。（小池）

寢ぬ夜のすさび（ねぬよのすさび）　隨筆　四卷　【著者】片山賢　【諸本】新燕石十種第五册に所收。　【解說】文政年間から弘化年間まで著者が見聞した江戸市内の雜事、交友等の逸話、當時の流行物等を錄したもので、著者は繪事の嗜好があつたと見えて、谷文晁・住吉廣行・鈴木鄰松等の逸事もあり、又市中の畸人の噂話もある。卷一に文晁の銅印以下十七則、卷二に人魂以下十一則、卷三に見世物以下十六則、卷四に日ぐらし以下十一則を載せてある。卷四所載の天保の御改革の一條は、簡にして要を得た記事である。序跋はない。

【著者小傳】片山賢。字を申之と云ひ、武藏雜司ケ谷に住した幕府御鷹方の士であつたと云ふ。（和田）

壽の門松（かどまつ）　「山崎與次兵衞壽の門松」を見よ。

根本（ねほん）　「繪入根本」を見よ。

寢耳鉄砲（ねみみてつぱう）　小說　【作者】幸田露伴　【發表】明治二十四年夏、國會新聞に揭載。　【刊行】同年十月「辻淨瑠璃」（別項）と合せ、「新葉末集」と題して刊行（春陽堂）。露伴全集第一卷・現代日本文學全集（幸田露伴集）所收。

【梗概】「衣食足つて榮辱起る」が世間一般の人の身の上、虎吉は品川の妓樓相模屋の娼妓お萬に思ひ付き、お萬は他の嫖客をふりきつて彼に請け出される。一方彼は、朱座の佐藤に茶席に招かれ、佐藤の娘お柳に戀慕される。彼は佐藤にその娘との結婚を申し込むと、佐藤は辻淨瑠璃語りには遣れないと斷るが、死んでも行くといふお柳の意志に負けて遂に婚姻を承諾する。富貴に滿ち足り、お柳等同勢十人ばかりと「故郷に錦着て」京へ入つた虎吉は、元の同業である釜の座一同を丸山に招待すると、斯界唯一の名人淨珠だけが來ない。釜師としての立身でない彼に、職人としての自分が、悦びに行く筋はないといふ名人氣質、虎吉は一生それだけを恨みとした。

【批評】「辻淨瑠璃」（別項）の續編と見るべきもので、黒船の來舶のために、島津侯が大砲鑄造を思ひ立ち、虎吉がその役目を引受けて成功する。それが「寢耳鉄砲」の命名の由來であらう。作者二十五歳頃の油の乘つた作物。題材も、この作者に打つてつけであり、事件の複雜さも、「辻淨瑠璃」とは比べものにならない。それは、事件を發展させる葛藤が多いためで、その葛藤の契機が、どれも意地の衝突から始まつてゐるのが、どこまでも露伴的公式である。まだ「氣質物」（かたぎもの）の殻から脫けきれない古さがある。主人公虎吉の性格が割合にはつきりしないで、ワキ役のお萬や淨珠が、却つて逆に生動してゐるのも、この作者のものらしい。（辻淨瑠璃參照）（千葉）

練供養（ねりくやう）　佛教　【別名】「迎接會」「二十五菩薩來迎會」「面かぶり」　【解說】念佛行者の臨終の時に、聖衆來迎してこれを淨土

あつた。かくて雷藏は四十四歳を一期として永眠した。薪水も雷藏の死後病の床につき、明和五年に病歿した。

【構想】社會事實を種にし、虚實を取り交ぜて構成したものである。志道軒傳も空想的であると共に、遊里好色界の現實を離れないところに、時代の精神に乘つてゐるが、本篇も亦空想的であるが、劇界の事實に密接してゐる。のみならず、空想的な趣向の中にも、實全篇

に導いた事のさまを摸倣する一種の演劇的佛事である。娑婆に擬した堂宇と、西方淨土に擬した堂宇との間に、來迎橋と呼ぶ橋を架け渡し、この上を音樂につれて二十五菩薩に扮した者が練り歩き、念佛行者に象(かたど)られた木像が輿に乘せられて後に續く。大體からいふ形式であるが、寺々に依り多少の相違もある。【沿革】この佛事は、惠心僧都の始めたものと傳へられるが、僧都は寧ろ中興の祖で、一段と古い儀式がかやうな意味の目的のために改められ、最初の菩薩練道の原始宗教的意味は忘れられたものと見るべきである。今は大和の當麻寺・久米寺・矢田寺、大阪の大念佛寺、東京の九品佛、信州平原の十念寺等に行はれてゐる。

【參考】奥澤九品佛の來迎會に詣でて 北野博美(民俗藝術一ノ一)〇大阪大念佛寺の來迎會 永田衡吉(同上一ノ五)　〔小寺〕

燃犀錄 ねんさいろく　隨筆　一卷　【著者】服部天游　【刊行】寬政五年　【內容】荻生徂徠・太宰春臺等物門の紕說繆見を糺したもので、後生の妄從を防ぐ主旨に出てゐる。所揭の目は大元大明・闕字・臨摹・陶字音義・魚鱗鶴翼・隋書律曆志・建安七子・明七子文章・高李選唐詩・宰相・河圖洛書・季氏富於周公・直躬・擊攘歌・九夷・歷史中俗語・徂徠議論文の十七で、非難は考據悉く肯綮に中つてゐる。徂徠の名久しく學界に高かつたので、同人を非議する者も少くないが、これには黨同伐異の氣が絕無である。明和六年著者の自序、寬政五年姪彥謙の跋がある。

【著者小傳】服部天游。字は伯和、通稱六藏、蘇門・嘯翁、又瀟洲と號した。京都の儒者で、通・釋二家にも通じ、博洽を以て聞えた。曾て本書を作つてその君蓮池藩主鍋島氏に進めた。正編の外に續錄・別錄・餘錄があると傳へてゐる。明和六年九月十六日歿す。享年四十六。「碧巖方語解」「赤髁々」「放言」等の著述がある。　〔和田〕

年山紀聞 ねんざんきぶん　隨筆　六卷　【著者】安藤爲章　【刊行】文化元年　【諸本】久しく寫本で行はれてゐたが、誤脫も多いところから、享和年中、京都西郊梅宮の祠官橋經亮が水戶の彰考館所藏年山自筆の原本を以て謄寫し、それを上印したのが今行はれてゐる。百家說林續編上卷所收。【解說】和歌・歌人・歌詞・歌集・歌學に關する記事を主とし、西山公(德川光圀)の言行・作文等の披露に及び、交ふるに有職上の考說を以てした隨筆で、卷一に西山以下三十七則、卷二に時代不同の歌以下二十九則、卷三に百人一首以下四十九則、卷四に後柏原院の御製以下四十則、卷五に露としづく以下二十七則、卷六にいろは以下四十一則を收めてある。卷六の末に著者の家祖長松軒惟翁の傳、圓珠菴契沖阿闍梨行實の二篇(並に著者の作)がある。本書の外に「年山打聞」と云ふのがあるが、それは本書を省略したやうなもので、先づは大同小異である。經亮の跋文中に、「此ふみ典故を考に益あるのみにあらず、まのあたり人のをしへとなるべき事實をものせられたり云々」とある通り、考據の正確な點で學徒を裨益することが多い。蓋し數多い隨筆類の中で特色の有るものであらう。寬政十一年小宮山昌秀、無年紀伴資芳(蒿蹊)の兩序及び享和三年橋經亮の跋がある。　〔和田〕

年中行事 ねんぢゆうぎやうじ　有職故實　【總說】「古事類苑」歲時部、「古今要覽稿」の時令部・歲事部に依つて、その大體を知ることが出來る。〔公家〕公家の年中行事を記したものの中で、最もよく纏まつてゐて、典據とするに足るものは、古くから「西宮記」「北山抄」(卷一・二の年中要抄の部)「江家次第」(各別項)の三書とせられてゐるが、「西宮記」は平安初期迄の謂はゆる古禮。「北山抄」は一條天皇以降。「江家次第」は後三條天皇以降の慣例法式を記したものである。また年中行事の概要を略說したものには、一條兼良の著はした「公事根源」(別項)がある。なほ同人著と稱せらる〻「年中行事大概」(續群書類從二五五)も、ほぼ同樣の書で簡略なものである。この他古いものでは、「內裏儀式殘缺」(增訂故實叢書)、「內裏式」(同上、群書類從七九)、「儀式」一名貞觀儀式(增訂故實叢書)、「新儀式殘缺」(群書類從八〇)、「本朝月令殘缺」(同八一)等があつて、平安初期に於ける朝儀の規模の壯大であつたことを傳へて居り、また降つては、九條師輔著といはれる「九條年中行事」(群書類從八三)、小野宮右大臣實資著「小野宮年中行事」(同八四)、後醍醐天皇御撰「建武年中行事」(別項)、「年中行事祕抄」(同八六)、判者新中納言爲秀・判詞二條良基の「年中行事歌合」(同八七)、「年中行事障子文」(續群書類從二四八)、賀茂氏人保隆所傳「年中行事」(同二四九)、「口言部類」(同二五〇)、「師遠年中行事」(同二五一)、「師元年中行事」(同二五二)、「師光年中行事」(同二五四)、「年中行事抄」(同二五三)、「元亨四年年中行事」(同二五五)、後水尾院御撰「當時年中行事」(丹鶴叢書、改定史籍集覽雜類二七)、「當今(中御門)年中行事」(續續群書類從七)、水原保明著「禁中恒例年中行事」、勢多章甫著「嘉永年中行事」「同考證」(增訂故實叢書)等がある。又行事の一種に就いてその次第を記したものには、「小朝拜部類」(續群書類從二五八)、「元日節會次第」(同二五八)、「三節會次第」(群書類從八九)、「妙音院相國白馬節會次第」(續群書類從二六〇)、「縣召除目次第」(同二六三)、「公宣卿蹈歌節會次第」(同二六二)、藤原定家著「釋奠次第」(群書類從八九)、參議資經著「建久九年五節記」(同九〇)等があり、又年中行事の儀式の指圖を記したものに「雲圖抄」(別項)、その儀式に參列する人々の裝束を記したものに、「年中諸公事裝束要抄」續群書類從三一一)がある。〔武家〕武家の年中行事の大體を記したものに、「貞丈雜記」祝儀之部、「武家名目抄」歲事部等がある。室町時代のことを記したものには、「殿中以下年中行事」(別に「成氏年中行事」「鎌倉年中行事」等の名がある。群書類從四〇八)、「慈照院殿年中行事」(一名「東山殿年中行事」。續群書類從六五九)、「殿中申次記」(群書類從四〇七)、「長祿二年以來申次記」(同四〇六)、「長祿年中對面日記」(續群書類從六六一)、「公方樣正月御事始之記」(群書類從四〇七)、「年中定例記」(同上)、廣橋兼秀撰「年中恒例記」(續群書類從六六〇、改定史籍集覽雜類一七)。江戶時代の事を記した書には「柳營年中行事」、菊池彌門著「柳營祕鑑」「要筐辨志」(年中行事の條)、「殿居囊」(武家年中行事の條)(別項)等がある。〔民間〕一條兼冬が天文十三年に撰した「世諺問答」(群書類從五〇五)、松下見林著「國朝佳節錄」、喜田川季莊著「近世風俗志」等を初めとして、「諸國圖會年中行事大成」「諸國年中行事大全」「世事根源」「年中風俗考」「年中行事故實考」「民間年中故事要言」、黑川道祐著「日次紀事」(京都叢書十四)、村瀨之熙著「藝苑日涉」(民間歲節の條)、名古屋玄醫著「民間歲事記」、貝原好古著「日本歲事記」、齋藤幸成著「東都歲事記」等がある。また國書刊行會第五期配本の民間風俗年中行事には、「諸國年中行事」「增補江戶年中行事」、石井蠡著「石井七彭 東都歲事記」、坂內直賴著「山城四季物語」、中川喜雲著「案內者」、川野邊寬著「閭里歲時記」、花樂散人「北里年中行事」、はじゆう著「芝居年中行事」、林屋正藏著「おとしばなし年中行事」、□眼居士著「正月揃」、山崎美成著「民間時令」、玉田永敎著「年中故事」の十二種を收めてある。又近く江馬務氏に「日本歲事史」の著がある。　〔石村〕

年中行事繪卷 ねんぢゆうぎやうじゑまき　繪卷　【解說】宮中に於ける年中行事の盛儀の樣は古くから屛風などに畫かれたらしいが、後白河天皇の勅命で藤原光長の畫いたといふ六十卷の繪卷に至つて、その最も顯著な一例を見出すのである。この繪卷はその後度々の內裏の炎上で、次第に燒失散逸したが、後水尾天皇は痛

ではない。然るに「年中行事繪卷」のことは、諸書の記載に徵しても確實性の多いものであつて、粉本ながらその畫樣を推想するに足るべく、のみならず平安朝年中行事の光景を寫したものとして好箇の風俗資料と云はねばならぬ。　〔田中(一)〕

年中行事繪

る。國學者で考證家たる著者が國史・國文・國語や有職故實に關する斷片的考說を集めたもので、「萬葉集」「源氏物語」「古今集」等に係る記事を初め有益た事項が多い。又何と云ふ事もなく、自然界及び世俗に就いての感想等も交つてゐるが、それにも著者の學問・識見が窺はれる。又儒者が皇朝を貶して外國に阿諛してゐるのを難じた節などもある。　〔和田〕

年表 ねんぺう　歷史　【解說】年次を表で示したもの。一般には年次每に必要な事項を加へ載せたものを指す。「史記」に於ける十二諸侯年表、漢興以來諸侯年表の如きはその權輿であらう。我が國では、古い時代には存しなかつたやうであるが、これと頗る相似た年代記は多く存在した。年表と年代記との相違は、その形式が表の體を成してゐるか否かに存す

新世界年表一冊 三省堂編(明治四十二年刊。以下最近に至る諸版がある)〇維新後大年表一冊 妻木忠太編(大正三年刊)〇日本太陽曆年表二冊 高頭式編(大正十年刊)〇日本文化史年表一冊 清原貞雄編(昭和五年刊)。〔特殊なもの〕皇居年表五冊 裏松光世編(存採叢書所收)〇逸號年表一冊 藤貞幹編(寬政十年刊)〇金石年表一冊 西田直養編(天保九年刊)〇史籍年表一冊 伴信友編(弘化二年刊)〇尙古年表 山本隱倫編(大正十二年增補刊行)〇武江年表 齋藤幸成編(嘉永三年刊。我自刊我叢書所收。大正元年增訂刊行)〇日本史籍年表二冊 小泉安次郎編(明治三十六年刊)〇日本金石年表一冊 興田一夫編(明治四十二年刊)〇近世邦樂年表三冊(別項) 東京音樂學校編(明治四十五年より昭和二年刊)〇日本文學者年表一冊(別項) 赤堀又次郎編(大正十五年刊)〇新撰洋學年表一冊 大槻如電編(昭和二年刊)〇新撰日本佛敎年表一冊 橋川

「諸國年中行事」「增補江戸年中行事」、石井蠡著「石井東都歲事記」、坂内直頼著「山城四季物語」、中川喜雲著「案内者」、川野燕覧著「閭里歲時記」、花樂散人「北里年中行事」、はじゆう著「芝居年中行事」、林屋正藏著「おとしばなし年中行事」、「眼居士著「正月揃」、山崎美成著「民間時令」、玉田永教著「年中故事」の十二種を收めてゐる。又近く江馬務氏に「日本歲事史」の著がある。

〔石村〕

年中行事繪巻　ねんぢゆうぎやうじゑまき　繪巻　【解說】宮中に於ける年中行事の盛儀の様は古くから屏風などに畫かれたらしいが、後白河天皇の勅命で藤原光長の畫いたといふ六十巻の繪巻に至つて、その最も顯著な一例を見出すのである。この繪巻はその後度々の内裏の炎上で、次第に燒失散逸したが、後水尾天皇は痛くこれを惜しまれ、當時なほ宮中に殘つてゐた原本に由つて寛永三年住吉如慶をして摸寫せしめられた。然るにその後、承應、寛文の兩度に、内裏は又もや火災に遭ひ、殘りの原本も全部烏有に歸してしまつたので、如慶が寫した粉本十九巻のみ住吉家に傳はり、それが同家の畫系を引く田中親美氏の祕庫に現存してゐるのである。朝勤行幸以下法華會に至る五十八段であるが、これ等の粉本によつて見ても、原本の浩瀚にして丹精を盡した描寫のほどが想像される。畫者光長は藤原末葉に於ける大和繪作家として著名な人で、「玉葉」承安三年九月九日の條によれば、勅によつて平野行啓日吉御幸圖を御所の障子に畫き、その供奉の大臣・公卿の顔のみは、當代似繪の名人たる藤原隆信が畫いたといふ。この人の遺作と傳へられるものでは「伴大納言繪詞」（別項）が著名であるが、これは文獻上確證があるわけではない。然るに「年中行事繪巻」のことは、諸書の記載に徵しても確實性の多いものであつて、粉本ながらその畫様を推想するに足るべく、のみならず平安朝年中行事の光景を寫したものとして好箇の風俗資料と云はねばならぬ。

〔田中（一）〕

年中行事繪巻（田中親美氏藏）

年々隨筆　ねんねんずゐひつ　隨筆　六巻　【著者】石原正明　【刊行】享和元年より文化二年迄。【解說】享和元年以後五年間の作で、毎巻に歲の干支を掲げてある。即ち巻一・二は辛酉、巻三は壬戌、巻四は癸亥、巻五・六は甲子であるが而して毎巻の尾に成册の年月日が記されてある。國學者で考證家たる著者が國史・國文・國語や有職故實に關する斷片的考說を集めたもので、「萬葉集」「源氏物語」「古今集」等に係る記事を初め有益な事項が多い。又何と云ふ事もなく、自然界及び世俗に就いての感想等も交つてゐるが、それにも著者の學問・識見が窺はれる。又儒者が皇朝を貶して外國に阿諛してゐるのを難じた節などもある。

〔和田〕

年表　ねんぺう　歷史　【解說】年次を表で示したもの。一般には年次毎に必要な事項を加へ載せたものを指す。「史記」に於ける十二諸侯年表、漢興以來諸侯年表の如きはその權輿であらう。我が國では、古い時代には存しなかつたやうであるが、これと頗る相似た年代記は多く存在した。年表と年代記との相違は、その形式が表の體を成してゐるか否かに存するのであらうから、畢竟程度の問題である。現に年表の名を有する「武江年表」の如きは、内容甚だ年代記に類し、「如是院年代記」の如きは、かなり表の形に接近してゐると考へられる。近世に至り史學の研究が盛んになるに從つて、年表は一方に於て研究要具としての需要を增し、一方に於て研究結果の進歩に伴つて精略多様になり、或は和漢洋の對照、或は學問、或は藝術と、各方面に分化されたる多くの年表の出現を見るに至つた。今その主なるものを列擧しよう。

〔一般的なもの〕　和漢年契一册（寛政九年刊。以下屢應頃に至る諸版がある）○新撰年表一册清宮秀堅編（安政二年刊。以下明治の中頃に至る諸版がある）○三正綜覽二册内務省編（明治十二年刊）○新撰東西年表一册　井上頴圀・大槻修二編（明治三十一年刊）○日本讀史年表一册　大森金五郎編（明治三十六年刊。以下最近に至る諸版がある）○最新世界年表一册（三省堂編、明治四十二年刊。以下最近に至る諸版がある）○維新後大年表一册　菱木忠太編（大正三年刊）○日本太陽曆年表二册　高頭式編（大正十年刊）○日本文化史年表一册　清原貞雄編（昭和五年刊）。〔特殊なもの〕皇居年表五册　裏松光世編（存採叢書所收）○逸號年表一册　藤貞幹編（寛政十年刊）○金石年表一册　西田直養編（天保九年刊）○史籍年表一册　伴信友編（弘化二年刊）○尚古年表　山本證倫編（大正十二年增補刊行）○武江年表　齋藤幸成編（嘉永三年刊。我自刊我叢書所收。大正元年增訂刊行）○日本史籍年表二册　小泉安次郎編（明治三十六年刊）○日本金石年表一册　奥田一夫編（明治四十二年刊）○近世邦樂年表三册（別項）　東京音樂學校編（明治四十五年より昭和二年刊）○日本文學者年表一册（別項）　赤堀又次郎編（大正十五年刊）○新撰洋學年表一册　大槻如電編（昭和二年刊）○新撰日本佛教年表一册　橋川正編（昭和二年刊）○讀史備考　史料編纂係編（昭和八年刊）

〔坂本〕

念佛往生記　ねんぶつわうじやうき　「大原問答」を見よ。

念佛踊　ねんぶつをどり　舞踊　【別名】「踊念佛」【名稱】佛德を讃美して、歡喜のあまり踊躍する義である。【種類】磬や鐘を鳴らす一遍上人の遊行派と、瓢箪を叩く空也上人の鉢叩き派とがある。又「なむあみだンぶ」と唱へる念佛踊を彌陀念佛といひ、「なむ釋迦牟尼佛」と唱へるのを釋迦念佛といふ。【起原】一遍上人の念佛踊の如きは、佛德に歡喜踊躍する所から起つたといふ説もあるが、又布敎の方便として、熱情的・盲目的信仰心の刺戟のため、各種の踊躍念佛が發達したといふ事も考へられる。別にこの原始的舞踊は、大群衆が足拍子をして叫ぶので、日本古來の厄拂ひと關係を見出さうとする解釋もある。【沿革】前述

の兩派は古來相對して諸國に遍在し、佛教の普及に大なる力を致したのであるが、現在は有るか無きかに寂れてしまつた。但し或は盆踊或は雨乞踊（各別項）等に行はれることによつてのみ今日も各地に殘存してゐる。いかに深く民間に入つたかを證明するものがある。

【影響】我が佛教關係の各種の歌舞の中で、念佛踊は最も通俗的であり、且つ数化の上に最も大なる使命を果したものである。而して佛教關係の原始的宗教劇の中には、古の菩薩練道の系統のものがあると共に、これに基づくものもある如く思はれる。近世初頭、出雲のお國（別項）は、念佛踊に歌を交へて踊つたが、これを出雲のお國が念佛踊を踊つたと不用意にいふ人があるが、それは間違つた言ひ方である。（空也念佛・題目踊參照）

【小寺】

の

能阿（のうあ）「能樂」を見よ。

能阿（のうあ）連歌師【本名】中尾眞能。能阿は能阿彌の略稱である。【別號】春鴎齋【閲歴】書畫に巧みで、和歌・連歌を善くした。連歌師七賢の一人である。六條道場の奉行で、後、東山殿義政の同朋となつた。「新撰菟玖波集」（別項）に、その句の採られること四十三句に及んでゐる。「なれにし人も夢の世の中」の句に附けた「山櫻けふの青葉をひとり見て」の句は名句と見られ、宗祇はこの附句を有心體とたゝへてゐる（老のすさび）。

（編井）

能問（のうもん）「問狂言」を見よ。

能因（のういん）歌人（中古三十六歌仙の一）

【姓名】橘永愷（たちばなのながやす）【別號】古曾部入道。剃髪して攝津古曾部に住んだ爲めの名である。【生歿】家集に萬壽元年三十七歳とあるのに依れば、永延二年生れとなる。歿年は未詳であるが、永承五年の「祢子内親王家歌合」にその名が見え、この時六十三歳である。【家系】諸兄の後で忠望の子。兄肥後守元愷に養はれた。【閲歴】文章生に補して肥後進士と稱した（歌仙傳）。曾て長能の宅前で車輪を損じたのを機會として、長能と師弟の約を結んだ。和歌の師匠はこれに始まるといふ（袋草紙三）。白川の關の歌は家集中巻に、萬壽二年の春、陸奥に下つた時白川の關にて詠んだとあり、「拾遺集」巻九には、「みちのくにゝまかり下りけるに白川の關にてよみ侍りける。都をば霞と共に立ちしかど秋風ぞ吹く白川の關」とある。實は都に居りながら籠居して人に會はず、窃かに色を黒くし、宛も陸奥の旅行から歸つたかの如く伴つてこの歌を披露したともいふ（古今著聞集巻五・十訓抄巻十）。併し家集には、右の歌の次に二首隔てて「なすべきことありて文みちの國へくだるに」として、甲斐の白根、筑波山の歌を初め陸奥の歌、越前を經て京都に歸つた歌凡そ十九首が連續して載つてをり、別に「想像奥州十首」があつて、陸奥に旅行したことだけは事實であると考へられ、右の説話もこの歌が佳作であるのを驚歎したあまり附會されたのであらう。雨乞の歌は家集下巻に、「長暦四年（長久元年春伊豫に下り、長久二年之夏、有天旱、無降雨、仍詠和歌獻靈社、有神應、廼施甘雨一晝夜」とあり、「金葉集」巻十にも記載がある。「著聞集」「十訓抄」に記すところは少異がある。長元の歌合には衣を被きて竊かに入りて、我が歌「黒髪の色もかはらぬ戀すとてつれなき人に我そおいぬる」に對し、相手は頼宗の歌「あふまではせめて命の惜しければ戀こそ人の命なりけれ」であるのを聞き、眉を開いて退出したのは、心私かに我が歌の勝を信じたのであらうといはれてゐる。毎年花盛りには從者勸童丸を伴つて古曾部より上洛し、大江公資の家に宿り、その家の櫻を賞した。家集には公資に贈つた歌、公資の舊宅にて詠んだ歌がある。食物には菜を食はずして飯のみを食し、勸童丸を召寄せて紙に包んだ粉を出させ、飯に加へて食したといひ、又藤原節信にあつて長柄橋の鉋屑を與へて井手の蛙を貫つたといふ（以上袋草紙）。彼は賴通の邸に出入し、道濟・長能・範永・保昌・嘉言・兼房などと交りがあつた（家集その他）。陸奥・伊豫の外に諸國にも旅行してをり、相當に漢文學の素養と興味とを持つてゐたことが注意される。【著作】玄々集○能因歌枕（各別項）○能因題林抄○八十島記。家集に「能因法師集」（別項）あり、勅撰集に入る歌は後拾遺集三十一首、金葉集二、詞花集四、千載集三、新古今集十、新勅撰集以下凡そ十七首、合計凡そ六十七首、私撰集に入るものは後葉集三首、續詞花集十一首、月詣集一首等がある。

【批評】彼の歌は鋭く強く、澄み冴えてゐる。その完成の姿はあらゆる批評的形容詞を以て説明されねばならぬ。彼は人に向つて、「すき給へ。すきぬれば秀歌は詠む」といつた（袋草紙三）といふが如く、自らも專心と熱意とを以て完成の域に達したのであらう。彼の透徹した心境は緊張した表現を決定し、力強い躍動は彼の主觀を強調してゐる。

【參考】大日本史二百二十○中古歌仙傳○尊卑分脈○袋草紙○百人一首一夕話○國文學全史平安朝篇藤岡作太郎○日本歌學史佐佐木信綱○國文學研究史野村八良（西下）

能因歌枕（のういんうたまくら）歌學書【著者】能因法師【諸本】元祿九年の刊本がある。奥書に、「右此能因哥枕は冷泉爲相卿の以眞筆令書寫畢」とある。伴信友によれば、「河海抄」に引くものと全く符合する。併しこれを「袖中抄」に引ける文と照合するに、一致する部分もあるが然らざる所もあり、又「袖中抄」に出してこの本に缺けた部分も多い。現行本は編纂も甚だ蕪雜である。かた〴〵一概に却ける事も出來ないが、又餘り善い傳本とも認め難い。次に歌學文庫第三編に收めたものがあり、甚だ零碎な斷片的なものに過ぎないが、その内容の殆ど全部は元祿刊行本中に見られる項目ばかりである。ただ約十項許りの異同があるのと、記載順序が相違してゐるのとで、恐らく前者とは違つた傳本の斷簡と考へられる。

【内容】元祿刊本について見るに、天地・道・夜・山・日等の語を列擧して、これに簡單な語釋・異名等を記したものであつて、その間に「國々の所々名」と題して、山城・大和・攝津等國別にして名所の名を掲げた部分がある。現行本ではその間何等の統一も秩序もないのであるが、個々の項目については「袖中抄」の引用文等より推して原本の體裁を甚しく損つてはゐないやうに考へられる。例へば「そとも」の語を註して、「そともとはうしろの庭を云。家のほかをも」と云へるは、「袖中抄」に「能因歌枕云、家のうしろの庭をいふ」と云ひ、歌學文庫本に「家のほかをはそともといふ」と云へるよりは完全してゐる。ただ名所の部は現行本の如き單なる地名の羅列に止まらずして、簡單な説明のついた部分もあつたのではないかと考へられる。なほ能因に「坤元儀」といふ著書のあつたことは、顯昭の「古今集注」「袖中抄」等によりて明かであるが、「顯昭古今序注」に「能因か諸國歌枕三巻あり坤元儀と號す」と云ひ、同人の「古今集注」に「能因か坤元儀は諸國の歌枕を書する物なり」と云ひ、又この「顯昭古今集注」及び「袖中抄」に引く「坤元儀」の文は、すべて地名に關してゐるので、これは純粋の地名辭書であつて、「能因歌枕」とは別の書と見るべきである。要するに「能因歌枕」は歌詞の解釋と地名の説明と二つの部分を有し、原本の體裁は現行傳本そのまゝとは信ぜられないが、個々の項目については、現行本及び上揭諸書の引用文によりて大體推察し得

【作者】能因【諸本】宮内省圖書寮所藏。治承四年・寛元四年・建長五年（定圓）・弘安八年（玄覺）、書寫校合の奥書がある。【解説】巻頭に眞名序がある。曰く、「才藝があれば利と用とがあるが、和歌は學んで益がなく、これを嗜めば衆人の嘲を受け、これを識つても何等の興味がない。然るに三代の明主は勅を下して萬葉・古今・後撰を撰せさせ給ひ、古今の撰者は詔を奉じて家集を獻じてより、この道大に興隆し、枉夫の怨言と雖も比興の詞があれば撰集に錄せられ、君子の箴詠と雖も詞義の備がなくば奏帙の外に捨てられ、善惡取捨は貴賤に拘らない云々」と論じて本集編纂の意を述べてゐる。巻を上・中・下に分つてゐるが、各巻の間には部類上の關係がなく、各巻の内にも部類はない。歌數は上巻六六首、中巻九

能惠法師繪詞

を書き添へて話を進展せしめてゐる。もと華嚴緣起などと共に、高山寺に在つた能惠得業繪といふのが、或はこれかと思はれる。畫致から見れば、蓋し鎌倉の中葉までは下らぬ頃にあつて同吟する。

【沿革】【室町期】滑稽な雜伎・雜藝（別項）から次第に展開して行つた猿樂（別項）は、鎌倉末期に至つてほゞ樂劇の體裁を整へたが、室町初

本の如き單なる地名の羅列に止まらずして、簡單な説明のついた部分もあつたのではないかと考へられる。なほ能因に「坤元儀」といふ著書のあつたことは、顯昭の「古今集注」「袖中抄」等によりて明かであるが、「顯昭古今序注」に「能因か諸國歌枕三卷あり坤元儀と號す」と云ひ、同人の「古今集注」に「能因か坤元儀は諸國の歌枕を書する物なり」と云ひ、又この「顯昭古今集注」及び「袖中抄」に引く「坤元儀」の文は、すべて地名に關してゐるので、これは純粹の地名辭書であつて、「能因歌枕」とは別の書と見るべきである。要するに「能因歌枕」は歌詞の解釋と地名の説明と二つの部分を有し、原本の體裁は現行傳本そのまゝとは信ぜられないが、個々の項目については、現行本及び上掲諸書の引用文によりて大體推察し得るのである。【價値】「綺語抄」「袖中抄」「顯昭古今集序注」等に、「四條大納言歌枕」「古歌枕」等の名が見え、平安朝中期頃、歌枕と題する書の多かつた事を察せしめるが、これ等の書は何れも後世の所謂歌枕よりは意味廣く、一般的歌詞の註釋であつて詠歌の指南としたもので、いはば歌人必携と云ふ程の意味のものと考へられる。而して「八雲御抄」學書部に、これ等の類書中特に「能因歌枕」を五家髓腦の一として掲げてゐる所より、この書が最も代表的なものとされてゐた事が察せられる。而してその内容はなほ幼稚の域を脱しないが、仲實の「綺語抄」、顯昭の「袖中抄」(各別項)等、平安朝末期以後續出した類書の先蹤として語釋書の祖として見る時、歌學史的にも語學史的にも意義が深い。ただ現行傳本が二種とも、餘り善本とし難き事は遺憾である。〔中島〕

能因法師集（のういんほふししふ）　歌集　三卷一册

【作者】能因　【諸本】宮内省圖書寮所藏。治承四年・寛元四年・建長五年(定圓)・弘安八年(玄覺)、書寫校合の奥書がある。【解説】卷頭に眞名序がある。曰く、「才藝があれば利と用とがあるが、和歌は學んで益がなく、これを嗜めば衆人の嘲を受け、これを識つても何等の興味がない。然るに三代の明主は勅を下して萬葉・古今・後撰を撰せさせ給ひ、古今の撰者は詔を奉じて家集を獻じてより、この道大に興隆し、枉夫の芻言と雖も比興の詞があれば撰集に錄せられ、君子の篇詠と雖も詞義の備がなくば奏帙の外に捨てられ、善惡取捨は貴賤に拘らない云々」と論じて本集編纂の意を述べてゐる。卷を上・中・下に分つてゐるが、各卷の間には部類上の關係がなく、各卷の内にも部類はない。歌數は上卷六六首、中卷九一首、下卷九九首、合計二五六首。このうち連句の如きものが一首ある。東國の風俗を讀んだ歌、樂府和歌、夢に小野小町が語り傳へたと稱する歌などが注意される。白樂天が元和二年の秋、年三十七で曲江の池亭にて秋を感ずる五言の詩を作つてゐるのに擬し、萬壽元年の秋、同じく三十七にして兒屋の池亭で秋を感ずる歌五首を作り、赤人の末流を以て白氏の遺文に比するといふ小序、保昌舊宅の松を見て詠んだ歌の序、並に雨乞の歌の序等は眞名で記されてゐる。〔西下〕

能惠法師繪詞（のうゑほふしゑことば）　繪卷　【解説】太秦廣隆寺藏殘缺一卷。外に谷森氏藏の斷片が知られてゐる。能惠法師が嘗て大般若經の書寫半ばにして冥途に旅立つたので、その書寫を果たすため、閻魔王宮から現世へ歸されたといふ傳説を取扱つた繪卷で、描線濶達、動相に巧みな描寫のものであり、繪の中に詞を書き添へて話を進展せしめてゐる。もと華嚴緣起などと共に、高山寺に在つた能惠得業繪といふのが、或はこれかと思はれる。畫致から見れば、蓋し鎌倉の中葉までは下らぬ頃の製作で、また恐らくは佛寺關係の繪佛師の筆であらう。鎌倉末期の行長の筆と傳ふるのは、もとより論ずるに足りない。〔田中(一)〕

能惠法師繪詞（廣隆寺藏）

能樂（のうがく）　演劇　【名義】室町初期に大成し、爾來今日まで絶えず實演してゐる一種の樂劇。「猿樂の能」(別項)に對し、明治十三年の頃、岩倉具視等が協議の末命名したものである(雜誌「能樂」三ノ二、久米邦武博士談)。尤も坂元雪鳥氏は夙く「九州治亂記」にこの名が出てゐるといひ、野々村蘆舟氏も淺野橋圃(文化文政頃の人)の「觀氏家譜」にこの名が見え、且つ同じ人の著書に「能樂餘錄」のあることを指摘してゐるが(謠曲講座二ノ六)、明治以前は一般にはこの名稱を用ひてゐなかつた。【性質】特定の簡素な舞臺に於て、二人又は數人が、その曲毎に特殊な扮裝をして仕科を演じ、多くはその一人が舞を奏する一種の樂劇で、その詞章には曲節を附けないで述べる部分と、曲節を附けて謠ふ部分とがあり、その謠ふ部分には笛・大鼓・小鼓等の奏樂を伴ひ、且つこの大部分は演出者以外の多數の者が舞臺の一隅にあつて同吟する。

【沿革】〔室町期〕滑稽な雜伎・雜藝(別項)から次第に展開して行つた猿樂(さるがく)(別項)は、鎌倉末期に至つてほぼ樂劇の體裁を整へたが、室町初期、猿樂諸座の中、藝風の優れてゐたのは、近江猿樂と大和猿樂とで、近江が風情(かゝり)を重んじたのに對し、大和は物眞似(ものまね)を主とし、それぞれ主張する所があつたが、大和の觀阿彌(別項)は必ずしも自派の藝風に拘泥せず、當時流行してゐたあらゆる民間演藝の長所を採り入れようと努め、殊に曲舞(くせまひ)(別項)を採り入れることを試みた所から、この藝は叙事詩的に著しい進展を見たらしい。恰もよし應安七年今熊野の猿樂に、將軍義滿が初めてこの藝を見て、觀阿を愛し、その子藤若丸を寵幸するに及んで、猿樂は幕府の格別な保護の下に自由に羽翼を伸ばし得べき機緣を結んだのである。藤若丸長じて世阿彌(別項)といつた人は、絶世の詩才、高遠な見識、豐富な學殖を以て、將軍の恩寵を利用して家藝の興隆を計つた。彼の功績は多々あるが、「平家物語」その他の先進文藝を題材に採つたことが、猿樂の内容を

一變して文藝的に價値づけた第一のものであつて、今日の能樂は世阿彌の手によつて大成されたのである。世阿彌の後を承けた音阿彌は創作の才能は缺いてゐたが、藝能と世故に長じて、將軍義教・義政等の寵遇を厚くし、世阿彌の大成した能樂を內包的に進展させた。爾來能樂は、將軍以下諸大名・諸大夫・諸侍に愛好せられて、正月の諸初を始めとし、幕府の年中行事として重要な地位を占めるやうになり、この末期、義輝が天文十五年元服した祝賀にも、觀世・金春の兩座をして、二日に亙り、「夜明及ニ日出ニ」まで能樂を演ぜしめたといふ(光源院御元服記)。〔織豐期〕群雄割據の勢ひを壓して天下を統一した織田信長は、能樂よりも寧ろ幸若舞曲(別項)を愛したが、後を承け繼いだ豐臣秀吉は、能樂の非常な愛好者で、屢々自ら能を演じ、諸大名にも演ぜしめ、又自分をシテとした能を新作せしめてゐる。秀吉の子秀次も亦これを愛し、五山の禪僧に命じて、金春流謠本の註釋書「謠抄」を作らせてゐる。〔德川期〕德川家康は、秀吉にも劣らない能樂の好者で、殊に觀世黑雪を愛して、四座の首位に立たしめ、秀忠も亦自ら演奏した好者で、喜多七太夫に一流を樹てしめた。三代家光の時には、能役者を幕府のお抱へとして、士分の待遇を與へた。五代綱吉の頃には、能樂も元祿文化の高潮に達した勢ひに乘じて、古來の扮裝法・演出法を整美修飾し、六代家宣の時には、喜多流の役者から中條丹波守直景・間部越前守詮房等が現はれ、殊に間部詮房は七代家繼の輔佐役とまでなつた。八代吉宗は專ら綱紀の肅正に努め、能役者出身者の參政を斥けたが、能樂が幕府の式樂であるといふ地位、四座一流の能役者が幕府のお抱へであるといふ特權は確保されてゐた。十代家治の頃には能役者の間にもこの藝術を學問的に研究する者が出て來て、喜多流の太夫健忘齋古能は「假面譜」その他の著書を殘し、觀世座の太夫元章は、謠本の改正を企てた。「明和改正本」が卽ちそれであるが、これは元章一代で廢せられ、やがて古に復する事となつた。十一代家齊乃至十四代家茂の頃の幕府は、內治外交ともに窮迫したのであるが、能樂の勢力は依然として衰へず、大老井伊直弼も亦熱心な愛護者の一人であつた。かくて德川三百年間、能樂は終始幕府の保護を受けてゐた。歷代の將軍がかくの如くであるから、全國の大名も亦數人の役者を抱へない者はなく、從つて能樂の勢力は我が國土の隅々にまで行き及んだ。〔明治以降〕明治維新、德川幕府の滅亡は、やがて幕府の保護によつて維持せられてゐた能樂の瓦解する時で、明治の當初、東京に留まるものは梅若實等數人に過ぎなかつたが、岩倉具視等が西洋のオペラに相當すべきものを我が國に求めて、この能樂に着眼し、貴族紳士と相謀つて能樂社を組織し、これを奬勵してより、一陽來復、次第に多數の鑑賞に適ひ、今日津々浦々に至るまで謠諸の聲を聞かない所がないといふ盛況を呈することとなつた。

【種類】能樂の曲數を擧げるには、舞樂の左右舞を合せて一番といふに倣つて、一番・二番といふ。そして能樂の番數は詞章現存のものが八百餘、現在實演のものが二百三十餘あり、從つてその內容・脚色も多種多樣であるが、世阿彌はこれを扮態によつて、女・老人・直面・物狂・法師・修羅・神・鬼・唐事の九に分類し(花傳書)、これ等すべての基本を舞・歌の二曲、老・女・軍の三體とし(至花道書)、「能作書」には、老・女・軍の三體に遊狂を加へ、且つ軍體の用風碎動風を合せて五種類としてゐる。大體この主張に從ひ、德川期頃から、シテの性格によつて、すべての能樂を神・男・女・狂・鬼の五種に分類し、脇能・二番目・三番目・四番目・尾能といふ五番立の演能順を定めることとなつた。

【脇能】神事物ともいふ。脇能とは「翁」(別項)の脇といふ意で、「翁」は別曲として、一日の演能の最初に演ずるものをいふ。めでたい祝言の意に叶へるために、神社の緣起や和歌を材料として、これに關係ある神靈が影向せられ、神舞・樂などを舞はれるといふやうに脚色したもの(例、高砂・弓八幡・賀茂等)。〔二番目〕修羅物といふ。戰爭に討死して修羅道に墮ちた武士の亡靈が現はれ出て、旅僧に戰爭の有樣を物語り、その回向を乞ふといふもので、材料としては「平家物語」などの軍記物から採り、その主人公が舞臺で、カケリ・働などといふ戰ひの凄じい形を演じて見せるもの(例、田村・八島・旅等)。〔三番目〕鬘物といひ、「伊勢」「源氏」などの女性を主人公として、これに戀の妄執を語らせ、序舞・中舞などの優美な舞を奏せしめるもの(例、井筒・夕顏・松風等)。〔四番目〕現在物といふ。能樂の主人公は大部分歷史的人物の幽靈や神佛の影向であるが、この種のものは、普通の劇と同じやうに、現在の生きてゐる人物として現はれるのである。從つてこれには時代物と世話物とがあり、時代物では多くは源平時代の武士、殊に義經・辨慶又は曾我兄弟を主人公として、これに男舞を舞はせる(例、小袖曾我・安宅等)。世話物は當時の出來事を材料としたものであるが、最も多いのは、我が子の行方を失つた母親の悲しみを主題としたもので、これを狂女物(別項)といひ、物狂を演ずる(例、三井寺・隅田川等)。〔五番目・尾能〕鬼畜物といひ、色々の傳說文藝から材料をとつてゐるが、この能の主人公となる鬼畜には、性質の善良なもの(例、猩々・合浦)と、兇惡なもの(例、大江山・安達原)とがあり、その兇惡なものは、勇士・高僧に退治せられ、善良なものは、人間に福德を授け、結局その曲の主人公が善惡いづれであるにしても、めでたい結末となるのである。

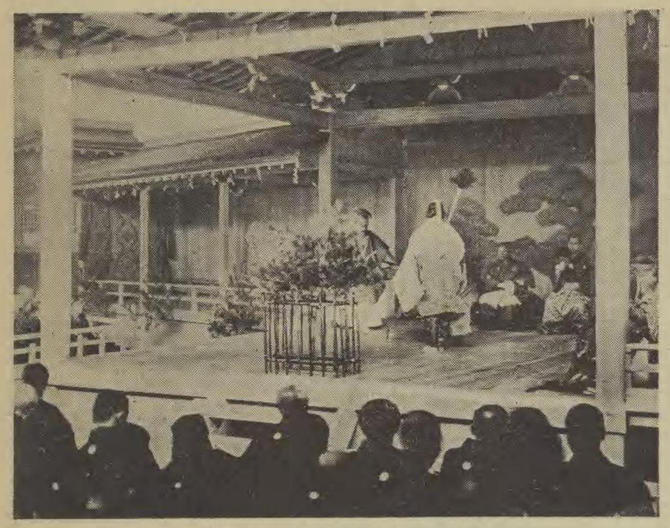
【脚色】能樂の演出者は多くの曲ではシテ・ワキの二人、ツレを伴ふ人數物でも數人に過ぎないから、その脚色は簡單、大體は千篇一律であるが、その間に多少の差別があり、これを分類すれば、下の如くである。〔複式能〕一曲が前段と後段との二部から成り、主人公シテが中入して、前段と扮裝をかへるもの。芳賀博士の命名にかゝる。〔夢幻能〕一曲の主人公シテが相手方ワキの夢に現はれる樣式に脚色した曲。「經政」「松風」等(以下この項の名稱、筆者の私案)。〔複式夢幻能〕複式に脚色した夢幻能。卽ちシテが前段では、里人・里女等として出で、中入の後、後段で神靈又は古の英雄佳人の亡靈などとしてワキの夢に現はれるもの。「高砂」「田村」等。この樣式が能樂の大部分を占めるもので、演奏效果の條で再說する。〔劇能〕主人公が神靈又は古人の亡靈でなく、現在人物として登場する相手方と關係の密接な、普通の劇と同樣な脚色をした曲。〔一段劇能〕主人公の中入しない劇能。一幕物の劇に相當するもの。「安宅」「小袖曾我」等。〔二段劇能〕主人公の中入する劇能。卽ち二幕物の劇に相當するもの。「鉢木」「烏帽子折」等。

能

翁　曲別

政經（物羅修）目番二

宅安（物在現）目番四



砂高（物事神）能脇

翁　曲別

町小洗紙草（物憂）目番三

政經（物羅修）目番二

原達安（物畜鬼）目番五

宅安（物在現）目番四

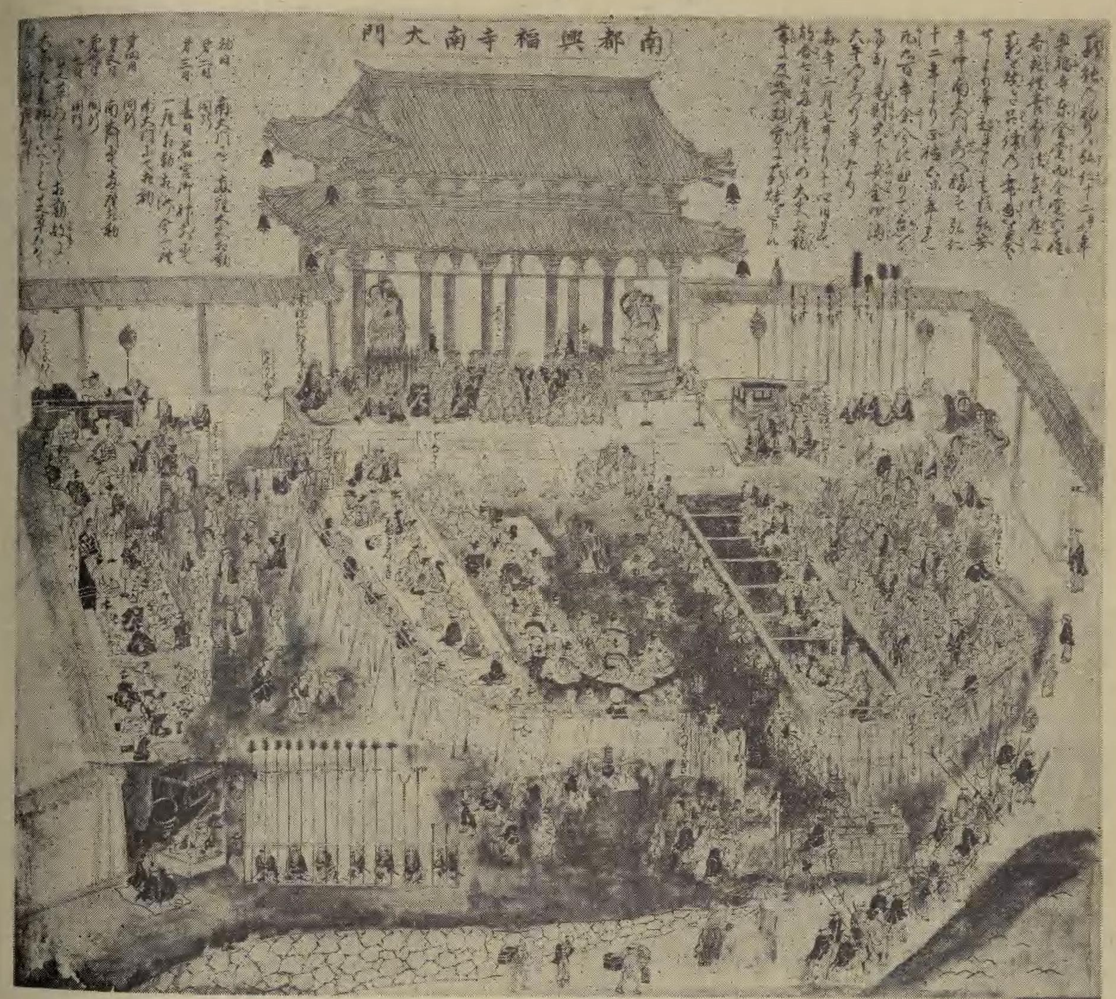
は、能樂も元祿文化の高潮に達した勢ひに乘じて、古來の扮裝法・演出法を整美修飾し、六代家宣の時には、喜多流の役者から中條丹波守直景・間部越前守詮房等が現はれ、殊に間部詮房は七代家繼の輔佐役とまでなつた。八代吉宗は專ら綱紀の肅正に努め、能役者出身者の參政を斥けたが、能樂が幕府の式樂であるといふ地位、四座一流の能役者が幕府のお抱

【種類】能樂の曲數を擧げるには、舞樂の左右舞を合せて一番といふに倣つて、一番・二番といふ。そして能樂の番數は詞章現存のものが八百餘、現在實演のものが二百三十餘あり、從つてその内容・脚色も多種多樣であるが、世阿彌はこれを扮態によつて、女・老人・直面（ひためん）・物狂（ものぐる）・法師・修羅・神・鬼・雜事（ざつと）の九に分類し（花傳書）、これ等すべての基本を舞・歌の二曲、老

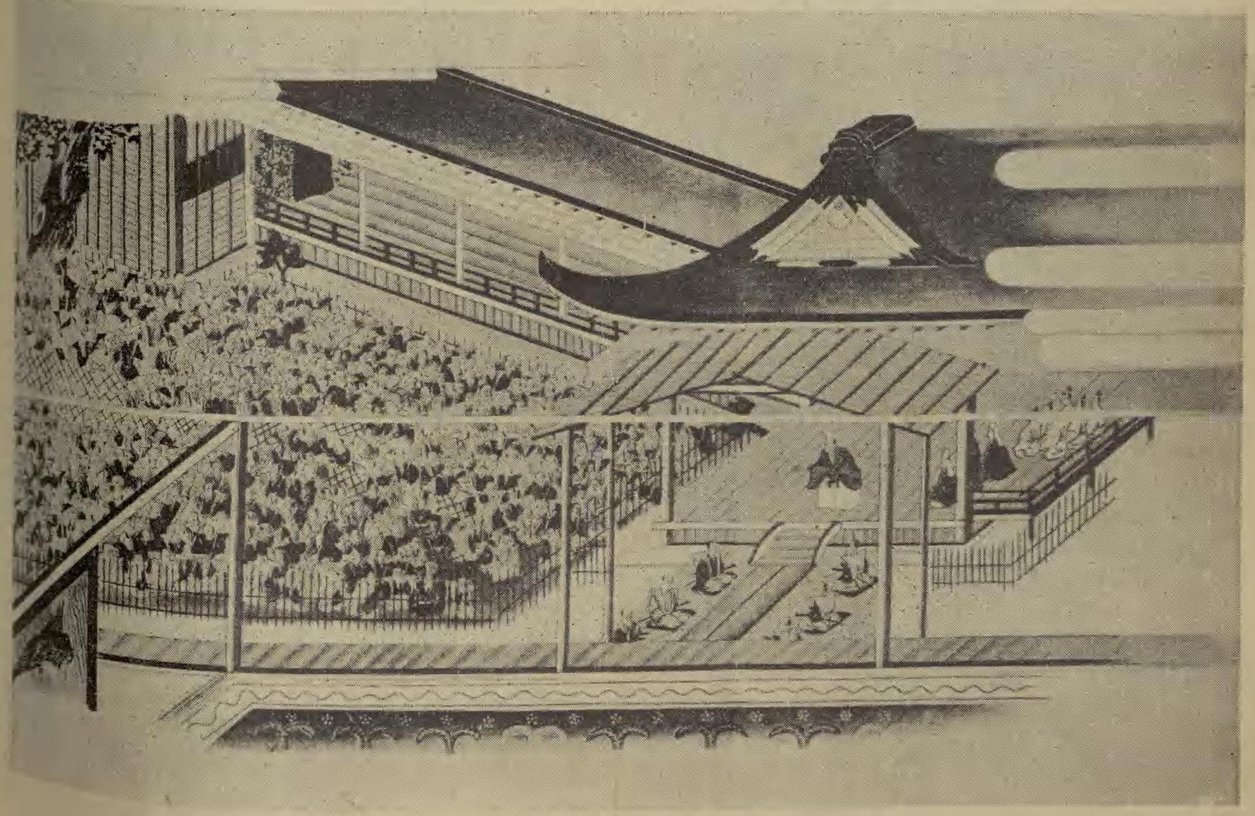
史的人物の幽靈や神佛の影向であるが、この種のものは、普通の劇と同じやうに、現在の生きてゐる人物として現はれるのである。從つてこれには時代物と世話物とがあり、時代物では多くは源平時代の武士、殊に義經・辨慶又は曾我兄弟を主人公として、これに男舞を舞はせる（例、小袖曾我・安宅等）。世話物は當時の出來事を材料としたものであるが、最も多いの

分を占めるもので、演奏效果の條で再說する。

〔劇能〕主人公が神靈又は古人の亡靈でなく、現在人物として登場する相手方と關係の密接な、普通の劇と同樣な脚色をした曲。〔一段劇能〕主人公の中入しない劇能。「幕物の劇に相當するもの。「安宅」「小袖曾我」等。〔二段劇能〕主人公の中入する劇能。即ち二幕物の劇に相當するもの。「鉢木」「烏帽子折」等。



興福寺薪能之圖



町入能之圖

〔複式劇能〕二段劇能の一種で、シテの形相の前後變るもの。「葵上」「紅葉狩」等。〔夢幻的劇能〕一曲が前後二段から成り、シテが前段では現在人物であるが、後段では亡靈である曲。「砧」等。〔劇的夢幻能〕複式夢幻能の一種であるが、そのワキが旅僧などといふシテと無關係な人物でなく、シテと相當深い關係を持つてゐる曲。「敦盛」等。

【役割】舞臺に登場する役々については、それぞれ名稱があり、一曲の主演者をシテ(爲手又は仕手と書く)といひ、その相手となるものをワキ(脇)といひ、シテ又はワキに附隨するものをそれ〴〵シテヅレ(單にツレともいひ、連とも書く)、ワキヅレといひ、子供をして演奏せしめるものを子方(こかた)といふ。以上の役々は一曲の中全部舞臺に出入することがあり、この場合に注意し、又作物の出し入れをするものを後見(うしろみ)といひ、樂屋に於て演出者の裝束を着せしめる者を裝束方といふ。

【演奏作法】能樂の演奏には一定の作法がある。その一般的なものについていへば、一曲演奏の最初に、囃子方は幕口(能舞臺參照)より、地謠は切戸(きりど)より出て、地謠は定規の座に二列に坐し、囃子方は笛・小鼓・大鼓・太鼓(太鼓は曲によつて出ない時がある)の順で、笛・太鼓は坐し、大小鼓は床几にかゝる。次に作物(つくりもの)(能の作物參照)のある時は、後見がこれを所定の場所に出し、その後、囃子方の演奏に從つてワキが幕を上げさせて登場し、以下各曲それ〴〵の脚色に從つて演出し、一曲が終れば、まづシテ、次いでワキが幕を上げさせて退場し、その後囃子方及び地謠が登場の時と同一順序で

〔複式夢幻能の一般的脚色法を示しておく。

〔前段〕—樂劇の構成、主題の說明、夢幻界への誘引

(一) 舞臺氣分の醸成

イ、ワキの獨白による主題の提示

ロ、シテの獨白による舞臺情景の描出

(二) 樂劇の構成

イ、第一次的展開—對話的葛藤による主題の說明

ロ、第二次的展開—連吟的叙事詩による主題の說明

ハ、第三次的展開—純樂的對話詩による主人公眞性の發表、夢幻劇の暗示

〔中間〕—舞臺氣分の轉換

(三) 主題の通俗的說明による夢幻界への誘引

〔後段〕—夢幻界の醸成、夢幻劇の演出

(四) 夢幻界の醸成

イ、ワキの獨白による夢幻界の凝視

を占めてゐる。

るために、貴族的典雅優麗を旨としなければならなかつたのであるが、作者自身の藝術的良心には、藝術美の極致として、閑雅靜寂を求めて止まなかつたのである。こゝに於て能樂の詞章は、花やかな美辭麗句の集團であり、その主人公は昔の才子佳人であるが、その描く所は、修羅道・地獄道の亡靈の姿であつた。役者の扮する裝束には錦繡の眩いものを用ひたが、演奏する舞臺の背景は鏡板に描かれた一本の老松に過ぎない。その科白は曲節のある謠文で、地謠の同吟をも加へてゐるが、その聲色は男性的なもので、樂器の伴奏も甚だ單調である。この矛盾した不調和な藝術を斟酌按配して行くのが、能樂の演奏である。或る

〔複式劇能〕二段劇能の一種で、シテの形相の前後變るもの。「葵上」「紅葉狩」等。〔夢幻的劇能〕一曲が前後二段から成り、シテが前段では現在人物であるが、後段では亡靈である曲。「砧」等。〔劇的夢幻能〕複式夢幻能の一種であるが、そのワキが旅僧などといふシテと無關係な人物でなく、シテと相當深い關係を持つてゐる曲。「敦盛」等。

【役割】舞臺に登場する役々については、それ〳〵名稱があり、一曲の主演者をシテ（爲手又は仕手とも書く）といひ、その相手となるものをワキ（脇）といひ、シテ又はワキに附隨するものをそれ〳〵シテヅレ（單にツレともいひ、連とも書く）、ワキヅレといひ、子供をして演奏せしめるものを子方といふ。以上の役々は一曲の中途で舞臺を出入することがあり、この場合、前段に登場するものを前ジテ、前ヅレ等といひ、後段に登場するものを後ジテ、後ヅレ等といふ。シテヅレ又はワキヅレで、單純な從者の役をなすものを、特にトモ又は太刀持ともいひ、多人數で連れ立つて出るものを立衆といふ。謠の一部分地謠を多人數で同吟するものを地謠といひ、シテが中入して再び登場するまでの間、主として獨りで語るものを狂言又はヲカシといひ、笛・小鼓・大鼓・太鼓の役を勤める者を囃子方（能囃子方參照）と呼ぶ。これ等のうち、狂言・囃子方は世阿彌の頃から既に分業制度になつてゐたが、シテ・ツレ・ワキ・地謠は、その曲毎に配役せられるもので、分業になつてはゐなかつた。が、室町末期にまづワキを勤める特別な家柄が出來てワキ方と稱へ、徳川期になると、ツレ方の家柄も定まるやうになつた。なほこの外に、舞臺の後方にゐて演出者の裝束その他に手落ちのないやうに注意し、又作物の出し入れをするものを後見といひ、樂屋に於て演出者の裝束を着せしめる者を裝束方といふ。

【演奏作法】能樂の演奏には一定の作法がある。その一般的なものについていへば、一曲演奏の最初に、囃子方は幕口（能舞臺參照）より、地謠は切戸より出て、地謠は定規の座に二列に坐し、囃子方は笛・小鼓・大鼓・太鼓（太鼓は曲によつて出ない時がある）の順で、笛・太鼓は坐し、大小鼓は床几にかゝる。次に作物（能の作物參照）のある時は、後見がこれを所定の場所に出し、その後、囃子方の演奏に從つてワキが幕を上げさせて登場し、以下各曲それ〳〵の脚色に從つて演出し、一曲が終れば、まづシテ、次いでワキが幕を上げさせて退場し、その後囃子方及び地謠が登場の時と同じ順序で退場する。【演奏様式】能樂の演奏者はすべてその曲柄によつて規定せられた特殊な裝束を着ける筈のものであつて、これを裝束能といひ、夏季などにこの裝束を略して、ただ袴だけを着けて演奏するものを袴能といふ。囃子もなく仕科も演ぜず、ただ坐つたまゝで一曲を謠ふものを素謠といひ、一曲のうち、節附のある一部分を謠ふものを小謠といひ、小謠に對して仕科を演ずるものを仕舞といふ。

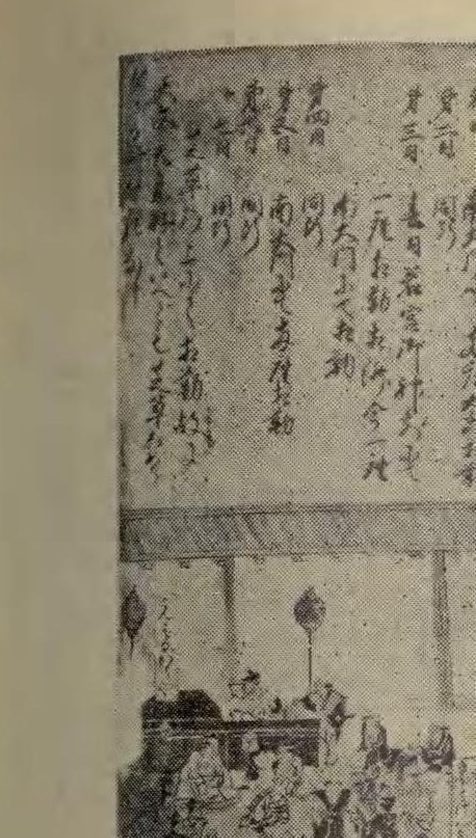
【演奏效果】能樂の中心的興味は、主として舞（別項）に置かれてゐるが、その舞は神事物・修羅物・鬘物等、多くは神體が影向し、或は幽靈・精魂が出現して演奏するのであるから、一曲全體の構想にも、事件の展開・葛藤の曲折に苦心する外に、神體の影向、幽靈・精魂の出現にふさはしい夢幻的情趣を釀成することに主力を注ぎ、從つて夢幻劇としての效果を擧げることを期待してゐる。今こゝに能樂の大部分を占めてゐる複式夢幻能の一般的脚色法を示しておく。

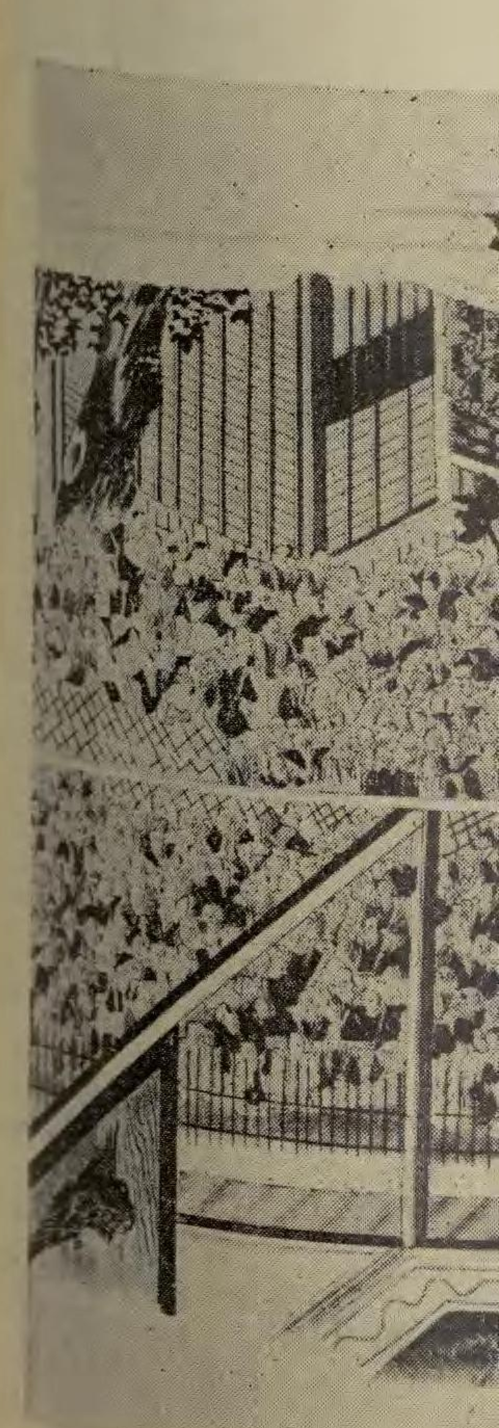
〔前段〕—樂劇の構成、主題の説明、夢幻界への誘引
（一）舞臺氣分の釀成
イ、ワキの獨白による主題の提示
ロ、シテの獨白による舞臺情景の描出
（二）樂劇の構成
イ、第一次的展開—對話的葛藤による主題の説明
ロ、第二次的展開—連吟的叙事詩による主題の説明
ハ、第三次的展開—糺問的對話詩による主人公眞性の發表、夢幻劇の暗示
〔中間〕—舞臺氣分の轉換
（三）主題の通俗的説明による夢幻界への誘引
〔後段〕—夢幻界の釀成、夢幻劇の演出
（四）夢幻界の釀成
イ、ワキの獨白による夢幻界の凝視
ロ、後ジテの獨白による夢幻界の現出
ハ、連吟的叙事詩による夢幻界情景の描出
（五）夢幻劇の演出
イ、對話的葛藤による科白劇的演出
ロ、連吟的叙事詩による舞踊的演出
ハ、舞の演奏
ニ、劇の解決—叙事詩による作意の發表

凡そ右のやうな徑路を以て、觀客はワキに誘導せられつつ、われ知らず夢幻界に入り、夢幻的情趣に浸ることとなるのである。

【藝術美】能樂の藝術美は幽玄にある。幽玄について、世阿彌は「柔和なる、のどかなる、優しくして、美しくて、なび〳〵として、靜かなる、面白い」のがそれであると説いてゐるが（覺習條々）、その極致としては、「しほれたる」（花傳書）、「冷えたる」「さび〳〵としたる中に、何とやらん感心のある」（覺習條々）ものでありたいと望んでゐる。即ち能樂大成時代、室町期の武士は甚しく平安朝貴族に憧憬してゐたのであるから、能作者は彼等觀衆の感興を催すために、彼等の高尚な趣味に叶へるために、貴族的典雅優麗を旨としなければならなかつたのであるが、作者自身の藝術的良心には、藝術美の極致として、閑雅靜寂を求めて止まなかつたのである。こゝに於て能樂の詞章は、花やかな美辭麗句の集團であり、その主人公は昔の才子佳人であるが、その描く所は、修羅道・地獄道の亡靈の姿であつた。役者の扮する裝束には錦繍の眩いものを用ひたが、演奏する舞臺の背景は鏡板に描かれた一本の老松に過ぎない。その科白は曲節のある韻文で、地謠の同吟をも加へてゐるが、その聲色は男性的なもので、樂器の伴奏も甚だ單調である。この矛盾した不調和な藝術を斟酌按配して行くのが、能樂の演奏である。或る時は觀衆の嗜好に投じて艷麗に流れたこともあらう。又或る時は演者の自信に從つて寧ろ簡素に失したこともあらう。紆餘曲折しつつも、花やかなもの、艷やかなもの、眩しいもの、一切をいぶしにかけてさびとした時に、能樂の落ちついた味ひが出て來たのである。現はれた結果は、さび〳〵とした冷えたものであるが、その中に豐かな美しさを藏めてゐるのが、この藝術のいひ知れぬ暖かみである。複雜した矛盾した數多の要素を一纏めにして幽玄閑寂といふことに單純化したところに、能樂の完成した藝術美を發揮してゐる。

【元曲との關係】能樂は、我が國で次第に發達したものであらうと思はれるが、徳川期に荻生徂徠は「南留別志」に、太宰春臺は「獨語」に、能は元の雜劇の影響を受けてゐると説き、新井白石は「俳優考」にこの説を詳述してゐる。これに對し、津田左右吉博士は「雜劇と能樂」





(東洋學報四四)にその差異を説いたが、田邊尙雄氏は「日本音樂の研究」にやはり兩者の關係を認め、七里重憲氏は「謠曲と元曲」を著はして兩者の關係を詳述してゐる。これに對してまた高野辰之博士は「日本歌謠史」にその關係を否定し、尾上八郎博士は、日本文學大系「謠曲」の解題に、野々村戒三氏は「能樂略史」(謠曲講座第二期)に七里氏の説を疑つてゐる(この項につきては「支那文學の影響」參照)。

【影響】 德川期の殆どすべての文藝に影響を與へてゐて、歌舞伎・長唄・琴唄(各別項)等に直接これを移植したものは、特に本行物(別項)といつてゐる(謠曲・能舞臺・能の型・能の作物・能裝束・能囃子・猿樂參照)。

【參考】 世阿彌十六部集 ○禪竹集 ○舞正語磨 ○猿聲 ○奈良土産 ○奈良土産返答 ○音曲玉淵集 溝口敬明 ○能樂蘊奥集 木下敬賢 ○能のしをり 大和田建樹 ○能の見方謠の聞き方 池内信嘉 ○能樂の鑑賞 野口米次郎 ○能樂大辭典 ○謠曲講座 ○能樂(雜誌) ○謠曲界 ○能樂書報 ○大觀世 ○非專門の雜誌に載つた能樂記事 丁々書樓主人(謠曲界一四ノ二) ○謠曲物語 和田萬吉 ○猿樂傳記 著者未詳 ○猿樂沿革考 川崎重恭 ○能樂史 横井春野 ○能樂盛衰記 池内信嘉 ○能樂略史 野々村戒三(謠曲講座) ○能樂後史 佐々政一(近世文藝雜話) ○能樂史 佐成謙太郎(日本風俗史講座) ○謠曲大觀 同上 ○世阿彌の藝術 小宮豐隆(改造昭和八ノ八・一〇) 〔佐成〕

能樂五流 のうがくごりう 能樂 【名義】 能樂の主要なる演奏者シテ方猿樂四座(別項)の觀世・寶生・金春・金剛(各別項)に、江戸初期一流を認められた喜多(別項)を加へて能樂五流とする。五流のうち、觀世・寶生と金春・金剛・喜多とは、その間の詞章及び演奏樣式の差異がや丶著しくて、前二流を上懸(かみがかり)といひ、後三流を下懸(しもがかり)といふ。五流の外、大正十年觀世流の梅若(別項)一派は、梅若萬三郎を家元として一流を樹立したが、その實演は從來の觀世流と變りがない。 〔佐成〕

能管 のうくわん 樂器 【別名】 能笛(のうてき)・笛(ふえ) 【名義】 能樂や江戸長唄(各別項)の囃子に用ひられる樂器。橫笛の一種。【構造】 雅樂に用ひられる橫笛(別項)と同じく、指孔は七つある。その大きさは雅樂の橫笛よりも少しく大である。管の上端を首又は頭といひ、その下端を尾或は露落といふ。管は竹で作り、內部は全部朱漆で塗り、外部は歌口及び指孔並に節の所を除き、他は凡て樺・櫻・藤などの皮で細かく卷き上げ、漆で塗り固めてある。竹の節は尾から約一尺五六分の所にあるやうに作られて居り、又筒口に別の管を挿入して徑口を狹小にしてあることが、能管の特色である。その音律は、第一孔壹越、第二孔平調、第三孔双調、第四孔黃鐘、第五孔鸞鏡、第六孔盤涉、第七孔上無である。【演奏法】 能樂に於ては、笛は、小鼓・大鼓・太鼓と共に用ひ、これを囃子と呼ぶ。笛は囃子の首座を占めて居り、諸の伴奏をする時には、これを「あしらひ」といふ。それで笛を用ひる最も主なるところは、出端と舞とである。出端には、次第・一聲・名乘・出端・早笛・大べし・下端・來序の區別があり、何れも役者の舞臺に出る時に笛を吹く仕方である。又舞には、序の舞・眞の序・中舞・天女舞・破の舞・早舞・急の舞・男舞・神舞・神樂・樂・鞨鼓・翁の舞・千歲の舞・亂・獅子・亂拍子の區別がある。この區別によつて笛の吹き方を異にする。それで能管の吹き方に、第一孔から第四孔までを主にした音階を黃鐘調と云ひ、中舞・男舞・神舞・序舞・神樂・樂などに用ひ、又第五孔から第七孔までを主にした音階を盤涉調と云ひ、盤涉早舞・盤涉樂などに用ひてゐる。長唄に於ても、能管は小鼓・大鼓・太鼓と共に、囃子樂器として用ひられる。これは長唄の方で能樂の手をその儘用ひた所や、或は能に似せて作つたものに用ひられるのであつて、例へば序の舞・破の舞・急の舞・早舞・神舞・神樂・一聲・くるひ・來序・出端などにはこれを用ひる。來序とは、帝王・神・神仙・天狗などの進退に用ひるものをいふ。かやうに長唄の囃子として用ひられる外に、歌舞伎の所作事にも用ひられ、時として劇の下座音樂(歌舞伎劇音樂參照)の中にも採り入れられることがある。併しそれはもと長唄囃子から來たものである。【沿革】 能管はもと雅樂の橫笛から出て、これを少しく變形したものであるが、平安朝の末に田樂(別項)に於て用ひられた所の笛は、能管と大同小異であるから、能管は直接には田樂の笛から採り用ひられて、能樂に入つたものらしい。勿論これが能樂の囃子樂器となつたのは、世阿彌元淸の頃にあると言つて差支がない。能樂の笛には一噌流・森田流・春日流・長命流・貞光流の五流がある。又一書には、一噌流・森田流・春日流・湖流の四流であるともいふ。以上の中で、今日では一噌流及び森田流が主として行はれてゐて、他の流は殆ど消えてしまつた。長唄に於ては、能管は篠笛と合せてこれを修めるのであつて、住田・梅屋・望月等の家がある。 〔田邊〕

能狂言 のうきやうげん 演劇 【名義】 狂言は狂夫の言または理に戾る言といふのが第一義であるが、鎌倉時代から笑戲の意に用ひられ、猿樂能(別項)に對して狂言能と言はれ、狂能とも書かれてゐる。なほそれの用法に基いた壬生狂言・歌舞伎狂言・照葉狂言(各別項)に對して能狂言と言はれるやうになつた。【成立】 白河朝以降發達した猿樂の諸演戲のうち、物眞似を本體とする笑戲が成長し發展したものである。夙く鎌倉時代に行はれてゐたが、室町時代の初頭に非常な勢ひで展開し、能樂界に觀阿彌・世阿彌(各別項)の二天才が出て、その大成を出現した頃、漸次發達し來つた狂言も亦大成した。そしてこの二つの舞臺藝術が併行して、將軍初め堂上武家に賞愛され、また民衆の娛樂として盛行し、その他の雜藝(別項)を附隨させ、或は零落させるやうになつた。【流派】 初めは殆ど設備のない場所で行はれてゐたものが、漸く臨時の座を設け、後にはそれぞれ舞臺を有つやうになり、集團的に或は地方的に區劃されてゐた團體が互に舞臺の藝に對する觀念に意識的なものが生じ、遂にそれぞれ藝風を支持するやうになり、次第に流派の發生を見るに至つた。室町時代末期には、大藏流の傳統が明かに見られるやうになり、次いで江戸時代初期には、大藏流に鷺流が對峙して更に和泉流が鼎立し、能樂と共に幕府の式樂となつて武家に抱へられた。即ち大藏流は金春座、鷺流は觀世座の座附として幕府の祿を食み、和泉流は尾州藩に抱へられ、流派的意識が加はり、傳統を固守して永く三流の存在が知られた。なほ大藏流は八右衞門派、鷺流は傳右衞門派、和泉流は野村派・三宅派を派生してゐる。然るに明治維新となつて斯道中絕し、その後衰退の非運に傾いて家元は退轉し、今は纔に大藏流・和泉流の傳統が存するのみである。〔大藏流〕 大藏流の家元系圖によると、玄惠法印を初代とし、日吉彌兵衞・同彌太郎・同彌次兵衞・同彌太郎・同彌太郎・同彌右衞門とあるが、これは大藏流の人々としては深く信ずるに足りない。併し近江猿樂の搖籃地である近江には、夙く狂言が發達してゐて、日吉氏は「蔭涼軒日錄」に見える日吉座の形成をなした者であらう。そして日吉氏の五代から金春座へ出て奈良に住むやうになつたらしい。これは大和猿樂の勢力に參じた者があつたと見られる。かくて六代日吉彌右衞門は奈良に生れ金春禪竹の子四郎次郎を養子としたと傳へる。この金春四郎次郎が大藏流の元祖と想定される。次は伊賀國阿保の城主島岡彈正の子で、宇治に住んで宇治彌太郎政信といひ、後、大藏彌太郎また彌右衞門と言つた。これより代々彌太郎後彌右衞門といふ。次は金春彌太郎後大藏彌右衞門、大藏は

達に併行してからのことであらう。

〔鷺流〕 鷺流系圖といふやうなものに據ると、何れも足利義滿頃の路阿彌を始祖としてゐるが、鷺を名乘つた三之丞に至るまでは、鷺流の人として明かでない。三之丞は觀世宗節の時代の人で、日吉滿五郎筋の弟子、宇治源右衞門の弟子であるといふ。即ち日吉氏の一統が近江から奈良に移住してから、後の大藏流・鷺流に分流するやうになつたのであらう。三之丞の甥鷺仁右衞門宗玄は、德川家康の命で寶生方から觀世座に屬し、慶安四年九十三歲で歿したが、この三之丞或は宗玄を流祖に擬すべきであらう。宗玄に次いで、仁右衞門宗慶・仁右衞門宗悅・仁右衞門宗受が繼いだ。この宗受から代々權之丞後仁右衞門を襲つてゐる。最後の權之丞は初め三之丞といひ、明治

〔和泉流〕 室町時代の末期から、江戸時代の初頭に於て發達した大藏流と鷺流とは、從來集團的に或は地方的に藝風を持續したものをも統轄し衰滅させた。「猿樂傳記」に見える脇本佐左衞門といふ一流の家も、田中といふ流も絕え、また鷺流の傳書に見える京流も南都禰宜流も、遂に勢力を持つことが出來なかつたが、この京流を代表すると思はれる和泉流が、大藏流・鷺流と鼎立した。和泉流に就いては山脇家流傳統之碑、「名古屋市史」等によると、江州坂本の隱士佐々木岳樂軒が狂言を善くして、その甥佐々木源五郎に傳へた。源五郎は幼名を和泉、諱を元幸といひ、京都にあり、後に坂本に歸つた。この弟子に甥の鳥飼五郎左衞門元純と、日吉滿五郎超運とがあつた。元純は早世し、超運は甥の宇治源右衞門光映

元和八年京都に住み、呉服商を營んで細川侯の御用を勤めたが、又三郎重信の時に狂言を以て宮家公家に出入し、和泉流の門人となり、尾州藩に雇はれた。正德元年七月七十一歲で歿してゐる。この人を初代とし代々野村又三郎と稱した。次は又三郎信之、次は信明、この代から尾州藩の御抱役者となり幕末に及んでゐる。次は信幸・信成・信興・信名・信喜・信茂と相繼いだが、廢藩となつて信茂は大阪に移り、その後を信英が襲つて狂言を業としてゐる。また三宅派は、三宅藤九郎法名淨榮を家祖としてゐる。家元家格として扱はれ、加州藩の御抱役者であつた。二代は藤九郎法名淨悅、元文元年九月四十七歲で歿した。三代は藤九郎喜納、その弟惣三郎が別家を立てた。四代は藤九郎納正、弟乙九郎が惣三郎家を嗣

衛・同彌太郎・同彌次兵衛・同彌太郎・同彌太郎・同彌右衛門とあるが、これは大藏流の人々としては深く信ずるに足りない。併し近江猿樂の搖籃地である近江には、夙く狂言が發達してゐて、日吉氏は「陰涼軒日錄」に見える日吉座の形成をなした者であらう。そして日吉氏の五代から金春座へ出て奈良に住むやうになつたらしい。これは大和猿樂の勢力に參じた者があつたと見られる。かくて六代目吉彌右衛門は奈良に生れ金春禪竹の子四郎次郎を養子としたと傳へる。この金春四郎次郎が大藏流の元祖と想定される。次は伊賀國阿保の城主島岡彈正の子で、宇治に住んで宇治彌太郎政信といひ、後、大藏彌太郎また彌右衛門と言つた。これより代々彌太郎後彌右衛門といふ。次は金春彌太郎後大藏彌右衛門、大藏は金春家の分家姓である。次は大藏彌右衛門虎清、慶長元年三月歿し、子彌右衛門虎清繼ぐ。正保三年七月八十二歳で歿し、彌太郎虎時後の彌右衛門虎明が家督を取り、寛文二年正月歿し、その後彌右衛門榮虎・同緣虎・同虎純・同虎敎・同虎里・同虎寬・同虎文・同虎武・同虎年・同虎丸、後の虎一と相繼いだが、虎一は斯道の人として成らず家藝を廢してゐる。なほ虎明の弟大藏八右衛門淸虎が分家して八右衛門派の先祖となり、二代八右衛門成虎、三代時虎、四代道保、五代則虎、六代虎長、七代虎光、八代虎雄と相續し、虎雄は元治元年歿して後繼者がなく、小泉菜の二男松之助を繼がせたが、藝道廢退の有樣に松之助辭退して八右衛門家も斷絶した。かくて大藏流は、現在纔かに山本東次郎・茂山千五郎・茂山忠三郎等によつてその流儀を傳へてゐる。大藏流の傳統が流儀としての自覺を以て發達したのは、鷺流の發達に併行してからのことであらう。

【鷺流】鷺流系圖といふやうなものに據ると、何れも足利義滿頃の路阿彌を始祖としてゐるが、鷺を名乘つた三之丞に至るまでは、鷺流の人として明かでない。三之丞は觀世宗節の時代の人で、日吉滿五郎筋の弟子、宇治源右衛門の弟子であるといふ。卽ち日吉氏の一統が近江から奈良に移住してから、後の大藏流・鷺流に分流するやうになつたのであらう。三之丞の甥鷺仁右衛門宗玄は、德川家康の命で寶生方から觀世座に屬し、慶安四年九十三歳で歿したが、この三之丞或は宗玄を流祖に擬すべきであらう。宗玄に次いで、仁右衛門宗慶・仁右衛門宗受が繼いだ。この宗受から代々權之丞後仁右衛門を襲つてゐる。最後の權之丞は初め三之丞といひ、明治初年まで舞臺を勤めてゐたが、漸く家藝を廢し亡命して跡を絶つた。なほ傳右衛門派は鷺又之丞の子傳右衛門了意に始まつた。了意の後は娘の儲けた山三郎鐘山が繼ぎ、元祿八年六月鐘山歿して了意の末子傳右衛門保敎が相續した。次は傳右衛門空山、寶曆九年十二月歿した。その後五代六代相繼ぎ、七代目はひしや彌右衛門といふ町人の次男福三郎を養子とし、次いで仁右衛門の三男綾之進を養子として傳四郎と改め、家督を相續させたが、傳四郎に就いて本家との間に流派上の悶着があつて、文政元年九月傳四郎を廢し、先代傳右衛門の妹の生んだ小傳次を養子とした。然るに時勢の轉變に從ひて絶家し、觀世座常詰狂言の鷺流は全く退轉してしまつた。なほ明治初年頃までは、鷺流の遺弟名女川庄三郎・霜野巖苔・長命榮次郎等があたが、彼等が歿して今は杳として鷺流の特技を見ることが出來ない。

【和泉流】室町時代の末期から、江戸時代の初頭に於て發達した大藏流と鷺流とは、從來集團的に或は地方的に藝風を持續したものをも統轄し衰滅させた。「猿樂傳記」に見える脇本佐左衛門といふ一流の家も、田中といふ流も絶え、また鷺流の傳書に見える京流も南都禰宜流も、遂に勢力を持つことが出來なかつたが、この京流を代表すると思はれる和泉流が、大藏流・鷺流と鼎立した。和泉流に就いては山脇家流傳統之碑、「名古屋市史」等によると、江州坂本の隱士佐々木岳樂軒が狂言を善くして、その甥佐々木源五郎に傳へた。源五郎は幼名を和泉、諱を元幸といひ、京都にあり、後に坂本に歸つた。この弟子に甥の鳥飼五郎左衛門元純と、日吉滿五郎超運とがあつた。元純は早世し、超運は甥の宇治源右衛門光映及び元純の遺子鳥飼和泉元光に敎へた。元光は後に伯父の山脇姓を冒し、實子源助に傳へた。この源助が京都にあつて流派としての形勢をなし、慶長十九年尾州藩に抱へられて流派としての成立をなしたと考へられ、その後三代和泉元純まで京都に住み、永く京流と呼ばれてゐたと推せられるから、藝統は古い京座の流を汲んだものと想像される。源助は後に五郎左衛門と改め、諱を元宜と言つた。寬永十二年隱居して甥に職を讓つた。山脇五郎左衛門元永といふ。早世したので元宜の外孫吉三郎をして家を繼がした。山脇和泉元信といふ。これより山脇和泉と稱し、元知・元政・元喬・元貞・元業・元賀・元洧・元照と相繼いだが、大正五年二月元照が歿して後は殆ど家藝を廢してゐる。なほ和泉流に屬するものに野村派・三宅派がある。野村家は丹後宮津の鄕士で、慶長三年細川侯に隨つて熊本に下り、元和八年京都に住み、吳服商を營んで細川侯の御用を勤めたが、又三郎重信の時に狂言を以て宮家公家に出入し、和泉流の門人となり、尾州藩に雇はれた。正德元年七月七十一歳で歿してゐる。この人を初代とし代々野村又三郎と稱した。次は又三郎信之、次は信明、この代から尾州藩の御抱役者となり幕末に及んでゐる。次は信幸・信成・信興・信名・信喜・信茂と相繼いだが、慶應となつて信茂は大阪に移り、その後を信英が襲つて狂言を業としてゐる。また三宅派は、三宅藤九郎法名淨榮を家祖としてゐる。家元家格として扱はれ、加州藩の御抱役者であつた。二代は藤九郎法名淨悅、元文元年九月四十七歳で歿した。三代は藤九郎喜納、その弟惣三郎が別家を立てた。四代は藤九郎納正、弟乙九郎が惣三郎家を嗣ぎ、法號を行樂といつた。五代は藤九郎正之、また弟乙九郎が惣三郎家の三代を冒し、惣三郎祐之といつた。六代は藤九郎尙之といふ。代々京都に住んでゐたが、七代庄市正信は東京に移り、明治十八年に歿した。その後子幼く三代惣三郎祐之の養子惣三郎を入れて繼がしめたので、惣三郎家は絶え、またその歿後子榮太郎早世して後繼者がない。今この流を汲む者に野村萬齋がゐる。

【組織】〔戲曲〕一般に狂言記といはれるもの、實際は傳書或は六義（和泉流）といつてゐる狂言の舞臺的表現を指示する戲曲（狂言記參照）は極く稀れには一人のものもあるが、多くは二人・三人、やゝ複雜なもので數人の役者によつて演ぜられる。その主な役をシテ或はオモといひ、助演者をアドといふ。アドが二人、三人になるとアド・小アド・三のアドといはれる。「靱猿」（別項）の猿等は子方と呼ばれてゐるが、

本風俗史講座）○謠曲大觀同上○世阿彌の藝術小宮豐隆（改造昭和八ノ八・一〇）〔佐成〕

能樂五流（のうがくごりう）　能樂【名義】能樂の主要なる演奏者シテ方猿樂四座（別項）の觀世（ぜ）・寶生（ほうしやう）・金春（こんぱる）・金剛（こんごう）（各別項）に、江戸初期一流を認められた喜多（きた）（別項）を加へて能樂五流とする。五流のうち、觀世・寶生と金春・金剛・喜多とは、その間の謠曲及び演奏樣式の差異が端・早笛・大べし・下端（さがり）・來序（らいじよ）の區別があり、何れも役者の舞臺に出る時に笛を吹く仕方である。又舞には、序の舞・眞の序・中舞・天女舞・破（は）の舞・早舞・急の舞・男舞・神舞・神樂（かぐら）・鞨鼓（かつこ）・翁の舞・千歳（せんざい）の舞・亂（らん）・獅子・亂拍子（らんびやうし）の區別がある。この區別によつて笛の吹き方を異にする。それで能管の吹き方に、第一孔から第四孔までを主にした音階を實際調と云ひ、中流が主として行はれてゐて、他の流は殆ど消えてしまつた。長唄に於ては、能管は篠笛と合せてこれを修めるのであつて、佳田・梅屋・望月等の家がある。〔田邊〕

能狂言（のうきやうげん）　演劇【名義】狂言は狂夫の言または理に戻る言といふのが第一義であるが、鎌倉時代から笑戲の意に用ひられ、猿樂能（別項）に對して狂言能と言はれ、狂能

非常に效果を減ずるということはないから、省略される場合もある。

【演出】〔舞臺〕その初め、設備のない場所や一定しない舞臺でも行はれてゐたであらうが、漸次一つの舞臺が定められた。それは今の能舞臺（別項）の樣式とかけ離れたものではなかつたであらう。凡そ三間四方三方丸あきで鏡板に老松の背景をもち、幕のない橋掛りをもつたものである。〔格式〕狂言が發達して流派を生じ、各流が流儀を樹て、師傳を尊重するやうになつては、自由な束縛のない表現樣式を排斥し、只管に直觀的な修業を要求してそれ〴〵格式を設け穉古の順位とした。それを位と附と言つてゐる。各流いくらか相違はあるが、修練を經てから行はるべきもの、即ち素養があり、なほ日傳によつて鑑識を要すべきものを習物と言つてゐる。それにも小習・大習、或は重習等の順位があるが、各流「狸腹鼓」「花子」「釣狐」（各別項）は極めて重い習物とされてゐる。そして習物が演ぜられる時は、後見は麻の袴衣を着けるとか、それに地を要するものの時は、地に出る者も同樣、麻の袴衣を着けることになつてゐる。〔番組〕上演番數は、能五番に對して狂言四番、能がありて狂言があり、また能が出るといふのが一般に行はれた形式で、世阿彌の「習道書」の「信のさるがく三番、きうけん二番已上五番也」の形式を過つて番數がふえたもので、狂言盡といつても都合のよいことである訣りでなく、この二最も緊張した形で演ぜられてゐる。〔扮裝〕登場人物は場合により面・裝束・小道具等を用し組合せは能及び狂言の演者のために、かうつの裝飾が、觀客に對して互に大きな力を影響させる舞臺上の效果からも、重大な意義のあることである。そして番組を作るに當つて

り、登場と最引とからなり、面も作られてゐる。裝束は段熨斗目卓袱・肩衣・袴などの種類があり、乙御前・小武惡・はうそのぶあく等の種類があり、前の面には、ふくれ（頬）・姥などの種類があつて、作り武惡には、猿武惡・癋武惡・星武惡・中之川武惡・松屋武惡・大武惡・武惡・鬼武惡・黒武惡・赤武惡・黒髭・赤頭・黒頭・白頭・垂・兜巾・篠懸・調伏・掛守・數珠・鐘・唐團扇等があり、狂言獨特のものに、鍬・鍬形・庖丁・剃刀・鎌・髪抜・針・釣針・槌・小槌・七つ道具・肩箱・俎・鮫・包・鏡・棒・鳴子・炮碌・瓢箪・樽・袋・草鞋・錫杖・引鋲・轡・鞭・柄杓・髭・鯛・鯉・蘭扇・鈴・草の實の珠數・眞鍮・熊谷笠・一文字笠等がある。共に初めから持つて出演するものと（小サ刀・扇）、演技中後見によつて渡されるものとがある（薙刀・鞠）。〔裝置〕狂言は舞臺に裝置が設けられることがある。それは作り物といつて簡單な無維作なもので、それぞれは能の一部分と類似してゐる。〔唐人相撲〕の屋臺と能の「花筐」の「花」とは同じものである。

小に洞烏帽子・梨打烏帽子・風折烏帽子・侍烏帽子・素袍・無地腰帽・紋附腰帽・胴着・腹巻・鎧直垂・大口・半切・法被・肩衣・袴・水衣・袴・法被・肩衣・袴・水衣・袴・小

盆人」は能の「松風」等に用ひられる臺枠に、その上五尺ばかりの左右へ擴がつた作り花をつけた櫻の立木が出る。「庵の梅」も同樣にして梅の立木が出る。併し大藏流は臺屋が出るが鷺流は出ない。また和泉流は臺屋に梅の造花がついて出る。それ等は狂言の演ぜられる前に舞臺に設けられるが、「仁王」の一疊臺、「泣尼」の高座等は、演技中に後見によつて切戸から舞臺に運ばれる。〔音樂〕狂言には、來序・カケリ・ハタラキ・セメ・樂・神樂・棒・カッコ・獅子・三段の舞・シャギリといふ音樂が、裝飾的に儀興的に設けられるものがある。來序といふのは、笛・大鼓・小鼓・太鼓の四拍子のあしらひで、「唐相撲」の大王が出る場合の如く、ただその音樂によつて位を出すもの。カケリは舞の如き型に笛・大鼓・小鼓のあしらひが伴ひ、勇壯な氣分を起させるもの（「思沙門」「松脂」等）。樂は舞に四拍子が伴ひ、めでたい音樂をきかせ（「唐相撲」「茶子鹽竈」等）、神樂は舞に笛・小鼓を伴ひ、賑やかな音樂をきかせる（「石神」「夫鮫」等）。カッコは舞に笛・大鼓・小鼓が伴ふもので、「松囃子」「煎じ物」等に於けるやうな、羯鼓を打つ場合の氣分を助けるもの。三段の舞は四拍子が伴ふもので、必ず和歌の後をうけて、めでたい情調を感じめるものである。三人（「藤栄」等）。セメは舞の如き型に笛・太鼓のあしらひが伴ひ（「頼政」「鳥呂婆」等）、鬼が亡者を威嚇する荒々しい動きを表はすもの、棒は型に笛が伴ふ（「鍋八撥」に於ける棒を振るのを色どるもの。シャギリは型に笛が伴ふもので、「末廣」「目近」等の最後にあつて、賑やかな氣分を起させるものである。大體裝飾的なものであるが、三段の舞とシャギリは能樂的なもので、特にシャギリは省略しても

實際はシテ・アドと呼ばれるものは、大抵二人或は三人までの役割に言はれ、アドが多い場合は、例へば「庖丁聟」の如く、シテ・鼻・太郎冠者・女・敎へ手などと役割によつて呼ばれてゐる。併し舞ふ謠狂言は、能のやうにシテ・ワキ・間（「祓普」「シテー祓普」、ワキー僧、間ー所の者）と言はれる。また「煎じ物」「茵」等には、立衆と言つて、三のアド以上のアドに當るものが出る。これは人數に制限はないが、必ず奇數で五人或は七人を以て普通行つてゐる。要するに狂言の登場人物は、如何に多くても十人は越えないと言つていゝのである。そして數人登場するときはあつても、二人乃至三人の間に最も緊張した形で演ぜられてゐる。〔扮裝〕登場人物は場合により面・裝束・小道具等を用し、「物狂」「茵」等には、立衆と言はれる。また「煎じ物」「茵」等には、特に狂言の山伏・出家・女及び神や毘沙門や鬼や物の精の超自然物等は、殆ど能のそれと同樣であるが、山伏の括袴・出家のへんてつ・長衣・角頭巾・能力頭巾・脚絆・括袴・狂言袴・女帶・びなん及び超自然物の大黒頭巾・毛頭巾・狂言袴・下袴・脚絆・鬼頭巾等は、狂言獨特のものである。その他、狂言獨特の裝束には、紅段熨斗目・縞熨斗目・掛素襖・狂言肩衣・かるさん・引立烏帽子・末社のもの烏帽子・官人烏帽子・燕尾烏帽子・通圓烏帽子等がある。特に狂言獨特の裝束を着けるもので、大名は紅段熨斗目・狂言肩衣・狂言袴・麻裃である。なほ小道具は、能と共通のものに、太刀・小サ刀・劍・長刀・弓矢・琵琶・中啓・扇子・鬘桶・鬘桶・笏・鼓・鼓・鼓

は、脇狂言（例へば「蘿生」）、二番目（例へば「米市」）と分けるが、脇狂言の「福の神」は切にも當て、「佐渡狐」「鞍馬聟」は初番物、「歌仙」は脇狂言にも二番目にも、「寶の槌」「文藏」等は初番目二番目、「骨皮」「附子」等は二番目三番目、「宗八」「首引」等は三番目四番目にも出す。脇狂言は狂言の首位に置かれるもので、目出度い事を仕組んだものであるから、四季を論ぜず演ぜられるけれども、「水掛聟」「蚊相撲」等は多く夏に、「萩大名」「鴈盜人」等は秋に演ぜられ、春ならば「土筆」、冬ならば「あかゞり」を出すとか、季節に合つたものを選んで番組が作られる。

【内容】室町時代の民衆の娯樂であつた狂言は、當時の世相を面白く感じ、また何でも可笑しいものに表現しようとしたもので、特に普遍的な世態人情を描寫してはゐない。ただ純化した對話が、劇的に巧妙で、ともすると性格や思想を描寫してゐるやうに感ぜられるが、それは行爲を生動させてゐるだけである。そしてこの時代としてのみ容認される當時の習俗や、趣味等の技巧をも敢てする。即ち小舞謠・狂言謠・語・小歌節・淨瑠璃節・平家節・亂曲・和歌・踊り節・イロ節・次第・道行・一聲・サガリハ・囃子物等の曲節によつて、音樂的な情趣を齎す小舞謠が單に謠はれる事もあるが、普通には舞を伴ひ、語が單に語られるだけのものもあるが、型を伴ふものがあるやうに、踊り節・イロ節は舞の如き型を伴ひ、次第・道行・一聲・サガリハは音樂を伴ひ、囃子物は舞の如き型と音樂とを伴つて美感を助け、氣分を起す技巧が施されてゐる。これは民衆の嗜好にかなふものとして取り入れられ、工夫されたものであらう。また筋が荒唐無稽であつてもかまはないし、脚色が不自然であつても顧みない。而も當時の傾向や感情等による觀念が特殊な風格を與へてゐる。それは明日をも知れぬ不安定な生活、併し前途に自由な明るい生活を認めて、瑣事に齷齪としてゐた民衆が、生を肯定し生を樂しむ、その喜劇的精神に裏付けられるものである。狂言の笑は一般に諷刺的なもの、感傷的なもののやうに言はれてゐるが、寧ろ不安を除き自由を叫ぶところの明るい放笑であつたと言ふべきであらう。【價値】狂言は夙く演劇要素を具備し、單なる寫實的な演出を避け、一種の劇術によつてゐた事は、我が演劇の組織に於て歷史的意義の深いものであつたばかりでなく、既に喜劇としての高所を標置した藝術であつた。併しそれは何と言つても特殊な趣味であり、特殊な風格があつて、時代の推移に從ふ事は出來なかつた。そして江戸時代になると、うした演劇の地位に歌舞伎が轉換した。狂言は歌舞伎の發達に多くの影響を與へてゐる。又それは近世文學、殊に滑稽本・落語・小咄・歌淨瑠璃（各別項）等に多くの材料を供給してゐる。なほ風俗史上の參考すべき資料であり、その詞は國語學上の貴重な文獻である。【參考】能狂言に就きて　芳賀矢一（帝國文學明治二八ノ二・三）○能狂言之研究　野村八良○能狂言の說明高文學に現れたる笑の研究成瀨無極○能狂言研究笹野堅（日野辰之（歌舞演劇講話）○能狂言　同上（岩波講座日本文學）○能狂言集成解說同上○初期かぶきと狂言の交涉に就いて　龍田英二（國語と國文學八ノ八）

農業神話（のうぎょうしんわ）　「人文神話」を見よ。

能小道具（のうこだうぐ）　能樂【名義】（別項）は、舞臺に据ゑ置くものであるが、これに對し、主演者が手に持つて所作の助けとするものを小道具といふ。【由來】神樂・舞樂の採物から發達したものである。【解說】能小道具はその種類も少くないが、最も一般的なのは扇で、殆どすべての主演者がこれを持ち、唐人の時には扇の代りに唐團扇を、天狗は羽團扇を持つ。その外、僧侶・山伏は數珠・剌高數珠を持ち、老人・盲人は竹の杖を持ち、漁夫は釣竿を、舟夫は竹棹を持ち、鬼などは撞木に似た打杖を持つことが多い。また曲柄によつては、御幣を持つもの、草花を持つもの、雪掻のイブリ、松葉掻のサラヘを持つことがあり、武士には太刀・小刀・長刀・劍・弓・矢等を持つことが多く、漁夫は水桶・田子等を持つことがあり、狂女は大抵笹を持つ。【佐成】

能裝束（のうしやうぞく）　能樂【名義】（別項）の演奏に於て、囃子方・地謠の諸役は、「翁」（別項）の演奏に限つて特に烏帽子・素襖上下の裝束を着る外、一般には演奏曲目の種類によつてその裝束を改めず、普通の曲には上下を、重習物には長上下を着てゐるのであるが、演舞者であるシテ・ツレ・ワキ等は、その曲柄に應じてそれ〴〵これにふさはしい裝束を用ひる。而もその裝束は寫實的な卽ち一般社會に行はれてゐるものではなく、能樂獨特の絢爛な、また象徵的なものが多い。それでこれ等を特に能裝束と呼んでゐる。

【種類】能裝束には冠り物・頭髮・上衣・着附など、それ〴〵種類が多いが、その主なものを擧げる。（冠り物）（一）烏帽子。これに黑の立烏帽子で丈が短くて横に長い翁烏帽子、これよりも少し小さい小立烏帽子、立烏帽子の上を横に折つた風折烏帽子、丈の高い立烏帽子で白拍子の用とする靜烏帽子、立烏帽子と同じ形で柔く撓へた武將の用とする梨打烏帽子、三角形の折烏帽子で武士に用ひる侍烏帽子などがある。（二）冠。垂纓又は卷纓の普通の冠を初冠といひ、その外、纓の代りに巾子を立てた透冠、これに似た唐冠、舞樂に用ひると同じ鳥甲、金の瓔珞を垂れた金屬製の天冠、これに似て瓔珞のない輪冠などがあり、天冠・輪冠には花や蟲・鳥又は狐・龍・虎などの形をしたものを上に戴いて、その物の精を象徵することが多い。（頭髮）（一）頭。幽靈・化現・怪物を表はす場合などに用ひる。毛の長い頭髮で、その色によつて、赤頭・白頭・黑頭といふ。（二）垂。頭よりは毛の短いもので、その黑垂は天女、白垂は老體などに用ひる。（三）鬘。眞中から分け後頭で結んだもので、常に女性に用ひ、これには必ず鬘帶をつける。その髮の長く垂れたものを長鬘といふ。（四）髮。老翁のつけるチョン髷形に結んだ白髮を髮髮といひ、白毛交りの鬘を姥髮といふ。（上衣）（一）狩衣。普通のものと大差ないが、袖の括り紐がすべて二筋で、單と袷とがある。これに對する狩袴は用ひない。主として大臣ワキが着るが、神體の後シテも着る。（二）長絹。長絹直垂の變化したもので、袖括り紐や菊綴はなく、ただ胸に紐、袖先にツユをつける。優雅な武將にも用ひるが、主として女體に用ひる。（三）舞衣。長絹に似てゐるが、長絹は腋下が離れてゐるのに反し、これは腋下を縫つて居り、長絹は着流しにするが、これは腰でからげる。（四）水衣。大袖の衣で、ワキが着る時は僧衣の意味をなし、シテ・ツレが着る時は漁夫・樵夫などの粗衣として取扱ふことが多い。絽と縠との二種類があり、大抵無地であるが、山伏

などは縞の紬水衣を着ることが多い。(五)法被。舞樂に用ひる半臂を訛つたのであらう。半臂の袖を廣くしたやうなもので、鎧の意味で武將に用ひることが多い。(六)側次。袖無しの法被で、粗末な鎧として軍兵に多く用ひる。(七)唐織。女體の上着として用ひる小袖で、能裝束の最も圖案を凝らしたものが多い。

〔袴〕(一)大口。もと下袴として用ひられたものであるが、能樂で下袴として用ひるのは込大口で、普通の大口は上袴として用ひ、袴の後を平たく強く張つてゐる。白地も色地も模樣もあり、男體にも女體にも廣く用ひる。(二)半切。大口と同じ形で、金襴などの模樣のあるもの。多くは法被の下として用ひ、狩衣にも穿く。(三)指貫。能樂では高貴の人の穿くものとし、「大原御幸」の法皇や、「蟬丸」等に用ひ、この下には込大口を穿く。(四)腰巻。縫箔を着附の上に、腰から下に卷いて兩袖を後へ垂れるもので、女體にのみ用ひ、上には大抵長絹又は水衣を着る。(五)長袴。官女の緋の長袴であるが、鬼女にも用ひる。(六)稚兒袴。子方專用の長袴で、形は素袴の下と同樣のものである。〔上下〕(一)直垂。普通の直垂で、頭には梨打烏帽子又は侍烏帽子を被る。下には大口を穿いて上だけ直垂を着ることがあり、これを掛直垂といふ。(二)素襖。これも普通の素襖と變りはなく、「鉢木」の前シテのやうな武人も、「隅田川」のワキ・ツレのやうな平民も着る。「翁」の演奏に囃子方・地謠が着ることは前に述べた。(三)上下。德川期以降囃子方・地謠の常衣となつたもので、主演者は全く着ない。尤も狂言は多くの場合狂言上下といつてこの模樣のあるもの、又は長上下を着る。〔着附〕(一)厚板・唐織に似たものであるが、殆ど上着には用ひないで、主として男體の下着に用ひる。(二)箔。金銀の形を置いた摺箔と、刺繍をした縫箔とがあつて、いづれも女體の着附とする。(三)白練。純白のもので、氣品の高い男體に用ひる。(四)白綾。男體の白練に對し、氣高い女體に用ひる。(五)熨斗目。段と無地と縞との三種類があつて、主として水衣又は素袍を着る男體に用ひ、狂言は特殊なものを除いた外は、皆これを着る。(六)小袖。普通のもので狂言女に用ひる。〔附屬物〕(一)腰帶。石帶に倣つたもので、腰で結んで前に垂れて置く上帶。その垂れた所は短册を二つ並べたやうになつてゐる。主演者は大抵これを用ひ、能柄によつてその地質模樣を區別してゐる。(二)掛絡。袈裟であるが、普通のワキ僧は掛けず、僧體又は道心のあるシテ又はツレが掛ける。(三)篠懸。山伏のかける細長い輪形の袈裟で、饅頭のやうな飾りがついてゐる。(四)腰蓑。腰につける麻で作つた蓑で、漁夫や舟夫の表章として用ひることが多い。獵師の時には麻の代りに羽をつけた羽蓑を、天狗の時には木葉をつけた葉蓑を用ひることがある。

【沿革】能樂の前身である呪師猿樂の唄人が、變繪袍・冠甲を着たと、「玉葉」建久二年二月二日及び七日の條に見えてゐる所を見ると、古くは舞樂と同樣の裝束を用ひたもののやうであるが、その後、能樂が劇的に發達するに從つて、「滿濟准后日記」正長二年五月三日の條に、觀世・寶生の二座が出合申樂をして、「如多武峯藝能、致其沙汰了、乘馬甲冑等悉實臺。一疊の廣さの臺で、これは用途の廣いもので、谷間・丘等の自然物に象ることもあり、家の土臺・家・祭壇等いろ〳〵の意味に用ひられ、殊に家の一室に象ることが多い。(二)笠。一疊臺の上に宮殿を象つた枠を載せ、屋根枠を美しい帛で卷き、壯麗な感じを與へるもので、「竹生島」「繪馬」等に出す。(三)屋臺。家を象つたものであるが、屋根板のあるのは少く、普通は枠を以て屋根の意味を表はしてゐる。(四)庵。これには屋根の形もないが、柱に葛草などを卷きつけて、草庵の心持を表はすことがある。「梅枝」などに出す。(五)藁屋。庵に似てゐるが、屋根だけ寫實的な藁葺にしたもので、「蟬丸」「景清」等に出す。(六)半部。これも庵に似てゐるが、扉を上へ押しあげられるやうにしてある。「夕顏」等に出す。(七)鐘樓。細長い丈の高い枠の上に小さな鐘を釣り、撞木を添へ、長い美しい紐綱をつけたもので、「三井寺」に出す。(八)鳥居。扁平な鳥居で、「野宮」に出す。(九)片折戸。扉も袖垣もあり、小さいながら寫實的なもので、「小督」に出す。〔舟車〕(一)舟。これも白布を卷いた枠だけで船の形を示したもの、「船辨慶」などに用ひるが、「國栖」などには引廻しを纏ひ、「江口」などには屋形をつけ、「唐船」などには帆柱と帆とをつけてゐる。(二)車。牛車に擬へたもので、枠だけで屋形・轅・車輪を示してゐて、「熊野」等に用ひる。「車僧」の車には屋形がない。いづれもその中に一人入れるが、「松風」の汐汲車は小さいもので、これを曳く紐だけ「三井寺」の鐘樓の紐綱のやうに長くしてゐる。〔その他〕「道成寺」には、色布で枠を掩うた大きな鐘を、「吳服」にはやゝ寫實的な美しい機を、「天鼓」「富士太鼓」等には、樂太鼓に擬へた小さな鐘樓のやうな臺の上に羯鼓を載せた羯鼓臺を、「皇帝」「昭君」等には鏡臺を出す。【佐成】

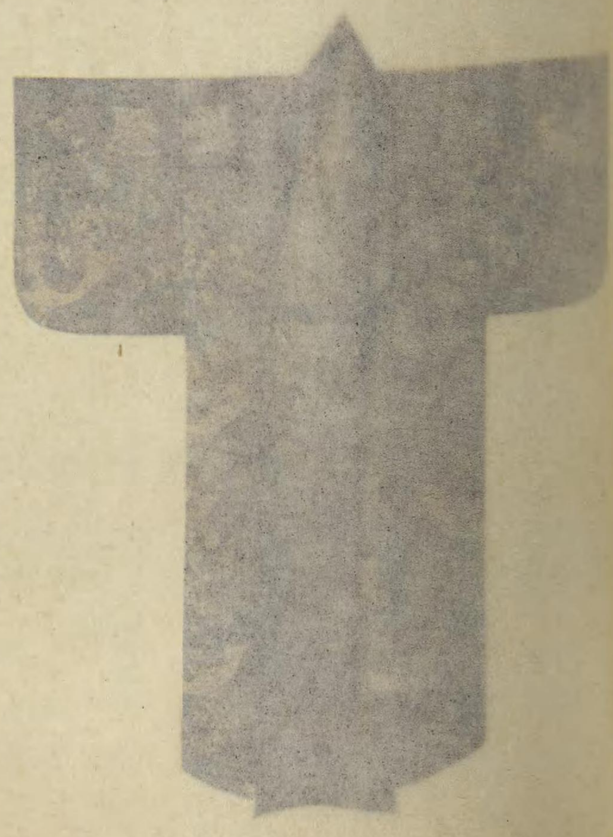
能作物 のうつくもの　能樂【名義】鏡板に一本の老松を描いてあるだけで、外には舞臺裝置といふべきものは殆どないが、時には極めて簡單な暗示的な裝置を試みることがあり、これを作物と呼ぶ。【種類】その主なものを擧げる。〔自然物〕(一)塚。竹で圓筒形の枠を作り、色布でこれを掩うたもので、上に柳・紅葉などをつけて、塚又は石の意を表はし、「隅田川」「紅葉狩」などに出す。(二)石。塚に似た形であるが、二つに割れるやうになつて居り、「殺生石」「一角仙人」等に出す。(三)立木。二三尺の圓形、又は方形の枠の中に、松・櫻・梅などの枝を立てたもので、「羽衣」「嵐山」等に出す。(四)巢。庵の作物に似たものに巢の形をした紙をはりつけたもの。蜘蛛の巢の意で、「土蜘蛛」に用ひる。〔建築物〕(一)一疊臺。一疊の廣さの臺で、これは用途の廣いもので、谷間・丘等の自然物に象ることもあり、家の土臺・家・祭壇等いろ〳〵の意味に用ひられ、殊に家の一室に象ることが多い。(二)笠。

【參考】能之衣裳書付(元祿二年刊)○能裝束略說坂元雪鳥、謠曲講座第六・七・八)○能裝束模樣百佳選齋藤香村【佐成】

能の列 のうのれつ　能樂【名義】能樂の演出

赤地花筏模様舞衣（帝室博物館藏）

赤地菊水模様唐織（同上）



[illegible]模様唐織（同上）

これも普通の素襖と變りはなく、「鉢木」の前シテのやうな武人も、「隅田川」のワキ・ツレのやうな平民も着る。「翁」の演奏に囃子方・地謠が着ることは前に述べた。（三）上下。徳川期以降囃子方・地謠の常衣となつたもので、主演者は全く着ない。尤も狂言は多くの場合狂言上下といつてこの模様のあるもの、又は長上下を着る。〔着附〕（一）厚板・唐織に似たもの

くは舞樂と同様の裝束を用ひたもののやうであるが、その後、能樂が劇的に發達するに從つて、「滿濟准后日記」正長二年五月三日の條に、觀世・寶生の二座が出合申樂をして、「如二多武峯藝能一、致二其沙汰一了、乘馬甲冑等悉實馬實甲冑了」とあるのを見れば、甚だ寫實的な扮裝を試みるやうになつたらしい。併しこの二つは、いづれも新古の兩極端に走つてゐる

櫻・梅などの枝を立てたもので、「羽衣」「嵐山」等に出す。（四）巣。庵の作物に似たものに巣の形をした紙をはりつけたもの。蜘蛛の巣の意で、「土蜘蛛」に用ひる。〔建築物〕（一）一疊臺。一疊の廣さの臺で、これは用途の廣いもので、谷間・丘等の自然物に象ることもあり、家の土臺・家・祭壇等いろ〳〵の意味に用ひられ、殊に家の一室に象ることが多い。（二）宮。

紐だけ「三井寺」の鐘樓の紐綱のやうに長くしてゐる。〔その他〕「道成寺」には、色布で枠を掩うた大きな鐘を、「呉服」にはやゝ寫實的な美しい機を、「天鼓」「富士太鼓」等には、樂太鼓に擬へた小さな鐘樓のやうな臺の上に羯鼓を載せた羯鼓臺を、「皇帝」「昭君」等には鏡臺を出す。〔佐成〕

能の型 のうの かた 能樂 【名義】 能樂の演出

赤地花筏模様縫

赤萌黄段御簾萩色紙短册模様唐織（同上）

などは縞の袖衣を着ることが多い。（六）腰帯。男帯。無地に用ひる糸帯を謂つたのであらう。糸帯の袖を除くしたやうなもので、腰の装束で武将に用ひることが多い。（六）腰次。袖無しの法被で、最も太く綿として筆長に多く用ひる。（七）直垂。女性の上着として用ひる小袖で、能装束の最も簡易なものが多い。【語】（一）大口。もと下袴として用ひられたものであるが、能楽では下袴として用ひるのは少大口で、普通の大口は上袴として用ひ、袴の後を平たく強く張つてゐる。白地も色地も模様もあり、男性にも女性にも広く用ひる。（二）半切。大口と同じ形で、金襴などの模様のあるもの。多くは法被の下として用ひ、狩衣にも着く。（三）指貫。能楽では高貴の人の着くものとし、「大原御幸」の法皇や、「卿丸」等に用ひ、この下には大口を穿く。（四）腰袴。最も正装の上に、腰から下に巻いて両袖を通し、着るもので、女性にのみ用ひ、上には法被又は水衣を着る。（五）長袴。官女の袴の最も正装であるが、里女にも用ひる。（六）種長袴。子方専用の長袴で、形は素袴の下と同様のものである。（上下）（一）直垂。普通の直垂で、頭には梨打烏帽子又は侍烏帽子を被る。下には大口を穿いて上だけ直垂を着ることがあり、これを掛直垂といふ。（二）素襖。これも普通の素襖と変りはなく、「鉢木」の前シテのやうな武人も、「隅田川」のワキ・ツレのやうな平民も着る。「舟」の漁夫に肩子方・地謡が着ることは前に述べた。（三）上下。徳川期以降肩子方・地謡の着衣となつたもので、主演者は全く着ない。尤も狂言では子の場合には

であるが、時と上着には用ひない。主として男性の下着に用ひる。（二）帷。金襴の帯を置いた間狂言と、刺繍をした縫箔とがあつて、いづれも女性の着附とする。（三）白練。純白のもので、氣品の高い男性に用ひる。（四）白練。男性の白練に対し、氣高い女性に用ひる。（五）紗平目。段と無地と縞との三種類があつて、主として水衣又は素袍を着る男性に用ひ、狂言は特殊なものを除いた外は、皆これを着る。（六）小袖。普通のもので狂言女に用ひる。【附属物】（一）腰帯。石帯に似つたもので、腰で結んで前に垂れて置くと帯。その垂れた所は短冊を二つ並べたやうになつてゐる。主演者は大抵これを用ひ、能柄によつてその地質模様を区別してゐる。（二）掛絡。袈裟であるが、普通のワキ僧は掛けず、僧髄又は道心のあるシテ又はツレが掛ける。（三）篠懸。山伏のかける縞長い輪形の袈裟で、僧頭のやうな飾りがついてゐる。（四）腰当。腰につける麻で作つた袋で、漁夫や舟夫の表着として用ひることが多い。巫師の時には麻の代りに羽をつけた羽裳を、天狗の時には木葉をつけた葉裳を用ひることがある。

【沿革】能楽の前身である呪師猿楽の唱人が、鍬綸袍・冠甲を着たと、「玉葉」建久二年二月二日及び七日の條に見えてゐる所を見ると、古くは舞楽と同様の装束を用ひたものやうであるが、その後、能楽が劇的に発達するに従つて、「満済准后日記」正長二年五月三日の條に、観世・宝生の二座が出合申楽をして、「如多武峯縁起」一巻其沙汰了、楽屋甲冑修験等云々」とあるのを見れば、既に甲冑的な

一巻の上に金襴を張つた枠を付け、銀箔を美しい房で飾り、紙屋な感じを与へるもので、「矛生島」「橋弁慶」等に用ひる。（三）厚板。「野宮」等に用ひる。（四）無地厚板。「三井寺」「熊野」等に用ひる。（五）唐織。庵に似てゐるが、唐織だけ装飾的な感じにしたもので、「卿丸」「景清」等に用ひる。（六）縫箔。これも庵に似てゐるが、帷を上へ押しあげられるやうにしてある。「夕顔」等に用ひる。（七）舞衣。細長い丈の高い枠の上に小さな鏡を釣り、撞木を添へ、長い美しい紐をつけたもので、「三井寺」に用ひる。（八）鳥兜。鳥甲な鳥居で、「野宮」に用ひる。（九）昇桂月。桂も袖折もあり、小さいながら装飾的なもので、「小督」に用ひる。【装束】（一）冠。これも白布を巻いた枠だけで船の形を示したもの、「船弁慶」などに用ひるが、「国栖」などには引廻しを掛け、「江口」などには屋形をつけ、「雲林院」などには帆柱と帆とをつけてゐる。（二）車。牛車に擬へたもので、枠だけで屋形・轅・車輪を示してゐて、「熊野」等に用ひる。「車僧」の車には屋形がない。いづれもその中に一人入れるが、「松風」の汐汲車は小さいもので、これを曳いて舞だけ「三井寺」の鐘鐘のやうに見えてゐる。（その他）「道成寺」には、鳥帽で枠を持つた大きな鐘を、「夜討曽我」には半月形の美しい扇を、「大会」「高士太鼓」等には、発太鼓に擬へた小さな太鼓のやうな物の上に鳥帽子を置いたものを用ひる。「船弁慶」「関寺小町」等には、

能裝束

赤地花筏模様舞衣（帝室博物館藏）

（上同）織唐様模水菊地赤

（上同）織唐様模册短紙色萩簾御段黄萌赤

には、その進退・所作について嚴密な約束が守られてゐて、この約束・作法を「能の形」（型）といひ、能の形を指示すること又は指示したものを型附といふ。能の形はその曲の創作當初から、かなり細部に亙つて規定せられてゐたもののやうであるが、永い間に自ら多少の變遷を生じたことは疑はれない。しかし現在殘つてゐる元祿頃筆寫の型附書を見るに、現行のものと著しい相違を見出さない。但しその後も演出者の工夫によつて、常の型以外に、新しい演出を試みたことがあり、これがまた一つの作法となつて傳へられたものを「替の型」といふ。

【部分的名稱】 能の形は極めて些細な點まで規定せられてゐて、從つてその一擧手一投足について、それ〴〵特別の名稱がつけられてゐる。（一）イロヘ。主として靈物のシテの舞ふ靜かな簡單な曲。（一四）カケリ。イロヘのやうに短いものであるが、修羅物や物狂のシテの演ずる舞働に近い活潑な所作。（一五）働。カケリに似たもの。（一六）立廻。イロヘとカケリの中間に位するもの。（一七）切組。カケリの一種で、斬り合ひの樣を演ずるもの。（一八）祈。シテが鬼女である場合、僧又は山伏がこれを祈り伏せようとして、互に爭ふ所作。太鼓が入る。（一九）獅子舞。獅子の戲れる樣に擬へたもので、太鼓が入る。（二〇）亂。「驚」「猩々」に舞ふもので、足取が亂れ興じてゐる心持のもの。（二一）亂拍子。「道成寺」の舞で、これは小鼓一調で囃す。

【參考】 能樂叢奧集木下敬賢○能のしをり大和田建樹○うたひ通解（雜誌「謠曲界」）○能の型

きの心を示すためなどに、板を强く踏んで音をたてるのを足拍子といふ。足拍子のうち調子に乘つて二つ踏むものを乘込拍子といひ、暫く謠を休止する時に踏むものを据拍子といひ、一曲の終りに踏むものを留拍子といひ、續けて幾つも踏むものを刻拍子といふ。

【舞の名目】 能樂演奏の中心的興味となつてゐる舞も亦形が定まつて、その主な種類には次の如きものがある。（一）序舞。靜かな品位のあるシテの舞で、笛・大小鼓で囃す。太鼓は入る時も入らない時もある。（二）中舞。普通女シテの舞ふ序舞よりはやゝ早いもので、笛・大小鼓で囃す。太鼓の入ることもある。（三）破舞。序舞又は中舞の後、少し謠があつて、また舞ふもので、中舞よりも位取りの早いもので、舞も短い。（四）天女舞。ほぼ中舞に似は多くは一聲又はサシ謠を謠ふ。（四）アシラヒ（會釋）。ワキの名乘笛に對し、シテの舞臺に入る時に用ひるもので、大小鼓を打ち、笛は吹かない。（五）來序。帝王又は神體などの出入に用ひる莊重な囃子で、大小鼓及び太鼓を打ち、笛をあしらふ。末社間（間參照）の登場に用ひるものを、末社來序又は亂序といふ。（六）早鼓。前シテが勇壯に中入し、又は早打間（間參照）の登場する時に用ひる大小鼓の囃子。（七）出端。神體などの後ジテ又は後ツレの出る前に奏するもので、笛・大小鼓の外に太鼓を伴ふ。（八）下端。出端に似てゐるが、笛が地となるもの。（九）早笛。龍神・鬼神などの後ジテ又は後ツレの出る前に奏するもので、笛が地となり、大小鼓・太鼓がこれに伴ふ。（一〇）大癋。天狗などの後ジテの出に先立つ

には、その進退・所作について嚴密な約束が守られてゐて、この約束・作法を「能の形」（型）といひ、能の形を指示すること又は指示したものを型附といふ。能の形はその曲の創作當初から、かなり細部に亙つて規定せられてゐたもののやうであるが、永い間に自ら多少の變遷を生じたことは疑はれない。しかし現在殘つてゐる元祿頃筆寫の型附書を見るに、現行のものと著しい相違を見出さない。但しその後も演出者の工夫によつて、常の型以外に、新しい演出を試みたことがあり、これがまた一つの作法となつて傳へられたものを「替の型」といふ。

【部分的名稱】 能の形は極めて些細な點まで規定せられてゐて、從つてその一擧手一投足について、それ〴〵特別の名稱がつけられてゐる。その主なものを擧げれば、（一）舞の手。物を指し示すが如く、扇又は手をさし出すをさすといひ、後へ引くをひくといひ、扇を胸に卷き込むが如くにしてさすのを胸ざしといひ、晴れやかな心を示す如く、扇を胸のところより上にあぐるをいうけん扇といひ、扇にて招く形をするを招き扇といふ。（二）面づかひ。顏を左右に廻して物を見ることを面をつかふといひ、心持下にむくを面を伏す、又は面を曇すといひ、手又は扇を顏に近づけて泣く形をするをしをるといふ。（三）足づかひ。二足前に出るをつめるといひ、三足後に退くをひらくといひ、片膝立てて坐るを下に居るといひ、踵を爪立てて坐るを居立つといひ、膝を組んで坐るを安坐といひ、立つたまゝ腰を曲げないで、後に倒れるのを佛倒れといひ、左右の膝をかはる〴〵立てて進むをがつしといひ、音を表はすために又は喜び或は驚きの心を示すためなどに、板を强く踏んで音をたてるのを足拍子といふ。足拍子のうち調子に乘つて二つ踏むものを乘込拍子といひ、暫く謠を休止する時に踏むものを据拍子といひ、一曲の終りに踏むものを留拍子といふ。續けて幾つも踏むものを刻拍子といふ。

【舞の名目】 能樂演奏の中心的興味となつてゐる舞も形が定まつて、その主な種類には次の如きものがある。（一）序舞。靜かなシテの舞で、笛・大小鼓で囃す。太鼓は入る時も入らない時もある。（二）中舞。普通女シテの舞ふ序舞よりはやゝ早いもので、大小鼓で囃す。太鼓の入ることもある。（三）破舞。序舞又は中舞の後、少し謠があつてまた舞ふもので、中舞よりも位取りの早いもので、舞も短い。（四）天女舞。ほぼ中舞に似た天女の舞ふもので、囃子には太鼓が入る。（五）早舞。位取りは早いが、典雅なシテの舞ひ遊ぶ心持のもので、太鼓が入る。（六）急舞。位の極めて早い舞で、「道成寺」「紅葉狩」などにある。（七）男舞。現在物直面の男シテの舞ふもので、位は中舞より早い。太鼓は入らない。（八）神舞。神體の舞ふ品位のある舞で、位は男舞に等しく、太鼓が入る。（九）神樂。神子神樂に擬へたもので、神女・天女・巫女などが舞ふ。囃子には太鼓が入る。（一〇）樂。雅樂を舞ふ心のもので、位はやゝ靜かであるが、拍子ののりのよい舞である。（一一）羯鼓。シテが喝食である場合に舞ふもので、羯鼓を胸につけ、撥でこれを打ちながら舞ふ。中舞よりは輕快な曲である。（一二）舞働。龍神・鬼神などのする豪壯な動作で、太鼓が入る。（一三）一聲。主として鬼物のシテの舞ふ靜かな簡單な曲。（一四）カケリ。イロヘのやうに短いものであるが、修羅物や物狂のシテの演ずる舞働に近い活潑な所作。（一五）働。カケリに似たもの。（一六）立廻。イロヘとカケリの中間に位するもの。（一七）切組。カケリの一種で、斬り合ひの樣を演ずるもの。（一八）祈。シテが鬼女である場合、僧又は山伏がこれを祈り伏せようとして、互に爭ふ所作。太鼓が入る。（一九）獅子舞。獅子の戲れる樣に擬へたもので、太鼓が入る。（二〇）亂。「驚」「猩々」に舞ふもので、足取が亂れ興じてゐる心持のもの。（二一）亂拍子。「道成寺」の舞で、これは小鼓一調で囃す。

【參考】 能樂竊奧集木下敬賢〇能のしをり大和田建樹〇うたひ通解（雜誌「謠曲界」）〇能の型（雜誌「大觀世」）【佐成】

能囃子（のうはやし） 能樂【名稱】能樂の演奏に、笛・小鼓・大鼓、時としては太鼓を加へて伴奏するのを囃子といひ、シテ・ワキ等が仕科を演ぜず、ただ謠を謠ふだけで、囃子を主體にするものを番囃子といひ、一番中の一部分を小鼓又は太鼓の一つだけで奏するのを一調といひ、笛だけで奏するのを一管といふ。

【種目】 能樂の曲柄及びその章節に應じて、囃子に用ひる樂器の種類及びその間拍子、音の高低强弱等が定まつてゐて、その主なものに次の如き種目がある。（一）次第。謠の次第を謠ひ出す時の囃子で、大小鼓を主とし、笛をあしらふ。（二）名乘笛。ワキに次第がなくて直に名乘の詞を述べる曲にあしらふ笛で、大小鼓は打たない。（三）一聲。主としてシテの登場に、時としてはワキの登場に用ひる囃子で、大小鼓を打ち、笛をあしらふ。この場合シテは多くは一聲又はサシ謠を謠ふ。（四）アシラヒ（會釋）。ワキの名乘笛に對し、シテの舞臺に入る時に用ひるもので、大小鼓を打ち、笛は吹かない。（五）來序。帝王又は神體などの出入に用ひる莊重な囃子で、大小鼓及び太鼓を打ち、笛をあしらふ。末社來序又は亂序といふ。（六）早鼓。前シテが勇壯に中入し、又は早打間（間參照）の登場する時に用ひる大小鼓の囃子。（七）出端。神體などの後、ジテ又は後ツレの出る前に奏するもので、笛・大小鼓の外に太鼓を伴ふ。（八）下端。出端に似てゐるが、笛が地となるもの。（九）早笛。龍神・鬼神などの後ジテ又は後ツレの出る前に奏するもので、笛が地となり、大小鼓・太鼓がこれに伴ふ。（一〇）大癒。天狗などの後ジテの出に先立つ囃子で、早笛よりはやゝ靜かなもの。（一一）祝詞。神佛に祈禱する謠のかゝりに用ひるもので、太鼓の入る時と入らない時とがある。

【參考】 囃子謠鼓曲集（貞享三年版）〇舞樂大全（貞享四年版）〇囃子鼓笛集（元祿四年版）〇八拍子（安永八年版）〇觀世流地拍子詳解 山崎樂堂【佐成】

能囃子方（のうはやしかた） 能樂【流派】能囃子（別項）を勤める者は、能樂大成當初から凡そ家藝になつてゐて、爾來現代に至るまで榮えてゐるものに、金春氏信（禪竹）の叔父金春三郎を祖とする太鼓金春、金春三郎に學んだ觀世元重（音阿彌）の子吉國（與四郎）から出た太鼓觀世、吉國の子吉久（美濃權頭）が小鼓の一流を創め、その門下宮增彌左衞門・彌七郎から出た小鼓幸・小鼓觀世、金春氏信の弟大藏九郎を祖とする大鼓大倉、同系の大鼓葛野、同じく小鼓大倉などがある。笛方は世阿彌の頃名生とい